（岡山製本）

大正三年十一月廿五日印刷
大正三年十一月廿八日發行

有朋堂文庫
浄瑠璃名作集上（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

忠勤をはげむべし」と、殘る方なき大將の、仰に人々慶儀の感涙、智仁勇ある君子國、例を爰に竹本の、其一ふしに千代こめて、語傳へし物語、文才青き翠松、かはらぬ色の若枝を、鳴らさぬ御代ぞめでたけれ。

生寫朝顏話　終

るべし。駒澤三郎春次、夫へ參つて明白に申上げん」と、云ひつゝ出づる若侍、見るより岩代詰
寄つて、「ヤァ汝は幼少の時逐電したる駒澤了庵が實子庄一郎。シテ其方が證人とは」「ホヽウ
某日外摩耶が嶽にて、浮洲の仁三と假名して、大友に付隨ひ、術を以て打亡し、藥王樹を奪返
し、守護し奉りて國元へ立歸る其砌、播州舞子の濱の松原にて、山岡玄蕃より、其方へ內通の
飛脚に出合ひ、しめ上げて狀箱引取り、よく〳〵見れば汝が工み。又先刻其方が懷中より取落
したるコレ此一通、開き見れば山口へ合體したる惡事の次第、委細に知れたる此文體」治郎左「日
外島田の宿にて浪人を語らひ、下屋へ忍ばせ置き、毒藥を以て某を害せんと計る人非人、何と
是でも返答ありや」岩代「サアそれは」三郎「此書面の云譯ありや」「サア夫は」「サア、サア〳〵
サア返答いかに岩代」と、流るゝ水の辯舌も、實に駒澤了庵が、子息とこそは知られけり。岩代は
破れかぶれ、「モウ是迄」と拔放し、切つて懸るを關助隔て、「駒澤樣へ御目見えに、汝が首は此奴
が、婚禮の御祝儀に貰うてくれん」と立掛る。「ヤァちよこざいな一文奴、ばらしてくれん」と切
掛れば、こなたも心得渡り合ひ、暫く時をぞうつしける。先を取られて岩代は、たじろく所を付
け入つて、苦もなく首を打落せば、「ホウ出かした〳〵。關助とやら、下郎ながらもあつぱれう
いやつ、以後は三百石を與へ、侍に取立てくれん。又庄一郎は今より、駒澤了助と名を改め、猶

ヤモ、それに付けてもお咄し申上ぐれば長々しい事。仰の通り少しも違はず御病氣本復、其場所へ參り合せ、直樣これまで御供申す。駒澤樣の御きげんの體を拜しまして、下郎めは安堵、深雪樣には嘸々お嬉しうござりませう」と、互ひに顏を見合せて、悅び合ふこそ道理なる。始終を聞いて治郎左衞門、「ホ、ウ是までかんなん辛苦して、廻り逢うたもつきせぬ緣、幸今日は殿のお成なれば、委細の譯を言上し、おゆるしあつた其上は、友白髮まで添遂げけん。ガ、何かの咄しは身が居間で、關助共にまづあがれ」と、詞に二人が飛立つばかり、春待ちかねし鶯が、梅に初音の心地して、悅び入らんとする所へ、「ヤレマテ汝等、大內之介義興とくより是にて承知せり」と、悠然として立出で給ひ、駒澤に打向ひ、「イヤナニ、夫なる深雪とやらんは、岸戸の家來秋月弓之助が娘とかや、今改めて夫婦となさん、我目通りで祝言せよ。ソレ〳〵用意」と御下知に、はつと答へて持出づる長柄の銚子蝶花形、千代も變らぬ高砂の、尾上の松こそめでたけれ。悅び納る其所へ、樣子をとつくと岩代多喜太、一間の內よりのさばり出で、「目くら乞食の朝顏も、今では武家の御內寶、前代未聞の此穿鑿。ドリヤ拙者も罷つて又後刻、御祝儀申さん駒澤殿」と、何がな意地持つ詞を殘し、立歸らんとする所へ、「ヤア〳〵大友一味の反逆人、そこ動くな」と呼びかけられ、恟りふり向く其所へ、「ヤア〳〵治郎左衞門殿、暫くお控へ下さ

には味方は小勢、譬へば鷄卵をもつて磐石を打つ様なもの、そんなあぶないことせうより、又大磯へ行つて傾城買が増であらう」と、己が惡事をしらばけに、大友一味の奸曲を、夫と駒澤心にうなづき、「軍の事は跡での評議、先今日は御欝散を晴さん爲、奥の亭にて麁茶一服、獻上いたし奉りたし。いざ〳〵御入下さるべし」と、申上ぐれば義興公、しづ〳〵立つて入り給ふ。早日も西に傾きて、黄昏近き秋の空、心もいきせき關助が、忠義一圖に深雪をば、伴ふ心にいそ〳〵と、やう〳〵爰に著きにけり。關助は小腰をかゞめ、「ハイ御免下さりませう、私事は藝州岸戸の家老、秋月弓之介が家來、關助と申す奴めでござります。殿方に御取次下されませう」と、云ふ聲漏れて治郎左衞門、一間の内より立出づる。見るに深雪は飛立つ嬉しさ、なうなつかしや我が夫と、抱きつきたさ今更に、邊りを見やりもぢ〳〵と、赤らむ顏の色も香も、盡きせぬ奇縁ぞわりなけれ。治郎左衞門打解けて、「イヤナニ、其方が聞及びし關助とやらか、長々の介抱何かの世話、ホヽ過分なるぞよ。イヤナウ深雪、日外島田の宿にて、ふしぎと廻り逢うたれど、大切なる殿のお供先、同家中の手前と云ひ、わざと其場は知らぬ體。シテ其砌、徳右衞門を頼み、そなたに與へし藥にて、眼病も平癒せしか」と、云へば深雪は今更に、過ぎ來しかたの憂き艱難、思ひ出していらへさへ、涙先立つばかりなり。關助は引取つて、「イ

造る普請の結構、玉を欺く駒澤が、直なる心のかみやしき、殊に今日は殿のお入とさゞめいて、妼はしたとり〴〵に、掃除しまうて寄りこぞり、「コレ菊野、けふ殿様のお入とて、此様な結構な御ざしきを掃除して、きれいなことぢやないかいなう」「サイノ其きれいな、次手に、爰の旦那次郎左衛門様、此廣い大阪中にも最一人とない器量よし。あんな殿御を夫に持つ、奥様になる人は、仕合せ者ぢやないかいの」と、ちよつと寄つても男の噂、口かしましきは端女の、習とこそは見えにけり。程なく殿様御入と、下部がしらせに妼ども、「ソリヤコソお成ぢや」旦那様に、申し上げう」と打連れて、皆々奥へ入りにけり。大内之助義輿は、さいつ比より東國にて、大友の殘黨を誅伐し、本國へ歸館ある。路次の序に駒澤が、上やしきへぞお成ある。お供には岩代多喜太、肩臂いからし入り來る、主駒澤次郎左衛門へり下り頭をさげ、「殿には益御機嫌よく御座遊ばされ、愚臣が弊居へお成とは冥加至極、有り難き仕合」と手をつけば、「此程大友の殘黨等、近國に徘徊致すよし、軍慮をめぐらし、只一戰に責討たんと評議まち〳〵。汝も其旨相心得、一乘に勝利を得る術ありや、いかに〳〵」と有りければ、岩代はしや〳〵くり出で、「イヤ〳〵其軍あぶない〳〵、大友の殘黨とて侮りがたし。今諸國へ討洩れたる殘黨ども、スハ合戰と聞くならば、蟻の如くに集り、蜂の如くに起りなば、ゆゝしき大事ならん。サ其時

ねん〳〵ころゝんや、ねんねが守はどこへいた。どことは知れた其人に、逢うて恨をなんとまあ、どう云うてよかろやら、なんとしやう野の憂き思ひ」「ヲヽ、お道理〳〵。あなた樣より關助が、三々くどうはござれども、追付け婚儀の取結び、其時髭めは晴奉公、ふり込〳〵御祝儀の、なかに見事は花の鑓、駒の手綱をひかへづな、揃へやり持花の鑓、並松の音もゆたかに、ザヽンザ〳〵、シャン〳〵、しやんと納めた。ハヽヽ、」勇み笑うて行く先は、伊勢路と伊賀の國境、榮え榮ふる坂の下、里の童が聲々に、「朝顏の、あしたに咲いて夕には、露の命も戀故ならば、わたしや厭はぬいとやせぬ。ソレ〳〵〳〵さうぢやいな〳〵。朝顏の名にこそ立てれ幾秋も、ほんの心も色ゆゑならば、わたしやいとはぬいとやせぬ。ソレ〳〵〳〵さうぢやいな〳〵」謡ふ聲々身の上に、ひつしとおもひ石部川、花香もこもる梅の木を、たどりて急ぐ道の邊に、咲亂れたる朝顏に、むれ飛ぶ蝶のおもしろく、うかれ〳〵て主從が、浪花路さして　三重　急ぎ行く。

駒澤上屋鋪の段

浮める雲に譬へたる、不義の富貴に引きかへて、月日を掩ふ村雲も、今時を得て晴渡り、新に

顔が、姿も昔にかへり咲、髪も島田とたつか弓、引きも契らぬ海道に、誰も人目を大井川、跡に見附や濱松の、憂き艱難に引きかへて、昔語とあらひかへ、白すかかけて二川や、かいしよらしげにちよこ〱と、あゆみし姿も吉田御油、赤坂宿を打過ぎて、藤川縄手に休らひけり。「オヽほんにわしとしたことが、夫に逢ふが嬉しさに、供も構はずうか〱と、先へ歩むと思ひしが、此關助は何してぞ。オヽイ〱」と打招けば、跡におくれて關助が、雙紙の鎗をふりかたげ、「アリヤサ、コリヤサ、ヨイヤサ、」とつかけべい、先退けろ。お鍋がかい餅ねれたら持てこい合點ぢや。ゆうべも三百張込んだ、してこいな、どつこい振れ〱ふりこんだ。戀し殿御はあれでもないか、是でもないか。ナイ〱〱。似ぬこそ道理違うた〱、逢はぬものは貞女と忠義、追付け廻りをか崎や、やがて鳴海」と關助が、縁起祝ひし言の葉に、深雪嬉しく、「オオ關助か遲かりし、そなたを跡にふり捨てて、歩むも女のまんがちと、嘸や心にをかしかろ。面目ない」と詫言に、「何が扨〱、拙者めもあなた樣の御供申し、駒澤樣と御祝言あるやうに、此跡の宿の氏神は、縁結びと聞きし故、心願こめて」「ヲヽそれは嬉しいさりながら、そなたもかねて知る通り、夫に添はれぬ因果の縁、死ぬる所を助かりて、二度東の我夫に、逢へばどうしてかうしてと、心はちどめもつれ合ひ、しめてからんだ松の蔦、其みどり子を産み落し、

されと、いへばくるしき聲を上げ、「ヤレ歎かれなかたく。最前駒澤樣の物語、唐土傳來の目藥、甲子の年の男子の生血にて服する時は、いかなる眼病も卽座に平癒との事。某甲子の生れなれば、我血汐をもつて件の藥を調合し、早くあなたへお進めなされ。サ早く〳〵」實もと關助用意の水呑取出し、手負の血汐受止め〳〵、泣入る深雪が懷の、妙藥取出し差寄れば、深雪受取り、「わが夫の情にあまる賜」と、押戴き〳〵、只一口に呑干せば、ふしぎや忽ち兩眼開き、蟻の這ふまで見えすくにぞ、深雪が嬉しさ人々も、悅び合ふぞ道理なり。「アヽ嬉しや、最早此世に望なし。いづれもさらば」と刀引廻し、笛のくさりを刎切つて、名のみ流る大井川、水の泡とぞ成りにけり。跡や枕に取縋り、わつとばかりに泣く深雪、「露のひぬ間の朝顏も、開きし此目は盲龜の浮木うどんげの、花に增りし夫の賜。二つには、我ゆゑ此世に亡き人か」と、取付き歎くを關助が、勇になき骸手舁の輿、早明け渡る鳥の聲、山田の惠いや增り、茂れる朝顏物語、末の世までもいちじるし。

歸り咲吾妻の路草

咲いた櫻になぜ駒つなぐ、駒がいさめば花がちる〳〵、その駒澤を戀ひしたふ、櫻にあらで朝

と夜を日に繼いで參つたかひ有つて、すつてのことに危ない所を、ヤレ〳〵嬉しや、下郎めがお目にかゝる上は、お氣遣ひなされますな、駒澤樣に添はせ申す。併し淺香殿は坂東順禮と成つて、東海道へ尋ねて見える筈、ガお逢ひなされしかな」「サレバイノ、其淺香に跡の月、濱松で廻り逢うたが、其夜惡者に出合ひ、數か所の手疵、死ぬる今はにわしを呼び、中山の邊には、私が產の親古部三郞兵衛と云ふ人あり、此守刀を證據に尋行き、秋月弓之助が娘と名のつて逢へとをしへ、可愛やつひに死にやつたはいの」「ム丶、スリヤ淺香殿には最期とや」ホイはつとばかり驚く內、始終聞きゐる德右衛門、「ム丶、そんならおまへは秋月弓之助樣の御息女樣、又淺香と云ふは我娘で有つたか。マア私事は、其尋ねなさるゝ古部三郞兵衛と申す者、則あなた樣の祖父秋月兵部樣には三代相恩、若氣の誤り奧女中と忍び合ひ、お手討になる所を、弓之助樣に助けられ、女諸共國を立退き、產落せしが女子の子、貧苦の中に育つる內、二つの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母が方へ此短刀を添へて養子にやりしが、廻り〳〵て思はずも、親が命を助けられし、秋月樣へ御奉公、死んでも忠義を忘れず導きをつたか。オヽ出かしおつたな、此上は深雪樣へ、三郞兵衛がお土產」と、件の短刀拔放し、腹にぐつと突立つれば、關助驚き押止め、「コレ、何でこなたは此最期、死んでお役に立つことか、譯を聞かして下

世に、有るべきかは」とくどき立て、拳をにぎり身をふるはし、泣涕こがれ歎きしは、餘所の見る目も哀れなり。やゝあつて起直り、「オ、さうぢや〳〵。とても添はれぬ身の業因、此川水の増りしは、所詮死ねとの事なるべし。未來で添ふを樂しみに、爰を三途の岸と定め、弘誓の船にのりの道、急がんもの」と、泣く〳〵も、夫を戀しこいしの數、袖や袂に拾ひこみ、「なむあみだ佛」の聲諸共、既に飛ばんとする所へ、「ヤレお待ちなされ深雪樣」と、聲に恟りけしとむ內、駈來る關助德右衞門、あわてし儘のかちはだし、斯くと見るより抱止め、「マア〳〵お待ちなされませ」「イヤ〳〵、誰かは知らねど、放して〳〵」「マア〳〵待たしやれ朝顏殿。ヲヲわしもこなさんの身が氣遣ひさに走つて來た。コレ關助殿とやらが見えたぞや」「ハ、ア下郎めでごはります」と、無理に手を取り抱退ければ、「ム、さういふ聲は關助か」「ハ、ア」「エエ遲かつた〳〵わいの。此年月の艱難して、尋ねこがれた阿曾次郎樣に、折角逢うたに目くらの悲しさ、それとも知らず別れたれど、どうやらお聲が氣にかゝり、戾つて聞けばやつぱり其人。おのれやれ追付うと、跡追うて來たれば此川留。エ、どうせうぞいなう〳〵」「ヲ、お道理だ〳〵。拙者めもあなた樣の行方を尋ね廻る內、一昨日の夜の夢に淺香殿に逢ひ、則ちあなた樣は島田の宿、戎や德右衞門方にござると云はしやると思へば目が覺め、シャ何でもふしぎ

人はあぶない〱」「イエ〱〱たとへ死んでもいとひはせぬ」「サヽ、それはさうでも目くらの身で、あぶない〱」「イヤ放して〱」と、突退け刎退け杖を力に降る雨も、いつかないとはぬ女の念力、跡をしたうて追うて行く。名に高き街道一の大井川、篠を亂して降る雨に、打交りたるはたゞがみ、漲り落つる水音は、物凄くも又すさまじく、夫をしたふ念力に、道の難所も見えぬ目も、いとはぬ深雪が、こけつ轉びつ、やう〱爰に川の傍、「ナウ川越達、駒澤次郎左衞門樣と云ふお侍、もう川をお越しなされたかまだか、聞かして〱」と、いふ聲さへも息切の、聲に川越口々に、「チヽ其侍は今の先渡つた。が、俄の大水で川が留つた。笑止々々」とばかりにて、皆ちり〲に行き過ぐる。「ヤアナニ川が留つた。ハヽア悲しや」と張詰めし、力も落ちて伏轉び、前後不覺に泣きけるが、又起直つて見えぬ目に、空をにらんで、「天道樣、エヽ聞えませぬ〱はいな。此年月の艱難辛苦も、どうぞ最一度其人に、逢はしてたべと片時も、祈らぬ間とてもないものを、けふに限つて此大雨、川留とは〱、エヽ何事ぞいの。思へば此身は先の世で、いかなることを罪せしぞ、扨も〱あぢきなき。こがれ〱た其人に、逢うても知らぬ盲目の、此身はいかなる惡業ぞや。夫の跡を戀ひしたひ、石に成つたる松浦潟、ひれふる山の悲しみも、身にくらぶれては數ならず、三千世界を尋ねても、こんな因果が又と

ね悪い岩代に引きかへ、情深い駒澤殿、ア、あつぱれの侍ぢやな。ヤそれはさうと、朝顔に今夜の禮にはそぐはぬ下され物、ハア何ぞ樣子の有りそな事」と、思案の折から、深雪は何か氣にかかり、座敷しまうてうと〳〵と、又立歸る切戸の內、德右衛門目早に見て、「オ、朝顔か、遲かつた。宵のお客樣が最一度呼びにやつてくれいとおつしやつたれど、淸水へ往たと聞いた故、お斷申したれば、今の先お立ちなされた。併しマア悅びや、大まいのお金と扇、又結構な目藥まで、わがみに遣つてくれいとお預けなされたはいの」「是は冥加に餘ること、お禮申さいで殘り多い。ガ、申し〳〵旦那樣、此扇に何ぞ書いてはござりませぬか、ちよつと見て下さりませ」「オ、ドレ〳〵、エ、金地に一輪朝顔、露のひぬまが書いて有る、裏に宮城阿曾次郎事、駒澤次郎左衛門と書いて有るぞや」「エ、アノ、宮城阿曾次郎事駒澤次郎左衛門と其扇に」「ヲイノ」「ハ、ア」はつとばかりに俄の仰天、「エ、知らなんだ〳〵〳〵わいな。道理でよう似た聲と思うたが、そんならやつぱり阿曾次郎樣で有つたか。申し〳〵旦那樣、其お客樣はいつお立ちなされたえ」「ヲ、今の先のことぢや。ガわがみは又おなじみか」「エ、なじみ所か、年月尋ぬる夫でござんすはいな。かういふ內も心がせく、追付いてたつた一言」と、行かんとするを引止め、「ア、コレ〳〵〳〵、マア〳〵〳〵待ちや〳〵。エ、折惡う雨も降出し、此暗いに一

内。シタガ此奴何者でござります」「ホヽウ某を欺討にせんと、飛んで火に入る夏の蟲。ハヽハヽヽ死骸はよきに頼み入る」「ハヽアお氣遣ひなされますな。ガ、只今召しましたは何の御用でござります」「ヲヽ徳右衞門、折入つて頼みたきは、先刻の朝顔と云ふ女、今一應呼寄せてたもるまいか」「ハイ畏りましてはござりますが、彼は直に淸水と申す方へ參りました、御用事ならば呼びには遣はしませうが、エヽどうで今夜はお間には」「ムヽヽハテ殘念至極。身は正七つの出立、マよく〳〵緣の」「エヽ何と御意なされます」「アイヤナニ徳右衞門、今の女に謝禮の爲、此三品を其方にしつかりと預け置く間、朝顔が參らば渡してくりやれ」「ハイハイ、オヽコリヤマアおびたゞしいお金、其上結構な女子扇、お藥までも」「ヲヽサ、其藥は大明國祕法の目藥、甲子の年に出生せし、男子の生血を取つて服すれば、いかなる眼病も卽座に平癒。朝顔に渡してくりやれ」「コレハ〳〵、何から何まで、心をこめられた下され物、參り次第相渡し悅ばせましよ」と、受取る折しも時計の七つ。「ムヽアリヤもう七つの刻限」と、かぞふる内に岩代多喜太、裝束改め旅出立、同勢引連れ立出でて、「イザ駒澤氏、出立仕らうか」と、勸むる詞に治郞左衞門、衣服繕ひ立出づれば、見送る亭主が暇乞、心そぐはぬ駒澤岩代、打連れてこそ出でて行く。跡見送つて徳右衞門、「ハァヽ同じ侍でも黑白の違ひ、意地く

ござります。左様なればお客様、もうお暇申します」「ヲヽ、朝顔とやら大儀で有つた。初めて聞いた身の上咄し、若し其夫が聞くならば、嘸滿足に思ふであらう。ノウ岩代殿」「左様々々」「ハヽア、是はマア御深切なお詞、有り難う存じます」と、杖探り取りながら、むしが知らすか何とやら、耳に殘りし情の詞、名殘惜しさに泣く〱も、心は跡に探り行く。折しも奥より若侍、「最早餘程深更に及び候、御兩所共に早お休み」「いか様明日は正七つの出立、イザ駒澤氏、お休みなされぬか」「イヤ拙者は今暫し用事もござれば、お構ひなくまづお先へ」「ふせらう、御免下されう」と、立上りしが胸に一物、心を跡におくの間へ、伴はれてぞ入りにける。行く間遅しと駒澤は、手を打ならし女を呼び、「コリヤ〱徳右衛門に急に對面したし、呼んでくりやれ」と云附けやり、旅硯の墨磨り流し、以前の扇押開いて、何か書きつけ用意の金子、藥の包、取認める目の先へ、疊を貫く白刃の切先、氣轉の駒澤有合ふ温湯、刀にそゝげば血汐と心得、してやつたりと縁の下、壁踏やぶり顯れ出づる笆久藏、「曲者やらぬ」と治郎左衛門、投打つ茶碗の眼つぶし、たじろぎながら不敵の久藏、「覺悟ひろげ」と切付くる、刃を恐れぬ扇のあしらひ、廊下づたひに來かゝる亭主、コハ何事と窺ふ内、難なく刀打落し、取るなり切るなり途端の拍子、首ははるかに飛びちつたり。思はず知らず徳右衛門、「ヤレあつぱれ御手の

止めさつしやるは、ソリヤ意地の悪いと申すもの」「イヤさうではござらねど、彼も定めて勞れませうと存じて」「ハア、然らば曲は止にして。コリヤ／＼女、そちも腹からの非人でもあるまい、身の上咄しも又一興、咄して聞かせ、サ、どうだ／＼」「ハイ／＼、よう問うて下さります、お詞にあまへ、お咄し申すも恥しながら、元私は中國生れ、樣子あつて上方住居、過ぎし卯月の中空に、都の辰巳宇治の船、こがれよるべの螢狩に、思ひ初めたる戀人と、語らふ間さへなつの夜の、短い契りのほいない別れ。所尋ぬる便さへ、思ふに任せぬ國の迎ひ、親々にいざなはれ、難波の浦を船出して、身を盡したる憂き思ひ、ないてあかしの風待に、たま／＼逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹分けられ、國へ歸れば父母の、思ひも寄らぬ夫定め、立つる操を破らじと、屋鋪を拔けて數々の、憂き目をしのび都路へ、登つて聞けば其人は、東の旅と聞く悲しさ。又も都を迷ひ出で、いつかは廻りあふ坂の、關路を跡に近江路や、みのをはりさへ定めなく、戀し／＼に目を泣潰し、物のあいろも水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、いつの世いかなる報いにて、重ね／＼の歎きの數、憐みたまへ」とばかりにて、聲を忍びて歎きける。「テ扨哀れな咄し、併し男日照もない世界に、エヽ氣のせまい女だな。イヤもうしゆんだ咄しで氣がめいつた、寝酒でもたべ氣を晴さう。イヤナニ女、暇をくれる、立歸れ」「ハイ／＼、有り難う

へ、召しましたは此お座敷でござりますか、拙いしらべもお笑ひ草、おはもじさまや」と會釋する、顔も深雪がなれの果、不便の者やとせぐりくる、涙呑込み扣へ居る。岩代はそれとも知らず、「ヤア見ぐるしい其ざまで、我々が目通りへうせたは、聞及んだ朝顔めな。エヽきり〳〵立つてうせをらう」「アイヤ〳〵岩代氏、さうもぎだうに仰せられな。此方に呼寄せたればこそ、思ひがけなう、アイヤ思ひがけなう來たものを、呵るは武士の情にあらず。コリヤ〳〵女、大儀ながら其朝顔とやらの歌、サヽ早く謳うてきかせい」と、望む心は千萬無量。知らぬ岩代つら膨らし、「扨々駒澤氏にはイヤモきつい御執心。コリヤ〳〵目くら、何なりとも謳へ〳〵」「サヽ早く早く」「ハイ〳〵、謳ひまするでござります」と、こがるゝ夫のあるぞとも、知らぬ目くらの探り手に、戀ゆゑ心つくし琴、誰かは憂きを斗爲巾の、糸より細き指先に、さす爪さへも八つ橋の、やつれ果てたる身をかこち、涙に曇る爪しらべ、ウタ露のひぬまの朝顔を、てらす日かげのつれなきに、あはれ一むら雨の、はら〳〵と降れかし。「ムヽ夫を慕ふ音律の、我々が身にも思ひやられて、思はずも感涙致した。ナウ岩代殿」「いか樣、琴といひ器量と云ひ、イヤモ中々感心仕る。イヤナニ朝顔とやら、そこは定めて冷えるであらう。身どもが傍で今一曲、サア〳〵所望だ〳〵」「アイヤ岩代殿、もう赦しておやりなされい」「さりとては駒澤氏、身どもが望むを

有りぞとも、知らぬ佛氣徳右衛門、尻がるにこそ立つて行く。跡へ相役岩代多喜太、のさ〳〵と座に直り、「ヤ駒澤氏、嘸御退屈でござらう」「コレハ〳〵岩代氏、事の外お早いことでござる」と、うはべは解けてもとけやらぬ、前垂がけの下女お鍋、次の間に手をつかへ、「只今朝顔どのが見えました、是へ通しましよかいな」「ナニ朝顔とは何者」「アイヤ此道中で琴三味を彈き、旅の徒然を慰さむる瞽女とやら。拙者も何か物淋しうござれば、ちと琴でも聞かうと存じ、亭主を頼み呼寄せましてござる」「アイヤそりや止めになされい」「トハ又なぜな」「サレバサ、先刻身どもが知音たる萩の祐仙、同席いかゞといはれた貴殿、乞食をば座敷へは通されまいかい」「ハテ高の知れた目くら女、まんざら怪しい、ナソレ茶箱も持參致すまい」と、しつぺいがへしにぎつくりと、言句に詰まれどへらず口、「左程御所望ならば兎も角も、併しざしきへは叶はぬ、庭へ呼出し、琴なと三味なと彈かし召されて、早く此場をぼつ歸されよ」と、飽まで意地持つねぢけ者、寄らず障らず駒澤が、指圖にお鍋が心得て、「朝顔どの召しまする、朝顔どの〳〵」と、呼立つる。むざんなるかな秋月の、娘深雪は身につもる、歎きの數の重りて、塒失ふ目なし鳥、杖柱とも頼みてし、淺香はもろく朝露と、消殘りたる身一つを、さすがに捨てもえん先の、飛石探る足元も、危き木曾の丸木橋、渡り苦しき風情にて、漸坐して手をつか

も憎し、直に申上げうと存じたれど、それではどの様な科人が、出來うも知れぬと存じ、へ、幸先日慰に求めました笑ひ藥、ヤコレ幸としびれ藥と取りかへたを、知らずに呑んださつきの時宜、此後とても旦那樣、御油斷は成りませぬぞえ」「ホヽ其儀は某もとく承知致した。マそれは格別、此衝立にある朝顏の唱歌は、何人の手跡、どういふ事からお身が手に入りしぞ」「エエそれでござりますか、其歌に付いて、ア哀れな咄し。エヽ元は中國邊、歴々の娘さうなが、何やら尋る人があるとて、親元を家出し、それより方々と流浪して、果はとう〱目を泣潰し、跡の月までは濱松邊に其歌を諷うて袖乞。所に又國元から、所縁の女子が尋ねてきて逢ひました、ガ、其女子も程なう病死。夫から又ひとり法師、此邊まで其歌を諷うて歩きましたが、何が盲目でこそあれ、器量はよし、聲はよし、見る程の者がいぢらしがり、朝顏々々というて、其歌を知らぬ者はござりませぬ。私も餘の不便さに、此宿に足を留めさせ、今では宿や〱のお客の伽、何とマア不仕合な者も有るものでござります」と、涙片手の物語も、心にひし〱こたゆる駒澤、もし云ひかはせし我妻かと、轟く胸を押ししづめ、「ム、夫は扨哀れな咄。身も今宵は何とやら物淋しい、欝散の爲其女を呼寄する事は成るまいか」「イヤモ何が扨お安いこと、只今呼びに遣します、お慰みに琴か三味」「ム、何分よきに賴み入る」と、云ふは子細の

の、我座敷へと駒澤も、座を立つてこそ入りにける。

宿屋の段

何國にも、暫しは旅とつどりけん、昔の人の筆の跡、つれ〴〵詫びる假の宿、夜の襖のすきもりて、風にまたゝく燈火の、影も淋しき奥の間へ、立歸る次郎左衞門、何心なく座をしめて、ふつと目に付く衝立の、張まぜの歌讀下し、「ヲ心得ぬ、此張まぜにある地紙の歌は、先年山城の宇治にて、秋月が娘深雪が扇に、某が、また逢ふまでの形見にと、書いて與へし朝顏の歌。其後計らず明石にて、船がかりせし其砌、琴に合はして深雪が節付、折ふし思はぬ互の出船、あかぬ別れを悲しみて、女の手づから我船へ、投込みし此扇。然るに今又此家にて、思はずも此張交。ア何者が謳ひ傳へて、計らず東の驛路に、見るもふしぎ」と獨言、其折からの忍ばれて、詠め入つたる時しもあれ、襖押開け德右衞門、小腰かゞめて入來れば、「こなたも扇押隱し、「オヽ亭主、先刻は扨もきつい働き、危き難を遁れしも、全くそちが志、サ是へ〳〵」「ハヽ冥加に餘る御詞。エヽ最前こなたへ參る砌、何か三人ひそ〳〵咄し、合點行かずと忍び聞けば、しびれ藥を茶に交ぜて、あなた樣へ差上げんとの」「アヽコリヤ」「サア恐ろしい工み。エヽ憎さ

ハヽヽヽ其替り醫者を呼んで、ハヽヽヽ、ハヽヽヽ醫者が醫者を頼むは卑怯なれど、是はおれが手療治ではいかんわい。ハヽヽヽ、ハヽヽヽコリヤ何でも笑癪といふ物かしらん。ハヽヽヽハヽヽヽコリヤ德右衛門、もう何にも云はぬ、誤つた〳〵。ハヽヽヽ、ハヽヽヽ、早う醫者を呼んでくれ、腹が立つ程をかしいわい。ハヽヽヽ、ハヽヽヽエヽ忌々しいわい。ハヽヽヽハハヽヽ肺の臟も腎の臟も、腹の中で宿替するやうな。ハヽヽヽ、ハヽヽヽチヽイ宿替待つてくれ、付物の應對もせにやならん。ハヽヽヽ、ハヽヽヽコリヤ　モウ五臟六腑が、チヨイちよい踊り初めた」と、すり替へた藥故とはいざ知らず、果は茶箱も蹴ちらして、笑ひ入るこそ正體なき、姿に睏れ岩代多喜太、はかり戎や德右衛門、をかしさ隱すばかりなり。短氣の岩代ぐつとせき上げ、「ヤア大馬鹿者の萩の祐仙、笑ひ止まずば手は見せぬ」と、力身かへれば悔りしながら、手を合しても止らぬ笑ひ、「ハヽヽヽめつさうな〳〵、ハヽヽヽ御オホヽヽ了、オホホヽヽ簡ムヽヽヽ、アハヽヽヽ」と、詫びる詞もあやちなく、笑ひ藥の利目とは、知らぬ祐仙息はずませ、轉けつ笑ひつハヽヽ、迯げて行く。案に相違の岩代は、睏れ果てたる佛頂頰「エヽ樣々の馬鹿者にかゝり、湯に入るを忘れた。ヤイ亭主め、うぬよく邪魔を。ヤイきり〳〵風呂へ案内ひろげ」と、それとも得いはずむしやくしや腹、席を蹴立てて廊下口、跡に心をおくの間

ハヽヽ、エヽをかしないぞ〳〵。エヘヽハヽヽヽ、ハヽヽヽコリヤヤイ徳右衛門了簡ならぬぞ。ハヽヽ、ハヽヽヽ汝マア、是なりに濟まさう。ハヽヽヽヽハヽヽヽあまりの事で腹がよれるはい、ハヽヽヽハヽヽヽ一體こりや何のことぢやい。ハヽヽヽヽハヽヽヽ何ぢや知らぬが、無性にをかしく成つてきたはい。ハヽヽヽアハヽヽハヽヽ」岩代見かねて、「コリヤ〳〵祐仙、をかしくもない事笑はずと、早く駒澤殿へ差上げぬか」「ハイ、ハヽヽヽハヽヽヽ成程々々、ハヽヽヽハヽヽヽ只今差上げますはい。ハヽヽヽヽハヽヽヽ暫くお待下され。ハヽヽヽヽハヽヽハテめんような。ハヽヽヽハヽヽヽ笑ふまいと思ふ程猶ハヽヽヽヽハヽヽヽコリヤたまらん、臍が裂ける。ハヽヽヽハヽヽヽ」「ヤイ〳〵たわけ者め、何が其やうにをかしい。身どもは格別、駒澤殿へ無禮であらうぞ」「ハイ、ハヽヽヽハヽヽヽ左樣にお腹は立てられな、下拙も笑ひたいことはないけれど、ハヽヽヽハヽヽヽ何か腹の底から涌出るやうに、ハヽハ、ハヽヽヽ是では徳右衛門へ押がきかん。ハヽヽヽハヽヽヽアヽ苦しい、堪忍してくれ、誤つた〳〵。ハヽヽヽハヽヽヽイヤ〳〵心を取直し、モウ笑はんぞ。おれも男ぢや、笑はんというたら笑はん、おれを誰ぢやと思ふ、萩の祐仙樣ぢや。何のその、何ぢや云うて居るは、ソンナぢやない〳〵。ハヽヽヽハヽヽヽコレ〳〵徳右衛門、中直りせう程に、ハヽヽヽ

の有らう様はなけれども、めつたには、ナ申し」と、目顏で知らせば岩代多喜太、「ヤアいらざるうぬが馬鹿念、身が入魂の萩の祐仙、茶に毒藥でも仕込みあるかと疑うて申すのか」「ア丶イヤ、全く左樣ではござりませねど」「ム丶然らば差止めた駒澤殿の手前といひ、サ今一言いつて見よ、眞二つに打放す」と、きつぱ廻せば祐仙押止め、「ア丶イヤ、先々お待ちなされませ、エ貴公樣の御立腹は御尤なれど、德右衞門の申す所も又一理あり。ヤかう致そ、下拙が毒見仕り、其上にて駒澤樣へさし上げませう。何と德右衞門、それで云分は有るまいがや」「イヤ モ御自分にお毒見なされる程、慥な事はござりませぬ」「ヲ丶さう有らう〳〵。ガ、其替り何事もない時は、此祐仙が了簡せぬが合點か」「ヤモ夫はぜひに及びませぬ、御存分に成りませう」「ヲ丶面白い〳〵。きつと詞をつがうたぞよ。ドレ毒味を致さう」と、茶碗取寄せ、そこらをきよろ〳〵見る振にて、解藥の丸子そうと呑み、さあらぬ顏して件の薄茶、雫も殘さず呑み盡し、「ヲ丶ヲ、ヲ丶イ德右衞門、ちよつと出やサ。見たか、此通りぢや德右衞門。是でも別條が有るか、サどうぢや」と、己が工みの藥とは、取替へありとは夢にも知らず、「サア德右衞門、ヤ戎や德右衞門、えび德、約束ぢや夫へ、ム丶ム丶ム丶丶丶直れ〳〵」「イヤモ段々誤り入りました、眞平御免下さりませ」「ヤ何ぢや、ム丶丶ム丶丶丶御免下されいも氣が強いわい。ハ丶丶丶丶

て置いた笑ひ藥、アノ鐵瓶の湯をかへて、オヽさうぢや〳〵」と手早に懷中の、藥をふり込み蓋をしめ、「かうして置いてまさかの時は、オツトよし〳〵」と、心で點き德右衞門、勝手へこそは入りにけり。かゝる折から立歸る駒澤治郎左衞門、足音ソツトいはしろ多喜太、祐仙伴ひ出で迎ひ、「コレハ〳〵駒澤氏嘸御疲れ、先々是へ。イヤナニ祐仙、其方は平生茶好、定て茶箱も用意しつらん、ソレ駒澤殿へ一服立てゝ進ぜませい」と、云ふに祐仙空とほけ、「コレハ〳〵岩代樣、私風情の麁茶を御所望とは冥加ない。殊にあなた樣は」「ヲヽサ、是が卽駒澤氏、殿御歸國の先觸、宿々の駈引にて只今御歸宿、御遠慮深いお人、されども元來茶の道には御執心、用意の薄茶、サヽ所望だ〳〵」「ハヽコレハ〳〵、なか〳〵あなた樣へ上げますやうな茶ではござりませねど、御所望とは身の面目、苦しからずば何服なりと召上られ下されう」と、追從たら〳〵立上り、茶箱取出し毒藥の、工みの裏をかゝれしとも、知らぬ手前のしかつべらしく、振立てて差出せば、岩代多喜太詞を改め、「イザ駒澤氏」と取次ぐ所へ、「ヤ先々暫く」と德右衞門、「恐ながら」と座敷へ出で、「憚ながら旦那樣、いかゞしい申し事ながら、數代お出入の殿樣の、御家來たるあなた方、私方で煮焚の物は、此度に限らず、吟味に吟味を致した上差上げませねば、千に一つ麁相がござりました時は、此德右衞門めが越度、泊り合したあなたのお茶、サ御如才

も何かに付けて邪魔になる駒澤め、何とぞ密に害せんと、昨日海道にて笹久藏といふ浪人を連歸り、委細の密事を申含め、奥の間の下やへ忍ばせ置いた」「ヤそれはよい手筈。もし其手でいかぬ時は、下拙が手製の、コヽコレ此痺藥を薄茶に交ぜて飲ます時は、忽ち五體しびれて死人も同然、刺殺すに手間隙いらず。又此丸藥は則ち解藥、これを先へ呑置けば、少しも醉はざる大妙藥。ガ、時に申さぬ事は聞えませぬが、首尾よう參れば御はうびを、ハヽづつしりと戴きたう存じます」「ヲヽ出かす〳〵。先これは當座の褒美」と差出せば押戴き、「コレハ〳〵忝い。何かは後程」「ヲヽ萬事ぬかりのない樣」と、云ひつゝ立つて岩代は、元の座敷へ入りにける。跡に祐仙獨笑、「旨いぞ〳〵、當座の褒美が先づ拾兩。さらば是から湯の仕掛」と、云ひつゝあたり見廻して、件の藥を湯の中へ、そつとほり込み蓋ぴつしやり、「斯うして置いて駒澤が、戻り次第にふり立てて、我等が先へ服加減、解藥の丸子でしょらしん、駒澤めは忽ちぐにや〳〵ぐにや」と、悦び勇む其所へ、奥より息急き下女お鍋、「申し〳〵、奥のお客がお呼びなさる、早う早う」とせり立つる、聲に悔り祐仙は、そしらぬ顔で奥へ入る。始終窺ひ德右衛門、そろ〳〵出でて跡打ながめ、「最前から樣子を聞けば、何やら怪しいアノ藥、駒澤樣へ申上げうか。イヤイヤ夫では却て當り障り、どうぞよい思案が有りさうなものぢや。オヽソレヨ、昨日松原で買う

杖を力に立上り、女心も張りつめし、弓はり月に夜半の鐘、つくす忠義の一筋道、伴ひてこそ急ぎ行く。

宿屋の段口

行雲に足竝早き雲助が、捽ぎ隙なき東海道、傳馬人足歩荷物、吸付け歩む煙草さへ、五十三次打ちつゞく、中に賑ふ島田の宿、所名うてに内證よし、名さへ戎や德右衞門、老鋪も廣き十間間口、店は講札講印を、掛け渡したる暖簾も、風にひらめく吹付くる、繁昌類ひなかりける。逗留客の萩の祐仙、一間の内より歩み出で、「コレ〳〵女中衆、ちよと尋ねたいことが有る、ヤ外のことでもないが、奥の客人は中國大内家の御用人方であろ。ソレなれば、萩の祐仙でござる、ちよとお目にかゝりたいと申してくりやれ」「ハイ〳〵、呼びまして上げませう」と、お鍋は立つて入りにけり。斯くとしらせに岩代多喜太、一間より立出づれば、「コレハ〳〵岩代様、先以つて御健勝で」「ヲヽ、誰かと思へば萩の祐仙、久々對面。身どもに逢ひたいとはいかなる事」「サレバ〳〵、先達ての御狀にては、新參の駒澤が諫言にて、殿には御本心になられ、運八殿の最期の由、それに即立番様よりの御狀」と、渡せば受取り一見し、「ヲヽ、大儀〳〵。身どもとて

な勾引、見事賣るなら賣つて見や」と、拔放して切込む刀、さしつたりと身をかはし、もう百年目と輪拔も、同じく旅差拔放し、「觀念せよ」と切結ぶ。深雪はあせれど盲目の、何とせん方なみ木原、二人は打合ふ月明り、こゝを詮とぞ三重挑みあふ。いかゞはしけんわな拔が、石に躓き眞逆樣、轉ぶを得たりと起しも立てず、肩背も分らぬ滅多切、さしもの惡者七轉八倒、のた打ち廻つて死したるは、心地よくこそ見えにけり。淺香はしつかと止めの刀、「サア〳〵嬉しや深雪樣、惡者はしとめました」と、いふ内よりも心のたるみ、其儘そこに倒れ伏す。深雪はこはごは探りより、勞はる手先にしたふ血、「ヤア〳〵、そなたも手疵負やつたか。なう悲しや」と抱きかゝへ、「淺香いなう〳〵」と、聲を限りに呼生くれば、息吹きかへし目を開き、「ヲヲ深雪樣、お身に怪我はなかりしか」「イヤ〳〵わしは何ともせぬが、そなたの手疵が氣遣ひな、氣を慥に持つてたも」と、取付き歎けば、「ア、コレ聲が高い。わたしはほんのかすり手、氣遣ふことはござりませぬ。が、もしもの事が有つた時は、最前申した古部三郎兵衞といふ人に、此守を證據に廻り合ひ、今宵の譯をお咄しあつて、何かの事をお頼あれ、必ずお忘れ遊ばすナ。ヤ、誰も見ぬうちサアお出」と、刀を納め深雪が背に、負はすも涙ふる三味の、いつかむかしにかへらう尾、いとゞもつるゝ心をば、てんじかへても手疵のいたみ、盲目ならぬ我身さへ、

悲しさを、思ひやつてかんならず、呵つてたもるな誤つた」と、縋り歎けば、「チ、何のマア呵りませう。たとへどのやうにお成りなされても、廻り逢うたがわしや嬉しい。とは云ふものの是は又、あんまりな落ちぶれやう、日頃の辛苦が思ひやられて、わしや〳〵此胸が裂けるやうにござりますはいなう。シタガコレ、お氣遣なされますな、私が産の親古部三郎兵衞といふ人、小夜の中山の邊にながらへて居さんすとの事。肌身放さぬ守刀、それを證據に廻り逢ひ、阿會次郎樣の有所を尋ね、きつとお逢はせ申しましよ。ガ、何をいうても此處は街道、宿ある方へ急がん」と、泣入る深雪いたはりて、立上る折こそあれ、夜道ほか〳〵輪抜吉兵衞、よい事がなと蚤とり眼、二人がそぶり物ぐさしと、傍へ立寄り提灯の、火影に深雪が顔打眺め、「ヨウ、わりやいつぞや摩耶の婆に、百兩で直を極めた娘、いつの間に亂れてかくれにはなりをつたぞい。しかし醫者にかけたら治らぬ事もあるまい。何分元手いらずの勝負物、ドレ拾うてやろ」と手を取るを、淺香は引退け氣色をかへ、「ヤア女と思ひ、慮外しやると許しはせじ」と杖押取り、仕込みし刀抜きかくる、其手を押へて、「ム、ハ、ハ、、、こりややい、輪抜吉兵衞といふてな、日本國を股にかける人買商賣、鰹かきひねくり廻しても、びくともする男ぢやないは。ほろその下つた亂れせうより、賣られて絹のべゝ著い」と、てうける詞聞きかねて、「イヤ推參

時は、飛立つやうにあつたれどもな、あさましい〳〵この形で、ドウマア、顔が合はされう。とは云ひながらわしが身を、よく〳〵大事と思へばこそ、海山こえて憂苦勞、廻りあひは逢ひながら、胴欲にもよそ〳〵しう、云うていなした心の内、マヽヽどの樣にあろぞいの。只何事も是までの、約束事と諦めて、コレ堪忍してたも〳〵や。取分けて悲しいは、是程不孝な此わしを、やつぱり子ぢやと思し召し、身の徒を苦にやんで、お果てなされた母樣の、死目にあはぬのみならず、御命日さへつゆ知らず、はかない事が、エヽマあろかいなう。思へば〳〵淺ましや、親々の罪ばかりでも、目が潰れいで何とせう。赦してたべ」とばかりにて、こらへ〳〵し溜涙、わつと叫びて身をなげ伏し、前後正體なき沈む。立ち聞く淺香も忍びかね、わつと一聲泣出せば、扨はそこにと深雪が驚き、こけつ轉びつ迯行くを、縋り止めて聲ふるはし、「コレマア〳〵待つて下さんせいなう。姿形はかはつても、一日にも見違へねども、名のりかけてもなか〳〵に、明さぬ氣質と知つた故、餘所事に云ひなして、木蔭に隱れて始終の樣子、立聞きしたも盡きせぬ緣。さりながら此年月骨身を碎き、やう〳〵尋逢うたもの、心強ういなさうとは、そりや胴欲ぢや〳〵。エヽ聞えませぬはいなア」「エヽ其恨は理ながら、今も今とて云ふ通り、身の徒で此樣に、落ちぶれ果てた形かたち、どうマアそれと名乘られう。わしが心の

にける。跡に淺香はうつとりと、涙ながらの一人言、「エヽコレ申し、聞えませぬぞえ深雪樣。家出なされしその時も、一言明して下さつたら、仕樣もやうも有らうもの。アヽおいとしや奥樣は、お前のことを苦に病んで、明けても暮れても泣いてばかり、果は重き病ひの床、死ぬる今はの際までも、どうぞ尋ねて連歸り、せめて位牌に無事な顔を、逢はしてくれよと私への遺言、夫故忌の明くをもまたず、國々廻る順禮も、おまへに逢はうばかりぢやに、なぜ死んでは下さんした。わしやお位牌へ云譯を、何とせうぞ」と身をもだえ、恨むる人は目のまへに、ありともしらぬくどき泣。聞くに深雪は身も世もあられず、袖をかみしめ耳をおさへ、泣聲立てじと喰ひしばり、こらへ／＼し苦しさは、骨も碎くるばかりにて、泣くよりも猶つらかりし。亂るゝ心押ししづめ、淺香は涙の顔を上げ、「アヽ我ながら愚癡のいたり、いつまでいうてもかへらぬ事、此上は菩提のため、打殘りたる札所を廻り、早う國へ歸りませう。さうぢやさうぢや」と立上り、小屋の戸口にかけ寄つて、「イヤ申し女中樣、いかいお世話でござりました。モウおさらば」とゆふ月に、別を告げて行過ぎしが、何か心に點頭きて、木陰に忍び窺ふとも、知らぬ目しひの悲しさに、思はず小屋をまろび出で、乳母の行方はそなたぞと、見えぬながらに延上り、「コレイノコレ淺香、今云うたは僞り、尋ぬる深雪はわしぢやわいの。聲を聞いた其

られし樣子をば、もし聞きはなされぬか」と、いふに正しく我身の上と、胸騷ぎしが待て暫し、世の中に、似た聲の人似た事の、無きにあらずと思ひ返し、「ヲ、それはマア笑止な事や。往來も繁き此街道、女中の一人旅は幾人といふ限りなし。左樣にお尋ねなされては、なか〳〵知れう樣もなし。ガ、マア國はいづく、名は何と申しますえ」「サレバイノ、國は藝州福岡、名は深雪樣」といふは彌乳母淺香、ヤレなつかしやと云ひたさも、落ちぶれ果てし今の身を、我と名乘るも面伏、殊にそれぞと云ふならば、連れていなれて父母に、どの顏さげてまみゆべき。罪深き事ながら、僞りすかして歸さんと、猶しも聲をくろまして、「ヲ、成程、たしかそんな噂も聞きたれど、其女中は國を出てより樣々の憂目に逢ひ、漸のがれ此邊までは來られしが、どうしたことか四五日前に、淵川へ身を投げて、死なしやんしたと人の噂。假令どの樣に尋ねても、もう逢ふ事はなりますまい」と、聞いて淺香は、「ヤア〳〵、何其女中は身を投げて」ハア、はつとばかりに身を打伏し、前後正體なき居たる。深雪も共に悲しさの、涙かくして傍に寄り、「コレ申し女中樣、悲しいはお道理ながら、老少不定の世の習ひ、定りごとと諦めて、早う國へお歸りなされ、跡弔うてお上げなさるが佛の爲。海山かけし長の旅、隨分怪我のないやうに」と、云ひつゝ立つてかけ小屋へ、さぐり〳〵て入りあひの、鐘に哀を添へ

たない乞食の物貰ふものかい。そんな事ぬかしたら、コリャかうぢや」と惣々が、竹で打つやら石打つやら、育も下司のわんぱくども、寄つて掛つてさいなまれ、「アヽコレ〳〵、モウ再び云やしませぬ、こらへて下され誤つた」と、土にひれふし詫びければ、「ヲヽ泣いて誤るなら堪忍してやろ。サア皆こい、いつもの土手で芝居ごと、五郎よ、次郎よ」と呼連れて、道草しながら走り行く。跡に深雪はわつと泣き、「エヽ淺ましや情なや、誰あらう岸戸の家老秋月弓之助が娘とも云はれし身が、いかに落ちぶれたればとて、筋目もない里の子に、乞食よ非人と打叩かれ、誤りましたは何事」と、身を抱しめてどうと伏し、詫涙ぞいぢらしき。順禮歌あら尊、導き給へ觀音寺。遠き國よりはる〴〵と、乳人淺香は淺からぬ、歎きも身にぞ笈摺の、深雪の行方尋ねんと、思ひ立つたる順禮も、辛苦憂き身のやつれ笠、露の舍も取りかねて、杖を力に歩み寄り、「コレ〳〵女中、率爾ながらチトお尋ね申したい」と、音なふ聲に泣顔隠し、「ヲヽ、コレハマアどなた樣かは存じませぬが、私は目界の見えぬ者、ガ、マア何ごとのお尋ねぞ」と、云ふ物ごしのつまはづれ、どうやら尋ぬる其人に、似たと思へど形かたち、是は非人殊に盲目、心の迷ひと思ひ返し、「ホヽヽ、チヽわしとした事が麁相な、目界の見えぬお人に問ふ事は異な物なれど、若し此街道を年の頃は十六七、媚容人に勝れ、やしき育ちの大振袖、供をも連れず只一人、通

老女が願に任せ、盡未來まで渝らぬ夫婦、半座を分けて待たれよ」と、詞に嬉しく二人の手負、手を合したる悦び涙。「ホヽ其媒は此闕助」と、心を汲取りかいげ杓、是や末期の水盃、冥途の旅へ嫁入の、儀式をまねぶ三々九度、苦しき中にもにつこりと、笑顔は娑婆の色直し、雪の白髪の尉ならで、姥もあへなく介添の、彌陀の淨土へいぬ張子、血しほの紅に染めてやる、野邊の送火消えはてし、草葉の露の玉の輿、あはれはかなき契なり。

濱松の段

歌思ふこと、まゝならぬこそ浮世とは、誰が古への詫言、今は我身の上に降る、涙の雨の晴間なく、哀れや深雪は數々の、憂さ重りて目かいさへ、泣潰したる盲目の、力と頼む物とては、わづかに細き竹の杖、あるにかひなき玉の緒の、切れも果てざる三味の糸、露命をつなぐよすがにと、背に結はひ懸けしを〳〵と、心の闇路たどりくる。跡に大勢里童、てん手に竹切振廻し、「アレ〳〵朝顔の乞食目くら、叩け〳〵、打てよ〳〵」と取廻す。「アヽコレ〳〵目の見えぬ者を其樣にはせぬものぢやはいな。どれも〳〵よいお子樣や、今度よい物が有つたら上げうぞえ」「エヽいやぢやはい。乞食に誰が物貰ふもんで、ナア次郎坊」「ヲヽさうぢや〳〵、あたぎ

たばしる涙はら〳〵〳〵、ふり積む雪も一時に、解けて流れて谷川の、水も濁なす如くなり。斯る歎きもしら雪の、道を蹴立てて馳來る關助、庭先へ踊り入り、「ヤア我を欺き山路に迷はせ、討たんと謀りし狸婆、天罰報うてくたばつたか。深雪樣を拘引し、何所へやつた。サア眞直に白狀ひろげ、何と〳〵」と詰寄れば、三郎聲かけ、「先待たれよ。我こそは駒澤了庵が二男三郎春次なり。とくより此家へ入込んで、始終の子細は沓聞いた。御邊が尋ぬる深雪といふは、我兄次郎左衞門とかねて緣邊の契約あること、某豫て聞及ぶ。最前守に書付有つて、秋月が娘とは察したる故、此家の千里と云合せ、都をさして落せし」と、聞いて關助小踊し、「ハヽ有り難し〳〵、お禮は重ねて。心もせけば早お暇」と、かけ行く向ふへ蘆がら傳藏飛んで出で、「ヤア聞いた〳〵。浮洲の仁三と云ふは大内家の浪人。此通り山岡殿へ注進」と、逸足出して駈行くを、エヽイと打つたる小柄の手裏劍、たじろく所を關助付入り、拔く手も見せず幹竹割。「ホヽヽヽ潔よし〳〵。山岡玄蕃が逆意の企とくより夫と知つたれども、紛失したる靈符尊像、奪返すまで荒立てがたし。此密書を囮にして、玄蕃を亡す我術。必ず堅固で、關助」と、勇立つたる其有樣、手負の老女は聲を上げ、「オヽあつぱれ〳〵。が、只痛はしきは菊姫樣、最期に婆が一つの願ひ、此世の緣は薄くとも、未來を結ぶ夫婦の盃、聞届けて下され春次樣」「ホ切なる

手遅しと待つ所に、案に違はず大内義隆、手勢すぐつて三萬餘騎、豐前の國へ攻下り、小倉が城を取圍み、息をも繼がず揉立つる。味方も爰を破られじと、矢種惜まず指しつめ引きつめ、射出す矢先は雨あられ、篠を亂して降るごとく、矢庭に城下は死骸の山、初度の軍は打勝ちしが、其後數度の合戰に、大將始め數多の軍兵、水の手切れて落城す。最期の際に宗鎭樣、わらはを近く招き寄せ、其方何卒姫を伴ひ落延びて、命ながらへ守育て、成人の後は尼ともなし、父が菩提を弔はせよと、主命辭する所なく、漸く城を落延て毒蛇の口をのがれしぞや。再び御世に出さん物と、海賊人買の惡業も、まさかの時の軍用金。又玉橋の局と僞り、藥王樹を奪取りしは、大内家を滅亡させ、二つには祈禱にことよせ、媚よき女を見置きては、手下に云付け拘引し、君傾城に賣渡せし、其罪科が報い〳〵て、姫君の御身の仇と成つたるは、皆わらはがなせし業、赦してたべ」と取付いて、悔み歎けば菊姫は、いとゞ涙にむせかへり、「ナウ自とても仇になしたる身の徒、そなたの最期も自ゆゑ。こらへてたも」とばかりにて、歎けば老女は猶せき上げ、「ヲヽよう云うて下さつた、翌をも知らぬ老の身の、死ぬるは元より覺悟のまへ。それに引きかへ姫君の、戀ひこがれたる其人に、一日片時添はしもせず、盛りの花をむざ〳〵と、無常の風にちらすか」と、主從手に手を取りかはし、わつとばかりにむせ返れば、心を察し春次も、不便と見やる兩眼に、

きかへて、進賢の冠羅綾の唐服、寶を守護して立つたるは、股をくゞりし韓信が、大元帥の位に著き、拜賀を請ぜし勢に、荒れし老女も氣を吞まれ、只茫然たるばかりなり。強氣の荒妙高笑ひ、「ムヽ〳〵ムヽハヽヽヽヽヤア納め過ぎたる汝が振舞、娘の敵寶の盗賊、サア〳〵〳〵觀念せよ」と詰寄れば、ちつとも動ぜずはつたとねめ付け、「ヤア盗賊とは案外なり、疾くより入込む某こそ、浮洲の仁三郎とは汝を計らん假の名、誠は大内家の隨臣駒澤次郎左衛門が弟、同苗三郎春次なり。我幼年の頃、父了庵に勘當請け、成人に隨ひ先非を悔いて大明國へ押渡り、彼地の醫官とまで成りしかども、日本に在す父の慕はしく、仕を辭して歸朝せしに、父は早病死の跡、思ひ合せば先つ頃、多々羅の濱で怪しき老女、慥に藥王樹の盗賊、住家は摩耶と聞きしゆゑ、大友の殘黨浮洲の仁三と僞り、此家へ入込み今日只今、紛失せし藥王樹を奪返せしも娘千里が志、つれなき我に操を立て、「生害せし貞心義烈、謀反の餘類と云ひながら、過分至極」と落涙を、聞いて老女は物をも云はず、持つたる脇差腹にぐつと突立つれば、「ナウ何故の御最期」と、取付き歎く手負の顔、打眺め涙を浮め、「エヽ是非もなき御運の末。誠御身は我子にあらで、御主君大友宗鎭樣の忘形見、菊姫君でござるはいの」「エヽ」「チヽ御合點の行かぬは御尤御尤。アヽ思ひ出せば二昔、御父大友宗鎭樣、足利の天下を掌握せんと、謀反の旗を上げ給ひ、討

内へ駈入つたり。娘は悲しさ「ハァはつ」と、其儘そこに泣倒れ、正體なみだの折からに、斯くとは知らず主の老女、心も足もいきせきと、我家の内へ駈戻り、破れたる箱を見て悔り、「ヤアコリヤ〳〵娘、大切なる守の箱、何者が此仕業、サア〳〵子細はどうぢや〳〵」と問詰められ、隱し持つたる懐劍を、咽にがはと突立てたり。老女は悔り其手に縋り、「コリヤ〳〵娘、何故の此最期」と、抱きかゝへて介抱に、娘は苦しき息を繼ぎ、「ナウかゝ樣、堪忍して下さんせ。語るも便なき事ながら、戀の媒頼んだる、義理を思うて最前の、女中を助けんと、仁三郎樣の指圖にまかせ、大事の守を取出し、戴かせば忽に息吹返す即座の奇特、幸ひ此場を落せしが、思ひも寄らず仁三郎樣、守の箱を打碎き、中に添へたる狀を見て、情なやお前をば、謀反人の山岡とやらが同類とて、折角結んだ妹背の緣、切放されし其悲しさ。とても添はれぬ惡緣と、思ひ切つても切られぬ因果。かく成る事も大切な、寶を失ふばかりかは、大事を人に知らせたる、云譯なさの此最期」と、語るを聞いて老女荒妙、眼をいからし聲ふるはし、「ム、扨は浮洲の仁三といふは、古主の仇たる大内家の、廻し者であつたよな。それとも知らず氣を赦し、折角手に入る寶を奪はれ、現在娘を殺せしも、元の根ざしはアノ二才め。イデ掴殺して腹いん」と、身繕ひして荒々しく、一間の障子引明くれば、内にすつくと浮洲の仁三、以前の姿引

イアイ合點」も女房顔、千里は納戸へかけり行く。浮洲は深雪を抱かゝへ、胸撫でおろせば手に障る、守り袋の中改め、「ム、藝州岸戸の家中、秋月弓之助が娘深雪、ム、」と心に一思案手早に納める程もなく、娘は守の箱携へ、いそ〳〵として立出づる。「サウ〳〵どうやらかうやら取つて來た、かゝ樣の戻らしやんせぬ其中に、早う〳〵」と手に渡せば、箱押取つて恭しく、深雪が額に押當つれば、守の奇特忽に、息吹返し邊を眺め、「ヤアおまへは娘御」「ナ、氣が付いたかえ、ア、嬉しや〳〵。コレ幸ひかゝ樣は留守なれば、此間に早う行かしやんせ」と、聞いて深雪は飛立つばかり、嬉し涙にくれ居たる。「コレ〳〵女中、此坂を左へ取れば御影へ出る近道、頭が戻らぬ其中に、サアちやつと〳〵」に手を合せ、「忝うござんする、死んでも御恩は忘れじ」と、膝もわな〳〵立ちかねて、漸う遁れ落ちて行く。浮洲は守に目も放さず、何思ひけん在りあふ鐵橋、取るより早く守の箱、はつしと碎けば驚く千里、見向きもやらず錦の袋、中より出づる狀取上げ、「ム、扨こそ〳〵。山岡玄蕃の内通の密書、又此守こそ大内家の重寶藥王樹。扨は主の老女と云ふは、大友の殘黨、謀反人の同類よな」と、聞いて千里は、「何と云はんす、アノかゝ樣を謀反人とはえ」「ホ、先年玉橋の局と僞り、大内家へ入込み藥王樹を銜取りしは此家の老女、緣につれたるお事なれば、妹背の緣も是限り」と、詞尖にいひ放し、一間の

りぢや〳〵、餘りぢやはいの。いとしぼなけに此女中を、情らしう助けたの、イヤ命の親のと言はしやんしても、君傾城に賣らうとは、よう胴欲に言はれた事。賣らいでならぬ事なれば、かはりに私を賣つてたべ」と、縋り止めるをふり放し、「コレ娘、エヽそなたの知つた事ぢやない、そつちへ退いていや〳〵」「アヽイヤ〳〵、何ぼうでも此子を賣らさぬ、わしを〳〵」と爭ふを、「エヽ面倒な」と突退けて、かよわき深雪をちやう〳〵〳〵、燒鐵橋の續打、アット一聲反返り、其儘庭へ倒れ伏す」「ナウいとしや」と泣入る千里、老女も今更詮方も、呆れ果てたる折こそあれ、麓の方より手下の眼太、息を切つて駈來り、「イヤコレ〳〵お頭、大名の金飛脚、此麓で追取卷き、まぶな仕事と仲間の者、汗水かけども手強い奴、どうやらこつちが覺束ない、早う加勢」と言捨てて、飛ぶが如くに引返す。聞くより老女は悚り仰天、「浮洲は居ぬか」といふ内も、老のいら立 傍なる、心に覺えの一腰かい込み、裾ばせ折つて駈出づるを、「ナウ情なや」と止る娘、引退け〳〵力足、麓をさして走り行く。跡に娘はうろ〳〵と、あなたこなたを氣遣ふ内、一間を出づる浮洲の仁三、千里は見るより、「ヲヽよい所へ仁三郎樣、何やら事が起つたとて、かゝ樣は今麓へ。ガ、マア差當つて此女中を、どうぞ助ける仕樣はないかなア」「サアどうというて外に何にも。オヽソレ〳〵、幸ひ頭の留守の間に、今の守をサア〳〵早う」「ア

の」と、燒返つたる圍爐裏の鐵橋、片手に握つて目先へ突付け、「サア、艾いらずの一つ灸、其美しい顔へすゑうか」「サアソレハ」「頬がまちを突拔かうか」「ア、コレ申し、どうぞ御勘忍」「サアそれ程に悲しくば、丸山へ賣られて行け」と、云はれて深雪は涙聲、「ナウ丸山とやらは聞及ぶ、唐土船の湊とやら。情なや唐國の人に肌身を汚さるゝ、君傾城の憂き勤、是ばつかりは御了簡」「ア、ム、そんなら日向へ奉公に」「ア、コレ申し日向とは、夫よりも遙に遠き日の本の、果と聞けば猶悲しい。どうぞ都へ只の奉公、水仕の勤もいとひはしませぬ。お情お慈悲」とばかりにて、只手を合せ泣き居たる。「ホヽヽヽ、エヽ味い事いふわろぢやはいなう。水仕にやつてはコレ、金にならぬはいの。コレ〳〵〳〵よい子ぢや程に、アノ恩返しぢやと思うてナ、コレ此婆にまうけさして下されいの」「サアそれは」「但し此鐵橋が喰ひたいか」「ア、コレ申し」「いやかいやか」「何の〳〵、何のいやと申しませう〳〵〳〵」「サア賣られて行くか」「サアそれは」「サアサア〳〵、いやなら殺すがどうぢややい」「ハア、」「サア返答せい女郎め」と、罵る聲は嚙付く如く、肝にこたへて此世から、奈落に沈む憂き思ひ、悲しさ怖さ恐ろしさ、涙は胸にみちのくの安達原の黒塚に、籠れる鬼の呵責にも、まさる責苦に堪へかねて、逊行く衿髪引戻し、邪見の老の皺腕に、引ずり廻し責ぜつちやう、見かねて千里は走り出で、「エ、コレかゝ樣、餘

より落付顏、「ヲ、誰かと思へば輪抜殿、大きな聲で何事ぞ」「イヤ何事でもない、此中百兩で値を極めて預つて往んだ代物、宥めても賺しても、たゞめろ〳〵とほえるばかり、勤奉公はいやぢやと胴張り、間がな透がな迯支度、イヤモ顏に似合はぬしぶとい女郎ぢやはいの。入込の內に取迯がしてはこつちの大損、事のないうち代物戾す」と、小腕取つて引出すは、世にあき月の娘の深雪、泣きはらしたる目の內に、溜る淚の玉の緖も、絕えず重る憂き思ひ、其儘庭に泣居たる。「エヽ又しても〳〵、いふ事聞かぬばいた女郎。コレ吉兵衞殿、折檻して又相談せう。代りには不足なれど、ゆうべ手まへた小女郎め、行口があるなら賴みます」と、庭の小屋より以前の小娘、繩付の儘荒氣なく、引立て出して見せければ、輪抜じろじろ打眺め、「ムヽ年は往かねどまんざらでもない代物、相談は後にして、マア預つて往にましよ」と、駕へほり込み先に立ち、泣入る深雪を睨み付け、「むだ骨折したどう女郎」と、謚き〳〵立歸る。跡に老女が尖り聲、「エヽ何所へやつてもほり戾されるしぶとい子やの。小瀬川で身を投げうとして、死ぬる命を助けた上、大まい拾兩といふ金まで入れ、けふまで養うた義理を忘れ、奉公いやがる恩知らずめ。賤しう育たぬやつと思ひ、手ぬるうすれば付け上る、アノ爰な糟賣女めがうぬ。ア、コリヤもうそろ〳〵と痛い療治をせにやならぬはい

くてふ住吉の、神の御影の合す手も、嬉しい逢瀬を求塚、生田のもりのいくたびか、運ぶ心をちよつとでも、汲んでくれたがよいわいな」と、男の膝に取付いて、赤らむ顔は夕日照る、摩耶紅梅の色盛り、花も恥らふ風情なり。「イヤモ、見るかけもない者を、度々の心遣ひ、嬉しいけれど、お前は主なりわしは家來、いかに商賣がらぢやとて、主の娘を盗む、イヤサ、主の娘御と忍び逢ふも異なものと、あり樣は遠慮して居ました。ガ、眞實思うて下さるなら、いかにもどうなとしませうが、コレ、お前に無心がある、ガ、何と聞いて下りますか」「アノわしが願さへ叶へてたもるなら、モどんな事でも聞こはいなう」「ムヽそんならアノ、かみ樣が大事にしてゐやしやる、女の病を治す守、そつと見せて下さりませぬか」「ヲヽ夫は安い事なれど、アノお守は二重箱に入れて錠をおろし、鍵はかゝ樣が肌身放さず持つて居やしやんすれば、首尾を見合せ見せう程に、アノちよつと奥の間へ」「ハチさうぢやと云うて晝中に」「エヽマアコレ、ちよつとおぢやいの」と、無理に手をとる笹栗の、我から落ちて草の露、濡れに行く身ぞわりなけれ。折から坂道いつきせき、駕を舁せて輪抜吉兵衞、遠慮會釋もあらくれ者、雪踏みちらし門口より、婆樣内にか、ちよつと逢ふ」と、わめけば納戸を立出づる、老女はあたり見廻して、それと見る

梅、山の奥さへ浮世なれ。「ヲヽ、千里樣、それはよう案じて下さりましたなう。ガこゝへ來て新米の此私を、しなつこらしう云うて下さりますので、蔭ながら悦んで居りますはいな。しかし夜挊ぐ爰の商賣、雨降る晩や雪の夜でなければ、コレよい鳥はかゝりませぬぞえ」「ム、アノ、夜さりでも鳥を取るのかや」「エヽお前も素人の娘か何ぞのやうに。コレ鳥といふはナ、人、アアイヤやつぱり取りぢや。ハヽヽ、何がその鳥めが、雨や雪が降ると、聲山立てて人を呼んでも、イヤサ人を見ても、よう働かせぬので、モ取りよいといふこと」と聞いて千里は打しをれ、「いかに世渡るたつきとて、寢鳥を取るはきつい罪、もう是からはそんなこと、止めてほしい」と入譯を、しら歯娘の氣も弱く、耳を押へてさしうつむく。「ハヽヽ、氣の弱い。何ぼ其樣にいやがらしやつても、寢鳥は愚猪狼より恐ろしい事をする。コレ聟樣をとらねばならぬぞえ、マちつと嗜んだがよござります」と、いふ顏じつと打眺め、「エヽいやらしい、そんな事聞きたうない。私が好の殿御といふは、ナ、コレ仁三郎、日外かゝ樣が連れて戻らしやんした女中樣、アノ子を賴んで文の數、返事のないはそりや聞えぬ。モ今更いふも恥かしけれど、人里遠き此内へ、初めておぢやつた其時から、いとしらしうてきつとして、明暮思ひ増すかゞみ、紅白粉もどうぞして、そなたの心に可愛いと、思はれたさの化粧水、何といひ寄る詞さへ、灘

サ疾くより合體。身どもは藝州岸戸家の家中、豫て五番殿と心を合し謀反の密談、然るに駒澤了庵が養子治郎左衛門と云ふやつ鎌倉表へ參り、放埒の大内之助を本心に立歸らせし猿智慧、此奴いかなる術を以て藥王樹を奪返さんと計るまじきにあらず、萬事に心を配られよとの傳言」「チヽサ、心得「チヽ成程此密書にも其事、ちつとも油斷は致しませぬと、憚りながら山岡樣へ」「それは餘りおせはしい、何はなくとも申した。ガ身どもは外に所用も有れば、最早暇申さう」「それは餘りおせはしい、何はなくとも御酒一獻」「アヽイヤ〳〵、又重ねて」と立上り、出るを見送る互の目禮、老女は一間へ蘆がらも、一二足三足立出でしが、何思ひけん小戻りし、内を窺ひ小點き、奥庭さして忍び行く。

摩耶が嶽の段　三段目の切

冬ざれば人目も草も、枯果てて、殘るも淋しき軒の松、枝吹きならす雪嵐、いとゞ寒氣ぞまさりける。納戸を出づる浮洲の仁三、寒さ凌ぎとゐろりのそば、榾打くべて御垣守、衞士にはあらぬ焚火より、戀ゆゐもゆる胸の火の、晝も消えざる物思ひ、娘千里は母親に、心おくより忍び出で、「オヽ仁三郎いつ戻りやつた。昨夜はきつい大雪で、内に居てさへ寢ぐるしさ。モウわしやそなたのことを、案じてばかり居たはいな」と、詞をしほに寄添へば、色をふくみし雪の

の息女、若氣の至りにやしきを出で、其又翌日小瀬川で、ちらと見た船の内、呼べど叫べど屆かぬ追風、もかいくれに見失ひ、それより陸を方々と尋ぬるに、此麓の里人に問うたれば、エヽ丁度其格好の娘を六十有餘の老女が連れて、此山中へ登しとの事故お尋ね申す。シテ此家より外に家でもござるかな」「ヲヽ有るとも〳〵、アノ坂を左へ取り、十四五丁行けば獵師の家が有る、そこへ往て尋ねさつしやれ」「ソレハ近頃忝い。氣急にござればもうお暇」と、たばかる工もしら雪の、道踏分けて尋ね行く。始終小陰に窺ふ手下、指足して、「コレお頭、今の奴が口ぶりは、どうやら先度の仕事を」「ヲ眼付けをつた樣子、しかし家の無い山中へやつたれば、まひ戻つてうせるは定、足が付いては面倒な、コリヤわいら追付いて谷へばつさり」「ヲヽ呑込んだ」と猿辷、山蛭もろ共關助が、足跡したひ追うて行く。引違へて出來る武士、門口に立止り、「荒妙殿在宿か」と、云ひつゝはひれば老女は不審、「ムヽつひに見馴れぬお侍樣、何方からの御越は。何はともあれマア〳〵是へ」と請ずれば、會釋もなく上座へ通り、「イヤ身どもは蘆柄傳藏とて、山岡玄蕃殿に一味の者、則玄蕃より密事の使者、委細の儀は書面に」と、取出し渡せば老女は受取り、「ヲヽ是はマア〳〵遠方の處、殊に難所の山坂を、御苦勞樣や」と、云ひつゝ手紙取出し、封押切つて口の内、何か心に打點き、「ムヽそんならお前も玄蕃樣と」「ヲヽ

様なよい仕事と思へども、扨大雪でよい鳥もかゝらず、やう／＼山伏めを引剝いだ兜巾篠懸数珠輪袈裟、夫から夜更けて長崎飛脚、逃足早う逃げをるを、追かけて引たくつた荷物の内に、人参が十四五両、珊瑚樹が十二三、金が一歩で十五両、跡はござ／＼がらくた物、帳合を頼みます」と、一々縁に並ぶれば、老女はそれ／″＼帳に付け、「ヲヽ出來た／＼。エヽ猿辷も山蛭も嗜め／＼。新まいの浮洲に花を取られるは、心がけが悪いからぢや。シタガ仕事はまん物、マア酒でも呑んで、晝の内は休め／＼」「オット合點ぢや」「マヽコリヤ又聲が高いわい。常からも云ふ通り、氣の叶はぬ娘ゆゑ、追剝の人買のと聞いたら、蟲が出るによつて、獵師商賣というて有る程に、わいらも随分知らさぬやう、其ちつぺいもいつもの鳥屋へほり込んでおけ」「オット合點夜通しに、ふるひ上つて陰嚢を、猪雜炊焚き熱燗でも」情も知らぬ牛頭馬頭ども、泣入る小娘引立てて、勝手へこそは入りにけり。岩が根の、雪より忠義に凝つたる關助、深雪が行方爰かしこ、尋ねさまよひ思はずも、此岩窟に尋來て、斯くと見るより内に入り、「率爾ながら此家の内へ、年の頃は十五六で、やさしき方の娘御は、もし進退うて見えませなんだか」と、云ふに老女は心の合紋、扨は由緒の者なるかと、思へど態とさあらぬ顔、「イエ／＼、そんな女中は見受けませぬ。ガそれを何ゆゑ尋ねさつしやる」「さればさ、拙者は藝州福岡の者、子細あつて主人

こましい男ばかり、折々は若い女子がくるけれど、いつの間にやら皆奉公。分けて此間の女中は媚も心もしをらしさうな人、よい咄し連と思うたに、是も又奉公とや。それならさうと暇乞でもして往たがよいに、聞えぬ人や」と恨言、女同士とてしをらしき。老女は聞くもうるさけに、「エヽかけも構はぬ他人の事、ぐど〳〵と云はずと、早う花を手向ておぢや」と、苦い顔付氣の毒と、千里は花を携へて、佛間をさして入りにけり。折しも雪道踏分けて、立歸つたる三人連、縛り上げたる里の子に、泣音を止める猿轡、或は衣類旅荷物、銘々かたげて内に入り、「ヤア頭、精が出ますの」「ヲ皆戻つたか、チト獵が利いたか」と、いふにかんまち猿辷、繩がらみ投出し、「イヤモ昨日からの大雪で、人通りはとんとなく、やう〳〵と向ふの村からうせをる奴、ヤこいつよい仕事と、稻叢蔭からオヽイ〳〵と呼んだら、サアふるひ出しくさる。しめたと思ひ引捕へたら、八十位の老耄め、引剝だ布子下著、帶は小倉の花色縞、まんざらでもなき」と、自慢らしげに投出す。次は山蛭洞八が、十二三な小女郎を突出し、「おれが帳場も人通りがなうて、どうやらこのがき一疋、豆腐買ひにうせたのを、引とらへて顏見れば、小しをらしい頰付ゆゑ、引かたげて戻つた」と、語れば老女は苦笑ひ、「エヽ埒の明かぬつまみ錢。シタガコリヤ浮洲、われが仕事はどうぢやいやい」「イヤモ新米のこの浮淵、どうぞ頭の氣に入る

谷深うして奈落に通ず。苔滑かなる岨道の、巖は鑿に削るが如く、常に馴れたる山賤も、足踏迷ふ嶮岨なり。かゝる深山の懐に、自然なる岩窟も、いつか住家となし初めて、住馴したる岩疊、岩の屛風に這ひかゝらむ、蔦の紅葉はさながらに、畫きなしたる如くにて、しをらしくも又物凄し。此家の主荒妙は、老の手業の手もたゆく、賤がうみ苧も髻の、白髮に紛ふ雪の朝、椿山茶花折持ちて、娘千里は立歸り、「申しかゝ樣、けふは爺樣の祥月命日ぢやと云はしやんした故、谷陰で折つて來たコレ此花、御前樣へ備へて下さんせ」といふに老女は打點き、「ヲヽそれはよう氣が付いた。おれが插さうより、そなたの手向が佛へ御馳走、佛壇へ立てておぢや」「アイ〳〵合點でござんす。シタガ申しかゝ樣、アノマア浮洲はまだ戻らぬかいな」「ヲヽ皆の者と夜山にいたが、まだ戻りをらぬ」「エヽテモ遲いことではある。此雪では冷えるであらう、早う戻りはしやらいで」「ムヽそなたは何で浮洲の遲いを案じるぞ」と、咎められて氣轉の笑ひ、「ホヽヽヽアノマアかゝ樣としたことが、色々の詞咎、召遣ひの人ぢやもの、ちつとは案じも仕ませうかいな。それはさうと、いつやら連れて戻らしやんした女中は、どこへ行かしやんしたえ」「エヽ娘としたことが、樣々の根問葉問。其女中は此間、播州邊のよい衆の所へ奉公にやつたのぢやはいの」「それはマアいとしい事、人も通はぬ此山中、遣ふ者とては荒

アコリヤ金」と、いふに權七手に取つて、「ム、コリヤ小判で十兩ばかり。エヽ負けてこませ」と分口し、元來し道へ立歸る。老女は跡を打見やり、「テモ惡い者ども。シタガ十兩には安い物」「エ、」「イヤサ此間に早う」と手を引いて、袂より出す呼子の笛、ふつと一息吹きならせば、合圖と見えて元船より、苫押上げて掛けたる歩、深雪を伴ひ乘移れば、直に歩をてつ取り早く、碇引上げもやひを解き、櫂押取つて沖中へ、半段ばかり漕出す。折から砂道韋駄天走、宙をかけつてせきに關助、斯くと見るより聲をかけ、「オヽイ〳〵其船待つた、待てやい」と呼べど叫べど聞かぬ振、窓より差出す深雪が顏、「ヤア娘樣か」關助かと、云はんとするを引戻し、障子ぴつしやり跡しら浪。陸にはあせる關助の、後へぬつと權七勘太、折角かゝつたよい鳥は、手ごはい婆めに上げられる、せめて儕がわんぼうを引剝いで腹いせ」と、取つてかゝるを引ぱづし、「イヤ面倒な」と拔打に、眞向なしわり拜討、倒るゝ死骸に目もかけず、心は彌猛いそ傳ひ、跡をしたうて追うて行く。

摩耶が嶽の段

雲靉靆とたな引きし、摩耶が嶽とて津の國と、播磨にまたがる高山あり。峯高うして雲に冲り、

女中のかちはだし、男故の駈落ぢやの。夫なれば莟の花をちらさうより、命さへ有るならば、戀しい人に逢はれまいものでもない」と、なだむる詞に涙ながら、「ヲヽようい〻うて下さんした。さりながら、やしきを拔けて出でながら、ふがひない女の身、所詮添はれぬ緣なれば、どうぞ死なして下さりませ」と、又立上るをしつかと抱止め、「ソリヤ惡い了簡。カウわしが止めるからは、こなたのしたふ戀人を、尋ねさがして逢はして進ぜう」と、いふに嬉しく、「エヽそんなら戀しいお人をば、尋ねて逢はして下さんすか。エヽ嬉しうござんす、忝い」と、死ぬる覺悟も今更に、色に引かる〻戀慕の闇、心迷ふぞ道理なる。か〻る所へ以前の惡者、たづね戾つてうそ〳〵きよろ〳〵蚤取眼、深雪の顏差覗き、「ヤア爰にをつたか、一遍と搜しをつた。こつちへうせう」と手を取れば、老女は突退け深雪を圍ひ、「コリヤ此女中を何とするのぢや。女中こちへ」と手を取つて、行くを押止め立塞り、「どこへ〳〵、其幻妻はおいらの網にか〻つた鳥、脇目ふる間に逃げさらした。こつちへおこせ」と摑み付く、二人が腕首ぐつとしめ、はずみを打つて投付けられ、悔りしながら我武者もの、起上りて立ちか〻る、勘太が頰へぴつしやりと、當る小判の一包。「アイタ、、、どえらい目にあはしやがつた」と、云ひつ〻取上げ、「ヤ

て、此邊を最一遍尋ねうか」「ヲ、さうぢや〳〵。こんなよい智慧が初手から出たら、書置までして泣くまいもの。下司の智慧は跡先に氣を配れよ」とうろ〳〵眼、風に騒げる磯際の、あしに任せて兩人は、左右へこそは尋ね行く。山鳥の、初尾の鏡影ふれて、見ぬ戀人と一すぢに、こがれ〳〵て身に積る、深雪はやしきをしのび出で、心急げど行きなやみ、石につまづき打倒れ、暫しは起きも得ざりしが、やう〳〵に起上り、「ア、嬉しや、今の惡者の油斷の間に、是まで迯げて來たれども、生きながらへては恥の恥、とても此の身はなき者と、死ぬる覺悟はしながらも、心がかりは母樣の、事を分けての御意見を、聞分けぬのみならず、死ぬる私が不孝の罪、逆樣ながら一遍の、御回向賴み上げまする。又二つには乳母淺香、嘸や夢にも現にも、尋迷うて歎くであろ。死ぬる此身はいとはねど、跡の歎きを見る樣な、ゆるしてたべ」と詫涙。「又戀しいは阿曾次郎樣、此世の緣は薄くとも、未來は添うて下さんせ」と、さすがあどなき娘氣に、親を思ひ夫をこひ、わつと泣く音に小夜千鳥、いとゞ哀を添へにける。風に音する古木の柳、きつと見上げて打點頭き、涙ながらにかゝへ帶、結ぶかひなき惡緣と、恨ながらにとくとくも、枝に打ちかけ死ぬ覺悟、「なむあみだ佛」と聲もろ共、既にかうよと見えたる折から、戻りかゝりし以前の老女、それと見るよりかけ寄つて、「コレ待つた、待たしやんせ」と、抱止

夫では受取のやうなはい」「そんなら待てよ、かうつと、一筆示しり〳〵。イヤそれでは姫の狀見たやうなとぬかすであらう。オヲトあるぞ〳〵、一筆啓上仕候」「エ、それでは年頭狀のやうなはい」「そんなら待てよ。ヲ、思ひ出した、まづ書置の事」「ム、成程えいは。其次は」「エ、我等事、我等事、此度商賣の人買出入に付き、切合うてこね申候。是まで人の物をいがみ候へば、どうで地獄へまかり申すべく候。どうぞ佛の手下になられるやう問弔ひ賴入申候。死ぬる此身は構はず候へども、跡々の飯米のこと氣にかゝり申し候。南無あみだぶ〳〵。何と哀れによう出來たではないか」と、云ふに勘太が涙ぐみ、「ア、よう出來たが、成程われがいふ通り、死んだ跡ではかゝや娘がひだるい目してほえるかと思や、おりや、おりや、いぢらしう成つて來た」と、聞いて權七泣出し、「ヲ、おれが嚊は惣嫁を引かして間のないに、此書置を見をつたら、又しやりに出にやならぬかと、ほえるであろと思へば、おりや命が惜しうなつて來た」「ヲ、おれも死にとむない」おれも〳〵と雙方が、酸漿程の荒涙、はらり、エ、はら〳〵、しやくり上げしは正眞の、鬼の目からの涙なり。「ナント勘太よ、おりやどうも死にともない。どうぞ助かりたいものぢやが、オヽ有る〳〵」「ム、有るとは」「サレバイヤイ、汝と中直りさへすりや死ないでも大事ないぢやないかい」「ヲ、ほんにさうぢやはい。そんならもう中よしと成つ

行く。跡へうろ／＼二人の惡者、そこよこゝよと尋來て、「ヤイ權よ、爰にも幻妻はをらぬぞよ」と、いへば權七、「ハテめんような、慥に此道へうせた筈ぢやに、姿の見えぬは、ハテナア、どうでも此柳の樣子では、幽靈であつたも知れぬぞよ」「エヽうそ氣味の惡いことい ふない。どこの世界に紫縮緬の振袖著て、足のある幽靈があるものかい。一體おのれが間拔から、折角見付けた鳥を取逃したはい。アノこゝな大ならずめ」「何ぢや、ならずぢや。儕こそどうあはうの間拔ぢやはい」「エヽぽん／＼ぬかしやモウやけぢや」と、つかみかゝれば我武者もの、組んづころんづ揉合ひしが、「いつそばらしてこまさう」と、腰なる刀に手をかくれば、「イヤこいつは面白いはい。ハヽヽ、コリヤ汝がどす開く間此手がじつとして居よかい。あんたらくさい、其頬げたを」と大だらを、拔けばこなたも拔合し、立向ひしが月影に、きらめく刃の尖さに、互にためらひ跡じさり、「ヤイ／＼マア待て、マアまて。汝とおれが此所で切合つたら、どつちが死ぬるか知らねども、跡に殘つた嚊や坊主めが、けふは戻るか翌は戻るかと、待ちぼうけになりをるであろ。何と互に樣子を書殘して、其上で勝負せうかい」「ヲヽコリヤよう氣が付いた。しかしわりや紙や筆があるかい」「なうてかい／＼、紙も矢立も爰に有るはい。ガ待てよ、始を何と書いた物で有らう」「ハテ知れたこと、覺一つと書けやい」「エ、何ぬかすぞい。

嵐、散りゆく死出の山櫻、名殘は跡に殘れども、互に耻る主從が、心に數珠の車返し、花は櫻木武士の、道の道こそ　三重かんばしき。

小瀬川の段

冬の夜の、月は老女の粧ひてふ、譬も凄き小瀬川の、入江の柳春待ちて、眉作れど彌寒き、風の手櫛にすきかへし、白粉ならで置く霜の、色もきらめく汀の岩、打寄る浪も氷居て、氷柱に下るばかりなり。在所親仁のほか〳〵と、月夜に外聞構はんばう、挑灯提げて繋ぎたる、渡海の船に打向ひ、「オヽイ五郎太船の婆樣、今夜もどうぞ病人に、お守りを戴かしに來て下され、迎ひに來た」とぞわめきけり。斯くと聞きてや歩を渡し、船を出づるも杖突き乃、のりかひ著物綿帽子、漸くに陸に上り、「ヲ、昨夜往た木村の衆か、まだ病人は本復さしやれぬか」「さればいの、夕べ御守を戴かして下さつたので、よつ程驗が見えました。どうぞも一度戴かして下され」と、云ふに老女は、「ヲ、安いこと〳〵。こなたの娘に限らず、若い女子の病氣なら、戴かして進ぜう」「モ、マア佛氣な婆樣、禮には小麥團子の雜炊、汗の出る程振舞ひませう。イヤコレ婆樣、怪我さしやるな」と追從口、足元照す挑灯より、月夜に光る茶瓶天窓、打連れてこそ急ぎ

冥途へ別れては、玉の簪を幻に、ことづてやらん傳もなく、嘸や輪廻に迷ひましよ。名殘をしや」とはひ寄つて、覺悟極めし心にも、遉女の愛著心、見上げ見おろす暇乞、あへなく息はたえにけり。義興公も今更に、不便の涙たもちかね、こらへかねてはら〳〵、漲る瀧津駒澤も、主君の心思ひやり、胸に滿ちくる潦、袖に淵なすばかりなり。多喜太もどうやら底氣味惡く、此場黑める間に合詞、「殿、御本心に立ちかへり給ふ上は、我々までも大慶至極、此樣子を帶刀殿へ相達し、俱に安堵をさせ申さん」と、詞巧みに云ひくろめ、やしきをさして立歸る。涙拂うて大內之助、「ヤア〳〵駒澤、我國の主として、愚にも酒色にふけり、詩文の道に暗かりしは、他門の嘲り家名の恥辱、今より心改めて、汝を師範に儒學をはげみ、主從心一致して、寶の盜賊尋出し、誅をせんな、いかに〳〵」「ハヽア、ハヽヽ、コハ潔き御一言、某君を守護するならば、國家に仇する佞人ばら、瞬く內に詮議して、二つの寶奪返し、成敗せんは手裏に在り。手始はまづ斯う」と、云ふより早く小柄の手裏劍、ねらひは松が枝どつさりと、落つる運八拔討に、肩先ばらり大袈裟切。「ホヽ、あつぱれ手の內、見事々々」早御歸館と供ぶれの、聲に隨ひ數多の同勢、廣庭狹しと居竝んだり。「イザ御立」と駒澤が、進める詞に義興公、立出で給ふ御目にも、涙の玉やみつ瀨川、流れの里の泡とのみ、消えし命は色卽是空、花の姿も仇

の櫻を以て、歌になぞらへ無體の戀慕、心は命を所望の謎。それと悟つて禿を手引、忍ぶ此身は、ハヽア勿體なや、假にも主君の思人に、不義と見せしも國家の爲、逢はゞ其儘差殺し、返す刀に切腹と、思ふに違ふ此文章。其身を捨てしは楊貴妃が、馬嵬が原にて最期の心、君の輿を本國へ、車返しは國家の治り。ヤモ驚き入つたる秀作名文、遊女に稀なる心の操、君のお爲わざと御手にかゝりしは、譜代の臣が戰場の御馬先の討死より、遙に增る健氣の覺悟。ホヽ出かされたり」と感賞の、水を流せる辯舌は、實類ひなき忠臣なり。聞いて手負は起直り、「ア、嬉しや本望や。申し殿樣、疑ひ晴して未來は夫婦と只一言、いうて聞かして下さんせ」と、合す兩手に血の淚。義興公も不便さに、後悔淚の聲くもらせ、「ハヽア我ながら誤つたり、駒澤といひお事まで、放埓情弱の義興を、大切に思ひ一命を投げうつての志、コリヤ嬉しいぞよ、過分なぞよ。其貞心を露程も、夫と知りなば討つまじきに。未來は一蓮托生」と、悔み給へば手負の瀨川、聞くに嬉しさ手を合し、「エヽ有りがたや忝や、其お詞が未來の土產、嬉しう成佛致します。お前は目出たう國元へ、車返しの櫻花、榮え給ふを冥途から、見るが此身の本望ぞや。とはいふもののお名殘をしや、そも逢初めし其日より、比翼の床のさゝめ言、連理とかはす睦言に、千代もかはるな變らじと、誓ひしこともあだし世の、義理ゆゑはかない此最期、娑婆と

らさら無理とは思はねど、勿體ないおまへを差置き、あだし心を持つやうな、此瀬川ではござりませぬ。コレとつくりと氣をしづめて、其文讀んで疑ひを、晴してたべ」といふ聲も、深手によわる息づかひ。岩代はせゝら笑ひ、「ハヽヽヽ工んだり拵へたり、ちんぷんかんの隱し詞、角字で紛らす手もある事。ヤア〱お側付の儒者淺井順藏、此文體讀上げられよ。早く〱」と呼はる聲、ハッと答へて一間より、立出づる淺井順藏、件の文を取つて逐一に讀下し、「ムヽヽスリヤ是唐土の楊貴妃が、馬嵬が原にて玄宗帝に別れたる、最期の故事をつゞりし文章、不義の詞は曾てなし」と、聞いて驚く大内之助、「ムヽ、シテ其子細は何と〱」「ハアイヤ、恐れながら其申譯は駒澤めが仕らん」と、おめる色なく座に直り、某伯父の頼に依つて、國元へ下りし處、養父了庵我を招き、主君義興公、鎌倉にて御身持甚だ放埓、御諫言申す者は誰彼分たず即座の御手討、是皆國家を望む佞人のなす業、先達て藥王樹をかたり取られ、剰さへ靈府の尊像紛失、等閑ならぬお家の大事、汝、我名跡を受繼ぎ、鎌倉へ立越え、いかにもして我君に御諫言申し奉り、御本心になし參らせよと、くれ〲の頼みゆゑ、ハヽア委細心得候と、夜を日に繼いで當地へ參著仕れども、佞人讒者の妨にて、御目通りも相叶はず。夫故忍んで廓へ立入り、詩文の流行、ヤ是幸と添削に事よせ、瀬川殿に對面し、心底をためし、先刻床の間の掛物と、車返し

身をひれ伏し、「此次郎左衛門毛頭不義の覺候はず。たつた一言申上げたき一儀あり、先々々々先々、暫くお待ち下されう」「ヤア言うな駒澤、先刻より空寢入して窺へば、予が目を拔いて文の取やり。不義でないとは案外千萬」「ヲヽサ、此岩代が見るとも知らず、ほてくろしい不義密通。御手討は刀の穢れ、縛り上げて逆磔。ヤア／＼者ども、ソレ駒澤めを搦捕れ」「畏つた」と豫てより、木陰に忍びの捕手の面々、十手打ふり馳來り、「腕を廻せ」とひしめいたり。ちつとも騒かずじろりと見やり、「ヤア仰々しい科人呼はり、ならば手柄に搦めて見よ」と、云ひつつ袴しほり上げ、待つ間もあらせず雙方より、小脇に組付く腕がらみ。「さしつたり」と振ほどき、右と左へづでんどう。續いてかゝる二番手が、打込む十手をかいくゞり、ほぐれを付込む、瀧落し、庭へ散亂三番手、大勢一同に打込むを、四天拂にはらひ退け、秘術を盡す働に、取りひしがれてさしもの捕手、たじろく透を人礫、ばらり／＼遙に投退け、「ヤア覺なき身を理不盡の御成敗、科極まらぬ其内は、めつたに縄はかゝり申さぬ」と、云はせも果てず岩代多喜太、「ヤアぬかしたり大盗人、不義の證據は是爰に」と、落ち散る一通差出せば、おつとり上げて義興公、開き見れども下らぬ漢文、「コハ／＼いかに」と呆れ果て、暫し詞もなかりけり。手負は苦しき息をつぎ、「ナウ恥しや、假にも文のとりやりせしを、不義徒との御疑ひ、さ

りと」「コリヤ必ずぬかるな」「合點」と、囁き頷きひそ〳〵と、悪事に念を入れ智慧も、同じ穴なる狐武士、心おくの間奥庭へ、立別れてぞ忍び行く。一雙の臂は千人の枕と、賦せし詞の花に寝る、大内之助は熟醉の、胡蝶の夢や現なき。傍に瀬川は人知らぬ、心に思案ありそ海、深き思ひにかきくれて、寝られぬ儘にかたへなる、硯引寄せ細々と、書取る筆の歩みさへ、強からぬ文の男文字、う〳〵に引かへて、浮世の義理にからまるゝ、思ひは紙や知りぬらん。「しをりしをり」も忍び聲、アイと返事も長廊下、「おいらん何でござりんす」と、廓の訛も可愛らし。「アヽコレ大きな聲しやんな」と、云ひつゝ傍に氣を配り、何かひそ〳〵さゝやけば、うなづき呑込む氣轉者、袖に隠して走り行く。望月の、影に引くてふ夫ならで、闇を便の駒澤は、道の枝折を先に立て、瀬川に忍び逢ふさかの、關の角戸を押開けて、差足抜足忍び來る。それと見るより正體なき、殿の寝息を窺ふ瀬川、そつと立退き駒澤に、さゝやき渡す返事の文、いつの間にかは岩代が、一間の内に窺ふとも、二人はいざやしら紙の、封押切つて口の内、讀めぬそぶりと岩代多喜太、「ヤイ不義者見付けた動くな」と、言ひつゝ一間を駈出づれば、二人は恂り大内之助、「不義者待て」と刎起きて、刀するりと瀬川が肩先、ばらりずんど切下げられ、アッとばかりに倒るゝ深手、見向もやらず短慮の義興、「駒澤覺悟」と切りかゝるを、飛びしさつて

めそ櫻花、けふばかりとぞ盛をも見め。サとつくりと思案して、車返しの其花を、散らすか咲かすか二つ一つ、マ色よい返事を待つてるる」と、花に心をよそへ歌、詞殘して駒澤は、一間へこそは入りにけり。瀨川は跡を見送つて、暫し詞もなかりしが、花打眺め獨り言、「心ありげな花の譬、アノ掛物になぞらへて、ちらさぬ樣との詞のはし、手折るとも人なとがめそ櫻花と古歌を引きしは、ハテどうがな」とばかりにて、散りくる花の雪よりも、解けぬ思に打傾き、思案に暮れし折からに、禿しをりが走り來て、「申し〳〵太夫樣、助樣がさつきにから、待ちかねてでござんす。早う座敷へ來なんせいな」「ヲヽ嘸尋ねて居さんせう、ドレ行きやんしよ」とかい立てど、すまぬは胸の憂き思ひ、心は摸稜の手を引かれ、奧の座敷へ入りにけり。樣子立聞く岩代多喜太、一間を出づればこなたにも、窺ひ出づる赤星運八、「岩代樣」「シイ、聲高し運八。新參の駒澤め、てつきり諫言と思ひの外、踊狂うて倶に放埓、合點行かずと物陰より、窺ひ聞けば兼てより、此大磯へ入込み、瀨川とも馴染の樣子、二人打寄りじやらりくらり、花の譬はどうやら氣ぶさい。いよ〳〵不義に極らば、こつちの爲には幸究竟、放埓之助に毒を吹込み、只一討にきやつが寂滅」「ムヽ成程々々、趣向の段取あつぱれ妙計。ガ若し其手で行かぬ時は」「ヲヽ其時は、コリヤかう〳〵」と耳に口、「ムヽスリヤ松が枝より、油斷を見濟しどつさ

そもじは眞實殿様を大切に思ふ氣か、若し又外より根引せうとあれば、其方へ行く心か、所存の程が聞きたい」と、様子ありげな詞とは、思へどわざとそらさぬ顔、「ヲヽ駒澤様とした事が、私が氣を知つて居て、いろ〳〵の探り言、殿様と私とは、初對面の其日から、水も洩さぬ二人が中、たとへ死んでも中々に、變る心はござんせぬはいな」「ホヽ、ヤあつぱれ貞女。其頼もしい心底を見込み、頼入れたき子細あり、何と頼まれては下さるまいか」「コレハ又改つたお詞、數ならぬ私なれど、身に叶うた事ならば」「アノ頼まれて下さるぢやまで」「ヲヽくど。さうしてお頼とはえ」「ホヽ、頼といふは外ならず」と、ずんと立つて床の間の、花生の櫻抜取つて、瀬川が前に差出し、「コレ此花は車返し、櫻の數も多き中、取分け人の賞翫するは、色香の妙なるばかりでなし、散らさば清き花の本性、譬へていはゞそなたの姿。又アレアノ床の掛物は、定て聞きも及びつらん、唐土の玄宗皇帝、御寵愛の楊貴妃と、沈香亭に引籠り、しめてからんで横笛の、音に聞えし二人が中、天に在らば比翼の鳥、地に在らば連理の枝と、契り合うたる睦言も、果は馬嵬が憂き別。まづそのごとく此花も、千世も連理の榮をと、思ふにかひもあらしといふ、妨に逢ふ時は、枝に別れの落花微塵。アあつたら花を散らさうより、枝を分つて日陰に生けられ、仇に吹きくる嵐をば、よける思案が、サありさうなもの」「ム、そんなら連理の榮を捨て」「ホヽ、手打るとも人なとが

敷でわつさりと呑直さう。駒澤も跡からこい」と、いふもしどろに立ち給ふ。岩代は佛頂面、「イヤ武藝の外は心がけぬ身ども、以後は舞でも稽古して、太鼓持の仲間入を致さう」と、何がなあたる惡體口。瀬川はそれと目配せに、新造禿は義興公、手引き袖引き奥の間へ、打連れてこそ入りにけり。照りもせず曇りも果てぬ春の夜の、月に榮ある庭櫻、そよ吹く風に誘はるゝ、花の吹雪を打興じ、詠め入つたる駒澤が、目元ちらつく醉心。こなたも同じ酒機嫌、所體崩して傍に寄り、「イヤ申し駒澤様、助様の無理じひで、お前も定めし醉はしやんしたであらうな。マア醉覺しに一ぷく」と、煙管にちよつと吸ひつけ煙草、是も勤の愛想かや。「コレハ〳〵忝い。當時全盛の君様が、お志の此煙草、イヤモ祿知行にも勝つた賜、取りあへず賞翫致す」と、押戴けば、「ホヽヽ人を術ながらした云ひ様。かねてお前は此里へ、忍び〳〵に通はしやんして、多くの女郎衆に詩文の指南。助様へは沙汰なしに、私も拙い文章の、添削受けしこなさんが、初めてけふのお目見え。知らぬ顔はして居れど、日頃短氣なアノ殿様、ひよつと荒氣は出まいかと、心の内で幾瀬の案じ。されども物馴れたお前ゆゑ、酒ぶりやら舞の手で、それはそれはきついお氣に入りやう。是からとても、お傍放れず、お顔見せて下さんせえ」「コレハ〳〵御深切忝い。イヤモ萬事不骨の田舍者、お引廻しを頼み入る。ガそれは格別、イヤナニ瀬川殿、

う」「ヲ見事ぢや、押よう」「ハ、ア、コハ有難き仕合」と、又引受けて呑みほす酒量。大内之助も興に入り、「テ扨氣味のよいやつ。馴染の爲其盃を多喜太へさせ」「畏り奉る。然らば失禮ながら岩代氏」「エヽめつさうな〳〵。身どもは朝夕殿に付添ひ、榮耀榮花の酒びたし、餓鬼が水見た樣に、此大盃では中々いけぬ」「ア、イエ〳〵岩代樣、殿さんの指圖、駒澤樣のさよしやんした盃呑ましやんせねば卑怯でござんせう」「ヲヽさうでござんす。サア〳〵太夫主の云はんすとほり、卑怯云はずとおまへも一つ呑ましやんせ」と、無理につがれて顏しかめ、「エヽ胴欲な者ども」と、つぶやきながら一口二口、「フル〳〵、中々むいきには呑まれぬはい」「ハハヽヽハレ、口に似合はぬ弱いやつ。ヤイ駒澤、岩代が呑みかねをる、何ぞ肴をして取らせ」「ハヽア御意ではござりますれど、御前では餘り恐れ」「イヤ〳〵苦しうない、サア〳〵所望ぢや〳〵」「ハア然らは御免」と立上り、扇をしやんと身の構へ。ウタ「テモ扨もわごりよは、踊子が見たいか、踊子が見たくば、北嵯峨へござれの。北嵯峨の踊は、對の烏帽子をしやんと著て、踊るぶりが面白い。吉野初瀨の花よりも、紅葉よりも、戀しき人は見たいものよ。諸所お參りやつて、夙う下向召されと、かをゑちやか負うて參らしよ。ハヽヽヽ、尾籠の段は眞平御免下さりませう」「ヲヽ中々出かす〳〵。ナント太夫、よい酒の相手が出來たではないか。此上は奥座

申上げ奉る。此度伯父了庵病氣に付き、拙者に家名を讓り跡目のお願ひ、後室樣の御免は蒙りながら、未殿樣へ御目見え仕らねば、家老中へ願ひを上げ、是まで推參仕つてござります」「アコレ〳〵駒澤殿、鼠取る猫爪隱すと、詞を餌に殿へ取入り、古手な術の諫言申さうといふ下心で御座有らうがや」「コハ迷惑なる御疑ひ、拙者め片田舍に生育ち、遊所とやら廓とやら、終に見たこともござらねば、一つには御目見えの御願ひ、又二つには暫時なりとも、君のお傍に相詰め、御酒のお間でも仕らば、生涯の本望と、お呵りも顧みず此の仕合。岩代殿何卒よきに御取なし、偏に賴み奉る」「ヤ、コリャ面白い。見事御身がお傍に相詰め、アノ御酒のお間をするぢやまで」「イヤモ不調法ながら」と、案に相違の受答、工合違ひに岩代は、呆れて詞なかりけり。大内之助は機嫌顏、「ホヽ、ういやつ〳〵。治郞左衞門盃くれう」「ハヽ、ハア」「アレ〳〵皆さん聞かしやんしたか、又諫言とやらでこはいめ見るのかと思うたに、テモ粹なお方。衣紋付なら物ごしなら、どこやらのお方とは雪と墨。ドレわしがお酌せうかいな」「エヽ、コレ逢坂さんのまんがちな、あなたがお酌は此蝶山」「ハヽヽ、、コリャ最早悋氣か。取置いてつけ〳〵」「アイアイ。サア申し駒澤さんとやら、一つ呑ましやんせいな」「ハヽァ然らば頂戴仕る」と、猶豫もなく大盃、たんぶと受けてすつと乾し、「ハアなか〳〵結構なる御酒、シテ此盃はいかゞ仕りませ

意見しても、けもない事〳〵」「サ所を諫る臨機應變」「アヽくどい〳〵、命のかけがへが二三十あらば知らぬ事、慮外申さば、コリヤ五郎正宗」「ハヽア天晴大丈夫。其お心を見る上は、太夫どの始め拙者めまで安堵仕りました」「イヤコリヤ岩代、行燈より燭臺をくわつと點させ、踊を始め、駒澤めを呼出せ」「ハヽア委細承知奉る。ソレ女子ども、早く踊を始めさせい。家來衆は駒澤を呼出し召され」と、いふに心得花車仲居、[illegible]酒宴の設けとり〳〵に、既に踊を始めける。

ウタ ヤア面白の四季の眺や。春は上野の花盛り、雲にかけらふ兩國の、涼の花火星下り。秋は賑ふ御殿山、山王堤に降積る、雪の景色も面白や。音頭を囃す三味太鼓、手振揃への花がさや、かざす姿の花紅葉、お召によつて阿曾次郎、今は駒澤次郎左衛門と、名も改る曠小袖、おめず臆せず入來れば、豫て指圖を受けたる踊子、右よ左とさゝゆるを、寄らずさはらずよけ通す。夫と尻目にいは代多喜太、「駒澤殿、御前なるぞ、扣へさつしやえ」「ハヽはつ」と飛びしさり、故實を正し平伏す。大内之助はもつれ舌、「駒澤了庵が跡目、次郎左衛門とはお手前な」「ハヽア御意の如く駒澤治郎左衛門め、初めて御機嫌麗しき御尊顏を拜し奉り、大慶至極に存じ奉ります」と相述ぶる。「ムヽ顏を上げい」「ハヽハア」「チヽ田舍者にはよい男ぢや。ヤイ儕此度參りしは、予が遊興を諫言の爲か」「アヽイヤ全く以て」「然らば又何の爲」「ハヽア恐れながら

ぬ、モウとうに御迎ひに遣しました、頓てお出でござりませう。ドレ私は勝手へ參り、御肴の指圖して置きませう」と、肩から爪の長廊下、すべりちらして走り行く。引違へて赤星運八、嚴つがましく入來り、「コレハ〳〵岩代氏、萬事御苦勞に存じます」「ヲ、運八殿、今日のお役目御苦勞々々々、シテ放埓之助はまだ參られませぬか」「サレバ〳〵、大門口の茶屋で、彼傾城瀬川といちやくちや〳〵。餘り埓が明きませぬから、身どもは先へ參りました」「ヲ、それこそ究竟、チト其元に申談ずる子細あれど、爰は端近、萬事は奥にて」「左樣々々」と打うなづき、奥の一間へ入りにけり。ウタ誰も知るまい二人が中は、筆と硯が知るばかり。數多の藝妓に圍まれて、大内之助義興は、色と酒とに亂れ足、千鳥が崎の屋鋪より、けふも廓の色通ひ、現たわひもなり振も、夫と多喜太は立出でて、「コレハしたり我君、明暮アノ掛物の繪の如く、引付けてござりながら、大門口のお契りは、餘り御念が入り過ぎました」と、いふに義興につこと笑ひ、「エ、不粹なこといふな〳〵。それは格別、聞けば國元から來た新參の田舍者、身に目見えを願ふ由、豫ての趣向の通り、踊最中へ呼出し、場うてをさすが一興。ナ、用意がよくば踊を始めい〳〵」「ハ、ア畏り奉る。しかし一家中の內より抽んでて來る程の駒澤、もし御諫言申す時は」「ア、又しても諫め〳〵と、此仙境へ通ひ初めては、釋迦如來が五百羅漢連れて來て

乳母浅香、弓之助も氣は顚倒、勝はした若黨中間、呼びたて〳〵家内中、上を三重下へとかへしける。

大磯揚屋の段

素見ぞめきでむく鳥が、むれつゞきつゞき格子先、叩く水鷄の口なめ鳥が、ヲヽちつとも囀るまいとの春霞、諷ふ聲々浮立つて、たそや行燈の影光る、戀と情の中の町、分けて榮える松葉やの、座敷は絹でふき磨き、目を驚すばかりなり。此家の亭主仁左衞門、袴引上げ走り出で、「ヤレ〳〵いそがしや〳〵、女子どもはまだ粧しまはぬかい。エヽべん〳〵と埒の明かぬ。けふは助大盡の御趣向で、廓中の色達を惣揚にして、大踊りとの御注文。コリヤ女ども、花も生け直さし、爐の炭もついでおけ。コリヤ〳〵やり手ども、料理場の拵へはえいかと問へ。ヤイ男ども、藝者衆急きにいけよ。皆えいか〳〵。アヽしんど、人を使ふのも大抵の事ではない」と、たくしかけたる八百萬、かみの髷さへうなづくばかり、天窓振立てしやべりける。岩代多喜太奥より立出で、「ナント亭主、踊の拵へ諸事萬端、手つがひはよいか。大かた殿のお成りに間もあるまい、藝者太鼓を大門口まで迎ひにやりやれ」「ハイ〳〵、そこに如才はござりませ

め、封じる隙も跡先に、心おくより聲高く、「御寮人樣、深雪樣」と、尋ぬる乳母の淺香の聲、見咎められじと文さし置き、庭へおりしも夕暮の無常を告ぐる鐘の數、六つ四つ五つとぶ烏、かはい〳〵の聲々も、身にしみ渡る秋の風、ふるふ膝ぶし踏みしめて、心も足も飛石傳ひ、裏道さし足落ちて行く。かくともしらず乳人淺香、手燭たづさへ立出でて、「深雪樣々々々、深雪樣はいづくに」と、云ひつゝ見廻す料紙のそば、落ちたる文を取上げて、何心なく見て惘り、「コリヤ深雪樣の書置。奥樣、申し旦那樣」と、呼はる聲に弓之助、操も倶にかけ出づれば、淺香はひろげし文さし出し、「コレ申し深雪樣が身を投げるとの此書置」と、半分聞かず、「ヤア〳〵〳〵書置とは氣遣ひな」と云ひつゝ操はふみおつとり、「何々みづから事、宮城阿曾次郎殿と云ひかはしり〳〵へば、二度の夫をむかへり〳〵ては、貞女の道立ちがたく、不孝ながら淵川へ身を投げり〳〵」と、讀む間もせき立つ弓之助、「南無三寶しなしたり。しかしかよわき女の足、遠くはよも落延びじ、關助はどこにをる、早く〳〵」にかけ來る奴、「お旦那、何の御用でごはります」「コリヤ〳〵、娘深雪が身を投げんとて忍び出でしぞ、若黨下部に手分けして、跡を追かけ取止めよ」「エヽ、ソリヤ大變。かういふ内も氣遣ひな、朋輩どもへは淺香どの云ひ付け召され。下郎は直に」と尻引からげ、せきにせき助かけり行く、俄の騷動泣くにも泣かれず、うつむく操

聟にならうとの押付業、おどしを見せて歸したが、又どのやうな難題を云ひかけうも知れぬ。邪魔の入らぬ内縁組の取極が肝心。淺香とも談合して、今宵中に返事しや。可愛いそなたに何の悪い事すゝめうぞ。只何事も親々に任して、早う返事を待つて居るぞや。ドレ其間に我夫と祝言の相談せう」と、詞を盡し母親は、奥の一間へ入りにけり。跡見送つて娘氣に、こらへ〳〵し溜涙、はつとばかりに泣きたさも、母に知らせじ聞かせじと、袖かみしめて忍び音に、絶入るばかり歎きしが、やう〳〵に顔を上げ、「エヽ聞えませぬ母様、常々のおしめしに、貞女兩夫に見えずとの、教を守れとおつしやつた、そのお詞に引きかへて、阿曾次郎さんと私がわけ、知つて居ながら二人の夫、持てよとは胴欲な。どうした縁か知らねども、思ひ初めた阿曾次郎様、思ひきらうと思ふほど、いやます思ひ身の因果、生きてなま中うき事を、見んよりいつそ身を投げて、死んで未來で添ふが樂しみ。勿體ないは父上母様、先立つ不孝はゆるしてたべ。又二つには乳母淺香、此年月の養育の、恩もおくらず死ぬるのも、浮世の義理とあきらめて、堪忍してたもれや」と、いふもあやなき袖の雨、泣く〳〵硯取出して、あかぬ別をする墨も、涙に薄き親と子が、歎きの種をまき紙に、書置く鹿の命毛も、やがて切れ行くはかなさに、筆の歩みも震はれて、はかどりかぬる文のあや、涙ながらに書きとゞ

のもとゐ、それゆゑそなたによい聟を呼迎へる分別」と、半分聞かず、「ム、アノわたしにかへ」「ヲイなう」「イエ〳〵わたしやチト様子有つて、殿御持つ事はいやでござんす」「ヲ、さういやるは宮城阿曾次郎殿へ心底が立たぬと思やるか」「エ、」「サかういへば惆りしやらうが、いつぞや宇治の螢狩に、宮城阿曾次郎殿と云約束をしやつた噂は、娘どもにうす〳〵と聞及べど、云出すはけふがはじめ。どうぞ其阿曾次郎殿に添はしたいとは思へども、肝心の國所は知れず、何所を證據に尋ねうやうもなし。然るにけふ弓之助殿登城の折から、大内家より御使者駒澤治郎左衛門といふ人、器量骨柄揃ひし天晴の武士と、殿様には殊の外御賞美あり、秋月弓之助が娘に見合し、跡目相續させよとの御意。夫もよい聟と氣に入り、御受申して聟舅の盃まで取りかはして歸られし、娘にとくと云聞かし、得心させよとの、殿様のお仲人と云ひ、娘思ひの爺御の氣に叶うた聟がね。様子といふは此事ぢやわいなう」「エ、そんなら殿様のお仲人で」ハアはつとばかりに心の當惑、何と返事をせん方も、なみださしぐむばかりなり。「ヲ、顔を知らねば案じやるも無理ならねど、聟えらみの夫、何のそなたの氣にいらぬやうな聟をとられう。殊にお上の御意のかゝつた晴の縁組、今更變がへのならぬ聟殿、よう得心してお受申しや」「アイ」「ヤ」「アイ」「あいとばかりではすまぬわいなう。最前も意地惡の蔗柄傳藏が來て、是非

なけれども、御前の仰といひ、日本一の上々聟、拳を以て大地を打ちはづすとも、娘の氣に入るは定のもの、安堵して娘に云聞かせ召され。ヤレ〳〵餘り悦ばしさに、思はず酒を過し餘程酩酊、ドレ暫時一休み」と、刀を提げて機嫌顔、居間をさしてぞ入りにけり。跡に操はとやかくと、娘の心はかりかね、千々の思案にくれ告ぐる、柱時計の音さへも、胸にどきつく物案じ、差うつむいて居たりしが、煙管相手の獨言、「今の夫の詞では、御上の御意にかよつた縁組、娘思ひの我夫が、見極めての云約束、麁相のあらう樣はなけれど、只案じるは娘の事。いつぞや宇治の螢狩に、見初めた人は宮城阿曾次郎殿と婢どもが噂、立花桂庵の仲人で、連れて來たは賣僧者、どうぞ元の阿曾次郎殿の行方を尋ね、娘に添はしてやりたいと思へども、肝心の所を知らず、どうかかうかと思ふ矢先、さしかゝつた縁結び、一旦夫が御前にて、お受申した上からは、今更どうも變がへならず。此上は娘に譯を云聞かせ、得心さすが上分別。さうぢや〳〵」と打うなづき、「娘々」と呼ぶ聲に、「アイ」と返事はしながらも、晴れぬ思ひにくよ〳〵と、打しをれたる娘の深雪、奥より立出で傍により、「母樣何の御用」とうかゞへば、母はにつこり、「チヲけふは髪のかざりもけうとう好うできました。思ひなしか氣合もよささうで、マア嬉しい。シタガ娘や、今呼んだは外の事でもない、背たけ延びたそなた、いつ〳〵までも一人置くは病氣

つて」と、始の擬勢引きかへて、挨拶さへもろく／＼に、先がけられし目なし碁の、片手打たれし如くにて、すご／＼として立歸る。かくて時刻も押移り、常にかはつていそ／＼と、立ちかへる秋月弓之助。それと操は手をつかへ、「コレハ／＼只今お下りか、いつにないお隙どり、御前の首尾はいかゞでござります」と、尋ねに機嫌のうちにつこり、「イヤモ悦び召され、お上の首尾は極上々。此度國元の一揆を相鎭めし事、殿には一しほ御賞美あつて、先地の上に二百石の御加增。イヤモ殊の外の御機嫌にて、御悅びの盃まで下された。然るに大內家の家臣、駒澤次郎左衞門といふ武士、使者に來つて共に相伴、盃の取やりの內つく／＼見るに、人品骨柄天晴の若者、しかも文武兩道の達人なれば、殿も甚御賞美あつて、汝が娘の聟に致せよとの御意。かの駒澤も承知の體ゆゑ、諸士の手前面目是に過ぎず、御前に於て堅めの盃まで取りかはし申した。娘には過分の聟、おことも安堵しめされ」と、いふに操は、「ソンナラ殿樣のお仲人で」「ヲヽサ大名のお仲人にて聟をとる娘は大仕合せ者、聟の顏を見をつたら、嘸悅びをらう」と、父の悅び母親は、娘の心はかりかね、案じる胸もそれぞとは、明けていはれぬ此場の思ひ。「イヤ申し我夫、殿樣の御仲人とは申しながら、娘にもとくと云聞かした上で、云約束はなさらないで、あんまりさつきやくではござりませぬか」「イヤサ某も其氣のつかぬでは

と、權威を鼻にてつぺい押、小面憎さも女氣に、じつとこたへて、「ホヽヽヽ、コレハマア、見る影もない娘を御所望に預るは、何ぼうか御嬉しう存じますれど、緣の事は親我意にもなりませぬ。殊に夫も留守なれば、只今と申しては」「イヤサ、弓之助殿は留主にもせよ、女の子は母次第、其元さへ得心あつて、御息女へお勸めあらば、ツイ埒の明く事。當時殿の御氣に入りのお蘭の方は拙者が姊、其弟たる身どもを聟にとられなば、弓之助殿の肩身もいかゝると申すもの」と、半分聞かず、「イヤ申し傳藏樣、身不肖にはござりますれど、娘の緣に連れて出世を望むやうな弓之助ではござりませぬ。其一言を弓之助承らば、たとへ娘が得心致しても、此緣組はお斷と申すは定。マそれはともあれ、此頃娘は病氣に取合せますれば、本復の上それとも談合いたし、否やの御返事致しましよ」「ヤア ぬけ〳〵と其手はくはぬ。誠病氣か病氣でないか、此上は身が直々に改めん」と、ずんど立てば操もせき立ち、「ヤア舌長なり傳藏殿、間狹なれども此屋鋪は弓之助が城廓、ならば手柄に踏込んでお改めあれ。女ながらも武士の妻、お相手に成りませう」と、云ひつゝ長押に掛けたる長刀、おつ取つて鞘振りはづし、小脇にかい込む身構に、さしもの薦柄仰天し、「アヽコレハ又短氣千萬、改めて惡くばさう云うて濟む事、達てと申すでもござらぬわけ。誠息女が病氣ならば、隨分お氣を付け召され。緣邊の儀は又追

よく〳〵結ぶの神にさへ、見放されたる憂き身かと、心の內に口說泣、女心ぞいぢらしき。「ヲヲ何をくよ〳〵思召す。親旦那樣のお歸りに間も有るまい、是から奥の離れ座敷で、楓を相手に琴の組でも遊ばしたら、お氣慰にも成りませう。サア〳〵お出で遊ばしませ」と、妐どもに誘なはれ、心浮かねどしを〳〵と、是非もなげ首立つて行く。かゝる折から玄關先、「蘆柄傳藏樣御入」と、呼はる程もあら〳〵しく、疊ざはりも無骨の蘆柄、肩で風切る勿體顏、押柄らしく打通る。かくと聞いてや主の妻、操は出迎ひ會釋して、「コレハ〳〵傳藏樣、ようこそ〳〵。先々あれへ」に上座に著き、をさめた顏に操は手をつき、「夫弓之助殿は殿の御召にて登城の留守、それ故お出迎ひも申しませぬ。シテ只今は何の御用」と、尋ねに傳藏扇を鳴らし、「イヤ只今參る事別儀でござらぬ、當家の息女深雪殿、いまだ定る聟がねもなきよし、幸ひ拙者も無妻なれば、殿へ內々緣談の儀を願ひし處、似合はしき儀と有つて、お蘭の方を以て、弓之助殿へ其越申渡されしに、有無の返答にも及ばず、病氣と云立て御暇を願ひ、國を立退かれしゆゑ、緣談の儀は其儘に相成りしが、此度歸參召されしゆゑ、度々仲人をもつて緣邊の事を申入るれども、酢のこんにやくのと埒のあかぬ返答、それゆゑ今日は直々推參致した。御前まで願ひし緣談違變あつては、此傳藏が武士が相立ち申さぬ。否や應の一口商ひ、只今返答承らう」

が覺めぬやう」「心得ました」と立上れば、阿曾次郎は肩車、あなたの船へ乘移らす、音に目覺す船頭ども、「ヲヽ地嵐が吹出した。碇を上げよ、帆を卷け」と、騒ぎ出せば、「なう悲しや」とあせる内、船は次第に遠ざかる。コハ何とせん、かとせんと、あせるはずみに阿曾次郎が、船へ投込む扇の別れ、跡しら浪を隔ての船、つながぬ緣ぞ三重是非もなき。

弓之助家鋪の段

爰に藝州岸戸の家臣、秋月弓之助が一構、生得風流文武に秀で、人に勝れし武士の、都に蟄居しありけるが、國の亂れに召歸され、殿の仰を承り、事治りし其後は、昔に勝る歸り咲、いと美々しくも榮えけり。家の接木の一人娘、深雪は思ふ其人に、たまたま逢ひし其甲斐もなみの明石の別れより、國へ歸りし其日より、只ぶらぶらと物思ひ、こしもとはした召連れて、一間の内より立出づれば、中に早枝がしやくり出で、「申し深雪樣、此節しめじめと、物思はしいお顏持、チト外でも見てお氣をお晴しなされませ」「ヲヽようようてたもつた。さりながら、私が心のしんきさは、月雪花のながめにも、勝るいくせの物思ひ」過ぎし明石の浦浪の、うらめしい追風のかぜ、島がくれ行く戀人の、船をしぞ思ふ思ひをば、誰にいはうぞ語らうぞ。

遁れぬ主用、猶もつて女を同道しがたき入譯、有る緣ならば添ふ時節も有らう。かうして居ては人の咎め、サアちやつと元の船へ乘つてたも」「エヽそりや聞えませぬ阿倉次郎樣、添はれる時節もあらうとは、當座遁れの捨詞、お氣に入らずは打明けて、包まずそれというてたべ。もしもおまへに添ふ事の、ならぬ時には淵川へ、此身をなげ死にまする。ふたゝび外の夫迎へ、せぬを誓ひし身の潔白。さらば」とばかり水底へ、既に飛ばんと立上るを、あわて驚き抱きとめ、「コレ待つた、早まるまい」「イエ〳〵放して殺して下さんせ」「アヽぜひもなし。夫程まで思ひ詰めた娘心、見殺しにマどうせられう。不義徒と世の人口、誹らばそしれ連れて退く。コレ盡未來まで女房ぢや」「エヽ嬉しうござんす忝い。そんなら願ひを叶へて下さんすか」「ヲヲ武士の詞に二言はない。さりながら、此儘に連れて退けば親達の、もしや海川へも身を投げたかと、お歎きあらんは定の物。委しい樣子をつい一筆」「テヽよういうて下さんした、私もさう思うて居ます。ガどうぞ料紙をかして下さんせ」「ヲヽ心得し」と懷紙、腰をさぐつて、「南無三寶、そなたを抱止める拍子、海へ何やら落せし水音、旅矢立をはめてのけた。アヽどうしたらよからうぞ」「ヲヽ夫なら待つて下さんせ、二親初め付々まで、旅草臥の寢入ばな、そつと元船へいんで、一筆書置してきませう」「ヲヽそれよからう。ガ、コレ、必ず物音させて、親達の目

わたつみの、浪の面てる月影も、明石の浦の泊り船、風待つ種のつれ〴〵を、慰めかねて阿曾次郎、艫先に立出で月かげに、四方を見はらす氣晴しの、たばこの煙吹きなびく、船路の旅ぞ物淋し。そばにかゝりし大船は、秋月弓之助が歸國の乗船、乗人も水主も船草臥、前後も知らぬ高鼾。娘深雪は只一人、目さへも合はぬ戀人を、思ひこがれてうつ〴〵と、戀に心をつくし琴、せめて慰むよすがもと、かきならしたる糸しらべ。ウタ露のひぬ間の朝顔に、照す日かげのつれなきに、「テ合點の行かぬ。アノ謳は過ぎつる宇治の螢狩に、秋月の娘深雪が扇に某が、書いてあたへし朝顔の唱歌、聲さへ深雪に生寫し。ハテいぶかしさよ」と見上ぐれば、あなたも見下すかき立の、顔はまさしく、「深雪殿ではないか」「ヤア阿曾次郎様、逢ひたかつた」と、我を忘れて乗りうつるを、抱きとりて口に手を當て、「聲が高い深雪殿、思ひもよらぬ今の對面、何故に此所に」「さればいな、宇治でお別れ申してより、モ片時忘れず泣暮す内、國元に騒動起り、父母共に俄の旅立。所詮逢ふ事叶はぬかと、何ぼうかなしう思うたに、爰で逢うたは盡きせぬ縁、どうぞ此身を何國へも、連れて退いて給はれ」と、ひつたり抱きつきの夜の、影も隔てぬ比翼鳥、放れがたなき風情なり。阿曾次郎も心を察し、「ヲヽ嬉しいそなたの志、忘れは置かぬさりながら、そなたを今連退いては、某が武士道立たず。殊に此度伯父の頼みにて

に及ばん氣色、此騷動をしづめん者、弓之助より外になし、主君の後悔頼みの御狀、片時もはやく歸國あつて、賢慮を廻らしお鎭めあれ。我は此儘國元へ、心もせけば」と云捨てて、元來し道へ引かへす。弓之助は大いに驚き、狀押開き讀下し、「誠に殿の御自筆、先非を悔みし御頼の文體。ハヽア勿體なし〳〵、主家の大亂見捨てん樣なし。ヤア〳〵女房娘も歸國の用意、關助參れ」の詞の下、はつと答へて駈出る奴、「お旦那、何の御用でござります」「ヲヽ火急に國元より御召の御狀到來せり。今日中に家内を片付け、今夜すぐさま伏見まで發足せん。心得たるか」と云渡し、奧をさしてぞかけ入つたり。俄の歸國に周章混雜、氣もいら〳〵とせき助が、何からせんと心のもんちやく。かくとも知らず阿曾次郎、歸國の暇餘所ながら、深雪に一目あひの戸を、それともさすが開けかねしが、思ひ切つてそつと入り、「頼みませう」と音なへば、「エヽ此せはしいに何者ぢや」「イヤ宮城阿曾次郎と申す者」と、半分聞かず、「ヤア又うせたか、大馬鹿者」とゆふ暮時、顏さへ見ずに突出し、戸を立て切りし人違へ。樣子知らねば阿曾次郎、いぶかしながら詮方なく、跡の歎きの種ぞとは、知らず知られず 三重 別れ行く。

明石船別れの段

飛んで行きたい顔見たい」と、かたみの扇身に添へて、抱きしめ〱忍び泣、日影待つ間の朝顔の、雨にしをるゝ風情なり。うしろに立聞くめのと淺香、それぞと察し立寄つて、「コレ申し深雪樣、桂庵殿の㢘忽ゆゑ、あはうらしい今の時宜、しんきなは道理々々。シタガお氣遣ひ遊ばすな、此淺香が奥樣へお咄し申し、阿曾次郎殿をきつとお前にお添はし申します。くよくよ思うて病氣やなど出たら、親御樣へ大きな不孝。氣をしやんと取直して、緣と月日を待つが肝心。マア〱奥へ〱」と諫められ、少しは心晴れかけし、袖の時雨の小止して、夕日てり添ふ蔦紅葉、顔あからめて入りにけり。折から表へあわたゞしく、せきにせいてかけ來る武士、音なふ間もなくずつと入り、「弓之助殿〱、弓之助殿御在宿か」と呼はつて、尻居にどうと倒るゝ息切れ、何事やらんと弓之助、押取刀に走り出で、見れば覺えの古朋輩、ぬるみ汲みとり用意の氣付、口に含ませ氣轉の活、ムヽとばかりに氣の付く若者、「ヤア弓之助殿」「ホヽ瓜生主水が舍弟勇藏、あわたゞしき體心得ず。子細はいかに、樣子は何と」はつと勇藏氣を取直し、「されば候、國元には、お蘭の方の威光を假り、成上りの蘆柄傳藏、御前よきまゝ下々へ過役をかけ、金銀を貪りしより事起り、御領内の民百姓、一揆を起し我一と、袖が浦の城廓へ、押寄せ〱追取卷き、無二無三に責立つる。さるによつて御家の騷動大方ならず、早大亂

ぞしやべりける。「ヤアだまれ、まいす者め。コリヤヤイ、うぬら武士を嘲弄にうせたか」と、刀押取りきめ付くれば、祐仙桂庵悔りはいまう、「ア、めつさうな〳〵、全く左樣な者ならず、まがひなしの阿曾次郎」「ヤアぬかすな。うつけ者とは見て取れど、樣子あらんと、窺ふそれがし。ヤア〳〵關助、こやつ摑み出せよ」と、呼はる聲にはつと答へ、走り出でたる奴關助、「ヤアヤアさま〴〵の馬鹿者めら、きり〳〵立つて失せをらう、長居ひろがばぶち放す」と、刀の柄に手をかくれば、「コリヤたまらぬ」と祐仙桂庵、命から〴〵迯歸る。弓之助はにが笑ひ、「ハハヽヽヽハテ扨々世にはうつけたやつも有れば有るもの、たわいなしめに懸つてほつと退屈。關助休みやれ。ドレ一休み」と立上れば、操も共にたばこ盆、提げて一間へ關助も、勝手へこそは入りにけり。寢くたれの、髱のおくれは解きながら、もつるゝ思ひくし〳〵と、深雪がむねの亂れ髮、たれにいふべき方もなく、涙に袖もぬれ緣の朝顏の花打詠め、「どうした事のえにしやら、ふつと見初めた阿曾次郎さま、御國元から急用との、使は戀の障りの雲、晴間の星のたま〳〵も、けふ逢はるゝと思ひの外、待ちこがれたる甲斐もなく、あられもない知らぬ人。ほんに思へばあぢきない、暫し別れのかたみにと、書いてもらうた朝顏の、歌の唱歌も我袖に、涙の露のひる間なき、歎きせよとの歌占か。宇治の螢となるならば、あくがれ出でて夫の傍、

其儘病家も打捨て」「ア、コレ〳〵聟舅初めての對面に、餘り詞が多過ぎる」「アヽイヤ桂庵苦しうない。シテ宮城氏には、娘深雪を知つて居召さるか」「イヤモウ〳〵知つた段ぢやござらぬ。エヽいつぞや當所淸水寺、地主權現の花盛り、病家がなさに見に行きしが、薄雪まがひのぼつとり者、花の帽子に花の櫛、花の姿の花やかさ、首筋元からぞつとして、見とれる内に早下向、下向せうとてお姿を、目にはながめはせぬものを、殘り多さに見え隱れ、此岡崎まで付けて來て、親御の苗字お娘の名まで、聞合す程の心底男と聟入したら朝寢せず、水も汲んだり飯も焚く。あんまけんぺき鍼の療治、料物入らずに仕らう」としやべる度々桂庵は、消えも入るべきじゆつなさに、冷汗流すばかりなり。操は小腹立てながら、なぶつて見んと打ほゝゑみ、「コレ〳〵ふつゝかな娘を、それ程までに御執心ならば、いかにも緣組致さうが、此方は諸藝師範の家柄、詩歌俳諧香茶の湯、其お心がけがござりますか」「有るとも〳〵。歌は彼の、九は病五七は雨に四つ日照、六つ八つ騷ぎいつも大風」「イヤ申し、そりや地震の歌ぢやござりませぬか」「いかにも〳〵自身の作、四か五かは存ぜぬが、灰買よりは糠買が、はるか增つてはけ口がよう、扱茶に於ては、薄茶緣茶栗皮茶、利休茶こげ茶藍みる茶、こゝらが當世十人向。香に於ては線香抹香、沈香五種香、御望次第藥種やにて、隨分利口に買廻しは手の物なり」と

鍋炭を、まきちらしつゝ出で來り、「ア深雪殿のお座敷はもう爰かへ、おりや、恥かしい」と鼻かめば、「エ、そんな初心な事では埒があかぬ。道々も云ふ通り、宮城阿曾次郎を忘れまいぞ」と、云付け置いて門の口、「頼みませう」と音なへば、手襷はづさず飛んで出ず、納戸の内より下女のりん、「どうれ」といふも不性なり。「イヤ立花桂庵御見舞」「エヽ誰ぢやと思うたら桂あんさん、恟りしたがの」「ヲヽ道理々々、顔見たら猶恟りせう。弓之助殿へ下拙が宮城阿曾次郎殿を同道致したと、サヽ傳へられて下されう」と、いふにおりんが心得て、其儘おくへ走行く。下女がしらせに弓之助、衣服改め提刀、操伴ひ一間を出で、「コレハ〳〵桂庵老、大儀々々。宮城氏を同道とや、早速に對面したし。イザ〳〵是へ」に表へ出で、「萩の氏、アイヤ宮城氏、イザお通り」と、しかつべ顔、返事を何といふ仙が、今更どうかしき高く、うぢ〳〵もぢ〳〵入りかぬるを、無理に引張り連れて入る、顔を見るより操はあきれて不審顔、樣子あらんと弓之助、「ナニ桂庵老、宮城氏はいづれにござるな」「エヽ即お目通りにひかへ居られます」「ムヽアノ其仁が宮城阿曾次郎殿とや」「イカニモ〳〵正眞取々ぬく〳〵の阿曾次郎殿。ソレ宮城氏御挨拶」と、いへば祐仙扇をぱち〳〵、「いかにもやつがれが萩野、へヽンへヘン、イヤ、宮城阿曾次郎、此度は不思議の御緣で、御息女の聟になし下されうとの事、聞くと

しやんしたのであろ、しかも戀風といふおもい風を」「ヤアそんならそなた知つてゐやるか」「ヲヽ知らいで何としませうぞいの。楓にうす〳〵聞いた上、おまへの居間に有つた扇、歌の唱歌は朝顏、手跡は宮城阿曾次郎殿」「エヽ」「サ何と違ひはござんすまいがな。其阿曾次郎殿を戀ひこがれ、それゆゑの物案じと、私はとうから知つて居ます。ガ、コレ、お案じ遊ばすな、お前にいうて悅ばす事が有る」と、いふに深雪は傍に寄り、「ムヽ私に悅ばす事とはえ」「サア外でもない、けふおまへに聟樣がござる筈、何と嬉しいかえ」「ヤアわしの聟とはソリヤ何人、わしやそんなこと聞きたうない、云ひ出してたもんな」と、ねぢ向くそぶりつく〴〵見て、「ホヽヽわけも聞かずにそりや何事、出入の醫者桂庵殿の仲人で、くる聟がねは宮城阿曾次郎殿」と、聞いて深雪は二度悄り、「ヤア〳〵阿曾次郎さんがござんすとは、ソリヤほんのことかいなう〳〵」「ヲヽ何のわしが嘘いひませう。ガかういふ内も心がせく」「ヲヽそれ〳〵、そんなら髮も結直し、小袖も相談。サア〳〵サア來てたも」と手を引き立て、悅び勇み納戸口、のれんの内へぞ入りにける。かくて其日も晝過ぎて、隙行く駒のそれならで、岡崎の隱家を、尋ねて爰に來る人は、肩から爪の立花桂庵、似た山聟の祐仙を、「爰ちや爰ぢや」と手招けば、鳥屋の戸あけてちやぼどりの、米見付けたる風情にて、ぱつぱ〳〵と

が彼の阿曾次郎を同道する筈。女どもに申付け掃除萬端云付け召され」と、語る夫の言の葉に、操も心落付いて、「ソレハマア目でたい事、それなればとうからさうとはおつしやらいで、私一人が物案じ。女どもや乳母も云付けて、髪のかざり小袖の色品、問談合もせにやならぬ」「ヲヽそれが肝心。身は圍にて薄茶一ぷく、お身も相伴しやれい」と、夫婦打連れ入りにけり。かくとしら歯の娘氣に、こがるゝ人をくよ〳〵と、思ひつゞけし亂れ髪、過ぎにし宇治のあだゆめも、風に破れし戀衣、深雪は居間を立出でて、あたり見廻し獨言、「ホンニ任せぬ浮世とて、たま〳〵逢うた阿曾次郎様、心のたけを云ふ隙も、情ないはお國の迎ひ、周防とばかり行先の、當所知らねば文さへも、言傳やらん便なく、是程こがるゝ心根を、直に云ひたい知らせたい。逢はれる傳はない事か」と、そのまゝそこに打ちふして、聲も得上げず忍び泣、娘心ぞいぢらしき。始終うかゞふ乳母淺香、納戸の口を立出でて、「コレ申し深ゆきさま、一昨日宇治より戻つてから、何やらしめ〴〵と思ひありげなお顔持、ちひさい時から育てた私、何の遠慮に及ぶもの、あかして云うて下されませ」と、眞實見えし言の葉に、深ゆきは涙押しかくし、「ヲヽ乳母とした事が、何のそなたに隔心があろぞいなう。ありやうは螢狩に、ふつと見初めた、ア、イヤふつと風に當つてから、エヽモしんきで〳〵ならぬわいの」「ヲヽそれは風を引か

名にしおふ花の都の片ほとり、聖護院の町はづれ、風雅を好む一構、主は秋月弓之助、元は藝州岸戸の功臣、暗き主君を諫めかね、仕を辭せし浪人の、身退きたる氣さんじは、作りそだつる朝顏の、世話に心を慰めける。妻の操は一間を立出で、「申し我夫、早朝より花のお世話、嘸お氣が盡きませう、マアお休み」とたばこ盆、夫思ひの眞實心。「ヲ、奥、よく氣が付き申した、さらば一ぷく仕らう。何と奥、身が手作りの朝顏、見事ではおりないか」「さればいな、今朝はいつよりも花がたんと咲きました、が申し此朝顏の花に付いて氣にかゝるは娘の深雪、もう時分のきた者を、一人置くは病氣のもと、どうぞよい聟を取つて、早う初孫の顏見やうとは思さぬか」「ハテそこに如才が有るものか。元身共は岸戸譜代の家臣なれど、當時の主君、お蘭のかたといふ側室に迷ひ、其弟の蘆柄傳藏といふ匹夫を取立て高祿をあたへ、剩へお蘭の方のすゝめによつて、我娘に傳藏を娶せよとの儀。系圖正しき娘深雪、匹夫下郎の成上り者を聟に取るが胸惡く、亂邦には入らずといふ古語に從ひ、仕を辭退し浪人住居も、元はといへば娘が不便さ。それゆゑあれ是と聟を聞合せしに、立入の醫者立花桂庵、似合の緣談申來りしゆゑ、とくと筋目を聞糺せば、是も元は中國武家の生れ、名は宮城阿曾次郎とやら、人品は申すに及ばず、萬能に達せしとの儀。それゆゑまづ客分に呼迎へる約束致いた。今日は吉日ゆゑ、桂庵

うか」「イヤモお娘のほれるに違なくば、拾五兩が廿兩でも入用々々。即是に十五兩」「ム、さらばさしあげのしたし物」と、鍋炭渡し金請取り、相圖のしはぶき咳ばらひ、それとおよしが汲んで出る、目元の鹽茶さし出せば、祐仙は是幸ひ、惚藥の試みと、振りかけられておよしはうつとり、「チヽいつの間によい殿ごにおなりだへ、つんともうわしやあなたを我當かと思うて、首筋もとからぞつとして、わたしや戀風引いたさうな」と、傍へ寄添ひ祐仙が、ふと股ふつつり。「アイタ、アイタヽヽヽ、エヽ何とする」「エヽ何ぢやいな、何とするとは下心の惡い。目もとなら鼻付なら、どつこに一つ惚氣のある、あた好らしい」ともたれしは、達磨人形にのら猫の、しなだれ付きし如くなり。祐仙は藥の利目と、一途に思ふ悅び顏、「テ妙藥も有ればあるもの。終に女にかやうな事、臍の緒切つて覺えぬやつがれ」「エヽ何ぢやいな、人にばつかり氣をもませ、藥の咄し聞きたうない。内太股がうぞついて、こたへられぬ」といだき付く。「是はあんまり利過ぎた。桂庵、賴む」と迯廻るを、やらじと追うて行くふごじり、にげる出しりに桂庵も、腹をかゝへて「ハヽヽヽハヽヽヽ」三重したひ行く。

岡崎の段

目早く、「ム、およしえ、其鍋おれに賣つてくれまいか」「エ、めつさうな。これは内の菜鍋、しかし直打次第で賣りもせうが、何ぼに買うてぢや」「ム、張込んで銀一に買をかい」「めつさうな」「そんなら貮朱々々」「イエ〱もそつと買うた〱」「エ、そんならてんぽの皮、壹歩々々」「ム、壹歩なら負けても上げう。が此鍋買うて何にさんす」「何にせうとも、細工は流々仕上を御らうじ」と、小柄を拔いて丸盆へ、穴のあく程鍋炭こそげ、手早く紙に押包み、「是でよしよし、サア一歩。必ず此事他言無用。又外に頼む子細、高うは言はれぬ、コレかう〱」と耳に口、「ム、そんなら其鍋炭をふりかけたら惚れたふり」「コリヤ聲高し、内に忍んでよい時分に、首尾よういたら又壹歩。ハテ何にもいふな」と兩人が、うなづきあうて内へ入る。そり立あたまの鳥毛立ち、延びた鼻毛を拔出しの、髷よりたら〱油汗、いきせき戻る萩の祐仙、桂庵見るよりあふぎ立て、「イヤ似合ふたり〱。とんと片岡我當生寫し、奇妙々々。シタガ、少しの難は鼻が獅子舞、目が下り目、是ばつかりが玉に瑕」「ム、ひよつと彼のお娘が嫌ひはせまいか」「チツトそこらはぬからぬ、下拙が家傳の惚藥、卽爰に所持致す」「ナニそれが惚藥とな」「中中。海に千年山に千年、三千年功を經しいもりの黑燒、ぱつ〱と振りかけると、小野の小町の樣な堅造でも、ずる〱べつたり惚れるが妙。併し代金は拾五兩、お望なら御手に入れませ

テ埒のあかぬ歩行やう」と、見やる向ふへ萩の祐仙。それと見るより、「オヽイ〳〵祐仙樣、先刻より白鷺が火事見るやうに、首長うして待つてゐるに、さりとては戀路に不精」といふに祐仙腰打かけ、「イヤモやつがれも心は急いたれど、よんどころなき朋友に出合ひ、端の寮の書畫の會、それから快々堂で下らぬ薄茶一服、やう〳〵抜けてたつた今。何は扨置き、豫て尊公に頼んだ秋月弓之助の娘、仲人せうと尊公の請合、仕拵料の三十兩、ソレ相渡す」と、出せば受取り懐中し、「ハァ慥に落手。先方にも承知なれど、爰に一つの難儀といふは、先方は武家方ゆゑ、醫者を聟にはとらぬ樣子。元月心といふ出家が、宮城阿曾次郎といふ男を仲人せうと云入れ、大抵二親の注文には合うたが、下拙は彼の秋月へ立入するゆゑ、どうぞ阿曾次郎の人品國所を聞合はしてくれとの頼。コレ尊公の戀のかなふ前表なり」「シタリ」「然る所彼の阿曾次郎は、色白く厚鬢の當世男、尊公は總髪、此一條に下拙も色々心を砕き罷在るてや」「エヽそれが何の心を砕く事。アノ娘ゆゑなら、元服はおろか坊主になつても苦しうない。自他とも仲人頼み入る」「ムヽそんなら祇園邊の髪結床で急に元服」「ヲヽ合點」と祐仙は、戀に上ずり氣もそゞろ、床をさしてぞ走り行く。跡に桂庵思案顔、「マァ三十兩は著服したが、もつときやつを磨りおろす妙計がありさうなもの」と、もくろむ折しも下女お由、鍋を片手に立出づれば、桂庵

眞葛が原の段

我戀は松を時雨の染めかねてと、慈鎭和尙が言葉の種、眞葛が原の片邊り、風爐に常釜かけ床几、茶代一服一錢が、店は風雅の捨所、丸山戻り色酒の、醉をさましに來る客の、中に目じゆんだ京羽二重、見えは作れど懷の、薄茶呑みゐる茶筌髷、逆に立花桂庵とて、匕より口のよう廻る、判官ごのみの辨慶醫者、しかつべらしく茶碗さし置き、「イヤコレお由、けふは壽貞尼は何所へ赴かれた」「ハイ、お家樣は大阪のお客で、正阿彌へ參られました」「ムヽ風の神ではなうて正阿彌へ付けこまれたか」「ホヽヽヽ又桂庵樣の久しい口合。おまへは又どこへお出でだへ」「イヤ下拙は八百八十軒の病家廻りを仕舞ひ、餘りほつとしたゆゑ、井筒で一世界、藝子どもにもりつぶされ、お輕ぢやないが醉ざまし、風に吹かれに罷りこした。ソレハともあれ、此店へ年の頃は三十一二、色黑ででつくりと背の低いお醫者が、下拙を尋ねにはわせなんだか」「イイエそんなお方は見えませなんだ」「ハテナア、もう來さうなものぢやが。チヽ向ふから來るがさうぢや。イヤコレおよほ、アノ仁とチト內證の咄もあれば、そもじは暫らく勝手へ」「アイアイ合點でござんす、用が有るなら手を叩いて下さんせ」と、お由は勝手へ入りにける。「ハテサ

方は先へ立歸り、旅宿を片付け發足の用意せよ。急け〳〵」に「チイ〳〵、畏まつた」と達者もの、宙をとんで引かへす。引きつゞいて阿曾次郎、立歸らんとかけ出すを、「なうこれ待つて」と、深ゆきは船より駈け上り、「コレ申し阿曾次郎樣、云ひ殘した事も有り、せめて今宵は此船に」と、取付き歎けば、「ヲヽ、尤も〳〵さりながら、聞かるゝ通り火急の御用、最前扇に認めし、朝顔の唱歌を我と思ひ、廻りあふ時節を待たれよ。さらば」とばかり袖ふり切り、行かんとする。を猶とりすがり、「マア〳〵待つて」ととゞむる折しも、淺香は船頭引連れて、川邊傳ひに戻り足、かくと見るより押隔て、「コレ申し深雪樣、淺からぬあなたのお情、御禮の足らぬはお道理なれど、人の見る前又重ねて、御禮申す時節もあらう」「イヽヤ申し阿曾次郎樣、主人の名は秋月弓之助、必ず御出でを待ちまする」「ムヽ、某宅は下川原、程遠からねば尋ね申さん」さらば〳〵と船と陸、別れの涙かなしさに、見返る深雪を無理やりに、船へ伴ふ其所へ、「コリャやらぬは」と以前の惡者、あらはれ出でて阿曾次郎が、右と左にむしやぶり付く。「シヤ面倒なと振りほどき、直にざんぶと水煙。船はもやひをとく〳〵と、漕出す船子妹と背の、遠ざかるこそ是非もなき。

れし拙者が腰折、スリヤ此お船へ」「アイ、ちつて來たのが緣のはし、お慮もじながら此扇に、何なりとちよつと一筆」「コレハ〳〵結構なお扇子、ム、金地に朝顔、テ見事。およばぬ我等が拙筆に書汚すは、ぶしつけながら」と有合ふ硯、上代やうの走書、墨の色香に引かさるゝ、心深雪は嬉しげに、押戴いて打詠め、「ホンニ御手と云ひ唱歌と云ひ、かはゆらしい朝顔の歌、一生放さぬ私が守り」と、云ひつゝ其身も筆取り上げ、用意の短冊取出し、妻を戀歌のもしほ草、墨つぎ早く書認め、「おはもじながら」と指出せば、宮城も興じ手に取上げ、「ム、ナニ、戀ひ慕ふ、心通はす風もがな、人目隔つる君があたりへ。ム、スリヤ見る影もなき某を」「アイ、ふと見初めしが思ひの種、不便と思うて給はれ」と、じつと寄添ひ抱付き、直に障子をしめからむ、松に這ふてふ藤かづら、いかなる夢や結ぶらん。折からいきせき奴鹿内、彼方此方をうろうろ眼、「阿曾次郎樣〳〵、阿曾次郎樣ではごはりませぬか、國元より急御用」と、呼はる聲に阿曾次郎、はつと驚き深雪をば、なだめすかしてとつかはと、船より岸へかけ上り、「ヤア汝は留守を預けし鹿内、あわたゞしく何事なるぞ」「サレバ〳〵、御本國より火急の御狀」と、渡せば取つて封押切り、讀下して大きに驚き、「コリヤコレ伯父了庵より、家督を受繼ぎ鎌倉へ下り、其殿へ御諫言致しくれよとの儀。ハヽア大恩ある伯父者人の賴み閒捨てがたし。コリヤ鹿内、其

が、危い所をあなたのお蔭、何とお禮を申さうやら。ノウ淺香」「ハイ〳〵、イヤモ此禮がちよつきりちよつとは申されませぬ。幸ひ有り合ふお盃、何はなくとも酒一つ」といふを押へて、「ア、イヤ〳〵必お構ひ下されな。拙者も待合はす人がござれば、早お暇」と立つを淺香は引きとゞめ、「女ばかりの此船中、又どの樣な狼籍者がこうも知れませぬ。ながうとは申しませぬ、船頭の戻るまで」「ム、左樣に仰せらるゝを、おして歸るも心なき業、然らば船頭の歸るまで」「アレ申し、居てやらうとおつしやるわいな。ソレ御寮人樣、ちやつと其お盃を」といへば、深雪は顏打赤め、「思ふに任せぬ船の內、お慮外ながらお盃を、戴きましたらいかばかり、お嬉しう」との其跡は、いはでの山の岩つゝじ、あたりまばゆき風情なり。「コレハ〳〵痛入つたる御挨拶。先刻承れば岸戸家の御家老、秋月弓之助殿の御息女とや、我等宮城阿曾次郎と申す者、お馴染の爲頂戴」と、呑んでさいたる盃に、深雪は嬉しさ押しいたゞき、云ひたい事も人目の關、しんきらしげに淺香をば、見やれば呑込む通りもの、「ヲ、此船頭衆は遲い事、姒衆と連立つて、そこら見物がてら見て參りませう。阿曾次郎樣とやら、しばしの間御賴み申します。ソレ御寮人樣、隨分と心殘りのない樣に、ナ心一ぱい御馳走を。ドレ一はしり」と氣を通し、皆皆引連れ上り行く。阿曾次郎はつきほなく、見廻す傍に我が短冊。「ム、コリヤ先刻風に取ら

料理屋で一杯きめこみ、橋の上から聞いて居れば、どうもいへぬ謳ひかたぢや。酒の間をしてやらうと、思ひ思うて押付客、お娘の盃いたゞかう」と、ずつかりいへば淺香は興覺め、「ムム女ばかりとあなどつての狼藉か、不肖ながら藝州岸戸の家老、秋月弓之助が息女の遊山、妨げしやると爲にならぬぞ」と、威せばいつかなせゝら笑ひ、「ハヽヽヲヽ弓之助でも鎗之助でも、カウ乘込んだらすめではいなぬ、四の五の云はずと娘と酒もり、いやとぬかせばどいつもこいつも、縛り上げて念佛講ぢや」と弱みへ付込む傍若無人、憎しとみやぎ阿曾次郎、船へ立入り詞を和らげ、「コレハ〳〵お若い衆、酒機嫌でざれ事か。此船は拙者が預りの女中客、得しれぬ他人と酒宴は致させにくし。餘の船へござれよ」と、いへば二人は目をむき出し、「ムヽ女ばかりとアノ幻妻がぬかしたに、われが預りの客とは、エヽそんな古手な事で行くのぢやないぞよ。惡くしやれるとコリヤかう」と、いひさま摑む胸づくし、逆手に取つてぐつと捻上げ、「ヤア云はせて置けば樣々の狼藉、手向ひ致さば酒のかはり、水喰はぬ内早く歸れ」と、右と左にもんどり打たせ、脊骨も折れよと刀の胸打、りう〳〵はつしと打ちのめせば、「アイタヽヽタ、イヤモ痛入つたるおもてなし、最早御免」と四つ這ひに、岡へやう〳〵這上り、跡をも見ずして迯歸る。つゞいて追はんとゆく袂、深雪は押止め、「アヽコレ申し、どなたかは存じませぬ

と、いふに月心打笑ひ、「ハヽヽヽ日頃物堅い貴所も、アノ音聲には泥まれしな。ヤそれは格別先達ても申す通り、拙僧が和歌の友、秋月弓之助方へ貴所を入家させ申さんと、豫て咄し置きしが、先にも懇望貴所も承知、近々日を見て見合致させ申さん。イヤ是はしたり、大事の法用をはたと失念致した。ヤ無禮ながら拙僧は、是より直に興聖寺へ參り、後刻菊屋方にて御目にかゝるでござらう」「然らば必ず旅宿にて相待ち申す。先それまでは」「おさらば」と、互に契約月心は、寺をさしてぞ急ぎ行く。御座船は障子引明け、「申し〳〵御寮人樣、まだ暮果てぬ夕けしき、テモきれいなことゝ。チト三味線止めて御らうじませ」と、何心なく顏さし出す、舷に以前の短册、乳人淺香は手に取上げ、「コレ御らうじませ、何所やらから短册が船へちり込みました」と、渡せば深雪手にとり上げ、「諸人の行きかふ橋の通路は、はだへ涼しき風や吹くらん。ホンニやさしい此つらね、墨つぎといひ手跡といひ、誰が口ずさみぞ床しや」と、見やる陸には阿曾治郎、思はず見合す顏と顏、互に見とれる目の中に、通ふ心をいは橋の、渡してほしき思ひなり。かゝる折から川邊傳ひ、浪人めきし二人の醉どれ、何の會釋のあらけなく、船へ飛込み深雪が傍、尻引きまくり大あぐら。淺香ははつと深雪を圍ひ、「どなたかは存じませぬが、女ばかりの此船へ、何の御用でござります」「エヽ何の用とはさりとは不粹。今橋向ひの

となり、今では竹馬の友同然、あれこれと誘ひに預り、初めて見物する宇治の里、山の姿川の流れ、又格別のながめでござる」「ヲヽ宮城氏の仰の通り、袖ふり合ふも他生の縁、イヤモ心隔てず御申しあるゆゑ、愚僧も風雅の友を得て祝著に存ずる。是より平等院へ參詣し、賴政の古跡扇の芝を見せ申さん。しかしかう見晴した景色を題にして、一首所望」と乞ひければ、「ハヽア拙者もをこがましながら、ふと浮んだる一首の口ずさみ、腰折ながら御添削」と、用意の短册取出し、矢立の筆のはしり書さら／＼と書認め、出せば月心手に取上げ、「ヱヽナニ諸人の行きかふ橋の通路は、肌涼しき風や吹くらん。ハヽア面白き此夷曲歌、古今の本歌を取りしは秀作々々。實も涼しき風薫る、夏なき宇治の夕げしき、類あらじ」と打吟じ、かたへに置けばさつと吹く、風にまかれて短册は、ひらり／＼とひらめきつゝ、川邊の船へちり込みけり。月心驚き、「ヤ是はしたり、折角の秀逸を風に取られたり。慥にアノ船、取返さん」と、立つを宮城は引きとゞめ、「ハテ戯れの口號、御捨置き下されう」と、止むる折しも御座船の、內ぞ床しき葭障子、透間洩れ來る三味の音、ウタしたひきて慕ひよるべの螢さへ、妹背かはらで逢ふ夜半を、重扇の風薫る、匂ひをしたふ蔦かづら、ながき契やつくも髮。「ハテやさしい調、聲といひ曲といひ、藝能器量も揃ひし美人ならん。アヽ惜むらくは傍に居て、聞かざる事の殘念」

と跡から行く。早う〳〵に心得て、白丁著ながら烏帽子のゆがみ、亂るゝ國の鼠ども、長柄長刀振りかたげ、元船さして伴ひ行く。跡に老女はしたり顔、寶取出し打眺め、「大内の重寶薬王樹、首尾よく我手に入るからは、大望成就疑ひなし。此上は大内を亡し、大友の家名引興し、其虛によつてあはよくば、一天四海を、ホヽヽ、ホヽヽ」と、獨笑してしづ〳〵と、入江をさして行く形振、怪しくも又不敵なり。木蔭をそつと以前の非人、立出でて跡打眺め、「ム、ハテ怪しき老女が今の振舞。ム、まさしく國家を望む曲者、住家は慥に摩耶が嶽。ハテナ」と、心でうなづき菰脱捨て、見えがくれにぞしたひ行く。

宇治の段

武士の、八十宇治川と名に流れ、底の濁りも夏川や、水の綠も涼しげに、風吹き渡る宇治橋の、往來も繁き五月頃、螢狩にと來る人の、足休めやら氣はうじの、花香はこゝか一森や、貴賤老若差別なく、たぎる茶釜の湯氣に立つ、名さへ出花の通圓が、店は人絕なかりけり。かゝる所へ立派の武士、出家伴ひ小吹筒破子肩に打ちかけ是も又、床几をかりの足休め、腰打ちかけて膝ならべ、「何と月心老、拙者國元より京師へ上り、儒學修行の內、ふと嵐山にて御意得しが緣

松原の段

周防の國山口は、北に嶮岨の山をひかへ、南は名高き大灘にて、多々羅の濱へ打ち寄する、波風あらき小松原、夜も早初夜にちかづけど、やどりさだめぬ野伏の、菰引かぶりあたりをながめ、「つくぐ思へば我身ほど、淺ましい者があらうか。大内の家老駒澤了庵が一子とも云はれし身が、我まゝゆゑに親の勘當。何卒一つの功を立て、それを土産に歸參の願ひと、思ふに任せぬ身の不仕合せ、非人とまで落ちぶれて、心を盡すかひもなき、淺ましの身の上」と、先非を悔み居たりける。折しも聞ゆる數多の人音、何事やらんと菰引かつぎ、木陰へこそは身をひそむ。程なく來る供廻り、乘物立つれば此方より、覆面したる怪しの男、眼燈てらしちかぐとあゆみ寄り、「お頭首尾は」と呼はる聲に、乘物より立ち出づる白髮の老女、あたりを眺め、「ヲヽ山蛭か、氣遣ひしやるな首尾は極上」「ヲヽ出來たく。おりやモどうあろと案じ迎ひに來やんしたが、それ聞いて落付いた。片時も早う摩耶が嶽へ」「アヽコリヤ、壁に耳ひそかにく。シテ元船は」「多々羅の入江に繫いで置きやんした」「そんならそちは、手下共を連立つて、先へ待つて居や。何かの符牒は元船でせう」「ヲヽ合點でござんす。シテお頭は」「ヲヽそろく

「玄蕃樣」「コリヤ、シイ、音高し赤星運八。シテ〳〵首尾は何と〳〵」「ハ、アお氣遣ひなされますな、寳藏へ忍び込み、盜取つたる靈符の尊像、イザお請取り」と差出せば、「ヲ、出かいた出かいた。ソレ當座の褒美」と懷中より取出し、渡せば取つて押しいたゞき、「チエ、忝い。此上は豫て申合せし通り、鎌倉へ立越え、何かの樣子は跡より申上げん」「ヲ、いかにも、岩代多喜太と心を合せ、大内之助を馬鹿者に仕立上げ、將軍家より咎の來るやう、殊に駒澤了庵めが甥とやら、近々諫言に下る樣子、必ずともぬかりなき樣、コリヤかう〳〵」とさゝやけば、「ハ、ア委細承知仕る。然らば此儘拙者はお暇」「ヲ、家中の者に見付けられぬ樣、忍べ〳〵」に運八は、うなづき〳〵氣をくばり、表をさして忍び行く。玄蕃は御寳懷中へ、隱す間もなく奥の方、「御立ちざふ」と口々に、呼はる聲に鋲乘物、御庭先へかきすゆれば、早御立と館の後室園生の方、玄蕃もろともひれ伏せば、うや〳〵しくも藥王樹を、袖にさゝげて玉橋は、しづしづ一間を立出づる。園生の方しとやかに手をつかへ、「お局樣には遠路の下向、御苦勞に存じます」と、敬ふ詞に局玉橋、「ヲ、見送り大儀。いづれもさらば」と、ゆふばえの胸の善惡しら綾も、雲に色ます緋の袴、かゝげて移る乘物を、早かき出す仕丁ども、列を揃へて出でて行く。

御意、お聞に達せぬ其内と、家中の内器量を見立て、幾人となく御諫言に遣はせども、皆御手討になさるゝゆゑ、只今は誰あつて參る者も候はず。某が一子祥一郎と申すは、幼少より我儘放埒ゆゑ勘當仕る。又一人の甥宮城阿曾次郎と申す者、若年ながら一器量ある者、かねて拙者が跡目彼にゆづりたき念願、此儀御免あるにおいては、早速呼下し、鎌倉へ御諫言に遣し申さん」と、願へば玄蕃嘲笑ひ、「ハヽヽヽハテ仰々しい諫言呼はり、いまだ御簾中とてもなき我君、御勤仕のお氣晴し、折節の御遊興はどの大名にも皆ある事。夫に何ぞや、今も山が崩る樣に、度々御諫言申すがゆゑ、却てお氣が逆立つてのお手討、其儘打やつて置くが上分別」と、さゝゆる心の下巧。園生の方引取つて、「ア、イヤ〳〵、豐前の大友滅亡の後は、其殘黨當家の隙を窺ふ者少からず、蟻の穴より堤の譬、義興が放埒打捨て置いては、將軍家の御咎も計りがたし。了庵が願に任せ、阿曾次郎とやらに家督申し付くる間、早々呼びよせ鎌倉へ遣はせよ。玄蕃之允はお局樣のおもてなし、此後とても私の遺恨を差しはさまず、家の長久賴むぞや」と、物和らかに言ひ渡し、入らせ給へば駒澤山岡、はつとお受は申せども、心隔つる忠不忠、玄蕃は奥へ了庵は、屋敷をさして立歸る。既に其日も入りあひの、たそがれ時の暗紛れ、庭の古井をぬつと出で、傍を見廻し呼子の笛、相圖と見えて山岡玄蕃、一間を立出で見合す顔、

の御惱、家老中とくと評定の上、勅答申し上ぐべし」と、仰せの下より駒澤了庵、「何さま禁廷の勅命輕からざれど、申さば大切の國の御寶、一應鎌倉へ急使をたてて通達の上」と、云はせも果てず立番之允、「ヤア出過ぎたり駒澤、國家老たる某をさし置き、是非の裁配片腹いたし。今にも知れぬ御惱をば、べん〳〵と鎌倉まで問合せに遣はし、若し其内に御登遐あらば、違勅の科は何所へかゝる。馬鹿者の思案間にや合はぬ」と、權威を甲にやり込むれば、こらへぬ了庵膝立て直し、「國家の浮沈にかゝる御寶、念に念を入れる某、忠義の道に遠慮は致さぬ。殿の御目鑑をもつて儒臣たる拙者を、馬鹿者とは舌長なり」と、既に珍事に及ばん氣色、園生の方押しなだめ、「兩人共院使の御前なるぞ、私のあらそひ無用」と、制し止めて局に向ひ、「勅諚の趣畏り奉ります。寶藏より取出し、とくと改め差上ぐるまで、奥の亭にて暫く御休息」「ヲヽ、早速の領掌、ヲヽ、神妙々々。一時の間も知れがたき君の御惱、違背なく差上げられよ」と、詞ずくなにいひ渡し、局は立つて入りにけり。園生の方兩人に打向ひ、「勅命とあれば違背もなるまじ、自は藥王樹を改め、お局樣へ差上げん。併し我子義興事、うす〳〵聞けば鎌倉にて遊所通ひ、諫言する程の者を手討にすると、家老冷泉帶刀より申し越す。何卒本國に立歸り、早々歸國召さるゝ樣、計ひ賴む」とありければ、駒澤了庵頭を下げ、「ハア御尤の

増補 生寫朝顔話

大内館の段

名妓紅弗は李衛公が英雄をしたひ、玉翠蓮は張君瑞が才情をあはれむ。淫奔癡情と笑ふ人ありといへども、立通したる操の誠、美玉の瑕を隱しつべし。爰に鎭西の探題大内多々良之助義興公、祖父の家督を請繼いで、防長豐筑の太守とし、武威西國に輝けり。去頃より義興は、鎌倉に在番あり、本國には後室園生の方、女ながらも一國の、政事を預る才智發明。折しも禁廷の詔使玉橋の局、はる〳〵周防へ下向あれば、饗應の役目山岡玄蕃之允、邪惡を包む衣服の綺羅、相役駒澤了庵は、一家中の儒學の師範。四角四面に四方髮、道を守りて相詰める。玉橋の局威儀を正し、「此頃中宮御所御不例につき、先格の通り、當家の先祖林聖太子より相傳はる、天竺耆婆が所持の藥王樹を、御病床に掛置かせられたしとて、暫時借用の御使を蒙り、局司玉橋、勅書を賜はつて下向せり。拜見の上、寶を早々差上げられて然るべし」とぞ述べらるゝ。後室はつと手をつかへ、「家督義興は鎌倉在番の留守中なれども、等閑ならぬ中宮樣

彥山權現誓助劔 終

敵妹が敵、一時にはらす恨の刃、首さし延べて請取れ」と、いふより早く打つ刀、丁ど受止め嘲笑ひ、「ハ、、、、引さかれめが味をやる、勿體ながら京極が、お手おろさるゝ太刀の下、亡くなりをらう」と一打に、微塵流儀の手を盡す、落花狼藉八重垣の、流儀流水澱みなき、手練の切先ちやう〳〵、時を移して 三重打合うたり。かすり手負へども強氣の内匠、まっしくらに切りまくれば、思はず跡へたじろくお園、あはやと見る内孫兵衛が、刃の電光袈裟切に、すつぱと肩先彈正が、うんとのめるを起しも立てず、「夫の敵」「父の仇」「かゝ樣の敵、覺えたか」と、孫も倶々ずた〳〵に、切つて悦ぶ母娘、とゞめをさしもの馬印、大旗小旗日に映じ、風になびきて翩翻たり。正淸いさんで「手柄々々、アノ行列は大將の、御出船と相見ゆる。衣川殿は國元へ、二人の女を同道あれ。轟氏は跡の儀を、よろしく計らひ召さるべし。イヤ孫兵衛は本陣へ」と、急ぐは加藤虎之助、威勢は千里萬里にも、類ひまれなる大勇猛、すぐに三韓征伐の、出陣急ぐ勇み足。天の征する惡人は、亡びて小氣味よし岡が、運に勝つたる敵討、誓ひの助太刀太刀風に、治まりなびく天が下、惠みにそだつ竹の葉の、榮えさかふる君が代は、萬萬歲とぞ祝ひける。

きに彌三郎殿、差越されしは豫てより、餘所ならぬ敵と聞き、晉成公の御心配、感じ入つて候」と、情の道も疎からぬ、實に眞柴家の良臣なり。正淸重ねて轟に打向ひ、「雙方支度調はゞ、早く勝負」と嚴重なる、指圖にはつと傳五右衞門、立上つて聲高く、「早く雙方立合ふべし、互に疲るゝ其時は、太鼓をもつて知らさん間、未練の働なき樣に」と、下知につつ立つ微塵彈正、「成上りの蟣を後楯、此彈正を討たんとは不敵至極の女原、不便なれども返り討、覺悟ひろげ」と惡言を、聞いてにつこと母お幸、「ヤ武士に似合はぬ無益の多言、初太刀母が」と立向へば、彈正も惡びれず、水をたゝへし器の傍、じりゝ〱と歩み寄り、呑むより早く打破る茶碗。長刀かい込み、「いかに京極、汝が非道の手にかゝり、空しく果てたる一味齋が妻お幸、サア尋常に勝負々々」と身がまへたり。「ヤア娑婆ふさげの雲雀婆、雲雀親父が跡追うて、地獄へ行け」と腰刀、拔く手も見せず切付くるを、透さず受止め刎返すを、直に付け入る虛々實々、祕術を盡して戰へども、するどき刃にお幸が受身、危く見ゆれば合圖の太鼓、「どつこい」下部が押しわくれば、跡へかはつて新手のお園、小太刀をふつて立向ふ。後に孫兵衞聲をかけ、「せいては事を仕損ずる、心をしづめて戰へ」と、力を付くる夫の前、諸萬人より晴の場と、胸を定めて聲勵まし、「日外都小栗栖にて、それと名乘らで迯失せたる、臆病武士の京極内匠、親の

の晴と義に勇む、吉岡が妻娘、彌三松が手をとり〴〵に、行馬の内へ入來り、「コレ〳〵孫兵衞殿、イヤナウ聟殿、上々樣のお蔭により、數日の仇をけふの今、晴らすと思へば嬉しうて、胸つぼらしい。此嬉しさを見やうより、一味齋殿ながらへてござるなら、何此上あらうぞ」と、いふにお園も打しをれ、「わたしとてもこがれたる、殿御には逢ひ敵にも、廻り逢うたる嬉しさも、お菊が無事で居やるなら」「ヲイナウ、可愛や是が形見かと、孫が手を取り抱きしめ、顏見合せて親と子が、不覺の涙にかきくれて、さめ〴〵泣くこそ哀れなる。孫兵衞は聲勵まし、「ヤア二人共見苦しき繰言、早く敵の首ひつさげ、未來におはす先生の、位牌に手向くる氣はなきか」と、制する詞に兩人が、實もと涙押拂ひ、人目を羞づる紅の、絹引しごいて花襷、用意とり〴〵なる所へ、久吉公より檢使として、加藤虎之助正淸、先を拂つて入り來れば、今ぞ籠中のとり圍まれ、猶も我慢の彈正が、歩むものつさのさばり頰、跡に引添ふ傳五右衞門、行馬の内へ入る折から、息を切つて衣川彌三郎、加藤が前に兩手を突き、「拙者儀は郡音成が家來、衣川彌三郎と申す者、一味齋が妻子の者、今日當所に仇討をいたす條、主人音成承り、御厚情を謝せん爲、一つは又見屆のため名代として、只今參上仕る」と、申述ぶれば母娘、殿の上意の今更に、又も涙の嬉し泣。正淸は威儀を正し、「コレハ〳〵御丁寧の御使者、人も多

御帶刀汝へ下し置かるゝ間、有りがたく頂戴せよ」と、吹擧の御太刀取次にて、孫兵衞へ賜はりける。「時の面目身の冥加、生々世々の御厚恩、首尾よく本望とげ終り、唐高麗まで御供して、馬前に報じ奉らん」と、三拜九拜拜領の、刀は名作名大將、「いそふれやつ」と正淸の、詞の加勢百萬騎、勇みすゝんで三重かけりゆく。

第十一

旣に角觝の勝負も、をさまる番數譽むる聲、磯打つ浪と動搖し、山河にとゞろき傳五右衞門、仁義の吹擧に敵討、御免なりしと聞傳へ、馳せあつまつたる見物ども、さしも廣野に充滿し、錐を立つべき晶もなし。斯くて毛谷村六助は、相撲の場所より改名し、貴田孫兵衞と勇有つて、猛き骨柄美を盡す、大小さすが萬卒を、覆ふ器量の弓取風、いう〳〵と出で來れば、「ソリヤ毛谷村の柴苅が、出世した振見よ〳〵」と、前後を取卷く人群集、孫兵衞きつと見廻し、「ヤア騒しゝ方々、今日は大切の敵討、斯く群つては勝負の妨、片寄れ開け」と、制すれども、向ふは猛勢一人の、聲届かねば「まつかせ」と、竝みしげりたる大木の、松を兩手に一ゆすり、ぐつと引きぬき横倒し、行馬としたる怪力に、舌を震はし諸見物、一度にしんとしづまれり。一期

のものしと六助が、勵す一聲雷の、落つるがごとく押付くれば、さしもの市兵衛たもち得ず、尻居にどつさり六助へ、又も擧げたる團扇の譽れ。割付も三十八番目、待ちまうけたる三浦又藏、實も加藤正淸の、股肱と目立つて見えにけり。御棧敷を始とし、諸侯の面々息を詰め、これや結びの鬪相撲と、鳴をしづめて見物あり。さつと引取る團扇の風、力くらべ根くらべ、祕術を盡していどみ合ふ。神明擁護の金剛力、さしもの又藏持て餘し、危く見ゆれば主人正淸、棧敷より聲高く、「ヤアく六助、最早勝負も是一番、敵討の願ひ叶ふ大切なる此相撲、氣を付けよ」と敎への詞、ハッと六助正淸の、智仁の一言磐石に、押さるゝ如くたぢくく、心も折るゝ片膝は、三世の緣の禮儀始、上下一度に譽むる聲、感心の聲一時に、浪の打來る如くなり。正淸倶に感じ入り、「數番の働き六助が勇猛、今よりしては我良臣、貴田孫兵衛と改名し、忠勤怠る事なかれ」と、稱美の詞に有りがた涙、溜りに控へし母お幸、お園諸共かけ付けて、「お手柄お手柄。此上は敵討御免のお願、恨を晴すは今の間」と、詞少く取形も、行儀正しき武家育。六助も御前に向ひ、「是こそ一味齋が後家娘、微塵彈正と敵討の勝負、仰付けられ下さる樣」と恐れ入つて言上す。「ホヽヲ其儀は氣遣ふ事なかれ。尋ね求むる蛙丸、手に入りしも汝が働き、轟傳五右衛門に申付け、敵討の用意せさせ置きたれば、かしこへおもむき本望とげよ。則ち君の

受けんより、武士の冥加と覺悟せよ、彈正何と」といはせも果てず、「ヤア敵討も絲瓜もいらぬ、刃向ふやつ原ぶち放し、久吉の猿冠者め、素頭取つて父の孝養、邪魔せずと立去れ」と、ひるまぬ我慢轟が、ソレと指圖に組子の面々、巻いて捕らんとつく棒刺股、請け流し切拂ひ、爰を先途と働きける。「つゞいての勝相撲毛谷村六助〳〵、三十七番の割付の主、急いで立合へ立合へ」と、行司が詞、溜より、佐藤の家臣萬團右衛門、六尺ゆたかの大男、力も嘸としら綾の、下帶しつかと御前に一禮、ゆらり〳〵と土俵の内、勝ちほこつたる六助が、劣らぬ大兵顔見合せ、じつと互に居合腰、程よく行司が引く團扇、ヤッとたける團右衛門、押出さんとコリャコリャ〳〵、神變ふしぎの六助が、どつこい動かぬ兩足は、金輪際より生拔くごとく、肘がらみを振りほどき、えいとかけ聲諸共に、地ひゞき打つたる團右衛門、砂にまぶれて負相撲、各どつとざゞめきて、しばらく鳴も止まざりける。溜の内より聲高く、「飛入々々々々〳〵」と、自身名乘つて出でたるは、小兵ながらも福島の、御内に名を得し桂市兵衛、拾うてくれんと力瘤、五尺にたらぬ身あんばい、健氣にも又不敵なり。六助につこと打笑ひ、構へゆたかに待ちかくる。合圖の團扇引くやいな、遲しと四つ手に引組んだり。雪降り積る松が根に、からみ付いたる桂が手だれ、惣身の力を腕に入れ、大の男をしめ付け〳〵、持出さんと釣上ぐる。シャも

付く堀口大坪、うろ〳〵眼に前後を忘れ、切つてかゝるを傳五右衛門、かはす間拔く間蜉蝣の、二人は四つに朱の浪、打つて捨てたる手の內に、六「ハ、あつぱれお見事。併し此兩人をお手討になされては」「イヤサちつとも苦しうない、彈正に荷擔人せし人非人、蛙丸の切味、敵討の血祭よし。早く御前へ土俵入」と、淸むる刀化粧紙、四本柱の御家老に、つれて御前へ 三重出でにける。數年の積惡身を責めて、立浪の廣庭に、多勢を相手に微塵彈正、一流立つるさしもの働き、捕人もあぐんで見えたる所へ、春時の下知を請け、駈付くる轟傳五右衛門、「ヤア彈正、謀反の殘黨其罪遁れず、轟が搦取る、腕を廻せ」と、十手振上げ詰寄つたり。「ホウ誰彼の相手は嫌はぬ、冥途の道連イザ來い」と、又も二人が挑合ふ。四方を圍む組子の人數、暫く時をうつす內、一もくさんに砂煙、馳せきたる使番、「扨も六助、御前において相撲の勝負、第一番に田中の舊臣井富三郎、取付く間もなくそつ首落し、二番は兩國笹部野九郎、只一刎に刎飛ばされ、赤面せき立つ三ばん手、盛尾の郎黨別所貞宗、力を盡せど稀代の六助、一聲叫べば土俵の外、投付けられて入り替る、片岡、宮田、郡の一統、家中に勝れし勇士ども、息をも繼がせず立合へど、或は矢筈肩透かし、あふりむさう無雙の神力、二十六番つゞけ投、皆六助が勝相撲」と申し捨ててぞ引かへす。「いさぎよし〳〵。相撲終らば敵討御赦免は必定、縄目の恥辱を

からは、彈正が死物狂ひ、館の奴原撫切」と、眼配つて突立つたり。かねて用意やしたりけん、組子の大勢得物引つさげ追取卷く。轟聲かけ、「ヤア〳〵者ども、大切なる國家の科人、廣庭へ追出し、取逃さぬ樣搦取れ」ハッと一度に組子ども、遁さぬ行らぬとひしめいたり。「ヤアちよこざいな蚊蜻蛉めら、此世の暇をくれんず」と、切立て〳〵手を碎き、奥庭さして追うて行く。跡に六助兩手を突き、「蛙丸の名劍はからず御手に入る上は、此寸功に敵討御免なし下されよ」と、餘儀なき願ひに傳五右衞門、「尤なる訴訟なれども、彈正は大切なる科人、土民の手へは渡しがたし。元來主人春時殿、懇望の汝なれども、高良明神の告により、勝りし者に仕へん望。幸かな今日大領お成なれば、御上覽を願ひ、諸大名の御内に於て名ある勇者を片家に立て、角力の勝負は神慮に任せ主取せよ。蛙丸を奪ひ返せし功を以て、敵討は請合たり。いかに〳〵」と轟が、始終を計る取さばき。六助ぞく〳〵小踊りし、「面白し〳〵。望む所の主君定め、畏り奉る」と、卽座の領掌、「此身の願ひ、本望遂ぐるは今の間」と、悅び勇む折こそあれ、久吉公の御入と、のゝめく聲、「アレ六助、仙桃花咲く時來れり、直樣用意」と勵す内、心得小姓が白臺に、積む卷絹の勝色を、しやんとしめたる取りまはし、一ふり振出す古木の松、兩腕兩足踏みならす、あつぱれお相撲伊達男、野見の宿禰の昔にも、をさ〳〵劣らぬ關相撲。漸く氣の

妻の、影かさそふや降りしきる、雨の足取入亂れ、打合ふ刃音諸共に、何とかしけん六助が、刀はほつきと折れ散つたり。ソレと投げやる轟が、覺の業物取るより早く、拔放して丁ど受け、「ハテ心得ぬ。師匠より讓りの一腰、折れしは不思議」と怪しみながら、又打合す白刃と白刃、二打三打合す間も、同じく打折る微塵が手の內。けしとむ所を拜打、さしつたりと傍なる飛石、苦もなく取つて受けたる强勢。轟「ハヽア奇妙々々。曹孟德が靑虹の寶劍にひとしく、白刃を打折りし彈正が所持の刀、夕陽を剋して雨を呼び、燒刃に顯す虹の形、數千の蛙鳴叫ぶは、ハヽハヽ、實まこと小田の重寶、蛙丸の劍の威德。いかなる名作名劍も、此劍に合はす時は、忽ち折るゝと聞傳へしが、不思議を眼前見し事よ」、と詞は膽にこたゆる彈正、引取る刃に付け入る六助、鍔元しつかと、六「ム、すりやお尋ねの蛙丸、是を所持する微塵彈正」轟「ホヽヲ問ふまでもなく謀反の殘黨。春永亡び給ひし後、明智が手へ渡りし名劍、隱し持つたる微塵彈正、おのれと顯はす喜怒骨は、明智が血脈受繼ぐ證跡、何と違ひはあるまいが」と、星をさいたる明智の眼力、神力加はる六助が、程よくもぎ取る蛙丸、傳五右衛門に差出せば、「ホヽヲ六助出かした。最早遁れぬ微塵彈正、尋常に覺悟せい」「ホヽさすがの轟よく見出した。推察の通り、父が無念を散ぜん爲、立浪家へ入込みしは、久吉に近寄つて仇を復せん我が大望。斯く顯はれし上

リヤコリヤ、サ、合點か。合點がいたらそこ立て」と、いひつゝよつてだまし打、鯉口四五寸、「イヤめつたに油斷は仕らぬ」と、取つたる腕首突放し、一眼二心互の身構へ、ヤア〳〵とかけ聲尖く打込むしなへ、入違へて丁と受け、拂うて引けば又付込み、上段下段右劔左劔、音はとんとん轟が、眼を配る互の太刀筋、かた唾を呑んだる軍八曾平太、祕術を盡せど彈正が、受太刀狂ひ崩るゝ五體。六助いらつて疊みかけ、脊骨腰骨りう〳〵。「南無三寶」と兩人が、六助目がけ駈けよるを、「さしつたり」と呼吸の當身、右と左へ倒れ伏す。轟聲かけ、「ホヽヲ勝負は見えた毛谷村六助、日頃の手練あつぱれ〳〵。シテ立合ばかりの願ひであるまい、吉岡一味齋が後家娘かくまふ義心、助太刀して彈正を討たさんとの心の底は、傳五右衛門承知致して罷りある」「ハヽア御存じの上は申すに及ばず、子細有つて一味齋が、緣につながる此六助、敵討の御願ひ」と、聞くより彈正思案を極め、「いかにも、一味齋の老ぼれ親仁、高慢顏がむやくしさ、飛道具にてぶち殺した。敵とねらふやつばらは、何人でも返り討、既に妹娘のお菊めも、身が心に隨はぬ故、須磨の浦で寂滅させた。六助、うぬも緣者とあらば遁れぬ所、覺悟ひろげ」と切付くる。心得六助腰刀、拔合してはつしと受け、「扨は妹お菊を殺せしもうぬが業とな。エヽ、重々の極惡人、生捕にして母女房に敵討の勝負さす、觀念せよ」と切結ぶ、刃の光は稻

立歸つて申さぬ樣、息の根止めて遣はされい」「何樣はや、其息の根の止めやうは、斯う」ト打出す小柄の手裏劍、透さぬ六助、「コリヤ何するのぢや。いらざる轉合取置いて、尋常に勝負さつしやれ」「イヤナニ彈正殿、鉛刀の一割とやら、コリヤ少し味をやりました。ガ貴殿には何として、叶はぬ事は知れてござれど、ほんの心ゆかしなれば、立合と申すは慮外、御指南なされて遣はされい。ソレ誰か有る、木太刀の用意」と、いやといはれぬ詞の打太刀、請流されぬ手詰の勝負。彈正は困り顏、「アイヤ物でござる、御覽のごとく事の外大酒いたし、甚酩酊仕る。其上お眼鏡を以て相濟んだる拙者が手の內、再び立合致しなば、御前の眼力暗し抔と、批判あつては甚心外、何とおの〳〵どう致さう」「成程先生のおつしやる通り、コリヤよしになされたがよくござらう」「止めませうか〳〵、ア、さりとは迷惑千萬」と、主人思ひは空鞘の、安大小は鐺から、剝げかゝるこそ笑止なる。「アイヤ其儀は苦しうござらぬ。幾度にても彼めが得心いたす程、打ちするゑて遣はさるゝが其元の御名の譽、則ち殿にも御滿足。御酒はいか程參つても、六助風情が何の及びませう。幸の折からなれば、此傳五右衞門も御手練拜見致したい。御苦勞ながら只一手、ひらに先生々々」と、そやし立てられふしようぶ〳〵、わざとよろめき庭へ下り立ち、「コリヤ六助、相手になるは易けれど、酒興の某、モ今日にも限らぬ事。コ

の出ぬ内、早く歸るが上分別」と、利害の詞押返し、「ハァ、御尤ではござりまするが、是には深い樣子の有る儀」「ヤァ樣子も絲瓜もいらぬ、所詮叶はぬ無益の願ひ、意地ばらば手は見せぬ。ソレ家來ども、きやつを御門へ引出せ」「畏つた」と下部ども、始にこりず立ちかゝるを、右と左へ投退け蹴退け、居ながら働く手利の早業。兩人は猶せき立ち、「ヤァ儕こりや手向ひか」「オ、手向の段ぢやござらぬ、國主を重んじ忍へてゐれば、付上りのした虻侍、ばたばたせずと扣へてござれ。ヤイ彈正、儕よくも六助を謀つたな。老いたる母を育むためと、孝行ごかしの僞り表裏、親持ちし身はさうこそと、義によつて勝を讓り、負けてやつた昨日の勝負。母といひしは民家の老女、後難を思ひ切殺したであらうがな。かゝる姦賊、師範抔とはお家の恥辱、サア是へ出て勝負せい。斯くいひ出す上からは、取持顏のへろへろ武士、幾人あつても苦には致さぬ、木太刀の相伴御勝手次第」と、白洲へどつさり引きまくる、袴の裾も破れ小口。彈正はえせ笑ひ、「傳五右衞門殿お聞きなされ。イヤハヤ樣々のよまひ言、あやつは狂氣致してをりまする」「いか樣是は仰の通り、取りのぼしてをると見えます。併し只今申すを承れば、何とやら其元が、彼をお頼みなされたと、取所もない事なれども、爰に一つの氣の毒がござるは、微塵彈正六助を恐れ、再度の試合辭退せしと、下々に沙汰有つては、いよいよ殿の御恥辱、

が大切にさつしやつた母御を爰へ出さつしやれ」「ヤ」「よもや是へは出されまいがな」「ヤイ〳〵うぬはこりや氣が違つたな、イヤサ狂氣してをるな。コリヤ諸國を武者修行に遍歷する此彈正、母を連れてよいものか、身は獨身母はないはい」「ム、すりや母もなく立合もなりませぬな」「くどい。最前から身に覺もなき事ども、樣々言ひかけひろぐ。五百石の御知行頂戴致し、御師範たる此彈正に向つて、過言を吐くは殿へ慮外致すも同然、惡くびこつくが否や首が飛ぶも知れぬぞよ。早く此場を立歸れ」「スリヤ立合の願ひは叶ひませぬな」「叶はぬ事ぢや早く立て」ハッとばかりに六助が、時の權威に詮方も、無念にたゆる怒りの涙、白砂を穿つばかりなり。襖のあなたにしはぶきの、聲諸共に入り來る、轟傳五右衞門、さすが名家の執權と、いはねどしるき其人柄。「ハアコレハ〳〵傳五右衞門殿、今日は大領久吉公御入の由、御饗應の御指圖なんど、萬事御苦勞千萬でござる」「コレハ微塵氏、仰の如く今日は、假初ならぬ貴人の御入來、當家の面目此上なし」と、互の挨拶事終れば、六助白洲に手をつかへ、「傳五右衞門樣へ申上げまする、何卒彈正殿と再度の立合、仰付けられ下さらば」「コリヤ〳〵六助、僣合點の惡い、なぜ歸らぬ。魔利支天の化現といふとも、いなといはれぬ彈正殿、それ故にこそ御前より見分を遣され、お抱へあつた微塵氏、達て願へば其方が、身の爲にも宜しかるまい。お怒り

叶はぬ、門外へ追出せ。異議に及ばゞ打ちすゑよ。早く〳〵」「承る」と引返す、程なく人音騒がしく、是はと見やる庭先へ、こけ込む奴口々に、「下れ〳〵」と制すれど、耳にもかけず揉手して、「ハイお願ひの者でござります、お取次頼みます」と、白洲へ通れば兩人聲かけ、「ヤア狼藉なり無法者、下れ〳〵、下りをらう」「イヤ私は訴訟の者、下れとあるはこなさん方」と、片手摑みの狗投、打付けほり付け寄付けねば、恐れて皆々尻込す。「ヤア狼藉者下りをらう」と、切刃廻せばぐつとせき立ち、「イヤコレ彈正殿、エヽ逢ひたかつたはいの〳〵。何にもくどくどいふにや及ばぬ、今一度誠の立合、サア〳〵用意召され」とせりかくるを、大坪軍八、「コリヤ〳〵慮外者めが。御師範たる彈正殿、昨日の勝負にこりもせず、恥を知らぬ山猿め、此願ひはお取上ない。早く立て〳〵」と、師匠贔屓の倍押しに、彈正はしたり顔、「六助われや何しに來たやい、重ねて口を利かぬ樣、しやつ頰に木太刀の極印、見る度毎に身の毛がよだつて、か樣の願ひは致さぬ筈。エヽ何か今大身と成つた身どもゆゑ、膏藥代にもならうかと、根が賤しい根性から、心得違ひのもがり思案か。夫ならばさうといへ、少しばかりの合力は致してくれる程に、門前に控へをれ。エヽむさくろしいざまをして、立合々々と身の程知らぬうじ蟲め、身が目通りに叶はぬ。早く立て」「スリヤ立合はなりませぬか。立合の願ひ叶はずば、こなた

がね廣言吐きし毛谷村の六助野郎、憎さも憎しと存じたが、昨日の立合何か子供をなぶる樣に打ちするゐた彈正殿、恐れ入つた儀ぢやござらぬか」「成程〻、あの樣な手者をお抱へなされたは第一殿のお仕合、又そこを存じて執持致した貴殿と某、あつぱれな忠義でござる」と、話しの腰を折りからに、姿もけふぞ大國の、君に師範の勿體顏、立出づる微塵彈正、ほろ醉機嫌の千鳥足、「コレハ先生、存じの外の大酒でござるな」「イヤモ御前において悅びの御酒宴、何が若侍が取廻し、そこへも頂戴こゝへもと、さりとは〳〵こまり入りましたが、雨中の徒然、思はぬ大酒。アヽ藝が身を責めまする。ハヽヽヽ」「成程仰の通り、殿樣にも殊ない御悅び、我我とても大慶至極。此度の異國征伐、日本無雙の其元なれば、あつぱれ高名手柄を顯はし、久吉公の御感狀にお預りなさるゝは今の事、扨〻お羨しき儀でござる」と、おもねる詞に打點頭き、「成程〻、六十餘州に群る大名、我一欲しがる此彈正、お抱へあつた立浪殿は、御運の強いと申すもの、各方も異國の戰場、譽を取らすは望次第、拙者がきつと受合ひ申した」と、自慢手譽の鼻高〻。時に玄關騷ぎ立ち、取次の侍あわたゞしく、「毛谷村六助、彈正樣と試合の願ひ、取次を賴み參りし所、叶はぬ由を申せども、無體に込み入る氣相ゆゑ、先お知らせ」と訴ふれば、「ナニ六助めが先生と、押して試合を望むとな。一旦甲乙別れし上、無法の願ひ叶はぬ

さ何さ氣遣ひ無用。一旦こそは得心にて、負けてやつたる五百石、抱へられたも我情、却つて足を繫ぎしは、もつけの幸ひ塞翁が、うまう出合うた妻姑、恨は倶に六助も、天地に慙ぢる義の一字、鬼神とて京極内匠、我見る目には一つまみ。しかし御知行戴くうちは、殿の御家人討ち得がたし。試合を願ひ勝つた上、直に仇討御免の訴訟、元首押へ討たさす」と、實も尖き魂を、見極め置きし吉岡が、眼力違はぬ若者なり。お園は猶も勇立ち、咲亂れたる紅梅の、花の一枝折持つて、「ナウ〳〵我夫、梶原源太景季は、平家の陣に切入つて、譽を揚げし箙の梅、是は敵の京極に、勝色見する兄花の、可愛男へ壽」と、いひつゝいだき付きたさも、親に遠慮の手をもぢ〳〵。母も同じく椿の一枝、「本望とげた其上で、直に八千代の玉椿、かはらぬ色の花聟殿、イザ」と打連れ立出づる、三人が中に彌三松は、ほんそう小倉の領内へ、勇みすゝんで出でて行く。

第十

豐國や、小倉に威名立浪の館には、頓て異國に出陣の、支度せはしき一家中、弓に矢をはげ鐵砲を、磨き立てたる書院先、大坪軍八堀口曾平太、お目出た酒の高話、「ナント曾平太殿、かね

込む金剛力。「イヤコレ聟殿待たしやれや、こなたの腹を立てさつしやる相手の苗字は微塵と
や」「いかにも、己が流儀を其儘に、氏となしたる微塵彈正」「ナニ其流儀の名が微塵とな、シ
テ其者の年輩は」「三十二三至極の骨柄、面體白く目の内冴え、左の眉に一つの黒痣、慥にあり
あり左の肘、二の腕かけて刀疵」「扨こそなア、同じ家中といひながら、お園といひ此母も、見
知らぬ敵の人相書、妹に尋ね其砌、書かせ置いたる此姿繪、まだ其上に妹が、死骸の傍に有り
しとて、小栗栖村にて友平が、後の證據と渡したる、此臍の緒の書付に、永祿九年の生れとあ
る、月日を繰れば卅四の、人相といひ年の比、割符の合うたは尋ぬる敵、親の敵菊が仇、恨を
晴すは今此時」「嬉しや娘片時も早う」「母樣用意」と勇立つ、「アヽコレ〳〵二人共にマア待つ
た。慥にそれと知れたれば、六助が爲にも師匠の仇。コレ氣遣せまい敵は討たす、ガ眞劍當てぬ
其先に、木太刀で試合の意趣返し、ぶつて〳〵ぶちのめし、申請けての敵討。お袋、女房、い
ざ一所に」と取出す、破れ上下手傳うて、母は腰板あてがふ紐、お園が取つてしつかりと、結
び合うたる妹背の緣。「コレ伯父樣、ぼんにも敵討たしてや」「ヲヽ出かした、賢い〳〵、强いな
ア。どりや行かうか」と云ふより早く、ひらりと庭へ一足飛。「コレ〳〵聟殿、輕き相手と侮つ
て、必不覺を取るまいぞ」「さうとも〳〵欺すに手なし、油斷をされなこちの人」「ムヽヽ何

して有りましたよ。敵が取つてやりたけれど、うらどもでは何として」斧「サヽヽ、そこで賴むは六助殿」と、いふにかけ下り死骸の傍、立寄つてとつくと見、「ム、すりや此死骸はそちが母か、アノ是が」フンと眉に皺、思案の臍に杣仲間、「コリヤ斧右衞門、しめり伏さずと賴みやれ」と、引起されて泣ぢやくり、「アイ〳〵、皆のおいやる通りぢやよ、敵を取つて下さませ。アア死なしやるはしか其晝間、鹽梅よう出來た自慢の團子、棚からころり其身もころり、手でこねたとててこねるものか。何ぼう杣が親ぢやとて、斯しやき張つた枝骨は、おろさゞ桶へ這入るまい。這入りともない死出の山、覺束なかろなう婆樣、婆樣々々」と呼ぶこ鳥、谺に響き泣く涙、落込む谷に水かさの、いとゞ增りて見えぬらん。始終とつくと聞きすまし、「ヲヽ氣遣ひするな、今の間に敵はおれが取つてやる。其死骸大事にして、内へいんで香花取れ。サア早う連れて行け、早う〳〵」と六助が、詞を勢に斧右衞門、「ア、其樣にいうて下さるのが、婆樣のためにはお寺樣の御引導。ナウ皆の衆」「ヲヽ、テヤ、あの人がア、いはりや、ちつとも氣遣ひ」なき顏を、笑顏に直し歸りける。跡に六助無念の顏色、「扨は杣が母をたらし込み、儕が親と僞つて、孝行ごかしに六助を、深い處へやりをつたな。ヘヱ思へば〳〵腹立や。卑怯未練の微塵彈正、おのれ此儘置くべきか」と、胸も張りさく怒りの齒がみ、庭の靑石三尺ばかり、思はず踏

師の片われ、あら懷かしや」とお園を拜し、飛走る涙はら〱〱、腸をたつ思ひにて、慕ひ歎くぞ不便なる。時に障子のうちしはぶき、「ホヽヲ師匠をしたふ誠こそ、遙に屆き冥途より、閻浮に歸る一味齋、對面せん」と聞ゆれば、思ひがけなくお園が愕り、「ヤアさうおつしやるは母樣か」と、嬉しさとつかは押開く、内ににつこと以前の老女、柔和の面皺の波、うちかけ著なし稚子の、手を引連れて立出づるを、見るよりはつと飛びしさり、師の後室とは、夢いささか、存ぜぬ事とて最前は、無骨のあしらひ無禮の段、偏に御免下されかし」と誤り入つてぞ平伏す。「イヤなう、さつきに逢うた其時は、聟殿とも姑とも、互に知らねば他人も同然、今こそ親身泣き寄りし、親子が爲には鐵の、立て通したる娘が操、不便と思ひ睦じう、夫婦になつて下さらば、本望とぐるに疑ひも、なき我夫の此魂、聟引出に」と差出せば、「ハヽヽヽこは有りがたき師の形見、辭退申さず頂戴せん」と、押戴きし歡々の、盃三々くどからず、古ねた生娘けふよりは、手折らせ初むる花嫁御、母も悅ぶ其所へ、「爰ぢや〱」と杣仲間、遠慮なき骸戸板にのせ、どや〱と舁込んで、「コレ六助殿聞かしやませ、二十三日の事であつたがよ、此斧右衞門のおばゝが見えぬとて、仲間中が手分をしての」「ヲヽテヤ、何が所々方々を尋ね歩き、やう〱と杉坂の土橋の下で見付けた所がよ、此樣なおかひこ絹を引ばらせ、むごく殺

事のかくばかり、重るものか父上の、敵を願ふ門出に、可愛や弟は盲目の、儘ならぬ身を悔死、跡に見捨てて古郷を、出づるもちり〴〵はなれ〴〵、在家を捜す其内に、悲しや妹も劍の難。父上のみかそもやそも、二人三人があぢきない、刃の霜と消え殘る、母とわたしが憂き苦勞、つらい悲しい恥しい、なりも形もいとひなく、雨露雪の深山路や、野末に荒るゝ一つ家に、若しや隱れて居ようかと、人なき道に日を暮し、さまよひ歩く親と子が、便りない身の上もなき、便りの人に廻り逢ひ、わたしが心の奥底を、明かすは二世の我夫、必見捨てて下さんすな、可愛と思うて給はれ」と、あまへ歎きて伏ししづむ、悲歎の涙六助も、かゝる憂には猶更に、思ひ忘れぬ一昔、「彦山の麓にて、目馴れぬ老翁に見えしが、高良の神の使なりと、兵法印可の一巻を下されし、其老翁こそ吉岡殿と、察せし事は彼巻の、奥にあり〳〵御姓名、書添へられしはこなたの事。夫婦となつて吉岡の、家名相續致せよと、六助ごときのつたなき藝、傳へ聞かれて有りがたや、神の使と僞つて、印可を與へ其上に、汝に勝つべき者あらば、それに隨ひ身を修め、末長久に榮えよと、教訓ありしは後々まで、我慢を押ゆる御情、喩へん方もなき大恩、肉にしみ骨に通つて忘られず、母だにに見送る上からは、尋ね登つて恩を謝し、師の御顔をにしにしと、拜せんものと思ひしも、皆むだ事となつたるか。エヽ殘念や悔しやな。せめての形見

マア誰ぢや」と、尋ねにはつと心付き、俄に行儀改めて、いふべき事も跡や先、「常々とゝ様のおつしやるには、豐前の國毛谷村の六助といふ者こそ、劒術勝れし器量の若者、行末はそちと妻合せ、吉岡の家を相續させんと、音信通じ置きたるぞと、仰を守る此年月、廿の上を越しながら眉を其儘いかな事、鐵漿も含まぬ恥かしさ、推量なされて下さんせ」「スリヤそこもとは吉岡一味齋殿の」「ハイ、娘の園でござります」「コレハしたり」と手を取つて、無理に上座へ押直し、「先何か差置き、お尋ね申したいは御親父一味齋殿、御健勝で今にお勤なさるゝか、御老體の事なれば、自然のお勞れにて、若し御病氣など發りはせぬかと、寢ても覺ても心ならぬは是れ一つ」と、問はれて園は涙ぐみ、「申すもあへない事ながら、おいとしやとゝ様は、隣國周防の山口といふ所でな」「ヤ、何が何と、どうなされた」「口惜しやや〳〵と、欺し討たれてはかない御最期」「イヤア、シテ〳〵其相手は町人土民でよもあるまい。假名は何と何國の誰」「同じ家中に名を得たる、劒術師範の京極內匠」「シテ此豐前へ來られしは、敵の在所は當國と、知つてか但し知らずにか」「サア所々方々と身をやつし、いふにいはれぬ憂き艱難、尋ね捜せど敵の行方、けふが日までも知れませぬはいな」「ホイ、はつ」とばかりにどうど坐し、拳を握り悔み泣。園は取分け悲しさを、やる瀨なみだのくどき言、「ほんに浮世といひながら、身に憂き

猶も根を押し、「しかと其詞に違ひないか」「イヤ何が怖うて僞りいはう、くどい尋ねにや及ばぬ事」「シテこなさんの名は何といふ」「ヲヽ六助と云ひまする」「ヤア何と」「サア毛谷村の六助といふ山賤でごんす」「ヤア、すりや八重垣流の達人と、音に聞えた六助樣か」エヽと鞫れて取落す、子は狼狽へて迯込むとも、知らず構はず六助を、うつかり眺め、見とれ居る。「今の樣に云うても疑ひ晴れず、やつぱり儕を敵にするか」「エヽわつけもない、何の家來の一人や二人、どうなとしたがよいはいな」と、前に寄添ひ後に立ち、「テモマアあつぱれよい殿御、マア何よりか落付いた。イヤまだ落付かれぬ事があるはいの。イヤ申し、女房さんがござりますかえ」「イヤ子細あつて女房は持ちませぬ」「ありやせまいがな、無いかえ〳〵、ヲヽ嬉しや〳〵、それでほんまに落付いた。コレイなあ、お前の女房はわたしぢやぞえ、サア〳〵女房ぢや〳〵」と、かきたくる程今までも、逢ひたう思うた重荷がおり、三衣袋も茶袋に、仕て見たがりの水仕わざ、袈裟も襷とかけ徳利、酒もあげうし夕飯の、拵せうと釜の下、薪のしめり燃えかぬる、火ふき竹はと尺八を、取違へてはをかしがり、獨御機嫌六助は、承知ない儀のふり賣を、持餘したかむつと顏、「とんと譯が知れぬ。けふ程けぶな日はない。見ず知らずのわろ達が、イヤ親にならうの嗅ぢやのと、押入女房の手引した、あの子もめつたに油斷はならぬ。全體こなたは

詞に一癖さる者と、見て取るこなたも笠脱捨て、「ヲヽ其返答して聞けん」と、ずつと入るより替筒に、仕込みし短刀抜打を、ひらりとかはししつかと取り、「ヲヽヽヽちよつと見るから女とは、悟つた故に咎めて見たが、敵と云はるゝ覺はないぞ」「ヤ覺ないとは卑怯なやつ、杉坂の邊りにて、五十有餘の侍を手にかけ、路銀は勿論妹が、忘れがたみの稚子まで、奪ひ取つた山賊め。赦しはせじ」と振りほどき、するどき切先無刀の六助、抜けつ潜りつあしらふ手練、遁さじものと付廻す、屛風の内より「伯母樣か」と、かけ出る稚子見て恟り、不審ながらも小脇に引抱き、心赦さず身構へたり。「コレ伯父樣、伯母樣が來てぢや、太皷叩いて見せていなう」「ヲヲ合點ぢや〱」「イヤ今ぢや、早う〱」と頑是ない、まはせば廻る子可愛がり、持遊箱を引寄せて、「ソレ今鳴すぞ。コレ聞かしやれや。廿三日は母者人の四十九日、杉坂の墓所を戻りがけ、泥坊めが二三人、五十計な侍を、切るやら突くやらなぶり殺し、見るに見かねて片端からのめらせ、介抱すれど物も得いはず、其子を指差して拜んだばつかりがつくり往生。目前敵の盜人めら、踏殺して谷へ蹴込み、連れて戾つて其子に問へど差別はなし、そこで思ひ付いたあの著物、門口に干して置いたは、其子の所緣を知らう爲、心が早う屆いたか、現在の伯母御に渡せばこつちも安堵。ようまあ尋ねてごんしたの」と、悅ぶ體に僞りなき、眞實見ゆれど

のは無理ぢやない、ヲヽ道理ぢや〳〵可愛や」と、抱しめ〳〵聲立てゝ、男泣にぞ歎きしが、漸〳〵涙ふり拂ひ、「アヽ惡い孤殿、おれまでをそゝなかして泣かした程にの、サア〳〵さつぱりと機嫌を直して、ソレ昨日買うてやつた疣太鼓、それを叩いて遊ばしやれっおれが守してやりませう」「イヤ〳〵太鼓いやぢや。おりやねむたい、かゝ樣と寢たいわいなう、寢さしてほしい」と稚子の、わやくも頑是なき寢入。「ホヽコリヤもう寢入つたさうな。ハテ子供といふ者は、とんと罪のない佛樣ではあるはいの。ドレ伯父が寢さしてやらうか」と、倶にふしどの草筵。折節竹の音も冴えて、吹暮しなる虛無僧の、宿求めんと籬に寄り、「ムヽ爰に干してある此四身は、慥に覺ある小袖」と、取らんとするを後から、こりや盜人めと二三人、摑みかゝるを寄せ付けず、振廻したる尺八の、たけた手利にぶう〳〵ども、眉間肩先腕骨脊骨、ぶちのめされてちり〳〵に、皆我先と迯歸る。六助内より屹度目を付け、「見れば賣僧の贋虛無僧、よつ程味をやりをつた」と、詰る詞を聞咎め、「ナニ贋虛無僧の賣僧とは」「ハテ掟に違うた身の廻りといひ、第一宗門の姿で、喧嘩口論ならぬ筈。又常人が理不盡をいひかけても、隨分如法に濟ませよとは、本山からの戒でないか。其上尺八の本手は嘘かず、今時流行雜な手を嘘き歩くからは、贋者というたが誤りか。山賤はして居れど、夫程の事は知つて居る。何とでごんす梵論字」と、

法華經と囀るに、身のせはしさに取紛れ、念佛もろく／＼に得申さぬ、ア、勿體ない／＼。中し母者人、如才やごんせぬぞや、必ず呵つて下さるな」と、位牌に向ひ合掌し、在すがごとき孝行を、感ずる天の加護やがて、深き惠みもありぬべし。一心不亂他念なく、打鳴したるりんの音に、さそはれ歸る稚子の、目もとしを／＼なき母と、しらで焦るゝ子心に、聞覺えてや拾ひ取る、小石つみては嚊樣と、したふ涙の雨やさめ、草葉に落ちておのづから、手向の水の哀なる、賽の河原を目前に、見やる六助こらへかね、其儘かけ下り抱き上げ、「ヲ、尤ぢや／＼、尤ぢやはやい。どうぞ逢はしてやりたさに、何所ぢやと問へどわかちは知れず、勿論預けさしやつた人は、只一言も得いはぬ最期。スリヤ何國の誰が躮かは知らねど、いたいけにしをらしう、伯父樣々々々と廻すもの、憎まうとて是が憎まれうか。可愛や／＼」「コレ伯父樣、かゝ樣はなぜござらぬ。かゝ樣ほしい、かゝ樣なう」と泣叫ぶ。「コレ其樣に親を戀ひこがれて、煩ひやなどしてくれなよ。ひよつと死んだら今の樣に、さいの河原で石の數、一重積んでは父をしたひ、二重積んでは母親を、尋ねこがれて六道の、地藏菩薩に取りすがり、父よ母よと泣くといやい。おれも二人の親に離れ、女房もなければ子供同然、ほんに親に逢はれる程ならば、さいの河原は未な事、八萬地獄の底へでも、尋ねて行きたい逢ひたいもの。何辨へない心から、逢ひたがる

心置なき饗應に、「イヤなう御亭主、どうやら獨住の様に見請けましたが、左様かの。但し御兩親でもござるかの」「イヤ〳〵、母一人ござつたれど、近き頃相果てられ、今ではほんの寡ぐらし」「ヲヽそれは不自由にござらう。何と物はいうて見ずくぢやが、わしを親にさつしやれぬか。斯う見た所が、丁どよささうな親子ではないかいの」と、ずつかりした事いうた顔、どうやら小氣味惡洒落な。「ハヽヽ、座興も旅の憂さはらし、テモ氣の輕いお年寄ぢやなう」「イヤコレ座興ぢやない、眞實親になりませう」「ムヽそりや又なぜな」「サア心ざまの逞しさうなこなたと見込んで來た事ぢやもの、まんざら無手では來ぬはいの。コレ、爰に四五十兩程はしつかり、土産も持つて居るし、まだ其上に味い金設けの相談もあるはい。サア〳〵早う親子になつて、何もかも覆ひかくしなしに打明けて談合する氣はないかいの」と、金から取入り一詮議と、せけどもせかぬ小點頭、「ヲヽ品に寄つたら談合もせう、親にもせうが、とつくりとおれが心の極るまでは、退屈ながらあの一間で、マアゆくりと待つたがよい」「夫ならとんと腰すゑて、やんがて孝行請けませう」と、互に探る肌刀、身内と知らで暫くは、疑ひあひの破障子、引立ててこそ入りにける。跡には不審取つ置いつ、思案吹散る春風に、梅が香したひ鶯の、囀る聲に法華きやうも、既に暮れぬと告げぬらん。「ハヽ刻限も違へず鶯がもう鳥屋に來た。いか様鳥でさへ

めてある掛目よりたんとある干鰯と解く」「其心は」「ハテまけた聲ぢやと思はるゝ」と、にがり切つてぞ歸りける。「あいらがあの樣にいふのは、一手も習ふ師匠ぢやと思ふからの深切、馴染のものどもに愛想つかされても、人の爲になる事なら厭ひはせぬ。併し得心した事ながら、負けたと思やがつくりと力ない。ヤ是は扨、腹までが急に力なうなつた程にの、オットよし〳〵、昨日庄屋から貰うたぼた餅、鼠が引かずばやつぱり其儘あるで有らう。ドレ孤殿にも喰はさう」と、表に出でてそこらを見廻し、「コレ孤殿戻らしやれ。それ崖へやなど落ちまいぞ。是は又何所に遊んで居る事ぞ、孤殿々々。イヤ〳〵戻つた所で彼のぼた餅がなくば手持ぶさた、先有るかないか見てこう」と、子供にさへも僞りを、いはぬ生得生抜きし、梅と椿の大木を、直に住家の門柱、立ち添ふ花も八重葺の、霞の屋根に蔦の壁、草の扉に彳む老女、外面に干したる四身の小袖、ハテ心得ずと差覗き、見入れる家の一壁に、鐵棒鼻捻山刀、半弓なんど懸け置きしは、山賊にてもあらんかと、心に納めしとやかに、「コレハ心願あつて國々の神社を廻る年寄の一人旅、脚を痛め迷惑致す、暫しの舍り御免なれ」と、案内聞くより六助は、納戸を出でて迎へ入れ、「見れば御老人の旅勞れ、嘸御難儀、宿はせずとも、休息程の事は緩りつと御勝手次第」「是は是は忝い、左樣ならば」と打くつろぎ、圍爐裏に緩り罐子の下、さしくべる木もほた〳〵と、

めし氣は無いぞいの。必ず大切にさつしやれ」と、いひつゝ見やる畠道、眞黑になつて山賤ども、すたくいきせき走り付き、「サアくく六助殿、内へ這入つたく。へしやげたはいのく、こちらまでも鼻がへしやげたはいの」「ハテやかましい、何の事ぢや」「何の事とはこなたの事ぢや。六助に勝つた者は抱へうと、殿樣から方々へ立てて置かしやつた高札を、奴どもが皆引抜いていんだはいの。ぢやによつてへしやげたはいのく」「ソリャ何ぞあつちの勝手づくで持つていんだもので有ろぞい」「イヤく夫ばかりぢやない、六助めが頰桁とはきつい違ひ、ぶたれをつたが其いぢらしさ、大方骨が碎けたであろ。イヤ今時分は泣くく天窓のかけを尋ねて居るであらうのと、口々ぬかして往にをつたが、こなさんほんまに負けたのかい」「イヤ嘘ぢや、殿樣の御意ぢやから、勝負をせうと言うては來たれど、爰で立合うては晴立たぬ。殿樣のいひ付ならば、御前きろりがよい、小倉からお召しなされたら、何時でも行つて勝負せうと追戾したが、それを腹立てて惡口いうたのであろぞいやい」「ムヽさうかいなあ。それに又額の其疵は」「是か、是はあの、ハヽヽ、それく、あの著物干しに出て、入口の石に蹴躓き、竹垣で摺破つてのけたのぢや」と、嘘もまつかい血にそみし、額押へてくろめる詞、しぶくながら栗右衛門、「イヤコレ殘りの衆ら謎がある、六助先生が今の詞とかけて」「ムヽ何と解くの」「サア極

いては召抱へよと、兩人へ見分の役仰付けられた。よつぽどむづかしい試合であらうと思ひの外、イヤ手間も隙も入る事か、彼城下町の煤取に、古疊を叩くより心安く見えたはい。ハ、、ハ、。扨々先生恐れ入つた、イヤ先衣服を召替へられよ。早く〳〵」と廣蓋に、吉良流の折形包、熨斗目の衣服麻上下、御紋付に著せかゆれば、忽ち見かはす其人柄、詞付横柄に、「イヤナニそな者、假令打負けたればとて力を落すな。是からが修行の所だから、隨分出精致したがよい。後々はよくならう〳〵」「コレ先生いらざる御教訓、お構ひなされな。ヤイ儕御領分の奴なれば、お慈悲を以て深きお咎はあるまい。なれど、以後をきつと嗜みをらう。ソレ家來ども、乘物是へ、イザ先生お召しなされ」「是は憚り、やはり此儘歩行致さう」「イヤテヤ、只今よりは殿の御師範、我々が爲にも先生なれば、ひらに〳〵」「然らば御免」と乘移るを、直に舁出すお六尺、七尺去つて師範を得、悦び勇み出でて行く。門送りして六助は、つゝくり立つて獨言、「ア、誰々も孝行にはしたいもの、見ず知らずの人なれど、親御を大事に思うて、侍のいひにくい事を打割つて頼ましやつた、其實心な所がどうも默止しがたなさ。契約の通り打まけて進ぜた今日の試合、イヤコレ必ず禮には及ばぬぞや、是もやつぱり親の威光故ぢやと思うて、存生の内に隨分と、孝行を盡さつしやりませ。おれが樣に死別といふものは、何したとてとんとま

くな泣くな〳〵。ウタねん〳〵ころ〳〵や、寢たらかゝへ連て行こ」踏付けられて七轉八倒、死骸は谷へ、餘念なく、我家をさして三重立歸る。

第九

「勝負は見えた彈正殿、お手柄〳〵。立合ひ召さるゝと早勝と見えました。何と曾平治殿、違うたものではござらぬか」「いか樣軍八殿、いはるゝ通り遖れ御手練でござる。ヤイ六助、我に勝つ者あらば奉公せんなどと、人もなげなる廣言は、最早是でいはれまいがな」「イヤモ段々誤り入りましてござります。何が山拵の透間には、在所の者どもを相人に、我流無法の叩き合、ヤレ六助は劍術がよいの、兵法を拔けて居るはのと、誰いふとなき取沙汰、ぱつと噂立つたのが今での迷惑、誠の藝に出合うては、中々叶ふものではござりませぬ。こはやの〳〵」「ソリヤ知れた事だ。俤が雜言吐くを殿も憎しと思し召せばこそ、六助に勝れし者あらば、五百石にて召抱へんとある高札を、所々に立て置かれたてや」「ヲ、サ、然る處、鞍馬山の僧正も閉口する劍術者、微塵流の親玉が顯れ出でし故、殿にも甚だ御悅び、則御前に於て兩人が立合、御覽遊ばされたく思し召せど、家老轟殿が、今一息不呑込だから、俤があばらやにて立合せ、打勝つにお

と、たえ入る息ぞはかなけれ。「コレ〳〵老人、アヽもう息は絶えたか、いとしやのう。何ぢや知らぬが小家の方を指ざして、拜んだは合點が行かぬ」と、見やる小家より稚子が、走り出でて死骸の傍、「べいよ〳〵」と押し動かし、足摺りしたるいぢらしさ。「ハヽア是ぢやな、べいべいといふからは、定めて主の子といふ樣な事。コレぼん、こはい事はない。こなたは何所で、とゝ樣の名は何といふぞ」と尋ぬれば、かぶりふつて泣くばかり、「アまだ辨へのある年でもなし、思へば〳〵不便なこと。コレ死んだ人、氣遣ひさつしやるな、此子はおれが預つて、親御の手へ屆けます。サア〳〵ぼんち、是からおれが連れていぬ。是はしたり、著物まで血だらけぢや」と、いひつゝぬがす四身の小袖、腰に挾んで稚子を、懷へ抱入れ、「たくましい男の子ぢや。ヲヽ泣くな〳〵〳〵〳〵。ウタねん〳〵〳〵や、寢たら嬶へ連れて行こ」と、すかす間に以前の惡者、性根付きしか起上り、「ヤイ、うぬは何所から出てうせて、何で仕事の邪魔ひろぐ。アヽ聞えた、おいらをのめらせ其間に、銀をうぬがくすねたな。さうはさせぬ」と後抱、しめ付くるを見向きもせず、ウタ「ヲヽかはいものを誰がいの、起きたら山からこはい伯父が、ソレ〳〵隱りよ、ハア」と身のひねり、前へどつさり起しも立てず、素頭みぢんに岩の角、これにもこりぬ門脇儀平、むしやぶり付くを頭轉倒、胴骨しつかと、泣出す懷。「ヲヽ泣

けて行過ぐるを、物をもいはず拔打に、肩先四五寸切下ぐれば、ウンとのつけに反りながら、「ヤアだまし討とはにつくい盜賊、高の知れたる下郎と侮り、不覺を取りし口惜しや」「ヤイヤイヤイ、下郎とは慮外者め。吉岡が若黨佐五平、門脇儀平見忘れたか。京極殿に一味の科、追放しられて此ざまなれど、切取するは武士の常、おのれが連れてをるは、お菊めがへり出した衣川が小倅、そいつ共にぶち放すが内匠殿の心休、覺悟してくたばりをらう」と、聞いて佐五平侮りし、「ナニ門脇儀平とな。エヽ老眼故見違へて殘念々々。敵の荷擔人主人の仇、是しきのかすり疵、やみ〳〵一人死なうか」と、口にはいへど稚子の、身の上いかゞと心は空、見廻す小家は是幸ひ、「ちつとの間這入つてござれ」と、押し入れて眼を配れば、すかさず二人が切付くるを、手負ながらもさすがの佐五平、拔放して切結び、二人を相手に働けども、初太刀の痛によろめく老人、切るやら突くやらはつるやら、なぶり殺しの折も折、水汲入れて六助が、戻りかゝりし此場の體、樣子知らねど飛びかゝり、二人が襟上引摑み、力に任せ投付くれば、ぎやつとばかりに絶入つたり。六助手負を引きおこし、「コレ老人、氣を慥に持たつしやれ。ホホ扨切りをつた、最ちつと早くば斯うはさすまい。コレ御老人〳〵、旅のお人」と呼生けられ、物は得いはず佐五平が、小家に指ざし手を合せ、「賴む〳〵」も口の内、深手の弱りがつくり

ひ直様お暇」「必ず待つてをります」と、約束かたき胸と胸、解てくだけしきつする男、共に介抱母親を、負はすも負ふも孝行信義、互の目禮浪人は、別れて歸る元の道、六助跡を見送つて、「アア親といふものは有りがたいものぢやなア。見ず知らずの侍なれど、誠の心を感じた故、負ける試合を請合うたれば、悦び勇んで歸られた。是を思へば親程大事の物はない、何をするも母への追善、どうで今夜はいなずばなるまい、お墓へ水なと新しう、替へておかう」と小家の内、取出す桶は淺けれど、孝行深き谷水の、淸き流へ汲に行く。春の日も傾く運のはかなさや、何とてかゝる憂き難儀、吉岡一味齋が若黨佐吾平、お菊がかたみ稚子を、抱けど老の足弱く、杉坂越にさしかゝる。「ヲヽィ〳〵」と麓より、走り付いたる二人連、かますの袖も角ある人相。佐五平は立止り、「最前から呼びかけるは身どもがことか」「ヲヽ身どもとも〳〵。親仁どの、馴々しい事なれど、ちつとこなんに無心があつて、麓から付いて來たのぢや」「ホヲ無心とは何の無心」「ハテとぼけまい。人絕した山の中、無心といや知れた事ぢや。懷に持つて居る、路銀が借して貰ひたい」と、跡と先とを引挾み、直にはやらぬ荒縞の、橫には太きしかけなり。見て取る老功にこ〳〵笑ひ、「扨はうぬら山賊ぢやな。ハアテ目利の惡い、三五日の貯はあれど、銀というて持ちはせぬ。よし有るとても我達に、借してくれる銀はない。そこのいて早通せ」と、引退

やと思案の終り、所詮義を捨て恥を捨て、勝負に負けて下さる様、無體の頼せんものと、思ひ詰めしも母の爲、とはいひながら、武道にはづれし此願ひ、弓矢神の冥加にも盡果てん。腰拔武士人でなしと、おさげしみも存じながら、母故なればちつともいとはぬ。推量あつて右の段々、御聞入れ下さらば、御恩は死んでも忘れまじ。限りある老母が命、見立てし後は國主の御前、今の子細を申上げ、腹切つて御恥辱、其時雪ぎ申すべし。ひたすらお願ひ〳〵」と、土に頭をすり寄せて、涙と倶に頼みける。六助は物をもいはず、默然として居たりしが、やゝあつて横手を打ち、「あつぱれ〳〵感心致した。恥を捨てての御孝心、それでこそ誠の武士。いかにも聞屆けました負けませう」「エ、何とおつしやる」「イヤサア、御手練もござらうが、おそらく六助を打たん者、マア近國には覺ない。ガ我とても母におくれ、明暮戀しう存ずるばかり、親持ちし身は御同然、御志推量致した。六助こなたにぶたれませう」「スリヤ眞實聞分けられ、勝負に負けて下されんとな。ハヽア有りがたい〳〵、御恩は此身に餘る悦び。コレ〳〵〳〵母人樣、倶にお禮を〳〵」と、いへど聞えぬ聾の悲しさ、「詞に盡きぬ御情、重ねて緩々御返禮」「ア、イヤイヤ是も則ち親の恩、隨分孝心怠なく、御出世あらば我等も大慶。隙取る内に人や聞く、片時も早く試合の願ひ、再び逢ふは表向、所はきらはぬ御浪人」「ハヽヽ、重々深き御仁心、仰に從

ござりますぞ」「コレハ〳〵お尋ねに預るも他生の縁、拙者は元上方の浪人者、御覧の如く母一人、老年の耳は聞えず、何卒宜しく主取致し、老母を育む種にもと、此西國へ下れども、微運の某、有付とても定らず、斯くの仕合。見ますればこなたにも御長髪の體、殊に新たなる墳墓と申し、率爾ながら御親族に」「ハイ、わしも獨の母に別れ、忌明まで墓の前で、せめて香花取りますばかり」「夫は近比御愁傷察し入る。シテこなたの御在所はな」「此麓の毛谷村六助と申す者」「ナニ、其元が六助殿。ホイ」と吐胸を差うつむく、顔打守り不審の六助、「名を聞いて濟まぬ顔色、何ぞ樣子ばしござるかな」と、尋ねられて面を上げ、「お目にかゝるも面目なけれど、申さねば叶はぬ時宜、ちと折入つて其元に、お頼み申したき儀がござるが、何とかお聞届け下されうか」「ハテ何事か知らねども、樣子によつて頼まれませう。マア其譯はな」「成程思召もいかゞなれども、只今も申すごとく、一人の此母、ぶがんの上に百日と限りある膈病、せめて一日半日も安樂にくらさせたく、勤仕を望めど心ばかり、詮方盡きし折に幸ひ、當國へ來て見れば、所々に立てたる國主の高札、毛谷村六助に打勝ちなば、五百石の知行充行はんとの儀、見るに心は飛立てども、聞及びたる六助殿、我とても一流は立つれども、中々及ばぬ未熟の某。トあつて此儘打過ぎなば、いつを春とて母人の、笑ひ顔見る時節もなし、兎やせん角

殿様より高札が立つたと國中は是沙汰。ソリヤ慥に殿様が、こなたを家來にせうとおつしやるを、何ぼでも合點さしやれぬ故、腹立てての事ぢやあろ。なぜ又奉公さしやれぬ」と、問へば六助打笑ひ、「ハテおれぢやてゝ出世するをいやではなけれど、元劍術を覺えたも高良明神の靈驗、我に勝つ者に逢はゞ奉公せよと、神の禁破られぬ故、どなたへも斷りいうてゐるのぢや」と、聞いて皆々納得し、「いか様尤さうな事ぢや。ガそりやさうと、いつまで爰に居るのぢやぞいの」「イヤモウ唐では三年も居る事さうなが、明日は五十日の念佛も申さにやならぬ、今夜いんで其拵へ、皆も揃うて參つて下され」「ソリヤ御造作ぢや。ヤ長話で日はたける、それ聞いてがつくりとひだるなつた。たべ立ぢやない聞立に、もういにます」と惣々が、柴荷てんでに打ちかたげ、鐇をさして歸りける。六助は獨言、「皆懇な衆ぢやな。シタガ母者人は嘸やかましごんしよ。ドリヤ抹香でも繼ぎましよ」と、立つや煙も一筋に、姿には似ぬ香爐の薫、身は埋火の埋もれて、尾羽打枯れし浪人風、背に老いたる母と見え、六十を越すや坂道を、漸たどり墓近く、「イヤ申し母人、だくぼくの山道、負はれてござつても嘸御苦勞、ちと是でお休み」と、おろして敷かす菅笠の、上にいたはり足腰を、撫でつさすりつ介抱に、六助つく〴〵感じ入り、「母御さうなが、お年寄を連れまして御氣特なお侍、マアどれからどれへ

故、今朝供へた炒り物、是なと入れて茶を參れ」と、何がなあいそ差出す、あられ喰ひ〳〵、「コレ槇藏、樫六もどう思やる。死なれた婆樣は仕合せ者ぢや、一人も一人からと結構な息子を持たれた故、居られる時から生佛、今石佛になられても、アレ見やしやれ、やつぱりあの樣に、四十九日のけふまでも、三度々々拵へてすゑ供へられるといふは、果報なわろぢやないかいの」「チ、松兵衞のいやる通りなれど、六助殿の孝行が、己は手ひどく迷惑するてや」「ソリヤ又なぜに」「さればいの、又してもこちの婆樣が、儕は不孝者ぢや、アノ六助を見い、六助をといはるゝ故、來て見ればあの通り。何でも昨日は孝行をやらかして見てこまそと、山を休んで打かゝり、十日前の孝行を一時に拵へ、くらひ物の喰飽、悦びは仕やらいで、ヤイのらめ、仕業はせずに役にも立たぬ錢を遣ひをると小言八百。イヤモウ孝行も自由にさす事ぢやないていなう」六「ハテそんな事はいはぬものぢや、どの樣にいはしやろとも、逆らはぬが直に孝行。親のあるうちぢや、皆隨分大事にかけさんせ〳〵」「ソレ〳〵、何所も孝行が流行るかして、六助丁どこなたの樣な大きな侍が、母親を負うて歩行くと村での噂。聞きやこなたの内を尋ねたげな、大方こりや孝行くらべに來たのぢやあらう。コレ必ずとも負けまいぞや。イヤ負けまい次手に珍しい事がある、此間から端々に、毛谷村六助と試合して勝つたなら、知行五百石で抱へうと

は、もしや尋ぬる敵か」と、いふ間稲妻劒の電光、ひらりと飛んでをちこちの、霧に紛るゝ曲者を、遁さじものと一足に、飛んでをりしも冴え渡る、月の光を力にて、跡をしたうて追うて行く。

第八

見えわたる、高根々々に消え殘る、雪のふゞきの音さへも、吹きあらしたる松の風、いとゞ淋しく杉坂は、村山里に亡人の、名をのみ殘す石の數、邊りに立ちし竹柱、茅が軒端もそこ〳〵に、尺にもたらぬ草莚、内に音する鉦のこゑ、毛谷村の六助が、母におくれし其日より、明暮爰に在すがごとく、喪に入つて悲しみを、盡す心ぞ殊勝なり。日脚も晝に程近き、山挊の樵ども、戻りかゝつて小家の前、「六助殿どうぢやの、仕業の次手に見舞ひます」と、口々いへば念佛を止め、「ヲ、皆精が出るの。煙草でも呑んで休ましやれ」「そんなら皆一ぷくせうかい」「ヲ、よかろ〳〵」と荷をおろせば、「サア〳〵〳〵爰へ〳〵。幸ひ入ればなが沸いた、マア初穂を母者人へ、お茶湯上げて」と墓の前、供へ置いて手を仕へ、「母者人御らうじませ、皆深切に見舞つて下さつた。アヽ生きてなら悦ばしやらうに、何をいうても片便り。ヤ母者人が好物

も留め飽かぬ、きだんになる氣はないかいな」と、もたれかゝれば、「有りがたい、初對面からはずんだ穿鑿、斟酌なしに付合ふからは、善は急げぢや今爰で、泣かして見たいは此懐」「ヲヲしこなしやの。肌打明けるはお前の心中」「見たくば見せう望みが有るか」「サア望んで見たいは此劔」「イヤあぶない事よしにせい」「イヤ切るわいの」「ソリヤ誰を」「ハテ指を。わしから心中見せるのぢや」と、いふより早く劔の鍔際、物打しつかとどり頭、渡せ渡さじ一二のせめ、帶取り芝引きひしぐるばかり、捻合ひ引合ひ引取るはずみ、拳放れて夕顔の、棚へはからず劔上れば、取りおろさんとかけ寄るを、遣らじと支ゆるお園がひはら、土足の當身にたじ〳〵〳〵、たじろく隙に、かけ登れば、つゞいて跡よりかひ〴〵しく、身は鼯鼠と這上り、互に捜し尋ぬる太刀、取るよりいらつて切りかくる、强氣の曲者劣らぬお園、打合ふ刀は氷柱のごとく、微塵に碎け飛散るにぞ、跡にしさり身を構へ、「鍜ひし刀も名劔の、德におされて折れたるものか」「ヲ、不思議をあやしみ音を啼きし、其香爐こそ久吉が、祕藏の器物と聞きたる故、打碎いて暫時の腹いせ。又是なる夕顔の、實のりし數の瓢こそ、取りも直さず千なり瓢簞、眞柴が家の馬印、まつ此樣に」と小踊し、只一なぎに切拂ひ、直に踏込み打ちかくるを、くゞるは神力くさり鎌、ちやう〳〵はつしと請止めて、「今打ちかけたる虎亂の太刀、切先下りに打ちおろす

エさは知らずしてむざ〳〵と、あつたらしき郎等を、失ひしこそ殘念々々。併し心得がたきは此年月、過行き去つて今日只今、呼びかけられし子細はいかに。ム丶、扨は、山崎の合戰に打負け、此所に命を落す際までも、帶せられたる蛙丸の名劍、久吉が手に移らん事を悔みいきどほり、是なる池中に隱せしとや。則御首をも此池にて、洗ひ流せし其血汐、こりかたまりし魂魄殘り、守護せられたる名劍の、其名を感じ集つたる、蛙の聲をかりそめに、素姓をしらせ劍をも、讓り與へん御所存とな。ハ丶有りがたや忝や。其上に我が行末の事までも、思し召されて久吉に、遺恨の刃は合はすとも、四海に望をかくるなとは、後車のいましめ子を思ふ、父の大恩ハ丶、ハ勿體なや」と、三拜九拜悅び涙、いで亡父の御賜、拜領せんと浮草を、かき分け探り當りし名劍、押戴いて拔放せば、劍の氣を得る蛙面の相、猶も頻りに蛙の聲、又も嘯出す香爐の奇特、思はず兩人飛開き、互にすかし、見て見ぬふり、劍を鞘に曲者は、納り返つて行先に、向へばよくる右左、付き纒はれし蔦かづら、「長き契りを神かけて、忘れぬ人を今更に、往なしはせぬ」と引止むる。「往來を妨げる、わりやまあ何所の者ぢや」「アイ私が生れは永祿九年五月十日の誕生」「ヤ、ハテナア、夫が又何で爰に居りやる」「ハテわしや惣嫁」「ヤ惣嫁ぢや」「サアさうでなくば傍へ寄つて、抱付いて見やしやんせ、自慢ぢやなけれど伽羅の香は、幾夜留めて

郎めごときのどん腹を、百二百切つたとて何惜しからう。よし御宥免あるにもせよ、此様な不吉者が、大切な敵討に、何とお供が致されませう。エヽ淺ましい業さらし」と、我と我身を掻きむしり、五體をもめば疵口より、流るゝ血汐紅に、草葉染めなす血の涙、落ちたる守の臍の緒を、引摑んで眼を見開き、「エヽ思へば〳〵腹立や。主人の敵、我身の仇、何國に隱れ忍ぶとも、一念通さで置くべきか」と、怒りの齒ぶしに噛みしめ喰ひさき池水へ、はたと打込み引取る息、俄にはげしく逆浪打ち、吹上げ吹卷く水煙、忽お園が懐中に、音を啼く千鳥香爐の不思議、圓「ハテいぶかしや。池水はげしく立登れば、啼く音を發する千鳥の香爐。もしや吉事か、但しは凶事か。何にもせよ、怪しき業を見聞くよな」亡靈「ヲヽイ〳〵ヲイナウ」「行くと云ふのにせはしない、頻りに俺を呼返すは誰ぢやぞいやい。ヤア何所からぢや、慥こゝらに聞えるが」と、うろ〳〵戻る銅八は、池の邊りに聞耳立て、「ヤ、何と、明智光秀が亡魂ぢや。ハテナウ其わろが又何でおれを呼返した。ムヽ、ヒヤウ、ヤア〳〵〳〵、すりや今まで眞實の親と思ひ居つた小島の郡代京極新左衞門は、我を拾ひし養父にて、誠の父は明智殿であつたよな。ハヽア思ひ合せし事こそあれ、晉成が館にて、四法天但馬我を見咎め、主君の面ざしに能く似たり、光秀殿の忘れがたみにてあるべしと、言つたる詞ひし〳〵と、今こそ思ひ當つたり。エ

ますまいかな」「稚名さへも記してない書付、あんまりばつとした物ぢやが」「スリヤ手がかりにはなりませぬか」ホイはつとばかりにどうど坐し、思ひ極めし身の覺悟。お園は形見の黒髮を、撫でつさすりつ肌に添へ、「七度結んで姉となり、六度契りて妹と、いひかはしたる甲斐もなき、親の敵をうつゝとも、夢辨へぬ稚子に、さぞや心の引かされて、迷うて居やるであらうなう。迷うてなりと今一目、姿形を見せてたも。逢ひたいわいの」と聲を上げ、くどき焦れて歎きしが、漸涙押とゞめ、「オヽさうぢや、此切髮を添へとせば、兄弟寄添ひ居る心、先の世までもはらからの、契り忘るな」長かもじ、そのこまくらの事までも、未來へつげの櫛のはに、解きほどかれぬもつれをも、しのぎおほせて勝山と、緣起祝ひし黒髮の、色もつや／＼烏羽玉の、闇こそ幸ひ友平は、腹存分に切りあばき、一息ほつとつき影の、出汐はおのが身の知死期、苦痛隱せど夫ぞとは、覺りしお園も氣を張詰め、「ヲヽ天晴健氣の切腹は、慥に園が見屆けた。此世にござる母樣は、たとへ御用捨あるにもせよ、未來におはするとゝ樣へは、命捨てずは言譯立つまい。ヲヽよう腹切つた、出かしたなあ。とはいふものの不便や」と、悔み惜しめば友平は、一期の終り大聲上げ、「ハヽヽヽ有りがたや忝なや、ふがひない奴めでも、家來と思し召せばこそ、お歎きなされて下さるゝ。エヽ勿體ない罰當り、申譯になる事なら、下

せうぞいやい〳〵」「ヲ、お道理だ〳〵〳〵、道理でござりますはいなう」「サ、コリヤ何所での事ぢや」「サレバ、須磨の邊までお供は致しましたが、旅勞れにや御持病發り、うろたへ廻つて私めは、駕籠借るべいと跡の宿へ引返し、又立戻る途中にて、あやしき曲者、下郎を目がけ切りかけしを、拔合せ二打三打、合す間もなく迯行きしを、追かくる足元に、痛はしやお菊樣、明所もなしに數ヶ所の深手、呼びたけつても返らぬお命。まだ天道のおひかへか、若子樣にはお怪我もなければ、悲しい中にも心を勵まし、此曲者めは必定敵、追付いて捕へんと、思へど遙時も過ぎ、方角知れねば詮方も、なく〳〵御骸取納め、御筐にもと切取りし、此黑髮をお妹樣と、思し召されて下さりませ。御歎きもお腹立も御尤だ、御尤でごはりますはいの〳〵。いしこらしくお供をしながら、此樣な事に逢はせましたは、手を出してせぬばかり、やつぱりおらが殺しましたも同じ事、主殺しだわいの〳〵。ずだ〳〵になされたとてお恨はない。サア突かつしやりませ、切刻んで下されよ」と、首差付くれば泣く目を拂ひ、「コリャ身の言譯をするに及ばぬ、少しなりとも手がかりに、なるべき事をなぜいはぬ、うろたへたか友平」と、いはれてそれよと取出す、守り袋を手に取つて、此中にはいか樣な物があるぞ」「サア臍の緒がごはります」「シテ書付は」「永祿九年五月十日の誕生とばかりごはりますが、手掛りにはなり

「ム、さういやるは友平ではないかいの」「エ、さうおつしやるはお園様でござりますか。是はしたり、ヤレ〳〵嬉しや〳〵、何時か仰置かれましたる御旅宿へ、漸著仕つたる所、是に御座なさるゝと聞くやいな、イヤモ知らない道を暗雲に、尋ねましてごはります」「ヲヽ、大儀々々。長しい道中といひ、女子供の初旅なれば、さぞかしそなたのいかい苦勞、よう介抱してたもつたなう。さうしてアノ妹や彌三松は、旅宿に休んで居やるかや」「成程ほん様は御旅宿で、佐五平に急度預け置きましたが、隨分御機嫌は能くござりします」「ヲヽ、それで安堵しました。いやもう案じられたは妹が事、虚性な上に持病の癪、もし道で發りはせなんだか、達者であつたか、無事なか」と、かきたぐる程尋ねられ、答へん詞あら涙、膝に淵なすばかりなり。「ム、さしうつむいて涙の體は、合點が行かぬ氣遣はしい。エ、どうやら胸がさわがれて心元ない、様子を早う聞かしてくれ。なぜ返事せぬコリヤ友平、何とぢや、どうぢや」とせりかけられ、「エ、無念な、口惜しうござりますはいなう」「ナニ口惜しい無念なとは」「サア申上ぐるも面目ない事だが、お妹様お菊様は、人手にかゝつてあへない御最期」ヤアと仰天氣は半亂、餘りの事に涙も出でず、むしやぶり付いて引きしやなぐり、「エヽ〳〵〳〵何のことぢやぞいやい、誠かいやい〳〵」「ヲヽ、お道理だ〳〵わいの」「サア何者の所爲、敵は何やつ。早ういへ、こりやどう

得たる事なれば、外ならず門人同然の傳五右衞門、是までも書通を以て音信絕えず。然る所一味齋殿不慮の横死と聞きしより、エヽしなしたり殘念や、直樣馳付け諸共に、敵の詮議と存じたれど、仕官の身なれば詮方なく、明暮無念に思ひしが、不思議にも今その息女に廻り逢ひし事、吉岡殿を再び見申す心地して落涙致す。さりながら心得ぬ其有樣は、エヽ聞えた、コリヤ敵をねらはん其爲に、姿をやつせし辻君なるか。ハテサテたくましきお志、女ながらも天晴家柄、いか樣親父の胤なるぞや。ホヽヲ出かされたり、賴もし」と、感じ入つたる面色に、人の心の花見えし、園ぞと名乘り手をつけば、傳五右衞門は懷中より、燒印の札取出し、「敵の在所分明ならずば、六十餘州の端々までも、搜し尋ぬる所存ならんが、今九州には新關あつて、迂濶に通行なりがたし。其こそ關所の往來札、惠むは夜發へ今宵の花代」「エ、忝い お志、本望遂げて此お禮は」「ヲヽサ目出たう承はらん。おさらば」「さらば」と默禮し、誠の心つくし人、馬を早めて急ぎ行く。便りなき身は世の人の、情の詞力草、伏拜みてぞ泣く淚。かゝる折からいつきせき、來かゝる奴もまつ黑な、紺のだいなし分らぬ闇、ほうど躓き行當り、「是はしたり、めつたに心のせきまする者だから、でつかちない麁相致した、まつぴらく。次手にお尋ね申さうは、此所の鎭守とやらに、女中一人通夜なされてござるのを、御存じはあるまいかな」

リヤ左差いたらなア」と寄りかけしが、我より拔群大女房、見るよりしよけるあまへ聲、「伯母さん地取見にごんせや、だんないわいの。どいつでも止めをつたが最期、此いたち川が聞かんのぢや。エヽコレおれが力が見せたい」と、嘘は見えすく褌で、伊達こきちらしいたち川、尻こそばうも逃歸る。又の往來をまつ蟲も、すだく鈴蟲轡の音、八條流の乘振に、立派を見する西國武士、進ませ手綱行く駒の、道をさへぎり、「申し〳〵、遊んでおくれ」と掛鞍に手をかくれば、「ヤイコリヤ〳〵、御用先を妨ぐる不敵の女め、止めるに事をかき、馬を止むるとはよつ程な助兵衞やつ。そこ放せ、下れ〳〵下りをらう」「イヤ、コリヤ〳〵家來ども暫く待て、摺留の心を以て扣へしは、樣子ある女と見ゆる。燈を持て」と提灯の、火影にとつくと互の人柄、見上げ見下し打點頭き、「コリヤそち達は行先の出口に扣へ待合せよ。早行け〳〵」と家來を拂ひ、「實さま絕えて久しき對面といひ、殊更夜隱の事なれども、中々見違へは致さぬ。こゝ元は藝州吉岡氏の御息女でござらうがの」「エヽ、イヤ左樣の者ではござりませぬ」「イヤイヤ隱召さるゝな」と、馬の三途へ膝折りかゞめ、「拙者事は立浪家の執權、轟傳五右衞門と申す者、一味齋殿の御高名を慕ひ、お國へ推參致せしは早十七ケ年以前、其時そこもとは御幼少の折なれば、よも見覺えは致されまい。御親父には數度御對顏致し、劍術奥義の端々をも、承り

とせねどおのづから、くるす野にこそ著きにけり。「ハヽ、只今途中ながら申上げたる通り、夜發どもは殘らず拂ひ置きました」と、引戸開くれば立出づる、容儀器量もよし岡が、娘と誰かゆふげはひ、作りやつして辻君と、見せばや見せん其風情。「今宵も是に通夜すれば、明方に迎ひの乘物。そち達は旅宿へ歸れ、早う〳〵」と追ひかへし、邊り見廻し獨言、「旅宿近邊の人目を憚り、每夜爰まで乘物にて忍び出で、往來の人をためし見るも今宵で五夜さ、夫ぞと思ふ者にも出合はぬは、神佛のお惠みのないのかと、思へば悲しい身の上。一味齋が娘ともいはるゝ者が此樣な、夜發立君の姿にやつし、苦勞辛苦をする事も、皆京極めが所爲故、憎しと思ふ念力に、尋ね逢はいで置かうか」と、男勝りの其魂、一腰隱し置く露の、草のしげみに立盡す、絹物ながらしみづきて、一重に薄き靑侍、通りかゝるを走り寄り、「遊んでおくれ」と袖口に、手を差込めど臆めぬ體、鼻に扇の厭味して、「ハヽア月前の惣州、面白いなあ。併し囊中に四文錢が三銅、是を遣したゞせんの、二文の釣にかゝろより、我住む宿へ歸ろやれ。コレそもじは其處にいつまでも、いなりの惣嫁ぢやあるまいか」と、まつ毛ぬらして、行過ぐる。大道一ぱい大股に、すれぬ太股すれた顏、取出し相撲が步み寄り、「菊野よ、小せんよ。又今夜も居らぬはい。ホヽヲえらいな〳〵。姉よ、一番もんでくれぬかい。いかなお敵でもなア、コ

化物ぢや」「サアそんな事かして、客を押へうとしても、ぬらくら欺して拔けをるは」「アリヤだますぢやない、なまづぢやはいの」男「ハヽヽ、わいらがいふ事聞いて居ると腹がかへるはい」「ヲヽ減ろよりましかいな」男「イヤほんに、わいらも腹が淋しなつたら、早う仕舞うてこちへ來い。なんなと立てるがな」「ハヽお前の所は何所ぢやえ、こちか」「こちや七月のない所ぢやはやい」「ソリヤ何所ぢやいな」「ハテ盆なしぢや」と打笑ひ、荷を振かたげ別れ行く。若黨と、いへども年の古大小、さすがに武家のおとなとて、ぎつと角ある國訛り、「コリヤ〳〵夜發ども、今夕も又われ達に、揚料とやらを下さるからは、宿所へ早く引取れよ」と、財布とくとく明いた口、めい〳〵一歩有封に入る。「年の廻りで有りがたい、今宵で三日金貰ひ、おいどへ土を付けずに仕舞ふ。コリヤマアどうしたお志」「イヤサ別の子細はない。此所の鎭守牛頭天皇は、靈驗あらたなるによつて、手前が御主人、七日の通夜を遊ばさるゝ、御祈禱の其間、施しのお金だはい」「ソリヤこそ樣子がありまの松ぢや」「ヲヽそんならこちらは因幡の松よ。ウタおばゝ四十九で白齒で島田で信濃へ嫁入、ヤレ〳〵〳〵こんな詰らぬ、ヨヤサノサノ〳〵事はない」仇口々に歸りける。「ハテ騷がしい女ども、ドリヤ此樣子御主人へ、申上げん」と老人の、心は先へとつかはと、元來し道へと引返す。薄を分くる秋風が、吹送りたる乘物は、急ぐ

是がよいか」と頬ぴつしやり、強られて附鼻ころりと落ち、「ヒヤア〳〵男の鼻柱を落したな、返せ〳〵鼻返せ」「ひやなとは鼻か」「ひやなぢや」「ヤイ馬鹿め、鼻なら爰に有るはえ」と、蹴ちらかされて砂まぶれの、鼻懐へねぢ込んで、くた〳〵つぶやき歸りける。「何ぼべらぼな奴らでも、まんざら唯も手繰られず、相應に骨が折れる、ドレ一ぷく」とすり燧、火口へ移るちり〳〵日脚、鼻緒ずれしてちんがちが、ちんば引摺り下駄片し、さげた傘辻君の、所體失ふ歩みぶり。「ホヽヲ君達が早う出かけた。雨も降らぬにきつい用心ぢやの」「サイナア、どうやら曇つてあつた故、持つて來て邪魔になる。いつそ獨樂に笠はろかいな」「夜ばりこきめらが何ぬかすぞい、日がな一日阿房どもを相人にほつとりと草臥れる。併しおれがこま廻して手を遣ふのも、わいらが客に腰遣ふのも、しんどは變らぬけたいな商賣。ハヽヽヽ、イヤモとんといや氣になつたはい」「サアこちらも勤は飽いたはいな、コレ聞き、此間も經師屋の提槌見る樣な物で、わしが錢箱をすつての事、突き碎かうと仕をつたわいな」「イヤそりやまだしもぢや。わしや先度、竿の樣な物で突かりよとした」「ハテそれは長い物であつたの」「サア烏差であつたか知らぬ、ホヽヽヽヽ」胴「イヤいつでも小鹿やお仙めは、うき〳〵しけつかるが、黄疸の菊野めは、頬ばつかりが浮々と黄色で、棚の下に小さうなつてけつかる所は、とんと瓢箪の

第七

すがるふす、栗栖の小野の百千草、花の秋とやゆふ顔も、色をまじへてさま〲に、街の多き在所道、直ならぬ身の隱れ笠、袋分銅玉に鍵、畫きし板に寄りたかる、往來の人も摑み頰、「張はどうぢや」と胴取が、獨樂の心木を捻廻し、胴取「サア〱〱親は一割子は四割、欲の慰み氣の藥、えいか〱〱、ソレ廻つて有るぞ。ソリヤ出たは、チツト玉ぢやぞ。五文あるは、味いは〱〱。やつぱり今度も玉のねまりをいてこまそ。玉のねまり〱」「イヤコレ茂九郎、其玉のねまりは人油というて、切疵にようきくげなの」胴「ハテコレ話しせずと皆しか〱張らんせ〱」「ヲイ合點ぢや、玉よ〱」「ヤ袋樣出て下さりませ〱」「コリヤ笠來てくれいよ」「イヤ簑がきてほしい」「おりや分銅にせう」胴「サア皆張はよごんすか。ハア時に鍵は明いてあるの。エイハ、そんなら親から勝負ぢや」と、胴側はずんで眼を三角。六角のこまころりとこけ、「出たのは何ぢや」胴「アイ鍵でごんす」と引かけて、皆なでに錢たくし込む。負腹立てて張人ども、「エヽどうやらくらの有りさうな、けたいなことぢや」と一はな立ち、しやべる男を引とらへ、「ヤイ四三の胴八というて、手綺麗な胴頭を、くらであらうとぬかしたがよいか、

ヤ何ぢや、何でも敵の手がかり」と、袖に捻込み、見廻すこなた、あやしや葛籠の内よりも、きらめく刃先「コハ不思議」と、立寄り紐解き引開くる、内に彌三松、友平見るより、「ヤアぼん様か、ようまめで居て下さつたなう〳〵。シテ〳〵、誰が此中へお前をば、斯うして入れて置きました、譯をいはしやれ、サヽどうぢや〳〵」「イヤ譯は何にも知らぬけれど、かゝ様が入れて置かしやつた。跡で誰やら母様をきついめに合はしをつた。おれが這入つて居る葛籠を、負うていなうとしをる故、出る事はならず。中から此脇差で突いたばかりぢや。かゝ様は何所にござる、おりやかゝ様に逢ひたいわいやい。かゝ様〳〵」と、母は此世になきぞとも、知らず泣く〳〵したふ子を、見る友平は我胸を、百千鈞の鐵槌に、打碎かるゝ心のせつなさ、「ヲヽ道理ぢや〳〵、御尤ぢや〳〵。ガコレ何にも泣く事はない。かゝ様はの、ぼんを連れて跡から來いてゝ、つうつと先へ行かしやつた」「そんならわしも早行きたい」「ヲヽ行かいでどうしましよ。アヽ何にも知らず可愛さうに、佛様ではあるわいな。其佛より此佛、南無阿彌陀〳〵」いたはし菊が亡骸を、見せじ泣かせじ稚子に、隱す葛籠は殯、涙かくせど聲くもり、「サアぼん様行きましよ」と、手を引かれ行く子は下に、母はせなかに友平が、生死を隔つ涙川、浪のあはれや磯づたひ、「かゝ様いなう〳〵」是非もなく〳〵 三重 たどりゆく。

念の最期、哀れといふも餘りあり。「ハヽヽヽまづ一方は片付いた。心がかりはこいつが姉、おれを方々尋ねて居をろ。エヽ思ふ樣なら姉めをぶち放し、我を助けて置きたいわい。エヽ儘ならぬ浮世ぢやわい。死んでも顔のかはいらしさ、ちと笑やいの〳〵。モウ往ぬぞよ、さばや、恨があらば幽靈に成つて出て、おれと一所に行かぬかい。エヽ儘よ、何の死人に文言ぢや」と、つぶやく血刀押拭ひ、鞘にをさまる不敵者、塵打拂ひあたりを見廻し、「テモ扨も、おれにちよほくさぬかす内、ちやくと葛籠を片付けをつた。慈悲深い此内匠樣へ、天道より與ふる糧、忝し」と立寄つて、背負ふ我慢の欲惡心、ウタと「此者共を手の下に、討つはいか樣鬼神か、人間にてはよも有らじ。ハヽヽヽ」思ひがけなき葛籠より、ぐつと突出す小太刀の切先、恂り驚きふりおろす、折から歸る友平が、あやしと差出す提灯ばつたり。「シヤ曲者」と拔合せ、二打三打打合ひしが、ひらりとかはしいつさんに、跡をくらまし失せてけり。「ヤア何くまでも」と、友平が、かけ出す足元躓く死骸。「ヤアコリヤお菊樣が切られてござる。お菊樣〳〵。チエ今一足早くばなア、斯くやみ〳〵と討たしはせじ。エヽしなしたり口惜しや、儕曲者迯さうか」とかけ行かんにも跡氣遣ひ、「此ぼん樣は何所にござる、彌三松樣〳〵」と、心は空に闇路をば、照す燈籠幸と、手早く紐を引きほどき、「彌三松樣〳〵」と、尋ぬる目先、落ちたる守りの袋物、「コリ

間に得心して、サきり〳〵抱かれて寢上らう」と、はつしと蹴られ齒咬をなし、「チヱ、念の入つた極惡人、むだ言いはずと勝負しや。サア〳〵〳〵どうぢや」と詰めかくれば、「コリヤヤイ、ごくにも立たぬよまひ言ほざくなやい。我が爲めには親の敵、おれを其樣に切りたがる、おりや又我が內股の、長刀疵が望ぢやはい。つれないはずと、コリヤなびきをれ」と、猫撫聲の頰憎さ、油斷見すまし鐵石も、割れよとお菊が尖き刀、丁ど請止め、「ヨウ〳〵御手練上達上達。所を我等がまつ斯う」と、付込む刀請流し、拂へば付入る虛々實々、火花を散して戰うたり。さすがかよわきお菊が刀、打落されて「コハ無念」と、漂ふ肩先一刀、切られながらによろぼひ寄り、內匠が柄元しつかと取り、「ヱ、〳〵〳〵口をしや腹の立つ。かすり疵さへ負はせもせず、此儘死なば父上に、冥途で何と言譯せう、言譯がないわいの。ヱ、姉樣一所に有るならば、此無念さはあるまいもの、それも今更悔んで詮なし。體は千々に切らるゝとも、やはか此場を遁さうか」と、氣は磐石の女氣も、深手によわる血の淚。「ヲ、悲しかろ〳〵。コレよう聞きや。マよく〳〵深い緣なりやこそ、親子ともにおれが世話。冥途へ遣るには何切がよからうな、胴切がよからうか、梨子割にせうか、薄切も面白い。待てよ初太刀は袈裟切、二の太刀に極樂參り、佛になれ」と拜み討、直にまたがりとゞめの刀、ゑぐり苦しき四苦八苦、虛空を摑み無

見せじと母親が、フツト燈火即座の氣轉、心ありとは悟らぬ内匠、「コリヤ何で灯を消した。ハア聞えた、暗がりにして迯げうでな。斯う見付けたりや迯がしはせぬ。姿なら風俗なら、春の柳に梅花の薫、前にかはらぬ、うまい〳〵。手強いそちが親吉岡、討つて捨てたち立退いたも、是皆そもじに惚れたから。命にもかへ身にもかへ、思ふ男を其樣に、嫌ふものではないわいやい。空は曇るし人はなし、斯ういふ所で出合ふのが、結ぶの神の引合せ、應というて抱かれて寢い。いやといへば只一討、返り討ちやがそれでもいやか。返答せい、どうぢや〳〵」どうぢや〳〵は口ばかり、目には佛もなかりけり。お菊は今ぞ優曇花の、仇を討たんず氣くばりも、さあらぬ體に、「ホヽヽヽ、内匠樣とした事が、アノわたしやとうからお前にな、心の内に神かけて」「ヤヽ何ぢや、心の内に神かけて」「アイ、惚れて居るはいなア」「惚れてゐるとはきつい嘘」「テモマア疑ひ深い。たとへ業平見る樣な、よい男でもこつちから、思ふばかりはせんがない。ホンニ國に居た時から、付けて廻しつお前の心底、嬉しいとは思ひながら、アイといはれぬ人目の關、今では旅の遠慮もなし、ハテどうなりともなる氣でも、顏見て居ては恥しさに、それ故火をば消したのはな」斯うせんばかりと拔打に、切込む刀を柄で請止め、「其手ぢや行かぬ。さう手剛い程猶執心、應といはねば其體、首切つておいても抱いて寢る。痛い目せぬ

思ひがけなき父上の、劒の難に身をさかれ、冥途に迷うてござるのを、物が知らしていはしたか、杖柱とも姫ごぜの、頼む夫には置き別れ、親にも永離三悪の、はかない悲しいあぢきない、世の憂き事を身一つに、寄せたは何の因果ぞ」と、人目なければかこち立て、正體なみだ地に落ちて、野路の草葉や枯れぬらん。親の心は知らぬ子が、膝にもたれて現なく、寝入ればお菊は顔を上げ、「可愛や坊が内ならば、透間の風もいとふ身の、母が膝をば茵とも、寝冷させじと裾打著せ、我身もそこに友平が、歸るをまつの下風も、假寝の伽となりぬらん。夜も早初夜の空くもり、遠寺の鐘も蕭々と、降る雨凌ぐ傘も、破羽二重の垢付きし、大小腰に摑み差、鑄浪人のみすぼらしく、歩み來かゝり立寄りて、「ヤレ／＼思はぬ俄雨、降ると日和になるが一時、急がずば濡れざらましを旅人の、跡より晴るゝ野路の村雨。太田道灌よく讀んだ」と、つぶやきながら邊りを見廻し、「幸の挑灯ドレ一ぷく」と懐より、煙管取出しすつぱすぱ、「ヤ旅人さうながしかも女、路銭に盡きて野宿したか。さうとも見えぬ身の廻り、松に挑灯かけたのは、道の友待つ目印か。何者なるぞ」と立寄つて、顔差覗けば目を開き、「ヤア／＼そなたは敵京極内匠」「ム、さういふそちはお菊ぢやないか。テモよい所で逢うたなあ。我に逢ひたうて／＼、夢現にも忘れぬ程、戀ひこがれて居たはいやい」と、いふ聲耳に目覺す彌三松。樣子

らい。今にも敵に出合うたら、どうせうと思うてゐるぞ、定めて泣きがなするであろ」と、勵ます母が顔眺め、「ワァイ何の敵がこはからう、今でも爰へ來をつたら、コレ斯うしてこます」と小脇差、拔くより早く飛上り、松の一枝切落す。「ヲヽ出かしやつた〳〵」と、撫でつさすりつ母親が、あいだてなさも先立ちし、父の孫ぞと譽めそやす。折から須磨の家々に、精靈祭る高燈籠、見付ける彌三松、「コレかゝ様、アリャ何の火ぢやや」「ヲヽ、あれはの、先立たしやつた佛様へ、お供へ申す火ぢやわいの」「そんならこちもあの様に火を點して」「ヲヽ内なら安い事なれど、心に任せぬ旅の空、無理な事いはぬものぢや」「いや〳〵、夫でも點して下され」と、頑是ない子にせがまれて、詮方なき葛籠の紐、松にふりかけ蠟燭に、火繩をうつす硫黄まで、旅の用意の馬挑灯、引上ぐれば眺め入り、「かゝ様、こちも此様に火を點すと、死なしやつた祖父様が、是見て嬉しがらしやるなァ」と、聞くに母親胸ふさがり、「たつた一人のほんそ孫、そなたが思うて供へた物、悅ばしやんせいで何とせう、請けさしやんせいで何とせうぞいの。それに付けても父上の、敵の在家尋ねんと、大事の母様姉様とも、別れ〳〵に國を出で、ねらふ月日は重なれど、廻り逢はねばのめ〳〵と、得討たぬ不孝不甲斐なさ、嘸父上の冥途から、呵つてござらうお腹が立たう、堪忍して下さりませえ。稚心に盂蘭盆の、火を點せよとせがんだは、

云うてたもつた。わしはたよわい女の事、男といへば稚い彌三松、一人ならずふたりの足弱、長の道中愛想もつかさず、ホンニそなたを父上の、息災なうち侍に、取立てなんだが、今では悔しい。是非一刀討たいではと、思ひ込んだる父の仇、たとへ此身が病勞れ、敵に出合ひ運盡きて、返り討に逢ふとても」「アヽ申しその返り討云はぬ事。其お心を聞く上は、雲の裏まで御供致し、御本意を遂げさせまする、ガ其お足では道はか行かず、夜露を請けては一倍身の毒。私めは跡の宿へ立戻り、駕籠借つて來てお乘せ申さん、それまでちとの間お二人は、此所で御休息。幸の此茶店、サア爰にて暫し」と氣を付くれば、やんちや盛りの彌三松が、「べいよ、何所ぞへ行くならおれも行かう」「アヽめつさうな事いはしやりませ。コレべいは疝氣が起つた故、あつゝをすゑに行きまする。ぼん樣もござりましたら、又醫者殿が手を見て、あつゝをすゑうと云はうぞえ。どりや、早行て來て」と足がるに、かしこをさして急ぎ行く。「イヤ〱、行かにやきかぬ」と跡追うて泣く子を母がすかしかね、「コレ彌三松、又忘りやつたの。殿樣のお蔭で、何くらからぬ内を振捨て、此樣に出て來たは、母が爲には父上、そなたが爲には祖父樣の、敵を討ちに出たのぢやないか。町人百姓の子と違ひ、侍の子は年相應、智慧才覺がなければならず、ちと嗜んだがよいわいやい。母は比日氣色は惡し、其樣にわやく言やるのが、ほつとりと聞きづ

んで、呼ばれて來る佛の住家、極樂といふ所は、よく〳〵不自由な所と見えた。アヽ思ふ儘な浮世なら、盆の日一日おりや地獄へ行て見たい」「ソリヤ又なぜに」「ハテ餓鬼も佛も一同に、娑婆へ〳〵と來た留守事、青鬼赤鬼牛頭馬頭どもをせぶらかし、罪人どもをさいなんだ、手や足のたゝくあん漬、日の玉の飛だんご、頰の皮の厚燒などが喰て見たい。ハヽヽ」と蓼を喰ふ、蟲も好き〳〵須磨寺の、鐘に驚く道者ども、「ソリヤ日暮ぢや」とちり〳〵に、行く跡片付けとつかはと、女も宿へ立歸る。おくるゝも、終には落つる露の身の、此地や我を待つぞとも、しら砂道をたよ〳〵と、一味齋の妹娘、お菊が手を引き稚子を、杖よ柱よ後楯、供に從ふ友平が、背負ふ葛籠もかひ〴〵しく、立止つて、「イヤ申し奥樣、親旦那不慮にお果てなされしより、何卒敵に廻り逢ひ、一太刀お討ちなされんとの御存念、ハテ奴めが爲にもお主の仇、儕やれ助太刀して、あつぱれお討たせ申さんと、爰までお供は致したれども、お力落しの上旅のお勞れ、何やらかやらでお顏持もすぐれず、御祝儀は中納め、もしもの事がござりましては、却つて御不孝。ハテモ佛樣は見通し、是までお出かけなされたで、お討ちなされたも御同然、一先づ國へお歸りなされ、とつくりと御養生、お前樣のお體を、親御の形見とお大事になされますも、又一つの御孝行かと存じます」と、愚智文盲も遣ひ人の、主に見習ふ眞身の詞。「ヲヽ、深切によう

さつと押開き、「此扇面に畫きしは、浪に戯る三つの猩々、取りも直さず三人が、老いせぬ宿の門出も、頓て目出たう歸る浪」ハヽッと母が請初めて、廻る扇の請けわたし。「肴くれう。ウタヒこきりこの二つの竹は、よゝを重ねて打納めたる御代かな。いづれも立ちやれ」ハッと三人が立つ事は立上れども、屋形の名殘、よしや遂には出でぬべき、浮世の月の照りくもり、定めなく〳〵出でて行く、思ひがけなき後より、不意を見すまし飛來る鐵丸、透さず袖にて打拂ひ打拂ひ、「ム、こりや百兩の金子の包」「ホヽヲ飛道具にも氣遣ひなし、路用にせい」「エヽ重々の御情」「爰構はずと行きやれ〳〵」「ハア」

第六

ウタ玉の御殿も獨寢はいやよ、さまと葛屋の忍び寢に、見て明したや須磨の月。鄙も名所の一ふしは、心ありその海端に、葭簀圍の茶屋が軒、道行く人が一群に、暫し立寄り足休め、茶呑話の口々に、「ヤ何と皆の衆、月日の立つは夢の間ぢやないかいの。暑い長いの六月もつい是盆前、秋のしるしか朝晩は大分涼しい」「ヲヽソレ〳〵、其月日の立つ次手に、來る十五日は精靈祭、何所もかしこも冥途からお客設け、瓜や茄子やあかのみや味ない盡し、あんな馳走を悦

姉様より、手柄始を仕ましたも、海山深き御恩のお禮、死んだ跡でも殿様へ、忠義を忘れて下さんすな。殿様お暇申上げます。母様御無事で、姉様まめで」「まめで／＼とつど／＼に、いんで來られもする樣に、死んでたもんな／＼」と夕霧くらき短夜の、宵の夢とぞ成りにけり。コハそも夢かと三人が、跡や枕に取りすがり、わつと一度に聲立てて、涙は死出の山路に、さつき雨とぞ降りなまし。彌三左衞門聲勵まし、「よしなき歎きに時移り、此上猶豫は恐れ有り。一味齋と三之丞、二人が尸は彌三郎、よく取置いて亡き跡の、問弔も怠なく、此家に留守の氣遣ひなし。早打立ちやれ」と勵ませば、實にもと親子が立上り、讐討御免下さる上、跡に心も殘らねば、此儘直に發足と、いさむ中にも妹が、暫し別れもうなる子の、彌三松連れて、立上れば、庭におづ／＼二人の奴、「我々二人も御一所に」と、尻引からげ勇立つ。お園制して、「いや／＼／＼、一ツに行かば人目あり、我々とても敵をば、ねらふ間は別れ／＼、供は叶はぬさりながら、敵の有家聞出すは、そち達二人が忠義の手際、勝手次第」と立並ぶ、中で手利の大やうさ、「いざさせ給へ母樣」と先にすゝめて立出づる。「ヤレ待て三人餞別せん。用意の品あれへ持て」はつと小姓が捧げ出で、二人が前に直し置く。「小太刀二振二人の娘へ。母へ遣はす長刀は、連立つ中の長船祐定」「コハ有りがたや」といたゞけば、「イデ門出の盃」と、扇を

と、恨みかこてば、「ア、母樣勿體ない、何しに其氣でござりましよ。チエ、有りがたい殿樣、けなりいは母さま姉樣。只三人の兄弟も、二人は女わし一人、男に生れた甲斐はなく、一生父のお世話になり、非業にお果てなされたる、敵を討ちに行きたうても、目かいは見えず口惜しい、弓矢神にも生地神にも、見はなされたる此體、せめて門出の血祭りと、成つて死ぬれば父上に、冥途で詞も有らうかと、思ひ極めた覺悟にも、名殘をしい母樣姉樣、此世からなる盲目の、暗の地獄に落つるとも、首尾能く敵を討つたとの、冥途へ告ぐる便りには、くゆらす香の手向をば、草葉の蔭から待ちます」と、いふも苦しき息遣ひ。太守も不便と瞬しげく、「誰か有る、春風藤藏を是へ引け」アッと答へて友平が、憎さも憎しとしばり繩、宙に引立て馳出づる。「ホヽヲ罪は今更揚ぐるには及ばず、重々につくきそやつが所爲、敵の片はれ冥途の門出、豫讓が裂きし衣にも、まさりし父へ家土産ならん。ソレお園、首刎ね弟にくれよ」ハッといふ間も一討に、水もたまらず春風が、首提げて立向ひ、「コレ〳〵〳〵三之丞、殿樣の御惠有りがたう思やいの」と、首差寄すれば苦しさ忘れ手に探り、「チエヽ有りがたい忝い。僣ようマアとゝ樣を、むごたらしう討ちをつたな。憎いといはうか、恨めしいといはうか、どう仕たら腹いえう」と、たぶさ摑んで緣板に、打付け〳〵にぢり付け、「嬉しや私は殿樣の、お蔭で母樣

衛門、詞を以て心を勵し、手だれの力者が圍みを破る、其手竝では京極内匠、鬼神なりとも打ちかねまじ、心任せに發足をさし赦す。さるにても一味齋、知行は與へ置きたれども、奥義を傳へし我師匠、死骸に一目暇乞と、仰の下に衣川が、下知にはかなき死骸を、御目通りに直し置く。音成兩眼うるませ給ひ、「誠や名香は薫るをもつて火に燒かれ、花は色香の妙なるより、折り取らるゝも浮世のさま。惜しや無雙の一味齋、無慙の最期とげけるよな。敵はそれと知れたる上、天を翔り地をくゞるとも、師恩を報ふ音成が、力と成つて汝等に、討得させん事手裏に有り。かほどの手者も運盡きて、京極づれが太刀先に、百年の壽を斷たんとは、思はざりしに殘念や」と、悲歎にむせぶ御涙、厚き恵に三人は、只ハツ／＼とひれふして、有りがた泣に泣き沈む。思ひがけなや一間の内、あつと叫びて飛走る血汐、驚き障子押開くる、内に哀れや三之丞、腹一文字に息たえ／＼、「ナウ情ない時も時、ひよんな事してたもつた」と、取付きすがれば、「エヽ見ぐるしい母樣、皆樣も見てござる、泣いてばし下さるな」と、今際の身にも居竝びし、人目をはづるいぢらしさ。あるにもあられず母親が、「コレイナウ／＼、聞きやつたかしらぬが、殿樣のお慈悲でとゝ樣の敵討のお願ひ叶ひ、そなたも一所に連れだとゝと、思うて居るもの何故に、何を不足の此生害。夫に別れ力ない、母に此上命をば、ちゞめよとての覺悟か」

ひ込んだるお流儀の、微塵にならぬ用意仕や。をこがましや」といふよもなく、打ちふる鐵刀手首を摑み、七八間狗兒投、續いて二番手三ばん手、腕のしがらみしつかと組む。「ホヽヽヽ男といへどわしからは、よつぽど小兵に見るからが、手練の程も青侍、稽古さんせ」と弓手馬手、とたんの間拍子、ヨイヤサト、投付けられてころ〳〵、ころびを打つて身退く。跡は多勢が惣がかり、備へを亂し我一に、寄るを張りのけ打ちたふし、相手撰ばぬ働きに、引けば入れかへ立ちかはり、千變萬化といどみしは、目覺しかりける次第なり。只一人に大勢が、叶はぬ赦せとしどろ足、表をさして迯延びたり。透を伺ひ彌三左衞門、長押にかけたる鎗押取り、「慮外の女めそこ引くな」と、用捨もなく突かけるを、よけても透さずたゝみ突、ひらりとはづせば又突きかゝる、馬手にかはし弓手に流し、程よく汐首かいつかみ、穗先も雪の細腕に、かためし手の内大磐石。「ホヽチ手並は見えた」と聲高く、開く一間の障子の内、中央に大守音成、御扈從には衣川彌三郎、近習の侍雲のごとく、敬ひかしづき坐し給ふ。音成仁和の御まなじり、「日頃忠勤怠りなく、師範なしたる一味齋、橫死と聞くより胸苦しく、定て汝等親子の者、敵を討たまほしからん、あつぱれ討たして名を日本に取らせんと、彌三郎に案内させ、裏道より來りしかども、敵は一流手練の內匠、討ち得ん事の覺束なく、手並を見んため彌三左

目でしらす、心を賢き妹が、「サア母樣奥へいて、ちと氣を休めて下さんせ」と、妼はしたとり〴〵に、無理に伴ひ入りにけり。跡にお園は物賴む、人前つくる笑ひ聲、「ホヽヽヽ、マ母とした事が、お心安いは常の事、けふは御上使重きお役目、身のせつなさに顧みぬ、不調法も女童、御赦し下され。此上くどう申すに及ばず、只よき樣に御前の執成」「フン阿房拂を止めにして、敵討のお暇を、乞ひ得てくれよといふ事か。一旦追放との御諚意は、綸言ならねど再びかへらず、片時も早く屋敷を明け、親子諸共立去れ」と、苦り切つて取りあはず。「ササ其お怒は尤ながら、母が不禮は幾重にも」「イヤ身不肖なれども彌三左衛門、老母が詞耳にはかけぬ。お慈悲をもつて追放の、諚意を逆へば死罪に成るがや」「ホヽヽ、罪なうして配所の月を眺めんと、歌人も望みし例あり。科なき科に追拂はれ、他國にさまよひ果てんより、首さしのべて親子共、お國の土に成るのが望、さうなう此家は出づまじ」と、腰をすゑたる大丈夫、動く氣色はなかりけり。彌三左衛門大きに怒り、「ヤア女と思ひ詞甘く、猶豫に付け込む不敵者。アレ誰か有る引立てよ」と、下知より早くかけ出る組子、面々十手電と、打ちふり〳〵追取廻し、「サア國境まで早歩め。行かずば薙ぎすゑ引出さうか。サア〳〵どうぢや」と聲々なり。「テモ仰山なお衆方、女一人を相手取り、さほど多勢が立騷ぎ、大方内匠の弟子と見た。習

れませうなら、首尾よく敵を討ちおほせ、立歸つて後彌三松に、御恩を送らす奉公を」と、皆まで言はせず、「そりやならぬ」「トハ又なぜでござりますな」「サレバサ、一味齋は殿の御師範、眼前相手に薄手も負はせず、討たれ死したる其恥は、其身一つと思ふかや。未熟の藝をうか〳〵と、習うた主人は猶馬鹿者、武道の奥も知れたりと、謗は殿もまぬがれ給はず。ソモ是誰が業、皆一味齋の罪ならずや。罪有る者の妻子が願ひ、彌三左衞門此取次は得せまい」「コリヤ衣川樣異なお詞、四海の武將も運つきて、人手にかゝりし例あり。義朝は長田に討たれ、小田春永は光秀に、亡されたぢやござらぬか。四國九國に知られし夫、目に遮らば鬼神も、討つには安き身なれども、手利手練も叶はぬは、弓鐵砲の飛道具、それを不覺の罪科に、敵討の取次せぬとは、弓馬の家の道にくらきか、但し女と理を非に曲げ、取次しよまいのぶしやう業か。サ彌三左衞門樣、御返答聞きませう」と、老のいらだて齒にきせぬ、衣川が傍に詰寄れば、お園わけ入り押隔て、「狂氣の業かコレ母樣、あなたは御上使殿のお代り、お前の樣に云はしやんしては、モ叶ふ願ひも叶はぬわいな」「イヤ〳〵〳〵構やんな、無理もいはねば慮外もいはず。サア〳〵〳〵衣川樣、返答どうでござります」と、いらつ母親猶引退け、「ヱ、コレ〳〵〳〵妹、うろ〳〵と何ぞいの、氣が利かぬ子で有るはい」と、口で呵つて

ざる」「何か〳〵何なりとも」「イヤサ別儀でござらぬ、一味齋の横死はさる事なれども、そこが彼の欺すに手なし、ガ名にしおふ八重垣流の達人、太刀打にては叶はじと、飛道具にて仕止めしは、あつぱれ智慧な曲物ではござらぬか」「いかにも左樣、骨と皮とは云ひながら、侮りがたき一味齋、小筒といへども二ツ玉にて」「フン、打つた子細の具さなは、御邊が手傳ひ仕止めうがな」「ヤ何と」「馬鹿の家來には馬鹿がなるとは、殿をも馬鹿と嘲ける一言。問ふに落ちねど語るに落ちる、我と我罪白狀する、內匠が荷擔人春風藤藏、科は遁れぬ腕廻せ」と、襟がみ摑み投付くれば、樣子小陰に窺ふ友平、飛びかゝつて三寸繩、鞠のごとくにしめ上げたり。「ヲヽ友平出かした。猶も詮議のかゝる曲者、庭の小隅へぶち込み置け」「かしこまつかせ、立ちおろ」と、引立てられて赤頰を、投首してぞ引かれ行く。跡に親子が小氣味よさ、心の願ひいひ出す、よき汐合と思ふにも、母は稚子抱き出で、「さつきの樣に申せしは、心よからぬ藤藏が、手前を隱す一旦の僞り、實は夫が亡骸も、其場の樣子も承り、思へば〳〵不慮な最期、武藝未熟の故とあつて、妻や子供を御追放とござりましては、一入修羅の妄執も、思ひやられて親子が悲しみ。かく成るはしか三之丞、盲目の身なれば跡續叶はず、氏族の內より一味齋、貰ひ置きたる此稚子、付上りました事ながら、屋形を此儘暫しの月日、お暇下し置か

ハヽ事をかし。御前をあざむき年をかさね、喰潰した祿盜人、死首をおつ刎ね、妻子從類死罪の御沙汰も有るべきなれども、餘り不便とお慈悲の餘り、盲目の小童二人の娘、親子四人の命は下さる、屋敷を取上げ阿房拂ひ。上意の趣有りがたい事だと思ひ、片時も早く此家を立退け。ぐづぐ出かねば下部に云付け、割竹にて叩き出さす。塵芥一筋杖一本、くすねて出る事ならぬぞ」と、いひならべたる惡言に、むつとはすれど母お幸、さあらぬ體に進み出で、「上意の趣恐れ入つては候へども、我夫一味齋、手練はさもあれ御用の役先、家來も數多召連れたれば、敵いかばかりの謀計有りとも、よも鏖には相成るまじ。扶持を與ふる主の內、左程の大事馳歸り、告知らすべき筈なるに、左右もなければ死骸も參らず、人に討れしなんどとは、跡方もなき世の浮說」「ヤだまれ女、强將の下に弱卒なし、馬鹿の家來にや馬鹿が成るはい。役目終つて一味齋、阿房烏のきよろくと、海を眺めて磯づたひ、歸るを見すまし種が島、小筒を以て只一打、脇腹より背骨をかけ、矢狹間のごとくぶち拔かれ、脚も腰も立つ事か、よろめく所をぐしやく突、芋刺す樣に刺殺され、ヤモけうとい死ざま、一分一寸違ひは有るまい。是でも浮說か僞りか。返答あらばいへ聞かん」と、きめ付けられて親子共、いひ遁るべき詞なく、又伏沈み泣居たる。「コリャ春風氏、御尤のいひ方。此彌三左衞門お手前に、ちと尋ねたき事がご

味齋殿、嘸や無念にござりませう。卑怯未練の京極内匠、何國に隱れ忍ぶとも、草を分けても尋ね出し、修羅の妄執はらさせますぞや」「ヲ、母様の仰の通り、倶に天を戴かぬ、父上の仇」「旦那の敵、此友平も」「佐五平めも」二人「倶にお願ひ申上げ、敵討の御出立」といさめば兄弟、「實尤、サアお願の御用意」と、はげしき詞に母親は、嬉し涙もいやまして、「ヲ、出かしやつた〳〵、片時も早うお願ひ」と、詞ばかりはいさめども、身はしをれ添ふ袖袂、涙と倶に亡骸を、抱きかゝへて主從が、佛間へこそは入りにける。やゝ時移り表の方、御上使なりと聲高し。斯くと聞くより母お孝、跡に引添ふ姉妹を、杖よ力と泣顔を、會釋になほし出で迎ふ。程なく入來る春風藤藏、衣紋の威儀も麁忽の仁體。つゞいて衣川彌三左衛門、善と惡とをなひまぜの、使者は上座に著きければ、母は下座に詞を卑下し、「お役目とは申しながら、御苦勞を顧みず御入あられしお二人様、上使の趣氣遣はし、仰聞けられ下されかし」と、親子手を突き窺へば、「ホ、ヲ思ひがけなく氣遣ひはさこそ〳〵。一味齋殿不慮の横死、彌三左衛門承つて驚き入り、愁傷申すも詞なく仕合せ。それに付き殿様より、下し置かるゝ上使の趣」「イヤ〳〵其儀は此藤藏が申し聞けう。一味齋儀、劍術を言立て仕ふる身ながら、人手にかゝり相人も仕留めず、やみ〳〵と山口にのめり死に、左程未熟の手練をもつて、八重垣流の蘊奥も極めた顏、ハヽ、

五平が、「ヲヽ御尤〳〵。山口の御用首尾能く調ひ、御歸りがけの小松原、何者が所爲にや、御乘物へ鐵砲を打ちかけしと、小者がしらせを聞くとひとしく、旅宿よりは半道餘り、姉御樣の御供致し、宙を飛んでかけ付けしが、早お旦那にはあへなき御最期。お傍に付添ふ若黨佐忠太、倶に深手に苦しみながら、旦那の仇は京極内匠、しるしは彼が二の腕に、切付け置かれし跡ありと、いひも終らず卽座の最期、無念と思へど其甲斐も、悔んで歸らぬ其場の時宜。ヱヽ奥樣、口惜しうござります。友平、推量してくれ」と、悔むにお園もせき上げ〳〵、「佐五平が申す通り、一足早うかけ付けなば、やみ〳〵討たしはせまいものと、涙ながらに立寄つて、改め見れば此ごとく、飛道具にて仕止めし上、とゞめをさしものとゝ樣も、叶はぬ痛手に無念の御最期。直に追付き親の敵、討たんと心ははやれども、妹といひ三之丞、いづれ跡目を定めた上、敵討のお願ひ申し、本望とげたいばつかりに、すご〳〵歸り此譯や、妹が願ひを取交ぜて、醉うた顏してはしたなう、酒に紛らすせつなさを、推量してたべ母樣。コレ妹、弟、嘸口惜しからうなう。海山こえてはる〳〵と、お迎ひに行た此姉が、御遺言の一句も聞かず、いかめしさうに亡骸を、お供申したあぢきなさ。ヱヽ〳〵口惜しう存じます」と、無念にこつたる主從が、涙血汐の瀧津浪、身もうくばかり見えけるが、母は不覺の涙を止め、「コレ我夫一

香爐、是こそ名高き和國の名器、久吉公より先達て、仙石何某に給ふと聞きしが、付け添へ捨てし其譯を、問ふ人とてもながの旅、拾ひ歸りて育つる内、お菊といひ、三之丞まで設けしは、夫婦が老の入まいと、心嬉しくけふまでも、包み隱せしそなたの素姓、ほんの親御へ義理もあり、妹や孫に此跡を、相續さゝれぬ入譯は、斯くぞ」と咄す來し方を、聞くに付けてもあぢきなき、野末に捨てし、氏系圖、「そんなら日比大事にかけ、わたしが持ちし香爐が」「ヲイノ、それが眞實の親御の筐」「ハァ扨も〳〵悲しいお咄し、今の今まで眞實の、父上とも母樣とも、思ひ込んだるわたしが願ひ、叶はぬ上は差當り、申さにやならぬ此場の時宜。ソレとゝ樣のお乘物、其儘これへ。早う〳〵」はつと二人の仲間が、手舁にしたる乘物に、としや遲しと立寄つて、「ヤレお歸りか待ちかねし」と、開けば内にあへなき死顔、一目見るより、「ヤア〳〵〳〵、コリヤ何者が手にかけた。娘樣子は〳〵」とせき立つお幸一間より、こけつ轉びつかけ出る兄弟、空しき骸に取縋り、前後正體なき沈めば、母は詰寄り、「コレお園、樣子は定めて知つて居やらう。ヤイ佐五平、そちや山口のお供の内、定めて敵は知りつらん。何國の誰が業、何者が殺せしぞ。早う聞かせい」「早く申し上げろう」と、友平がせき立つ詞聞くに付け、姉が思ひは百千の、劍に胸をさゝるゝ悲しさ、詞も出でず齒を嚙みしめ、無念涙に佐

てな、吉岡の名跡を相續さすれば、わたしが家を續いだも同然。お赦しなされて妹に、殿御を持たして下さんせ。お願ひ申上げます」と、深き思ひを巻き舌の、詞は酒の科なりし。母はつくづく稚子を、見るより扨は聞及ぶ、孫とはしれどさあらぬ體、「ヲヽ姉の何いやるやら、系圖正しい名跡を、餘所の胤には續がされぬ。物がたいとゝ様の、氣質はそなたも知っての筈。道に背いた二つの願ひ、叶はぬ程にいひ出しやんな」「スリャ是程に申しましても、お聞入れはござりませぬか。此上は是非に及ばぬ、白地な事ながら、妹お菊と彌三郎様、人しれず忍び合ひ、中に設けた此彌三松、いはゞ眞身の初の孫。お前の口から父上へ、御聞届けの有る様に」「ヲヲ心盡しのそなたの願ひ、叶はぬならぬと親がひも、いふにいはれぬ譯ある故」「ソリャ母様聞えませぬ。血を分けた親子の中、明されぬとはどうした譯、様子を聞いた其上では、わたしもいはねばならぬ譯、胸にせまつて心がせく。サア、シテ様子は其譯は。サア〳〵」と問詰められ、暫しいらへもなかりしが、「今は是非なし何を隱さう、そなたは拾ひ子。ヲヽ恟りであろ。連合一味齋殿、殿様の師範と仰がれ、家中の用ひも淺からねば、何くらからぬ身の上なれども、四十過ぎても子なきを歎け、神に授かるならひもと、夫婦連での伊勢參宮、賽の道すがら、とある木陰に赤子の泣聲、可愛さうにと拾ひ上げ、見れば添へたる千鳥の

に、死んだ樣にして居たればナ、白井新吉樣の奥方や、芝山四郎右衞門樣の奥方、信樂樣までが出て見えて、寄つてたかつて盛殺し、とう／＼とゞめをさゝれました」「ヲヽあの子とした事が、常の行儀に似も付かぬ。取分け大事の祝ひ日に、心にかゝる四の字盡し、もう／＼いうて下さるな」「ハイ／＼／＼、左樣ならば申しますまい／＼。其替りにはおかゝ樣、お願ひがござります。アノナ、急に殿御を持たしておくれなされませぬか」「ヲヽ是まで幾度いひ出しても、聞入れぬかたいそなたが、殿御を持たうといやるからは、定めて心當があらうの」「アイ、イヽエ」「ムウそんならかね／″＼噂に聞く、豐前の國毛谷村の百姓六助、身は農民に埋れてもあつぱれな文武の勇者、何卒主人音成公へ仕へさせたき夫の願ひ、成らう事なら其人を」「アヽ申し／＼おかゝ樣、殿御を持たして下さりませと申すは、わたしではござりませぬ」「ム、そんなら誰に」「アイ妹のお菊に」「ヤヽ」「サイナ、どうぞ持たして下さんせぬか」「イヤ／＼其願ひは聞入れられぬ。家を繼ぐべき三之丞は、所詮本復叶はぬ眼病。さすれば家の名跡は、姉のそなたに極まつた。聟もない内妹に、男はどうも持たされぬ」「コリヤ御尤でござります。左樣ならば母樣に、逢はせましたい人が有る。ソレ／＼／＼其子爰へ」に姥が、抱いて出でたる五ツ子の、すや／＼寢入るをお園は抱取り、「申し母樣、遁れぬ方に生れし此坊、此園が子にし

らぬ主人をいさめかね、打つれてこそ入りにける。母は我子の後影、見るに付けても心根を、不便と浮む露の間も、忘れ方なき恩愛の、中の間よりも娍が、「御寮人様お歸り」と、しらせにさゝめく勝手口、「ナニお園が戻りやつたか、ヤレ〳〵待ちかねた。サア〳〵是へ」と、待つ間に程もなつ山に、衣ほすてふ白妙の、顔さへ朱に照り添し、さつきの花の縫小袖、ふりもしどなき千鳥足、跡に付々娍ども、「ヲヽあぶなや」と立寄れば、「チット寄るまい〳〵ぞ。あぶないとは何があぶない、酒に醉うたか何ぞの様に、立騒いで不行儀な。次へ行きや〳〵」と、しかつべらしう三つ指も、いとゞなまめき愛くろし。「アヽ娘待ちかねた。定て一味齋殿も一所であろが、大方御前へ歸國のお目見え、夫で先へ戻りやつたか」「ハイ〳〵、左様な様な物の様な物でござります」「ヲヽあの人とした事が、遂にない酒機嫌、どなたで御酒をたびやつたぞいなう」「ハイ〳〵とゝ様のお供してナ、上つた所が端午の御祝儀、直様お裏へお禮に上り、東雲様の御前にて、白藤のお局に、しひにしひられ四はい呑み、それから四の宮志津摩様の奥方へ參つたればナ、四合入のお盃で、しひ殺されて居る所へ、篠田思安様がによつと見え、どりやおれが配劑せうかと、お年に似合はぬ强いお酌、アヽ申し〳〵、それではいよ〳〵死にまする、死ぬる、面白い、死ね〳〵とめつた酌、こりやたまらぬと座敷をはづし、四疊半の圍の内

の、障子引立て入る跡に、やゝ默然と三之丞、さしうつむいて坐し居たる、傍に立寄る母お幸、「コレ三之丞、けふはそなたの大事の節句、此頃父御の方からも、事多い中に、文が來て、隨分節句を賑はしう仕てやれとの文體、乙は血の尾と只さへに、目かいの見えぬいぢらしさ、いつかい苦にしてござる上、煩やつたらどうあらう。彦山樣を初めとして、奇瑞の有るとあらゆる佛神、祈らぬ方もない程に、本復は今の內、氣をわさ〳〵としやいの」と、慈悲に餘りの母親が、あいだてなしと人や見ん。「さほど御不便かゝる程、此身の冥加恐ろしい。今も今とて彌三郎殿、端午の佳儀といさましう、お出でに付けてわしが身は、勝れし手者の胤ながら、小太刀一本鎗一筋、操り得ぬのみか苦をかけて、不孝の罪を重ねんより、いつそ死にたうござります」「エエ譯もない事いふ程にの、母が氣までをめいらした。婢どもは何所に居る。三之丞と奥へ行き、面白をかしう酒でも酌み、氣を慰めてやつてくれ」ハイと出て來る浮助ども、「人を浮かすと色事はこつちの得手物、若旦那樣サアお出」と手を引けば、「イヤそれには及ばぬ」と、立つもとぼ〳〵病む目より、見る目病まるゝ親心、「ソレ〳〵あぶないぞ〳〵」「イヤモちひさい時から馴れた內、氣遣ひはござりませぬ。申し母樣、冥途の闇に迷ふのは、此樣な物でござりましよな」「ア、おとましい、またかいの。ソレ婢ども」「ハイ〳〵〳〵、先のけ〳〵お馬」でも、乘

丞、「誠に師弟の義を重んじ、佳儀を祝する御入來の段、父一味齋在宿致さば、いかばかり悦び申さん。ナウ姉樣」「ヲヽソレ〳〵、悦ばしやんせいで何とせう。顏を見たれば、嬉しうて〳〵、いひたい事もたんと有ろし、そしてから、アノ人目の關のないならば、抱付きたい氣で有ろぞいな」と、思はずふつとすべる口、「コレ、シイ〳〵」と彌三郎が、弟の手前氣を兼ねて、止むるも同じぬるゝ袖、袂をそつと引く糸に、もつれ寄り添ふ妹背中、「戀しかつた」も口の內、じつと引きしめ抱合ふ、傍にあやなき三之丞、「此姉樣は物をもいはず、衣川樣は何所へぞ」と、さぐる手先に背と背、ちやつと飛退く彌三郎、お菊が胸はさゞ波の、しがを見せじとさあらぬ顏、「アノマア三之丞とした事が、わしを悔りさしやつたわいの」「わたしも悔り致しました。今のは何でごましたえ」「フウアノ今のかや、あれはの、アノソレナア彌三郎樣」「ヲヽ〳〵それ〳〵、五月五日は男の節句、武備を飾りの鑓長刀、ちよつと祝儀に組討の、眞似を致して見ましたも、偏に貴公へお祝ひ」と、詞巧にいひ廻せば、あどない氣には誠しく、「ハツア思し寄られし御深切、幸けふの菖蒲酒、何はなくともお菊樣、彌三郎樣へ御酒一つ、一間でお上げなされぬか」と、何氣ないのに氣も落付き、「ヲヽようぞや氣が付いた。彌三郎樣、爰は端近一間へ」と、醉はねど先へ轉び寢を、急ぐ手招き小點頭、誘ふこなたに母親が、見るともいざやしら紙

の次手、此屋形の姉御樣、あれが女の大兵といふのか知らぬ。脊はといや六尺ばかり、器量も好うて劍術が名人で、其くせ力が強いげな。あんな體に半日でも成つて見たい」「ソリヤ又なぜにや」「ハテマア第一押しがきく。女夫喧嘩をするにでも、男の癖と無理八百、いふをいはせずしめ付けて、思ふ存分抱かれて寢る」「ヲヽそりやきつい無分別、大きな體は何所やらも、形相應に大きうて、なみ大體な鼻高では、たんのうする事あるまい」と、譯もなまめく高笑。一間開かせ三之丞、出づる目病の探り足、まだ十三のおとなしく、「ヤイ婢ども、けしからぬ高笑、大姉樣はお留守でも、此頃病氣で下つてござる、お菊樣の居間へ筒拔、主の蔭口不埒の至り、以來をきつと嗜め」と、呵る詞も角立たぬ、愛敬深きうまれ付。取次の侍まかり出で、「衣川彌三左衞門樣御子息、彌三郎樣御出なり」と披露して、表の方へ引かへす。「ヲヽそれ珍客、折惡う母樣は休んでござる、マアお菊樣へしらせよ」と、指圖に下女は立つて行く、程なく〳〵し山鳥の、襖開いて彌三郎、佳節の衣服一入に、榮ある美夫の衣紋付。それとお菊が一間より、こぼれ出でたる絹の香の、すがり付きたさ戀しさの、胸の數々日の内に、しらせあうてぞ座に直り、彌三郎慇懃に、「先以て當日は端午の佳節、御親父一味齋先生にも、防州普請の御役中、恙なく御勤なされ、御家内の御悅び推量いたし、くれ〴〵目出たう存ずる」と挨拶すれば三之

ても駑馬ならぬ身は五調の一味齋、娘に心急ぐ道、照す奴が箱挑燈、光を失ふ星の影、老眼にきつと詠め、「ム、西方は元より金氣、兌の封に當つて七ッの昴星、備を亂して動ずるは、正しく國の良臣に、災有りと兼て聞く。ハテいぶかしの天變」と、我身の上としら砂道、「乘物是へ」に下部ども、ハッと答へてかき寄すれば、直に打乘り「皆急げ」「畏つた」と六尺ども、足を早めて駈けり行く、ねらひ過せし京極が、松かげより飛んで出で、「ヱ、手廻にせしか殘念至極、僞老ぼれ遁さじ」と、跡をしたうて 三重 追うて行く。

第五

菖蒲葺く軒の香深き一構へ、一味齋が屋形には、末子三之丞が壽とて、飾る兜の奥使、婡どもが縁端に、奏者の役の請答、せはしならびて坐し居たり。入來る禮者は入間野宇内、「端午の御禮」と袂から、名札を置いて出行けば、續いて十木當右衞門、金井運兵衞、根津伴藏、引きもちぎらぬ禮受に、ほつと草臥れ、「ヤレ〳〵心勞やナウ小富、何ぼ有るかも數知れぬ御家中のお弟子衆が、お禮〳〵の取次に、出たり入つたり、立つたり居たり、座敷の上のお百度參り、斯う働いたらどこやらも、男が知つたら好もしがろ」「ヲ、お松の身上りな。ヤ其このもしい咄

が、邊見廻し、「コレ先生、何も氣遣ふ事はござらぬ。仕様は斯う」と耳に口、「ムヽすりや此所に一味齋。うまし」とかけ出す其氣相、「どつこいやらじ」と止むるを、「放せ」「放さぬ」血氣と强氣、振飛ばされても我武者もの、我身をじつと引きすゑて、「エヽ氣が違うたか京極殿、一味齋を切る氣でも、傍にはきやつが數多の家來、寡は衆に敵せずとは、常に貴殿もいうたぢやないか。多勢の中へ切入つて、目ざす老ほれ一人を、切り得てからが命はないぞや」「ヲヽ命はとくより捨ててゐる」「イヤ〳〵それは器がちひさい、敵一人に百年の、命をはたすは不覺々々。マア氣をしづめてとつくりと、身がいふ事を聞かつしやれ。コレ一味齋が歸るはの、いつも此道此所。浦の氣色を樂しみとて、駕籠に乘らねば同勢なく、供は仲間只一人、そこを窺ひ討つならば、本望遂げるに手間隙入らず、討つには最上飛道具、其品爰に」と益內が、かたげ持つたる挾箱、中より出す種が島、「腕に手練の內匠殿、百發百中疑ひなし。されど磯邊は人目あり、其松蔭から歸るを待ち、まつたゞ中を御合點か」と、渡せば取つて、「したり〳〵。微塵流儀の奧義をふるはゞ、暗夜の烏もたんだ一擊。氣遣ひ無用」と立上れば、悅ぶ藤藏抜討に、あへなや益內眞二ッ。「密事を人に洩らさぬ神文、まつ此通りのお手柄を」「ヲヽいふにや及ぶ」と松蔭へ、忍び行く足春風は、血刀鞘に納りは、「旅宿で聞かん」と眼を配り、心殘して立歸る。麒麟老い

すれ違ひさま振返り、「イヤ暫く。それへござるは郡の家中、春風氏にはあらずや」と、聲かけられて立歸り、「ム、身が名を知つたる御浪人は、何人なるぞ」といぶかる色目、「イヤモ名乘るも今更面ぶせ、密々願ひの筋ござれど、他聞を憚り申しかぬる。何卒暫し御左右を」「いかにも承知」と家來に向ひ、「身は是に用事有れば、益内一人跡に殘り、我達は先へ歸れ。早く早く」と追立てやり、近寄つて聲をひそめ、「音聲にても覺あり、貴殿は京極内匠殿」「いかにも左樣」と笠脱捨て、「某國を去つてより、一先上方へと心ざせしが、心殘りは一味齋、恨を一太刀むくはんと、思ふ折しも此防州、普請奉行に來りしと、聞くとひとしく、究竟の時節かなと、取る物も取りあへず下りしが、いよ〳〵それに違はずや」と、問ふに藤藏邊りに氣を付け、「此度の宮普請も、殘らずきやつが指圖次第。何が諸家中の請はよし、知行は增す、威勢は日々に門弟はふえる。イヤモ、其無益しさ頬憎さ、折を見合せ一討と、心はせけど我々しき、中々手に立つやつでなし。思はず貴殿に逢うたも幸、何卒きやつを欺し討に」「シイ聲が高い。諸事は内匠が胸に有る。抑一味齋めに意趣といふは、あながち劍術一通りの筋でなし。娘お菊を妻にせんといへば、酢の粉のと承引せず、剰へ人前にて頬恥かゝされ此風體、思へば〳〵口惜しうて、胸板を截割る苦しさ、切りさいなんでも腹いぬ」と、拳を握る無念の齒がみ。同氣相寄る春風

古の席の差配り、此方よりもお頼み申す」「スリヤお聞届け下されうか、ハヽヽヤレ忝や嬉しや」と、悦び勇む折こそあれ、吉岡が仲間斯くと見るよりかつ踞ひ、「お國元より御息女お園樣お見舞として、只今旅宿へお著きなされましてごはります」「ナニ〳〵、娘が見舞ひに來たとか、ハテ扨女の身でいらぬ事を。シテ道中怪我もなかりしか」「ヤモ隨分御機嫌能く」「滿足滿足。然らば歸りて云はうには、か弱き身には餘程の里數、嘸かし痛く草臥れつらん、身も暮方には歸るであらう、休足して待つてゐよと言ひ聞かせよ。早く〳〵」に「ナイ〳〵」と、奴は旅宿へ立歸る。跡見送つて一味齋、賢き心の闇ならぬ、闇に迷ひし親心、「アヽ孝心にしてくれるはよけれども、結句はそれで苦をやむ」と、こぼす涙を春風に、愧ぢて背ける顏の艶、薄き親子の契りとは、後にぞ思ひしられけり。藤藏は見て見ぬふり、「御息女のお出でと有れば、是より直に御宿所へ、イザ御同道致しませう」「イヤ手前はまだ私用もござれば、そこもとは先お先へ」「ハア然らば左樣致さう」と、互に目禮一味齋、假家の內へ入りにける。跡に春風獨笑、かねての方便も手ごはき親仁め、中々すめでは行くまいと、思ひの外工合のよさ。斯うしてからは、手段もし安し。ムヽ、斯うつ、斯うして」かう〳〵と、響く野寺の鐘の音も、入相近き磯傳ひ、しづ〳〵歩む向ふより、浪人者とおぼしきが、古大小の柄糸も、ほつれ亂れし破小袖、

聲で行く道理、マアちよつと一口試みに」「ヲ、サ合點」と破扇、腰から出してふりかざし、オンド「ヤレ阿波の海賊彼の十郎兵衛が、ソレサアハリサア」「ヤア〳〵こいつはえらいわいえらいわい、チ、俄にしよぎ〳〵氣が成つた、猶も大工殿賴みでござる」オンド「ヤア哀なるかな此醫者殿は、ハリサヤヨイサ、砂糖代りに陀羅介のまれ、あせりもがいてはらいたはしや。ヨウイヨウイヨイヤナ、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ハアヨウイトナア」うかれ打連れ立歸る、跡は渚に白波の音もどうだらうで立出づる、普請奉行の役柄も、格もよし岡一味齋、名のみやさしき春風が、共にかしこに立止り、「誠に此度の御宮普請、相役と申すは名ばかり、皆其元樣のお助け故、斯樣な大役首尾能く相勤めしは、いかばかりか大慶至極」「コレハ又痛み入つた御挨拶」「イヤイヤ神以て御恩に著ます。夫に付き先生へいつぞはお詫び申さうと存じたに、願うてもなき幸、定めて拙者を人畜の樣に思し召すでござらうと、存じ廻せば面目ない、アノ人非人の京極め、あゝいふ族と露しらず、只管の招によつて、思はず入門致せしは今での後悔、若輩者の跡先に心も付かず、破門致せし其段は、幾重にも御了簡、此上はぶつてなりとも腹をいて、以前の通りお弟子と成して下さらば、此上の悅びなし。コレサ〳〵、先生偏に願ひ奉る」と、詞に油乘せて見る、艶とは知れど一味齋、「イヤモ誤つて改むるに憚りなし、元高弟の其元なれば、末々の門人へ、稽

聞いてたべ、蜜柑の皮の色づくと、藪醫の顏の靑なるは一時と、誰がしにせて冬枯の、療治は隙なり金はなし、內證とても曾我殿の、五りやう十りやうの煙草さへ、錢に盡きたるつがずがち、おのづと惡い顏色を、吉岡殿の下部が見て、氣色が惡か是なりと、たべよとくれた竹の皮、中には黑い一かたまり。扨はきやつめは耆婆扁鵲、おれが常から持料の甘い物好く癪の蟲、能くも知つたり醫者まさり、是黑砂糖なんめりと、何の差別もめつた喰、呑込んだれば、ナウ悲しや、黑砂糖ではなうて、コレ泥川の陀羅介で有つたはいの。コレ山上參りの土產にする陀羅介で有つたはいの。それが毒ではなけれども、瘦馬ならぬ瘦體、苦過ぎたのが此身の害。アイタ〳〵〳〵、アヽ痛やなう、苦やなう。コレ此腹の痛さでは、どうで命がつゞくまい。八萬地獄へ落つるとも、日頃近しう仕たそなた、後から死んでござるのが、五年十年おくりやうとも、必々死出の山、地獄の釜端で待つて居てやるぞいの」と、聲も哀れなしやくり泣。「アヽコレ〳〵〳〵、さりとては〳〵〳〵、爰で死なしやるとの、マア掛り合ひに成るといひ、第一地獄の釜端で、待つて貰ふがおりや術ない。コレ氣から先へ死なさずと、分別がある聞かしやれや。こなた平生踊好、常々おれが習うて置いた、音頭をやつて見る程に、拍子にかゝつて步行いたら、コレあるけさうなものぢやぞ」「フン、コリヤ一理窟、石積んだ地車も、木やりの

したけれど、又意地惡の春風殿、モウ追付け來る時分、見付けられたら目を貰ふ、一働きして跡の事。サアこい〳〵」と打連れて、普請場さして行く處へ、ひよこ〳〵來たる在所醫者、顔見合せて、「ホヽ左仙樣、けふは何所へござましたの」「ヤァ何所へとておれが事、宮寺の連歌俳諧、繪馬もほつとり見あいて仕舞ひ、つくねんとして居た所へ、此お宮の普請奉行、一味齋樣から呼びに來て、將棊の相手に今まで成つて居た。そしてアノ音頭はとつくりかたまつたかの」「アイ大方に覺えました。爰仕舞うたら夕ざりに、又稽古に參りましよ。後に〳〵」と雙方が、すれ違ひさま當りしか、何とかしけん、柴左仙、うんとばかりに倒れ伏す。恟り動顚三人が、「ヤァ〳〵コリヤ目がまうたか」とうろたへ眼、池水兩手にそゝぎかけ、「コレ〳〵醫者殿いなう、左仙殿いなう。左仙樣、不動樣、ぢやない、お醫者樣いなう」と、呼ぶ聲耳に通じけん、軒端を傳ふさゝがにの、糸より細き、聲音にて、「アヽ扨はかなき世の中や。昨日までもけふまでも、醫者よ藥師と敬はれ、餘所の病と詠めしが、けふは我身に迫り來て、犬猫の子か何ぞの樣に、小屋の軒場に倒るゝとも、誰か哀れと見給ふらん」「さりとは〳〵氣の弱い、めつたに死んでよいものかいなう」「めつたにこなたは死にやさんせ〳〵」「左樣々々」と抱きしむれば、「イヤナウ方々、おりやどうしても叶ふまい〳〵」「トハ又なぜに」「ヲヽ一通り

第四

元是大内義隆が國衙も、今は中國の手に屬したる周防の國、今度太守の祈願とて、新に建つる石淸水、正八幡の宮殿も、日追つて成就すめる代に、いとゞ神威や增しぬらん。煙草の休み大工ども、一つ所へ寄集り、「ナント此度のお宮普請、本社から拜殿神樂堂、繪馬堂までが恰好よう出來たではないか。他國は知らず此國に、こんなお宮は外にや有るまい。ナウ藤七」「ヲイ喜助がいふ通り、こちとらが手の離るゝも大方翌の日一ぱい。スリヤ御遷宮も近い內。其時は賑はしからうなう」「チ、サ、そこはぬからぬ此文藏、思ひ付いた趣向が有る。マア一番に眞赤な猩々緋の幟、其次に揃への挑燈。えいか、揃への浴衣で揃への人に夫を持たす。えいか、喜助は足が長短ぢやといふによつて、引く物によるといふ題で三味せん方。えいか、藤七は鼻がえらいによつて、馬によるといふ題で、太皷の役、音頭は今度大阪から下つて居やる醫者殿に習うた通り、おれが跡からやつて行くぢや」「待ちや／＼文藏、其上方から下つて居る醫者殿とは、どの醫者殿ぢや」「ソレイノ、眉毛は黑毛の刷毛見る樣で、目はぐる／＼と悉皆達磨」「ム、成程／＼／＼、アノ柴左仙が事か」「ソレ／＼、其人に習うた音頭の妙音、ちつとばかり聞か

くたばれ」と、なぐり情もしら髪首、只一討に刎ねてげり。「サアこれからおらが身の片付け、試合にまんまと負けたれば、此地に足は留められぬ。お菊を連れて駈落の、工面は豫て胸工み、但馬が持ちし御臺の刀、後日の用に立ちながら、死骸を蹴やり出行く先、道を遮り彌三郎、「ヤア何所へ京極、御臺所の守り刀、奪ひ立退く不敵者、こつちへ渡せ」と、詰寄つたり。「ナニ小僧めがびくしやくと、主に隙やり出て行く內匠、逢ひたう思うた戀の仇、ようも先陣ひろいだな。一味齋めもぶち殺し、お菊を女房に持つこんたん、まづ儕から片付けん、覺悟ひろげ」とつゝ立つたり。「ヤァ重々につくき人非人、者ども來れ」と彌三郎が、下知に群る數多の家來、屈せぬ內匠が手だれの刃先、右へさゝへ弓手に當り、打てど拂へど叶はどこそ、危きうしろに冥々と、顯れ出づる但馬が姿、猶も閻浮の幻の術。家來は夢か現のごとく、打付け投付けなやませしは、手鞠を突くに異ならず。死靈の助に京極が、虎口を遁れ門の外、出づる我身も我ながら、怪しと見返る塀の上、すつくと立つたる但馬が姿、早立去れと幽魂の、指ざす方は廣小路、冥火に照す道筋を、いづくとも無く 三重 成りにけり。

出生は備前の小島、父は京極新左衛門」「イヤ〳〵左にては有るまじ。兩目は岩下の電にひとしく、額に一つの喜怒骨は、光秀公の忘れがたみ、親子とて能く似られし、ヤモ健氣にも生立たれしな。其骨柄にて仇をねらはゞ、やはか仕損じ有るべからず」「ヤア種々の戯言、叶はぬ謀叛我に讓り、逆徒明智が類葉抔と、筋なき汚名を蒙らせ、我が三族を絶す所存か」「義に當つては三族を、絶すも天に叶ふ孝行。能く聞き給へ一昔、春永亡びし其時は、天が下知る惟任將軍。いたはしや光秀公、山崎の一戰大崩れとなりしかば、憂き近江路に落下り、再び義兵の旗上に、けふの恥辱をはらさんと、心はやたけの藪づたひ、闇はあやなき小栗栖村、物の具剝がんと土民めら、ひつそぎ竹鑓猪突鑓、運のつき出す鑓先に、弓手の脇腹ずつぱと突かれ、さしも强氣の明智殿、急所の疵に目もくらみ、深田にがはとをちこちの、土に武名を埋まれし、無念は修羅の妄執を、晴す所存はござらぬか」と、謀叛の血筋を請繼がす、謀も耳に空吹く風。「返答なきは承引はござらぬの。チエヽ是非もなし、承引なしとて此儘置かうか。一念忠義に凝つたる魂魄、こなたの皮肉に分入つて、旗上させで置くべきや。南無や幻法守護神帝、但馬が五體を此まゝに、神にさゝぐるちかひの牲、日本六十六ヶ國、再び明智の有となさん、我忠誠を感應あり、立鑑あやまつ事なかれ。ぜんすまるや、さんたまる。はらいそ〳〵」「ヤア細言叶かずと

詞。音成一間を立出でて、「先刻よりかしこに在つて、樣子具さに承はる、本能寺の大變より紛失したる蛙丸、君が賢慮を廻らされ、贋を誠としはうでん、おびき寄せたる其甲斐なく、彼も所持せぬ此上は」「イヤサ異國は知らず、日本は此久吉が下知の下、深山幽谷に藏すとも、手に入れん事案の内、氣遣ひせられそ郡氏。只々をしきは四方田、あたら勇士」と仁惠の、一言五臟にこたへけん、「チエ、忝き情の一言、最早此世を辭する某、先刻内匠がかけたる繩目、脫出でしは搦人の失なりと、嘸心外に存ずべし。我が皺首の介錯を、彼に御下知下さらば、末期の志願此上なし」と、餘儀なく見ゆれば御大將、「ホ、心ある願ひ聞屆けた。ナニ内匠はなきか」ハッと奧よりかけ出る京極、遙こなたに手をつけば、「イヤ京極別儀でない。汝が介錯望む但馬、聞き得て遣す、仕てとらせい。事足んぬれば歸らん」と、御一言も嚴々たる、智仁勇備の名將に、隨ふ郡音成も、御見送りの威儀淸く、本陣さして歸らるゝ。跡に手負は傍りを見廻し、「ナニ京極殿、今はの際の某が、一言いひたき子細有り。近う〳〵」と聲をひそめ、「誠や往事渺茫たり、明智に數多仕ふる中、わきて股肱と賴まれし、此四方田但馬守、年老いたれども百萬の、敵は蠅とも思はねども、運をはかつて今日只今、覺悟の自害も時刻を延し、賴み置きたき子細とい つぱ、マヽ先尋ねん。貴殿稚き時の名は秀丸とはいはざりしや」「ヤこいつ血迷ひしな。我が

の諫言、用ひぬのみか鐵骨の、扇に額をぶたれし恨み、本能寺にて亡せしは、武に逞しき弓矢の本懐。汝却て春永の大恩を蒙れども、其主の子を幕下に屬け、小田の天下を橫取する、國賊とは儕が事、其下に働く大名めら、手下とやいはん同類とやいふべき、儕々が分に應じ國郡の分取。盜人原の大將久吉、人を稱へて賊となし、盜賊の成敗せば、うぬが首からまづ刎ねよ」「ハヽヽ、偃鼠能く水飮めども滿腹に止る、小さき眼にさこそ思はん。先君不慮の落命より、時日を移さず仇を討ち、民を案んじ王位を守護す。春雄春信其德なければ、是非なく國家を治むる久吉、汝ごときが知る事ならず」「ヤア多言なり久吉、謀は汝に負くるとも、異國に得たる我帶劍、切味見せん」と飛びかゝるを、はつたとにらむ大將の、天性御目に重の瞳子、尖き武威に蹴おされて、五體すくばり無念の齒がみ。大將面色なほらせ給ひ、「ヤヲレ但馬、嚴顏蜀に降つて英雄の名を失はず、心を改め從はゞ、命を助け召遣はん、サ仕へんや四方田」と、仰の左右に取卷く勇兵、「サア猶豫せば火蓋を切らん、何と〳〵」と詰めかくる。さしもの但馬惡びれず、諸肌くつろげ物をもいはず、腹へぐつと突立つれば、首を掻かんと立寄る兵士、車輪とにらむ怒りの大音、「ヤアじたばたと騷がしい。日本無雙の四方田、うぬらに取らるゝ首は持たぬ」と、罵る强勢、優美の大將、いう〳〵と階下におり立ち、疵口とつくと、「見事なり、四方田」と、やゝ感賞の御

度にかゝれば人礫、摑んで庭の立石に、打付けられてひつしやく〳〵、群る蜘と碎け死に、さしもの多勢溜り得ず、さつと一度に引退く。「ハヽヽ、追はぬ敵に迯ぐる〳〵。ヤア隙入や」と、ゆふ闇に、人なき野邊を行く如く、歩むこなたの一間より、「曲者待て」と高んらか、胸にぎつくりこたへしが、打捨て猶も出行くを、「イヤサ、三韓の降將木曾官とは僞り、先年小田の天下を掠め、山崎に亡びし明智が賊黨、四方田但馬守、とゞまれやつ」と肝先に、鳴る雷と應ゆる大音、さしもの強勢百練の、鎖に足を繫ぐが如く、覺えずしらずたぢ〳〵〳〵、はせ戻つて檻外にぐつと詰めかけ、「異國に生立つ木曾官、明智が殘黨なんどとは奇怪至極」と、いはせも立てず、「いふな但馬、酒を盜む者は色に顯れ、香を盜む者は香に顯る。山崎合戰の大崩に、岸田が一矢射削つたる、矢疵の跡は左の高顋。四方田と呼びかけしを、我名にあらで見返るべしや。討死せしと披露させ、其身は異國に年積り、不日に三韓征伐と、聞くと等しく此地に渡海し、山を川、嶮岨を平地と欺く地理の圖、日本の大軍悉く異國の難所におびきいれ、鏖とせん計策とは、見拔いた推量違ふまじ。子房諸葛は欺くとも、此久吉を謀らん事、及ばぬ巧」と大やうなり。「ホヽヲ遉の久吉あつぱれ眼力。が明智天下を掠めしと、我を唱へて賊徒となす、汝が身の上知るや猿冠者。春永甲州退治の折から、快川國師を燒殺し、種々の惡政見るに忍びず、主人光秀數度

咲かせて立歸る。跡に無念と京極が、胸はむしやくしや眉に皺。奥よりさし足藤藏が、傍に立寄り、「コレ サ先生、今更何の思案顏、重々憎き一味齊、ぶつ放して遺恨を晴すが一番近道上分別」「シイ音高し壁に耳、きやつも討ちたしお菊もほしゝ。フヽ、斯うつ」と、巧む心の奥の間は、又も御遊の亂舞の響き、庭に二人がしめし合ふ、武士の性根の亂拍子、打連れ奥へ、入相の、遠山寺の鐘の音も、花に心をおく御殿、木々の梢に風斷えて、草もゆるがぬ廣緣先、小山のごとき磐石にて、造立てたる手水鉢、ゆるぐと見えしが引かつぎ、顯れ出づる木曾官、おどろの白髮三千丈、髭ぼう〳〵と眼の光、星と輝くその有樣、奥を目がけて歩み行く。上段の間に銀燭臺、點し立てたる中央に、飾り置きしは紛ひなき、小田の重寶蛙丸、「してやつたり」と立寄つて、拔けば新刀の次刀、飾り置きしは謀計もや。「エあらふと儘」と細瑾に、構はぬ不敵投げはふり、「今度はゆるす久吉音成、不日に來つて頭を取らん、待つてをらう」も獨言、のつか〳〵と行く先に、道を遮る茅の穗先、「シヤこしやくにも巧みし」と、見返る跡も鑓襖、取卷く逞兵嘲笑ひ、「ハヽヽ、しやらくさき蚊蜻蛉めら、苧莖にひとしきへろ〳〵鎗、我鐵身に立つべきか」と、手を拱いて幻術の祕文、唱ふる聲と突かくる、鑓は一度に折れ飛んだり。驚きながら屈せぬめん〳〵、組んでとらんと柄を投捨て、かゝるを捻首腕引きぬき、一

ヤア〳〵と互のかけ聲、内匠いらつて打込む太刀、心得たりと請流し、又打ちかゝる一味齋、京極透さず身をかはし、付入り付込む上段下段、時移るまで打合ひしが、何とかしけん一味齋、太刀筋弱つてたぢ〳〵〳〵。「勝負は見えた一味齋、あつぱれ見事」と音成の、賞美の詞に一味齋、ハッと其儘平伏す。傍に内匠が不興顔、「コハいぶかしき殿の御上意、眼前見えたる試合の勝負、拙者負とは其意得ず」と、いふをいはせず、「ヤオレ京極、今の試合を勝と思ふか。其身に纒ふ衣服を見よ、二太刀めには左の紋、四太刀めには右の紋、一味齋が打つたる笄、眼に當らば瞽とならん、咽を打たれば卽座の最期、死骸と成つても戰ふか」と、理非明白の判斷に、ぐつともすつとも京極が、拳を握り無念の思ひ。音成重ねて、「ホヽ惜むべし一味齋、今少し年若くば、三韓攻に一方の大將ともなさんず器量、ヘエヽ殘念々々。當座の褒美一千石、汝に與へ遣はす所、相違なき條譽をば、子々孫々に傳ふべし。ヤイ内匠、今の恥辱に音成が、勝負をとゞめし所存の底意、一々思ひ當りつらん。過つて改むるに憚らず、以來晝夜に勵を加へ、軍馬の前の忠節こそ、此上ながら肝要」と優美の詞諸共に、下る御簾は一面の、靑雲とこそ隔てけり。跡見送つて一味齋、忘れがたきは主君の重恩、エヽ忝しと三拜し、「イヤナニ京極殿、只今は不調法。ヤモ闇の筒先まぐれ當り、必心にさへられな。後刻御意をば」えいぐわの花、藝に

第一は、軈て異國の戰場に敵を引請けかけ惱ます、腕だめしとも存ずれば、何卒御免下さるべし」と、猶押返す下心、邪智とは知れどさあらぬ音成、「フン一理ある申條、然らば一味齋を是へよべ」ハッと近習が主命に、座を立つて行く程もなく、劍は一人に敵する極意、胸に甘なふ一味齋、しづ〳〵御前に伺候する。「ホヽヲ早速の入來大儀、召寄せし事別儀に非ず、則夫なる京極内匠、其方と試合を望み、差とむれども是非との願ひ、老體といひ苦勞なるべきが、いなまず汝立合はんや」「コハ有りがたき慈愛のお詞、老いさらぼうては候へども、打物取つては百萬の强敵も、秋野にすだく蟲とも存ぜず。御上意でござらうならば」「ムウ辭退せず立合はんとな。然らば兩人試合を許す。殊には殿下御座の間近し、よく致せよ」ハッというよりも我慢の内匠、肩衣刎ねかけ、「サア一味齋、御免の出た試合の勝負、急ぎ支度を致されい」「イヤ〳〵劍法は油斷を敵とす、試合を常、常を試合の場とするが八重垣流の心の取方。スハ立合といふになり、こと〴〵しき支度立、不意に敵はなきものかは。ハヽヽ」と、早勝色を顯はせし、木太刀を菊が持出でて、直すも父の利運をば、弓矢神への心の祈誓。其外茶の間仲居まで、傍に居流れ勝負を、皆「吉岡の親父樣、勝つてもらを」も常からの、實な氣はひを請けて居る、最屓連中と知られけり。「イザ參らう」と兩人は、作法の式禮太刀の傍、寄るより早く立別れ、

下さる事、大悦此上や候はん。麁末ながら奥殿にて、一獻すゝめ奉らん、渡御なし下し置かるべし」と申上ぐれば御大將、「ホヽ淺からぬ深切、辭するは無禮。然らば其意に任せん」と、仰嬉しく奥方も、御案内とて諸共に、座を立ち給ふ其所へ、衣川彌三郎あわたゞしく罷出で、「三韓の木曾官、獄屋に繋ぎこれ有る所、いかなる術をかなしたりけん、縲絏の繩目も脫け、眞弓の方の守り刀、奪取つて行方知れず。申譯の爲切腹御赦免下さるべし」と、願へば音成顏色變じ、御大將の御氣色を、はかりかねたる色目を察し、「衣川とやら、小氣なる若者、曲者一人迯せしとて、腹切らんとは犬死々々。侏離鳥言の夷貊のわざくれ、遁れ去るとて何事をかなし得ん、聊か心を勞すにたらず。今死する身を生きながらへ、三韓攻の軍中に、明兵數百の首切かけ、異國に揚る譽をもつて、けふの過償はんとは思はずや」と、人を殺さぬ寛仁大度、胸は江河のはかりなく、滔々としている弓の、矢に似ずゆがむ心より、心苦しき京極内匠、白紙に包む願書を、緣に差置き平伏せば、音成手に取り逐一披見し、「ナニ内匠、此願書は一味齋と試合の勝負が望みとな、善からぬ願ひ、一方勝たば一方は負けたる恥辱、音成が領地に足は留め難からん。三韓征伐近きに有れば、武士一人も惜しき時節、これを計つて此願ひは取上げぬ、差控へよ」「ハッ御意を返すは恐れながら、勝負は時の運による、手強き相手を乞望むも藝道の勵み、

て後を討たば、山崎の一戰難かるべきに、安々明智を討ちし事、偏に和睦を承引ありし、晉成公の情によれり。高義を謝する此一品、けふのお成の土産として、進上の御事なり」と、使者は云捨て座を下る。晉成謹しんで太刀押戴き、「コハ有りがたき御賜、家の面目此上や候はん。シテ〳〵御大將は」「ホヽヲ眞柴大領久吉、それへ行きて對面せん」と、思ひがけなき件の道者、繩引ほどき笠かなぐり、忽替る貴人の勿體、衣服改め寛然と、設けの席に座し給ひ、「誠や久吉、愛智郡の土民に產れ、今日本を併呑し、武將と成るまで其間、草履取より押上り、柴田が肩の按摩取、賤が手業の種々樣々、せざる辛苦もなかりしかど、繩かゝつて見しは初めて。運盡き擒となる族、嘸口惜しく思ふらん、ハヽヽヽ。さるにても一味齋、我を捕へて高手小手、くくし上げんと思ひの外、繩を纏ひしばかりにて、小手をゆるせし所存を聞かん」「ハヽッ恐れ入つたる君の御諚意、貴き事天子につゞき、富四海をたもたせ給ふ、君とは存じよらねども、胸に徹する貴人の相好、繩とる腕もしびるゝばかり」「フウそれ故小手をゆるせしとな、面白し。ナニ京極内匠とやら、そやつ異國の紛れ者、尋問ふべき子細あれども、なか〳〵一應再應では、白狀すまじき頬魂、刃物を奪ひ桎梏を嚴しくし、獄屋に繋ぎ置くべし」と、上意に猶豫なは付を、引立て〳〵入りにける。太守重ねて威儀を正し、「數ならぬ愚臣が茅亭、御沓を入れられ

と、目枯もやらず見る折から、かたへに忍ぶ以前の道者、しげみを這出で地理の圖を、こは〲そつと差覗き、我を忘れて高笑ひ、「ヤレ〱をかしや、此繪はきつくわいな嘘八百、此樣な物を持て來て抱へられうとは、ハヽヽ、太い仕事」と嘲笑ふ。木曾官大に怒り、「ヤア大切の圖をさみする曲者、うぬは何やつ何國の匹夫」「ヤモ何所の者とて身はしれた關東者、先年堺の小西へ行つて、誠の韓の地理の圖見た。コレ此繪圖は山を川、難所を平地とまつかいさま、不審の晴れぬ捧げ物、皆樣油斷遊ばすな」と、云ひも切らせず木曾官、せき立、佩劒拔く手も見せず、只まつ二つと切付くる、白刃を杖にて丁ど受止め、「其手ぢやちつと行かない」と、刎ねれば付け入る二人が爭ひ、近習が聲々、「殿さまのお目通り、しづまれよ」と制すれども、聞かずひるまず戰ふ有樣、音成怒つて、「ヤア誰かある、我が見る前とも憚らず、兵刃を振ふ不敵の兩人、搦捕つて引きすゑよ」と、下知にかけ來る吉岡京極、「御上意なり」と大音に、肝取りひしぐ武の威光、夷は內匠が手に搦め、道者はつひに一味齋、くゝし上げたる其折から、「久吉公の御成」と、白洲に入來る究竟の武士、手に捧げたる太刀一腰、恭しく座に通り、「某儀は久吉の郞等櫻非新吾、此太刀、先君春永在世の時、片時離さず帶せられし、蛙丸と名付けし尤物、君を弑せし明智が叛逆、本能寺の大變聞えしは、此地に軍をいどむ陣中、當家の大軍虛に乘つ

れ入つて蹲れば、奥方斜に見やり給ひ、「ホヽ過ぎし頃長居の浦邊にて、初めて目見えし三韓人、まめやかな體悅ばし」と、仰の下に額をもたげ、「誠に其節願ひしごとく、異國攻伐の統戎たる、音成公の武德をしたひ、歸降を望む木曾官、一度相見し機緣をば捨てられず、宜しく御披露下されば、味方に先驅け異國の案内、あつぱれ三韓八道を、御手に入れんは瞬く内。則是こそ彼國の、山河を縮め畫し地理の圖、拜謁の印として御覽に備へ奉る」と、件の箱物恭しく廣緣に差置けば、「ヲヽ夫こそ我夫かねてより、望み給ひし韓の繪圖。それ〳〵此由申せよ」と、宣ふ聲の内よりも、「聞いた〳〵」と太守音成、悠々と椽に坐し、「誠や蕭何相府に地理の圖をとらずんば、子房賢しといへども計略成らじ。いしくも手に入る此一卷、とての望木曾官、猶もくはしく物語り、聞かしてんや」と有りければ、ハツと領掌庭上に、目に見るごとく述べにける。「先日本は五畿七道、我三韓は八道にて、全羅慶尙京畿道、是は日本の五畿内にて、帝の在す都なり、其外うるさんとくねぎ城、船のかゝるは釜山海、味方の船を爰にとどめ、手いたく攻入る程ならば、久しく治まる世に馴れて、戰ひ不得手の三韓勢、立つ足もなくちり〳〵に、迯ぐるを射止め搦捕り、首の代りに切る耳を、御大將へ御土產に、上ぐる勝鬨勝軍、只手の内に候」と、申上ぐれば音成夫婦、「實にいさましき物語、奇なる畫工の手際や」

事を。麒麟の子を鼠が念がけ、妻に仕たがる望事、叶はぬ限り」と苦笑ひ、襖引立て入りければ、「ヲ、承引せねばうぬが首、娘に添へて請取る」と、かけ行く京極、かけ出る藤藏、「マ、、、お待ちなされ先生、樣子は小蔭で承つた。御立腹は尤なれど、今先生が手を出されては、戀の意趣討人聞惡し。恨を晴す趣方はの、コレかう〳〵」と耳に口。「フン實に尤、きやつと御前の試合を望み、ぶちすゑた上てつぺい押」「サ、手に入るお菊はお前の奥樣、一家となれば恨はさらり、こつが斯うして行かぬ時は、仕樣もやうも又樣々。せく所ではござらぬ」と武士の道より内心の、邪智に勝れた兩人は、點頭き伴ひ入る跡へ、又これ老いて矍鑠たる、投化の夷人木曾官、何かしら木の箱物を、手に携へて入來れば、「ソリャ唐人が來たけな」と、追々出て來る腰元ども、物見高いは常なれや。木曾官立向ひ、「いゝきいちんたんやあこうはん、いつゑつしてさいたくとうらい、しいらい〳〵」とこそいひいるゝ。腰元どもは顏見合せ、「ホ、、、、久しい物ぢやが、アリャ何といふ經ぢやいなう」「ヲ、あれこそ本のちんぷんかん、譯は知らねど推量が、器量のよい同士此樣に、竝んで居るを唐土の、おだて文句で有るまいか」「イヤ〳〵〳〵、もしもあれが物申といふ、案内詞の唐樣なら、聞流しては越度の基。マア〳〵御前へ此通り」と、案内に連れて一間より、月の眞弓のにほやかに、立出で給ふ御姿、見るよりハッと低頭平身、恐

ひ居りし京極内匠、「コレ〳〵お菊殿、出來ますの〳〵」「ヲヽ、内匠樣何ぢややら、出來ますとは何がいな」「コリヤ又きついお隱し。こつそりと子まで設け、イヤモ舅殿の粹さ、當世〳〵。花も恥ぢらふあてやかさ、引手數多は元より推察。ガ戀は心の外々に、何ぼ男があろと儘よさ。日外ふつと見初めてから、思ひに痩せた此京極、叶へてほしい」と抱付く手先、漸に拂ひ退け、「エヽめつさうな事ばつかり。ざれに事かき役柄の、重き身ながら不義徒、事顯はるれば身の上に」「ヲヽ成るの合點。惚れかゝつたら金輪際、くどいて〳〵くどき拔く、扶持も知行も塵芥、おうとさへいや連立つて此所をほい、都へなりと東へなりと、立退く思案、内匠が心底、何と憎うはあるまいが」と、立寄る折から一味齋、そぶりは見れどさあらぬ體、「ヤイ娘、そちや何用で是に居る。年わかき女の端近、惡名請くるもとゐと知らぬか。行け〳〵」と追ひやつて、「ナニ京極氏、貴殿と我は殿の御師範、國に二人の劍術と、人に知られし身の放埒、人なき折を幸に、御異見申す、止りめされ」「コリヤ老人の深切至極、忝い。ガ聞く氣ござらぬ、いやでござる。さうお手前が知る上は、もう隱さぬ〳〵、貰ひたい。イヤサ息女お菊を我妻に申請けたい。吉岡殿」「ヤアだまり召され。掟を案つて色に溺れ、法に背きし今の一言、上意に達せば明日をも知れず、腹切る御邊に連添はす、娘は吉岡持合はさぬ」「スリヤ承引はどうあつてもや」「ハテしれた

婢どもも諸共に、思ひやつたる貰ひ泣、涙もろきは女かや。一間の内より彌三左衛門、奥方の賜手に捧げ、しづ〳〵と歩み出で、「彌三郎、殿に召さるゝ御用ぞあらん、行け〳〵。お菊殿もいづれも奥へ」と、嚴しき父の一言に、底氣味惡く彌三郎、其場を立てば一同に、皆打連れて入りにける。彌三左衛門持出でし、臺の物緣に差置き、「緋縮緬五巻金子の包、稚き者へ下さるる、有りがたう頂戴せよ。ドレ小兒爰へ」と膝近く、「そちが名は何と云ふ」「アイ彌三松」「ナニ彌三松とな。デ顔見せい。フン額のかゝり、目の張は爺親めに生寫し、瓜實顔は母に其儘、テモ能う似たなあとサ、誠の祖父が傍に居ば、嘸斯くいふで有らうもの。殿のお影で祖父祖母も、親も出るには供に供。それに引きかへみすぼらしい、まめな可愛顔見たりや、嬉しうて恨めしかろ。寡では果さぬ躮や娘、思ひ初めたら初めた時、親へ打明け云ひをつたら、表向から三々九度、可愛い孫を世間晴、抱いて眺めて樂むはい。ハヽヽ我子か孫でもある樣に。ヤそな男、秋に音する萩の葉も、おのが身からは音せねど、風がわやくでナヽわやくいはうと見たがろと、逢ひつ見させつする程は、餘人の目にもよく見ゆる、さすれば孫子が不便でも、云ひまげられぬお家の掟、大事に掛けて連れ歸れ。身も歸らう」と弓取も、迷ふは血脈稚子を、連れて二人は打しをれ、倶に我家に歸りける。お菊は恩愛稚子を、今一目見たき間の戸を、開けて立出る後より、伺

む預り物、親御がないといふぢやなし、逢はせたうても見せたうても、儘ならぬ浮世のならひ、隱し育つる葛屋茸、場せまい住家の背戸門を、よその子供が母親や、爺親に手を引かれたり、抱かれて通りや、けなりがり、べいよ、おりやとゝ樣やかゝ樣はなぜない、とゝ樣に逢はせ、かゝ樣へ連れて行け、行きくされと、だゝける子を、漸すかして寢さすれば、現心にお袋と思ひ違へ、べいめが乳の山椒粒、抓んで見ては目を覺し、かゝ樣〳〵と、泣かしやる時のいぢらしさ。イヤモウ是を思へば親子の紲程、せつない、哀な、いぢらしいものはござりませぬ。是を思へば、釋迦如來樣が、浮世をいとひ捨つるには、女房持つなとおつしやつたとは、身にしみ〳〵と尊い敎、親達の心の內も、チヽ推量して居りますはい〳〵。けふは殿樣のお目出たで、無禮講の御遊もあり、お庭拜見御免の噂、承つた嬉しさも、打通りではお庭ばかり、どうぞ爺御や母樣に似たお二方のお顏をにつしりと、見せたいていの思ひ付が、枕を割つた猿の舞。其覺えのよさとした事が、たつた三日で、お聞きなさいたつた三日、モ僅な日數で覺えさしやつたも、器用でも利發でもなく、おとゝ樣やかゝ樣に、ぢやない似たお人に、逢ひたいと思ふあの子の一念。眞實の子の樣に思うて、抱いてやつて下さりませ。コレぼん、日頃夜も晝もこがれさしやつた程、とつくりと抱いて貰はつしやれ」と、いふも眞身の友平が、せつなき咄傍に聞く

て見るのもよからう」と、情の底意奥深く、入らせ給へば婢ども、「サアこれからがこちの世ぢや、其子爰へ」と縁の上、抱上げさせて取廻し、「色もくつきり、手や足の尋常さ。年はいくつ」「アイ、是程」と右の手の、指ひろぐれば、「五つか〳〵。そしてかゝ様はどうしやつたぞ」「アイわしやかゝ様もとゝ様もない、よう似た伯母様や、伯父様を見せるてゝ、べいが爰へ連れて來た」「チヽ、可愛さうに孤か。こんな子産んだ母御なら、嘸器量よしと思はるゝ。能う似たと有るからは、わしであろがの」「イヤ」「そんならわしか」「イヽヤ」「そんならやつぱりわしであろ」「イヤ、おれがべゝと、アノ伯母様のべゝと一つぢやによつて、外の伯母様はいやぢや、アノ伯母様に抱かれたい」と、いふも天然親子の縁、傍にかけ寄り抱付く。彌三郎も聲うるみ、「テモ利口な小猿め、抱いてやれよと奥様も、お赦しの上誰が咎めう。親とまがへてしたふ其猿、心ゆかしにとつくりと、抱いてやられよお菊殿」と、いふは抱きたき百倍の、思ひも一つ兩の手に、菊が引寄せ引きしめて、わがみの様なよい子をば、孤となし置く露の、たまに逢ひ見る顔だにも、親とも子とも名のられぬ、邊りの人目横障の、雲の隔てしうさつらさ、餘所にかこつぞいぢらしき。縁の下には友平が、浮む涙をすりこすり、「親の子を思ふ程、子は親を思はぬものとは、此子から見りや諺の間違ひ。どなたもお聞きなされて下さりませ、子細有つて其お子は、人目を包

常住親をしたひます其いとしさ。今日は無禮講に多くの人の入込み、もし其中に能う似た人もござりましよかと、それ故ハイ〳〵、連れて參りました。只今舞はせまするも、たつた三日の稽古でござりますれば、不調法がちでござりますれど、首尾能く舞ひおほせましてござりませうなら、外に何にも望みまする儀はござりませぬが、御褒美には此猿めを、抱ておやりなされて下さりませ。サア〳〵猿殿、コレイナウ、さりとは〳〵きよろ〳〵した太夫では有るはいの。ガ又見たがるも無理ぢやない、親御は傍に有ながらハ、イヤ、ハヽヽ、母御によう似た伯母樣が有るかてて、子供と云ふものはテモ扨も、扨も〳〵、扨も目出たの秋津洲や、こがね升にて米はかる、米はかる。ひんだの踊は面白や〳〵」「べいよ、かゝ樣やとゝ樣に似た、伯父樣や伯母樣はどれぢや」「コレ〳〵無理云ふまいぞ、舞うて仕舞うたら跡でべいがいうて聞かす。舞うたり〳〵。ウタよさの泊は何所ぢや、おらが内にて袖枕〳〵、乳房ふくめる親もなく、子も泣く、おらも泣く、なけど慕へど名のられぬ、名のられぬ、ひんだの踊は面白や」舞ひをさむれば、眞弓の方は御機嫌よく、「年はも行かぬ稚子に、敎へも敎へ舞ひも舞うたり。付きし男が言の葉に、かく竝んだる其中に、母によう似た伯母の有るとや。したふ子よりもしたはるゝ、親の心は嘸や嘸。ナウお菊彌三郎、そち達ふたりも今の間に、似合の緣の妻夫、設くるやゝの抱きならひ、抱い

じつと引寄せて、雪の手先に柵みし、妹背わりなき折こそあれ、花に嵐の足音とん〱、驚くこなたはさあらぬ體、仲間一人白洲に踞ひ、「猿の眞似する小童を連れたる下郎、今日の御遊の折から、何卒忰が舞の一手、上々樣の上覧に入れたき望み、御門へ參り相願ひ候が、いかゞ計らひ申さん」と、伺へば彌三郎、「ホヽ幸奥樣も入らせらるれば、一入のお慰、早く通せ」の下知を受け下部は御門へ走り行く。斯くと披露に付々が、數多傅き眞弓の方、座に著き給へば舞童、頓て御前に立出づる、五つばかりのうなゐ子が、髪も二葉の抓髷、抓からげの愛らしく、猿の面を氣さんじに、白洲にこそは走り込む。跡に付添ふ男が高聲、「コレ〱何ぼ疊敷た樣なお庭でも、そない走つて蹎たら、手々や膝ぼん擂むきましよ。ハイ〱ソヽヽ、御前ぢや〱、居しからしやれ」「ハア」と手を下げ踞ふ顏、一目見るよりお菊が愡り、ヤア友平か、預けたる子はそれかともゆふがほの、立寄らんにも御前の手前、差扣ゆれど大方は、上にもしろし召さるらん。下には男が杖しやに構へ、「ハイ廻らぬ舌で一寸申上げます。此猿めは生れ落ちるから、爺伯も母御もアヽイヤ、親猿のない正眞の木から落ちた、孤猿でござりますが、此小猿にたつた獨の伯母がござりまするが、此伯母猿がモウ〱、それは〱泣大體の世話ぢやござりませぬ。其でも親子の緣と申すものは、厚いものでござりまして、とゝ樣が見たい、かゝ樣が見たいと、

及ぶまい」「イヤもう〳〵及ばぬ段か、器量なら舞ぶりなら、天津少女の舞の袖、天人に見せて恂りがさして見たい。御臺樣にも殊ない御褒美。衣裝直すはわしらが役、そもじはそこで緩りつと、汗入れる間の咄し伽。」の情郞樣を今爰へ、おこすもわしら仲間から、そもじへ花の縫小袖」手々に持つて入りにける。夫としも、犯せる事はなけれども、戀には人目忍び足、一間を出づる彌三郞、見るよりこなたは飛立つばかり、「逢ひたかつた」と寄添へば、「コレ又邊の人目、忍ぶ戀路を見付けられ、どう云譯をする氣ぢや」と、呵られて淚ぐみ、「サア其逢ひ見るも常々は、堅い屋形のうち解けて、逢ふ夜まれなる七夕の、織女樣も此樣に、思ひこがれてござるかしらぬ。ふたりが中の彌三松を、生落したも四年前、姉樣のお世話になり、古う勤める友平が、里に預けて育つれど、それから後は奧樣の、御傍離れぬ奧勤、嘸可愛らしう成つて居よう、尋ねて居よう慕うて居よ。顏が見たやの思ひ子も、思ふ夫も他人向、我夫よとも我子とも、いはれぬ樣なあぢない、緣が世界に又あらうか。人目忍ぶの戀草も、日陰に枯れる身ならずば、假令虎臥す野邊なりと、親子三人居て見たい、思案してたべ彌三郞樣、わしや手枕の現にも、忘るゝ隙は」ないじやくり、譯もなみだにかきくどく。「チ、さう思やるも無理ならねど、儘にならぬが浮世のならひ、緣と月日はこゆるぎの、いそがば廻れ其內に、仕樣もやうも有ろぞいの」と、云ひつゝ

ヤ、此お目出たの根を問へば、元が奴の久吉様、打つては勝ち攻めては取り、亂を鎭め太平にさつしやつたは、きつい其身の大功ぢやてゝノヨ、あなたを大功様といふはヨ。其大功様が唐を取ろてゝノヨ、軍の名代此殿様がさつしやります、重い役目を請取らしやつたも、運のお強い故でノヨ。それでけふのお目出た様ぢや。廣い日本が取足らいで、唐までも取らうとは、武士の腹といふものは、分なものぢやないかいの」「ヲ、扨あなたに限らず侍といふものは、よき敵と見りやあの首取りたい、よい國と見りやあの國取りたい、常住丁どこちとらが、女見た様な氣持ぢや」と、仇口々に奥庭へ一群にこそ歩み行く。跡へ白洲へつゝかつか、杖も樫木の房州と、二字をしるせし三度笠、立ちはだかつて見廻し〳〵、「テモとんだイ普請、何所もかしこも金物と箔づくめ、何の事ねい御門徒宗の佛壇を見る様だ。大名にや何が成る、金のなる木も有るかい」と、羨しげに立つ折から、一間洩れ來る笛鼓、亂舞の調音も高し。「ハヽア聞えた、けふは家中の無禮講、此別館で藝盡があると聞いたが、ヲヽそれだ〳〵。漸此頃治るともう早亂を忘れたほたへ。イヽヤそれも何の構はぬ事、是から奥のお庭廻り、拜見すべい」と遣水の、岸を傳ひに歩み行く。奥座敷にはもふ勢がいや〳〵とつと譽むる聲、鷹の間の襖開け、出づるお菊が舞の袖、汗拭ふやらあふぐやら、婲どもが寄りたかり、「ナウ千草、面白い事ぢやなかつたか。慶子の所作も

ば押戴き、悦ぶ隙に神隱れ、翁は見えず成り給ふ。六助感淚肝にしみ、「チエ、有りがたし〳〵、日頃望みし此一卷、神より授け給はるとは、忝なし」と押戴き、心も空に飛ぶ鳥と、倶に我家に馳せ歸る。跡へ以前の二人の侍、「先生は何所におはす、先生々々」と呼ぶ聲に、かしこの方より件の翁、歩み出でだる目前に、兩手をつかへ謹んで、「御存念首尾よく達し、才力奇絕の六助に、印可を御傳授相濟んで恐悅至極」といふ聲押へ、「シイ音高し人や聞く。望足りぬる此上は急いで國に歸らん」と、烏帽子かなぐり身に纒ふ、白衣を脫げば神人と、見えし姿は一味齋、杖突く音も谺して、今一聲の郭公、待たねど暮れし山路を、本國さして歸りける。

第　三

周に服せぬ頑民も、殷には忠の至れるをや。長門の太守郡音成、眞柴に引きし弓取も、時代に靡く武威强く、殊更今度三韓を攻伐つも君が御名代、家の眉目と一家中、賜はる酒の杯盤も、狼藉にまで賑はへり。けふ一日は下々に、御庭拜見赦さるゝ、白洲にどや〳〵立ち止り、「ナウ皆の衆、何所を見ても結構な事ぢやないか、お泉水の石一つでも、大まいの小判道具と沙汰聞いて、おらは魂消果てたはよ。お目出たなりやこそこんな所、長生すれば德得ますらよ」「ヲヽテ

き其合戰がマァ不得心、手一合でも主取すりや、叶はぬ場所の命がけ、死んでは親を歎かす不孝、祿も知行も國郡も、親に見替へる寶はござらぬ。奉公する氣はつゆなし」と、けんもほろゝに取合はず。「フン すりや何と申してもや、ハテ是非もなし。其孝心をもつて君に忠義をなしむならば、王蠋季札が節烈にも、をさ／＼劣ぬ國の寶、あたら文武の弓取を、招き得ざるも主人が不運、强ていはんも孝心を妨ぐる不遠慮、もしも老母百年の壽命を持ち、身を終られても有るならば、其の時他家の君にまみえず、必ずとも拙者にたより、主人がもとへ御入來下され。轟がけふの貴殿へ賴み、無下にし給ふ事なかれ」と、云捨てたつか弓取の、心は諸葛孔明を、草廬に訪ひし玄德に、劣らぬ才智大國の、幅を見せたる家老職、山下をさして歩み行く。跡を眺め橫手を打ち、「テモよき侍もあるものかな」と、感じ入り日の照りかへす、森の蔭より、「六助六助」と呼ぶ聲に、邊り見廻し、「フウおれを呼ぶは何所から」と見やる茅原かき分けて、誰としら髮の翁の姿、頭に烏帽子身に白張、杖にすがりて顯れて出で、さもやごとなき御聲にて、「いかに六助、萬石の祿を辭して一人の母を養ふ、孝心といひ義心といひ、慈悲正直を元とする、神の冥感淺からず。我は高良の神の使、此一卷は汝が好ける、劍術奥義を記せし祕卷、只今授與ふる間、家に歸つて開き見よ、四海を撫づる劍の威德、皆其中に有るべし」と、差出し給へ

らうと著物の、塵打拂ふ後の方、「ヤレ暫く」と聲かけて威あつて猛き武士一人、傍近く威儀を正し、「某は當國の隷臣、名は轟傳五右衛門。イヤ／＼苦しうない、お手上げられよ六助殿。武術力量兼備へ、九州無雙の譽れ高く、主人立花修理太夫、召抱へんと頻りの懇望、さるによつて先刻毛谷村に立越え、貴殿の宿所に至りし所、此山中にと承り、參りかゝつて今の樣子、恐れ入つたる貴殿の擧動、誠や千鈞の弩は鼷鼠の爲に其機をはなたず、相手ならざる相手に構はず、詞を卑下して無事を計る心の度量あつぱれ／＼。今より我に伴つて、主人が館へ御入來下され、弓矢を補佐したまはらば、大悦ならん」と大身は、大身だけに身を吹かぬ、胸の器量ぞ奥床し。六助は氣の毒顏、「これは又きついおなぶりなされ樣、獨の母さへ養ひかね、漸小柴の荷ひ賣り、未熟な藝が御目に留り、面目次第もござりませぬ。中々一つも武家方の、お役に立つべき者ならず、此儀は斷つて御用捨と、媚諂はぬ魂を、見込む程猶かうばしく、「サア／＼徳を包むは賢者のならひ、御尤とは存ずれども、夜光の玉は卞和が極め、貴殿の才器は見拔いた某、殊更近々異國攻、軍用士卒に事かゝねど、只乏しきは軍師の器量。拙者が詞承引あり、何卒御入來下さらば、虎に翼を添へたる幸、いかなる異國の大軍も、敗るにかたき事あるまじ。サ、御用意」とせき立つれば、六助はむつと顏、「ア、置かしやませいの、あたしつこい。何は扨置

され」と、詫ぶる弱みに猶付け込み、「ヤァならぬ〳〵。殿の御用をかゝした倅、館へ引立て糺明する」と、左右一度に引立つる、二人が手先をしつかと留め、「イヤモ幾度もお詫いふ、御了簡下されよ」と、放す手よりも引くはずみ、倅が力で尻餅突き、せきに赤面鍔打叩き、「ヤイ〳〵諸侍を投たぞよ、ヲヽ手向ひをひろいだな。下司に似合はぬ生兵法、ぶち放さん」と抜きうちの、刃先をひらりと又腕首、取られて骨も砕るばかり、「アイタ〳〵〳〵うぬこりやどうしをる、何と仕をる」「何とも致さぬ。お詫言聞分もなく刃物ざんまい、あなた方にお怪我がなうても、私が身に凶事あつては、宿に居ます獨の母、路頭にたちまち飢渇の難、跡の歎を推察下され、只幾重にも御堪忍」と、いひつゝぐつと一握り、手先しびれて取落す、白刃と五體山路に、どつさり二人が打返され、はふ〳〵起きて、アイタ〳〵としかみ頬、「エヽ〳〵重ね〴〵投げたぞよ、弓矢八幡聞かない」と云ひたけれど、鳥から起つた意趣だから、放生會だと思ひ助けてくれる。以來我々投た抔と沙汰致さば、赦ぬ程に覺えてをろ。サァ榎竝一學殿」「イザ先早川兎毛殿、お互に御苦勞」と、負けてもさすが侍の、行儀崩さぬ兩人は、弓矢拾うて立歸る。六助は跡打眺め、「扨も〳〵こまつた衆達、ガ、アノ無得心な心もなくば、人の國を奪取り、合戰もしられまい。此身に怪我も恙なう、いぬるも彦山權現の、神の力」と伏拜み、「母者人が嘸待ちかね、ドリヤ歸

ひ出した。こちの村の六助、兵法がよいげなの。其上に力が強い。柴と云やこちらが五六荷を一荷に束ね、長濱まで日に五六度。其癖形に似ぬ孝行者、方々から抱へうといはしやつても、母親の傍離れるがいやぢやてゝ行かぬとは、きつい麁相の。此様な働きせうより、百貫ましの侍商賣、おいらなら行のうにな。ヤたんと休んだ、サアいの」と、打連れ坂を下り行く。古木回岩雲に聳え、羊の腸の坂道も、平地と歩む六助が、柴荷をおろす鳥居前、木の葉つまんで乾手水、宮居遙に禮拜し、岩頭に腰打かけ、「ドラ一ぷく致さう」と燧かちかち吸ひかける、煙草のけぶり風に消え、空に知られぬ鳥一羽、はたりと落ちる膝の前、怪しと見れば諸翼を、矢に縫はれたる山鳩なり。「ハヽアしたり、獵夫のねらひ外れ、翅ばかりをとぢけるよな。六助が目にかゝりしは、運命いまだ盡きざる此鳥、放してやらん」と矢を拔けば、さも嬉しげに羽叩し、雲井遙に飛去つたり。「ハヽア悦んで飛ぶははは。ヤ我等は宿に歸らう」と、荷を擔げんとする折から、半弓携へ岨陰より、二人の武士がうろうろ眼、六助を見て互に目くばせ、中に取込め、「ヤイ下郎め、うぬぢやなうぬぢやな、殿のお鷹の餌に射た小鳥、何で矢を拔き放して遣つた。返答あらばぬかさう」と、切刃廻せば手を摺りもみ、「どなた様か存ぜねど、御狩の鳥と存じたら、モ何しにか様な不調法。只獵人の射損じと、何心なく右の仕合せ。下司の智慧は跡でのお詫、眞平御免下

ふの樣子を我夫へ、申上ぐるも歸國の上、重ねて逢はん韓國人、さらば」と直に引く弓の、眞弓の方は神垣に、賽の供揃へ、神馬は跡に山上が、手綱取り〴〵木會官、馬鳴も儕が來りたる、神の徵としら波や、磯折つ音も豐にて、戶ざさぬ御代の三重盡しなき。

第二

豐前の國彥山と申すは、其麓豐後筑前の三國に跨り、九州無雙の高山にて、峯に上古の神在まし、筑紫彥山權現と、山をば御名に呼子鳥、立木も古りて岧嶢たる、十の谷五十の窟、第一窟を御本社と、仰ぎ尊む神德の、靈驗四方にいちじるき。ウタさまにつげたや此枯柴と、やせてこがるゝ思ひの數を、謳ひつれたる柴苅が、聲せはしなき山戾り、鳥居の前に息杖立て、「ナント皆はどう思やる、此樣に汗水たらし、年が年中山働き、身を碎いても儲からぬ、此末はどう成ろぞい」「イヤさう案じた物ぢやない、今の殿下久吉樣は、元が奴の二合半、それがあの樣に立身して、六十餘州を取られたりや、誰が出世しよまいともいはれぬぞや」「ヲ、それ〳〵、待てば甘露の日の本は取つたれど、又三韓を攻取るてゝ、能ある者は大名から欲しがるげな。物を書かぬ者といふか、大飯喰ふとか尋ねて來たら、鎗突かすまいものでもない。夫に付けて思

で神の馬、引き勝たうとはならぬ事。馬は斯うこそ引くものよ」と、じつかと取りし轡づら、引けば正直に引かれ寄る、波の鼓のかみ神樂、こゝに響きて尊みの、武威を守りの神德奇瑞、空恐ろしく尊けれ。「したり〳〵」と附々が、どよみを作る勝鬨に、木曾官顏色せき立ち、「ヤアどこへ神德、女のよれる髪筋には、大象も繋がるためし。よし〳〵それも無益の爭ひ、イデ異國の幻術奇特、目に物見せん」と手を拱き、口に唱ふる祕密の呪文、驗は目前白波の、漲る海上三反ばかり、潮干潟と土砂捲上げ、平地とこそは成りにけり。下官ども聲揃へ、「サア〳〵ならば是して見よ、いんちんでいかうばとれい〳〵。唐が勝ぢや」と打笑ふ。眞弓の方ちつとも動ぜず、「南無や住吉大明神、汐滿干の力を加へ、日本の鋭氣を添へ給へ」と、一心こらす再拜祈念、空にはそれとしら鷺の、梢を離れ羽叩し、海に向つて飛ぶと見えしが、替りし水尾は忽に、もとの深海と返る波、音どう〳〵と漲れり。ハッと思はず木曾官、恐れをのゝき頭を下げ、「斯くあらんとは知つつれども、術を賴みに慮外の段々、恐ろしく〳〵、御赦免あつて此以來、永く長門の臣下とならば、轍の魚の勺水に、命を延ぶる身の大慶、偏に簾中のお執成、宜しく賴み奉る」と、ぼつきと折りし我慢の矢先、奥方御機嫌うるはしく、「懺悔に億劫の罪も亡ぶ、今より異國の邪術をやめ、神國不思議の威になびかば、いかでかいなみ給ふべき。け

んとは、蚯蚓が天上望む不覺、及ばぬ事」と嘲笑へば、彌三郎ぐつとせき上げ、「アヤ毛唐人の癖として、腕なしの口がしこく、上をさみする慮外の一言、其腮切つて切りさげん」と、柄に手をかけ詰寄れば、御臺御聲かけ給ひ、「ヤレ待て彌三郎、土地の廣さをくらべては、四百餘州と六十餘州、對やうせざる小國なれど、日本は神の開きし御國、神力加はる軍配には、唐天竺にえぞしらぬ、蠻戎が加勢なすとても、叶はぬ事〳〵。神の擁護の眞柴勢、勝つか勝たぬか目の前に、勝負を爰に試みん。コレ此馬の右左、付けたる雙の染手綱、西は異國、東は日本、天照太神も女體なれば眞弓が代り、娰お菊手綱を取つて引く程ならば、神慮に任す即座占、引き勝つ方ぞ勝軍。サア引き給へ木曾官、いそふれお菊」と奥方の、指圖はすぐに軍配智略、のつ引ならぬ木曾官、ふしやう〴〵に立寄れば、おもはゆながら主命に、是非なく菊が取る手綱。後に扣へる彌三郎、「コレ〳〵お菊大事の場所、必ず負て貰うまい。負けな〳〵」も惚れて居る、男のかけ聲千人力、其外家中の面々が、こなたに力めば礒には下官、互に臂を張りかけし、唐と日本の勝負附、賣つても見たき心地せり。「サア女」「唐人樣引かしやんせ」サア〳〵〳〵と木曾官、手綱を腕に身を入れて、引けどいつかな動かぬは、不思議と五體の力を入れ、引けどしやくれど四足をかため、地に生抜きし如くなり。お菊は吹出し、「ホヽヽヽ、豕や羊の肉食に、穢れた腕

出で來り、「今日殿下久吉公、當社明神へ御寄附の此馬、頻に嘶うて止む時なし。不審の餘り小製の、神輿を鞍の上に御し、鎭め祭れど彌增に、嘶く駒の吉凶知れず、御簾中の御目通り憚りある所なれど、異國退治の大統戎、音成公の御代參と候へば、此由申上げんため、則馬も引かせたり」と、謹しんで訴ふれば、主從共に顏見合せ、俱に勒るゝ神慮の不思議。「イヤ其駒の嘶く吉凶、判斷なさん」と船中に聲高く、らつぱちやるめら路樂の響き、一劍腰に霜を佩ぶ、玉音淸く邊りを拂ひ、步み出でたる異國の姿、「我は三韓とくねぎの城主、車騎將軍木曾官。傳へ聞く日本神國として、神は非禮の祭を請けず。近比久吉といふ英雄世に出で、天が下を治むといへども、禮樂政刑神明の心に叶はず、怒れる神の威德に撻たれ、扨こそ此馬嘶き止まず」と、忌憚らず述べたるは、もつての外に聞えたり。眞弓の方打笑み給ひ、「そも保元の亂より又百餘年の此年月、大方ならぬ四海の騷ぎ、切鎭めたる眞柴家の、武威をさみする そもじの詞、自は呑込まぬ」と、胸の一物見透す利發。彌三郞つゝと出で、「聞えた、彼晩唐の白樂天、日本の智慧を計らんと、渡つて來たる人眞似して、久吉公の軍立、軍慮の底を搜りに來たよな。眞柴の神兵程なく押寄せ、手並は汝が國で見せん。早本國に立歸り、首に名殘を惜んで置け」「ハヽヽ、小がしこくも申したり。日本は僅小國の、小島に蔓る眞柴が智慧立、唐高麗を攻め

ん」さらば〳〵と引別れ、北と南へ歩み行く。程なく先驅の歩侍、しと〳〵二行に竝松原、從者の同勢美を盡し、只繪のごとく三つ星に、一品の字を金紋の、乘物木蔭に立てければ、後乘の武士衣川彌三郎、美男の聞え高股立、緣榮よき松蔭に、床几直せばかねてより、戀する中も吉岡が、娘お菊が氈とり〳〵、御座を設けて待ちかくれば、戸を開かせて眞弓の方、嬋娟としてうづ高き、御目に汐路を眺め給ひ、「住吉の岸の向ひの淡路島、哀れとだにとつゞけたる、島山はあれぢやなう。御代治りて太平の、空に狼烟の雲もなく、地に矢叫の音をなみ、磯に群るてふ海士の子が、何憂き事のありてやは、忘れ貝取るしほらし」と、斜ならざる御機嫌に、衣川も岸につゝ立ち・「ナウ腰元衆あれ見給へ、あの高根こそ武庫の嶺、馬手は丹波路弓手は摩耶、敏馬蘆屋の灘つゞき、名所古跡は多けれど、わきて名高き鵯越、源氏平家の軍した、所はあれ」と指ざせば、腰元どもが延上り、「どれ〳〵何所が一の谷、敦盛樣を討留めた、古戰場かと眺めても、目路の遠さにそことしも、譯が知れぬ」となまめかし。浪間にふつと目の付くお菊、「申し〳〵御臺樣御らうじませ、堺の沖の方よりも、こなたへさして漕寄る船、造といひ帆のかけ樣、かはつた船ぢやござりませぬか」「げにも夫よ」と眞弓の方、倶に怪しむ彌三郎も、瞬千里波濤を凌ぐ、異國の大船足早み、程なく磯に寄る折から、祝部山上倫太夫、白馬を引かせ

を吹く春風藤藏、「イヤモ先生の詞は實に金玉。夫に引きかへ一味齋、元が秀らぬ八重垣流、年は老いたり、敎方の其懶惰さ。剩へ此頃は、藥湯とやら何とやらで豐前へ立越え、本國にも居らぬとの噂、近々異國へ軍の御供、勵に勵を加ふる稽古、ぶら付いては居られぬ折から、こちから隙やつて、先生の弟子に成たも、殿の武用を大事とするから、マヽナント忠臣でござらうがの」「成程、此新右衞門も其元に勸められ、先生へ弟子入してからめつきりと稽古が上る、我ながら靹れて居ます。とうからお弟子になつて居たりや、一味齋をも今頃は、弟子に致して居ませう もの、此上ながら幾重にも」「イヤ此儀平めも先生樣のお世話により、韓へ參らばあつぱれな手柄が致して見たうござる」「イヤモなるとも〳〵。いま日本若手の强者、加藤が家來に木村又藏、福島に桂市兵衞竝に萬團右衞門等、何程力自慢でも、劍術未熟手柄は得せまい。內匠が敎ゆる衞を以て、異國の敵に當るならば、樊噲張飛が向ふとも、又諸葛孔明が固むる陣でも、破るは長者の枝より易し。そこが所謂微塵流、勵まつしやれ〳〵」と、優美に見する鼻高々。聲鬧しく馳來る巫、「只今中國殿御簾中、海邊眺望とて此所をお通りなさる、商人は荷を片よせ、往來は下に居ませい」と、いふもいきせきかけ通る。「面倒な御臺の御通駕、逢ふもむづかし堺へはづし、信なけれど神社佛閣、一見して立歸らん。逗留中は大阪屋鋪、歸宅後緩りと御意を得

御陣九州
地理八道　# 彦山權現誓助劍

第一

留侯楚を夷げ子胥が尸に撻ちしも、讐を報いし烈孝に、美を婉べたる女王國、眞柴大樹の代を御する、霸者の民こそ皥々たれ。比は天正半つがた、大明四百餘州を奪略る手初め、三韓八道を攻むべしとて、古昔神功皇后の、遐く祥き蹤を追ひ、勝利の祈かけまくも、住吉四社に奉幣あれば、宜禰が鼓や神樂歌、乙女が袖にすゞしむる、神慮もさぞと知られける。幾世經ぬらん松原の、宮の方よのつしのし、歩みき飾る上下も、折目高なる國侍、濱邊より來る一群も、同じ家中とおぼしきが、それと見るより松が根に、かい蹲踞うてひかゆれば、「コレハ〱春風氏、辻新右衞門門脇儀平、三輩連にて御參詣候な。誠に當社は和歌の神、海路安全の守護に限らず、我荒魂は王師を守らんとの、詫宣まさに弓矢の守護神、歩を運ぶ心底が、直に武藝の勵といふもの、イヤハヤ殊勝に存ずる。斯いふ京極内匠、音成公に召出され、新參ながら五百石、各方の師範たるも、他家に勝れし微塵流、武術に秀でし德なり」と、上見ぬ鷲の高慢自慢、倶に身

堀、今に傳へて殘りける。

新版歌祭文終

助、外から戸前をどつさりと、鼠落の仕濟し顏。折から外には小挑燈、雪の傘差かゝる鈴木彌忠太、後を慕うて勘六が、息もすた〳〵、「彌忠太殿〳〵、一遍こなたを尋ねたはいの」「身共に何ぞ用があるか」「ある段か〳〵、こなたが盜んで立退いた吉光の守刀、質屋にあつて手に入つた故、たつた今藏屋敷へ持つて往た處が、眞赤な贋物、正眞はこなたが持つて居よう。サア尋常に出した〳〵」「ハヽヽヽ、いかにも推量の通り、質屋めに一杯食はしたのぢや。正眞はおれが持つて往て、立身の種にする、溫に渡してよいものか」「夫聞いたらまうよい。其刀は大かた爰に」と、柄にかける手をもぎ放し、直にすらりと拔打を、傘でぱつしり請身の手だれ。內は妹脊の緣側より、庭の井筒に合掌し、「南無阿彌陀佛」の聲聞取り、「お染樣か」「ヤア久松か」「どうでも死なねばならぬ身の上」「未來は一所に」手に手を取つて、組合ふ外の暗紛れ、手に障つたる小脇差、探つて見れば九寸五分。「扨こそ吉光」「夫やつては」とむしやぶり付くを踏飛し、「エヽ忝い。武運の花の開き時、久松樣は何所にござる」と、夫としら雪白壁の、藏と庭とになむあみだ、アツト苦しむ一聲に、驚くお勝、久三の小助、「久松めはくたばつた」と、呼はり出づるを取つて引敷き、「エヽ早まつた御最期」と、恨むに甲斐も百八の、鐘も打切りしら〳〵明け、かはいの聲と諸共に、年のをはりに明渡る、春を重ねて久松が、名は大阪の東

わが身ばかりぢやない、世間へぱつと沙汰になつて、油屋の家は是限、わしも色香を知りながら、心に好かぬ山家屋へ、嫁入さすも家大切。今の若衆形の事ふつつり思ひとまつた證據に、おなかの癪をおろし藥、思ひ切つて煎じてたも。折角佛様の御世話で、五月にもなつたもの、いぢらしけれど子を助ければ親が死ぬ、いひ替した男まで、生きて居ぬ氣を知つた故、三方四方を納めるは、コレそなたの思ひきり一つ。とはいふものの譬にも、子よりも孫は可愛といふに、初孫に日の目も見せず、水になせとの胴欲を、教へる母が心の中は、コレ鬼ぢやはいの鬼ぢやはいの。男の爲親の爲、家相續の爲と思うて、氣に入らぬ嫁入してたも。コレ一生の頼みぢや」と、我子を拜む母親の、義理の腹帶しめ泣に、「いかにも嫁入致しませう」「ヲ、出かしやつた出かしやつた〳〵、よう云うてたもつたなう。其替にどうぞして、早う飽かれて戻る樣に、わしや神佛を祈つて居る」と、粹な親程取りわけて、迫るせつなさ娘の心、互に思ひやるせなき、親子の誠ぞ道理なる。やゝ時移り久松は、も一度お染に暇乞、死ぬる覺悟に立戻り、塀の外面にありぞとも、知らずお勝は、「ヲゝ嬉しや〳〵、翌日は目出たい元日、泣顔ふいて神樣へ、何やかやお頼み申そ。サアおぢやいの」と、連れて行く。見越の枝に三尺帶、ひらりと内へ久松が、あはや人影見られじと、潛む暗き夜藏の戸の、あいたを幸そつと入る。跡からついて見濟す小

すは目出たい元日、年の終は寢ぬものぢやげな。譬へさうなうても、寺々の鐘の音で寢られぬから、持病の癪が差込んで、アイタ〳〵、ちつと爰を押へてたも」あいと娘は何氣なく、手を差入れる懐を、あけて夫とはいはた帶、障る手先にお染は悔り、「母樣、こりやお前腹帶ぢやないかいな」と、思ひがけなき興覺顏。「娘、そなた腹帶といふ物、して見やつた事があるか」「エイ、いえ〳〵何のマア、腹帶とやら、ついに見た事も無いけれど、お腹にやゝをやどした時、此樣に卷いて置く物ぢやと咄に聞いたばかり」「ヲ、よう知つて居やる。いかにもこりや腹帶、イヤサア、癪を押へる腹帶。此癪の直る藥をコレ見や、買うては置いたれど、下女にも男にも煎じてもらふ人がない。わがみ大儀ながらこの藥、誰も人の見ぬ樣に、こつそりと煎じてたも」「アノ母樣の何言はしやんす、藥上がるに誰に遠慮」「イヤ〳〵人に見せられぬ、こりや此癪を押下げるおろし藥」「エ、イ」「ヲ、肝が潰れう。娘の手前も恥かしけれど、太右衞門殿に別れてから、後家は立てても離れて煩惱、嵐三右衞門の芝居に誘はれ、名は言はれぬが、美しい若衆形をふつと見てから、思ひ切るにも切られぬ惡縁、それが積つて情ない、ツイこんな癪になつたはいなう。かういうたら、定めてそなたの心では、母樣の未練らしい、わしらがそんな事が出來たら、井戸へなりと身を投げて死んで仕舞ふに、卑怯な命惜むとも思やらうが、夫では

り廻つて山家屋にあると聞出し、お染を望むを幸に、こつちから乞うて取つた結納の證。久松、そなたに是がやりたい計に、嫌ふ娘を山家屋へ、やらねばならぬも爰の譯。是を土産に本知に歸れば、和泉の御家中相良久松樣。いつまでも油屋の丁稚で居るが見目ではあるまい。まだ年の明かぬ中と、わしへの義理や何やかや、譯もない事思はずと、早う出世さしやんせ」と、渡す後家鞘ぬけめなき、情にお庄が忝なみだ、庄「腑甲斐ない我々が、思ひ込んだ念が屆いて、嬉しいとも有りがたいとも、久松樣、御禮を〳〵」「ア、是、禮は來年ゆるりと、マア行かしやんせ」「ホンニ母じや人、うか〳〵して居る所ぢやない。今夜の内に藏屋敷へお供して、お留守居へ御目見えなされずば、歸參の願が叶ふまい。サア〳〵若旦那、早う〳〵」に久松は、お染に引かるゝ亂髪、撫付ける間もせはしなく、突出す鐘は早夜半、時刻が移ると勘六が、先に押立てかけ出す足首、片息ながら取付く小助、投込むくゞり戸、「御家樣おさらば」「御無事で」「まめで」と内と外、隔つる一夜大年の、鐘は百八煩惱を、跡に見捨て 三重 急ぎ行く。 說敎 跡にむざんや油屋の、お染は一人娘氣に、思ひ詰めたる久松に、別るゝ樣子立聞に、聞いて氣もきえ胸せかれ、爰で添はれぬ縁ならば、未來で積る白雪の、庭へ泣く〳〵をりからに、「お染〳〵」と母のお勝が聲すれば、「アイ〳〵」と元の座敷へ立戻る。お勝はさあらぬ顏色にて、「あ

供衆に、礫打つたり天窓はつたり、手討にもせにやならぬ處を、親父樣の慈悲の勘當。間も無う死なしやつたと聞いてがつくり。始めてちつと人間の魂が出來たれば、悲しや體がみだれ同然、親の墓へさへ晝は得參らず、夜の中に寫して來た戒名、命日に坊樣呼ばうにも、宿なしなれば佛樣は猶なし、せめて親の大恩を忘れぬ樣に彫付けた、此腕がわしが佛壇。置所が惡さに手を合しては拜まれず、毎朝片一方の手で御禮を申しますはいの。餘所ながら聞けば御主人丈太夫樣、御切腹なされた元はといへば、紛失の吉光の刀、此大坂に質物に入つてある由、エヽ是を請戻してお家を立つれば、お主へ忠義、親父樣のお位牌へ、是に上こす手向はないと、思ひ立つた其日から、金の工面に樣々の騙事。日外座摩ですりかへた、其銀故に難儀さつしやる久松樣が、主人の若旦那であつたとは夢三寶、たつた今聞いて腸がひつくり返つた誘的、目當の外れたも不幸の罰、母者人堪忍して下さりませ」と、眞實眞身の後悔は、昔に返る稚顏、「其氣になつたら親子ぢやもの、何の憎かろ、よう健で居て呉れたな」「母者人懷かしかつた」と抱付き、襦袢の袖を絞が誠、大づけ涙殊勝なり。「ヲヽ親子の心底感心しました、夫程に二人の衆が心を盡す、吉光の守刀は爰にあるぞや」「エヽ、そりや又どうしてお前の御手に」「サア緣は不思議と、久松の人がら、由ある人と見た故に、尋ねて聞いた氏素姓、守刀の入譯、廻

くを、脾腹の當身久三郎、きうともいはず目を白黒、一の裏は勘六が、みたのかはりに山家屋も、傍杖こはがるたんば色。久「サア佐四郎樣、拾兩の金子出しましたぞえ、持つてお歸りなされませ。是でも私が盗みましたか」「何のいの、正直正路な丁稚殿、有所さへ知れたら、持つていぬには及ばぬはいの」勝「ム、さうおつしやれば娘にも、言分はござりませぬか」「何のあろぞいの」勝「そんなら嫁入の日限は」庄「春永に〳〵。ア長居致した、早ういんでいねつみませう」とそこ〳〵に、底氣味惡う彌忠太も、そろ〳〵表へ、勘「侍待つた、懷の金置いて行け。但し勘六が引出さうか」勝「イヤ〳〵コレ、あの拾五兩は御文章の代金、深い志の金、お庄殿へはわしが返す。どつこも波風ない樣に、わざと何にもいはぬぞえ」「ヲ、サ、身共も何にも言分ない」と、强い顔でも胴震、肝を菜種に油屋の、辻から横に迯歸る。お庄はいそ〳〵、「結構なお家樣の御了簡で、久松樣の明も忽、打つて替つた勘六殿、急に善過ぎて合點が行かぬ」「コレ氣遣せまい此勘六、久松殿の肩持たねばならぬ譯は、是見て下され、腕に卒都婆の入痣、妙譽西岸信士」庄「ホンニ此位牌の戒名と、合うたは不思議」「母者人健でござつたの。こな樣の子の三之助でごんすはいの」庄「ヤア」勘「別れたは十四の年、見忘れさんしたも尤、斯ういふ髭頰になつたもの。一體が少さい時からいけずであつて、陪臣の悴の分で、歷々の家中の子

うとはのぶとい女め。手附金ソレ返す」と、投出す包お勝が取上げ、「お侍様、こりや最前の手附とは違ひましたな」「何が違つた」「イヤ違ひました、中は見いでも知れてある、大かた是は戎様の贋小判」浪「ヤ、ア、そりや何か手前存ぜぬ、あの女が」勝「イヤおつしやんな、こりや最前の金ではない、わしがよう見て置いた。あの人が渡した金は、反古に包んでござんした、是は是白紙。包が違うてあるからは、お前が内から拵へてござつたふきかへの贋金、正眞の金は懐にあらうがな。日外久松がかたられたもちやうど此傳、是をたぐつて詮議したら、何が出ようも知れまい」と、穴を見付けた發明後家、暗い仕事は油屋の、明にきよろつく化のかは。「イヤ其詮議よりこちらの詮議、ドリア起請の正體を顯はしてお目にかけう」と、立寄る小助を勘六が、取つて突退け起請の一通、寸々に引裂いたり。「コリヤやい〳〵、大事の證據なぜ破つた、こつちへおこせ」と言はせも立てず、膝どつさり片手投げ、「コリヤ何しをる」と摑みつく、頰を飯椀菩薩の罰、勘「ソレ久松小判が出やうが」久「ホンニちやうど拾兩、そんなら此盜人は」「ヲヽこいつぢや、もう遁れぬはい。道理で飯惜み仕をると思うた。何でも三つ山の約束に、己一人よい事せうとは、さりとは下心の惡いがき、もう此勘六魂が返つて、是からは久松が味方、何も角もいうて仕舞ふからは、何所へ尻が行かうも知れぬぞ」「エヽもう赦されぬ」と取付

爲に拵へた此金なれど、差當つた地獄の苦患、遁るゝは此一枚起請、其大切な事を何とも思はしやんせぬは、親御の恩を仇に思うて居さしやるから。コレ見やしやんせ、妙譽西岸信士俗名三平、こりや私が夫の戒名、片時も肌身を放した事はない。お前の親御は劍樹院等覺居士、其心では命日も、忘れてがな居さしやらう。コレ、此位牌の夫三平が、忠義の心を少しでも思ふ氣があるなら、未來の約束、忝い御文章を反古にして、國へ歸つて命長う、家相續して父御樣に、草葉の蔭からにつこりと、笑はしまして下され」と、恨みも異見も十分一、明けていはれぬ百千萬、我子の樣に養ひ君、思ひ詰めたる眞實の、母より深い大恩慈悲。久「誤つた〳〵、もう堪忍して〳〵」と、歎けば涙拭いてやる、あまいは乳母のならひなり。歎を餘所に山家屋が伸欠、佐「アヽこりや盜人の詮議が來年になりさうな。イヤコレ御浪人、見た所があの噂、跡金の才覺心元ない、手附限の事であろ、いつそおれ買ひましよか」乳「イエ〳〵外へはやらぬ、私が先約。サア跡金は何ぼでござんす」浪人「惣高金は五百兩」乳「エヽイ」「安い物ぢや、サア只今請取らう」と、聞いて今更ハッとばかり、當惑顏を見て取るお勝、「イヤ〳〵、無躾ながらそりや出來まい、五百兩なら私が買ひましよ。今がかりに渡さう程に、さつきの手附はあの人へお返しなされ」浪「成程〳〵さうなうて叶はぬ處、めくさり金で大事の代物、買取ら

身の差合せ、賣りに參つた一品、ちよと御覽下され」と、懐より取出す一通、「コレ淨土宗一向宗にはなければならぬ、圓光大師の一枚起請、贋か正筆かは、たつた一目御らうじると、忽知れるお見知の手跡、ナ、何と是計は買はつしやれずはなるまい。天罰起請文の事、此跡を讀まずに直を付けるが商の祕事、娘御に買うて進ぜられたら、一生の災難を遁れる守本尊でござらうぞや。但し御所望にないか。ナニ夫にござるお若い人、其元にも入用の物ぢや、お求めなされい。現當二世の起請文、イヤもう〳〵ありがたい御文章、お望みならば讀んでお聞かせ申さうか」と、意地くね惡う鬼門の肝先、「ドレ拜見致そか」と、立寄る佐四郎は金神の、中からお庄が引取つて、「一枚起請買ひました、わたしに賣つて下さりませ。御不肖ながら」と差出す、金包手に取上げ、「こりや僅金拾五兩、こんな事では」「サア〳〵夫は當座の手附」「ム、手附とあれば請取つた」乳「價は何程致さうと、わたしがアイ買ひまする。今年は夫の十三年、此有難い御文章が、何と人手に渡されう。コレ久松樣、お前の親御丈太夫樣、預りの御重寶失うた科、阿房拂に逢ふのが無念さ、お覺悟の切腹、夫三平介錯の上主人の追腹、お前は漸〳〵六つの年、兄久作の在所へ預け、わしは國にとゞまつて、どうぞ今一度相良の跡目相續の願、御家老中へ月々の訴訟、其時失せた殿の重寶、此大阪の質屋にあると、聞いたはお主の出世時と、其

「サア、おれが飯ぢやによつて」「ア、コリヤ〳〵、其飯喰ふないやい」「妙な事をいふ人ぢや。ム、ばりめを行ふのに隙が入るといふのか。よい〳〵、そんなら飯喰ひ〳〵やつてこまそ。一責せめたら、白狀さすは膳の上の箸」と飯椀はなさぬ勘六、「ア、是はまた情ない。ア、こりや〳〵〳〵、マア夫を下に置け、此飯は喰はされぬはやい」「エ、けたいな、そりや又何で」「サイヤイ、金の盗人が知れぬ中は、仕事仕にも皆疑が懸つてある、ヨウ、若し汝が盗んだのなら、盗人に飯喰す法が有るか。身の垢を拔いた上で、跡で喰へといふ事」「ム、こりや理窟ぢや。そんならこいつ、もうしごいて仕舞はにやならぬ」「ア、是々大事のおれが扶持切米、物いひの付いた飯ぢや、やつぱり此所に置いて貰を」「樣々の事で食どめしられる、おれが爲には食敵、汝には是喰はす」と、割木引提げ立ちかゝる。「勘六待ちや、家來の吟味は主がする、雇ひ人のそなたが入らざる差出、扣へて居や」「そんなら小助が」「イヤわがみも賴まぬ」佐「ヲ、すりやこな樣の直の吟味、見物致そ」と、つゝぱる佐四郞、いやといはれぬ此場の表、「賴みませう」「小助表に案內がある、小助〳〵」「ハイ〳〵〳〵、ハテどなたぢや」と、出迎ふ門口、兼てや諜しあひけんを、互に見ぬ顏空とほけ、「拙者浪人者でござる、此度有付いて國方へ參るにつき、路用の拵に手詰り、お家を見かけて御無心、と申して唯は申さぬ、實は

そつちで詮議がならずば、町内へ断つて、代官所へ引摺つて行く。小助しめ上げて詮議仕やいの」小「ハイ〳〵合點」と立ちかゝる。「コリヤ主の詞を背くのか」と、主命流石うぢつく腕。「小助せくな、此丁稚めは勘六に任せて置け」と、久松が前髪引付け平手でびつしやり、起直つて、久「コレ勘六、こりや何とするのぢや」「大ずりめ、小助は傍輩だけで手ぬるい。其日雇はれの勘六、どなたにも遠慮はない。金はき出さにや、商賣の油の滓喰はすぞ。胴性骨の油糟、絞り出しても言はさにや置かぬ」と、土間へ引立て踏落され、髪もばら〳〵あら涙、こたへ兼ねて駈出る乳母、「マア〳〵待つて下され、待つていの」と庭に駈けおり、「コレ久松樣、お前の身に曇のない言譯は私がする。ほんに〳〵今でこそ町家の奉公、筋目正しい此和子に、そんなさもしい心があらうか。無念にござんしよ。最前からお前より、わしが口惜うてならぬはいなア」と、背撫でさすれば、「ハヽヽヽ、何ぢや、けたいな婆が出た。ごくにも立たぬ言譯せずと、今爰でだはの勘六が、盗人の政道するをよう見て置け。ぢやが酔醒で俄にぐつとひだるうなつた。飯一ぱい喰うて、腹丈夫にしてから、どうするぞ待つてをれ」と、飯椀引出し箸取りかゝれば、小助はびつくり、「ア、コリヤ滅相な〳〵、夫はマア何するぞいやい」「ヤ何するとは、おれが飯をおれが喰ふのに、其が何で滅相な」「イヤサ、夫はいかにもわれが飯さうなといふ事」

おれに言や〳〵」「エヽ知らぬはいの」「ヤ實正覺えないか。エヽ氣の毒ながら、證據出さずばなるまい」と、久松が手習ひ文庫引つさげいで、「こりやこれわれが文庫、アノ佐四郎樣から、結納の證について來た目錄、汝部屋の入物の中に、コレ〳〵入れてあつたが遁れぬ證據、サ天命ぢやの、是でもわがみが盗まぬか」と、差付けられても覺えなき、身の災難に詞なき、久松が胸づくし、取つて引すゑ勘六が、「イヤばりめ。うぬが盗んだ金を人にぬつて、ようおれに紋付けたな」「コレ〳〵勘六喧しういやんな、金の有所ぬかさねば、どづき居ゑて言はすのぢや。エヽ吐しあがれ」と責めせつてう。お勝は聲かけ、「小助待ちや」「エイお家樣、なぜお止めなされます」「ハテ下人というても人の子、疵でもついたら何とする。殊に其金の盗人、急度久松には極らぬ」「アノ、是程知れた證據のあるに」「サレバイやい、其久松が文庫は、開いてあつたか錠がおりてあつたか。金盗む程の者なら、其目錄は破つて捨てる筈の事を、我科の知れる樣に、わざ〳〵我文庫に入れて置いて、しかも蓋開けて置きさうなものか、但し又錠がおりてあつたを、そなたが開けたら、人の箱錠捻切るは盗人の行作、サ夫ならそちにも疑が懸るぞよ」小「サそれは」「其樣に手荒うせずと、靜にしても詮議はなる」と、ぎつくり詞の角屋敷、納めた後家にいらつく佐四郎、「ヤアそりやお勝殿、贔屓のさばきぢや、現に知れた盗人の久松、

兩の金を惜んで、何の間合おつしやらう。油屋商賣は大勢の仕事仕、毎日入込む事なれば、誰が業かは知らねども、失せたには違なし。私共もめい〳〵身晴、共吟味して、今夜中に急度お目にかけませう。お疑ひ晴らされませ」と、挨拶する程むつと顔、何がな小みづをくり出す勘六、おうへにどつさり大あぐら、「コレ丁稚殿、貴様あぢいな事いふの。此所の内に金が見えにや、仕事仕のおいらが盗んだのか」久「イヤ〳〵さうではないわいの」「イヤさういふのぢや、仕事仕が大勢入込み、うさんなといふからは、絞仲間を盗人といふのぢや。殊におりや今日此頃の新面ぢや、猶以て耳に立つぞ。但し何ぞ證據があるか、ヨ、證據もないに盗人呼はり、けたいが惡いぞ、忌々しいぞ」小「アヽ是々聲高にいやんないの」「イヤ〳〵〳〵止めやんな小助、あのせんまめ仕樣がある」小「サヽ尤ぢや〳〵、わがみの立たぬ樣にはせぬ、マア〳〵待ちやいの」「イヤ止めやんな〳〵」小「サア〳〵能いわいの、わがみの立たぬ樣にはおれがせぬ、喧しいやんな〳〵。古町ぢやはいの、人が立つはいの。勘六正直者ぢやさかい、えらう腹立て召さる。ハヽハヽヽヽ。イヤコレ久松、ちよとおぢや、サア言うてしやまいの」「言へとは何を」「ハテわがみが金盗んだ事を」「コレ〳〵小助殿、そりや何いふのぢや、覺えもない事を」「ハテ扨もう叶はぬ事を、其眞顔が厭ぢやはいの。證據の出ぬ中、サア綺麗にいうて仕舞うたが能からうぞや。サア

と小助が悪智慧、小判の包封押切り、「まづ拾兩忝い。此盗人を久松めに、さうぢや〳〵」と一人笑、人に難儀を塗文庫の、中へ目録蓋ぴつしやり、「しめたぞ〳〵、時に此金、ちつとの間、何所ぞに」おくから、「小助どの〳〵」と呼立て出づる下女のおさつ、「コレ〳〵小助殿、今奥で山家屋の旦那樣と、お家樣と、結納を戻せと遣つゝ返しつ、其中に取交ぜて、結納の金が見えぬといふて、大ていの詮議ぢやない。サア〳〵ごんせ」「チヽ〳〵そこへ〳〵」エヽどこへ隱して置き所に、事かく折敷飯椀の、高盛へつゝ込む小判のごもく飯、上から押付けそしらぬ顏、打連れて行く奥から口、目から鼻へ拔目のない女主、後家に負けぬは銀の利の、かさにかかつて聾山家屋、「お勝樣、結納の證潔白に、戻さうと言はしやつたから、今更否はいはれまい。サア〳〵戻して貰ひましよ」「サア今お聞なさる通り、大切にして簞笥に入れ、しつかりと藏に入れて置いた結納の金拾兩、今になつて見えぬといふは」「コレ置かしやれ、言掛りで戻さうとはいふたれど、結納戻せば百二十貫目立てにやならぬ。所で何なと引延す、てれんはたべぬ。人にこそよれ山家屋の佐四郎、一保が講釋三年聞いた男ぢや、そんな計略に乘つてたまるものかいの。ガ又嘘でなくば其結納お出しなされ。サア〳〵何と」とつゝかゝる。主の當惑取分けて、氣の毒餘る久松、「私が差出がましけれど、大まいの銀さへ立てうとあるお家樣、纔拾

所へ」と深切は、替らぬ中の行燈の蔭。男が先へ箱挑燈、點し立てたる禮衣裝、上下ため付け山家屋佐四郎、「歳暮のお禮」とつゝと入る。佐「コリヤ喜八よ、今夜は是で夜が更る、夜半前に迎ひにこい。お勝殿は奥にござるか」久「ハイ、さやうに申しませう、暫くお待ち」とつい立つて、行くも見送る主思ひの、乳母が氣の付く煙草盆。「ほんに幸ひよい折から、今日もあなたへ參つて、お尋申さにやならぬ譯、彼吉光の守刀」佐「アゝこれ、一昨日も申す通り、其刀は手前質に取つたれども、もう疾うに流れました」乳「サア其儀は承りましたが、其置主は若し鈴木彌忠太とは申しませぬか」佐「イヤもういかい事の口數、すゞきやら鯔やら、此方覺えは致さぬ」と、塵灰つかぬ詞の潮。「お茶上げませう」と久松が、差出す茶碗引つたくり、佐「エゝ小じたたるい丁稚めぢやな。手入らずの染茶碗、ちよこ／＼破りさうな頬付、茶碗の代に親方の前で、何もかもけつ破つてこます。けふは後家に逢うてめつきしやつき、嫁入の延びるもほうずがある、結納おこしてから幾月になる、今夜中にお染を渡すか、さうなけりや結納の證の脇差一腰金拾兩、取戻してこちから變改。其代に又借して置いた百二十貫目、毳まで算用して取るのぢや。アゝ案内仕をれ丁稚め」と、しやちこばつたる麻袴、疵持つ足の穗に顯れ、問はぬに夫とおちの人、「そんなら和子、二階で待つて居りますぞえ」と、心殘して立つて行く。藏からそつ

はい。是迄算用せずに置いたは、お山めがいき方が悪さに、肝癪で態と引ずつたのぢや」「イヤそりや旦那お道理なれど、お山の肝癪で呼屋を踏むとは大きなつほ、ソレ重非筒にもござります、踏むな呼屋に科もない、火燵にたんと火をいけて、待つて居ます、くわつとお立て」と、こそ屋はいき〳〵、生玉さして立歸る。「コレ小助殿、此閙がしい大晦日に、何所へ往て居やしやつた」「へ、前髪がなまちよこざい置いてくれ。久三と手代二人前の此小助、請拂は昨日しまふ、年越に隙貰うて、戻ると直にはき掃除、此働きが目に見えぬか」「イヤ〳〵さう計ぢやない、明日の節日の椀家具、藏へ行て出してこいと、かゝ樣の言ひつけ」「イエ〳〵藏の出し入れは、久三の役ぢやござりませぬ。お氣にいりの久松、御寮人樣と連立つて行きや」「それでは詞に角があつて氣の毒、今のはわしが言損ひ、サアいつしよに」と傍輩の、機嫌取る手をひつしよなく、「ハテ行けなら行くが、邪魔になろがな。あすは元日、大かた姫始の取越、お染樣の藏の鍵、あけましてお目出たうござります。エヽ同じ傍輩で、門口から御禮申す事さへならぬ、此久三には何がなる」と、けたい惡口傍輩悋氣、ぶつくさつぶやき立つて行く、年一日も暮れかかる、四十の浪も世話に寄る、乳母のお庄は久松に、尋ねおほさか油屋の、中戸に音なひ、「賴みませう」「どなた」と内より出合頭、「久松樣か」久「チヽ乳母か、よう來てたもつた。マア〳〵此

茶屋でございます、久様にお目に懸れば御合點、女郎衆の取かへが六貫三百、殘は御酒取肴」「アヽ是滅相な、此久松馬場前とやらついに往た事もない。覺えない〳〵」「ハテこな様の知つた事ぢやない。久様に逢はして貰を」「サア久松は私ぢやはいの」「イヤ久松ぢやない、久といふは此内の旦那殿、旦那に逢へば分るこつちや」「イヤ〳〵そんな名は爰にはない」「ハテ扨、コレ旦那の口から直に聞いた、おれが名は油屋の久三郎とおつしやつた、久はひさといふ字、そこでこつちの島では久様といふはいの」「エヽそんな事こちや知らぬ」「知らぬぢや濟まぬ」と聲高に、見ぬ顔しても居られぬ小助、門から手招き、「コレ〳〵〳〵爰ぢや〳〵、久三郎是にをる」「イヤアお前は久様、旦那様か」と、愕りあたふた門口へ、「エヽ不粋なやつではある、内へ這入るといふ事があるものかい」「デモお目に懸らにや濟まぬ出入。ぢやがお前はテモ薄いお姿で、そして御自身に門掃くとは、こりやどうでございます」「サイヤイ、大勢の人を使ふ者は、旦那から斯うして見せねば、廻るものぢやないわいやい」「ハア聞えました。時に聞えませぬは日外から、お風が替つて勝曼へお出なさるゝげな。そして是程の御身上に、私が僅の懸を」「サア〳〵やるはいやい。ソレマア三歩取つて置け、跡は後にこつちから、男共に持たしてやる。それも面倒い、おれが直に持つて行く」「そりや有難い、そんなら必」「違やせぬ

よ」と、住家々々へ立歸る。木綿でもなく絹でもなく、せう事なしの山繭紬、久三小助が里通、勝曼の茶屋で昨夜から、しゆつぽく酒の二日醉、こそのお山に送られて、瓦屋橋にふつと氣が付き、「ヤアこりやうか／＼來て早こちの内ぢや。もう往んでくれ／＼」「サア最前からいねいねいひぢやけれど、内方が見たさについて來た」「アヽコリヤ覗くな、手代衆が見やしやる。イヤサ手代共は大事ないけれど、女共が見たら悋氣する。ちやつといね／＼」「そんなら旦那樣、かた三日違へなえ」と、ぴんしやん歸るを待兼ねて、番部屋の物蔭で、著かへる衣裳繻子の帶、上著くる／＼すつぽりと、元の久三の尻からげ、急がし顏で竹箒、昨夜ののらの掃溜を、跡から拭ふふき掃除、手桶の切水ぱつ／＼と、浮名は餘所に立つぞとも、知らぬ久松小隱に、悋氣口舌も聲高に、いはれぬが苦の世界なり。「お染樣、そりや何おつしやる。許嫁のおみつさへ、お前には見替へぬ私、それに何の浮氣らしい、外の色事所かいな」「イヤ／＼何ほさういやつても合點が行かぬ。是見や久樣と書いたお山の文が再々來るは、どうでも茶屋狂しやるに極つた」「コレは又疑深い、何所の奴がそんな狀。誓文私が茶屋へ行たら、西から日が出る」東堀、いづこ川筋師走の懸取、「田中屋でござります、中拂の殘り拾貫五百文、御算用賴みます」「ム、田中屋といふは覺えぬが、こな樣何賣つたのぢや」「イヱ私は馬場前の

り合ふ、口の悪いは缺徳利、提げて外から、「ヤイ〳〵、勘六が事譏りあがつたは長八めぢやな」「イヤおれぢやない久兵衛ぢや」「イヤおれぢやないぞ〳〵」「エヽ喧ましい、どいつこいつの用捨はない、皆覺悟してけつかれ。人の錢借つては飲むまいし、おれが酒飲んだら、汝等が足でもひよろ付くか」「何のいの、ちつと傍あたりが熟柿臭いばつかり」「吐しをんな、惣體油絞といふ者は、襦袢一つで働く商賣、取分けておれは寒の師走も日の六月も、年中裸で暮す故、だはの勘六と異名付いた男、此仕事せいでもえい錢を儲けるけれど、打入れ打上げる、けがな身に付けた例がない。汝らは錢が無いから得喰はぬのぢや。おれが此嗅をかゞしてこますを有難いと思ひけつかれ。一盃入れて跡で飯を喰ふのぢや。此盛つてあるおれが飯に、どいつでもほでさいたら、腹袋引裂くぞ」と、何でもふしづく鬼の面、ほつた腕は惡鬼の看板、障らぬ神に祟なし。「仕事の賃さへ貰うたら、往んで早う年取らう」「ヲヽどうなと勝手に仕をれ。おりや往なうても盆はなし、此酒の勢にぐつたりと、いつそ來年迄一寝入してこまそ」と、裏へ轉込む拗強者に、構はぬ手間取、「お家様へよいやうに。ホンに此久三の小助は、今朝からとんと顔見ぬなう」「サア昨夜の年越からまだ戻らんせぬ」「ムヽ年越からとあれば、何所の豆を喰ひに往かれた、大かた納屋の下の影裏豆、こちもいんでかゝの煎豆、お福は内に待つて居

ひたいといふたが、是も行きたし、醴も飲みたし、どうせうか、かうしようまん六道の、辻に待つたる以前の丐共、「こちらが仕事の邪魔しをつた侍めはソレそいつぢや。たゝめ〳〵」と三人が、有無を言はさず引立つる、夢見た樣な小助が難儀、悯り駈出す勘六を、そいつもぐるぢやと摑み付く。心得たて臼とり〴〵の、餅に片足踏んごんで、べつたり尻餅あも重ね、運のつき臼摑み付く、眞額げんのみ五文取、起上つては又ころ〳〵、取粉にまぶれて頰眞白、どれがどれやら味方同士、ぶつやら踏むやら暗紛れ、跡をも見ずして　三重　走り行く。

油屋の段

難波詠の其中に、名におほさかの鬼門角、油のしめ木引きしめて、異見の種も後家育、山家屋へ嫁入の、日數迫りし大年の、拂は宵に片付けて、春を壽く注連飾、松の盛砂高盛の、飯椀づらりと仕事仕の、夕飯時は賑はしょ。「ア、おさつ殿遣立てました。今日は大晦日、一年中の仕事納め、早う仕舞うて知行米は、マア腹へ取込んだ。此勘六めはどつちへうせた、めんよう惡い癖で、飯時に飯は喰はず、又酒買にうせをつたか。あいつは大方さか子に生れをつたであろ」「イヤ〳〵酒喰ひの筈ぢや、あいつは薦かぶりから成上つた奴ぢやげな」と、傍に居ぬ者譏

つ。さうして此紙入には何程ある。ヤアこりやはした錢ぢやぞよ」「うまい人ぢや、銀なら何のこなんにやらう。マア〳〵腹立てさんすな。此守袋には、お性根が入つてあつたれど、そりやおれが飲んで仕舞うて、跡に書いた物がある、慥に證文と思はるゝ。おりや讀めぬによつて、こな樣に進上する」と、渡せば取つて夜店の燈。「ヤア、、こりや是、お染と久松が起請、よい物が手に入つた。油屋へ仕懸けてぐずりの種」「コレ〳〵そんなら二つ山ぢやぞや」と、何でも取りつく餅屋の隣、「待つた暫く。此小助も其仲間へ入れて貰を」と、ぬつと出でたる男ぶり、久三のどんざ引きかへて、壹丁目脇指やつ仕立、當世風の旦那衆天窓、「彌忠太樣何とえらいか。よい事聞いた、祝ひに今夜は我等立てぢや〳〵」「そりや過分なが、未一口儲の手筋、片付けて跡から參らう」「ヲ、此勘六も今一臼取つてから、貴樣の餅搗祝ひに行かう」「そんなら勝曼で待つて居る。打つてくれ」シャン〳〵、「も一つせい」しやん〳〵、「祝うて三度」おしやしやんのしやん、しやん〳〵しやんと引別れ、葭簀も折からよい時分、行かんとせしが立どまり、「ハア併しと、久しう行かぬ馬場前の、田中屋へ行かうか、アいや〳〵きやつが所はぶさ打つてある。それよ、勝曼の色めが醴に、生姜入れて待つて居る筈。先此方へ」と行きては戻り、ア、可愛や髭剃のおふさが借錢の咄、正月屋のぜんざいを、お前と氣入らずに喰

だ」「ハイ、こんな事もあらうかと、則旅宿の所書、認めて置きました」と何心なう懐へ、ふつと氣の付く守袋、捜せど見えずはつと愕り。「イヤ、コレ〳〵、身も只今は心せき、重ねて緩りと。早參る」と、袂ふり切り急ぎ行く。「ア、是申し今暫く。エヽ折もをり今の守、若し人に拾はれては、久松樣の身の大事。其も氣遣ひ、今來た道へ。イヤ〳〵、刀の詮議は延されぬ」と、我身は一つ二筋道、忠義一途に追うて行く。勘六に締上げられ、手をすりごうの痛い顏、「ア、申し、出します〳〵」「出しあがれ」「今働いたは此守、一歩が八切、其儘でござります」「まだ是計ぢやない、何も彼も吐出しをろ」と、せごす後に立聞く彌忠太、「ヤアわりや勘六ぢやないか」「ヲヽ彌忠太樣か」「彌忠太かとは横道者、汝よう身共をやつたな」「サヽヽ何にも言はしやますな。コレ此紙入はお前のであらうがな」「ヤ何が」「ハテサお前のぢや〳〵、中にはしつかり、是が日外の入れかへ、ナえいかえ」「ムヽ〳〵いかにも身共が紙入、よく盜んだな」「まだ〳〵、コレ此印籠」「ヲヽそれも身共がのぢや」「イエ〳〵其二色はお前樣のぢやござりませぬ」と、いふを言はせず、「どうずりめ」と、二人が寄つて踏んづ蹴つ、いがみの物取る大盜人に、命から〴〵迯げて行く。二人は跡を見廻して、「彌忠太樣、先度の壹貫五百目は、丁半でころりと仕舞うて、ちぎ文もおはしまさぬ、夫で算用ずつてにさんせ」「エヽふといや

ぎた事なれば、御見忘れなさる筈なれど、此方にはよう覺えてをります。石津の御浪人鈴木彌忠太樣、其時の同家中相良丈太夫の家來、三平が女房のお庄でござりますはいな」「ハテナ、成程さういやれば見請けた樣な。シテ此彌忠太には何の用」「ハイお願がござります、あなた樣が國元を、お立退なさるゝ折節、紛失致した吉光の刀、其誤で主人丈太夫家退轉。此刀が今でも出れば、主人の跡目相續致す。承れば當所の質屋、山家屋に質物になり、限月は切れたれど、其置主さへ知れたれば、質札を買取り、此方へ請戻したさ、色々と心を碎いて金子十五兩、才覺致して參りました。どうぞ其金で質札を、私へお賣下されうなら」「ヤ、コレ〳〵何と言ひめす、スリヤ其質の置主を、此彌忠太ぢやと聞召さつたか」「イヤ左樣でもござりませねど」「夫に又麁相千萬、其置主は卽ち盜賊、さしつけて身共ぢやといやれば、此彌忠太を盜賊といふも同じ事、女と思ひ聞流せば慮外至極」とかさ押にきめ付くる。「イヤ全く左樣ではなけれども、若しあなたが此置主を御存じならば、お知らせなされて下さりませい」を打消して、「アヽ師走の果に左樣の事、相人になる馬鹿があらうか、とはいふものの、侍は相互尋ねてやるまいものでもないが、其詞僞なくば、十五兩の金子、そこに持つて居召されうの」「イヤ旅宿に預けて置きました」「ムヽ手前も只今急用で他所へ參る、明日參つて篤と談ぜう。お手前の旅宿は何所

預つて置きませう。此書いた物は熊野の牛王か、定めて大切な守であらう。神様の名を書いた物、そゝこしうしては今の様に、つい溝へでも取落せば、守が却つて其身に祟る、こりやわしが預ります」と、ちらりと見付けて懐へ、くろめる乳母は守神、胸に納めて、「久松様、明日は私もお家へ参り、倶々に暇の願ひ。親方持ぢや、マア早う往なしやんせ、諸事は翌日」と言残し、立別れては立止り、「コレ申し、必ず國へ行くのぢやぞえ。アヽどうやら濟まぬ顔付ぢや。ほんに又油断のならぬ、いつまでもぼん様ぢやと思うて居る内、つい坊の親にならんすなえ。コレ怪我さんすな和子」いとしや仕馴れぬ奉公をと、昔思へばひと雫、涙催す師走空、見返り〳〵三重別れ行く。往來人絶え長町の、夜店の賣聲、小唄物眞似、「なまいたんやほ、厄拂ひましよ、落しましよ。ヤアラ目出たいな、何ぼう目出たいな。こなたの御壽命申さうなら、鶴は千年」「龜ぢやないか」「三か」「六か」と一所へ、咳きよるの小働き、「ナントよい仕事したか」「サア、ひがだいの幻妻、侍に逢て物いふ間に、ちぼ引いた」「ヤア結構な守ぢやな」「中には壹歩、書いた物も入れてある」「日本橋でてうふせう」「アレ〳〵又幻妻が此方へうせる。かはせ〳〵」とばらばらに、散る三人を見付けた勘六、跡を慕うて飛んで行く。非道の刀さすが世を、忍び頭巾の浪人に、小腰屈めて付添ふお庄、「うさんな者と思し召し、お名をお包みなさるゝは尤。一昔過

餘りせはしい急な出世。さうして其吉光の刀は手に入つたかや」「さればいな、大阪谷町の質屋にあると聞いた故、尋ねに往たれば、其質は半年前に流したといふ。彼の刀の失せた折からお國を出奔した鈴木彌忠太、こいつが盗んで立退いたは知れてある、其質の置主の名を尋ねても言はぬからは、此質屋も相對と思はるゝ」「フゥ何といやる、谷町の質屋とは、若し山家屋とは言はぬか」「ヲヽそれ〳〵、其山家屋佐四郎、彌忠太は此長町に居るげな。慥な手懸あるからは、必ず氣遣さしやんすな。まちつとの所ぢや、煩ふまいぞ、コレ和子。オヽマア私とした事が、やつぱりぼん様の樣に、追付け千五百石の若旦那、立派な馬に乘せまして、はいしいどう勢お國入、お目出たうござります」「何から何まで乳母の深切、孤子になる久松、けふまで命恙いも、そなたの兄久作殿のお情、其刀の質請にも、定めて金が入らうがの。是はたしにもなるまいけれど、重々世話の恩返」萬分の一歩七つ八つ、守袋を開けて出す、はずみに落ちるお染が起請、隱すを押へて、「コレ申し久松樣、奉公人に似合はぬ黄金、誰に借らしやつたぞ、合點が行かぬ」「アヽイヤ〳〵氣遣な事ぢやない、此壹歩は小遣にせいと御寮人樣が下さつた。其書いた物は大事の守、こつちへたもいの」「イヤ待たしやんせ。ハテ情深い御寮人樣ぢやな。シタガ餘り親方の情過ぎるも善し悪しの、なには兎もあれ、しほらしいお前の志の金、

のぢや。こゝからすぐに著かへて行き、何でも今夜はゐら立てぢや。勘六、貴様も辨慶に連れて行く、其代おれを旦那あしらひにしてたも。コレ必ず久三といふまいぞ」と、太平樂の下稽古、隣へ入れば立替る、季もあら玉や往來の、足も春めく祇園道、主持つ身には年德の、惠方參もそこ／＼に、せはしう戻る久松が、摺違うたる挑燈の、印に目早く見返る女、「申し／＼お若いの」「ハイどなたでござります」「イヤ卒爾な事ぢやが若しお前は」と、言ひつゝ燈に顔見合せ」「久松様か」「ヤア乳母のお庄。是は」とばつたり小挑燈。「オヽ危い、灯を消さずと、とつくりと久し振の顔見ませう、半元服さしやつてから、お果てなされた丈太夫様にとんと其儘、オヽきつとした好い殿ぶりやの。此間の文定めて見やしやんしたであろ、乳母が日頃の念願叶ひ、今度殿様におめでたで、多くの科人も御赦免なさるゝ折柄、一つの功さへあるならば、太丈夫が悴久松、和泉の本國へ歸參さするは此時、其功の立て樣は、先達て紛失の吉光の守刀、卽ち此度のお目出度に、正月三日鎧開にお餝りなさるゝ、それまでに其刀を詮議して差上げなば、跡目相續相違あらじと、御家老中の仰渡され、まだ年もあるけれど、親方様へ暇の願、聞屆があつたかまだか。マア年越に健な顔見て、嬉しうござる」と餘念なき、眞身の詞に久松は、今更國へ往なれぬ譯明けていはれず、「夫はマア嬉しいが、師走の内も今日あすになつて、

鬼は外福は内、打納めたる日暮から、晝を欺く長町の、夜店賣物家々の、春を請取る賃づき屋、賑ふ臼取杵の音、とん〳〵疾うからせつきにくる、下女が丸顏とり粉ぬる、鏡の大小子持嗅、分相應の年始め、實に神國のしるしなり。忙しい中で油屋の、小助は肩に風呂敷包、ぶら〳〵來る餅屋の門、「ヤア勘六此所にか。今日は年越だ、一日の休み所を透かさず、賃搗にまで雇はれるとは、きつい精の出し樣ぢやな」「イヤモ是もせう事なしぢやはいの、何が寡なり宿はなし、年中の飯米は饂飩か餅か、五文取の代五六百、此雇賃で帳消さすのぢやが、貴樣の世話でそちの内へ、絞に雇はれて行くにつけ、いつぞやの座摩での仕事、久松めがじろ〳〵と、おれの顏を眺めをると、どうやら氣味が惡いわい」「ハテさて日頃に似合はぬ正直な事いふわい。貴樣を絞に入れて置くのも、久松を目論にかけてほい出す仕事の種油。あすは大晦日、仕舞仕事ぢや、朝から來てたも。今夜は槌の子でも抱いて寢る晩、そこで我等も隙貰うて、是から色の所へ行くぢや」「ア、さうかして月代もすつぱり」「ア、こりや障つてくれな、たつた今床で結立ぢや」「ム、それに又其風呂敷は何ぢやぞい」「是か、こりや立てに行く大盡衣裳ぢや。内からは著て出られぬ故こゝまで小出し、羽織は卽此隣の古手屋に誂へて置いた。ヤコレ、此間の茶縮緬仕立ててあるかな。ヤ何ぢや、もう追付出來ます、エ、遲い〳〵。今夜色に見せに行く

往ぬるのが、世上の補ひ心の遠慮」「左様でござりまするとも、お志ぢや、乗つて往にや」「娘は船へ」と親々の、詞に否も言兼ぬる、鴛鴦の片羽の片々に、別れて二人は乗移れば、「そんなら久松もう行きやるか。来る正月の藪入を、母も必ず待つて居る」「兄様お健で、お染様、もうおさらば」と、詞まで早改まるおみつ尼、哀を餘所にみなれ棹、「船にも積まれぬお主の御恩、親の恵の冥加ない。取わけておみつ殿、斯うなりくだるも前の世の、定り事と諦めて、お年寄れた親達らの、介抱頼む」と言ひさして、泣音伏籠の面ぶせ。船の中にも聲上げて、「よしないわし故おみつ様の、縁を切らしたお憎しみ、堪忍して下さんせ」「ア、わつけもないお染様、浮世離れた尼ぢやもの、そんな心を勿體ない、短氣起して下さんすな」盲母「ヲ、〳〵娘が言ふ通、死んで花實は咲かぬ梅、一本花にならぬ様に、目出たい盛を見せてくれ」久作「随分達者で」久松「ハイ〳〵、お前も御無事で」久作「お袋様もお娘御も、おさらば」母「さらば」さらば〳〵も遠ざかる、船と堤は隔れど、縁を引綱一筋に、思ひあふたる戀中も、義理の柵情のかせ杭、竹輿に比翼を引きわくる、心々ぞ三重世なりけり。

長町の段

かりに詞なく差俯けば、「コレ〳〵お染、野崎參しやつたと、聞いて餘り氣遣さ、ア、イヤ、氣慰によからうと、跡追うて來て何事も殘らず聞いた。夫婦の衆の深切、おみつ女郎の志、最前からあの表で、私や拜んでばかり居ましたわいなう。サア觀音樣の御利生で、怪我過のなかつた嬉しさ、是から直に御禮參。ホンニ是はさもしい物なれど、御病人への見舞の印、麁末ながら」と詞數、言はず出過ぎぬ杉折を、供の男が差置けば、「マア〳〵冥加もない御見舞、戴きまする」と取上ぐる、手元はづれて取落せば、中よりくわらりと以前の銀。「ヤアさつきに渡した此銀を」「ヲヽ表向で請取つたりや事は濟む、改めて尼御へ布施、せめて娘が冥加ぢやはいなう。言譯が立つからは久松も元の通り、戻つて目出たう正月しや。取込の中長居も不遠慮、娘もおぢや」と手を引いて、表へ出づれば久作も、門送して、「是はマア〳〵何とお禮を申しませう。お辭宜致すも却て無躾、せめてものお土產に、折つて置いた此早咲、めでたい春をまつ竹梅と、お家も榮え蓬萊の餝物、幾久松が御奉公、大事に勤めて此御恩、忘れぬ證」と差出せば、「ヲヽ心ありげな此早咲、譬へていへば雨露の、惠を請けぬ室咲は、萎むも早し香も薄い、盛の春を待てといふ、二人への良い敎訓。殊更内に口さがない者もあれば、何角に遠慮せねばならぬ。幸ひわしが乘つて來たあの竹輿で、コレ久松、そなたは堤、お染は船、別れ〳〵に

つそまし、傍でまじ〳〵見て居る心、推量してたもいの」と、いふ聲咽に詰らせば、「サア〳〵サア、其悲しみをかけるのも、此お染から起つた事、死ぬるがせめて身の言譯」「イエ〳〵、死なねばならぬ此久松、わしから先へ」と駈寄るを、久作剃刀引つたくり、「是程いうても聞入れず、是非死にたくばおれから先へ、物の見事に死んで見せうか」「爺樣が死なしやんすりや、私も生きては居ませぬぞえ」「チヽ娘出かしやつた。むさい在所に育つても、貞女の道を辨へて、よう尼になりやつたなう。そこにござるが噂に聞いたお染樣か、お前樣や久松を殺しとむないばつかりに、蝶よ花よと樂んだ、一人娘を尼にして、出かしたといふ心の中、思ひやりがあるならば、なぜ存らへては下されぬ。折角娘が志、無足にするとは胴欲」と、堪へし涙一時に、わつとばかりに取亂せば、「チヽ道理ぢや〳〵、サア〳〵、どうあつても死にたくば、婆も娘もおれも死ぬる、三人ながら見殺す氣か」「サア夫は」「思ひとまつて下さるか、但し死なうか」「サア〳〵〳〵」と三方が、義理と情と恩愛の、しめ木にかゝる久松お染、死ぬる事さへ叶はぬは、いかなる過去の報ぞと、前後正體泣倒れ、咽返るこそ道理なれ。久作涙押拭ひ、「どうやらかうやら合點が行たさうな。嘸ぞ母御樣が案じてござらう。大事の娘御慥な者に」「イヤそれには及びませぬ、母が慥に請取りました」と、言ひつゝ這入れば、「ヤア母樣」ハア はつとば

殿の言はしやる通り、自慢ぢやないが、髪は大てい上手ぢやござらぬ。ホンニ前方大阪行の土産に貰やつた薄の簪、けふの贓に差しやつたかや。著物は取つて置の花色、加賀の裾模樣それか」「アイ」「それ著て居やるか」「アイナ」「ヲヽわがみにはよう似合ふぞいの。ならう事なら鐵漿付けて、顏直しやつたおとなしさを、たつた一目見て死んだら、善光寺樣の、御印文にも勝つて、未來は極樂往生。ホヽヽヽ、わしとした事が、目出度い中で忌まはしいと、久松必ず氣にかけて、たもんなやいの」と、子に迷ふ、暗き盲目に夫ぞとも、知らず悅ぶ母親の、心を察し誰々も、泣聲せじとくひしばる、四人の涙八つの袖、榎竝八ヶの落し水、膝の堤や越えぬらん。見聞くつらさに忍びかね、お染は覺悟の以前の剃刀、なむあみだ佛と自害の體、久作あわて押しとゞめ、「コレ娘御、何が不足で死ぬるのぢや」と、聞き間違うて娘ぞと、母は驚き、「コレおみつ、待つて〳〵」と這寄つて、探る手先に五條袈裟、「ヤア此袈裟といひ此つむり、どうして髪を切つたのぢや、譯を聞かして〳〵」と、急けばせく程せきのぼし、病苦に惱む母親を、見るに娘は猶悲しく、「コレ母樣、こらへて下さんせ、添ふに添はれぬ品になり、私や尼になつたはいな」「ヤア〳〵〳〵、そんならさつきにから、母が氣を休めう爲」「ヲイノ、來世の緣を結ぶ盃、此世の緣は切れてあるはいの」「ハア」「ヲヽ尤ぢや〳〵。そなたは見えぬがい

首にかけたる五條袈裟、思ひ切つたる目の中に、浮む涙は水晶の、玉より淸き貞心に、今更何と詞さへ、涙呑込み呑込んで、こたゆるつらさ久松お染、久作も手を合せ、「何にも言はぬ、此通りぢや〳〵。エヽ女夫にしたいばつかりに、そこら邊に心もつかず、蕾の花を散らして退けたは、皆おれが鈍なから、赦してくれ」も口の內、聞え憚る忍び泣。「アヽ冥加ない事おつしやります、所詮望は叶ふまいと、思ひの外祝言の、盃する樣になつて、嬉しかつたはたつた半時、無理にわたしが添はうとすれば、死なしやんすを知りながら、どう盃がなりませうぞいな」「おみつの何をいやるやら、女夫になりやるを此母も、悅びこそすれ何の死の。ナウ親仁殿」「ソヂヤワイノ、とても此世はない緣でも、せめて未來は、アヽイヤ、未來までも變らぬといふ、盃さそ」と立上り、口に唱名ぶつ〳〵と、佛壇開けて取出す、花瓶の松に鶴龜も、あの世を契る心の島臺。「サア〳〵斯うしてなりと盃さすのがせめてもの心ゆかし。エヽ言ひたい事だらけぢやけれど、此やうな座敷には、たべ付けぬ此親仁、三々くどうは言はぬが花嫁、一つ飲んで久松へ。アヽ目出たい〳〵、婆も嘸かし嬉しかろ」「ヲヽ嬉しい段かいの、一世一度の娘の曠、定めて髮も美しう出來たであろ。さき笄に結やつたか」「イエ」「そんなら兩輪か」「ヲヲ兩輪とも〳〵、思ひがけなうすつぱりと、アいやさつぱりと能う出來たはいの」「ヲヽ親父

い命があつたりやこそ悦ぶ聲を聞くといふも、孝行な久松が蔭、ふつゝかな在所生、心には入るまいけれど、末の面倒見てくだされ、頼みまする」といふ中も、痰火は胸にせき上せば、「エヽ此寒いのに寢所に、やつぱり居たがよござります、冷れば惡い」と蒲團の上へ、抱きかゝへて久松が、介抱如才納戸より、親子の中も丸盆に、乘せた盃銚子鍋、運ぶ久作、「コレお婆、やつぱり寢ては居やらいで。したが島臺のない代、世話事の尉と姥も新しい。目の見えぬは目出度い秀句ぢや、ハヽヽヽ。エヽ目出たい次手に此嫁は何所に居るぞい。おみつ〳〵」と尻輕に、立つて一間を差覗き、「ハテ出ぐすみをして居るは。夫では果てぬ」と手を取つて、「サア〳〵、マアマア嫁の座へ直つたり〳〵。エヽトキニ一家一門著の儘の祝言に、改まつた綿帽子、うつとしからう、取つて遣ろ」と、脱すはずみに笄も、ぬけて惜しげもなけ島田、根よりふつつと切髪を、見るに驚く久松お染、久作呆れて「こりやどうぢや」と、いふ口おさへて、「コレ申しとゝ樣もおふたり樣も、何にもいうて下さんすな。最前から何事も、殘らず聞いてをりました。思ひ切つたといはしやんすは、義理にせまつた表向、底の心はお二人ながら、死ぬる覺悟でござんしよがな。サ、死ぬる覺悟で居やしやんす母樣の大病、どうぞ命が取りとめたさ、私やもう頓と思ひ切つた。ナ、切つて祝うた髪かたち、見て下さんせ」と兩肌を、脱いだ下著は白無垢の、

實親の名を汚すばかりか、世間の義理も主の恩も、むちやくちやにして仕舞ふのが、侍の子か人間か。返事次第で思案がある」と、眞實眞身の剛異見、骨身にこたへて久松お染、何と返事もないじやくり。「是程いうても返答のないは、コリヤ二人ながら不得心ぢやの」「ア、勿體ない、實の親にも勝つた御恩、送らぬのみか苦を懸けるも、私が不所存から」「イヤ／＼そなたの科ではない、皆此身の徒から、親にも身にもかへまいと、思ひ詰めても世の中の、義理にはどうもかへられぬ。成程思ひ切りませう」「ヲ、よう御合點なされました、私もふつゝり思ひ切り、おみつと祝言致しまする」「そんならそなたも」「おまへも」と、互に目と目にしらせ合ふ、心の覺悟はしらがの親仁、「アノさつぱりと思ひ切つて、祝言をしてたもるか」「何の嘘を申しませう」「娘御も今の詞に、微塵も違はござりませぬか」「久松の事は是限、私や嫁入をするはいの」「ヲ、出來た／＼。むくつけな親仁めと、腹も立てずよう聞入れて下さりました。晩の間の知れぬ婆が命、息のある中祝言が濟んだと、聞かして下さるが、大きな善根。善は急げぢや、今こゝで盃さそ。おみつ、おみつ／＼」と呼立つる、聲聞えてや病架より、母は漸探り出で、「親仁殿、久松もそこにか。待ちに待つた娘の祝言、嬉しうて嬉しうて、此間にない氣色のよさ。大煩の上目まで潰れた因果人、佛樣のお迎を待兼ねたに、難面

サこりや清十郎が咄ぢやわいの。疾うから異見も仕たかつたけれど、ちやうど今の樣な事があらうかと、夫が悲しさ、一日延び二日延ばしする間、降つて沸いた銀のもめ事。是言立てに隙を貰ひ、分けて置くのが上分別と思ふから、引負の銀の工面、どの樣に氣ばつても、高の知れた水呑百姓、僅の田地著類著そげ、おみつめが櫛笄まで賣代なし、漸〻拵へたさつきの銀。なさぬ中でも親子といふ名があるからは、肉心分けた子も同然、可愛うなうて何とせう。コレお染樣、ではない、此本のお夏とやら、清十郎を可愛がつて下さるは、嬉しい樣で恨めしいわいの。聞いての通りおみつめと、女夫にするを樂みに、病苦をこたへて居るアノ婆樣に、今の樣な事聞かしたら、何と命がござりませうぞいの。若い水の出端には、そこらの義理も絲瓢の皮と投げやつて、こな樣といつまでも、添遂げられるにしてからが、戸は立てられぬ世上の口ぢやはい。エヽアノ久松めは、辛抱した女房嫌うて、身上の能い油屋の聟になつたは、コレ榮耀がしたさぢや皆欲ぢや、人の皮著た畜生めと、在所は勿論、大阪中に指さゝれ、人交はりがなりませうかいの。コレ〱〱、爰の道理を聞分けて、思ひ切つて下され。申し、コレ拜みますはいの、拜みますはいの。是程いうても聞入れず、親御達が滿足に産付けて置かしやつた其體を切りさいてあさましう死ぬるのが、女の道か心中か。サ久松も其通り、不義密夫の惡名受け、

るのが、母御へ孝行家の爲、よう得心をなされや」と、いへど答もなみだ聲、「否ぢや〳〵私や否ぢや。今となつてさう言やるは、是までわしに隱しやつた、許嫁の娘御と、女夫になりたい心ぢやの。是非山家屋へ行けならば、覺悟は疾うから極めて居る」と、用意の剃刀取直せば、夫は短氣と久松が、止めてもとまらず、「イヤ〳〵、そなたに別れ片時も、何樂しみに生きて居よう、止めずと殺して〳〵」と、思ひ詰めたる其風情。「そんなら是程申しても、御聞分はござりませぬか」「添はれぬ時は死ぬるといふ、誓紙に嘘がつかれうかいなう」「ハア達て申せば主殺し、命にかへてそれ程までに」「思ふが無理か、女房ぢやもの」「叶はぬ時は私も一所に、お染樣」「久松」と、互に手に手取りかはす、惡緣深き契かや。始終後に立聞く親、「其思案惡からう」と、言はれてはつと久松お染、騷ぐを押へて、「ア、大事ない〳〵、マア〳〵下に居や。因緣とは言ひながら、和泉の國石津の御家中、相良丈太夫樣といふれこさの息子殿、聊の事で家が潰れてから、わがみの乳母はおれが妹、其緣で十の年まで育て上げた此久作は後の親。草深い在所に置こより、知慧付けの爲油屋へ丁稚奉公、夫程までに成人して、商の道讀書まで、人並になつたは、コリヤ親方の大恩。其恩も義理も辨へぬは、是見や、先に買うたお夏淸十郎の道行本、嫁入の極つてある主の娘をそゝなかすとは、道知らずめ、人で無しめ、

アコリヤ肩も足もひり〳〵するがなく〳〵。まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかひの取越かい。灸業のかはり、喧嘩の行司さすのかいやい。二人ながら嗜め〳〵」「イエ〳〵構うて下さんすな、今の樣な愛想づかしも、病ひづらめがいはしくつさる」「何をいふやら、モウ〳〵、兩方ともおれが貰ひぢや。ヨヽ、中直が直に取結の盃、髮も結うたり、鐵漿もつけたり、湯もつかうて花娵御を、コリヤ作つて置け」と打笑ひ、無理に納戸へ連れて行く。其間遲しと駈入るお染、「逢ひたかつた」と久松に、縋りつけば、「アヽコレ聲が高うござります。思ひがけない此所へはどうして、譯を聞かして〳〵」と、問はれて漸顏を上げ、「譯はそつちに覺えがあらう。私が事は思ひきり、山家屋へ娵入せいと、殘しておきやつたコレ此文、そなたは思ひ切る氣でも、私や何ぼでも得切らぬ、餘り逢ひたさ懷かしさ、勿體ない事ながら、觀音樣をかこつけて、逢ひにきたやら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ、二人一所に添はうなら、飯も炊かうし織り紡ぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの。女の道を背けとは、聞えぬわいの、胴欲」と、恨のたけをいう禪の、振の袂に北時雨、晴間は更になかりけり。曇りがちなる久松も、背撫でさすり聲密め、「其お恨は聞えてあれど、十の年から今日が日まで、船車にも積まれぬ御恩、仇で返す身のいたづら、冥加の程も恐ろしければ、委細は文に殘した通り、山家屋へござ

ツ、えらいぞ〳〵。あすが日死なうと、火葬は止にして貰ひませう。丈夫に見えてももう古家、屋根もねだもこりや一時に割普請ぢや。アツ、、、、」「ヲ、父様の仰山な、皮切は仕舞でござんす。ホンニ風が當ると思や、誰ぢや表を明けたさうな、しめて參じよ」と立つを引とめ、「ハテよいはいの、晝中に欝としい。ナウ久松々々々々、コリヤ久松、餘所見ばかり仕て居ずと、しか〳〵と揉まぬかいの」「サア餘所見はせぬけれど、エヽ覗くが惡い。折が惡い、惡い〳〵惡い」と目顔の仕かた。「ヤ惡いの、覗くのと、足に灸こそすゑてゐれ、何所もおみつは覗きはせぬ」「サア、アノ惡いと言ひましたは、慥今日は瘟疽日、夫に灸は惡い、惡い〳〵というたのでござります」「エヽ愚痴な事を。此樣に達者なは、ちよこ〳〵灸すゑ、作りをする、そこで久作、アツ、、、エヽ何ぢやはい、わがみ達も、達者な樣に灸でもすゑるのが、おいらへの孝行ぢやぞや」「ヲさうでござんすとも、久松樣には振袖の美しい持病があつて、招いたり、呼出したり、惡てらしい、アノ病ひづらが這入らぬ樣に、敷の上へ大きうしてすゑて置きたい」「コレおみつ殿、振袖の、持病のと、色々の耳こすり、はしたない事聞いてはゐぬぞや」「ホ、、、、變つた事がお氣に障つた」「ヲ、障らいぢや」「こりやをかしい、其譯聞くぞえ」「いふぞや」と、我を忘れて諍を、外に聞く身の氣の毒さ、振の肌著に玉の汗。久作も持てあつかひ、「ア

立寄り、「見れば見る程ェ、美しい。あた可愛らしい其顔で、久松様に逢はしてくれ。そんなお方はこちや知らぬ、餘所を尋ねて見やしやんせ。阿呆らしい」と腹立聲。心付かねば、「ホンニまあ、何ぞ土産と思うても急な事。コレ〳〵女子衆、さもしけれども是なりと」と、夢にも夫としら玉か、露を袱紗に包の儘、差出せば、「こりや何ぢやえ、大所の御寮人様、様々と言はれても、心が至らぬ、置かしやんせ。在所の女と侮つてか、欲しくばお前にやるはいな」と、やら腹立に門口へ、ほればほどけてばら〳〵と、草に露銀芥子人形、微塵に香箱割れ出した、中へつか〳〵親子連、出てくる久作、「どうぢや、鱠は出來たであらう。さて祝言の事婆が聞いてきつい悦。ぢやが年は寄るまいもの、さつきのやつさもつさで、取上したか頭痛もする、いかう肩がつかへて來た。ア丶橙の數は爭はれぬものぢやはいの」「左様ならそろ〳〵私が揉んで上げませうか」「ソリヤ久松忝い。老いては子に隨へぢや、孝行にかたみ恨のない様に、おみつよ、三里をすゑてくれ」「アイ〳〵、そんなら風の來ぬ様に」と、何がな表へ當り眼、門の戸ぴつしやりさし艾、燃ゆる思は娘氣の、細き線香に立つ煙、「サア〳〵親子ぢやとて遠慮はない、艾も痃癖も大摑にやつてくれ」「アイ〳〵、きつう痞へてござりますぞえ」「さうであらう〳〵。次手に七九をやつてたも。オットこたへるぞ〳〵」「サア居ゑますぞえ」「アツ丶ア

したら藥より利目がよい。ハテ俛いてばかり居ずと、おみつ、鱠も刻んでおけ。久松おぢや」と先に立ち、悦びいさむ親の氣を、知つて破らぬ間合紙、襖引立て入りにけり。跡に娘は氣もいそ〳〵、「日頃の願が叶うたも、天神樣や觀音樣、第一は親のお蔭。エ、こんな事なら今朝あたり、髪も結うて置かうもの、鐵漿の付樣挨拶も、どういうて能かろやら」覺束なます拵も、祝ふ大根の友白髪、末ながたなと氣もいさみ、手元も輕うちよき〳〵、切つても切れぬ戀衣や、本の白地をなまなかに、お染は思ひ久松が、跡をしたうて野崎村、堤傳に漸と、梅を目當に軒のつま、供のおよしが聲高に、「申し御寮人樣、かの人に逢はうばかり、寒い時分の野崎參、今船の上り場で、敎へてもらうた目じるしの此梅、大かた此所でござりませうぞえ」「ヲ、もそつと靜にいやいなう。久松に逢ひたさに、來事は來ても在所の事、目立つては氣の毒。そなたは船へ、早う〳〵」と、追ひやり〳〵、立寄りながら越えかぬる、戀の峠の敷居高く、「物申、お賴み申しませう」と、いふもこは〴〵暖簾越、「百姓の内へ改つた、用があるなら這入らしやんせ」「ハイ〳〵、率爾ながら久作樣は内方でござんすかえ。左樣なら大阪から、久松といふ人が、今日戻つて見えた筈、ちよつと逢はして下さんせ」と、いふ詞つき形かたち、常々聞いた油屋の、さてはお染と悋氣の初物、胸はもや〳〵かき交鱠、まな板押しやり戸口に

がかたけて、おれが足でおれが歩行いて、おれが體がいぬるに、ぐつとも言分ない筈」と、へらず口してとつぱ門口柱で天窓、アいたしこ助は足早に、大阪の方へ立歸る。おみつは親の氣を兼ねて、いらへ無ければ久松すり寄り、「此身の手詰は遁れても、此お暮で餘程の銀、跡でお前の御難儀には」「ハテおれぢやとて、相應のかくまひはせまいものか、始末してためたあの銀は、黒谷の方丈へ上げる冥加銀、氣遣仕やんな、まんざらあればかりでもないわいの。改めていふではなけれど、末はわが身とひとつにする約束で、此おみつはばゞが連子、あれも否でもないさうなり、折もあらば親方殿へ、暇の事を願はうと思うて居たが、是がほんのもつけ重寶、もう大阪へいなしはせぬ。早却なれど日柄もよし、今日祝言の盃さすぞ。何とおみつよ嬉しいか〳〵。我等は又天窓を丸め、參り下向に打かゝらうと、頼み寺へ願うて、袈裟も衣もちやんと請けて置いたてや。幸ひ餅は搗いてあり、酒も組重も正月前で用意はしてある。サアサア早う拵らや」と、藪から棒をつゝかけた、親の詞に叶胸の久松、知らぬ娘は嬉しいやら、又恥づかしき殿まうけ、顔は上氣の茜裏、袂くはへるおぼこさを、見るに付けても今更に、否應ならぬ親の前、急に思案も出の口の、壁にいの字をかき一重、裏の病架に咳嗽く聲、「ホンニこちらの事に取込んで、定めて婆が淋しからう。久しぶりで久松にも逢はして、此事を聞か

は心長う持つのが薬ぢや。ヤ其薬で思ひ出した、土産にせうと思うた此山の芋をとろゝにして、出來合の麥飯を進ぜうかい」「置けやい。見せかけばかりの正直倒し、麥飯の、とろゝのと、ぬらくらとは吐させぬ、あんだらくさい」と蹴ちらず藁苞、破れてぐわらりと出る丁銀。「ソレ久松が引負の銀、渡したならば言分あるまい、とつとと持つていなしやれ」と、聞いておみつも久松も、思ひがけなき驚に、小助もぎよつと仕ながらも、包改め、「こりや正眞ぢや、テモ出にくい所からよう出たな。吹きや飛ぶ様な内のざまで、泥龜三つで一貫五百目、請取るからは言分ないわい」「チヽそつちに言分がなうても、こつちにぐつと言分がある、と言ふも古いものぢや。是まで御世話になつた親方様、御恩こそあれ恨はなけれど、人に欺され取られた銀、引負の、惡遣ひのと、名を付けて貰うては世間が濟まぬ、というて無理隙取るではない、親が暫く預かつて置く程に、此通いうたがよい。モウ二十年おれが若いと、わごれにはぐつと馳走もあれど、入らざる殺生。サア〳〵早う往んだがよかろ」と、言はれてどうやら底氣味惡く、「銀の出入さへ濟んで仕舞や、外の事はお構ない。さらばお暇申さう」と、打違取出し捻込み押込み、「ハヽア命冥加な一貫五百目、内へいんで出した所が、蟇になつて居やせまいか」「ハテ仇口をきかずとも、足元の明い中」「チいないぢや。銀こそは主の物、何の其、おれがでにおれ

へ付込む惡者根性、「大阪へ往たが定なら、否ながら道で逢ふ筈、そんなてれんぬかすなやい。ドレもう家搜と出かけざなるまい、邪魔ひろぐな」とおみつを引退け、取付く久松面倒なと、踏むやら蹴るやら無法の打擲、詮方もなき折からに、道引返しいつきせき、戻る久作駈け入つて、小助を引退け突飛し、「留主の間へ來てわつぱさつぱ、樣子に寄つて了簡せぬぞ」「ヲヽよう戻つて下さんした。最前から久松樣をな」「ヲヽよいてや、久作が戻るからは、娘もじつと落付け」と、納める程猶業腹沸し、「大まいの銀引負した其ばりめ、詮議に來た小助は親方の代、夫を又わりや何で投げたのぢや」「是は迷惑な、ひばり骨見る樣な手で、血氣なこなた投げたのではない、怪我のはずみ、出端の曲途で道が違うて、留守の間へ大阪から息子が來たぞやと、若い者どもの知らしてくれたで、行き戻り五六里を助かつた。德安堤引返して戻つたが、そんなら何か、其引負で久松は戻つたのか。アヽ夫聞いてマア落付いた。マア〳〵何角は指置いて、傍輩衆の御世話であらうと、蔭ながら言うてばつかり居ますはいの。寒い時分によう連立つて來て下さつたなう。ソレおみつよ、茶なと汲まんかいやい」「コリヤ納めなく〳〵。わりや夢に見た事もあるまいが、壹貫五百目といふ銀高、子の科は親にかゝる、銀立てるか、但しは又願はうか、二つ一つの返答聞こはい」「ハテよいわいの。其樣に息せいはるは大きな毒、兎角人間

ないといふ、ツイ言譯をして下さんせいな」「ハヽべるは喋るは。コリヤヤイ、天窓こそ前髪なれ、其素早さ、傍輩には辭宜もなしに、取つて置きのお娘まで、此跡はいはずにこます、裾貧乏のはつた行過丁稚め、首綱のかゝる事、言譯に如才があろかい。小倉の屋敷へ請取りに往た爲替の銀、御役人から改めて渡つたは正眞、内へ戻つて明けた所がわやひんの胴脈、道の間ですりかへた品玉の大夫、早咲久松でございます、ハリトウ〳〵。白眼剝くは無念なか、無念なら銀立てるか、有るまいがな。サア久作は何所に居る、出さらずば引出さう」と、斷入る袂を久松引きとめ、「成程、銀をすりかへられたは皆私が無調法、身の明りの立つまでは、在所へ行けと後室樣の結構な御了簡、それをそなたが」「ヤイ〳〵〳〵何吐すぞい。そりやわれが勝手了簡の聞損ひ、おれには此詮議仕ぬいてこいと、内證で後家御の言付、ぢやによつてめつきしやつきするが何ぢや、ひんこめ出され」と大聲を、おみつが押へて、「コレ申し、御尤でござんすけれど、奥の病人に好事がましう聞かしましては病氣の障、もそつと靜に」「イヤ高ういふのぢや〳〵。是程わめくに聞耳潰すは、親仁もぐるの仕事ぢやな」「イエ父樣はあなたの方へ、歳暮の禮に往かれました。どうして道が違うた事、若持病やなど發りはせぬか」と、外も氣がかり病架への聞えも氣づかひ、久松が身の言譯に差込んだ、癪を覺えるばかりなり。弱み

れば、「ヲヽ父樣とした事が、此短い日にモウ晝過、明日の事になさんせいで」「何のいやい。年こそ寄つたれ此足に覺えがある、一時三里犬走り、日暮までには戻つてくる。歳暮の祝儀はコレコレ此藁苞、山の芋は鰻になる、久松の年が明いたらば、われは又お内儀になる。夫樂みによう留守せい。ドリヤ往て來う」と身拵へ、藁苞肩にヤえいとこな、表へ出でしが立ちどまり、「取分け今年は早う咲いた此梅、何より角よりよい土産」と、春待顏に咲く花を、手折つて苞に一枝を、添へてひよか〳〵野崎村、跡に見なして出でて行く。影見送りて久松が、事のみ思ひ兎や角と、胸に一ぱい半分の、水量り込む藥鍋、一へぎ入れる生姜より、辛い面つき久三の小助、久松引連れ入口から、「久作内に居やるか」と、づつと這入ればおみつは嬉しく、「オヽ久松樣、ようマア戻つて下さんした。定めてあなたは送りのお方、お茶よ煙草」と嬉しさに、立つたり居たり氣もそゞろ。「エヽやかましいわい。うそ穢い在所の茶飲みにはこぬ。コリヤ追從せずと聞いて置けよ。此久松めが親方の銀壹貫五百目お山狂にちよろまかしたによつて、今日連れて來たはな。久作と三つがなわで詮議するのぢや、親父を出せ、出せ〳〵」と辰巳上。身の誤に久松が、差俯いて詞さへ、ないには若しやと思ひながら、「御腹立はお道理ながら、何のマア久松樣に限つて、よもやさうした事はあるまい、定めて是は何ぞの間違、覺がなくば

十里」「通らしやれ。母樣の煩で三味線も耳へは入らぬ、手の隙がない通つて下され」「淸十郎涙ぐみ、お夏が手を取り顏打ながめ、同じ戀とはいひながら、お主の娘を連れて退く、是より上の罪もなし」「オヽ聞きとむない、通りや〳〵」といふ聲に、久作は納戸を出で、「大阪ではやる繁太夫ぶし、そなたにも聞かしたけれど、病人の氣に構はう。本なと讀んで氣晴し仕や」と、義理ある中も子を思ふ、惠は厚き古合羽の、煙草入からこつて〳〵、錢取出して、「ドレ一冊買ひませう。ナンチヤ、お夏淸十郎、道行戀の濡草鞋。コレ見や、此お夏は手代と念頃して、姫路を駈落する道行。同じ娘でも世は樣々、纔三里の大坂へ、芝居一つ見にも行かず、今度の大病から目の見えぬばゝの介抱、達者なおれが喰物まで、其樣に氣を付けてたもる孝行娘、若し勞れでも出ようかと、おりや夫を案じるはいなう」「ヲ勿體ない事言はしやんす、煩うて居さんす母樣より、健なお前のお心苦勞、せめてもの手助けと思うたばかり、其樣な事苦にやんで、煩でも出ようかと、私や夫が悲しうござんす」「ハテわつけもない、したが百日と限のあるばゝが大病、案じるも無理ではない。が、玄庵殿の加減の藥で、今朝から末の椀盞にも湯が二はい通つた。見かけに寄らぬ巧者な醫者殿。ヤ幸今日は日和もよし、久松の親方殿へ歲暮の禮に往て來る程に、隨分ばゝに氣をつきや」と、いひつゝ脚絆草鞋がけ、紐引きしむ

と、死骸の傍へ立寄つて、「首尾よう行たぞ」「ヲヽもうよごんすか」と、むつくと起きる體は血まぶれ。「勘六殿、今のでよかつたか」「よいとも〱、物した物を又こつちへ、是も貴樣の切られ樣が上手なから、何ぼ切つても疵痛せぬ、紀州の源藏大儀でごんした」「ヲヽサそこらをさす物かいやい」「シタガ餘り拍子にかよつて、よつ程の疵、いたみやせぬか」「何のいやい、もう最前吉野丸付け置いた。夫を知らずに今の侍めが、逃げていにをつたざま。コリヤ此位の疵は、たつた一付で直るはいやい。はなたれめが」「それ酒代の一兩」「忝い、サア〱是からこちの商賣、紀州源藏樣お歸りぢや」「アヽコリヤ立前所ぢやない。アレもう芝居が果てる、人の見ぬ間に早う行け」チヨン〱幕際綱八の、切狂言の果太鼓、音に紛れて 三重。

野崎村の段

年の内に春を迎へて初梅の、花も時しる野崎村、久作といふ小百姓、せはしき中に女房は、萬事限りの膈病、娘おみつが介抱も、心一ぱい二親に、孝行臼の石よりも、堅い行儀の爪はづれ、在所に惜しき育かや。冬編笠も燻り三味線、つぼもすまたの彈語、「御評判の繁太夫ぶし、本は上下綴本で六文、お夏清十郎の道行々々。あづまからげのかいしよなき、こんな形でも五里

人久松に渡せし銀子、子供上りの若いやつ、何とも心元なく、跡より來り窺ひ見るに、おのれ等が騙事。かやうの吟味仕れと、お金役より付け置かれた、岡村金右衞門といふ者だはい。サアおのれ等引つくゝつて屋敷へ連行く、腕を廻せ」と詰めかけられ、「ハテさう見られたら是非がない。成程其銀は騙りましたが、此お侍は通り合して連になつたばつかり、何にも御存じないお方、私一人繩かけて、サアお引きなされませ。サア〳〵」と油斷を見すまし彌忠太が、差したる刀拔打に、肩先ずつぱと金右衞門、同じく拔いて切り結ぶ、兩方劣らぬ牛角の早業。彌忠太は八方に眼を配つて、「ソレ〳〵そこをと」、聲の助太刀ちからにて、强氣の勘六まくり切り、なぐる刀を受損じ、たじろく所を付け入つて、兩脚薙がれよろ〳〵、うんとのつけに倒れ伏す。勘六は一息ほつと、人や見ぬかと見廻す彌忠太、「勘六どうした」「氣遣ひさんすな、もうとまつた」「ホイ、シテ此捌きはどうせう」「ハテどうというて高ぶけり」「ヲヽ身どもとても此處には居られぬ。ドレ其銀を此方へ」「彌忠太樣、お前此銀取ると笠の臺が飛ぶぞえ。藏屋敷の侍をばらしたからは、どうでおりや遁れぬ命、とても助からぬからは、何もかも勘六が引受けて、こな樣の名は出さぬ。づきが廻らぬ內早往かんせ〳〵」「尤、エヽあつぱれ男ぢや、緣あらば重ねて」「細言いはずと早う〳〵」「ヲヽさらば〳〵」と別るゝ跡、納めた勘六そろ〳〵

どうなと召され」とすり寄る體、「エ、おのれしきぶち放すも刀の穢、どうしてくれう」と傍邊、有合ふ財布眉間へぱつしり、ハット驚く久松を、お染が抱きしめ押ゆる袖、氣をもみ裏の裏へ行く。小助がきつと、「コレ申し、あの包は手前の銀財布、斷もおつしやらず、お侍には似合はぬ仕方」「誠に是は心せく儘手前の麁相、眞平々々。なむ三寶少々血が付き申した。幸の非の元」と、淸むる穢は薄けれど、包みし惡事すりかへる、手目を見せじと小助が氣配、覆になつて立縞の、財布手早く「コレ久松、此銀は懐へ。お染樣、掛り合になりや惡い。私もお供、サア〳〵早う」とせり立つる、工の底は白齒のお染、久松早うと手を取つて、せはしい所が結ぶの神、足を早めて立歸る。跡は人たえ宮芝居の、切のめりやすしめやかに、囁く二人が仕濟まし顔、「彌忠太樣首尾は」「ヲヽ件の物は手洗鉢の下にある」「うまい〳〵」と立寄つて、財布取上げ「彌忠太樣、今日の働き代はえ」「ソレ金二兩」「エィ眉間に疵まで付けられて、たつた是かいな」「サアよいは、其壹貫五百目、どうで小助にも口錢やらにや聽きをるまい」「そんならふてうはどやでせう、ぐれのこぬ内サアごんせ」と、銀懐へ取納め、連でない顔跡先に、のしのし歩む鳥居の蔭、「盗賊待て」と聲かくる。びつくりしながら騒がぬ顔、「盗賊とは誰が事」「おのれらが事さ」「エ、何を證據に盗賊とは」「ヤアぬかすまい、今日此方の屋敷にて、油屋の下

「ヲヽ法印坊そこにか」と、出てくる佐四郎にすれ違ひ、そつと後の襖から、鳥居の中へ行く二人、戀しいお染と夢にも知らず、「サア〱一時も早う星祭、是から直に手前が宅へ」「そんなら參ろか。イヤ待つたり、肝心の商賣道具、持參致そ」と園の內、「ヤア、テモ素早い奴、もう逃げをつた。さては今のが彼前髪めであつたな、ようほん代を喰逃に仕をつたな。よいよい、此意趣返しはたつた今、お染がお前に靡く樣に、祈伏せるは我數珠先。さんけ〱六根大聖南無不動明王〱。なんほうに見つとむなうても、男はれこもち喰はねば立たぬ、身代よしの山家屋で、腥料理喰ひ次第、蒸菓子羊羹責めかけ〱、「榮耀のありたけえいさらさ〱、さしものお娘も喰につき、魂の返るは今の中」と、いさんで打連れ歸りける。南の辻に人立し、喧嘩々々と騷ぐ聲、驚き出づる久松お染、下女もとつかは久三の小助、一所に落合ふ床几の上。喧嘩は選物國侍、相手は町人胸ぐら取られ、引立てられてもひるまぬ男、「こりや何とさつしやります」「何とゝは素町人め、武士の足を泥脚で踏みながら、御免ともぬかさぬ慮外者め」「サアえいわいな、慮外ならあやまる分、マアこゝを放さんせ。踏んだはおれが脚、踏まれたはこな樣が脚、武士ぢや町人ぢやてゝ脚に違はあるまい。そんなこつき喰ふ男ぢやない、聞かぬというてどうさある。お太刀ひねくつたとて、滅多に切れるものぢやない。人そばえせずとお侍、

獻上向な挨拶は、まだわしが氣を疑うてか。そもや見初めし其日から、エヽこんな事何とかやいひたいけれど、人が見るので何にもいはれぬ。どこぞ人の聞かぬ所で、しつぽりと咄したい。こつちへおぢや」と手を取れば、「さうぢやてヽ茶屋の内もやつぱり人目、どこぞ暫しの隱家」と、覗く八卦のかこひの內、「ヤア誰もないはいの、外から襖は戀の塒、サア此間にちやといの」と、手を引く主從三世相、二世を兼ねたる妹脊鳥、忍び入るこそわりなけれ。神樂の鈴も時移る、ほろ醉機嫌に法印は、とろ〳〵目して鳥居前、「エヽきやつも吝いやつぢや。喰はれもせぬ吸物にたつた酒三銚子、ホンニ端た酒飮まうとて、店を明けたは不用心、山伏が物盜まれては、見て貰ふ所がない。ヤヽ何やらぶつ〳〵呟くやうな、此内に人の聲あるは、ハテ怪しや」と暖簾の內、差覗いて驚り仰天、這入られもせず氣はうはづり、繪馬に上つた一來法師、立ちずくみになつて居る所へ、いきせき走つて下男、「コレ〳〵法印樣、一つ見て貰ひたい」と、入らんとすれば、「アヽコレ、今內へ這入ると水火木金亂騷ぎ、木火土金するをきかせいやい。八卦なら爰でもつい見てやる、失物か走りか、心中がかつた者なら、奇妙に所を指いて見せるぞ」「イヤそんな物ぢやない、こちの旦那山家屋の佐四郞樣が、今朝から今にお歸りなされぬ」「ムムそれか。よいは、此山伏が行力を以て、たつた今こゝへ天降らして進ぜる、佐四郞さま〳〵」

お傳が、「申しお染樣、宮の内の茶店で、ちとお休みなされませ。私は此處に張番して、彼人が今でも見えたらコレ斯う」と、いへばお染はほゝ笑みながら、「神のお庭で勿體ない。差合のない時に、顔を見るのが樂み」と、待つ人よりも待たるゝ身、久松はいきせきと、屋敷の用事そこ〳〵に、足元かろく立歸る。お染は見るより、コレ久松樣といはれもせず、「此所に〳〵」と寄添へば、久松も途中の人目、「コレお傳殿、小助殿は見えなんだか」と、いひつゝ邊に氣を付くれば、呑込むお傳が、「申し御寮人樣、わたしやあの綱八の芝居が一切見て參じたい」「ホンニそなたは芝居好、藪入でなけりや行かれぬに、けふは幸ひ勝手に往ておぢや、隨分緩りつとだんないぞや」「ハイ〳〵、そんなら往て參じよ。久松殿もお染樣と、どこぞそこらへ藪入さんせ」と、はづすは猫に鰹木の、氣を通り札鼠木戸、是も忠義と行く跡に、契りし中は詞數、いはず取る手を振放し、「申し御寮人樣、お前樣は追付けえい男お持ちなさるげな。私は下人の事、何とせう、しよ事がない、といで拗強るはやつぱり愚癡。勿體ないお主樣が、是までのお志、眞實冥加なう存じます」と、押下れば摺寄つて、「コレ夫はマア何の事、内では人目があるによつて、久松〳〵と家來あしらひ、樣といふ字は口の中で、常住消して居るはいの。せめてこんな所でなりと、女房かお染かと、いうてたんのうさしもせず、お前樣の御寮人のと、

前が喰ひたい飲みたいではござらぬ、卽ち夫が星樣への御馳走。物をほしがるによつて是星なり。祈禱始に宮の內の福屋で、マアちよつと御神酒上げよかい」「旦那、こりやよござりましよ」と、おだてる太鼓神樂所の、鼓片手に糟禰宜が、「山家屋佐四郎樣、御獻上の神樂が只今上ります。サアお出でなされませ」「是はいかな、糅てて交ぜてどんちやんと、是もやつぱり今の願、モウ神樣を賴むに及ばぬ。コレ神樂の酒手ぢや、貴樣も御神酒の相伴さすぞ」「イヤ有難いは。さらば福屋で腹存分、禰宜山伏のくらゐ爭ひ。願主樣まづお入」と、鼓よりまづ舌つゞみ、打ちつれ茶屋へ勇み行く。小助はそろ〳〵小戾りし、手招きすれば最前より、待ちかね山仕の浪人者、鳥居の蔭より又一人、是も手合と顏見合せ、三人いつしよに寄りこぞる。中にも勘六氣をせいて、「シテくだんの物は」「コリヤ聲が高い。あの井の內に仕かけて置いた、此鈴木彌忠太、久松めとは仔細あつて意趣のある中、彼奴めを仕くじらす工面は、小助かう〳〵、合點か」「よし〳〵、彌忠太樣は勘六と、福屋で飮んでござりませ。前髮めが戾るを待つて、手工合首尾よう〳〵」と、耳から耳へ相談さらり、しめて三人別れ行く。人一盛夢の世や、浮名の端の種油、一人娘と寵愛の、お染が思ひ日に千度、行きつ戾りつ蝶々の、縫の模樣を振袖に、包むとすれど娘氣の、迷ふ心を一筋に、座摩の宮居に歩み來る。下女の

事仕でござります」「八卦の面にさう見える。トキニ其許様は丑の年で、牛の寐た程金銀を持つてござる。此度東に當つて金銀の星が顯れまする、是が其許様の年頭に當る、卽ち彼金銀の勢で、此女はお手に入る筈ぢやが、爰に一つ障がある。其許様には背中の骶に、疣が一つあらうがの」「イヤア、サア〳〵見通しぢや〳〵」「サア〳〵なけりやならぬ理ぢや。此疣のある所が悪い。惣體背中に有る疣は背疣というて、只今師走には、或は牛房鯟鰯、何なれかなれ人に物を遣るばつかり、錢銀を取られるばかりで、是まで頼んだ事が、一つも埒が明かぬと見えます」「とんと其通り」「さうあらう。時に又一つ大きな邪魔がある。ハテかはつた物、四角な物ぢやが、坎艮震巽りかんがすかん、兌中斷と取つてだゞほたの兌の卦に當る。人相に取つてはこりや前髪と見えます。彼金星銀星が寄合はうとする中へ、此前髪の眞鍮星が、毎晩夜這星になつて邪魔するといふ卦體」「サア夫がけたいでなりませぬ。どうぞ其前髪を」「此法印が行力で祈り殺して進ぜませう。まづ縁結の星祭、こりや其許様の御家へ參つて致さにやならぬ」「サア夫が第一お頼み申したい」「申さぬ事は聞えぬが、金銀の星を祭るは、同氣相求めるの道理で、金銀の元入が餘程入ります」「サア何ほでも大事ない」「供物は隨分大きな鏡餅十二重、跡は法印が受納致す。さて祈禱の間、酒肴で我等を御馳走なされるがよい。かく申せばとて、手

な、跡はほん、やくたいぢや。壹分一つ井戸へ落したと思はんせ」と、聞いて佐四郎はおろおろ顏、お性根取られた鼻紙袋、下地が拔けたさしばかりの、百度參も恨めしき、「申しさう力落したものでもない、お前の戀の邪魔といふは、久松といふ丁稚め、何でもこいつに腐り付いて居ると見えます。尤男はあいつより、ちつとお前が次なれど、肝心の所で喰付かしたら、乘りかへるは知れてある」「サイヤイ、おれが背中の甑のずんに、是ほどな疣がある、こいつが前後に振りかはつてあるくらゐなら、恐らく前髮奴には仕負けぬものを、殘念や」と、尻を捻つて無念がる。「イヤ申し物には祈禱といふ事がござります。幸あそこに山伏がある、久松とお娘と緣切をお賴みなされぬか」「ホンニ是は氣が付かなんだ、第一おれが戀が成るか成らぬを見て貰はにやならぬ。シタガ若しひよつと成らぬというたら、又十二文損するのぢや」と、根がしはんぼの安物から、網に罹つた鳥居の前、「占御判墨色相性の考、見て上げませうお這入り」と、呼込まれるをしほにして、はいる佐四郎さしこんだ小助が相槌、「あなたの年は三十一でござりますな」「ム、三十一」「當年三十一歲の男、お生れ年が寶永六年己丑、御一代の守本尊は月の二十八日不動明王。性分は火にして則住所より南少し東に當り、水邊に待人あり。女と見えます、こりや色事でござるな」「旦那何ときついかく。成程此旦那大色

せ、えいか。さらば開帳致さうか。ハア何ぢや、ようぞや御文下され嬉しく拜し參らせ候。ソレ嬉しいと書いてあるぞえ。誠に數ならぬ我身に淺からぬ御しんもじの程、身に餘り辱う存じ參らせ候。ソレそこで冥加錢」心得たしなみ銀入から、豆板一つ、「サア〳〵其後は〳〵」「身に餘り辱う存じ參らせ候へども、母樣の有る身にて任せぬ譯御座候へば、まづ〳〵御斷り申上げ參らせ候」「ヒヤアこりやどうぢや」「サヽヽ爰が味ぢや、母親の許しさへ出たら、私はお前に添ひたいといふ事ぢやわいな。又々母樣に尋ね候へば、緣の事はどうなりと、そなたの好いた殿御を持てと御申しなされ候故、それは〳〵嬉しう存じ參らせ候とけつかるわい」「エヽ忝い。冥加錢、今度ははずんで、二朱一つ」チツトしめたと又着服、「さうして後は後は」「嬉しう存じ參らせ候へども、何分私はお前がいやにて御座候」「イヤア」「いや〳〵急くまい〳〵。こりや是ちつとした讀みやうぢや、私をお前がいやであらうといふひぞりの文ぢや。其證據は、後に、あなたにも私を御なぶりの事と推し參らせ候。ソレ〳〵、若し又眞實にて候はゞ、誓文々々、私が事は、ソレ爰が肝心の性根ぢや、今度は一歩ぢや、冥加錢々々」「サア遣るわいやい。マア氣がせく、跡を早う聞かせいやい」「誓文々々、私が事はふつつりと思ひ切り下され候。何の因果にお前の樣な男に」「ヤ何と、其跡はどうぢや〳〵」「サア此跡は、イヤもう聞きなんす

つた」「イヤたつた今來て後から、お前のぼやきを聞きました」「聞いたか。エ、面目ない、山家屋の佐四郎ともいはれる者が、戀なればこそコレ此錢ざしを見てたも」「シタリ、百度參とはきつい凝りやう」「イヤ凝つた段ではない、元油屋の家には親どもから、百貫目餘の取りかへ、夫を急に催促せぬはあの娘故、後家のお勝にとうから言込んで結納まで入れてある、それに今日此頃後家が言分には、いかにも上げませうけれど、緣の事は親の儘に無理押にもなりませぬ、あれが心を聞いてからの、何のかのと埒の明かぬ。そこでわが身に槌打たさうと思うて、時々の用無心。イヤ羽織の裏がほしいの、加賀の褌を買ふはの、髭剃の色拂ひまで呑込んで遣つた此山家屋、夫にマア」「おつといふまい、働が鈍いとおつしやるのか。慮外ながら急度働いて居ますぞえ、夫ならこそお前のお望、十分の物九分は埒が明いてある」「ヤアそりや本かいやい」「ほんか嘘か此間の文の返事、かはいらしいお染が筆、爰に持つて居るけれど、さういふお前の請なれば、マアお目に懸けまいわい」「アヽこりや拗強ずとちやつと見せてくれ」「見せたら此働代は」「ハテ此望みが叶うたら、禮はきつと飯櫃形でするわい。マア其文を」「イヤ滅多に代物手放されぬ、當世懸商はあぶない。マア後での禮は禮、先へちつと力付かぬと勢がない。かうせう、此文私が讀んで聞かします程に、よい返事の文句なら、冥加錢を上げさん

二人連、というて遲なつたら、親方の無調法になる事。いつそ私一人往てこうかい」「そんなら大儀ながらさうして下され、是では中々一足も往かれぬ」「コレ氣をしづめて、茶店でなと待つて居やんせ。エヽ丸子持つてきたらよいに。戻に反魂丹買うて來て進ぜうぞや」と、傍輩の氣をかね財布、裏表なき小倉縞、屋敷をさして急ぎ行く。後に小助は山伏の、圍の傍へ小聲になり、「法印どの〳〵」「ヲヽ油屋の小助殿か、何ぞ用か」「ヲヽ貴様に銀設けさす事がある。アレあの宮の內で百度參りして居る人は、山家屋の佐四郎といふ銀持、こちの娘のお染樣にきつい惚れやう、それ故にあの願參り、こゝらが貴樣の好い代物。おれがとひ打つて貴樣に祈禱頼ます仕業。今あそこへ往て、あのわろに逢うて咄す中、何もかも筋が知れる。貴樣そこから立聞きして居て、占の奇妙を見せると跡が銀ぢや。鹽梅よう罷つたら二つ山ぢや、合點か」「ムムそんならあのわろが、彼大身代の山家屋ぢやの。うまい〳〵」と法印に、しめし合してよい時分に、小助がさし足さは知らぬ、佐四郎はお百度を、廻り仕舞うて神樂所の、前に平伏し拍手ちよんちよん、「南無座摩大明神、油屋の娘お染を、私が女房に持ちまする樣に、どうぞあつちから惚れまする樣に、なむ神明なむ稻荷なむ八幡、なむ大師遍照金剛、なむ觀世音菩薩」「申し〳〵佐四郎樣ぢやござりませぬか」「ヤ油屋の小助か、わが身やいつの間にこゝへおぢや

お染久松 新版歌祭文

座摩社の段

敬白、難波の里の大社、座摩明神の鳥居前、張廻したる一構は、手の筋失物走人、息もすたすたきた濱から、四季の草木の賣買は、花の顔見せ冬籠、新參古參大當り、御馴染御贔屓綱八を、今入れかはりお休と、打つたり舞うたり神樂所の、鈴の音さへ賑へり。參詣群集山家屋の佐四郎は、お百度の緡の數さへ九つ時、瓦屋橋に子がひから、年季重ねて久松が、屋敷廻も勤がら、主の目鏡にあぶら屋の、下人小助と二人連、宮にはお百度うつゝの佐四郎、見るより小助が思案顔、立ちどまつて「アイタ〱」土邊に尻餅つくり病と知らぬ久松、「何とした小助殿、怪我はないか」といたはれば、「イヤ怪我はせぬが、昨夜から冷腹で、アイタ〱、こりやこれ寒の中に水汲んだおどもり、久三の病で急病ぢや。奉公の身のつらさは、大概な事は押して居れど、かう疝氣が差込んでからは、寸白樣になとかゝらにやならぬ」「ヱヽ、ひよんな事ぢやなう。小倉の屋敷の商銀壹貫五百目、晝までに請取にこいとの御使、霜先の銀、念の爲の

本朝二十四孝　終

天下一天上先勝の、二人の大將、二人の彈正、名を末代に山本氏、景勝、兩人を引据ゑさせ、「天下を騷す極惡人、思ひ知れ」と兩人を指通しく、勝鬨上げて都入、嫁入國入惡人退治、天一天上先勝の、二人の大將、二人の彈正、名を末代に山本氏、御代萬歳とぞ祝ひける。

正引連れ、團扇打ちふり宣はく、「只今の注進は、必定味方の勝軍、この勢を失ふべからず。急げ〳〵」と血氣の大將。兩人ははつと領掌白毛の駒、轡をはましてかけ出づる。思ひも寄らぬ岨かけより、「長尾謙信是に在り、見參やつ」と呼はる勢、雲に羽を伸す龍虎の挑、馬も達者乘人も達者、眞一文字に乘りかけ〳〵、眞額二つと切付くる打刀、信玄隙かさず、軍配團扇にはつしと受止め、引けば付入る受身の勝、謙信呉子が祕術を盡せば、信玄孫子が心をひねり、兩方互角の大將自身の働、生死の境、目ざましくもまた危けれ。信玄猶も床几をさらず、又打込むを團扇の拂ひ。かゝる折から、かけ來る高坂彈正、山城が、是はと驚き立寄れば、どつと寄せくる北條勢、右往左往になぎ立て〳〵追迴し、跡を慕うて三重かけり行く。又もかけくる信玄が、謙信やらぬと打ちかゝる。コハ〳〵いかにと雙方を、見れば寸分かはらぬ信玄、以前の信玄兜を脱捨て、「ヤア誰かは知らねども、我にかはらんと思ふ志は忝なけれど、所詮運を天に任せし此兩人。サア謙信おくれしか、勝負せよ」とありければ、此方の信玄兜を脱げば、山本勘助二人が中に割つて入り、「ハア、其お詞は重けれど、此勘助が察するには、御兩人共に國家の爲に此軍、北條村上を討亡さんとの謀、とくより知つて某が、五百騎の勢を迴し、兩人共に早搦捕つたり。ヤア〳〵兩人、氏時村上を引かれよ」と詞の中、武田四郎勝頼、長尾三郎

れ置き後より、勘助是にと切つて出で、放火を合圖に甲斐越後、諸軍一度に矢先を揃へ、指詰め引詰め射るならば、さしも堅固の城なりとも、直に乘取り氏時が、首を巷にさらさんは、道三が老後の思ひ出。さらば〳〵」と引廻す、心も淸き武士の、死しても殘す名の譽、家の譽と法性の、今ぞ兜を甲州へ、戻す兩家の確執も、をさまる婚禮三々九度、勝色見する紅梅の、色ある勝頼、勇ある景勝道三が、仇も恨も晴渡る、諏訪の湖歩渡り、夜もしのゝめに明渡る、甲斐と越後の兩將と、其名を今に殘しける。

第五

甲斐越後、兩家の戰ひ、四度の軍術互角にて、勝負一時に決せんと、劍の刃音鬨の聲、山河も動くばかりなり。かゝる所へ北條氏時、村上左衛門義淸、軍兵あまた引連れて、暫しと石に腰打ちかけ、「コレ〳〵村上、某が思ひの通り、兩家の滅亡今此時、なんと村上、味いでないか」と、人喰馬に合口の左衛門、「ハア、いか樣おつしやる通り、此所が雙方の戰場、兩人ながら籠の鳥、必氣遣ひし給ふな」と、詞ばかりは達者でも、臑はがた〳〵胴ぶるひ。軍兵ども口々に、「アレ〳〵こゝへ數多の人音、暫く是へ」と森の内。かゝりし所に武田信玄、勝頼彈

助。最前鐵砲にて打たれ給ふ、たをやめ御前の御死顏、とくと拜見仕れ」と、投出す女の切首、押取つてよく見れば、「ヤア、こりや娘濡衣か。コハ〳〵如何に」と顚倒半亂、「エ、口惜しや奇怪や。數十年の鬱憤を、一時に散ぜんと思ひしに、勝頼が恩に引かされて、敵方へ巻込まれ、大望ある此親に、よくも不覺を取らせしな。悄い女が死にざまや」と、首を打付け齒ぎしみ齒ぎり、そゞぐ淚は諏訪の海、一度に溶る如くなり。「ヤア返らぬ繰言、絶體絶命、尋常に繩かゝれ」と、兩人一度に立ちかゝる。「シャ物々し、道三が死物狂ひ」と立上る、弓手の脇坪はつしと射る、白羽の矢先は長尾謙信、威風烈しき眼中に、道三どつかと坐を組んで、引抜く鏃我腹に、ぐつと突き立て目を見開き、「先祖より遺恨ある上杉が子孫、謙信の矢先にかゝるは、我運命の盡きる所。本國を切取られ、美濃一つだになかりし無念。美濃尾張兩國を從へ、つひには國家を握らんと思ひしが、我身の終りとなりたるか。及ばぬ望に足利の、武將を打つたる其天罰、信玄謙信中あしく見せかけしも、我を見出す計略とは、今まで知らざる心の淺はか。最期に魂改むる此世の餞別、北條が城廓の案内は、某具に傳へ申さん。元來相州小田原の城、堀深うして塀高く、要害の名城なれば、たやすくは落つべからず。霞晴れたる時節を窺ひ、箱根山より見下せば、敵地の構よく知るべし。其時に謙信が家の軍法さいさくの、犬を入

とやらん、のさばり來るも心得ず。叛逆人の詮議とは、誰が詮議、それ聞かう」「ホヽウ匹夫下郎の分として、天下に仇する汝が本名、知つたる仔細は此一品。七重八重花は咲けども山吹の、みの一つだになきぞ悲しき。此簑覺えがあらうがな。諏訪明神の力石、出會うた横藏、珍らしい對面するなア。此歌は汝が先祖太田道灌が列ねし一首、みの一つだになきぞかなしきとは、足利殿に攻落され、美濃國を切取られし其鬱憤にて、義晴公を鐵砲にて、打ち奉る叛逆人の張本、美濃國の道三と、表はす簑は身の破滅。最前打つたる鐵砲の術、覺えし者は汝一人。我と我身の白狀明白、あらがふな齋藤」と、大地を見ぬく詞の石火矢、三人中へ取込めて、何と何ときめ付くれば、ほく〱とうち頷き、「ホヽさすがは武田の軍師と、呼ばるゝ勘助よく見付けた。我先祖道灌は、謙信の先祖、上杉が鎗先にかゝつて死したる、恨の元は足利の武將、たよつて殺さん其爲に、北條氏時に賄し、心を合せやす〱と、義晴は打つたれども、わすれがたみの松壽丸、今日此館へ來るは幸ひ、奪ひ取つて人質とし、謙信信玄氏時をも皆殺し、一天四海を掌握する此道三、汝等が手にはいつかな〱。義晴を殺した鐵砲で、たをやめ御前もぶち殺した。松壽丸を是へ出し、降參せよ」と睨付くる。「ホヽウ根強く仕込みし謀叛人、かゝる危き敵の中へ、足利の公達が、ふか〱と來り給はんや。松壽丸の御入と、僞り來たは此勘

ん」と、大刀するりと拔放し、當る任せに薙立て〳〵、御殿をさして三重行く先の、間ごと〳〵は森々と、灯火消えて音せぬは、敵の油斷折こそよけれ、烏帽子素袍も忍び入る、時の用にぞおほ廣間、咎むる人もなが廊下、長袴の裾指足に、御座の間近く窺ふ關兵衞。あやしとかねて勝頼が、透かせど見えぬ眞の闇、人こそあれと身を避くれば、此方も避くる彼方の一間、立ちふさがつたる三郎景勝。遣り過してかけ入るを、袖引きちぎれば手にさはる、下の腹巻。スハ曲者と組付く景勝小手返し、ひらりと付け入る勝頼を、さしつたりと眞の當、たぢ〳〵と後じさり、騷がぬ大膽しすまし顏、人を欺く坂東聲、「大將の御座近く、帶劍の武士叶ひ申さず。銘々詰所の當番、大切に致されよ」と、外らさぬ體にしづ〳〵と、猶奥深く行く所を、「ヤアヤア美濃國の住人齋藤入道道三、とゞまれやつ」と聲かけられ、肝にこたへて駈戻り、邊をきつと大音聲、「ヤアラいぶかしや、三十年來跡をくらまし、包隱せし我本名、齋藤道三と呼んだるは、そも何奴ぞ對面せん」と、廣縁先に枯木立。景勝勝頼前後をかこひ、逃げば切らんと詰めかくる。後の襖さつとあけ、武田の忠臣山本勘助、「叛逆人の詮議をとげん」と、悠然と立出づる。續いて近習諸大名、御殿廣間も燭臺に、一度に輝く灯の光、遁れん方こそなかりけれ。されどもちつとも臆せぬえせ者、「ヤア長尾謙信の此城へ、日頃不和なる武田の家臣、山本勘助

らそろ〳〵と、差覗く池水に、映るは己が影ばかり。「たつた今此水に、映つた影は狐の姿、今又見れば我俤、幻といふ物か、但し迷ひの空目とやらか。ハテあやしや」と、とつおいつ、兜をそつと手に捧げ、覗けば又も白狐の形、水にあり〳〵有明月、不思議に胸も濁江の、池の汀にすつくりと、眺入りて立つたりしが、「誠や當國諏訪明神は、狐を以て使はしめと聞きつるが、明神の神體に等しき兜なれば、八百八狐付添ひて、守護する奇瑞に疑ひなし。オヽそれよ思ひ出したり。湖に氷張詰むれば、渡初する神の狐、其足跡をしるべにて、心安う行來ふ人馬、狐渡らぬ其先に、渡れば水に溺るゝとは、人も知つたる諏訪の湖。たとへ狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に、神の力の加はる兜、勝頼樣に返せと有る、諏訪明神の御教、ハア、忝なや有難や」と、兜を取つて頭にかづけば、忽ち姿狐火の、こゝに燃え立ちかしこにも、亂るる姿は法性の、兜を守護する不思議の有樣。こなたの間には手弱女御前、始終の樣子窺ふとも、いさしら菊の花の番、小屋にとつくと關兵衞が、付廻しても神通力、花のまに〳〵見えつ隱れつ神去る狐。南無三寶とせき立つ關兵衞、ねらひの的は手弱女御前、どつさり響く鐵砲の、音を合圖に遠近より、俄に響く鐘太鼓、亂調に打立つれば、騒がぬ關兵衞廣庭に二王立。程なく馳せ來る雑兵原、我討取らんとひしめいたり。「ヤアしほらしきうざい餓鬼、此世の暇取らさ

君を儲の奥御殿。こなたは正體涙ながら、「アレあの奥の間で檢校が、謳ふ唱歌も今身の上、おいとしいは勝頼樣、かゝる工のあるぞとも、知らずはからぬお身の上、別れとなるもつれない父上、諫めても歎いても、聞入れもなき胴欲心。娘不便と思すなら、お命助けて添はせてたべ」と、身を打ふして歎きしが、「いや〳〵泣ては居られぬ所、追手の者より先へ廻り、勝頼樣に此事を、お知らせ申すが近道の、諏訪の湖舟人に、渡り頼まん急がん」と、小褄取る手もかひ〴〵しく、かけ出でしが、「イヤ〳〵〳〵、今湖に氷張詰め、舟の往來も叶はぬ由。歩路を行きては女の足、何と追手に追付かれう、知らすにも知らされず、みす〳〵夫を見殺しに、するは如何なる身の因果。アヽ翅がほしい、羽がほしい。飛んで行きたい、知らせたい。逢ひたい見たい」と夫戀の、千々に亂るゝ憂思ひ、千年百年泣明し、涙に命絶ゆればとて、夫の爲にはよもなるまじ。此上頼むは神佛と、床に祭りし法性の、兜の前に手をつかへ、「此御兜は諏訪明神より、武田家へ授け給はる御寳なれば、取りも直さず諏訪の御神。勝頼樣の今の御難儀、助け給へ救ひ給へ」と、兜を取つて押戴き、押戴きし俤の、若しやは人の咎めんと、窺ひおりる飛石傳ひ、庭の溜の泉水に、映る月影怪しき姿、はつと驚き飛退きしが、「今のは慥に狐の姿、此泉水に映りしは、ハテめんような」と、どきつく胸、撫でおろし〳〵、こは〴〵なが

直樣參上」「ホヽ委細の事は此文箱に。片時も早く罷越せ」はつと領掌文箱携へ、鹽尻さして急ぎ行く。謙信跡を見送つて、「ヤア〳〵者ども、用意よくば早來れ」と、仰にはつと白須賀六郎原小文治、更科なんどの譜代の郎等、御前に進めば謙信勇んで、「今此諏訪の湖に、氷閉づれば渡海は叶はず、鹽尻までは陸路の切所、油斷して不覺を取るな」「ハヽア畏り奉る」と、勇み進んでかけり行く。跡に不審は八重垣姫、「申し父上、こと〴〵しい今の有樣、何事やらん」と尋ぬれば、「ホヽ、あれこそは、武田勝頼討手の人數」「何、勝頼樣を討手とは」こはそも如何に、何故にと、驚く二人をはつたとねめ付け、「諏訪法性の兜を、盗出さんうぬらが工、物かげにて聞いたる故、勝頼に使者を言付け、歸りを待つて討取らさんと、牒し合せし討手の手配」「エイ、そんなら今の討手の者は、勝頼樣を殺さん爲か。ハアヽ」はつとばかりにどうど伏し、「今日は如何なる事なれば、過去り給ひし我夫に、再び逢ふは優曇花の、悦んで居たものを、又も別れになる事は、何の因果ぞ情なや。父のお慈悲にお命を、どうぞ助けて給はれ」と、くどき歎くに目もやらず、「ヤア武田方の廻し者、憎き女」と濡衣引立て、「うぬには尋ぬる仔細あり、奥へ失せう」と小腕取り、情用捨もあら氣の大將、帳臺深く入り給ふ」唄思ひにや、焦れて燃ゆる、野邊の狐火小夜更けて、狐火や、狐火野邊の、野邊の狐火小夜更けて、幾重洩れくる爪音は、

「許嫁ばかりにて、枕かはさぬ妹背中、お包みあるは無理ならねど、同じ羽色の鳥翅、人目にそれとわからねど、親と呼び又つま鳥と、呼ぶは生あるならひぞや。いかにお顏が似ればとて、戀しと思ふ勝頼樣、そも見紛うてあられうか。世にも人にも忍ぶなる、御身の上といひながら、連添ふわたしに何遠慮、つい斯う〲とお身の上、明して得心さしてたべ。それも叶はぬ事ならば、いつそ殺して〱」と、縋り付いたる恨泣き。勝頼態と聲あらゝげ、「ヤア聞分なき戯言、いか程に宣ふとも、覺えなき身は下司下郎。餘處の見る目も憚あり、そこ退き給へ」と突放せば、「スリヤどの樣に申しても、勝頼樣ではおはさぬか。ハア、」はつとばかりに簑作が、指添逆手に取り給へば、「ここは御短慮」と止むる濡衣、「イヤ〱放して殺してたも。勝頼樣でも無い人に、戯言の恥づかしや。心の穢れ繪像へ言譯、どうも生きては居られぬ」と、又取直すを猶も押止め、「ヲ、さすがは武家のお姫樣、天晴なるお志。其お心を見るからは、勝頼樣に逢はせませう。ソレそこにござる簑作樣が、御推量に違はず、あれが實の勝頼樣。ちやつとお逢ひなされませ」と、突きやられてはさすがにも、初めの恨み百分一、「聞えませぬ」が精一杯、跡は互ひに抱付き、つい濡れそめに濡衣も、心ときつく折からに、父謙信の聲として、「簑作はいづれにをる。鹽尻への返答、時刻移る」と立出づれば、はつと簑作飛びしさり、「御支度よくば

い」「ム、勿體ないといやるからは、どうでも其方の知るべの人か」「イ、エさうではなけれども、大事のお主の目を掠め、忍び男を拵へるは、勿體ないと申す事でござります」「ム、すりや知るべの人でなく、殿御でもない人なら、どうぞ今から自を、かはゆがつてたもる樣に、押付ながら媒を、頼むは濡衣樣々」と、夕日眩く顔に袖、あてやかなりし其風情。「ヲ、お姫樣とした事が、まだお子達と思ひの外、大それたあの簑作殿を」「サア、見初めたが戀路の始め、後とも言はず今こゝで」「媒せいとおつしやるのか。がをれ、ほんにお大名のお娘御とて、油斷はならぬ戀の道。品に寄つたらお取持致しませうが」「コレ〳〵濡衣、必麁相いふまいぞ」「サア何もかも私が、呑込んで、呑込んでお取持致すまいものでもないが、眞實底から簑作殿に、御執心でござりますか」と、問はれて猶も赤らむ顔。「勤めする身はいざ知らず、姫御前のあられもない、殿御に惚れたといふ事が、噓僞りにいはれうか」「其お詞に違なくば、何ぞ慥な誓紙の證據、それ見た上でお媒」「ヲ、夫こそ心安い事、其誓紙さへ書いたらば」「イエ〳〵、それも此方に望がある、わたしが望む誓紙といふは、諏訪法性の御兜、それが盗んで貰ひたい」「ヤア何といやる、諏訪法性の御兜を、盗出せといやるのは、さてはあなたが勝頼樣」と、言ふ口押へて、「ハテ滅相な勝頼呼はり、微塵覺えのない簑作、麁忽ばし宣ふな」と、いふ顔つれ〴〵打守り、

さうな。御赦されて」と伏沈む、泣聲洩れて一間には、不審たち聞く八重垣姫、そつと襖の隙間もる、姿見まがふ方もなく、「ヤア我夫か、勝頼樣」と、飛立つ心を押ししづめ、「正しうお果てなされしもの、似たと思ふは心の迷ひ、繪像の手前も恥づかし」と、立戻つて手を合せ、御經讀誦の鈴の音。勝頼公は濡衣が、心を察して聲曇り、「はかなき女の心から、歎くは理、さりながら、定めなき世と諦めよ」と、諫むる詞此方には、心空なる其人の、若しや存へおはすかと、思へば戀しくなつかしく、又覗いては繪姿に、見くらべる程生寫し、似はせでやつぱりほんの、「勝頼樣ぢやないかいの」と、思はず一間を走出で、縋り付いて泣き給へば、はつと思へどさあらぬ風情、「こは思ひよらざる御仰、我等簑作と申す花作、漸只今召抱へられ、衣服大小改めし新參者、勝頼とは覺えなし。御麁相あるな」と突放せば、「ム、何といやる、今父上に抱へられし新參者、花作の簑作とや。自らとした事が、餘り能う似た面ざしの、若しやそれかと心の煩惱。二人の手前恥づかしながら、コレ濡衣、此簑作とやらいふ人を、そなたは疾うから近付か」「エイ」「いやいの、知る人であらうがの」「アノお姫樣とした事が、たつた今見えたお人、何のマア私が」「イヤ隱しやんな、今の素振、忍ぶ戀路といふ樣な、可愛らしい中かいの」と、思ひもよらぬ詞に恟り、「オヽお姫樣のおつしやる事はいの。人にこそよれ、何のあなたに勿體な

思うて成佛して下さんせ。なむあみだ佛〱」「誠に今日は霜月廿日、我身がはりに相果てし勝頼が命日、暮れ行く月日も一年餘り。南無幽靈、出離生死、頓生菩提」「申し勝頼樣、親と親との許嫁、ありし樣子を聞くよりも、嫁入する日を待ちかねて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御とそひ臥の、身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも樂みは、繪像の傍で十種香の、煙も香花となつたるか、廻向せうとてお姿を、繪には書かしはせぬものを。魂返す反魂香、名畫の力もあるならば、可愛とたつた一言の、お聲が聞きたい〱」と、繪像の傍に身を打ちふし、流涕こがれ見え給ふ。「あの泣聲は八重垣姫よな。我名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、弔ふ姫と弔ふ濡衣、不便ともいじらしとも、言はん方なき二人が心」と、不覺涙にくれけるが、「ア丶我ながら不覺の涙」と、衿かき合せ立上る、後にしよんぼり濡衣が、「申し簑作樣、合點が行かぬは貴方のお姿、どうした事で此樣に」「ヲヽ不審尤。はからずも謙信に抱へられたる衣服大小」「テモさても、衣紋付なら、上下の召し樣まで、似たとは愚やつぱり其儘。形見こそ今は仇なれこれなくば、忘るゝ事もありなんと、詠みしは別を悲しむ歌、かたみさへぢやに我夫に、微塵かはらぬこのお姿、見るに付けても忘られぬ、わたしや輪廻に迷うた

敵」「スリヤどうでも詮議を私に」「仕損ずまじき汝が魂」「アノ此親仁が性根魂を」「サア見込んで頼むに違背はあるまじ。油断致すな關兵衛」と、詞も重き大將の、心殘して入り給ふ。「アア申し〳〵、我等風情にこんな役目、難題も事による、外へ仰付けられい」と、跡を眺めて、「ム、未だ日本へ渡らぬ鐵砲、遣ひ樣を覺えし者が、義晴を打つたる敵、此關兵衛に詮議せよとは、ムヽ合點の行かぬ謙信」と、諸手を組んで工夫の顏色、「アヽいや〳〵、どう思案して見ても、我等には似合はぬ役目、やつぱり似合つた花の番、鳥威しの弓矢より、外には何にもしら髮の親仁、ドレ小家へ往て一休」と、振擔けたる鐵砲も、胸に一物あり明の、月漏る臥所へ行く水の、流れと人のみの作が、姿見かはす長上下、悠々として一間を立出で、「我民間に育ち、人に面を見知られぬを幸ひに、花作となつて入込みしは、幼君の御身の上に、若し過やあらんかと、餘所ながら守護する某、それを悟つて抱へしや。ハテ、合點の行かぬ」とさしうつむき、思案に塞がる一間には、館の娘八重垣姫、許嫁ある勝頼の、切腹ありし其日より、一間所に引籠り、床に繪姿かけまくも、御經讀誦の鈴の音。此方も同じ松蟲の、鳴音に袖も濡衣が、今日命日を弔ひの、位牌に向ひ手を合せ、「廣い世界に誰あつて、お前の忌日命日を、弔ふ人もなさけなや、父御の惡事も露知らず、お果てなされたお心を、思ひ出す程おいとしい。嘸や

衞不思議とさし覗き、「牢の内には科人らしき者も見えず、何やら見馴れぬ變つた物、そりやマア何でござります」と、尋ねに謙信威儀繕ひ、「未だ日本へ渡らざれば、汝等が知らぬは理、是こそ鐵砲と名付けし飛道具」「ム、其又鐵砲とやらが、盗みでも致せしか、何の爲に此牢へ」「ホ、科は天下を望む叛逆。さいつ頃武將の御前へ、薩州種が島の浪人、井上新左衞門と名のり、此鐵砲を獻上し、類なき軍器の重寶、遣ひ樣の傳授せんと、瞞し寄つて義晴公を一打に、跡をくらまし其場を逐電、草をわかつて尋ね捜せど、今に行方知れざる曲者、詮議の手筋は此鐵砲、其所に殘りありしが、卽ち科人同然なれば、此の如く禁牢させ、日每の拷問手を盡せど、義晴公を打ちたる敵、今日まで白狀せざる不敵の鐵砲。只今より此詮議、汝に申付くる間、火水を以て責めさいなみ、敵の所在を白狀させよ」と、鐵砲くわらりと投げやれば、手に取上げて呆れ顏、「すりや私にお賴あるは、此鐵砲とやらを責めいでござりますか。是は又思ひも寄らぬ。拷問も問狀も、なみ〳〵の人間なら、及ばずながら責めも致さう。烟管屋の看板か、唐の火吹竹見る樣な物、責めいとは御難題。あなた方の手にさへ合はぬ物、其上何を證據手がかりも」「ヲ、手がかり證據は其鐵砲の遣ひ樣、普く世上に知る者なし、其傳授を覺えし者こそ」「ム、すりや何と御意なされ ます、此鐵砲の遣ひ樣を覺えた者が」「ホ、卽ち武將を打つたる

と簑作が、身の上それとしら砂に、額摺付け蹲まる。「ホヽあつぱれの花作、今より館に召抱へんが、わりや謙信に奉公し、花の活け様傳授せんや」「ハイ、成程、外の事なら存じませねど、花一まきなら、活かさうと殺さうと我等が得物、それを取柄にお抱へなされて下されうなら、望んでなりと御奉公したき御屋敷」「ホヽ出かした、うい奴。御上使への御返答、申上ぐるはあの簑作。まづ夫までは暫しの御猶豫、偏に頼み存ずる」と、餘儀なき頼に打頷き、「火急の御上意容赦はならねど、鹽尻峠に控へ居る諸大名へ申渡す仔細あれば、我は彼處へ立越えん、有無の返事は鹽尻まで。隙どらば直に此城取圍まん」「追付け有無の御返答、認むる中簑作も、次へ参つて衣服大小」「ハア有りがたし〳〵」と、勇む簑作、景勝は、苦り切つたる鹽尻へ、別れてこそは出でて行く。跡見送りて關兵衛は、謙信の前に手をつかへ、「花作の簑作、合點行かぬと存ぜしが、あれが大方」「ホヽ紛もなき武田勝頼。それと見出せし花守關兵衛、下郎に似合はぬ中々器量のある親仁、其性根を見込み改めて謙信が、頼み入れたき仔細あり。我に頼まれ得させんや、返答聞かん」とありければ、「是は又改まつたお詞、元獵人の私、お見出しに預かつた君の大恩、たとへ命の御用でも、いやとは申さね我等が魂」「ホヽ頼もしよ〳〵。其詞を聞く上は、何をか包まん是見よ」と、しづ〳〵立つて一間の障子、開けば内に怪しき牢輿。關兵

信も、忰を忰が討手の上使、返答何と當惑の、口を噤んで見えにけり。「ヤア未練の心底、此上は某こゝにて切腹」と、指添に手をかくれば、「ヤレ暫く、必早まり給ふな」と、聲をかけて花守關兵衛、何かしら洲へ白菊の、花携へて立出づれば、「ヤア汝等如きが知る事ならず、退去れやつ」と景勝の、怒にちつとも臆せぬ關兵衛、「イヤ下として上の事、さし出るではござりませねど、最前よりあれにて様子承はれば、如何やら斯う木乃伊取が木乃伊になる様な御上使様、可惜しき侍の首、切つて仕舞へば再び活かぬ。又此花は何ほ切つても活けらるゝ、ナ、切つて生かすといふ傳授、お望ならば指上げたい」と、どこやら詞の一理窟、聞いて謙信眉を皺め、「ム、切つて生けると言ふ白菊、面白し〳〵。關兵衛其花所望せん」「成程花は上げませうが、花ばかりでは自由に活からぬ。それを活かすは花作り、幸ひお次にをりますれば、是へ呼寄せ共々に、活ける傳授を御覧あれ。花作の叢作御用がある、早う〳〵」と、親仁が呼ぶ聲きくつくり、「エヽけたゝましい何事」と、此場の様子しら洲の内、いきせき出づる顔形、「ヤア汝は武田勝頼」と、いふをとゞめて、「アヽ申し〳〵、それおつしやると物がない、何にも知らぬ白菊の花、其活け様を能う覺えた此花作、人の振見て我振直すが第一の傳授事、ナ、是さへ御所望なされば、何もかもさつぱりと申譯の立ちさうなものと、憚ながら親仁めは存じまする」

濡衣も、奥と口とへ別れ行く。館の主長尾謙信、衣冠正しき儲の式禮、角立つ中にさと薫る、音もしと〳〵女中の手昇、邊輝く銕乗物、見るより謙信謹んで、「優曇花とやいはん、稀代の御入來、冥加に餘る身の面目、直に其儘奥御殿へ」と指圖に隨ひ乗物は、奥へ行く跡謙信も、續いて入らんとする所へ、「暫く待つた、長尾謙信、奥方よりの御上意あり」と呼はる聲、はつと平伏頭を垂れ、待間程なく立派の骨柄、長袴の裾けはらし、上座にどつかと威儀を正し、「先以て今日は、御幼君松壽君、御母公共に入來の面目、恐悅に思はるべし。さるによつて母君より、貴殿への御上意、餘の儀にあらず、先達て申渡せし子息景勝の首、今において討つても出さず、事延引にせらるゝ段、必定野心に極まれば、御前において切腹を遂げらるゝや、但し景勝の首、只今討つて出さるゝや、返答次第はからふ旨あり、謙信いかゞ」と上使の權柄。「こは思ひ寄らざる御上意」と、顏振上げて、「ヤア汝は悴景勝」と驚く謙信、さあらぬ上使。「イヤ景勝にもせよ誰にもせよ、一旦悴を討つべしと契約ありしは諸大名の眞中、今において其沙汰なく、剩へ本國に引籠り、底の知れざる親人の所存、イヤサ謙信の心底と、人の疑ひ立ち申す。何故さつぱりと我等が首、イヤサ悴景勝の首討つて、心底は見せられぬ。サア首討つか、但しは否か、有無の返答承はらん。サア〳〵何と」と、詰寄れば、さすが名を得し謙

い。それ故仕事も思はぬ捗いき、落葉一枚ない樣に、掃除まで仕舞ひましてござります」「ムムそれなれば精が出た、花壇が濟んだら外に用なし、次へ往て休息せい」と、許す詞に簑作が、勝手へこそは立つて行く。「ハテさて見かけに似合はぬ精出す奴、兎角人はかげ日向が大事のもの。コリヤ娘、われも隨分精出して、御奉公に私爲な」と、いふも親身の親子の中。「ヲヽ父樣の忝ないお詞、稚い時より武田の家に宮仕、不慮の事故、親里へ戻つて見れば、父樣も今では長尾の此家へ、御奉公を幸ひに、親子一所に宮仕、新參者でも侮られず、傍輩衆にも憎まれぬは、お主の御恩父樣のかげ、仇疎には存じませぬ」「ヲヽさう思へば冥加がよい。此親も御領分に狩人を商賣に、かつ〳〵に暮した身分、謙信公の見出しに預り、お館に置かるゝは、此屋敷に在る諏訪法性の兜とやらは、諏訪明神より賜はつて、卽神のつかはしめ、狐が寄つて番をする不思議の兜。そこで又野狐どもが其兜を戴けば、官上りするとやらで、折々館を徘徊する、見付次第打殺せと、アレ座敷先に小家をしつらひ、狐の番が役なれども、勇氣盛んな謙信公、何の狐が來よう筈もなし、安閑としてゐる隙に、仕覺えた花畑、時ならぬ菊を作るがお氣に入つて、狐の事は餘所になり、今では菊の花守親仁、樂々暮すも主人のかげ」と、互の身の上しみ〴〵と、親子咄の折からに、早御成と騒ぎ立ち、奥へ行く人戻る人、心せき兵衞

の主長尾謙信、一子景勝を討つても出さず、剰へ義晴公のわすれがたみ松壽君、御母公諸共、今日此館へ招く段、心得がたく思ひし故、菊作となつて入込む某。汝が役目は法性の兜、未だ奪取る便もなきや、濡衣如何に」とありければ、「ホヽ其兜の事故に、奉公に出た私、微塵も油斷は致さねど、何をいふても用心嚴しく、夫故心に任さねど、お悦び遊ばしませ、今日の饗とあつて、其兜を上段に飾らして候へば、今日を過さずお手に入れん」「すりや其兜が奥の間に」「ア、お聲が高い」と差寄て、呫き首肯く二人が相談。それとしら洲へ立出づる、姿一癖ある親仁、「娘々、コリヤ娘」と、呼ばれて悔り飛退く濡衣、「ヲヽ父樣とした事が、あの人に花壇の事を言付けて居る所を、斷なしに娘々と呼ぶ樣な、あた不躾な不遠慮な」「何ぢや、斷なしに娘と呼んだが不躾ぢや、こりやおれが惡かつたはい。今度から用があつて呼ぶなら、サア娘今呼ぶぞと先へ斷ろ、ハヽヽヽ。こりや前髪、わりや花作る事が上手ぢやというて、昨日から雇はれて來てゐるが、此花畑は此關兵衞が預り、今日のお成のお饗になる花故、取分けて大事と思ひ、助に雇うた花作り、もうお成に間はないが、のらばかりかはいて居つて、それで仕事が出來るかよ」と、呵られて手をもぢもぢ、「イヤモ外の花作ると違うて、不斷手入のしてある花壇故、何にも仕事はござりませず、漸と枯葉を取つたり、花形のふりを直すがせいさ

あつた勝頼様は、去年の秋御切腹。それで其勝頼様の姿を繪に寫し、お姫様が明けても暮れても、泣いてばかりござるが、そなたの目にはかゝらぬか。今日の拵へは、今日本の大將軍のお子様なり、其御室様、尋常のお客とは違ふ。夫で此間より國々の名物をお求めなさるれど、今此諏訪の湖に、氷が張り詰め、舟の往來も叶はぬ故、何かが嚴い手づかへと、役人衆の心遣ひ、夫程晴れなお客様故、念に念を入れて不調法の無い様にとの言付。新參とは云ひながら、物馴れた濡衣殿、何かの事を頼むぞや」「ホヽ是は又、人をづつながらす様に、物馴れたやら馴れんやら、今參りの私、御前方に引廻して貰はにやならぬ」と、傍輩中のおれそれも、中よく見ゆる中庭より、いきせき出づる簑作が、今は姿も菊作り、花恥かしき角額、縁先に小腰を屈め、「奥庭の花壇の菊、かゞむを伸し、延びるを縮め、枯葉一枚無い様に、殘らず手入仕り、漸々只今相仕舞ふ」と、言ふ顔うつとり腰元中、さても見事好い男、こんな男に手入しらるゝ菊の花はあやかり者、わしらもどうぞ彼の人の手入で小菊が咲かしたい」と、何がな惡口言ひずてに、奥へ行く跡幸ひと、傍見廻し濡衣が、庭におり立ち手をつかへ、「あなたにお別れ申してより、此館へ入込むわたし、程ふる日數の明暮も、どうお暮し遊ばすぞと、案じるうちに思ひも寄らず、菊作となつて此館へ、お出でなされし勝頼様、御思案でもあつての事か」「ホヽ不審尤。此家

と、抱きとむれば漸々と、狂ひ伏してゐたりしが、村上漸々心づき、「やあら不思議や、今まで和田の館の内、越名高坂を刺殺し、我ながらついに覺えぬ勇力と思ひしが、こゝへはマアどうして來た」「サア昨日の山狩から、迷子におなりなされ、一家中が一遍三界、皆麓までお迎ひに參つてをります」「ム、そんならおれが强かつたのは狐の業か」「成程かのでござります」「かのとは誰ぢや、八つ橋か。やれ〳〵戀しゆかしと焦れた戀人、手に手を取つて明歸ろやれ」足元を爪立て、ちよこ〳〵と爪立てて、行かんとするを家來ども、よつてかゝつて乘物に、助け乘すれば徒士若黨、「乘物參れ」に、「はい〳〵」尋逢うたる太鼓鐘、はやし立て〳〵、「迷子の殿樣取返した、かへした〳〵」お先手をふる迷子の子、逢うてめでたき信濃路の、薄萱原踏み分けて、いなうやれ、我故鄕へ三重立歸る。信濃なる諏訪の湖要害に、立籠りたる館城、長尾入道謙信は、代々越後の城主として、己が武勇の鋒先に、爰も切取る諏訪の城、新に建つる奧御殿は、義晴公の御幼君、後室手弱女御前、共にお成を設けの結構、大方ならず見えにけり。今日ぞ其日と腰元婢、忙し中に立集り、「何と皆の衆、去年からの御普請で、結構に建つた奧御殿は、武將樣とやらの後室樣のお成ぢやげな。わしらはそんな事とは知らず、此館のお姬樣、八重垣樣の御祝言、其拵へかと思うてゐた」「ヲヽ彼の人の言やる事はい。八重垣樣に御許嫁の

な大名の、殿様返せと大勢が、尋ねさまよふ向より、「えいさつさ、サツ〳〵サ」夜道を急ぐ早飛脚。「コリヤ〳〵飛脚、物問ふべい。只今われが來る道で、殿様らしい迷子には逢はなんだか」「イエイエ殿様らしいはさて置き、夜の殿にも逢やしませぬ」「フウ夫れならば金作りの刀脇指で、心中などしてではないか。水にはまつて若し死にはなされぬか」「イヤそんな事は見當らぬ。迷子の子が大名なら、火にくばらしやろも知れますまい。ヤア早飛脚が何かといふ間に遲飛脚、隨分尋ねさしやませ」と、道を早めて走り行く。家中の者ども力を落し、「アヽおいとしやおいとしや、大方狐の業であろ。今頃はてつきりと、お召がへの雲雀毛が、穢い物を小豆餠ぢやと思召して、ひつたものあがるであろ」と、案じて居ても事が濟まぬ。胡散なは此萱原、捜して見よう」と足輕ども、そこよこゝよと、雪かき分くる萱の陰、人こそあれと挑燈手ん手に、見れば見る程、紛もなき迷子の殿様。「申し〳〵、迷子の子の殿様いなう」と、聲に氣の付く村上左衞門、むつくと起きたる其形は、筵袴に竹大小、反打廻して大音上げ、「それへ來るは武田信玄、かくいふは信濃の住人村上左衞門義清が、止めた、やらぬ」と呼はつたり。「アヽ申し〳〵、私はお草履取の化介でござります」「フウ化か、信玄ではないぢやまで。あれ〳〵、卑怯未練の越後の謙信、遁さじやらじ」と、追ふを止むる家來ども、「コハ正體なき旦那の有樣、人の見る目も恥ぢ給へ」

煽つて蠟燭の、火影に見れば燭臺に、目鼻あり〳〵唄朝顔の、あしたに咲いて夕には、露の命も戀故ならば、儘よてんぽの皮巾著、珊瑚の玉の目を光らし、腰にもつれて寄添へば、村上ぎよつとし、「コリャ何ぢや。フウ聞えた、今日山狩の狐狸、我に仇する憎くい四つ足、目に物見せん」と燭臺蹴飛し、此方へ來る緣側に、又によつぽつりと石燈籠、火袋に顏まざ〳〵と、有明の月の眉、目元に色を夜目遠目、笠に苔むす手水鉢、やらじとゞむる柄杓の手、跡へ戻れば靑天井が、くるりくる〳〵、蛇の目むき出す轆轤口、開いて窄めて、相合傘の袖と袖、雨や雪霜、ふらばふれ〳〵、濡しはせじと一本の、足手纏ひとなり瓢、瓢簞から駒下駄も、庭の飛石ぐわた〳〵、待合の半鐘のうなり、くわん〳〵鑵子、刀掛字の角軸も、三幅對の竹に虎嘯けば風おこり、龍吟ずれば雲起り、炭のおこつた大火鉢、目鼻しかめて這寄れば、戶障子襖ぐわた〳〵〳〵、さすがの村上氣を奪はれ、女を小脇に引んだかへ、行けども行かれず、戻れど戻さぬ妖怪に、刀を拔いて切廻れど、たゞ雲霧を 三重 切る如く、腕もなまり五體もしびれ、眼暗んでよろ〳〵と、どうと伏したる村上が、形ばかりはあり〳〵と、玄關廣間大座敷、書院床の間御成の間、ありつる女も消失せて、館と見えしは信濃路の、雪降りつもる和田の山、吹雪ばかりや 三重 殘るらん。唄返せ〳〵、迷子の殿樣かやせ、かへせ〳〵と高挑燈に太鼓鐘、ますの龜忽

女を引立て、きやつばらを搦捕れ」と、聲の中より列卒の者、ばら〳〵と追取りまく。「エヽ欺し寄つて討取らんと計りしに、仕損じて高坂」「ヲヽ越名」無念々々に腮叩かすなと、取付くやつばら、右と左に踏みすゑ蹴するゑ、一度にかゝれば信玄流、謙信流の太刀打早業、手を碎いたる働に、家來も列卒もたまりかね、むら〳〵ぱつと逃入れば、めざすは村上遁さじと、雙方より切りかくるを、引つぱづし〳〵、重ねて切込む刃と刃、ヲヽ合點と身をかはし、傍なる火鉢でしつかと押へ、引かん〳〵ともがく二人が首筋摑み、ぐつと引寄せ締め付けられ、無念々々と捥けども、膝にかためてびつくとも動さず、「汝等此村上を欺討に討たんとせし其返報に、踏殺さうか、但しは摑殺さうか、如何したら腹が癒よ、ヲヽ夫よ、當の矢を射返さん、肝のたばねに受取れ」と、尖矢二本逆手に取り、喉吭ぐつと一ゑぐり、ゑぐりゑぐられ高坂越名、七顚八倒五體をもがき、あへなき最期ぞぜひもなき。「女めは何所にをる、早く〳〵」と、呼ばれておづ〳〵八つ橋が、きも魂も身に添はず、此體見るよりはつとばかり、袂を顏に押當て、そゞろに顫ふばかりなり。「コリヤ八つ橋、おれに敵たふ奴原が、此死にざまをよつく見たか」と尖矢引拔き、どうど蹴飛し、「女もおれが詞を背くと、まつ此通り。いやでも應でも抱いて寐る、寢所へ來い」と引立て行く。奥は俄に家鳴震動、庭の植込ざわ〳〵と、風に

べければ、「ホヽウ我眼力違はざりしな。兩家の賴聞入れぬも武士の本意ならず、兩家の返答依怙なき樣に武勇鬮、弓矢打物の勝負にて、勝つたる方へ北條村上共に味方。幸ひ是に山狩の弓矢二手、氷をつみ上げ、垜として、一寸二寸の的は勝負遲し、五尺の的を射させせんず。ヤアヤア郡太、其しぶとい女めこそ屈竟の的、胴腹を射通させ、つれない心に思ひ知らせよ。女め引け」といふ間なもく、繩目血走る細腕、淚ながらに八つ橋も、泣く／＼引かれ立出づる。「あれ見よ兩人、此女は足利家の賤の方の腰元八つ橋、我都にて見初め、折がな時がなと思ひし處に、今日思はずも此村上が手に入れどもつれない女、我が詞を背く故、汝等が勝負にて彼めを成敗、我が見る前で胴腹を射通せ」と、刀を杖につゝ立上り、眼をくばれば、高坂、越名、如何はせんと、躊躇ふにぞ、「猶豫すれば味方はせぬ、如何に／＼」と、聲あらゝぐれば、兩彈正、辭するに及ばず、弓矢手挾み、「不便には思へども、國の爲にはかへがたし。心にとくと觀念せよ。サア／＼高坂、勝負ぬかるな」「ヲヽ心得たり」と諸共に、弓と矢つがひ、きり／＼と引きしぼり、弓手馬手へ身をひらき、切つて放す目當は村上、射かくる矢先兩手にしつかと、「ハヽヽヽ、察する處、謙信信玄心を合せ、和睦を言立て、此村上を討取らんとはおろか／＼。所存も知れざる汝等に、弓矢を渡す左衞門が大肝に、汝等が矢先が立つべきか。ヤア家來ども、

の使者越名彈正、通し申さんや」と伺へば、村上驚き、「フウ長尾は格別、武田とは鋒先を爭ふ中、其兩家の使者、一所に來たとは心得ず。何にもせよ、對面せずば臆せるに似たり、ソレ迯走せぬ樣に、其女には繩ぶつて、庭の樹木にくゝし上げい。敵國の使者なれば、手だれの武士共次の間に、ぬかるなやつ」と言渡し、其身も衣服改めて、悠々として座しゐたる。程なく入來る高坂彈正、越名彈正、刄を爭ふ使者と使者、物をも言はず辭義もせず、見ても見ぬふり上下の、襞と襞ともすれ合ふ中、兩人刀抜置きて、遙下つて高坂彈正、「口上の趣」といはんとするを、「まづ待て高坂、此越名に辭義もせず、使者の口上マアなるまい」「トハなぜに」「門前へ乘込むも一時、玄關へ上るも一時、身が口上申上ぐるまで、すつ込んで居よ迯彈正」「ヲヲ此高坂迯げたか迯げぬか、只今勝負」「ヲ、合點」と刀おつ取り、袴の稜取り、「サア〳〵勝負」と立向へば、村上大口開いてから〳〵と打笑ひ、「主の使者に立ちながら、己等が威勢を爭ひ、身を果すうつけ武士、身に對しては、不禮と言はうか慮外者。察する處、長尾は先達て北條に心を寄する氣、武田も共に氏時の味方となり、此村上とも和睦して、謙信は信玄を亡し、信玄は又、謙信を亡さんとの頼の使者、違ひはせじ」と村上に、星をさゝれて詞を揃へ、「御賢察の通、御味方願ひ奉る頼の使者、お受なされくださらば、我々までも大慶」と、恐入つて述

都育のぼつとり風、女好の左衞門、大口くわつとよく見れば、戀こがれたる腰元八つ橋、其儘抱付きたい所、家來の手前と人體作り、「ホヽウ郡太いしくもしたりな。コリヤ女、近う寄つて身が顏を見い。ナコレ村上ぢや〳〵。おれを慕うて遙々の所能うおぢやつたなうと、いふ所なれど、こゝは主人の下屋敷、アレ多くの家來どもが、ナ合點か。コリヤ者ども、此女今夜身が寐間に引きするゑ、新身のだんびらものをもつて、ためして臍の下を見ん。寢所に土壇の用意、急けやつ」と、片頬に澁面、片頬に細目、「コリヤうぬらは何してをる、早く失せう。汝もうせい」と呵付け、邪魔を拂うて、「コレ戀人、そもじの事を明くれに、うつら〳〵と戀こがれ、待ちに待つた念が屆いて、今日こゝへおぢやつたは、これ偏に諏訪明神の引合、今日から身が奧、但しは嫌か。サヽヽどうぢや〳〵」と、しなだれかゝり抱付けば、振り放し、「私はお主のお行方を尋ねさまよひ、是より東の方を心ざして行かねばならず、お志はありがたけれど、今は歸して給はれ」と涙ぐめば、「そりやならぬ。言ふ事聽かねば百增倍で仇する左衞門、それでもいやか、何と〳〵」といへど、答もなき入る八つ橋、「エヽしぶとい女め。コリヤ〳〵家來ども、此女眞裸にして氷責め、八寒地獄の苦みさせい。責めよ〳〵」と高聲に、八つ橋庭に消入る心地、折もこそあれ取次の侍罷出で、「甲斐國武田信玄の使者高坂彈正、越後國長尾謙信

和田山で獸狩の列卒太鼓、アレ〳〵近う聞えるから、お歸りに間も有まい。こゝら片付け掃除して、化物より恐しい、旦那のお目玉貰ふな」と、皆部屋々々に入りにける。見渡せば野も山も、皆白妙の和田の山、雪の下伏す兎狸、猪狐を狩取らんと、村上左衛門義淸、狩裝束花々しく、山案内の狩人召連れ、獲物を列卒に指荷はせ、和田の別所に立歸り、門開かせて村上左衛門、悠々と打通り、「アヽ冷える〳〵。世上の譬に違はず、犬骨折つてたかの知れた獲物、北條殿の此下屋敷を預る某、今日の猪狩も私の遊興でない。諏訪明神の神使は年經る白狐、信玄是を信仰して、武運を祈ると傳へ聞く。何とぞ此狐を狩りとらんと思へども、神通得たる白狐にて、狩人の手に及ぶまじ。さるによつて、一國の野狐を殘らず狩取らば、神通得てもさすがは畜生、萬一白狐を射留めたらば、莫大の褒美、其旨きつと心得よ」と、さも横柄に言渡す。近習の侍飯山郡太、おくればせに立歸り、「某列卒の殿を仕らんと、引下り候所に、高島の坂中にて、年ふる雌雄の狐を見出し、弓に矢をはげ追ひかけしに、小笹が隈に迯入つて、かいくれに行方知れず、無念千萬仕損ぜしと、薄茅原搔き分けて捜せしに、狐に勝りし女の曲者、生捕りて參上致す」「ナニ女を生捕つたとは、必定敵方の紛れ者、幸ひ新身の刀試、胴切にしてくれん、是へ引け」と詞の下、引立て出づる小牡鹿の、是も夫戀ふ女と見え、

身の毛がよだつ。燈心一筋へすべい」と、相州北條氏時の和田の別所、村上左衞門預りて、今日留守番の中間小者、百物語も親方の、油甜りと知られける。「サアく今度は術内が咄番だ。又おらが燈心もよつほど減り、うそぐらうなつて、隅々が見らるゝ。信立の領分天目山と國竝の此信濃なれば、化物が出べい。わいらもソレ、鍔元くつろげてをれさ」「チヽ此寒六も、冬平も、油斷はせない。若し女の化物が出たら、大刀物で打切るより、打切買つたと思うて、かつゐてゐるだんびら物にたんのうさそ。サアく術内、咄せろさ」「チヽサく、昔甲斐國に悋氣深い女があつて、男の心のかはつたを恨み、夜なく男の門に行き、聲うちふるはして、なう恨めしや妬ましや、言ひかはしたを忘れはせじ、今こそ思ひしらすべいと、戸を蹴破り、男の喉へくらひ付き、生ながら鬼になつたと、京大坂のしばやで、甲斐國の女の鬼と、狂言にしたけな。夫から其家が毎夜さ家鳴」「フウ是はよつほど怖い咄だ。聲ふるはせずと咄せろさ。コリヤ寒六、其樣におらがねきへ寄るなやい」「イヤサわこれが身どもをおすぢやないか。シテ其後は、どうかく」「それから二階がめきく、裏背戸がぐわたくく、アレどろくと家鳴がするは、百物語の不思議か」と、赤鰯の反打ちまはし、もつそをきらずで喰ふごとく、壁を睨んで尻込する、其中にどんくと、間近く聞ゆる太鼓の音。「待てく、あれはお旦那村上樣、

の世にかは木曾の流の山川に、女浪男浪がさて羨まし。夫婦ならねば、つい言ふ事もかた田舍、情がましい一言は、いはじ岩間の細道を、歩行馴れたる脛の雪、唄夫は冥土に我身はこゝに、櫻花かやちり〳〵に、花かや櫻、櫻花かやちり〳〵に、ちりにまじはる神心、伏拜み行くうてなが原、道行く人も指ざして、あやかり者とあだ口に、浮名立つるもアヽはづかしや。今の我身はなか〳〵に、戀も情もあれはてし、青柳過ぎて宮田の町、とかく浮世は伊勢の濱荻、難波の蘆とかはれども、かはらぬ物は夫の名と、おまへもいはゞ勝賴樣、いつの世にかはあひそめ川の、身の浮しづみ七度は、氷を渡る信濃路へ、急ぎ行くのが第一丸、此御藥も箕作も、もとが新羅の流にて、彼よし是よし世の中も、よしと浮世を渡る川、心にごさずすみ染の、此身の末は天の川、空にも戀があればこそ、雲に浮名は七夕の、糸繰返し返しつゝ、戀の染衣濡衣が、昔を忍ぶ流行唄、唄くるか〳〵と川下を見れば、川原柳の、影ばかりさりとは影ばかり、川原柳の影ばかり。君を待ち、忍び〳〵につま戸へ來れば、月の影さへ、氣にかゝるさりとは氣にかかる、月のかげさへ氣にかゝる。エヽ逢ひたやな。問ふも語るもいく難所、野越え里越え山越えて、此所の一村彼所の宿の、軒つゞき藥々と賣り聲も、やさし、しほらし、立ちならぶ家居に今宵一やどりと、暫く勞を 三重はらしける。「なうおそろしや〳〵、怖い咄でちりけ元から

ぬ弓取の、直なる竹の根もとより、はつしと切つたる旗竿は、盛運目出たき大將の、さそふは賢き御笑顏、眠れる花の死顏に、抱いてゆぶつてすかしても、返らぬ昔唐土の、二十四孝を目のあたり、孟宗竹の笋は、雪ときえ行く胸の中、氷の上の魚を取る、それは王祥、是は他生の緣と緣、黃金の釜より逢ひがたき、其の子寶を切離す、弟の慈悲の胴欲と、兄が不孝の孝行は、我が日の本に一人の勇士、今に名高き山本氏、武田の家の礎と、事跡を世々に殘しける。

第四　通行似合の女夫丸

僞りの文字を分くれば、人の爲、身の爲ならず戀ならず、心なけれど濡衣が、亡き夫の名も勝賴に、ともなふ人も勝賴と、いうてよしある簑作が、ちらしくばりて藥賣、今日立ちいづる此國も、かいしよありげな女子の所體、きどく帽子に筒脚袢、跡につゞいて藥荷を、かづく肱笠袖笠の、匂はぬ花の降りつもる、信濃路さして行く道の、泊々や宿々へ、商ふ物は草の種、命の種のいく藥、詞に艶を濡衣が、「そも此藥は、陸奧南部にかくれなき、新羅の家の名方、萬の病に用ひてよし」それ藥一粒は、たとへ千金萬金にもかへ難き、其我夫は世をさりて、いつ

とけるなら、仕様も様もあらうもの。此婆々が偏屈から、信玄方の恩受けては立たぬといううた一言で、直江が手にかけ殺しやつたは、即ち母が殺した同然。コレ〳〵娵女赦せ」「ア、勿體ない。乳房に離れて死ぬ命、思はず知らずお主様の、お役に立つたも因縁」と、泣かぬ顔するいぢらしさ。母は一間の一巻携へ、「不孝と見えし勘助は、却つて父の名を上げる、二十四孝に優りし孝。器量も揃ふ二人の子供、軍法傳授の此一巻、頂戴しや」と差置けば、勘助取つて押戴き、「父の苗字を給はれば、勘助が身の規模は立つ。母方の氏をつぐ、弟直江が母への孝、其徳によつて此一巻は、其方に下さるゝ、御恩を忘れず猶此上、孝行怠る事なかれ。景勝の忠臣は、我胸中に徹したれども、心得がたきは親謙信、君に弓引く逆心ならば、汝も従ふ心や如何に」「言ふにや及ぶ。我子を切つて二君に仕へぬ此山城、兄とはいはさぬ敵味方、此三略の恩を仇、一合戰仕らん」「ヲヽさもあらん、出かす〳〵。我又主君に仕ふる甲斐の天目山に立籠り、出合ふ所は川中島、運に乘じて越後の出城、諏訪の城まで押寄せ〳〵、さも目ざましき勝負をせんず」「ホヽ潔し去ながら、假にも一旦景勝に、請けたる恩は何と〳〵」「ヲヽ、日月にたとへたる右の眼は越後へ進上、二心なき勇士のかため、母にあたへし片しの下駄、景勝の志、捨つるは武士の道ならず」と、左の足にしつかと履き、おり立つ庭の高低も、道はゆがま

に、挑燈松明ちる花の、都を跡にをちこちの、雪の信濃路爰かしこ、月の更科の片山里に、人知らず隱まふとは、さしもの母も御存じあるまい」「知らなんだ〱。コレ〱、さうして御母賤の方の在所は何所。サヽヽどうぢや〱」「ハア申すも便なき事ながら、憂き事つもる產後の惱、はかなく此世を去り給ふ。跡に殘りしあの公達、勿體なくも我子と僞り、次郎吉よ〱と、呼ぶ度々の空恐ろしさ口惜しさ。弟嫁が乳を幸ひ、我子を捨てさせ、他家のあの子を養育さする我心底。我儘無法は一物ありと悟りし老母、雪の中の筍を、掘つて見よとは天晴明察、實に勘助が母人ぞや。穢れを厭ひ今日まで、埋置いたる雪中の筍是にあり」と、箱押取つて差上ぐる、源家正統武將の白旗。「神明を頭に戴く義兵の旗上げ、謙信親子只今より、此勘助が幕下に付けと、立歸つていひ聞かせよ」と、一つの眼に天が下、見下す富士の山本勘助、三國無雙の弓取なり。山城大きに感じ入り、「信玄景勝不和なるも、互に心を疑ひあふ、忠臣割符を合すがごとし。君御在家知るゝ上は、景勝公の言譯立つて、身がはりにもう及ばぬ。追付兩家和睦の基」「成程〱、最前裏で直々に樣子を聞いた、信玄公と勘助樣、言合せのある事は、一家中へもお隱しあれば、夫高坂も露知らず、抱へに來た慈悲藏殿は、思ひも寄らぬ長尾の御家來。君の御事初めて聞いた使の面目、此上なし」と悅びの中に、歎きは一人の孫、「斯う心が

歸りし其仔細、母人には密に語り、豫て申受けたる兄者人の命、現在の子を捨てたも、否應いはさぬ命の無心。去ながら、眼をくつて身を全うする大丈夫の魂、あつたら勇士を殺すは殘念、長く謙信に仕へ、忠勤を盡さるべし」と、言はせもあへず冷笑ひ、「おろかく。謙信づれが家來には汝等が分相應、身が主には釣合はぬ。誠山本勘助が崇むる主人は、忝くも足利十三代の公達松壽君。是へ誘ひ申されよ」と、詞の下に高坂が妻の唐織、次郎吉を傅き申せば、山城親子、ハァはつとばかり飛びしさり、恐入つたるばかりなり。眞中にどつかと直り、「ヤイ山城、只今打つたる此手裏劍は、先年室町の館にて、此公達の御母、賤の方を奪ひ取り、立退く折から、景勝目當に打ちかけたる我小柄、只今我手へ慥に落手。山本の苗字を引興さんと、軍學に心をこらす處に、武田信玄大僧正、姿をやつし只一人、密に庵へ來らせ給ひ、足利の行末覺束なし、汝我力となつで事を謀れと、名將の一言心魂に徹し、ハヽァ畏り奉ると、卽座の諒承弓矢の誓」「ヲヽ其時に此母も、只人ならずと思うたが、さては武田信玄公と、主從の契約仕やつたの」「ヲヽサ、大魚は小池に住まず、鶴は枯木に巢をくはず、智勇兼備の大將に、賴まれ申せし身の面目、直樣都に馳上り、窺ふ時しも館の騷動、義晴公はあへなき御最期。ハッアせん方なし、懷胎の賤の方、人手には渡さじと、忍び入つて御家の白旗諸共守り奉り、立退く館は八方

されし此一通に、委細の樣子詳に記されたり。主從となるからは、命は君に捧げしもの、武士の因果と諦めて、潔う死んでくれ」「コレ／＼、能う思うても見やしやれ、いかに主ぢやとて、まだ知行もくれぬ中に、殺さうといふ樣な、胴欲な主があるものか。イヤ／＼、もう此主從とんと變改」「イヽヤさうはなるまい。いつぞや諏訪の森において、殺さるゝそちが命、助置かれし景勝の恩忘れはせまい。其時の情は今身がはりに立てん爲、智謀の罠にかゝりしとは知らざるか。恩を知らねば人ではないぞよ。たとへ逃げても此家のぐるりは、景勝の家來取卷いて、一寸も遁れはない。切腹するか、但し母が手にかけうか。サア／＼なんとなんと」と詰めかけられ、籠中の鳥の目はうろ／＼、隙を見て逃出す、膝口はつしと手裏劍に、しりへにどつさり詮方なく、「是非に及ばぬもう是まで」と、腹切刀取るより早く、右の眼に突込んだり。流石の老母も不審顏。流るゝ血を押拭ひ／＼、「母者人、景勝に似たによつて、身がはりに立てたがる、小面倒な此面に、かう疵付けて相好變へれば、もう身がはりの役には立つまい。今日只今父が苗字を受繼ぎ、山本勘助晴義、軍法奥義を胸に貯へ、三略の巻より大切な此命。ヤア／＼謙信の家來直江山城介種綱、夫へ出でよ、言ひ聞かす仔細あり」と、呼はる聲に一間の内、「見參ぞう」と、慈悲藏が優美の骨柄、長袴さわやかに、「某長尾の家臣たる事、深く包んで古鄕へ

烏の孝行ごかし、邪魔なうぬから仕舞うて取る」「どつこいさうは成りますまい、苗字を繼ぐは此慈悲藏」「見事われが」「繼いで見せう」「小癪な退け」と鋤と鍬、落花みぢんの雪とんで、掘出す箱のふたりが爭ひ、道と非道の二筋を、滑つつ轉けつ摑みあふ、はずみにがはと取落し、池にざんぶと水煙、さわぐ群鳥兄弟も、不思議と見とるゝ後より、障子ぐわらりと母の老女、「兩人待て。兄弟共に武士となり、主人を取るべき時節到來。雪の中の笋を掘出したる慈悲藏、今こそ母が心に叶うた、天晴孝行出かしたく。其方は最前言付た通り、裏口四方に氣を付けよ、ナ合點か」「ハア委細承知仕る」と、駈入る弟横藏は、池中の箱を引上げて、母の御前に差出せば、「サアく兄、そなたには別てよい主を取らする。卽主人より下されし、裝束も更めさせん」と、しづく奥の白臺に、無紋の社杯白小袖、傍に三方九寸五分、我子の前に直し置く。「母者人こりや何ぢや、いやさコレ此白裝束は何の爲」「ヲ丶、それこそは冥土の晴著。只今其方が首打つて、身がはりに立つるのぢやはやい」「エ丶イ、滅相な事ばかり、此首を身がはりとは、そりやマア誰が」「今日其方が主人と賴みし、長尾三郎景勝公の御身がはり。聞及ぶ武田信玄、越後の謙信、室町の御所において、互に我子の首討つて、心底を顯はさんと契約ある由、最前そちを召抱へんとて來られし景勝の面體、そちが顏にさも似たり。扨はと母が推量違はず、箱の中に殘

絶えたり。コハ何事と驚く中、次郎吉引立て横藏が、一間をさしてかけ入れば、「ム、扨は我子の害になると、横藏の所爲ぢやの。義理も情ももう是まで、敵を取らいで置かうか」と、死骸を小脇にかい込んで、常には弱き女氣も、恨につよき力帶、奥へ窺ふ忍び足、早日も暮に近づきて、鐘かう〳〵の道ぞとて、古き例の跡を追ひ、子故の闇に白妙の、道も涙に見えわかず。なんぼ掘つても筍が、あらう樣はなけれど、親を思ふ一心を憐れみ、天より授くる事もやと、心に込めて一尺二尺、底はしら羽の鳩一羽、飛んでおりしも飼ひなれし、鳥も心のあるやらんと、又掘りかへせば又一羽、友呼び誘ふ生類の、有樣つく〴〵打守り、「最早入相、諸鳥塒に歸る頃、一羽ならず二羽三羽、集り來るは、ハテ心得ず。誠や、兵器ある地には鳥群をなすといへり。我父は日本の軍師、此所にて世を去り給ふ。一生暗んじ置かれたる、六韜三略の祕密の巻、此下に埋み置かれしやらん。扨は我孝心天に通じ、鳥類是を知らせしか。ハアありがたし忝し」と、心勇んで掘穿つ、雪も散亂群雀、ばつと立つたる藪の中、窺ふ兄が頬魂、「ム、野に伏勢ある時は、歸鴈行を亂る。油斷の塒を窺ふ惡鳥、殺さうと生かさうと手の内の雀、慥に手ごたへ、此下を」「コリヤ待て慈悲藏、埋んである傳授の一巻、われにはやらぬ。兄が出世の種にするはい」「兄者人そりやお前無理でござりましよ」「サィヤイ、無理いふが兄の威光、阿

き、裏の藪へと踏みわける、雪より先にいとし子の、埋れ死なん不便やと、見合す顔に降る涙、霙争ふ濡翅、しをるゝ夫の後かげ、「いかに望があればとて、天にも地にも一人子を、能う慘たらしう捨てられた。今の女中も氣の強い、置いて往ぬ程なら、お家に寢さしていんだがよい。可愛や〳〵ひもじからうのに、ちつとの間なと抱たい」と、任せぬつらさ次郞吉を、漸そつと下に置き、さし足ながら庭に下り、覗けば門にしよんぼりと、「ヤレぼんよ、夫がマア何と命があるもの」と、明けんとすれど鎹に、錠の代りの眞結びは、慘やつれなとあせる程、雪にしめつて開かぬ戶に、「ちよたい〳〵」も絕え〴〵の、風にうたてや次郞吉が、わつと泣く聲、ハア悲しやと、又かけ戾り抱上げて、「雪やこころよん、霰やころよん。こはそも何たる因果ぞや、此子憎いぢやなけれども、我子に乳が吞ましたい。コレちとの間〳〵、寐入つてたもいの」と、心も空はかきくらし、又降りしきる白雪に、外に泣く聲八寒地獄、劍を吞むより身にこたへ、思はず知らず轉びおり、碎けよ破れよの念力に、はづるゝ戶より身は先へ、「コリヤぼんよぼんよ」と、我子を肌に抱きしめ、流涕こがれ泣く聲に、唐織木蔭をつつと出で、「信玄公を抱上げ、乳房をふくめ參らすからは、慈悲藏はもはや此方の味方、夫に知らせて悅ばせん」と、勇んで館へ立歸る。はつとお種も心付き、うろつく隙に何處より、懷劍ちやうど峯松が、肝先貫き息

一口呑ましたい」と、慕ふ女房を引退けて、枝折戸ぴつしやり。表にも心は殘る雪中へ、頑是なみだの子を抱きおろし、襁の下ぐくり、くゝり添へたる後紐、垣に結ぶは義理の綱、神や捨置く竹の子笠、いたいけ頭に打著せて、「山本の氏を繼ぐ慈悲藏殿を、軍術の師と頼まんと、是まで來給ふ信玄公、どうも此儘では歸られず、是非とも味方に付くといふ一言を聞くまでは、此信玄は其許の門口を立ちさらず、雪に凍えて死すまでも、爰に座をしめ返事を待つ、大將の命助けうと殺さうと、御思案次第、よい返答を頼入る」と、しづをかけたる雪の笠、思ひを殘し捨てて行く。「ヤアそんなら坊はまだ往なぬか」「コリヤ〳〵門には誰もない、よし居てからがあかの他人。今傍へ寄るとナ、信玄の恩を受けたになつて、母の一言反古になる。此簀戸の外へ一寸でも出るがいなや、夫婦の縁も是限」と、腰さげの紐鏁を、括る慘さは我ながら、いかなる惡魔鬼か蛇か、「六韜三略の望ある慈悲藏、慈悲も情も知つては居れど、母の詞は背かれぬ。どうで乳房に離れたもの、とてもない命、凍えて死なば死に次第。そちもソレ其子を袖にしては、兄貴への義が立たぬぞ。ハア何かに紛れて、大事の孝行怠つたり、ドレ裏へ行て雪の中の筍掘つて進ぜう」と、簑笠取つて打かづき、あつき親子の緣をたつ、鍬ふりかたげ、此寒氣に荒男でさへたまらぬもの、よたけもない體に、ア、子を捨つる藪はあれど、親の詞は捨てがた

夫婦して守育てうと思ふ心はござんせぬか。此マアちつとの間に、コレ何所もかも細つた事を見やしやんせ。道理でもある、眞實の母御の懐を離れて、他人の手に何の育たう。夜は得寢ず、晝はうつ〳〵泣寢入に、寢た顔のいぢらしさ。ほんに見る目が悲しい」と、語る中より女房が、「チ、可愛や、左樣でござんせう」と、わつと泣出す母親の、聲に目覺しがみ付き、縋る乳房は一人にて、子の手柏の二面、儘ならぬこそ恨なれ。一間に母の聲高く、「コリヤ〳〵慈悲藏、子供を餌に恩にかけて味方にせんと、後穢い信玄に奉公しては武士が立つまい。去ながら、軍法奥義も傳はらず、家の名跡を繼ぐ氣がなくば、勝手次第」と、もぎどうに、言捨て障子はたと閉す。ハアはつと立上り、我子を取て引きはなし、「須彌山滄海の大恩を受くればとて、母の恩にはいつかな〳〵。信玄に仕ゆる事存じも寄らず、變改申す。コリヤ女房、一旦捨てた此悴に、見苦しい、何ほえる。緣に引かれて知行取つては末代までの名折、親子の緣をさつぱりと切つてしまへば、信玄に恩もなく義理もなし。コレ此竹も其本は、竹に雀と離れぬ中、今餌さし竿となる時は、鳥の爲には怨敵、事によつたら親子兄弟・敵味方となるも武士道。お返事は此通、稚子連れて早歸られよ」と、詞銳に言放す。「ハア此上は力なし。とはいへ歸つて御主人や、夫に何と詞さへ」なく〳〵抱き立出る。「コレなう峯松、一世の別れせめてまあ、此乳が

いかいお世話様に」「コレ〳〵麁相いふまい、甲斐國へ養ふからは、最早一國の世繼、即ち今日の信玄公、孝心深き慈悲藏殿、殊に軍術の達人と聞及び、師範ともお頼みなされん爲、わざわざ見やしやんせ、コレ愛らしい此信玄が抱へに來た、お受申されてよからう」と、恩をかけたる名將の、情は肝にこたゆれど、とほけた顔で、「是はしたり、私は此在所の山賤、鋤鍬の外何にも存ぜぬ者を、軍術の師範なぞとは、勿體ない事おつしやります」「コレ〳〵、此方の人、お前の器量を聞及んでとあるからは、きつい譽な事ぢやぞへ、卑下するも事に因る。ハテ軍法奥義は、母様の傳授の巻を讓請けて」「さればいやい、それを貰うて山本勘助になつたれば、抱へられまいものでもなけれど、まだ生もかへぬ中に軍術の大將のと、そりや山の芋を蒲燒にする樣なもの、名さへ慈悲藏とて、蟲さへ得踏殺さぬ者が、軍に出て人の首が何として何として」と、とつても付かぬ顔付に、唐織はつと胸せまり、「不調法な女の使、お氣に入らいでおつしやるのか。どうあつても味方に付いて貰はねば、ならぬといふ其譯は、桔梗が原に此捨子、山本氏と有る書付を、印に拾ひ取りは取つたれど、サアどうも力に及ばぬは、肝心の乳に呑付かず、なんぼ抱いて突付けても、あつち〳〵と指ざして泣いてばつかり。此大將に兵粮がなければ命も危し、其兵粮を續ける謀は慈悲藏殿、お前の心にありさうな事。甲斐國へ味方に附いて、

れてゐる時に、幸とかゝのそげめはてこねて仕舞ふ、跡に殘つた小倅の其次郎吉、邪魔な餓鬼奴、しめ殺さうかと思うたれど、味なもので、子といふものは親よりちつと可愛いものぢや。又大うなつたら、おれに似て孝行にも僞をろかと思うて、貴樣に育てさすからは。ナウ慈悲藏、畢竟わがみと相合の子、とてもの事に女房も相合にする合點。お種顏振らずと、ムンと言やいの。それをいやと言ふと、慈悲藏が大事がる此母者に當るぞよ。コレしつか〳〵と揉ましやれ。エヽまだ火がぬるい」と戀の意趣を、炬燵にあたる非道者、持餘してぞ見えにける。折ふし表に先走、「山本勘助殿に用事あつて、大僧正武田信玄參上なり」と案内に、思ひがけなき夫婦が不審、仔細あらんと横藏が、起きも直らず空寢入。「ハテ扨思ひ寄らぬ大身のお入り、卒爾には母も逢はれまい、慈悲藏饗せ。コレ横藏、是はしたり、何やらいひ〳〵寢入つたさうな、風ひきやんな」と一間の障子、引立て窺ふ表より、匂ふ留木の高坂が、妻と知らせてうづだかき、雪の懷稚子を、抱いて幾重の柴の庵、家來は先へと追ひかへし、行儀正しく打通る。訝しながら手をついて、「信玄公の御入と思ひの外なる女中のお名は」「ヲヽ成程御不審尤、僞りならぬ信玄公の、コレ此寢顏に對面なされ」といふに、女房立寄つて、ヤア峯松か戻つたかと、飛立計の胸押ししづめ、「是は〳〵御苦勞樣や、そんなら峯を貰うて下さりましたはお前樣か、

歩くに、何處へなと飛び次第、飛びついでに戻りがけ、小鳥十羽程捕うと思うて、顔も足も切れる樣な」「道理々々。サヽヽ、ちやつと上りや〳〵」と草鞋の紐、手づから母の慈悲藏も、足の湯を取り機嫌取る。「兄者人お足洗ひましよ」「イヤ、コリヤ〳〵、孝行な兄が體に、不孝な弟が手をさへるは穢らはしい、母が洗うてやりましよ」と、一人に辛く一人には、甘い女子の鼻の先、泥臑突付け、「エヽ若い女の手のさはるは好いものぢやが、乾物の樣な母者の手で、情の罪科ぢや。いか樣おれは孝行者、此小鳥も晩の夜食に、「こな樣に喰はすのぢやない、燒いて貰うておれが喰ふ氣。兎角おれが口さへ養へば、こな樣の氣が休まる、なう母者人」「さうとも〳〵、あのマア孝行な事はいの。サア〳〵炬燵に火もして置いた」「ムヽこな樣が今まであたつてゐて何の恩にきせる事。エヽこりやぬるい水炬燵ぢや」「イヤ〳〵あんまりきつい火は上つて惡い」「それがたはけといふ物、もうこなたも追付け火屋へ行く體、稽古の爲にきつい火にも當つて置かしやれ。サア足揉んで下され」と踏出す兩臑。慈悲藏見かね、「ドレ私が」と立寄れば、「又差出るか小癪者。兄や斯うか〳〵」と撫でさする、ほんそ息子のくはびら足、「アヽとてもなら美しいお種がもんでくれりや好いに。ハア貴樣子守か、峯松はどうした」「ハイお指圖の通り、思ひ切つて一昨日主が何所へやら」「ムヽ捨てて仕舞うたか、よい事〳〵。一體おりや貴樣に惚

三郎景勝、是まで參上仕る」と、禮儀正しく述べらるれば、「扨こそ〳〵、始より自然と備はる御眼ざし。シテ御望みなさるゝは、兄弟の中兄か弟か」「イヤ景勝が望む處は惣領の橫藏」「ハテナ最前より御覽の通、孝行な弟慈悲藏をさしおき、不孝な兄の橫藏を、御家來になされうとおつしやるお前のお心は」「イヤそりや其方に覺えある事、諏訪明神の社內にて、面體恰好とつくりと見屆け置いた橫藏、是非に身どもが所望致す」「ムヽ左樣おつしやれば思ひ當る。よく〳〵に思召せばこそ、大名のお手づから、いやといはさぬ此婆々に、下駄を預け給ひしは、天晴敏き殿ぞかし。兄は只今他行なれど、此母が成りかはつて御家來に差上う」「過分〳〵。其箱是へ」と取寄せて、「いかに老女、主從となるからは、一命を捨てても忠義をはげむ武士のならひいふに及ばず、此方とても一身を任すといふ、かための一品受取られよ。若違變あらば身の上たるべし」「御念に及ばず、其時は母が皺首差上げるか」「家來にするか二つの安否」「後程〳〵」「老女さらば」と詞詰、威風鋭き北國武士、越後縮の物なれて、引かぬ其場のしなの路や、別れてこそは歸らるゝ。木曾山木立あらくれて、無法むてつをしにせにて、名も橫藏の筋街道、草鞋のひもふり埋む、餌竿かたげて門口より、「母者人今戻りました」と、聲に老母がはや〳〵顏、「ヲヽ兄待ちかねました。此間はマア他處へ行て居やつた」「ハテこなわろは、おれが足でおれが

ぬ」「サア其名跡を受けたさに、心を盡す此慈悲藏」「ソレ〳〵、其名がほしさに孝行を盡すは、眞實の孝ではない、上皮の僞表裏」「コレ〳〵それはお情ない、苗字を望むも出世して、母人の悦び顏拜みたいばつかり。兄者人の心入と一つに思し下さるゝは、餘りつれなき御心」と、雪に喰付き落涙に、老母は猶も腹立聲、「コリヤ何ぼ利口に言廻しても、此年月膝元を離れ他國して居て、今日此頃俄の深切、是が僞といふ證據。己が心に引きくらべ、兄を不孝と言ひなす惡心、思へば見るもいまはし」と、杖振上げて打たんとす。老の力みに踏挫く、駒下駄飛んでよろめく足、「コハあぶなや」と抱きとむれば、「イヤ〳〵、汝が世話は受けぬはい。そこ退きをれ」と親と子の、心合はざる片足の下駄、景勝隙かさず拾ひ取り、「御召物是に候」と、老女が前に押直し、しさつて頭を下げらるゝ。母つく〴〵と打守り、「人品骨柄只人とも見えぬお侍、賤しい婆々に履物を直されしは、黄石公に沓をあたへし張良が俤、ハテおくゆかしき御方や。お近付にもなつて、とくとお禮も申したい。コリヤ慈悲藏、其方に用はない、立つて行け」ハアはつと、何か仔細はありそ海、母の心を量りかね、是非なく奥に入りにける。「いざこなたへ」と請ずれば、辭する色なく座に直り、「御推量少しも違はず、黄石公に劣らぬ軍者、山本氏の御子息を召抱へて、一方の大將と賴まん爲、身不肖なれども、越後の城主、長尾謙信が嫡子

妙に、枝もたわゝの雪折竹、杖と我子に助けられ、庭に佇む老女の風情。「申し〲此大雪に、さりとては冷えまする。蒲團の上にござつてさへ、御老體の身の上、平にあれへ」と取る手を拂ひ、「七十に餘つて愚鈍にはなつたれど、子供に物は敎へられぬ。すべて親に仕へるに、起臥の介抱は誰もする、何事によらず、親の心に背かぬ樣にするのが誠の孝行、寢てばつかり居るも氣詰りさに、雪の景色も見ようと思ふ、母が心を妨げるは、何と不幸であるまいか」「ハヽア一々誤り奉る、其段には心付かず、お年寄られて一日々々、御氣力の落ちるが悲しく、今日も獵に出で、元氣を養ふ谷川の、ます〲お達者なる樣と、志の捧物、賞翫なされ下されかし」「イヤ〲、物の命を取り、夫が何の養ひ。眞實親の養ひなら、遠い山川の珍物より、つい裏にある竹藪の、笋を掘つて來い」「ハアそれは御意ではござれども、此寒の内に笋が」「サアある物を取つて來るは子供でもする事、ない物を取寄するがほんの孝行。斯ういはゞ母が難題言付くると思はうが、此位の難題に困る樣な器量では、智者と呼ばれて、人に知らるゝ弓取にはなられぬぞよ。わらはが夫は天が下に聞えし軍師、一生主人を取らず過去られた忘形見、兄弟の子が器量を見定めるまでは、女ながらも夫の名をつぎ、山本勘助と名乘る此母、二人の内に勘助といふ名を讓り、父の軍法奥義の卷を傳へうとは思へども、夫では中々勘助にはなられ

物で見て置いた、烏は親の養ひを、育みかへすといふ本文。おれが毎晩女房に、孝行にする心が通じて、烏がかあ〳〵かゝの顔、いんで見よう」と出でて行く。「母者人は最前から、まだお寢みなされてか、炬燵でお風ひかしますな。お目の覺めぬ其中に、お肴料理して上げん。次郎吉も寢入つたか」「ハヽイ此子が機嫌よう育つに付けても、氣にかゝるは峰松が事。ほんに兄御の横藏様、いかに我子でないとて、捨ててしまへと無理ばつかり。お前が外へ出やしやんすと、私を女房にせうの何のと、辛い悲しい事聞くも、お前の孝行立てる爲と、辛抱するにもしられぬは、眞實な子を胴欲な、餘所へやつたといはしやんすが、まあ其先は何所の誰」「ハテ夫を問ふがもう未練、氣遣ひ仕やんな。此貧家に置かうより、乳母に乳母を付ける結構な内へ養子にやつた。彼奴はきつい果報者、もう思ひ出さずと、とんと捨てたと思うて居や。病煩ひといふ事もある、萬一先で死んだら、無い昔ぢやと諦めて、己や居る氣ぢや」と云ひながら、犬狼の餌食とも、なりはせぬかと子を思ふ、心は一つ一間の中、そつと窺ひ「是はさて、寢入つてござるかと思へば、裏へ出て御氣丈千萬。お炬燵に火もあるか、追付御膳の用意も仕や」と、片時忘れぬ孝心は、又と類はあらし吹く、音も吹雪に高足駄、踏分け尋ね來る人は、長尾三郎景勝、萬卒は求め安く、一將は得がたしと、此隱家の弓取を、慕ひて一人門の口。二重の腰の白

は何所へ往た、山の薪をえいさつさ、さらば爰らで一休み。「お種女郎冷えますの」「ヲヽ、正五郎樣、戸助樣、吹雪で外は歩かれまい。お茶も沸いてござんす」「イヤ／＼構ふまい、子持は手が放されぬ。慈悲藏殿は留守か、今日も今日と、寄合ふとあの人の噂、お袋への孝行は申すも愚、兄への深切、ほんの子は次にして、兄貴の息子の其次郎吉を、大切にしらるゝ女夫の衆の心意氣、名も慈悲藏といふが尤」「サレバイノ、夫に又兄の横藏殿、兄弟とてあの樣にも違ふものか、親への不幸さ弟へのむごさ。親兄弟にさへあれぢやもの、村中で持餘すが尤、外を家と出歩いて、隣邊へたゞれ込み、人の娘下女婢、當り合に孕まし、其おごもりのあの小悴も、親に似ぬ子は鬼子であろ」と、口はさがなき山道を、ゆがまぬ武士の梓弓、胸の袋に押包み、孝をはづさぬ慈悲藏が、獵漁も母の爲、流に添うて立歸る。「オヽ孝行者お歸りか、佛性な慈悲藏殿、殺生に出られたもお袋への養ひか。夫程にさつしやつても、氣に入らぬあの婆樣は、去とはきつい片意地者」「アヽこれ／＼勿體ない事いうて下さんな、たとへ身を粉に碎いても、胎内に在るから今日までの親の苦勞、くらべて見れば百分一、あの鳩部屋の鳥でさへ、鳩に三枝の禮ありとて、諸鳥に勝れて孝行な鳥、何處からとも無う此家の軒へ集つて來るも、慈悲藏が心少しは通じ、類を以て集つたかと、思うて嬉しう思ひます」「成程夫はこちとらも、さる書

此後は赦さぬとやら。ナソレ、御内寶の詞もあれば、是とてもまつその如く、稚けれども甲州の町人、其元がお構ひあらば、却て狼藉國賊の、名を取るか彈正殿」と、先にかけたる詞の裏釘、折返されてさしもの彈正、返答せき切る女房入江、思へば無念と唐織が、抱きし稚子無理やりに、引取ればわつと泣く。「是は無體な入江樣、さつきの喧嘩に負けたるかはり、其子ばかりは叶はぬ」と、あなたこなたと挑みあふ、裳ほら〳〵妻と妻、顔はほのあく薄櫻、亂れちつてぞ爭ふ風情、一度にわくる夫と夫、中にも高坂聲勵まし、「實やいたつて正直は、頭にやどる神の慈悲、一陽の春を待つ、雪中の梅にも優る主君の悦び、此身の忠義」「さればいな、お慈悲深い信玄樣の御威勢が顯はれて、私が無念もたつた今。サア申し入江樣、最前のお詞に、お前の殿御を何とやらおつしやつたが、今一言御所望」と、嘲る女房。「ホヽヽ、聞きたくば名のつて聞けん、長尾入道謙信の郎等、越名彈正鑓彈正」「イヤモ天晴手練の此鑓先、受けてはたまらぬ大事の稚子、連れて手前は逃彈正。唐織來れ」と立別るゝ、胸に一物二人の彈正、こゝに捨子の隨一と、其名も高き山本氏、伴ひ歸るぞ 三重 ゆゝしけれ。秋の末より信濃路は、野山も家も降埋む、雪の中なる白髪の雪、女ながらも故あつて、男のすなる名を名のる、山本勘助と人毎に、いは間の水の音たえて、木の葉の谺二つ三つ、年も幼氣稚子を、賺すお種が手枕に、寢兒が守

聲、「ヤイ〳〵馬鹿者、大事を前に置きながら、無益の舌の根動すな。イヤなに高坂殿、負うた子に教へられるとやらで、內寶の詞に服し、女房々々が乳を勸め、どちらへなりとも方を付け、此場の別は如何ござらう」「ホヽそりや此方も望む處、呑むか呑まぬは互の運づく。唐織早く」とすゝめられ、だくつく胸も押ししづめ、抱上ぐれば目をほつちり、明けて三つの稚子が、わつと泣出す口の內、乳房ふくめて賺しても、呑む體さらに見えざれば、見合す夫婦が顏と顏、「コレ申し唐織樣、何ほう勸めさしやんしても、子供はどうでも正直な。わしが代ろ」と抱き取る入江、心に拜む神よりも、賴みに思ふ此乳を、たつた一口呑んでたもと、ゆふり步けどけがな事、猶も正體泣きさけぶ、聲をとめんと手に汗を、握り詰めたるいたいけも、憎やとすねて置く露の、賴みもつなも切れ果てし、入江が思ひ唐織も、殘り多さに又立寄り、賺し宥めて抱上ぐれば、泣きやむ不思議女房より、高坂彈正大に悅び、「軍師山本勘助、信玄公の御味方」と、いはせも立てず、「ヤア〳〵くらい〳〵。兩方共に呑付かねば、未だ善惡知れざる中、其方へ連歸る、其譯聞かん」と詰めかくる。「ホヽ合點行かずばよく聞かれよ。入江殿が抱上ぐれば歎くは治定あの如く、身が女房が手に在る中、泣かぬが緣ある是證據。又二つには甲州の住人、山本勘助とあるからは、紛ふ方なき手前の領分。最前ちらと承りしが、越後領へ指さゝば、

ならぬ稚子が、踏んだる足は手前の領分」「イヽヤさにあらず、物の始を頭といへば、此方の領分を枕としたる山本勘助、越後の國の旗大將、見事貴殿は拾ひめさるか」「ヲヽいふにや及ぶ、我方へ踏延したる足元が、肝心要の甲斐の國。高坂彈正が拾うて見せう」「イヽヤ越名彈正が連れ歸る」「イヽヤならぬ」と刀の柄、理を非にさせぬ詞詰め、爭ひこゝに二人の女房、とくより立聞く此場の時宜、見やる眼も角菱の、めい〳〵夫を押隔て、高坂が妻威儀繕ひ、「及ばぬ私が一思案、女の差出がましけれど、彈正殿聞かしやんせ。甲斐と越後の領分へ、捨置きし稚子は、兩家に望む山本勘助、是を手筋に召抱へるお前方の胸の內、一方へ拾はれては、是非一方の國の恥、其爭ひの基となり、肝心の此子に乳も呑まさず、若もの事があつたならば、お望も水の泡、何にもせよ兩方より、「乳房含めし其時に、いづれへなりとも呑付く方、夫を印にお拾ひあらば、どちらにひけも劣りもないと、わしや思へども跡や先、思案してたべ我夫」と、さすが女の智慧の海、實に高坂が妻なりし。「女房出かした、爭ひとゞむる乳房の鬮取、幸ひ其方が持合はせし、乳をあたへて試せん。彈正殿も相應な乳母でもあらば出されよ」と、入江に當てたる詞の端、聞くよりくわつとせき立つ入江、「おかもじ樣の御思案に、鼻毛延した今のお詞、越名彈正忠政が女房、乳母奉公は致さぬぞ。今一言おつしやつたら、赦しはせぬ」と腹立

本意ならずと、家來をとゞめ歩み寄り、「ム、最早嬰兒といふでもなく、男子と見えて氣高き寢顔、いやしからざる者の忰、何故こゝに捨置きし、仔細はいかに」と、見廻す小袖の絎紐に、付けたる下札手に取上げ、「何々、甲州の住人山本勘助」と、讀みも終らず不思議の顔色、「此山本勘助といふは、生國は三河の者、山賤と見えて魂は、異國の韓信孔明にも劣らぬ軍者、主人豫て御懇望、かゝる亂世の其中でも、諸方に招く今日只今、此稚子に名を記し、捨てたる主こそ労しき、勘助を味方に入るゝ、信玄公へよき土産。ヤア〳〵者ども、身が屋敷へ連歸れ」と、詞にはつと若黨中間、抱き取らんとする處、「高坂殿暫く」と、聲をかけたる立派の侍、家來につかせし鑓印、長尾入道謙信が郎等、越名彈正忠政、我領分に打通れば、高坂は甲斐の領、ほう木を中にはさみ箱、不和なる中の兩執權、すは事こそと下部まで、固唾を呑んで聞居たる。「イヤなに高坂殿、只今物かげより承れば、是なる捨子が下札に、山本勘助と書付けし故、お拾ひなさるゝ御所存、尤とは存ずれども、見まする所、雙方の領分へかゝり合せし上は、貴殿のまゝにもなりますまい。手前の主人長尾謙信、日比望みし折に幸ひ、其姓名を書表はし此所に捨てしは、某が、願うてもなき忠義の一品、貴殿に遣つては武士が立たぬ。是非連れて歸りたくば、彈正が首諸共。さもない中はいつかな叶はぬ」「ホ、さい目の論なら金輪際、拾はにや

生れ來るもそちが因果、親の心子知らずと、我肌付くれば現なく、結ぶ榮花も夢の夢、頑是なけれど聞いてくれ、親として子を捨つるは、人間ならぬ境界と、笑ひし此身に廻りきて、今といふ今其方を、こゝに捨置く此親が、一人の母へ孝の爲、捨つれば拾ふ神佛の、力をかつて成長せよ。親と思ふな、子でないと、思切つても切りかねる、產の母が歎きといひ、我も不便さ身にせまれど、「そちをかばへば不孝となり、孝を立つればそちが難義、理にせまりたる思ひ子を、捨つる此身の孝行より、捨てらるゝおことが孝行、惨いとばし思ふな」と、言譯なみだ目も明かねば、そつと傍に置く土の、上に伏したる稚子が、わつと泣出す聲に恟り抱き上げ、泣くを道理とこゝかしこ、唄山を越えて里へ往た。里の土產の見納めと、抱きしむればすや〳〵顏、さすが童の氣さんじと、打守り〳〵、名は慈悲藏の慈悲もなく、今目前に捨置いて、歸ると知らぬ心根を、思ひ出せば不便やと、いとゞ涙のやるせなき。「ハア我ながら誤つたり、心よわくて叶はじ」と、包み廻せし絹の香の、思ひは二重胸の闇、元の所へ押直せど、知らぬ子供の寢入ばな、一世の別れと繰言を、あとに殘してゆき國の、つもる歎と知られたり。かゝる折ふし甲斐國の執權、高坂彈正時綱、供人數多引俱して、當所筑摩の御社へ、詣の道もほう木の傍、件の捨子に目をくばり、人音稀な街道に、捨てられし稚子は、犬狼の餌食は治定、見捨つるも

足早いお侍とは、異名さへ違ふもの、まして心の内外も、違ひやんす」とほのめかす。「イヤコレ入江様、武士の身は情によつて、退くも迯げるも軍のならひ」「ヲ、好い口な事おつしやるな、情でそんな異名を取る、武士の法がござんすか」と、いはれて唐織當惑の、何とせんかた此場の無念、廣言憎しと思へども、入込んだ越度といひ、夫をさみする詞の端、聞くにつらさもいやまさる、涙隱して「入江様、花によそへ名に顯はし、非を改むるお前の存分、かへす詞も家來の仕落、今は此儘歸るとも、滿つれば缺くるの道理にて、今日のお禮は重てきつと」「ヲ、そりやおつしやるまでもない、私が方に非太刀は受けぬ。此以後主人の領分へ、つゆ程もお障りあらば、二度と赦しは致さぬ」と、殘す詞も針の先、眞綿に包む唐織が、立寄る所をとどむる下部、是非もなみだの道筋を、左右へこそは別れ行く。爰に信州筑摩郡の邊に住む、慈悲藏といふ者あり、生得親に孝心の、道は昔の郭巨にも、かはらで積る年の數、三十の上は漸と、二つか三つの稚子を、抱入れたる懷の、うち曇なる冬の空、寒さを凌ぐ種ならで、歎の種となりふりも、茫然として佇めり。「ハア誠や人間の吉凶は、生るゝ時の運に任すといふ、母の胎内を出でしより、誕生の祝儀とて、ざゝんざ諷ふ悦びは、貴人高位はいふに及ばず、下萬民の我々までも、悦びに悦びを重ねるが親子の縁、夫に引かへ其方は、わづか慈悲藏が忰と

る兩家の中、家來の仕落は幾重にも、お詫申す筈なれども、只今のお詞に、すべて甲州には盜賊ありとおつしやつた、其一言が承りたい」「チ、唐織樣とした事が、何の根問に及ぶ事、もと此信濃は村上左衛門義淸殿の領地なりしが、謙信樣と信玄樣兩人して切取り給ひ、此所にさいめの印、それを知りつゝ狼藉せしはあなたの御家來、國の守の扶持人さへ是ぢやもの、ましてや町人百姓は、猶以て狼藉するは知れた事」「イヤおつしやんな、印ありとは言ひながら、一つに續きし原なれば、過つて踏越えしも、いはゞ下郎の刈取る草」「イ、ヤ下郎にもせよ、誰にもせよ、其過をさせまい爲、建てたる棒木は國家の禁制。花咲く木々の枝とても、折取るまじと記せしを、手折れば卽ち落花狼藉。此領分の印に限らず、たとへ白紙に書くとても、事を制する理に等しく、是皆國の敎にして、掟を守るは貴人より下々の掟とする。謙信樣の息のかゝつた領地へ踏込み、草一筋でも刈取つたは、國を盜むも同じ事、其儘に指置いては、夫彈正の越度、女房の身として見て居られず。高坂樣はともあれ、私が夫彈正殿、ついに一度も名を穢せし事なければ、お前の殿御と一口には、ほんに言うても下さんすな」「コリヤ面白い聞所、お前の殿御が執權なら、私が夫も執權職」「イエ〳〵そりやお前の胸一つ、深い樣子は知らねども、侍衆の口辯にも、高坂樣は逃彈正、こちの夫は鑓彈正、人に勝れた鑓の上手と、逃

面ども、誰に斷り、此秣を刈りほした。惡く言譯ひろいだら、二人共に首が飛ぶ、盜人めら」と言はせも立てず、「ヤア下司の口から下司呼はり、しやらくさい。忝くも甲州の主、信玄公のお馬の飼料、うぬらが知つた事でない、すつこんでけつかれ」と、猶も引きぬく手先を捉へ、「ヤイ此標が目に見えぬか、甲斐の領分は是より東、西は越後領分と書いてあるは、うぬらが眼にかゝらぬか。盜人というたが誤りか。サア〳〵何と」ときめ付けられ、返答こつゝより後から、握り拳を二つ三つ。「ヤア傍輩をぶたれては、後日に主君へ言譯立たぬ」やぶれかぶれと二人の奴、いどみ爭ふ折こそあれ、「兩人共にしづまれ」と、聲うちかけの裾けはらし、高坂彈正が妻の唐織、越名彈正が女房入江、夫と指圖に腰元ども、用意の腰かけおく家老の、女房と見るより下部ども、別つてこそは蹲る。入江邊に心を付け、「誰ぞと思へばお厩の沓藏、百內、何故の爭ぞ、事によつては聞捨てられず。包まず語れ」と尋ぬれば、「ハイ〳〵、喧嘩の元は馬の飼料、信玄殿の家來とぬかし、此方の領地へ踏込み、刈りあらせし狼藉者、我々に見付けられ、言譯なさの摑合」と、語る中より「もうよい〳〵、それでさつぱり樣子が知れた。國がかはれば心まで、かはればかはる、甲斐の國はすべて盜賊はやりしと、人の噂も嘘ではない」と、あてこすられて唐織も、むつとはせしが押ししづめ、「互にお主の確執より、おのづと隔た

通り」と、用意の鐵丸、車輪の如く投付け給へば、すかさず笠にてひらりと受留め、「火に德のある物は水に德なし、諸葛臥龍が工夫の地雷、火玉飛びちる術ありとも、我方寸にも大河在り、何かは以て恐るべき。未だ日本へ渡らぬ鐵砲、それこそ究竟詮議の手がかり、尋出すは瞬く間、追付歸り簑作が、身の納りは其時々々」そのときは非に濡衣が、暇申すも涙にて、物の黑白もなき夫に、似たる菖蒲や杜若、花紫の明方は、盛と見えし槿も、今は名のみぞ勝頼の、御手へ頓てとり兜、花にもなせし惡業の、ありて其名は鬼薊、因果は廻る日車に、のりの此身と絕え入る兵部、不便と見やる信玄は、仁あり智ある勝頼に、名殘おく方女郎花、桔梗刈萱秋の野の、月に名をふる更科や、信濃路さして出でてゆく。

第　三

名も山深き信濃路に、優しき花の名に呼びし、此處ぞ桔梗が原とかや。甲斐と越後の領分に、わけて立てたるさい目の場所、秣を刈りにやつこらさ、一本きめた刀より、研立て鎌でぐわつさぐわさ、踏みあらしたるめい〳〵が、主の威光をかり場の領、是も同じく二人連、籠に朸を指荷ひ、見てびつくりのどつてう聲、「ヤイ下司め、うらが部屋では、ついに見た事もないしやつ

信玄公の仰せ一々違はぬ我悪心、悴を國の守とあがめんと、子故の闇に眼くらみ、くらみ〳〵て手負、刃物たぐつて我腹へ、ぐつとつき立て引廻し、「ア、恐ろしきは天の照覧、主人の罰。

悴が眼病、薬祈念も叶はぬ筈。勿體なくも御主人を、害せんとせし大罪人、逆磔にも行はれず、大將の御手にかゝる有難さ。コリヤ濡衣、此館の御重寶、諏訪法性の御兜、今謙信の手に入りたり。汝も信濃生れとあれば、今の命を存らへて、何とぞ國へ立歸り、手立を以て兜を奪取り、勝頼公へ奉らば、親と一つでない悴、死後の言譯此上なし。申し奥様、お赦しあつて此願ひ、お聞届下さらば、生々世々の御厚恩」と、伏拜んだる四苦八苦。不便と奥方濡衣引立て、「大悪人の兵部なれども、それには染まぬ勝頼が孝心、知らぬながらも親子となりし縁あれば、濡衣を親里へ返すがせめて手向草」「ホヽ、尤なる母人の御計らひ、兜の事も捨置かれず。今腹切つて死したる勝頼、親と一つでない言譯、忠義の仕様は濡衣が、心次第」と死を止める、詞にさすが死なれもせず、「御意に隨ひ法性の御兜、命にかへて取りかへさん」「ホヽ、あつぱれ出かした。此義作、猶も姿を下賤に扮し、義晴公を討つたる敵、草をわかつて尋出し、其時こそは勝頼と、立返つて御對面」と、早立出づれば信玄聲かけ、「義晴公を害せしは、四海を望む叛逆人、中々容易き敵にあらず。特に手練の飛道具、いまだ日本へ渡らぬ兵器、譬ていはゞまつ此

子を他家に育つるは、智謀の一つと奥にも語らず、不通にやつたる其先へ、我手を廻して育てし箕作。慮の圖をはづさず、主となしたる己が子に、自然とかゝる今日の災、因果の廻り來るとは知らず、己が忰が身がはりに、大恩請けし主人の子の、行方を捜して連歸り、又殺さんとはかる人外め、國賊とやいはん人面獸心、天の御罰思ひしれ」と、扇を取つて丁々々、はつたと蹴するゐし信玄の、詞に知つたる我子の身の上。常「かゝる野心の者とも知らず、忠義一途の侍と、思うたが面目ない。それに付けても此蓑作、信玄樣の御子とは、知つてか但し知らずにか」勝「其儀は我を育てたる、乳母が疾より物語。又父上にも是までに、忍び〳〵の御對面」常「スリヤ稚い時より百姓の、家に在りしも父御のお指圖。とは言ひながら系圖正しき武士の、弓箭の業は目にも見ず、身は鋤鍬の泥まぶれ、憂にやつれしその姿、今改めて親子の對面、衣類大小早々持て」勝「まづ暫く」と押しとゞめ、勝「京都の武將義晴公、敵なく討たれ給ひしより、父を始め諸大名へ、疑かゝる今此時、夫故にこそ勝頼に、腹切らせしも父の言譯。いまだ立つとも立たぬとも、知れざる中に某が、又勝頼と立歸らば、彌疑ひ一身に、とゞまり難き此館。身を民間に育つを幸ひ、此身此儘蓑作」と、白洲へおりて簑と笠、世に降る雨は凌げども、我身にかゝる横しぶき、洩れて姿もぬれ衣が、始終を聞いて覺悟の刀、隙さずとゞむる強氣の

又切付くれば身をかはし、無刀のあしらひ手練の切先、危く見ゆる後の障子、兵部が髻ぐつと引寄せ一刀、さすが痛手に七轉八倒。こはそも如何にと常磐井御前、障子さつと引明くれば、血刀さげて信玄公、悠々然と立ち給へば、はつと奥方簑作も、身を謙り恐れ入る。信玄一間をしづしづ立出で、「勝頼が最期にも出合はず、今又兵部を手にかけし某が所存の程、嘸常磐井の不審ならん。ヤア〳〵濡衣、言付置きし物はやく〳〵持て」ハット答へも涙ながら、夫の血汐に染なす片袖、なく〳〵御前へ指出せば、信玄御手に取上げ給ひ、「十七年の春秋を、我子と思ひ暮されし勝頼こそ、夫なる兵部が實の忰、御身と我が血をわけし、忰といふはあの簑作、改めて親子の對面致されよ」と、思ひも寄らぬ詞に恟り、「スリャ腹切つた勝頼は我子でなく、此簑作が眞實の」「ヲ、其證據は此血汐」と、御佩刀の血片袖に、押しあて〳〵押しぬぐひ、「是見られよ此血の、外へも散らず合體せしは、紛れもなき親子の血筋。十七年以前勝頼誕生せし砌、其板垣も一子を儲く、其子が面ざし我が忰と、似れば似る物生寫、見分け難きが彼奴が悪念、人知らぬ間に摺りかへ置き、己が忰を主人と崇め、主人の胤を我子となし、己が手にも育てずして病死と僞り、信濃の國の片邊へ、一生不通にやつたる事、天眼通は得ざれども、即座に知つたる此信玄。憎き逆心、一分だめしと思ひしが、今戰國の時にいたつて、人の子を我子とし、我

はつとばかりに腰もぬけ、胸も張裂くうろ〳〵眼、「拙者めが心當の事あれば、たとへ如何樣の事ありとも、必ず聊爾の出來ぬ樣と、申置いた兵部も待たず、天にも地にも懸替なき、大事の若殿殺して仕舞ひ、泣いて濟むか悔んで濟むか。エヽ言ひ甲斐なしとも、胴慾とも、いうて返らぬ此有樣。いたはしや殘念や」と、拳を握り齒を嚙みしめ、五臟を絞るばかりなり。「ヤアごくにも立たぬよまひ言、泣きたか緩りと跡で泣け」と、首提げて村上は、旅宿をさして立歸る。跡見送つてうろ〳〵と、身の納りをみの作が、「申しお侍樣、私はもうお暇申します。マア人に何の合點もさせず、何やら好い事がある、おれ次第になつて居いと、無理やりに駕へ捻込み、連れてござつた此屋敷、さつきにからの樣子を聞けば、私を身がはりにするのぢやげな。何所の國にか滅相な、人の首を斷なしに切らうとは、慘い氣なお侍樣。畢竟身がはりが遲なつて、間に合はなんだりやこそあまの命。ヲヽどうやら恐ひなしか、首筋元が冷りする。ヤレヤレし怖や恐ろし」と、ぞよ髮立てて立出づれば、「ヤァ一大事を知らせ、其分に歸されず。不便ながらも覺悟せよ」と、切込む刀かいくゞり、鍔元しつかと片手に握り、「ハテ身代を遣うたといふではなし、正眞の首渡したを、誰が知つたとて何の大事。そしてマア人の命を澤山さうに、瓜か茄子切る樣に。お赦しあれ」と突放され、「ヤア土ほぜりに似ぬ不敵者、彌助け歸されず」と、

かゝる事ともしら洲の内、あやしの辻駕えいさつさ、跡に續いて板垣兵部、老の心もせき立つ足元、「ヤレどめつさうな旦那殿、マア一里ぢや、マア半道ぢや、急げ〳〵と息もさせず、上の諏訪から十七八里、夜通しの早追、極の駕賃、お心付はお心次第、結構さうな旦那殿、酒手も定し結構な、お金ずつかり下さりませ」と、汗押拭ふ其中に、兵部は切戸の鍥しつかり、「駕代もくれう、酒手もくれう、此方へ來れ」と遣り過して大袈裟切。「ナウ悲しや」と迯出す相肩眞二つ、二人をしとめる刀の音に、恟り驚く駕の垂、開けて迯出る簑作が、「アヽ申し〳〵、私は御領分に住む百姓、博奕は打たず喧嘩は嫌ひ、成敗にあふ科はない、御赦されて下さりませ」と、齒の根も合はず顫ひゐる。「アヽ音高し〳〵、御身の上に氣遣なし、必ず騷ぎ給ふな」と、座敷へ伴ひ窺ふ中、奥方一間を轉び出で、「ヤレ板垣か、遲かりし」と、跡は涙に取亂す。「ホヽさぞお待ちかね。併し御用の品も首尾よく調ひ、只今同道、御悦び下さるべし。奥樣、申し常磐井樣」と、いへど答もなき入る母、「ハテ心得ぬ御有樣、何にもせよ、委細の譯もおつしやらず、泣いてござつて事濟むか。勝頼樣は何處にござる」「ヲヽ其勝頼に逢はしてくれん」と、首提げて立出づれば、「ヤア、こりや若旦那の御首。すりや早御最期遂げられしか、ハアヽ」

容赦下さるべし。是までの御養育、御慈深かりし身は盲目の淺ましや、軍慮に秀でし家に生れ、戰場のかけ引叶はず、遠矢はもとより打物は、漸く刀を杖につき、我家の內を探廻る、甲斐源氏の嫡流たる、武田四郎勝頼と、言はれる是が武士か、よくも武運に盡果てしと、思へば此身に倦んじ果て、今日や切腹、明日や自害と、每日々々刀を手に、取上げは上げながら、思へば深き母の大恩、我先立ちなば亡き跡にて、さぞ御歎き御物思ひ、逆さまな追善供養、受ける不孝の勿體なく、存へ在りし今日只今、親子の緣もあさがほと、共に散り行く御名殘。ヤイ濡衣、我最期を歎かずとも、母に力を付け奉れ。さは言へ、目界の見えぬ身を、朝夕心の樂しみに、暮した其方が胸の內、不便や便もあるまじ」と、淚呑込む手負の苦しみ、見るに悲しさ濡衣が、「つい假初のお障より、見えぬ御目をあけ暮に、苦に病み給ふがおいとしく、どうぞ御目の明く樣と、御符御札もあらゆる神、跣足參りのお百度にも、叶はぬのみかお命まで、今を限りとなつたるは、神も佛もない事か」と、淚の限くどき立て、くどき立つれば奥方も、「かかる憂目を見まいため、心盡した兵部さへ、今に歸らぬ恨めしさ、思ふに違ふ憂世や」と、手負にひしと抱き付き、流涕こがれ伏沈む。「ヤア聞きたくもないよまひ言、早首刎ねてくれんず」と、刀するりと拔放せば、「なうコレ今が別れか」と、悶える奥方濡衣が、歎きとゞむを

しをるゝばかりなり。勝頼は氣色を正し、「コハけしからぬ母人の御仰せ、死を恐れて館を出でなば、後の嘲り家の恥辱、武士の命は義によつて輕しと申す。只初より亡き身ぞと思召し諦めて、命のお暇給はらば、猶此上の母の御慈悲、お願ひ申し奉る」と、命惜しまぬ健氣さに、いとゞせきくる涙を止め、「スリヤ此母が是程に、心を砕くに承引せず、腹切るか。もう此上は止めはせぬ、われより先に此母が自害」と、指添押取れば、あわてとゞめる濡衣に、又取りすがるむざんの目病、「申し母人、段々誤入りました、お詞に隨ひ此館を」「スリヤ聞分けて落ちてくれるか。「濡衣も其心か」「アイ〳〵、必ず聊爾遊ばされて下さりますな」「ホヽ聞分けてさへたもれば母も嬉しい。斯ういふ中も心せく、サア〳〵早う」と勸められ、是非もなく〳〵立出づれば、「ヤァ勝頼を落さんとはのぶとい巧、村上が見付けたからは一寸も動さぬ、爰へ引出し一討」と、かけ寄る先に立塞がり、「コレ〳〵、槿のしぼまぬ中に討うとは」「ヤアしぼまぬかしぼんだか、脈の上つた死人花、是でも生きるか生きて見るか。サア〳〵どうぢや」と、槿の花を目先へ突付け〳〵、突付けられて常磐井も、何とせん方なき身ぞと、思ひ切つて突込む刀、「ナウ悲しや御切腹」と、叫ぶ濡衣、驚く母、「ヤレ早まつた生害」と、二人左右に取付いて、前後正體なき沈む。勝頼苦しき息をつき、「申し母人、お詞に背きし段、眞平御

えければ、「アヽ申し〳〵、まだ權はしほみは致しませぬはいなア。いき〳〵と今を盛のお身の上、切腹とは情ない、どうぞ助ける仕樣はないか」と、止めても止らずせり合ふ中へ、母はかけ出で、「ヲヽよう止めてたもつたなう。最前來りし使者の樣子、聞いて覺悟は理なれども、そなたを助けうばつかりに、心を碎いて居るはいなう、母が心を無にするのか」「ハヽアこは勿體なき御詞、須彌大海に比べても、及びがたなき母の大恩、さら〳〵無下には致さねど、權の限りの命、隙取つては使者の手前」「イヤ苦しうない大事ない。そなたに寸分違はぬ身がはり、慥にあると板垣が、館を出でしは昨日の朝。スリヤもう戾るに間もあるまい」「イヤ申し奥樣、板垣殿が其身がはり、連れてさへ歸らるれば、勝賴樣のお命に、さゝはりはなけれども、若し又それが違うては」「夫も分別して置いた。濡衣そちや勝賴と不義してゐるな」「エイ」「いや呵るではない此母が、今改めて女夫にする」「エヽ、すりやあの賤しい私を」「ヲヽ賤しうても貴うても、女は夫を大切に、思ふが直に氏系圖。目界の見えぬ勝賴を、身にかへて大事にかける、如才ない氣を見込んだ故、大事の子なれど其方に預ける、連れて此家を立退け」と、思ひがけなき詞に惘り、「アノ勝賴樣を」「合點がいたか、花がしほむと悲しい別、早ういけ、疾う往け」と、いふ中若しや權の、しをれやせんと伸上り、見やる花より見る母の、姿

鳥、無慚なりける姿にも、武士の角立つ角前髪、袴の裾も長廊下、探る刀の手前さへ、面目もなき其風情。「ナウ勝頼様か、おいとしや」と、縋り付いて泣居たる。「一筋な女氣に、悲しいは道理々々。只因果なる我身の上、適弓馬の家に生れ、弓矢打物取る事さへ、叶はぬ不具と成下り、此儘無念な死をせんより、侍らしう腹切るが、弓矢神への身の言譯、此比母の物語、其時覺悟は極めて居れど、不具になつても子の命、助けたう思召す母上のお心づかひ、無下になすが勿體なさに、今まで命延ばはれども、今村上が使者の樣子、聞いてはどうも生きては居られぬ。目界の見えぬ勝頼を、大事に思うて長々の世話、いかい苦勞をしてたもつた。嬉しいとも過分とも、禮は未來で〳〵」と、跡は得言はず見えぬ目に、涙を隱すいぢらしさ。濡衣わつと聲を上げ、「恨めしい勝頼樣、此館へ奉公に、來初めた日からお姿を、可愛らしいと思うたが、縁と因果の初にて、お主樣とも御主人とも、辨へ知らぬ拙い筆に、心のたけをいは本の、神の結ぶのお情に、嬉しい枕をかはした時、未來までもとおつしやつた、其お詞が誓紙ぞと、樂んで居るものを、お前ばかり死なうとは、慘いつれない、胴慾」と、我身をとんと勝頼の、膝に打臥し泣沈む。「ヲヽ其恨は尤なれど、親の許さぬいたづらなれば、どうではかない花の縁、もう槿もしぼむ時分、隙入りては恥の恥、泣かずと其方は次へ行きや」と、早切腹と見

間隙なしの無雑作に、拙者がたつた一打」と、立上るを押留め、「斯様申さば武士の、身にあるまじき卑怯者、未練者とも思さうが、何を包ん勝頼は、諏訪明神の申子にて、神に御苦勞かけ奉り、儲けし子なれば私に、殺すも神へ恐れあり。勝頼が命、元へ戻し奉ると、諏訪明神へ代參を立てたれば、せめてそれが歸るまで、暫くお待ち下されかし」「ヤアあまちやらな、其代參何時戻らうやら知れざるを、べん〱だらりと待つ事ならぬ」「イヤさのみ夫程隙取るまじ。遲うて今日の暮までは」「ヤア此永の日を待つ事叶はぬ」「然らば未の上刻まで」「夫も叶はぬ」夫ならせめて二時の、用捨は武士の情ぞや」「ハテ雑魚鰯を直切る様に、何のかのとどびつこい。夫程延べてほしくば、暫しの用捨はしてくれん」と、庭に飛下り垣根の槿、引きみしつて床の間の、花生へ捻込み押込み、「コレ此槿の萎むまでは宥免致す、花がしぼむとそれが寂滅、いやと言はさぬ割符の一本。先それまでは奥で休息、御馳走には信濃蕎麥、お手打が我等好物、花鰹より勝頼の首、早く賞翫致したい。イザ奥の間へ案内」と、いふに否とも槿の、日影待つ間の命ぞと、思へば胸もいた垣が、早う戻つてくれかしと、夫を心の力草、村上を誘うて、一間へこそは入りにける。始終の樣子物かげに、聞いて袂もぬれ衣が、今は恨みを槿に、いはん方なき憂身やと、聲をも立てず忍び泣、洩れ隔てたる唐紙を、明けても明かぬ目なし

において敵も知れず、今日に締まる我子の命、何とせん方なき中に、ナウ持つべき者は忠義の家來、板垣兵部我を招き、お氣遣ひし給ふな、勝頼公に寸分違はぬ御身がはり、兵部が存じて罷在れば、今日中に連れ歸らんと、館を出でしが妾が樂。それ故兵部の歸りを待てども、昨日にも咋夕にも、今に於ていなせのないが、心がかりにありつれど、神のお告に何疑ひ、兵部の歸りも頓てであらう。そちも案じな濡衣」と、御悦びの折からに、お側仕が手をついて、「御上使として、村上義清樣お越なり」と、聞いて奥方涙ながら、「早上使のお入りとや、心當の兵部も戻らず。ハァイヤこれ濡衣、和女は次へ往て休息しや。上使への返答は自が胸にある。サアいきや。ハテ立ちやいの」と、仰せに否とも濡衣が、是非なく一間へ行く跡へ、のつさ〳〵と入來る、上使は聞ゆる村上義清、疊ざはりも荒くれ武士、いかつがましく座に直る。奥方遙に手をつかへ、「甲斐と信濃は國ならび、其信濃にござつた村上殿、今は遙々都より、御上使とは御苦勞」と、いふに村上打點頭き、「成程以前は隣國の好、心安う致せしが、夫は內證、只今は上使の役目、仔細申すに及ばず、信玄とくと合點の趣、勝頼の首お渡しなされ、受取らん」と、事もなげなる上使の權柄。「成程其儀は夫信玄、わらはに申付置きし故、兼て覺悟はしながらも、今はの際に是がマア、悲しうなうて何とせう。親子此世の一世の別、心用意も致させたい」「ヤア首討つに何の用意、手

頭かく助とちめんぼう、おらは何にもしら洲をはく兵衛、箒かたげて迯げて行く。「よしなき事に隙取りし、さぞ奥樣のお待ちかね、濡衣只今歸りし」と、一間に向ひおとなふ聲、「ヲヽ濡衣か、さぞ苦勞」と、障子ひらいて常磐井御前、思ひなき身の思ひ子を、思ひ侘びたる御氣色。濡衣此方に手をつかへ、「上々樣に苦はないものと、思ひの外勝頼樣のお身の上、降つて沸いたる御災難、お案じは理樣、達者なお身でもある事か、お目の惡い若殿樣、もしもの事があるならばと、思へば身も世もあられぬ悲しみ。悲しい時の神祈りと、諏訪明神へ參りしも、今度の御難儀免れさせたび給へと、重き願ひも叶はぬ告か、切れて落ちたる鈴の綱、思はずはつと取上げて、能く〳〵見れば勝頼樣の、お年に違はぬ命の釣緒、十七歳の男息災延命と、書いてありしも神のお告と、嬉しさ餘る鈴の綱、是見給へ」と取出し、見せるも見るもうち莞爾、「ヲヽそれは嬉しや悦ばしや。切れて落ちしも和女の眞實、神も納受ましく〳〵て、勝頼が身にさゝはりない、諏訪明神の御神託。是に付けても京都の武將義晴公、何者とも知れず、飛道具を以て害せしより、諸國の大名心區々、我人心疑ひ合ふ。中にも夫信玄に疑ひかゝる身の言譯、一子を切つて出すべしと、契約ありしは武士の意地。されども御前のお情にて、君三廻忌の其中に、敵の在所知るゝならば、勝頼も助けよと、深き惠の立つ月日、早三廻忌も事濟めど、今

とふの菅簑打ちかたげ、さらば〳〵と諸共に、口にいはねど胸と胸、知らせ合うたる曲者ども、別れてこそは三重立歸る。死は武士の常ぞとは、常の詞と思ひ子に、今ぞかゝれる甲斐國、武田入道信玄と、身は釋門に入りながら、武門花咲く庭の面、落葉かく助は兵衛が、ひきずる箒打水に、いとゞ館はしめやかなり。「何と角助、何かは知らず昨日から、一家中がひそ〳〵と、夜の目も寐ずに走廻る、其譯は何だと思へば、京の大將義晴樣とやらを、誰とも知らず殺したげな。それで國々の大名衆が、イヤ〳〵おりや殺さぬ、知らぬといつて潔白を立てられたげな。そこでおらが旦那も、其潔白を立てると言つて、それで館が騒ぐげな。其潔白といふ物は、どんな物だそちや知らないか」「何だ潔白をわりや知らないか、イヤこいつ文盲な奴ではある。潔白を立てるといふは、おらが小半酒を立てると同じ事で、潔白振舞と云つて、お大名には節々ある事。おらもちよこ〳〵潔白喰つたが、中々輕くてうまい物。したが鰒汁と同じ事で、當てらるゝと命がない。わいらも命が惜しいなら、誰が潔白を立てべいとも、必ず喰ふな」と物識自慢、とつても付かぬ下々の、咄も物のしらせかと、戻りかゝりし濡衣が、聞いて案じる胸撫でおろし、「コレ〳〵二人の衆、下としてお上の取沙汰、わしが聞いては大事なけれど、若侍衆の耳へ入つたら、こなた衆の爲にならぬぞ。掃除が濟んだら勝手へござれ」と、聞いて悔り

て、人をためす心の底、問はねど聞かねど、大望ある人と見た。品によつたら賴まれませう、が此横藏も、其許樣の器量を見立て、賴みたい事がござります」「ホヽウ小賢しくも申したり。主從は一體、主は家來を賴み、家來は主を賴むならひ、汝が賴みの仔細は如何に」「即ち是に」と、懷中より一卷を取出し、「老人是に血判がして貰ひたい」「ハテ思ひ合つた賴ぢやな、汝も」「御邊も」「かはらぬ大望」「身は其方を家來にする氣」「身どもは御邊を家來にする氣」「どちらへどうとも決せぬ中は、胸中を卷込んだ此一卷、滅多には打明けられぬ」「此方とても此胸の中、開かぬ中に返事が聞きたい」「身が返答より其方が、住所は何國、ソレ聞たい」「イヤ只野山を住家とすれば、住所とては定らず、とゞまる所は天が下」「ムヽ面白い、よし所在は聞かずとも、一旦我目にかゝつた上は、雲の裏でも尋ねさがし、味方に付けるは折があらう。天が下を志す汝が望も、某と同腹同性、我も定めぬ旅の空、志す方は六十餘州、雨宿りする天が下、人目を凌ぐ、雨具をくれん」と、著たる菅簑ぬぎ取つて、「七重八重花は咲けども山吹の、みの一つだになきぞ悲しき。重て逢はう」と投げやれば、「ムヽ天晴餞別、受けました。手前も寸志の置土產、返辨申す」と力石、ぐつと引上げ投付くれば、心得たりと受留めて、「慥に落手仕る」「ホヽウ御邊の力量も試み申して先安堵、再會々々」再會するは此簑を、印にあふは七重八重、

一七日參籠の大願、いまだ滿てざる内なれば、一命を差赦す、餘人にかやうの狼藉せば忽ち絶命。面魂に見所ある奴、性根を改め、其首の胴に付いてあるやうに、愼しみをれ」と和らかに、生れ付いたる大名風、供人引連れ悠々と、心殘して立歸る。「ア、ひやいな事、命一つ拾うた。是から博奕場へ行つたとも、此ふまんでは埒が明くまい、一服呑んでいんでこまそ」と、力石に腰打ちかけ、摺火燧取出し、信濃烟草をすつぱ／＼、すつぱの車遣者、どや／＼と社内に入り、横藏を取廻し、「わりや此力石の法知つて居るか」「ヲヽ知つてゐる、此石を上げる覺があつて、腰かけたが何とすりや」「ハヽ／＼、己に千手觀音の手があつてもならぬ／＼。石はさて置き、おいらが相手になつて見よ」と、兩力より小腕取ればぐつと捻上げ、「あまい事すなやい」と、右と左へ踏みのけ蹴のけ、後へ取付く勘八が、首筋摑んで引廻し、宙に提げ二人が中へ人礫、こりやたまらぬと三人が、面も體も砂まぶれ、はふ／＼逃げて立歸る。「エヽ弱い奴等が、力石／＼と仰山にぬかせども、手毬程な此小石、まつと居つたら上げるのを見せうに」と、兩手にひん抱きかる〴〵と、ぐつと上げたる石の下、穴を穿つてぬつと出る、白髮交りの有髮の老人、身には菅簑異相の體。さしもの横藏ぎよつとして、下界の人か仙人かと、顏をながむるばかりなり。「若者力量見屆けた、此一卷に血判せい」「ムヽ此地の底を住家にし

がせしめる奉納の、太刀脇ばさみ駈出す向ふへ、長尾の家來落合藤馬、供人引連れ追取廻し、「最前より窺ふ所、御主人の奉納の太刀、盜取るには仔細ぞあらん、白狀させん」と飛かゝるを、引つぱづして拔手も見せず、首はころりと落合藤馬。スハ狼藉と取りまく家來、博奕打には似合はぬ横藏、薙立て〳〵追うて行く。折から出合ふ長尾三郎、人音太刀音心得ずと、窺ふ足元落ちたる首、御燈の光に能く見れば、家來落合藤馬が首、ハット驚き邊を見廻し、思案廻らす横藏は、血刀提げ立歸り、心がかりは以前の首、後日の邪魔と暗がりを、さがせば景勝聲をかけ、「汝が尋ぬる心の一品、今神前で某が、拾ひ取つてコレこゝに」と、差出す首を見て、悔り、返答一句も先へは出でず、跡に家來がばら〳〵〳〵、「奉納の御太刀を盜み、落合殿まで殺せし曲者、最早遁れぬ百年め、腕を廻せ」と追取りまく。「待て〳〵者ども、眼前の家來の敵、身が手にかけん」と社燈の光り、顏つく〳〵と打守り、落合藤馬が首討つたる手の中、多勢を相手に薄手もおはぬ力量を持ちながら、盜賊と聲をかけられ、刀を投出し、誤入つたる面付は、まんざら理非の辨ない奴でもない。こりやおのれ出來心ぢやな、武士の家來を手にかけし憎い盜賊、只今成敗するやつなれども、命は助けた」「エ、すりや御赦免下さるゝか」「ヲヽ長尾三郎景勝、身が手を下して討つべき首は、天が下に一つか二つ、己ごときに日はかけぬ。此社に

ひの國と、詞殘して鈴の綱、押戴いて濡衣は、嬉しさ足も地に著かず、悦びいさみ立歸る。横藏は跡見送り、「餘所はない命でさへ、神の納受で生きるのに、生きる事はさて置き、胴取りやくさる、はればかゝれる、もう今夜の資本がない。是からは明神樣をおれが仲間の胴頭にして、此箱の賽錢を胴錢、マア試に神樣を相手にして、三つぼの廻りして見やう」と、ぐわらりと打明け、「オ、ざくで是程あれば、今夜の資本は樂々。サアマア神樣から振らしやませ」と、張るも投げるも我一人、三つぼのさいをめつたぼり、「おつと神の四苦八苦、一廉は立棒で受けまする。是からおれが親の番、サア〳〵神樣張らしやませ。ハヽアびり十にねだ切お出でか、妥を一番當てたいが、南無骰子明神なり給へ、當り給へ」と、ぽいと投ぐれば、でつくの一、「サア仕てやつた」と、攫へる賽錢、「神樣も一文な、是からは拜殿、燈籠、神樂太鼓、なんなりとかたを見ねば錢貸さぬ。譬へ貸しても、正直をおもにする神樣なれば、よもやぶさは打たしやるまい。負けたと思うて神腹を立てさしやんな、全く我等暗骰子は遣かやせぬ。イヤはや、どういうたとて、あへんと一つ打たしやれぬ、結構な神樣」と、錢のありたけ財布へねぢ込み、「コレ盜みやせぬ、相對づくで勝つた錢、勝ちついでに何なりと、せしめてくれん」と、邊うそうそ、欲の眼に見付ける太刀、是幸ひの一資本と、拜殿に駈け上り、潛の鐵物捻切り〳〵、己

いろ事でなくばおれとはどうぢや。アヽ味いこしつきぢや」と、とんと叩けば、「ヲヽ笑止、大事の〳〵お百度に、惡魔をさして貰ふまい。耳に諸の不淨を聞いて、心に諸の不淨を聞かず。祓ひ給へ、淸めて給へ」と、から手水、「コリャけうとい神道つかひ、堅い所が奥ゆかしい。コレ神樣は粹ぢや、ついちよこ〳〵と叶へ給へ靡き給へ」てんがういはずと信を取つて、祈る功德の神よりは、跡から口說く神樣もほつと草臥、「ヲット待つたり、ヲヽしんどや〳〵。佛の顏さへ三度といふに、神樣のお百度は、足も腰も拔け果てた。ちつと休も」と大石に、腰をかくれば濡衣は、一心不亂、是で丁どお百度の、數も大方榊を廐、大願成就なし給へと、伏拜み引く鈴の綱、切れて落つれば濡衣が、胸に當りし案じ顏、橫藏傍へ立寄つて、「コレ何とさしやつた姉樣」「サイナ私がお百度は、大事の〳〵お主樣の命乞、鈴の綱の切れたのは、お命のないと云ふ、明神樣の知らせか」と、淚ぐめば、「エヽ氣の弱い、さすがは女子」と鈴の綱、手に取上げ、「こなたの命乞するお主は、男か女か」「アイ殿達でござんす」「それなら吉左右、此鈴の綱に書いてあるは。十七歲の男子息災延命とあるからは神も納受」「それはマア〳〵お嬉しや、お主のお年も丁ど十七」「ヲヽよし〳〵。此鈴の綱持ていんで戴かさしやれ」「ア、成程、好いお方にお目にかゝつて、お命乞の願成就、重て御緣もあるならば此お禮」神に願ひのか

ぬおさむが挨拶で骨折損、もう此上はやけの勘八、權六、九介も、鳥井前で目で一杯やりかけう。サさ來い〳〵」と鼻唄で、鳥井の前へと急ぎ行く。夕暮時は參詣の、人も途絶えて神前の御燈の光森々と、神寂渡る其景色、年も漸十七か、八ちく草履も足輕に、見ゆる所體もぽつとり風、武田の腰元濡衣が、何か願ひは鳥居より、かざす榊に數取つて、お百度參り大麻も、引手に神や靡くらん。跡から憎い風俗の、大道はたかる鳥居先、信心しら砂踏付けた、懷手して神參り、「姉さん能う參らんすの、おれも明神せぶりに來た、お百度の連になりやんしよ」「是はマア〳〵、どなたか知らぬが、幸な道連、最う日も暮れかゝつて、女一人は心細い」「さうであろ〳〵。自體マア日暮から、大膽なけんさい樣ぢや。マア一度、鳥居から百度は大儀、姉樣しんどか、手を曳こかえ」「ハテしんどいとて大事の願、身をこらさいで好いものか」「ム、身をこらすとは戀であろ」「イエ〳〵そんな事ぢやない」「それなれば好い著物が、欲しいといふ願ではないかや」「何をわつけもない事ばかり。さうおしやんすお前の願はえ」「おれが願は商賣の四つぼ、此間腐り續け、さしばかりになつたから、思ひ付の百度參り。如何樣、姉樣の足の輕さは、よく〳〵の願ひと見えた。コリヤ連立たるゝものぢやない、其樣に歩かしやるので、アヽ好もしいもよの邊がすれませう。マアそろ〳〵歩いておれが言ふ事を聞かつしやれ。

垣兵部、供人引連れ參詣に、此體見るより家來どもに引分けさせ、「始終の樣子聞いたるが、社法を背きし不屆とな、併ながら慈悲第一の御神なれば、法に行ふにも及ぶまじ。爰は身どもが簑作とやらんに成りかはつての詫、コリヤ若い者ども、侍が詞を下げる、了簡してとらせやい」「サアお侍の詫なれば、了簡したいものなれど、宮の掟があるによつての詫、身は信立の家來、畢竟わいらは簑作が訴人なれば、我領分へ連歸つて、訴人の科にきつと行ふ。サア何と了簡するか、否といへば言分あり」と、氣色かはれば三人が、「ア、申し〳〵、夫程におつしやる事なら、お宮守へは沙汰なし」と、言ふに悅ぶ簑作、「何方樣か存ぜぬに、お詫なされて下されて、有りがたう存じます」と、手を合はすれば、「ヲ、禮には及ばぬ、其代には、其方へ少し賴みたい事がある、旅宿まで來てくれまいか」「是は〳〵、由緣かよりもない私、お詫なされ下されて忝い。たとへさうなくとも、お侍のお賴、身に叶うた事ならば、御用の仔細、此處にて仰せ下さりませ」「ヲ、それは過分、去ながら、こゝは社內、參詣も多ければ、身が旅宿へ同道して、密々に咄したい。事によらば隙取らう、さう心得て大儀ながら步んでくれうか」「何がさて何所までも」「來てくれうや、重疊々々。家來ども、簑作を同道せい」と、かへりまうして板垣兵部、旅宿をさして立歸る。「エ、簑作めをゆすつて、酒買はさうと思うたに、いはれ

初、御神事の宵宮とて、商人、百姓、草刈の小童まで、お千度、お百度、絶間なき其中に、車つかひの簑作、馬場前に車引捨て立寄つて、「ホヽウ皆近在の知つた者ども、太郎よ、丑まよ、能う參つたな」「ヲヽ簑作、遲かつた」簑「さればおれも上諏訪まで、油粕つけて行て草臥果てた。ちつと休んで跡から往の」と、神前の大石に腰をかくれば、「コレ〳〵簑作、其石は明神様の力石とて、其石に腰をかくれば、其豪い石を上げねばならぬ」簑「サアさうぢやげな、けれど神は見通し、見て見ぬふり」「そんなら休んで下向しや、後に逢はう」と別れ行く。是等も同じ車遣ひの惡者ども、宵宮參りに肩臂を、いかつ聲で、「コリャ簑作、わりや此神前の力石の事知つて居るか」「ほんにさうぢや、たつた今も子供等がいうたけれど、あんまりしんどうさに忘れてひよつと」「イヤ忘れたとは言はれまい、昔から當社のならはし、腰をかくれば叶はぬ簑作、ナア勘八、九介」「ヲヽ權六がいふ通、其石上げい、上げにや宮へ斷つて、明神様のお神酒代を上げるか、サア〳〵どうぢや」と、石の手詰に簑作が、「知つて居ながらおれが麁相、二人三人かよつたとて、地放しもならぬ力石、どうぞ皆が沙汰なしに、下内で」「イヤ濟されぬ、上げねば宮へ引きずつて行く」「ヲヽさうぢや〳〵、日比から女たらしで、生じらけたしやつ面、踏にじつてこませい」「サア立て」「動け」と兩手を引つぱり、せちがふ折から、武田家の奥家老板

も、身動させぬ大事の女房、主君もなければ遠慮もない、指でもさゝば撫切」と、八つ橋かこうて突立つたり。「物な言はせそ、討取れ」と、抜連れ／＼切つてかゝるを事ともせず、夫婦諸共抜合せ、切立てられて村上左衛門、命が大事と迯行く跡、打合ひ切あふ刀の光、電光石火の間もなく、薙立て／＼　三重　薙立つれば、殘る大勢立つ足なく、頭わられて血は瀧つせ、迯廻るのを横なぐり、兵内隙さず後から、「直江やらぬ」と切る刀、ひらりとはづせば思はずも、家來を袈裟に切付けたり。これはと驚く兵内が、首と胴との生別れ、心地よかりし事どもなり。邪魔は拂ひし嬉しやと、悦び歎きの數々も、思ひは七重八つ橋が、渡りを得たる女夫連、サア此上は賤の方、再び廻りあふみ路や、敵もいつかはみの尾張、果は駿河の富士よりも、名高き君の御最期を、悔めど更に甲斐越後、不和なる中もみちのくの、直なる直江山城夫婦、忠義は代々に岩清水、清き流の木曾川や、夜半に紛れて出でて行く。

第二

惠は四方に隱れなき、下諏訪の神垣は、下照姫の御神にて、靈驗あらたにまします故、近國の貴賤、歩みを運ぶ賑はひに、きねが小鼓神樂歌、神慮もさぞと知られける、殊に今日は卯月の

いはれまい、敵の在所知るゝまで、我は都に押止まり、君の亡骸取納め、政道糺す身が役目、よもや違背はあるまい」と、己が悪事を白洲の内、身の誤りに山城之助、しを〳〵として手をつかへ、「賤の方を奪はれし我等が越度ゆゑ、主人景勝へ疑ひ掛りし申譯」と、刀の柄に手をかくる。「なう待つてたべ直江樣」と、八つ橋も轉び出で、「不義は二人が誤りなれば、お前ばかり殺しはせぬ、わしも倶に」と死覺悟。謙信聲かけ、ぐつと睨付け、「八つ橋と不義の樣子、悴が方より聞くやいな、勘當と申置きたれば、主從でもないうぬらがむだ腹、五十、百、切つたとて、かゝる大事の爲にならんや。うろたへをらば逆磔、兩人共に出てうせい」と、口と心は裏表、情の勘當有りがた涙、早退出と長尾入道、「君を害せし面體は知らねども、惡逆千里に響かせし、此鐵砲こそ囚人同然、某きつと預り置き、詮議の工夫は胸にあり。先夫まではおさらば」と、鐵砲提げ立上れば、信玄も諸袖に、禮儀は述べても顏と顏、不和なる良將勇將の、中を隔つる北條氏時、底意を見拔く北の方、浮む涙も手向の水、別れ〳〵て歸りける。夫婦も返らぬ御殿の名殘、是非もなく〳〵立出づる。村上左衞門義淸、横田兵内諸共に、手の者引具し立ちふさがり、「ヤアどこへ〳〵、義淸が心をかけたる其女、此方へ渡さばよし、異議に及ぶと目に物見せん、何と〳〵」と呼はつたり。「ヤア怖くもない義淸風、如何樣に吹かして

勝頼景勝を、殺すまでにも及ぶまじ。猶此後は自が、力と頼む晴信謙信。此鐵砲こそ詮議の種、あつぱれ敵を討ちおほせ、君の御無念晴してたも」「ハヽヽヽ、發明なれどもさすがは女儀、當座遁れを誠と思ひ、殺すなとは不覺々々、餘人は格別此氏時、いかにしても呑込まぬ、花と烏帽子に譬へし悴、ぜひ首討つて出すべし」と、何がな支ゆる邪智佞奸、たをやめ暫しと止め給ひ、「諸大名の鑑となるべき古老の臣、一旦番ひし詞は金鐵、などか僞りあるべきぞ。僞り飾る所存ならば、其儘にて歸さうや。さりながら、假令潔白立つるとても、我君の三回忌、追善供養終るまでは、蟲けらの命さへ、夫の爲には助けもする、況んや科なき二人の命、殺す基も敵のゆくへ、何卒三年が其内に、尋出さば助ける二人、夫も叶はぬものならば、討つて出すも世の掟、我身の掟は此通」と、二世と兼ねたる黒髪を、根よりふつつと押切り給へば、晴信烏帽子かなぐり捨て、「君の一字を蒙る某、姿ばかりは主君の供」と、指添拔いて髻拂ひ、「形をかゆれば名も改め、今より武田入道信玄と法名し、心はかはらぬ以前の晴信、忠義に忠義を重ねしと、思ひ込んだる一生の浮沈、膽にこたへし敵の在所、雲の裏に隱るゝとも、天地の間は獄屋の内、御心慮易く思召せ」と、我子の命黒髪も、切つて捨てたる勇僧の、其名も武田信玄と、云傳へしも理なり。氏時ほとんど笑壺に入り、「ホヽ左程の性根を見せずんば、謙信晴信とは

にもせよ、此場の大事にはづれし不運、自は元より、諸大名の疑ひ晴らす思案が第一。源家の忠臣土佐坊昌俊、僞りに誓紙を書き、誠を見せたる七枚起請、それは誰しも間々あるならひ、是はそれに事かはり、本心曇らぬ胸の鏡、磨立てたるしるしがなうては、身の上の曇晴れず、家を立てうと立てまいと、面々の返答次第、サア〳〵何と」と北の方、彼方此方を思ひやり、わつと泣きたい所をも、泣かぬはさすが大將の、奥ゆかしゝぞ見えにける。理の當然にさしもの二人、下ぐる額のしわよりも、眉に寄る浪胸に滿ち、暫し詞もなかりしが、何思ひけん武田晴信、すんど立つてかたへなる、紅梅一枝はつしと切れば、謙信も劣らじと、烏帽子の眞中さつと切る。晴信「御返答申すも恐れながら、昔が今に至るまで、惡事に與し家國を望み、叛逆無道の名を取るも、子孫に殘さん爲ばかり。それに引きかへ某が胸中、花物いはねどまつそのごとく、一子勝賴が首討つて、御覽に入るゝが身の言譯」「ホ、謙信とても斯くの通り、悴景勝が行方を尋ね、善惡たりとも首討つて、御渡し申す證據の烏帽子」二人「勝賴にも、景勝にも、心を殘さぬ我々が、北の方への申譯、此上にも御批判あらば、仰聞けられ下され」と、雙方詞かはさねど、割符を合せし忠義と忠義、たをやめ御前涙ながら、「ヲ、心底見えた此二品、かけがへもなき兩家の繼木、花を惜しまぬ心の誓言、是に上こす事あらうか。其所存を見る上は、最早

氏時早う」とかひ〴〵しく、仰受けつぐ次の間へ、走入るより相圖の鐘、響に連れたる御殿の内、法螺貝太鼓に手を合し、挑燈松明一時に、四方八方圍みしは、遁がたなき有樣なり。かゝる騷の奥庭より、目ばかり出した大男、晙の方を引立出で、駈け行く後に三郎景勝、「曲者待て」と呼はる聲、心得眉間に打込む手裏劍、遁るゝ曲者强氣の三郎、無銘なれども小柄の手裏劍、是を證據に一詮議と、逸足出して追つて行く。襖をさつと武田晴信、君の大事と心も空、勢ひ込んでかけ來れば、引續いて薙髮の僧、「長尾入道謙信、只今上洛仕る」と、不和なる中は物をも言はず、かけ入らんとする一間より、氏時向うに立塞がり、「在番の武田晴信、君御落命の場處へは參りもせず、納め過ぎた出仕顏、めつたに奥へは通さぬ〱。謙信とても左のごとく、子故にかゝる身の疑ひ、行方知れざる三郎が、脱捨置きし素袍の烏帽子、御殿に置くは武士の穢、燒捨てて仕舞はやれ」と、わくる詞も一物二物、三方論議の折からに、北の方たをやめ御前、鐵砲携へ出で給へば、皆々敬ひ奉る。「珍らしや謙信、思ひ寄らざる我君の御最期より、總て疑ひかゝるといへど、取分けて武田長尾は兩執權、天下の政道も執行ふ身を以て、久久上洛せざりし越度。又大膳太夫晴信は、今日に限つて出仕の怠り、日比の不和も我君を、人知れず害せんと、疑ひかゝる兩人を、其儘に差置いては、女ながらも身の誤り、心に覺えない

語れ聞かん」と仰せ有る。「ハア、是れこそ異國において鐵砲と異名を呼び、玉を仕込んで放す音雷霆のごとく、當る事速にて、戰ひに用ひる第一の兵器なりしと聞いたるばかり、未だ此地にて見ざりし所、卽ち先月六日の夜、烈しき難風吹起し、大船小船いふに及ばず、中にも唐船と相見え、種が島の浦にて破損せしが、濱邊に殘りし此鐵砲、持參致せし奉公始め、今より是を手本として、戰場にて用ひ給はゞ、敵は殘らずみなごろし」「ホヽ左程の德ありといへど、用ゆる事を知らざれば、取得ざるも同じ事、さいふ汝が其鐵砲、遣ひ樣存じてをらば、我目通で傳授せよ、早く〳〵」と義晴の、仰にはつと新左衞門、辭する色なく手に取り上げ、君に向ふは憚あり、不禮は御免」と立直り、態と後を見せたる手の內。「コレ〳〵御覽ぜ、斯くも構へし火蓋の所、さす敵と見るならば、まづかうあれ」と引鐵に、どうと響きし大藥、狙ひ外さぬ義晴公、うんとばかりに息絕えたり。是はと驚く諸大名、「ソレ遁すな」と下知に連れ、取りまく家來を事ともせず、薙ぐり立てたる鐵砲の、手竝に恐れ寄付かねば、夫の敵と北の方、てうと打つたる長刀の、刃むねをけつて蹴上ぐれば、隙さず付入る石突にて、落ちたる鐵砲見やりもせず、巧も深き拔井戶へ、飛込む跡は亂口、心亂さぬたをやめ御前、「君の亡骸奥の間へ、敵の詮議は此鐵砲、逃隱るとも遠くは行かじ、四門を固めて取迯がさぬ、手筈を定め知らせの鐘、

は叶ふまじさりながら、我胤を宿しながら、今死んでは彌たをやめに義理立たず。髪は剃らねど尼法師、我愛著も是限り、身をば大事に平產せよ」と、打てかへたる御仰せ、落付く賤の方方も、今こそ晴るゝ悅びは、產まぬ前から若殿の、安產ありし心地せり。かゝる折から取次の侍罷出で、「西國方の武士と申し、御獻上物持參致し、次に控へ罷在る、通し申さんや」と伺へば、「御獻上とあれば苦しうない。早く通せ」と氏時が、下知の詞に賤の方、直江引連れ立ち給ふ。待間程なく白洲の內、袴の肩もきつとせし、眼中鋭き術有る人相、何かしら木の臺の物、恭しくもさし置きて、恐れ入りてぞ平伏す。「ヤアいつに見馴れぬ其方が、我君に御獻上とて、怪しき一品、まづ汝が生國は何國、假名如何に」と尋ぬる氏時、「ハア某は井上新左衛門と申して、卽ち生國は薩州種が島の住人なりしが、故あつて浪人致し、何卒昔に立返らんと、心ばかりははやれども、賴むべき主君もなく、無念の年月を送る所に、不思議にも此賜我手に入りしは、天道未だ捨てざる所、誰彼と申さんより、恐れ多くも義晴公を主君と仰ぎ奉らば、武士の面目これに過ぎじと、罷登りし新左衛門、君命じて召す時は、駕を待たずして行くと申せば、憚も顧みず、召に應じて御前へ推參、執成願ひ奉る」と、頭を下げて述べにける。大將一々聞し召し、「性根を見込み、召使ふ筋もあらん。シテ其方が持參の物、如何なる益に用ゆるや、

る北條氏時、直江が髻引摑み、縁板ににじり付け、「言語道斷憎くい不義者、縛首討つ、覺悟せよ」と、言ひも切らせず、「イヤなう其人に科はなし、心をかけしは自ばかり、よきに計らひ給はれ」と、覺悟の體に御大將、「身が手にかくる、觀念せよ」と、振り上げ給ふ刃の下、「ヤレ待ち給へ」と、たをやめ御前、賤の方を押圍ひ、「イヤ申し我夫、一朝の怒に其身を失ふとは、よくも御存じありながら、酒に長じ色に迷ひ、善なる事も惡と見て、御成敗なされては、國中に人種はござりますまい。賤の方の不義放埒、誠と見せて實でない事、此たをやめが見ぬいて置いた。サア打明けて給はれ」と、仰せも涙の顏を上げ、「御推もじの上は包むに及ばず、過ぎし比よりお目に入り、義晴公のお妾と、持てはやさるゝ其内に、君のお胤を身に宿せど、御怒の色目もなく、樣々の御勞はり、胸に釘針刺すごとく、お志が切なさ故、何にも知らぬ山城之助、無體な戀を言ひかけしも、不義者の名を取つて、君の御手にかゝらん爲、こらへて下され直江殿。恩と義理とに此命、捨つるは更に惜しからねど、よしない腹をかりそめにも、足利の御世繼と、敬はるゝ子を持ちながら、闇より闇に落すかと、思へど返らぬ我覺悟、情は却てお家の仇、一旦御不審かゝりし上は、只いつまでも不義にして、自ばかりを殺してたべ、賴上げます〱」と、洗ひ上げたる心の實、眞實見えて道理なり。やゝ有て義晴公、「ヲヽさうなうて

も芳しき、花の大紋たぶやかに、御前をさして入りにけり。言葉しがらむ唐糸の、心も直江山城に、繫がる緣の緣傳ひ、「八つ橋か」「直江樣、逢たかつた」と取付いて、跡は詞も雙方が、抱きしめたる障子の內、「八つ橋殿八つ橋殿」と、呼はる聲にびつくりし、馹け入るこなた山城が、袂にすがれば、「これはしたり、あれ程女中が呼んでゐるに、マアく行きや」と振切る袖、「エヽお前は賤の方樣」はつと赤面直江が手元、じつと引寄せ顏打ちながめ、「見ぬ唐土は知らねども、此日の本を尋ねても、又とあるまい男振、女のなづむ風俗を、見る度ごとに色勝る、峯の楓葉心あらば、たつた一言可愛というてたもいの」と、寄添ひ給へばちやつと飛退き、「イヤ御座輿も事による、御前樣は誰あらう、左大臣義晴公の北の方も御同然、殊に主人景勝へ預置かれし御身の上、見付けられたら一大事、眞平御免」と、立つを引止め、「スリャ何の樣にいうても」「不義はお家の堅い御法度」「ムヽ夫程堅い御法度を背き、八つ橋とはなぜ抱かれてねやつた」「エヽそれは」「サア斯ういへば表向、知らぬで濟ませし昨日の供先、恩を思はぬ其方の胴欲、わしが願ひの叶はぬかはり、八つ橋と不義の樣子、我君へ申上げる」「ハテ滅相な、それおつしやつては二人が命」「それ程怖くば、わし任せにしてサアおぢや」と、無理に引つぱる一間より、「不義者見付けた、動くな」と、聲あらゝかに義晴公、刀追取り出で給へば、續いてかけ出

つて、其後奥へ通るが作法」「ム、然らば其方は最前から」「イヤたつた今何もかも」「イヤ何が何と」「イヤサ、お二人のお咄の終る所へ參りかゝり、御挨拶もそれ故延引。御兩所御苦勞千萬」と、寄らず障らぬ景勝が、落付く詞に落付かぬ、破れかぶれと義清が、切付くるをかいくゞり、「ヤウ何科あつてお手討に」「イヤサ、謙信が子とは知りながら、つひに是まで手練を知らず、武藝の試み少しの差出」「ム、拙者が手の内試みあらば、など尋常の勝負もなく、子供童の切合同然、卑怯至極の左衞門殿、お望みあらばお相手」と、言はれてせき立つ村上が、廣言憎しと又切る刀、鍔元むずと引摑み、「是非知りたくば腰骨に、覺えられよ」とどうど投げ、膝に引敷く途端の拍子、切込む氏時受けたるさそく。北の方の聲として、「天晴頼もし三郎景勝。武藝の試み、氏時も義清も、見やつて嘸や本望」と、それといはねどしら化の、無念を鞘に納むる兩人、挨拶もなく立つて行く。「イヤなう景勝、其方の父謙信は、日外より上洛せず、樣子あらんと思ひの外、近々に上京との噂、我君にもお待ちかね」と、仰せに三郎頭を下げ、「親謙信が不行跡、御怒の色目もなく、慕ひ給はる有難さ、親子が面目是に過ぎじ」と、詞の半へ小姓ども、「出仕の樣子聞し召し、早う呼べとの仰付でござりまする」「ほんに自とした事が、お待ちかねに氣が付かなんだ。晴信の出仕にも程はあるまい、サア〳〵此方へ」と奥深き、主も家來

て御身の敵となる、賤の方の心底、黒い眼で見拔いて置いた、斯くいふ中も心がかり、早く館を遠ざけ給へ」と、口から出次第言廻せど、敏き御身は何もかも、呑込む奥より腰元ども、「殿樣の召しまする、いざ御入」といふ汐に、帳臺深く入り給ふ。義清の二字を守らぬ村上左衞門、はちくり返つて打通れば、氏時聲かけ、「ヤレ待兼ねし村上、サア／＼近う／＼」に額際、つき合ふ計に座をしめて、「昨夜しめし合せし通り、心をかけし賤の方、奪ひ取るは今宵の内。表門へは人目もあり、かねて用意のあの拔井戸、釣出す工夫もして置いた。この上望むは晴信景勝、不和なる中を幸ひに、二人へ焚付け同士打させ、甲斐も越後も我領分、親子とは言ひながら、謙信が胸の中、某が思ふ所存もあれば、邪魔にならぬはかの一人、心がかりの晴信景勝、仕舞うて取るが上分別、其片腕は村上義清」「ハア仰までもなく、存じの通り某も、元は信濃の領主なりしが、晴信謙信に切取られ、其許の情によつて、主從の約をなせし上は、再び信州へお歸しあらば、此上もなき拙者が悅び」「ホヽ、我望達せし上は、元へ納むる信濃の領主、氣遣ひあるな」と氏時が、當なき國の切取咄し、後に聞人のあるぞとも、知らず思はず見合す顏、「ヤア長尾三郎景勝、出仕致さば案内して、ナゼ奥御殿へ通らぬ」と、てつぺいひしぎにちつとも動ぜず、「ホウこは北條殿の仰とも存ぜず、出仕の時はまづ人並の所にあ

のお心づかひ、嬉しさ餘る願詣、何の怪我がござりませう。夫はともあれ、あなたは定まる御本妻、賤しい此身を上に立て、結構過ぎた御挨拶、やつぱりどう仕やかう仕やと、仰つて下さりませ」「是はあられもない、自殿様に馴初めてより、今において子を儲けず、朝夕祈りし甲斐ありて、お前にお胤を宿されしは、取りも直さず我子同然、殊に左孕は御男子のしるし、足しろの御世繼と、思ふ程猶あなたが大切、悋氣嫉妬は姫御前の、習ひといふも下々の、思ひ違ひし詞の裏、よしなき事を苦に病んで、若しもの事があつては、大事のお身のさゝはり、最前から聞もあれば、コリヤ八つ橋、奥へ伴ひお慰に、琴の組でも、ついまつでも始め、お心を引立てよ」と、殘る方なき御惠、伏拜む手に降る涙、何といはでの苔の露、曇らぬ底の水鏡、磨き合うてぞ入りにける。己が權威に案内せず、明くる襖もあらゝかに、入來る北條氏時、我慢の鼻も立烏帽子、御座の間に畏まり、「見ますればお女中ばかり、晴信も景勝も、未だ出仕致さぬかな」「ヲ、誰ぞと思へば氏時、知らせなければ何時の間に見えたやら」「イヤ御存じなくても此氏時、勤むる所はきつと勤むる。それに何ぞや、在番で候ふなどと、人前作る知行盗人、某同然に思召す北の方のお心入れ、いかに結構さばくとて、白い黒いのわかちもなくて、御前樣とはいはれますまい。誰憚らぬ御身にて、不斷お妾を上に立て、大切になさるゝ程、却つ

お暇給はり、誰憚らず女夫ぢやと、いはれるが互の樂しみ、無事で安産する樣と、神佛を祈つてゐる」と、聞く嬉しさは百倍の、心ときめく八つ橋が、「ちよつと〱」に山城も、下地は好なり御意はよし、手を引合つて乘物へ、無理に伴ふ折からに、早御下向と供廻り、出るも出られぬ八つ橋が、内と外とに氣遣ふ二人、「乘物參れ」と村上が、指圖に心得腰元が、明けて恟り戸をばつたり、あせる山城、呑込む左衞門、「コレサ腰元衆、御乘物を明けたり鎖いたり、エヽ聞えた、コリヤ其内に何者ぞ居るに極まつた、イデ改めん」と立寄るを、賤の方暫しと留め、「最前ちらりと見し所、此乘物を目蒐け逃込んだは慥に雛鳥、よし何にもせよ、其儘で連れ歸り、詮議は館でナウ山城」と、此場の難儀を助くる情、直江が心の悦びは、割つていはねど乘物の、内より洩るゝ有難涙、降つて湧いたる子寶の、行末長き下向道、伴ひ館へ 三重 歸らるゝ。咲分けし、梅と櫻の花よりも、爰に咲かせし室町の、庭も玉敷く奧御殿、義晴公の北の方たをやめ御前、身は本妻の儘なれど、君の寵愛淺からぬ、賤の方の懷姙を、御身にかへて御介抱、勞はらるゝも勞はるも、何れ劣らぬ品容、「イヤ何八つ橋、今朝から賤の方樣の、お顏持が惡い故、殿樣にもことなうお案じ。心がかりは昨日の供先、若しや怪我でもなかつたか」と、尋ねに兎角答さへ、我身の戀にからまれて、言ふもいぶせき胸の内、思ひを察して賤の方、「今に初めぬたをやめ樣

の下、髭顔ぴつしやり、立退く八つ橋、「コリヤ〳〵逃げても逃さぬ」と、しなだれ廻る後の方、折よく歸る山城が、走寄つて腕もぎ放し、「コレ村上殿、御酒機嫌か知らねども、女を捕へ、さりとは〳〵不行儀千萬、ちと御嗜みなされよ」と、いふに八つ橋小氣味よく、「お前の戻りが遅い故、夫は〳〵」「モウよい〳〵、委細は聞いた、何の村上殿が無理おつしやらう。ナウ義清殿、定めてそれは座興でがな」と、知つても知らぬ直江が風情、義清も底氣味惡く、「ナニ賤の方樣、未だ御參詣なさらずば、某御供仕らん。直江殿には是にて御休息」と、何がな追從。賤の方、「過つて改むる義清が今の一言、只何事も見ず聞かず、八つ橋直江は此所にて自が下向を待ちや。供は村上皆の者、サア〳〵おぢや」と立ち給ひ、行くも二人が戀中を、それと推して本堂へ、打連れてこそ詣でらる。跡は嬉しき八つ橋が、見かはす目元渡りに船、首尾好い逢瀨と抱付けば、「ア、嗜みや〳〵、一つ館に居りながら、たまに逢うたか何ぞの樣に、若輩な人では有はいの」「イエ〳〵何ぼ其樣に言はしやんしても、懷しいは女の癖、奥へ通ひの長廊下、情らしうて屹としたその殿振を思ひ初め、逢ふも千歲の緣結び、かうじ〳〵て五月の、兒を宿した中ぢやもの、戀しうなうて何とせう。人に計り物思はせ、憎いお方」と山城に、こぼす涙は戀の淵、「サア〳〵道理ぢや〳〵、わしとても其方の事、可愛うなうて何とせう。どうで其方に

ひ顔、見れば見る程腹立の、四つ餘所の色取りに、五つ因果な見初めて、無性に可愛い其中は、連理の契りとわしや思ふ。福大黒見さいな。「ホヽヽ、おめでたうござります」と、頭巾を取れば賤の方の召使、名も八つ橋の器量美し、御傍に手をつかへ、「今日の御供に外れしより、思ひ付の大黒舞、お恥しや」と袖おほふ。賤の方輿に入り、「ヲヽ、それも自を慰めの爲、嬉しいぞや」と御仰せ。山城はもぢ〳〵と、思ひがけなき八つ橋に、見付けられたる此場の時宜、赦せ赦せも目顔で知らせ、「我等は寺へ御出の様子、申入れん」と立上り、住持の方へ急ぎ行く。跡へのさ〳〵歩み來る村上左衞門義清、直では行かぬ面魂、賤の方と見るよりも、御傍につゝと寄り、「今日是へお出の様子承り、御跡慕ひ某が申上げたき一通、八つ橋もよつく聞け、主君北條氏時、賤の方のお姿に迷ひ、明暮千々の物思ひ、餘り見るめもいたはしく、申上ぐるも憚ながら、彼方のお心一つにて、氏時様の悦びは、外へは行かぬ御身のため」「默れ村上、脇妻妾と言ひながら、義晴様の胤を宿せし自なれば、いはゞ主從」「ア、其御了簡小い〳〵。主にもせよ、家來にもせよ、國家の政道治め給ふ氏時公、日陰者と言はれうより、北の方に成るのはお嫌か。コリヤ八つ橋、其方向いて計り居ずとも、われも共々お勸め申せ。又われにはおれが首だけ、思ひは同じ戀の媒、何と嫌か、アヽいやでは行まいが」と、縺れかゝれる咽

に山城頭を下げ、「ハア有難き御詞。コレ腰元衆、向うに見ゆる山々を、賤の方樣に一々敎へ申されよ」と、指圖に三橋がしや〳〵り出で、「申し賤の方樣、御覽遊ばせ、アレ〳〵向うの高山は、比叡山と申して都の富士。扨其次は銀閣寺、棟も名高き高臺寺、名高き事を釣鐘に、鳴響かせし千疊鋪、大佛樣と背競べの三十三間堂。又此方なは鞍馬山、僧正が谷の谺に響く、みぞろが池の水の音、サッサ加茂川流れも淸き、上加茂下加茂金閣寺、衣笠山の五體佛、西行櫻、三條小橋、出合うた所が壬生の寺、四條川原の芝居側、朝はとうから〳〵と、待兼山の時鳥、夫は町中のしやれ詞、聞きにきた野の天神樣、三十一文字の歌よりも、當世流行る阿漕が士、どうした事やら此比は、文も便もない戀中の、數もよまれぬ螢火や、祇園の社楊弓の、音はかつちりとん〳〵と、當り初めたる通天」と、口合たら〴〵だら〳〵と、長ことゞ〵を言ひければ、皆々興にぞ入り給ふ。「大黑舞を見さいな、福大黑を見さいな、新玉の年の始の福大黑」と、聲しほらしき幕の本、ざゞめく女中とり〴〵の、中に交る山城が、機嫌上戶も腰元の、膝にもたれて、「ヨウ〳〵〳〵、春の始の福大黑、打ちにつこりのぼつとり風、男たらしのすつぱより、可愛らしいは此三橋、こん〳〵九獻の折も幸ひ大黑舞、所望々々」とせり立てられ、早悋氣する女氣の、唄 大黑舞を見さいな、惡性大黑見さいな、一に色有る顏付で、二ににつこりお笑

やれ」と、一口にやり込められ、面を赤めて閉口す。北の方聲うるはしく、「假初の詞にも、猛きは武士の習ひにて、此爭ひを鎭むるは、弓矢の力に叶はぬ事。胡國とやらんの夷だに、王昭君の色にめで、陣を引いたる例もあり。景勝の妹に、八重垣姫とて聞ゆる美人、武田には勝頼とて、年比同じ子のある由、軍を直に緣の端、我君の御媒、幸ひ今日の此島臺、齡も相生松竹に、花菱は武田の印、竹に雀は景勝の、烏帽子の長尾末かけて、中睦じう致されよ」と、いと畏まる御計ひ、「コハ冥加なき御仲立」君が仰せのかひあつて、互ひに力ゑちごの國、中を結びし大將の、詞は木曾の棧道や、踏みかためたる足利の、家の榮ぞ久しけれ。名に高き軒端の梅の色そへて、老若男女わかちなく、願ふ誓も誓願寺、茶屋の床几に硯箱、發句俳諧三十一文字、歌に和らぐ都の地、今を盛りの梅が香や、左大臣義晴公の妾、賤の方を設の幕、打廻したる花の下、此下蔭の宿より、御身にやどる五月の、帶の悦び身の願、腰元婢に至るまで、綺羅を飾りし鋲乘物、御供には直江山城之助、跡に引添ふ徒士若黨、中間小者にいたるまで、茶辨當から烟草盆、皆取揃へ歩み來る。山城は心得て、「申し〱賤の方樣、もう是が誓願寺、暫し是にて御休み」と、申上れば賤の方、御乘物を出で給ふ、花もおさるゝ御姿。「ナウ山城、今年は取分け誓願寺の、花も一入盛と聞き、義晴樣に願ひを立てて來りし故、其方衆もいかい苦勞」と、仰

せける。晴信取りあへず、「さん候、元此兜は、我等が氏神諏訪明神より夢の中に賜はつて、明神の使はしめ、八百八狐是を守護す、神通力加はつて、是を著する度毎に、合戰勝利を得ざる事なし。越後の謙信隣國のよしみ、拜せん望默しがたく、彼方へ持たせ遣はせしが、俗に言ふ、心安きは却て不和の基とやらん、畢竟何の詮なき爭ひ、晴信において聊も、御諚に漏るゝ事あらじ」と、おとなしやかに述べらるれば、北條氏時進出で、「コレ晴信、兩國合戰に及ぶ一大事、子供童のいさかひ同然、よも左樣の事ではあるまい。兼て親しみある甲斐越後、故もなき合戰は、東八ヶ國を騷動させ、其虚に乘つて大將の御所を騷がす兩人が言合せの軍と御疑ひかゝつた上、輕々しき和睦の受合、猶以て呑込まぬ。必定野心なき言譯、聞かん〱」と詰めかくる、主の尾に付き村上左衛門、「氏時公の御眼力、あつぱれ黑星。ぬらりくらりのぬめた晴信、謙信の狸入道、長尾の小狐化顯はせ」と、何がな障へる心の底、一物ありと見て取る景勝、「コレ村上、御邊は信濃國の住人、晴信謙信合戰の節も、隣國の加勢に言寄せ、兩國をしてやらんと召されしかど、底意知れずとはかりし故、先御邊から攻討ちしに、牛房程な尾をふつて、はふ〱に迯げられしが、都へ登り氏時殿に媚諂ひ、食客の陪臣奉公。其無念を晴さんと我々が中をさきたがる。夫はともあれ、君の御諚、御邊達が出過ぎの助言、すつこんでお居

きつと糺明もあるべきを、其儘に差置き給ふは、且は武威の薄きに似たり。如何計らひ候はんと、我は顔に言上す。義晴打點頭かせ給ひ、「我も此事歎かはしく、兩家和睦を調へんと、先だつて兩國へ此旨を申遣し置く。さりながら謙信が嫡子三郎景勝、疾くより我に昵近し、忠勤厚き武士、只心得がたきは親謙信、忰を登し今日まで、上洛致さぬ心底訝かし。親の心子知らずといへども、父の心中よも知らざる事あらじ。景勝いかに」とありければ、三郎大きに恐入り、「親謙信儀老體の上、多病によつて引籠り罷在れば、名代の景勝、君御召の御諚の趣、早速申達しつれば、上洛の日限も一兩日の間は過ぎず。又晴信と不和なるは、彼家に傳へし諏訪法性の兜、隣國のよしみに借受けしを、武田の武勇を羨むなんど、下様の悪口、一徹短慮の親ども、彼是詞戰ひより、思はぬ確執となりし事、如何ばかり我等が歎き、まづ晴信を召寄せられ、君の御詞を添へられんに、誰か否と申すべき」と詞の半、北條の家臣、村上左衛門罷出で、「武田晴信參上」と、取次ぐ聲にお次の襖、引立烏帽子のおのづから、智勇備はる甲斐の國、武田大膳大夫晴信、御前間近く出仕ある。たをやめ御前宣ふ樣、「武勇烈しき長尾武田、君の柱と思し召し、兩家和睦をはからせ給ふ、有りがたき御上意ぞや」と、傳へ給へば義晴公、「汝謙信と不和の基、法性の兜とやらん、武田の家の重寶とは、何れの代より傳はりし、語れ聞かん」と仰

武田信玄
長尾謙信 本朝二十四孝

第一

春は曙やうやく白くなりゆくまゝに、雪間の若菜青やかに摘出でつゝ、霞立ちたる花の比はさらなり、さればあやしの賤までも、おのれ〳〵が品につき、壽き祝ふ年の兄、ましてやいともやんごとなき、大樹の下の梅が香や、まづ咲初むる室町の、御所こそ花の盛なれ。君は足利十二代源義晴公、左大臣に任官あり、武威海內に輝きて、のべふす六十六つの花、豊なる世の貢物、殊更おもひものの腹に御男子懐胎ありければ、なほもめでたき春ぞとて、北の方たをやめ御前、相州の大守北條相摸守氏時、越後の城主長尾三郞景勝、其外參觀の大小名、大流、小流、松竹島臺、蕗の臺、かゝる時代におほ廣間、おの〳〵賀儀を申さるゝ。氏時御前に謹しんで、「御先祖足利尊氏公、二つ引兩の旗を以て、天下の棟梁と成り給ひ、五畿內は申すに及ばず、八隅の外まで威勢に靡き、面を上ぐる者もなきところに、此頃諸國にわれ〳〵の合戰起り、就中甲斐の住人武田晴信、越後の謙信と鋒先を爭ひ、君命に従はざる條、上を恐れぬふるまひ、

奥州安達原　終

太刀づつ、朝敵亡びて源氏の勝鬨、早凱陣とおだやかに、國も治る君が代の、夜に増し日に増し繁昌は、源氏と壽けり。

り打砕かん」と、ぐつと引きぬく並木の松、微塵になれと打ちかくる。「コリヤ〱〱」とねぢ合ふ強力、とゞまる勇力。いづくよりかはしら羽の矢先、二人の胸板、はつと驚く間もなく、貞任義家東西より立出で給ひ、「ホヽ珍らしや貞任、汝命の恩を忘れず、三種の神器を別條なく此方へ渡し、宸襟を休め奉る上からは、義家が首取つて、頼時が冥土の妄執はらせよ」と、さも潔くのたまへば、はつと二人は頭を下げ、「ハアツありがたき御一言、日比の恨」と貞任が、つゝ立上つて鞘ぐちに、はつしと兜を打落し、抜くより早く我と我、右手の小脇にぐつと突立て、大將の前にどつかとすわり、「三十年來父の敵、討たうと思ふ鐵石心、義家公の御惠に、忽ちとろけし此上は、弟の宗任を、御家來となし下さらば、生前死後の面目」と、苦しき中にも弟を思ふ、眞實しんみの血の涙、大將不便と思召し、「いかに宗任、心を改め我幕下に從ひ、安倍の家を引起せ」と、惠も厚き御詞、「今こそ願ひ達せし貞任、いづれもさらば」と勇氣の最期。又も聞ゆる鐘太鼓、敵にはあらで鎌倉の權五郎、瓜割四郎を提出で、「主君に敵對ふのら猫め、是喰うて死ね」と打付くる。引つぱづして逃行くを、襟がみ摑んで宗任が、ぐつと一しめ忠義の手始。かゝる所へ匣の内侍、宮を誘ひ生駒之助、維時を高手に縛め御前に引居ゑ、「謀叛の張本大江の維時、宮を奪取り此國へ落下る、半途に出合ひ斯の通り」と、詞の下に一

送り屆けよ」と、寛仁大度の詞にはつと諸軍勢、四方を圍む歸國の供、冥土の供はなき母の、死骸を抱く貞任が、胸は麻桛とかき亂す、糸の亂の苦しさを、こたへる涙はら〳〵に、衣のたてはほころびて、裾や袂と別るゝ道、勇むは新羅、權五郎、生駒が背におひの殿、老いぞ籠りし此の原を、鬼籠れりと讀みなせし、安達が原の黒塚の、其古事を末の代に、語り傳へて殘しける。

第五

深きを以て淺きに入り、淺きを以て深きを知る、其源や武將の大度、八幡太郎義家公、貞任が籠りたる小松が柵に押寄せらる。附從ふ輩には、舍弟新羅三郎義光、鎌倉の權五郎景政、其外一騎當千の、鎧の袖も白旗も、風に靡いてめざましき。景政御前に兩手をつき、「兩將には暫く木陰に御屯」と、勸め立てたる折も折、どつと寄手の鯨波、景政きつと見、「ヤアちよこざいなる蠅虫めら、一所にかゝれ」と大手をひろげ、當るを幸ばら〳〵、さながら秋の木の葉武者、勇氣に恐れて軍勢ども、「叶はぬ、赦せ」と迯げ行くを、遁さじやらじと追うて行く。引違へて陣頭に、踴出でたる安倍の宗任、「新羅三郎是にあり、望む所の宗任め、惡事のかたま

逆さま、落ちてはかなくなりにける。新羅三郎すゝみ立ち、「寶劍は此谷底、某向つて守り奉らん。兩人外面に氣を付けよ」と、いひ捨て谷へ飛びこめば、下に伏せたる隱し勢、挑燈松明振立て〳〵、遁さじやらじと　三重いどみあふ。谷には新羅、上には兩人、投げおろしたる大木大石、壓にうたれてあまたの人數、微塵になつて死してけり。猶もためらふ山かげより、「安倍の貞任是にあり、見參せん」と呼はつて、寶劍携へしづ〳〵立出で、「かゝる術もあらんかと、母にも知らさず付け置く番人、手向ひせしは彼等が役目。弟宗任を助けし義家、敵に恩を受けながら、軍せんも心よからず。さるによつて此御寶、只今渡すは宗任が命の返禮。再會は戰場と、義家に傳へよ」と、寶劍渡し傍なる、母の死骸を抱き上げ、「不孝の悴遲參の誤り、やみ〳〵生害させませし、殘念至極」と物數を、いはねど籠る千萬無量、新羅三郎感じ入り、「敵ながらも適勇士、辭退申さぬ。寶劍の納る所は戰場々々。先夫まではおさらば」と、寶劍携へ「ヤアヤア生駒、老女の作れる罪科も、高燈籠の光にあり、其火を消すは汝が手向」と、仰にはつと立寄つて、松の立木を切倒せば、法の光も消失せて、忽しゆらの太鼓鐘、相圖に寄せくる數萬の軍勢。「すは事こそ」と權五郎、生駒も谷へおり立てば、「ヤア〳〵騷がれなかた〴〵、高燈籠は此家の狼煙、消ゆると集る手筈の軍兵、人々の警固して、八幡太郎の陣屋まで、つゝがなく

れこそは稚者に、何事ありとも物いふな、事顯はれては一大事と、いひ含めたる止聲病。今日寶劒の有所知れたるも、汝が妻が死したる故。莫大の功なれば、兄にかはつて勘當赦し、元のごとく主從ぞ」と、情の詞に生駒が悦び、はつとひれふすばかりなり。岩手は無念のぢだんだ踏み、「エヽ口惜しや腹立ちや。現在娘を殺すといひ、是まで心を盡せしも、皆むだ事であつたよな。よし此上は何とせん、敵の片われ其ちつぺい、ひねり殺して冥土の供に、つれんずもの」と立上る。「さうはさせぬ」とさゝゆる生駒、振切る袂とゞむる袖、「放せ」「放さじ」もみあふ後の襖を踏明け、「鎌倉の權五郎景政、とくより是に守護致す」と、呼はり出でしは以前の前髮、肌は小具足小手臑當、八若抱き突立つて、「若君の仰を請け、岩手といふおばゝを釣りに、此國へ入りこんだは、かういふ時の後詰の役人。叶はぬ修羅くら燃やさずとも、寶劒出し降參せよ」と、聞くより猶も無念の齒がみ、「是までなり」としら刃の切先、腹に突立てどつかとすわり、「とても叶はぬわが運命、かゝる方便のありとも知らず、夫の敵國の仇、子供に討たして高名させんと、我慢に凝つて邪非道、人を人とも思はぬ天罰、忽ち報うて血を分けし、娘を親がなぶり殺し、嘸や苦しかりつらん。地獄畜生餓鬼修羅道、其苦しみを身一つに、うけし因果を斷切つて、冥土の旅でいひ譯せん。娘よ孫よしばらく待て」と、突こむ劒を口にくはへ、緣先よりまつ

に、立出で給ふ匣の内侍、「ヲヽそれこそ待兼ねし、宮樣の御爲には、親とも姉とも、譬ん方なき老女の情、二十日餘りの月かげを、移して用ゆる此藥法、いで御藥を奉らん」と、空にさえ行く月かげを、寫し取るよと見えけるが、何とかしけん、器ばつたり谷底へ、落ちて血汐に染めなす岩角。こはそもいかにと驚きながら、見下す谷の岩間より、俄にうづまく水のあし、淸々滔々とわき上れば、内侍は水氣に目も放さず、守り詰めて「あら不思議や、今産婦の惡血谷底にしたゝれば、忽ち谷水逆まき上つて、土中の穢を淸むる事、誠や水晶はちりを受けず、蓮葉は泥に汚れず、か程奇瑞を顯はすは、正しう尋ぬる十握の御劍、此巖中に隱しあるに疑ひなし。ハアヽ有難や忝なや」と、女姿もいつしかに、引きかはつたる變生男子、眉逆立つて目の内も、威有つて猛き其有樣。老女はたけつてうなり聲、「すりや匣の内侍と僞りしは、寶劍詮議の方便よな」「ホヽ御劍失せさせ給ひしは、汝等親子が業ならんと、内通の心を見せ、義家が一子八若をもつて環の宮と僞り、女姿とさまをかへ、付添ひ來りし某は、八幡太郎義家が末弟、新羅三郎義光」と、はじめて名乘る武將の系圖、さすがの岩手も驚きに、只惘然たるばかりなり。生駒之助すゝみ寄り、「君は稚き時よりも、他家にて育ち給ひし故、かく申す某まで、御顏見しらぬ幸に、驚入つたる御方便、不審なるは其御種、物いひ給はぬ病とは」「ヲヽそ

ち、胎内の子の血汐を用ひて立所に平癒す。我是を行はんと、普く産婦を尋ぬる所に、今日思はず汝が女房、天子のお役に立つたるこそ、類稀なる身の冥加、夫のみならず人を殺し、金銀衣服を奪ひしも、皆軍用の助の爲」と、始終を聞いて驚く生駒、「ム、貞任の母儀とあるからは、手にかけられし女が爲にも」「ホ、則ち母といふ事か」「サア然らば娘と存知の上」「イヤ知らぬ、娘と知つたはたつた今、無念のさいごをとげられし、夫頼時の魂魄を、いますがごとく此日比、祭置きたる髑髏に、女の血汐しみ込みしは、親子の血筋疑ひなしと、捜見れば此守に、吾家の系圖書、扨こそ知つたる娘が身の上、往時の敗軍に、親子兄弟ちり〴〵になりし時、乳母に抱かれ別れし後は、都九條へ賣られしと聞きつれど、尋ねとふべきいとまもなく、打捨て置きしが彼等が仕合、思はずしらず我娘が、君の病ひの藥となるは、手柄者とも果報とも、此上のあるべきか。でかしをつたとゝてもなら、譽めてやつて殺さうもの、何にも知らず死にをつたが、たつた一つ殘念な」と、鏡のやうなる兩眼に、こたゆる涙はら〳〵、實も貞任宗任を、産落したる骨柄なり。生駒之助感じ入り、「女に稀なる大丈夫、さりながら、玉簾深き若宮を、いかゞして奪はれしぞ」「ヲ、それこそ宮の御乳母、匣の内侍を頼み、密に御所を立ちのかせし。いざ匣殿、此御藥を宮樣へ、とく〳〵すゝめ申されよ」と、呼出せば一間より、賤の姿を其儘

手にかけしぞ、戀絹やい」と、いふかひさらになきがらを、抱上げて立つたり居たり、「エ、遲かりし殘念々々。嘸我を待ちつらん、可愛の者やいぢらしや」と、前後なみだにくれけるが、泣く目をはらひ、疵口に心付き、「ム、腹をあばき、胎內の子まで手にかけしは、盜賊のわざとも見えず、何にもせよ此家のばゝ、我を出しぬき歸りし曲者、引つくゝつて詮議せん」と、裾はせをつて奥の方、主が寢屋とおぼしき一間、あひの戸襖踏みひらけば、內は朱玉をのべたる御殿、翠簾巻上げてたをやかに、打ちふし給ふ稚宮、傍に從ふ老の身も、賤の姿を引替へて、十二單に緋の袴、白髪額をさげ髪や、敬ひかしづく有樣に、荒れし生駒もすゝみ兼ね、暫らくためらひ居たりしが、ちつとも臆せず大音上げ、「ヤア體に綾羅はまとへども、禽獸に等しき狸ばば、妻の敵子の敵、覺えがあらう覺悟せよ」と、詰寄ればはつたと睨め、忝くも當今の弟君、環の宮の玉座間近く尾籠の振舞。かくいふ我は奥州六郡の司、安部太夫頼時が妻。情なくも我夫を八幡太郎に亡され、無念の月日を送る中、成長したる貞任宗任、環の宮を奪取りしは、奥州の內裏と仰ぎ、諸人をなづける謀叛の根ざし、いかなれば此君、我國へ下向の時より、物いひ給ふ事叶はず、一天の君として、かゝる難病世の嘲り、とやせんかくやと醫術さま〴〵。昔漢の世に或人此病を煩ふ、名付けて止聲病といふ、其頃耆婆が祕密の家方、孕める女の腹を裁

めんどうなよまひ言」と、懐劍しごけば紅の、血汐に染る手を合せ、「どうぞお慈悲に、連合の歸られるまで。せめて名殘にたつた一目、逢うて死にたい、顔見たい」と、延びあがつて表の方、「生駒樣いなう。わしや今切られて死ぬはいの。我つまなう」と泣きさけぶ、聲さへいとゞ遠近の、空吹く風の音ばかり。「コリヤ世話やくないやい。其連合はな、方角知れぬ山中へ、突放して戻つたれば、今時分は、猪や狼に喰殺されてをるであろ。其跡へ廻つて、路銀はこつちへしてやるのぢや、何とようしたものか。夫に逢ひたか、早う冥土へやつてやろ」と、たぶさ摑んで肝のたばね、指通されて七顚八倒、苦しむ體はくる〳〵、輪乘のごとく打ちまたがり、乳の下より十文字に、腹裁破る有樣は、目も當てられずむごらしき。斯うとも知らず生駒之助、山道に踏迷ひ、漸〳〵歸る表口、戸をほと〳〵とおとづるれば、内には悔り老女がはいまう、見付けられては一大事と、赤子の血汐を手つ取早く、用意の器に絞り込み、見廻す傍に以前の髑髏、「ハテあやしや、此しやれかうべにしみ込む血汐」と、不審は立てど氣はわくせき、女の首にかかつたる、守り袋の紐引切り、一つに集め奥の方、指足してぞ忍び入る。表は猶も打ちたゝき、「女房ども戻つたぞや、戀絹々々」と、呼べどたゝけど音せぬは、ハテふしぎなとさし覗き、見れば血に染む女房の死骸、南無三寶と氣は半亂、門の戸踏明けかけ入つて、「ヤレ女房、何者が

なふる口は耳までさけ、安達が原の黒塚に、こもれる鬼といひつべし。戀絹あるにもあられぬ思ひ、「私を殺すとおつしやるも、銀からおこつた事なれば、路銀も殘らず上げませう。まだ其上に此衣類、はいでなりとも助けてたべ。つらい命をながらへて、陸奥までさまよふも、何とぞ安う産みたいばかり、よく〱深い緣なればこそ、わたしがおなかをかり初も、十月に及ぶやどり子に、せめて此世のあかりを見せ、一日なりとも親よ子と、互に呼びつ呼ばるゝまで、命が惜しい、死にともない。慈悲ぢや、情ぢや、コレ申し」と、取付き歎けど聞かぬ顔、「何やらいはしやるさうなが、年寄といふ者はの、コレ此耳が遠いはいの。ドレそろ〱やりかけう」と、小づま引上げ玉だすき、隙を窺ひ戀絹が、迯出づるを引戻し、懷劍逆手に取廻せば、何とせんかたなみだ聲、「アレ」「聲が高い」「サア〱それでも」「エヽ」息の根とめよと突つかくる、刃先をよけてもよけさせず、付けつまはしつ追ひ廻り、なんなく肩先切りこまれ、立つ足さへもたぢ〱、又突つかくる白刃の切先、兩手に握つて、「こりや是程いうても聞入れず、どうでもわしを殺しやるの。エヽこなたは、鬼かいの蛇かいの。死ぬる我身は因果とも因緣とも、あきらめても死なれうが、可愛や此子が、闇より闇に、迷うて母を尋ねうと、思へば悲しい死にとむない。何の因果で私が身に、やどつて來たぞ」と身をふるはし、もだえ歎くぞ道理なる。「エヽ七

又きり〳〵戻つてくれたがよい。手が出るやら、髑髏が出るやら、どうやら氣味の惡い内、どれ迎ひに」と、言捨て出づるを引きとゞめ、「其夫の戻られぬ先に、こなたにばゞが無心がある」「サア其無心といはしやんすは、路銀をかせといふのであろ。わしが肌にはないによつて、ちよつと夫を呼んで來て」「イヤ銀ばかりぢやない、路銀よりまだ外に、こなたの肌に付けた物がある、夫をばゞが貰ひたい」「ムヽ銀より外に、わしが肌に付けた物とは」「イヤ外の物ぢやない、こなたの腹な子がほしい」「ヲヽあのかみ樣とした事が、そんな事なら人をびく〳〵さゝんがよい。お前樣のお世話で、かたはでもない子を産んだら、其時はどうなりと」「イヤ産んだ子は役に立たぬ、まだ腹にある中を、子籠というて、大銀になる大妙藥。それで其子が貰ひたい」「エイ、あの胎内にある子を、どうしておまへ」「イヤ心安うとられる、つい其腹を裁割つて。ホヽヽヽ、あの子とした事が、何の夫を震ふ事で。ばゞがいたうないやうに、つい一思ひに殺してやる。よい子ぢや、爰へちやつとござれ」「アイ」「はて扨しぶとい、ござれいの」「すりやわたしを殺して」「ヲヽくどう。其藥がほしさに、とうから尋ねた孕女、世間に澤山にある物なれど、尋ぬる時は意路惡うない物いの。コレぐづ〳〵して隙入れて下さんな、きりきり殺してまた寺參りせにやならぬ。年寄は後生一ぺん、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と、と

山の奥でも、かはい男と一所に居るが身の樂しみ、どうぞよい男の子を産んで、主の悦ばしやんす顔が早う見たい。したが若女の子など産んだら、機嫌が惡うはあるまいか。ア、儘よ、女子ぢやとて、まんざら捨てうともいはれまい、二つ取るならよい男の子を産んで、夫婦が中に添乳の枕、ねん〱ころゝん〱が、いうて見たい」と女氣は、それしやの果でもしどけなき。次第に更くる夜嵐の、身にしみ渡つて物凄き、安達が原の軒もる月。「エ、遲い事ではあるぞ、こんな廣い所にわし一人置いて、つい戻つてくれたがよい。ほんに今のかみ樣が、閨を覗いて見なというてゞあつたが、ちよつと見ようか。イヤ〱何ぞこはい物でもあつたら惡い。ア又見たい物でもある」と、氣味惡ながらそろ〱と、障子開いて、「何やら白い物がある」と手に取つて、「ナウ悲しや髑髏ぢや」と、迯退く拍子に苧桶にばつたり。「ヤア爰にも又人の腕」と、氣も魂も消入る思ひ、がた〱震ひ漸と、表の方へ迯出づれば、後にすつくり白髪のばゞ、「申し〱、コレ申し」と、呼はる聲に又恟り、「イヤこはい者ぢやない、主のばゞでござるはいの」と、聞いて少しは人心地、「ほんにおまへはおかみ樣、いつの間にお歸りぞ。定めて主も一所であろ、ちやつと呼んで下さんせ」と、胸撫でおろすばかりなり。「イヤ連合はまだ跡に、こなたにちつと用があつて、ばゞ一人戻りました」「何ぢや連合はまだ跡にぢや、エ、

息、「イヤあんまり落付くまい、何時の知れぬおなか」「したが道中の冷が入つて、心安うは出來ますまい。ア、何ぞよい藥を進ぜたいものぢやが。ヲ、幸なことがある、此野はづれの庄屋殿に、結構な安神散がある、ありや早めにもなる藥、わしがいて買うて來て進ぜたけれど、年寄つて夜道は叶はぬ、大儀ながらこな樣いて、というても道の案内知らずであろ、いつそわしと二人いて買うて來ませう。コレ女中、ちつとの間ぢや、留守してござれや。あの藥一ぷく呑むと心安うまめになる」「夫はまあ〳〵いかいお世話、生駒樣も御苦勞ながら、あなたと一所に」「おつと合點、我等は先へいこま之助」と、口合たら〳〵立上れば、老女も小づまかい取つて、「必氣遣ひな事はない程に、ちつとの間待つてござれ。わしが留主の中に奥の襖を明けまいぞ。サア〳〵ござれ」と打連れて、戸口へ出でしが立ちどまり、「コレ藥代がいるが、路銀は持つてか」「成程肌にござります」「おつとよし〳〵。コレ女中、かんまへて閨の内を、覗いてばし見やしやんな」と、念に念おす老の坂、道の助は生駒之助、伴ひてこそ出でて行く。跡には一人戀絹が、心細さに行燈の、火はかき立ててもかき曇る、空も物うき旅の宿。「ほんにまあ、人の行方と水の流程定らぬ物はない。都の者が陸奥三界、しかもやゝまで産む樣になるといふは、ア、思ひ廻せば女程、あぢきない者はない」と、打しをれしが、「ア、ぐち〳〵、たとへ野の末

ならぬ高燈籠はお國の風か、但しお志の常夜燈か」と、脇道へころばす氣轉、主は何の氣も付かず、「御尤のお尋ね、此所は安達が原と申して、山なり原なり道の知れぬ街道、ちやうどお前方の樣に道に迷うて難儀するが多い故、あの樣に燈籠を點し、往來の衆の助にするも、先立たれし連合の、未來の闇を照す明り」「是は〳〵限りもなき大功德」と、咄の中に戀絹が、旅の勞か苦しむ體、「コリヤ女房何とした」と、寄添ふ夫を力草、「どうした事やらきつうおなかが痛みます」と、聞いて悔り、「何ぢや腹がいたい、サア〳〵事ぢや」とうろ付く夫、「コレ申し、何をマア其樣に、腹の痛むは旅勞、水のかはりである事」と、落付く主氣のせく生駒、「イエイエイそんな事ぢやござりませぬ、何を隱さう女房は、此月が臨月でござります。大方其氣が付いたもの」「ヤア何ぢや、此月が產月ぢや、アノ此女中が、ハテ扨夫は」と心の工面。夫はあわて立つたり居たり、「コレ申し、どこぞ爰らに餅やがあるなら、取上ばゝを味噌汁で、焚いて喰はして下さりませ」と、何をいふやらうろ〳〵きよろ〳〵。「マア〳〵お前方も、こぼれかゝつた者を連れて旅するとは大膽な、ドレわしがおなかを見てやろ」と、懷へ手を差入れ、「イヤイヤまだ、今やちよつとの事ぢやない。此痛はつい直る」と、そろ〳〵胸を撫でさすれば、戀絹は心地よく、ほんにとんと痛が直りました、お前樣はお功者な」と、聞いて夫も落付く吐

何思ひけん立歸り、裏の藪垣押分けかき分け忍び入るともしら糸の、簍にくりまく桛車、廻る月日の關の戸を、漸々遁れ生駒夫婦、行く先とても定まらぬ、あてなし旅の行付次第、安達が原の高燈籠、心便にたどりつき、「コレ戀絹、若しも關所の追手がこうかと、氣のせく儘に日をくらし、とんと宿を借損うた。跡の村で聞いた、爰が彼安達が原、何と廣い野原ぢやないかいの」「ほんにまあ方角さへ知れぬ所、道に迷うたらどうせうと、案じてわたしや癪がいたい」「何の案じる事がある、氣遣ひ仕やんな。高燈籠があるからは家がなうては叶はぬ筈」と、邊見廻し「あるぞ〳〵、あれ〳〵あそこに火の光。こつちへおぢや」と戸口に立寄り、「案内しらぬ旅の者、足弱を連れ暮に及び難儀致す、一夜を明させ下さらば、上もなきお情」と、案内すれば老女は立出で、「夫はまあ〳〵おいとしや。殊に女中もあるさうなに、お泊りなされと申したけれど、氣の毒は間所も」「アヽ申し〳〵、たとへ牛部屋灰部屋でも、一夜お泊め下さらば、生前の御厚恩」「ハテ不自由をお厭ひなされずば、成程お留め申しませう」「是は〳〵忝し」と、夫婦が悦び、杖草鞋、脚絆の紐もとく〳〵と、二人を誘ひ内に入る。「見ました所がお侍、どれからどれへのお出でぞや」と、尋ねに戀絹會釋して、「アイ私どもは都の者、はる〴〵と此國へ參つたは、幼い時に別れたる」「アヽこれ〳〵女房、イヤ我々は當國松島一見の爲。夫は格別、時

「ヤアノ、出さうなといふたのは、もう月が出さうなといふ事ぢや」「ムヽ月の事か。そしてマアうろ〳〵と、こなた何ぞ落したか、尋ぬるのなら火をともしてかしてやりましよ。ソレ幸の高燈籠、大儀ながらおろして下され」と、いひつゝ取出す火燧箱、こち〳〵打てばこて〳〵おろす、戀の闇路を照すとは、氣當りよしと心で悦び、又引上ぐる細引の、長い鼻毛で釣りかけた、娘はまだかと指覗き、「コレばさま、爰の内へたつた今、娘が一人來ましよがの」「ヲヽ來たが夫が何とした」「サア其娘に、もういなんか待つて居るといふて下され」「ハヽヽヽいなんかとはどこへいなんか、ありや餘所の者ぢやない、こちの内の娘ぢやはいの」「ヤア、あの今來た娘は爰の内の娘かえ、なむ三しまうた」「ホウ氣疎なげな顔はいの。けふ氏神へ參つた戻りに、だれやら送つて貰うたといふたが、ムヽ扨はこなたであつたの。是はまあ〳〵若い人ぢやが、奇特によう送つてやつて下さつた。遠道をあるいた草臥やら、もう奥にねて居ます、こなたもいんで休んで下され。ヤレ〳〵大儀でござつた」と、戸口をぴつしやり立て出され、物も得いはずむしやくしやと、にきびだらけな赤ら顔、ふくらかしてもせう事なく、「テモむごいめにあはしをつた。結構な釣者がかゝつたと思ひの外、あちらこちらへ釣られてのけた。エヽいま〳〵しい、けたいの惡い娘め、どうするぞ覺えて居い」と、つぶやき〳〵立出でしが、

暗うもなり、ハテどうなりとお前次第」と、跡は得いはず顔赤らめ、袖打覆ふおぼこ氣に、現ぬかして、「そんなら爰に待つて居る、必早う戻ろぞや」と、門にすつくりまつの木立、娘は內へ入り口の、戸を押明けて、「アイ今歸りましてござんす」と、いふに主が不興顏、「わしにもしらさず出あるいて、日の暮れるまでどこにはいつてござりました。大事の身を持ちながら、大膽な一人あるき、嗜ましやませ」とつこうども、如才ない氣を呑込んで、「サアわしもおまへにいうてからと思うたれど、又供の人雇のと、世話になるが氣の毒さに、沙汰なしにいて來たは、ソレ今のナ、御病人の御願やら、何やらかやらの神參り、重ねてからは斷つて參りませう、もう堪忍して下さんせ」と、斷聞いて心も折れ、「ハテ神參りとあれば何の否と申しませう、此樣にとがとがいふもお前のお爲、人に見られてはならぬ身の上。かういふ中も誰が見まいものでもない、早う奧へござりまして、何かに心を付けてナ、御合點か。用があるならつい此ばゞを呼ばしやりませ、必端近う出まいぞや。サア／＼早う」に「あい／＼」の、返事しながら表の樣子、主の耳へおくの間の、障子押明け入りにける。門には何にもしら鷺の、首程長う待ち草臥れ、うろ／＼內を指覗けば、「誰ぢや、どこの人ぢや、小暗りにうさんらしい」「イヤ大事ない者、ちつと用があつて。めんような、もう出さうなものぢやが」「コレ／＼そこな人、出さうなとは何が出さうな」

爰に泊つても、こなたの懐に銀があると、又追剝が來をろもしれぬ、其銀はよが預りましよ」「イヤ夫は」「ハテ扨惡い事はいはぬ」と、手を差入れて引出す財布、「それ渡しては」としつかと握り、「おばよ、こりやわごりよが剝ぢやの」「何のいの、預つてやるのぢや」と、財布持つ手に兩手をかけ、引けばこなたも門口の、柱を片手にひんだかへ、引いつ引かるよ力に腕すつぽりと、拔けて尻居にへたばる老女、「コリヤおれを殺すか」と、よろめく旅人を打倒し、のつかよつて喉へ、ほうど喰付き喰殺す、老女の業ぞ恐ろしき。「ア、嬉しや」と疊を上げ、死骸を蹴落し口のはた、のごふ血汐の腕取上げ、「エ、しぶとい、まだ財布放しをらぬ。ア、儘よ、腕ぐち取つて置かう」と、苧桶の底へ取納め、又繰返す糸よりも、頭のおがせかき亂す、草に育てど草ならぬ、花は鄙でも都でも、可愛らしさと惜さけは、跡から付いてあんぽん丹、聲がはりのした大前髮、「コレ〳〵お娘、こりやどこまで連れていかんすのぢや。日は暮れる、幸ひ人のこぬ安達が原、此草村でついちよこ〳〵、祭の太鼓打ち仕舞はんと、いきつた撥の納めばがない。サア〳〵爰で」とはないきも、「オ、せはしな、まだ暮れきらぬ薄明り、誰ぞが見たら恥しい。袖の振合ふも他生の緣と、今來る道でお近付になり、此片遠所まで送つて貰うたお前、私が使に行く家も、もう爰ちつとの間、門口に待つて居て下さんせ。つい口上いうて出て戻る。其内には

三重遁れ行く。跡をも見ずして 時分はよしと戀絹夫婦、鄰る家なき一つ家の、軒の柱はすね木の松、己が氣儘にまとはるゝ、蔦は逆立つ鱗の如く、いづれの工か青龍の、形を削りなせしかと、さも物すごき破屋に、住馴れ居馴れ手馴れたる、かせの車やわくらはに、來る人稀の黄昏時、「御無心ながら煙草の火、一つ借して下さりませ」と、笠を片手に旅の者、老女は籰をくり止めて、「ヲヽ暮れるまであるかしやますは、何ぞ過急の御用か」「アヽちつと急ぎのかはせ銀、福島まで持つて行く者ぢやが、暮れるので氣がせきます」「何ぢやかはせ銀を持つて行くのぢや、アノ銀をや。ヲヽ此物騷な安達が原、追剝に出合はぬ樣に、用心していかしやませ」と、いはれてこなたは悑り顏、「アノ追剝が出ますかの」「ヲヽ出るとも〳〵、きのふもちやうど今時分に、アレ向うの森の中で殺された人がある」ヤアといふより身はがた〳〵、「申しかみ樣、我等生れ付いて其追剝がきつい禁物、どうぞ今夜は爰の内に、泊らして下さりませ」「いやなう、其樣に銀持つた人をこちの内に留めては、マア氣が張つて夜がねられぬ」「サアそこがお情、お慈悲はかみ樣」「ハテ夫程怖か留めてしんぜう」「ハイ〳〵、夫は近頃忝い」と、草鞋といて上り口、「ヤレ〳〵嬉しや、是で心が落付いた」「イヤ、めつたに落付かしやんな、

かつて立聞く二人、戀絹が耳に口、何やら囁き生駒之助、元の所へ立忍べば、戀絹態とおろおろ聲、「生駒之助樣いなう」と、呼はり呼はりうろ〱と、尋ねさまよひ四郎にばつたり、「ヲヲ怖は、誰ぢや」と立退けばしがみ付き、「イヤこはい者ぢやない、只居より四郎ぢや〱。そもじを待つて最前から、しやきばつて居るはいの」と、餘念のないを見て取るそれしや、「ヲヲお前なら恟りはせぬはいな。誰ぢやと思うてつかへが上つて、あいた〱」と胸撫でさすれば、「何とした〱、癪でも痛むか、藥やらう」と紙入より黒丸子、「ア、申しお慮外ながら、水でもあらば一口呑して下さりませ」「イヤ〱、水は毒だ、茶を呑まさう」と番所より、茶瓶茶碗持つて出で、「コレ一口」と差出せば、「ア、申し、ぬるいやらあついやら、呑んで見てくれたがよい」と、氣を持たされて、「實も〱、我等が呑みさし呑む氣ぢやの、コリヤ忝い」とぐつと一息、呑むと其儘「ア、〱〱」と、いふより早く體は忽ぐにや〱〱〱、たはいやくたいなみ木のかげを、立出づる生駒之助、「扨てもきついうつそりめ、汝がほんのあんぽん丹、付けう藥のないやつ」と、どつと一度に打笑ふ。折から又も追ひくる人音、「とても事に跡腹の、痛まぬ樣にしていこ」と、上張ぬいで手つ取早く、瓜割四郎に打著せ〱、暫し木蔭に立忍べば、引返す數多の家來、「ソレ最前の藥屋め、遁すなくゝれ」と衣裝を目宛、大勢寄つて手

といふて、此關所の役人なるが、いかなる過去の報にや、すは合戰に赴かんとすれば、忽五體ぐにやぐにやと痿え、コレ此通ぐにやぐにやと痿え、心ばかりをいらつといへども、挑燈で餅つくごとく、かいもくとんと役に立たぬ。なんと體がしやつきりとなる藥があらば求めたし」と、世にも哀に問ひかくれば、「コレハハお前はきつい仕合者、抑此あんぽん丹と申すは、一名を長名丸と申して、其樣に氣ばかりせいて、何の役に立たぬ人に、此藥を用ゆれば、忽五體鐵石のごとく、譬へば强敵入りかはつて合戰すとも、ちつともよわみを喰はぬが名方。先心見に一貝上つて御らうじませ」と、小さい錫の器物、取出して手に渡せば、嬉しげに指先に、付けて一口呑むよと見えしが、むつくりしやつきりすつくと立つて、「あらふしぎや、此藥我のんどを過ぎるやいなや、忽五體ひりひりとして、其あつき事火焔のごとく、筋骨共に節くれ立つたる心地よさ。ハア、誠や、氣は陰にして其色白し、陰中の陰今變易して紫の色を顯はす事、偏に此藥の德にあり。ハア、權妙なりふしぎなり」と、めつたに虚空を睨付け、諸手を組んで立つたる有樣。「なんと奇妙でござりましよが、まだ責道具が入るならば、具足なりと兜なりと、鉢卷もござります。申し其かはりに、必茶をあがりますな、湯茶をあがると元の通にぐにやつきますぞ」「ヲヲ過分々々」と代物渡せば藥屋は、箱をかたげて別れ行く。始終の樣子をとくよりも、戻りか

よいものか。爰で逢うたは盡きせぬえにし、是から我らが宿の奥様、何と憎うは有るまいが」と、よれつもつれつよねんなく、恥を恥とも思はぬ赤頬、抱付いたは山蜂が、花の露吸ふごとくなり。「ヤア尾籠至極」と、四郎を取つて突放し、「昔は昔、今は志賀崎牛駒が女房、望ならば汝が首と、替物せん」と呼ばはれ ばせゝら笑ひ、「ヤア素浪人の分際で、しやらくさい女房呼ばはり、戀絹に汝が首添へてこつちへ受取らう」と、いふより早く切つてかゝる。心得たりと身をかはし、腕首取つて引くり返し、骨も折れよと踏付け〳〵、踏付けられて半死半生、「ヤア主に敵たふ慮外やつ、ソレ遁すな」と數多の下部、一度に抜いて切つてかゝる。「ヲヽしほらしい蠅蟲ども、うぬらも主の相伴」と、片手なぐりに切りまくられ、詞にも似ずちり〴〵に、逃ぐるを追うていこま之助。「コレなうあぶない長追無用」と、呼ばはり〳〵戀絹も、跡に續いて走り行く。一人殘つて瓜割四郎、心はやたけとはやれども、足も體もぐにやくと、ところてん見るごとくにて、立ちも得やらぬ有樣は、目も當てられず哀なり。かゝる折から賣來る、「藥は町中評判のあんぽん丹、御用ござりませぬか、何にきくともきかぬとも、しらぬ所があんぽん丹。御用とござれば一貝が三十二錢、半貝が十六錢、心見と申すが僅八錢。あんぽん丹御用はござりませぬか」と賣聲聞いて、「コリヤ〳〵藥屋、先々待て」と呼止め、「身どもが事は瓜割四郎

び都へきつれ川、吉左右清き道の邊の、清水ながるゝ柳かげ、しばしとてこそ 三重 やすらひぬ。東山道の國の果、陸奥一國の出入を改め、非常をしめす白川の、關の守は瓜割四郎、一人權威をつく棒さす股、ことぢに通ふ雁金まで、赦さぬ道の關の戸は、嚴重にこそ見えにけり。生駒夫婦は關所とも、いさしら川の番所の前、通りかゝれば下部ども、「ヤア慮外者めらが、爰をどこだと思ふ、瓜割四郎樣の堅の關所、笠をぬいでかつつくばひ、どれからどれへ參る者と、斷つて通りをらう」と、留められて戀絹が、瓜割四郎と聞く驚き、猶顏隱し行過ぐる。「ヤア胡亂者遁すな」と、立寄る下部を生駒之助、「ア、申し〳〵、胡亂なものではござりませぬ、御覽の通り我々は藥賣、伊達な所を目印に、賣弘むるとは申しながら、あの日がさで顏隱さねば、口上の一口も得申さぬが女だけ、顏隱すが癖となつて、關所とも憚らぬ不調法、何事も女だけと御用捨なされ、お通しなされて下さりませ」と、いひくろむれば瓜割四郎、「ヲ、聞屆けし、女商人へ用はない、早く通れ」と、赦す詞に二人は嬉しく、笠かたむけて立出づる、戀絹が手をしつかと取り、「イヤそもじばかりはいつまでも爰に留める。生駒之助に用はない、戀絹置いて早く通れ」と、いふに夫婦が恟りし、「スリヤ私等を見違へもせず、お前はよう覺えてか」「覺えてかとは曲がない。深山烏も白鷺も、我妻烏は知るものを。たとへ姿はかはつても、見ちがへて

寐髪、しんきらしいも命かや。人目づつみに荷をおろし、「家傳葛城神靈丹、御用はござんせぬか、お求めなされ」「買ひなさんせ」と賣聲も、遁それしやの身なれども、迷ふは木々や若草に、つまこふ蟲の聲なくて、けはひはがせしくれの蝶、とまり定めぬ浮世はなんの、眞間の入江を見渡せば、月は渚に乘りおくれ、浪より雲に入り舟や、風に逆櫓のさつ〲さ、さつととわたる鳥の聲、雁金よ、其玉章はたが文ぞ、戀の宛名は只一人、越のしら山ふる里よりも、月につれだちもてくる文を、花に別れて歸るは返事、ヲヽ嬉しヲヽ嬉し、ヲヽそれ誠我もまた、かぶろ立から物馴れて、人のやりくり文づかひ、身にしら糸をおり出す、瀧は流を立てる身に、淸き心をたゝう紙、のべにそよ〱こちの人さまよ、ヲヽよい女房と戯れの、わりなき中も姫君に、未來の契り盃の、井筒にかけし生駒樣、我は裏見のたきさしに、いつかすがりと捨てられん、エヽさりとては浮世ぞや。いつそ此身は此儘に、黑髪山の墨染と、思ひ切るにも切れはせで、此世ばかりの女夫とは、ほんに結ぶの神さんも、粋の樣にもない事と、はかな女のかこち言、妹脊のねぐら夕風に、ぱつと立つたる雀の宮、竹に緣ある源を、守る誓はたゞ賴め、標茅が原のさしもぐさ、我一命のあらんかぎりは、御あり家尋ね出して大君を、ふたゝ

つ笹は源氏の旗竿、一矢射たるは當座の腹いせ。首を洗うて義家お待ちやれ」「ヲヽ〳〵互に戰場々々。夫は重ねて、まづ眼前に朝敵の安倍貞任、生捕つて面縛させん、といふは表、其裝束を其儘に、桂中納言教氏卿、御苦勞ぞふ」と式禮に、おさらば、さらばと敵味方、著する冠裝束も、古鄕へ歸る袖袂、かりの翅の雲の上、母に別れて稚子が、父よと呼べばふり歸り、見やる目元に一時雨、ぱつと枯葉のちり〳〵嵐、心よわれど兄弟が、又取直す勇聲、よるべなみだに立ちかねて、幾重の思ひ濱ゆふが、身にふる雪の白妙に、なびく源氏の御大將、安倍貞任宗任が、武勇は今に隱れなし。

第四 道行千里の岩田帶

傾城の、癪は誠の置所、世界の客へそら言も、ひとりにつくす眞實の、戀の中なる戀絹が、寐姿恥ぢぬ中となる、其こしかたの通ひ路は、花車のかけ橋渡り初め、生駒の手綱せきとむる、くつわの關を打越えて、今は女夫の藥賣、わらぢにかくす八文字、おろせ賴まぬ日傘、さして行くへは陸奥の國、睦月に出でし都の空、谷の初聲聞初めて、彌生は花の生れ月、うしや櫻の顏隱す、霞をはらふ春風を、仇とは誰がいひ初めて、草のはつかに解く紐の、結ほれ合ひし朝

節義は一つ。貞心厚き袖萩が、最期の際に一言は、妻子に詞もかけよかし。暇乞を」と仁愛に、「なうなつかしの貞任殿、最前からよう似た聲とは聞きながら、あんまり思ひがけもない、六年ぶりで廻り合ふ、顏見る事も叶はぬか。死ぬる今はにちよつとなと、此目が明きたい、コレお君」「とゝ樣なう」と稚子を、見るに遉の貞任も、恩愛の涙はら〱。大將憐み思し召し、「てゝ親の緣切れたるお君、義家が子に養はん」と、仰に傔杖 有難 涙、「いかなれば 某は、敵と味方を婿に持つ、因果も思ひ廻らせば、代々不和なる源平を、先祖に背いて緣組んだ、我誤りを白旗の、此白梅を血に染めて、元の平家の寒紅梅、娘」「父上」「いざ一所に。婿殿さらば」「我夫さらば」「傔杖殿」「姉樣なう」と別れの涙、母の袂も敷妙も、一度にわつとぬるゝ袖、御大將も直垂の、袖射削づつて餘りの矢先、竹にたちまちすつくと宗任、「最前見遁し歸りしは、兄弟 本意を遂げん爲、優曇華まさりの親の敵、サヽ、勝負〱」と詰めかくるを、貞任しばしと押しとゞめ、「晉の豫讓は衣をさく、八幡とは八つの幡、此白幡をまつ此ごとく手に取れば、八幡が首提げんは案の內。敷妙の身には大切な、夫婦の緣を繼目の籏、ソレ大事に召され濱ゆふ」と、渡すは舅のはた天蓋、舅が最期に魂を、ひるがへしたる梅花の赤籏、「我家の籏諸共に、奥州に押立て〱、父賴時が弔軍。一先此場は、宗任來れ」「ハツア實に尤兄者人、雪持

をも取隠せしに極つたり。姿をかへて禁廷へ入込みしは、猶二色の御寶を奪ひ、親が根ざしの大望を達せんとの工よな。あらがはれぬ證據は是」と、白旗を取出し給ひ、「最前汝が弟宗任と、別れて程へし兄弟の對面、梅の花によそへし我顔を、見覺えたるかとかけたる謎、早くも悟つてコレ此歌、我國の梅の花とは見たれどもとつらねし上の句、梅の花は花の兄、我國とは、我本國、奥州の兄ならんとの詞の割符、兄弟一致の此血判に、白旗をけがせしは、源氏調伏の下心、此上にも返答あるや、何と〳〵」と差付けられ、貞任無念の牙を嚙み、逆立つ髪は冠を貫き、怒の大息ほつとつぎ、「エヽ口惜しやなあ。我一旦浪人となつて、都の樣子を窺ひしが、官位なくては大内へ入込まれずと、流人赦免の折を幸、誠の教氏は先達て病死せしを、我なりと僞つて、つひに逢はぬ舅傔杖、けふ始めての對面に情らしく見せかけて、腹切らしたは詮議の種の一通をとらん爲。所詮謀空しくなれば、親の敵八幡太郎、相手向ひの勝負して、運を一時に決せん」と、太刀に手をかけ詰め寄れば、「ハヽアせいたりな貞任、汝獅子王の勢ありとも、八方に敵を受け、一人の力に及ばんや。又其方が一命は、環の宮と寶劍の所在、責むるともよも白狀せじ。術を以て搜出す夫までは、いつまでも助け置く。命ながらへ時節を待つて、戰場の勝負はなぜせぬぞ。今犬死して親頼時が、大望は無にするか。弓矢の情は相互、夫婦の操も

袖萩が、「扨はお心和らぎしか。かう成果てた身の上、どうで追付のたれ死、是がお聲の聞納めで、ござりませう」と親と子が、一所に死ぬとは神ならぬ、障子押明け立寄る敎氏。母はかけおり、「ヤアそなたは自害したか、傔仗殿も御切腹」「エイ、とゝ様も」「娘も」と、一度に驚き轉びおり、垣押破り張りさく胸、呆涙にわかちなし。手負を見屆け中納言、「樣子具に承る。貞任に緣を組れし御邊、婿の詮議もなるまじ。所詮死なで叶はぬ命、袖萩とやらんも死なずはなるまい。跡の詮議は某がよき樣に計はん。健氣なる最期の樣子、天聽に達し申すべし」と、冠け高くしづ／＼と、心殘して立出る。衣紋に薫る風ならで、奇しや聞ゆる鐘の聲、コハいぶかしと立戻り、邊に心目を配る、一二の對の屋隅々に、太鼓の音の喧し。「ハテふしぎや、此明御殿に陣鐘を打立つるは、何者なるぞ」とふり返る、一間の內より高らかに、「八幡太郎是にあり、奥州の夷　安倍貞任に見參せん」と、立出給ふ御大將、續いてかけ寄る二人の組子、さしつたりと身をかはし、弓手妻手へはつたと蹴飛し、「ヤアラ心得ず、桂中納言敎氏を、貞任とは何を以て」「ホヽウ此義家、天眼通は得ざれども、弓矢の道には賢き某、過ぎつる大赦の砌、桂中納言なりと名乘來る其時より、島育を云立に歌詠まず筆取らず、何條しれ者ござんなれと、つくづく面體を窺ふに、我が稚き時見覺えし安倍賴時にさも似たり。扨こそ宮の御行方、十握の寶劍

て、直方が首討たれよ」「エヽイ、あのとゝ樣を」「ヲヽ生け置いては我々が大望の妨、此懷劍で」と手に渡す、難題何としやうじの內、「曲者待て」と大將の、聲に恂り「折惡し、そちへ〳〵」と忍ばせて、胸をすゑてどつかと坐し、「繩引切つて逃出でんと存ぜしに、見付けられたは運の極め。サアいか樣とも行はれよ」と、腕押廻せば義家公、繩にはあらで眞紅の糸、結びし金札宗任が、首にさつくと打ちかけ給ひ、「網に洩れたる鱗を、助けるは天の道、鳥類の命さへ重んずる我心、況やあつたらしき勇士、命を助け、ソレ其札、康平五年、源義家是を放つと書記せば、此上もなき關所の切手、肩口の痣は切りさいても、武將の息のかゝつた汝、繫ぎし犬も同然、日本國中を放飼、何國へなりとも勝手に行け」と、仁者の詞にハァはつと、雪に頭は下げながら、底の善惡閉隱す、氷を踏んで別れ行く。夫の最期を濟ゆふが、白梅の腹切刀、三寶に乘る露涙、外にも同じ袖萩が、思ひがけなき難題に、死ぬより外はなく〳〵も、歸る戶口に父傔杖、鐶に錠しつかとおろし座に直り、三寶取つて頂戴し、押肌ぬいで覺悟の矢の根、取るとはしらぬ袖萩が、娘に見せじと突込む懷劍、はつと驚き取付くお君、聲立てさせじと抱きしむれば、母は夫が片手に押へ、「まだ女めはいにをらぬか。氣づよくはいふものゝ、年寄つた體、いつ何時の病死もしれぬ、聲なりともよく聞いておけ」と、それとはいはぬ暇乞、とは露程も

や」「イエ〳〵わたしは、温うござります」「よう著て居やるか、ドレ〳〵、ヤアそなたはこりや裸身、著物はどう仕やつた」「あんまりお前が寒からうと思うて」「ヘツエ親なればこそ子なればこそ。わしが樣な不孝な者が何として、そなたの樣な孝行な子を持つた。是も因果の中か」とて、抱きしめ〳〵泣く涙、堪へかねて垣越に、襠ひらりと濱ゆふが、「さつきにから皆聞いて居る。アツア儘ならぬ世ぢやな。町人の身の上ならば、若い者ぢやもの、徒もせいぢや。そんなよい孫産んだ娘、ヤレでかしたと呼入れて、聟よ舅といふべきに、抱きたうてならぬ初孫の、顏もろくに得見ぬは、武士に連添ふ淺ましさと、諦めていんでくれ。ヨ、ヨ」といふ中に、「奥濱ゆふ」と呼ぶ聲に、「アイ〳〵そこへ參ります。娘よ、孫よもうさらば、かはいの者や」と老の足、見返り〳〵奥へ行く。折しも庭の飛石傳ひ、雪明りに窺ひ寄る、安倍宗任戸を引明くれば、「アアこは」と、立ちのくお君をじつと捕へ、「コリヤこはい事はない伯父ぢや」「エ、イ伯父樣とは」「ヲ、そちが伯父の宗任ぢや」「ヤア宗任樣とは夫貞任殿の弟御」「ヲ、つひに逢はねど嫂の袖萩殿」「ア、そんならお前に問うたら知れるであろ、夫婦別れる時、夫に預けてやつた、此子が弟の淸童は息災で居るかいな」「ヲ、其淸童はの、傷寒で死んだはいの」「エ、イ、ハア」「ヲヲ歎は理、何かに付けて一家の敵は八幡太郎、こなたも兄貞任殿の妻ならば、今宵何とぞ近寄つ

と、恥ぢしめられてわつと泣き、「下司下郎とはお情ない、夫も本は筋目ある侍、黒澤左中とは浪人の假の名、別れた時の夫の文に、筋目も本名も書いてござんす。是見てたべ」と差出すを、取次ぐ紙のはしくれも、詫の種にもなれかしと、思ふは母より直方が、讀む文體の奥の名に、奥州安倍貞任とはなむ三寶、扨は貞任と緣組みしかと、心もそゞろに懐中の、一通取出し引合せば、扨こそ同筆、ハァはつとばかり當惑の、色目を見せじとずんと立ち、「穢はしい此狀、彌以つてあふ事ならぬ。サア奥こちへ、ハテぐづつかずと早おぢやれ」と、尖い詞にせがまれて、母も是非なく立つて行く。「なうコレしばし。もう逢はうとは申しませぬ、お身の難儀の其譯を、どうぞ聞かして下さりませ、申し〳〵」と延びあがり、見れど盲の垣覗っ早暮過ぐる風につれ、折から頻にふる雪に、身は濡鷺の蘆垣や、中を隔つる白妙も、「天道樣のおにくしみ、受けし此身はいとはねど、樣子聞かねばなんぼでも、いなぬ〳〵」と泣く聲も、嵐と雪に埋もれて、「聞えぬ父」と恨み泣く。次第々々にふりつもる、寒氣に肌も冷え切れば、持病の癪の差込んで、かつぱと轉べばお君はうろ〳〵、さする背中も釘氷、涙かた手に我著物、一重をぬいで母親に、著せてしよんぼり白雪を、すくうて口に含ますれば、漸〳〵に顔を上げ、「ヲゝ、お君もうよござる。此又冷える事はいの。そなたは寒うはないか

勿體ないさりながら、さう思しめすも御尤、大恩を忘れた徒、我身ながらあいその盡きた此體、お詫申したとてお聞入れが何のあろ、そりや思ひ切つてをりまする。お屋敷の軒までも、來られる身ではなけれども、お命にかゝる一大事と、聞いて心も心ならず、顔押しぬぐうて參りました。不孝の罰で目はつぶれる、此子を連れて、爰の軒では追立てられ、かしこの橋ではぶち擲かるゝうきめにあうても、此身の罪にくらぶれば、まだ業の果し樣が足らぬと、未來が猶しも恐ろしい。此上のお願ひには、娘のお君、お目見えと申すは慮外、只の非人の子と思召し、たつた一言お詞を、おかけなされて下され」と、歎けばお君も手を合せ、「申し旦那樣奥樣、外に願ひはござりませぬ、お慈悲に一言物おつしやつて下さりませ」と言馴れし袖乞詞に濱ゆふが、「かはいやな、子心にさへ身を恥ぢて、祖父樣ともばゝ樣とも、得言はぬ樣にしをつたは、皆汝が徒故、畜生の樣な腹から見事犬猫も産みをらず、生れ落つると乞食さす子を、あの樣におとなしう、産付ざまは何事ぞ。あんまり憎うて、おりや物がいはれぬ」と、むごういふのはかはいさの、うらの濱ゆふ、「幾重にも、お慈悲〳〵」と泣くばかり。傔杖猶も聲あらゝか、「親が難儀にあはうがあふまいが、女めがいらざる世話、同じ兄弟でも妹の敷妙は、八幡殿の北の方と呼ばるゝ手柄、姉めは下郎を夫に持てば、根性までが下司女め」

つとの間」「ハテしつこい」と女中の口々。「ヤレ待つてくれ女ども。ヤイ物貰ひ、お足がほしくばなぜ歌を謳はぬぞ。願の筋も何なりと、謳うて聞かせ」と夫の手前、ちつとの間なと隙入れたさ。「あい」とはいへど袖萩が、久しぶりの母の前、琴の組とは引かへて、露命を繫ぐ古糸に、皮も破れし三味線の、「ぱちも慮外も顧みず、お願ひ申し奉る、唄今の憂身の恥しさ。父上や母樣の、お氣に背きし報にて、二世の夫にも引きわかれ、泣きつぶしたる目なし鳥、二人が中のコレ此お君とて、明けて漸十一の、子を持つて知る親の恩、しらぬ祖父樣祖母樣を、したふ此子がいぢらしさ、不便とおぼし給はれ」と、跡謳ひさしせき入る娘。孫と聞くより濱ゆふが、飛立つばかり戸の透間、抱入れたさすがりたさ、祖父もかはらぬ逢ひたさを、隱してわざと尖聲、「ヤアかしましい小歌聞きたうない。女共も奥へいて、お客人に付いて居よ。皆いけいけ。コレサばゝ、何うじ〳〵、早く畜生めを擲出して仕舞やれさ」「ア、コレ、腹立は尤なれど、夫はあんまり」「ハテ扨おばゝ、隙入るゝ程爲にならぬ。武士の家で不義した女郎、擲出すとはまだ親の慈悲、長居せばぶち放さうか。親の恥を思うて名を包むはまだしもと思ひの外、今となつて身の置所がなさの詫言、恥づらもかまはずよくうせた。但しは親へ頰當に、わざと其形を見せにうせたか、につくいやつ」と怒の聲。袖萩悲しさやる方なく、「なんの〳〵誓文、

はる小柴垣。「ムヽ爰はお庭先のしをり門、戸をたゝくにもたゝかれぬ不孝の報、此垣一重が鐵の」門より高う心から、泣く聲さへも憚りて、簀戸に喰付き泣き居たり。傔杖は斯とも知らず、「垣の外に誰やら人聲。アレ女共はをらぬか」と、言ひつゝ自身庭の面。外には夫となつかしさ、恥しさも又先立つて、おほふ袖萩しらぬ父、開けて㧾り戸をぴつしやり。「何の御用」と婢ども、濱ゆふも庭に立出て、「傔杖殿何ぞいの」「イヤ何でもない。見苦しいやつがうせをつて。婢ども追出せ。ばゝ、あんな物見る物でない。こつちへお來やれ〳〵」と、夫の詞は氣も付かず、「何をきよと〳〵といはつしやる、犬でもはいりましたか」と、何心なく戸を開けて、よく〳〵すかせば娘の袖萩。はつとあきれて又ばつたり。娘は聲を聞知れど、母樣かとも得もいはず。母は變りし形を見て、胸一ぱいにふさがる思、押しさげ〳〵、「定めない世といひながら、テモ扨も、扨も〳〵思ひがけもない」「コレ〳〵ばゝ何いやる」「イヤさあ、やつぱり犬でござんした。ほんに憎い犬め、親に背いた天罰で目も潰れたな。神佛にも見離され、定て世に落果てゝをらうとは思うたれど、是は又あんまりきつい落果てやう。今思ひしりをつたか」と、餘所にしらすも涙聲。樣子しらねば婢ども、「さつても慮外な、物貰ひなら中間衆には貰はいで、お庭先へむさくろしい、とつとと出や」とせり立てられ、「ハイ〳〵、どうぞ御了簡なされて、まち

在る」「さこそあらん。夫に付き今日貴殿に心ざしたる此梅は、まだ寒中に室にて溫め咲かせし花、天の自然にあらねども、春を待ち得て咲く花より、早きながめを人の賞翫。又ちる時も其通、しぼみかぢけて見苦しうならぬ先に、此枝のごとくさつぱりと、切れば却て香も深し。花に限らず身にも又、切時が大事、左樣には思はれずや」「ム、御心深き此一品、ちりかゝつたる老の枝、切れと給はる天の賜。花物いはねど御謎に白梅の腹切刀、慥に落手仕る」「ヲ、天晴明察。大江維時なんどいふ、讒者の嵐に吹きちらされぬ其先に、花は三吉野人は武士、名を後の世にちらさぬ樣の、思案ぞあらまほしけれ」と、梅に詞を匂はせて、しづ〳〵立つて入りにける。只さへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間になほす白梅も、無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは、血筋の緣。不便やお袖はとぼ〳〵と、親の大事と聞くつらさ、娘お君に手を引かれ、親は子を杖、子は親を、走らんとすれど雪道に、力なく〳〵たどり來て、垣の外面に「アア嬉しや、誰も見咎めはせなんだの」「イ、エ門口に侍衆が、ゐねぶつて居やしやつた間に」「ヲ、賢い子ぢや。傔杖樣は此春から、主のお屋敷にはござらず、此宮樣の御所にと聞いて、どうやらかうやら爰まで來た事は來たけれど、御勘當の父上母樣、殊に淺ましい此形で、誰が取次いでくれる者もあるまい。お目にかゝつて御難儀の、樣子がどうぞ聞きたや」と、さぐればさ

いかにも存ぜぬ。併しさうおつしやる教氏卿も、以前は流し者にあうて配所の島守、漸此頃召返され、冠装束かけたればとて、正眞の山猿の冠、相手になる口は持たぬ。身が返答はコレかう」と、傍に立つたる件の矢の根、口にくはへて我と我が、肩口つんざく血汐の紅、何かはあやもしら籏に、鏃の筆のさら〳〵と、一文字あざやかに染めなすは、東夷の名にも似ぬ、三十一文字の言の葉に、座もしら梅の枝折りて、冠傾き見えけるが、「ムヽ詞爭ひ無益しと、和歌を以ての返答、我國の梅の花とは見たれども、大宮人はいかゞいふらん。面白し〳〵、我に歌を詠みかけしは、返歌せよとの事ならん。さりながら最前汝がいふごとく、此教氏は父の卿諸共、幼少より島へ赴き、鄙に育ちし恥しさ、雲の上に座を列ねながら、我さへも得詠ぬ歌を、かく卽席に詠叶へし器量骨柄、問ふに及ばず安倍の宗任に違なし。いはれぬ歌で蛙は口から、我と我手に白狀せし、淺はかさよ」と一言に、勝色見する梅花の頓智、術に乗りし無念の宗任、口にくはへし鏃の手裏劍、大將めがけ打返すを、てうど留めたる源氏の白梅、「ホヽウ尤かうこそあるべけれ。生捕るも捕るゝも、時の運命恥とな思ひそ。猶此上に義家が、尋問ふべき仔細あり、こなたへ引け」と引立てさせ、奥の間さして入り給ふ。教氏傍を打ながめ、傔杖が傍近く、「扨々心づかひ察し申す、未言譯の筋もあらざるや」「ハッァ夫故にこそ心を痛め罷

ろ縄、引切るは安かるべきに、わざと下部に引出さるゝは、義家に鬱憤を言はんず爲な、聞いて得させん、サア何と、語れいかに」とのたまへば、「是は又思ひがけもない、そんなむづかしい名は生れてから、聞いた事もござりませぬ。ばくち打の南兵衛に違なければ、元よりお前様に勿體ない、鬱憤とやら一分とやら、きなかもかけ直は申しませぬ。兎角命が惜しいばつかり、どうぞお慈悲に縄といて、お助けなされて下さりませ」と、泣かぬばかりのしらぐ\しさ。「ムム然らば汝うぶの匹夫下郎に違ないな。此籏を見知つてをるか、是こそ我父伊豫守、奥州追伐の折から、押立て給ひし白籏、其時宗任が親安倍頼時、大將めがけ放ちし矢先、ねらひはづれて此籏に受けとめ、卽時に踏折り捨てられし、其矢の根はコレ此所に。ハヽヽヽ、頼時づれが拙き運にて、源氏に敵對叶はぬ事。今にも其餘類あらば、却て敵の此矢を以て、斯くの通り」とてうど打つ、鏃は庭の手水鉢、じろりと見やつて、「是は扨、あぶない事を」とそらさぬ顏。敎氏卿進出で、「よし手練はともあれ、たとへ眞の宗任なりとも、匹夫下郎に等しき男、大望の企思ひもよらず。奥州の果に生れ、草木の名も知らぬ鹿猿同然の族、かくいふが無念ならば、コレこの花の名を知りつるか」と、白梅取つて指出し、「東夷の目にはよも知るまじ、知つたらばいうて見よや」と嘲哢ある。宗任ぐつとせき上げ、「南兵衛といふ下郎でござれば、花の名は

我推察もそのごとく、此程奥州より捕へ來る鶴殺の科人、つら魂尋常ならず、肩口に二つの痣、是ぞ兼ねて聞及ぶ目印、疑もなく安倍宗任。一人は手に入れしが、今一人の兄貞任、此兩人さへ捕へなば、宮の行方明白たらんと、則彼の宗任を此館へ引かせ來る、禁廷の御沙汰なき中に、詮議肝要たるべし」と、力を付くる時しもあれ、桂中納言樣御出なりとしらすれば、「ソレ氣遣、私の內意か勅諚か、女儀は次へ」と改むる、座席に心殘れども、母と娘は立つて行く。中納言教氏卿、衣冠の袂に薰りくる、雪より出でて雪より白き白梅一枝、小四方に取乘せ持參あり。「傔杖には此間、公の御不審蒙り、嘸心を痛められん。鬱氣をはらす此梅、まだ冬籠の枝なれど進上申す。此花と諸共、喜悅の眉を開かれよ」と、直方が前に差出し、「義家朝臣のおはするも、彼詮議の一條ならん。殊更親き一家の中、御心底察し入る」「コハ卿の御詞とも覺えず、一家は一家、政道に依怙なき義家、詮議の手がかりになるべき科人、先達て捕へ置く。ヤアく義家が家來共、鶴殺しを是へ引け」と、呼はり給ふ一聲に、「鶴の科人出でをらう」と、權威の下部は蠅蟲と見下し、破布子の繩付ながら、眼中威勢備はつて、實に大將と大將の、見參とこそ見えにけれ。「鶴を打つたる科人、外が濱の南兵衛とは假の名、奥州の住人、安倍の賴時が次男宗任ともいはるゝ勇士、夫程のへろへ

る事と、そちを嫁らした其時より、聟引出に赤旗一流遣はし、八幡殿より此白旗一流、取かへて所持せしは、兩家合體の其印。此度の我誤りに付いては言甲斐なき舅、よしなき縁を組みしよと思はれんは必定。大方娘と縁切つて、此旗を取戻しに來るであらう。若し去られたら其思ひはいかばかり、どうぞ此白旗のやはり此家に止る樣にと、此頃神前に飾り置き毎日祈るかひあつて、今日娘を表向の使者として、差越されし八幡殿の心底、たとへ聟舅、敵味方になるとても、敷妙は去らぬとある情の謎。老人が心を察し、心づかひの御深切、逢うては禮も言はれぬ義理。お使者歸つて申されうは、仰越さるゝ趣一々承知仕る。委細の心底は對面の上申聞けん、お出を待つと傳へられよ。お使者大儀」と式禮も、弓矢の面裏門口、「八幡太郎參上」と、白衣ながらに入り給へば、「コハいつの間に」と敷妙も不審立ちそに立つ母親、此比絶えし一家の參會、お茶よお菓子と賑々し。直方邊に目をくばり、懷中より一通取出し、「親しい中にも胸中を計りかね、今日までは聟殿にも包みしが、宮の御行方尋ぬべき手がかりといふは此狀、契約のごとく環の宮を密に盜出しくれよと、匣の內侍へ頼みの文體、名は誰ともなけれども、必定安倍の賴時が餘類、貞任宗任兄弟の族、奪取つて儕等が、味方を集むる柱にせん爲。さあれば御命に別條なしと、心の安堵はしながらも、言譯立たぬ身

ぬやら、朱雀堤の橋の上で」「エヽ、橋の上で何としたえ」「サア、いや何ともせぬ。たとへ橋の上で、のたれ死しをらうが、不便なとも思はぬ、お身は又何とぞ思ふ氣か」「イヽエ、何とも存じませぬ」「ヲヽ、身共は結句心地よく思ふはい」と、口は憎てい、身を背け、物事つゝまぬ夫婦中、淚一つは隱しあふ。妐共が取次の間、「敷妙樣御出」と、娘ながらも案内は、武家の行儀の表門、遺親子の中座敷、「ヲヽ此頃は便もなし、心地でも惡しいかと、傔杖殿も案じてぢやに、ようおぢやつた。サア〱爰へ。テモ美しう髮結やつた」と、子供の樣に思ふは母、「イヤ申し、けふ參つたはお見舞ではない。傔杖樣へ、夫八幡太郎義家が使者でござります」「ムヽ、ハテかはつた。表向の用事ならば、家來は越さで、そなたを使者とは」「コレ〱奥だまりやれ。何にもせよ使者とあれば、娘は内證。いざ御使者、御口上の趣承はらん」とありければ、「義家申越す仔細、環の宮お行方なき事、御傅の傔杖殿誤據なし。日延の日數も今日限、若しも言譯なきに於ては、罪を正す義家が役、聟舅の容赦は致さず、勅諚を以て取圍み、敵味方となり申さん、其時必ず遺恨にばし思されな。其爲申し遣はす。使者の口上あら〱、斯くの通りでござんす」と、語る中より傔杖直方、いそ〱立つて一間の内、柳箱に飾つたる、簱と思しく携へ出で、「扨々八幡殿は天晴仁ある大將かな。元來某は平家、八幡殿は源氏、聟舅となるは稀な

つもる白髪に雪折れて、妻の濱ゆふ只二人、夫婦の人なんいまそかりける。緣先に立出で、「なう殿、お年寄の雪ふりに、庭へ出て何なさるゝ。寒氣が入らうに、もうおはいり、ちと火にお寄り」ときり炭の、じようになるまで女夫合。「サレバ〳〵、宮樣行方なくなり給へば、此御所は明屋敷、我々夫婦が箇樣に御番は致せども、肝心の主なければ、玉の御殿も烏の塒と成果て、今日なども宮おはしますならば、仕丁共に木の葉の雪を拂はせて、御遊びなされうものをと、ふと思出して子供の眞似する雪なぶり、天地の中にさへましまさば、奪ひ返して此恥辱すゝがんものと、心は雲にも入りたけれど、都の中を身動きならねば、空しく胸を煎るばかり。不便なは娘敷妙、日本の智者と呼ばるゝ、八幡殿に連添ひながら、不覺を取つた此親故、夫の手前も恥しく、嘸肩身がすぼらうと、そも此春より一夜さも、實にねた夜はおぢやらぬ」と、奥齒もれくるまばら聲、「ア、よござりますはいの、弓取の不覺といふは軍の中の臆病、こりやほんの災難、敷妙が事おつしやるに付けて、思ひ出すは姉娘の袖萩、親にもしらさず、忍び男を拵へての家出、憎い奴と思うたも早一昔、其時はまだ十六の跡先なし、年もいたれば嘸今頃は悔しう思うてゐるであろ。どこにうろたへて居る事ぞ」「エ、又姉めが事くど〳〵と、思ひ出すも穢はしい。不孝者といはうか、武士の家の不義放埒、再び顔も見まじと思ひしに、まだ業がみて

まつぴら御赦免、いやもう拙者も御一門の家來なれば、只今のは御心安立。イヤ姫君にももう
お立ち、お供廻りはどつちへうせた、參れ〳〵」と脇道へ。「ホンニそれ〳〵、自らも、夜の更け
ぬ内歸るがよかろ。此間にちやつと行くがよかろ」としらせの謎、お袖が小屋の後から、押し
やる主従妹脊の別れ、親子のわかれは子は知らで、親の思ひの闇深き。傔杖が郎等あわたゞし
く、「只今大江維時公より、宮の御詮議何故に遅なはる、日延の時刻も一日にせまる、尋出す
か切腹有るか、二つ一つの御返事有るべしとの御事なり」「ナニ維時が使とな、直に逢ひて返答
せん。供せよ彌惣太、挑燈もて」とゆふ嵐、鐘もときつく八重幡姫、「傔杖様の一大事、アヽ氣
遣はしや」「家來共乗物參れ」と呼はる聲、お袖が聞付け「申し〳〵、傔杖様とは平傔杖直方
様ではござりませぬか」「イヤ夫聞いて何にする」「ヤア、そんなら今のが。コレ申し、一大事と
は何の譯、ちよつと聞かして」「ヤア面倒な」と突飛し、「乗物いそげ」と四郎が逸參、慈悲もしら
砂ころ〳〵〳〵、ころぶ蘆邊の濱千鳥、嵐に髪もばら〳〵〳〵、親子手を取り雪の足、跡をしたう
て 三重 たどり行く、心の内こそ哀なれ。平傔杖直方、環の宮の御行方、知らぬ筑紫のほとゝ
ぎす、夏去り冬のいつしかに、既に今年の日の數も、春待つばかり枯殘り、枯果つる庭の檜皮
ぶき、落葉の軒とふきかへて、殿守の女中仕丁もなく、老の忠義の一筋に、竹の園生の傅も、

「イヤ何、其儀は貴公も此程御吟味なさるゝ、宮を奪ひし曲者、草をわかつて詮議せよと主人が云付。姫君も是にお渡り、此小屋が物くさい。ソレ家來共」「ナイ〳〵、非人め出ませい」「出をらう」と、呼ばれておづ〳〵這出づる。「つゝと出をらう」「ハイ」「まだ出をらう」「ハイ」「頰上げい」と突付ける箱挑燈の火明りは、老眼にも見違へぬ、絶えて久しき我娘。ハツ〳〵とばかり仰天ながら、聲をくろめ、直方「ムウ此小屋の非人は汝か。ハア非人ぢやよな。汝もよもや腹からの乞食とも見えぬ。町人か但しは武士の娘か」「ハイ御推量の通、成下つたは若氣の誤り、清水詣の折から、東國方の浪人と不圖馴初め、種を宿して是非なき家出、其夫にもあふぎの別れ」直「ホイ、はてな」四郎「ヤアくど〳〵云ふ手間で、うぬが親夫の名をぬかせ」「ハイ、夫ばつかりはどうも」四郎「なぜ〳〵」「名を申すほど不孝の上ぬり、此身こそかう成つたれ、親の名は出すまいと、晝は袖乞も得致さぬは、せめてもの申譯」直「ヲヽ尤さう有らう。今の其心底を、誠の親が聞くならば」と、我名は言はぬけんぢやう向、千々に心ぞこもりける。四「ヤア彌以て胡亂者、まだ隱して有るやつが有らう、直に詮議」と立寄る鐺、しつかと取つて、直「お待ちやれ四郎、宮を奪ひしやつの詮議、お身は賴まぬ身どもがする、横合からいつかい世話。但し老人でかやうの吟味も得せまいと思うてか、推參至極」ときめ付けられ、「ア、これ〳〵

しや道理と倶涙、六も數獻の持ちこしに、貰涙のかい作。「どうやら酒が理に入つて、おれも悲しい〳〵」と、しやくり上げたる折からに、かけ來る次郎七九助、「コリヤ〳〵六、何して居る、きり〳〵しかけて疊んでしまへ。後詰にはおいらがゐる。早う〳〵」とせり立つれば、ないじやくり、「次郎七か、九助か、エヽわいらはえい機嫌ぢやな。おりやさつきにから哀な咄を聞いて、泣いてばつかり居るはいやい。わいらもアレ、あなた方の形を見い。雛樣のやうなお姫樣が、酒買ふ錢がないから、乞食に酒を振舞はれ、せめて天目でも有る事か、嚙みわる樣な盃に、酒ならたつた一升で、誤つてござる心根が、思ひやられておいとしい」と、涙と倶に又どぶ〳〵。「エヽいま〳〵しい又喰うたな。其酒こちへ」とたくりにかゝれば、「イヤ〳〵、夫から御らうじませう。どなたでもどいつでも、旦那衆に手向ふやつら、おれが相手」と、尻引つからげかこうたり。「どつこいやらぬは乞食に差合、貰うてこませ」と兩方から、取付くつゞれの破れかぶれ、うぬらは世界の餘り物、命の高はげんこ取り、ころ〳〵轉び迯行くを、酒に任せて追うて行く。向うに數多の人音は、「申し〳〵、今の侍がくるので有らう。ちつとの間わたしが小屋へ」と、二人を伴ひ入る間もなく、血眼になつて瓜割四郎、どつちへうせたと家來もしどろ、しばし〳〵と傔杖直方、「コレサ四郎、あわたゞしい面色、先何を詮議めさるゝ」と尋ねられて、

君、教へて置いた祝言の長柄、お酌申しや」と挨拶に、姫君嬉しく盃の、底意晴れたる取結び、さいつさゝれつ酌みかはす。待ぶせしたる非人の六、酒の匂ひをかぐよりも、以前の仕込は忘れて仕舞、ほや〳〵笑顔もみ手して、「へ、、、、、ホ、、、、、おめでたい御祝言、私もお取持にちつとお間、お酌是へ」とかけ茶碗、息なしに咽ごく〳〵、「ホウ、結構なお酒でござりまする。ハ、、、、旦那慮外申しまする」肴は爰に有山の、面桶の底から鮹の足。「イヤ過分ながら身は精進」「そんなら私祝うて最一つ下さりましよ。お家様上げましよか、おいやか、そんならも一つ下さりましよ。御寮人様もおいやか。そんなら我等も一つ」と、ほつとする程續呑み。戀絹が替つてお酌。「イヤ〳〵申し、見苦しくともやつぱりあれに、娘が生長あなた方にあやかり、よい殿御持つて祝言を、ホ、、、、わたしとしたことが、非人乞食の身の上で、何の祝言どころと嘸お笑ひなされう。思へば〳〵淺ましい身の上。ハ是はしたり、大事のめでたい御祝言につい涙が、私も祝うて、謠君は千代ませ〳〵と、くり言を祝ひ歌の、面白の時代や、おめでたや〳〵。祝ふに付けて我娘も、昔の身ならお乳めのと、對待十炷香藝づくし、教へも覺えもせうものを、ろくな事でも教へるか、橋の上の乞食の娘、誰が娶にも取つてくれう。侍の種を受けながら、町人百姓にも緣付の、ならぬは何の報いぞ」と、昔を忍ぶ悔泣、身につまされて三人も、いと

まぬ中、わざと慇懃三つ指に、「先以て姫君樣、御安泰の尊顏を拜し、恐悅至極と」相述ぶる。「ヲヽさういやるは無理ならず、したがもう其樣に氣を置いで下さんな、わしやふつゝりと思ひ諦め、心の髮は切つて居る。ハテ、思ひ合つた中を引分け添うて何の本望。殊に兄上のお媒遊した戀絹殿、中よう添うて其代り、未來の緣をコレどうぞ、賴みまする夫婦の衆」と、思ひ切つては中々に、見向もやらぬ心根に、戀絹も恥入つて、「勿體ない〳〵、夫を聞いてはわたしが方から、思ひ切るとも申されぬは、ひよんな物を身にやどし、退くにも退かれぬ惡緣。そんなら御詞にあまえて、お大事の物なれど、此世はわたしが借分、來世ではきつとお歸し申しまする其證據、ちよつと爰で御祝言のお盃がさせましたいが、アヽどうがな」と案ずれば、「其お盃私が差上げましよ」と、小屋の簾を押上げて、さぐる目病のすり足に、緣も缺けたる三寶土器、つゞれの上の襠は、やれても昔床しげに、「どなたかは存じませぬが、最前から御尤なせつない戀のお咄、私も仔細有つて夫に飽かぬ別れをせし者、身に引當てゝおいとしぼく、つゞれの袖をしぼりしぞや。かやうに申さば賤しいきたない非人めが、穢らはしいとも思さうが、私とてもまんざら、前からかうした身でもござりませぬ。今日は此ちひさいやつが誕生日、昔を思ひ出して調へし九獻熨斗昆布、心ばかりの身祝ひ。幸の折からと、慮外を忘れたお媒。サアお

す、そこでげんさいをあなたへ渡すと、御褒美にきすは存分。あなたの振舞呑込んだか」「ム、酒呑ますか、嘘ぢやないかよ。コレ殿樣、そんならマア酒の方を先へせうかい」「イヤ〳〵、あの上呑すと本たはいになります」「ヲ、サ、コリヤ六とやら、しおほせた跡では、呑喰はわが望次第、酒は伊丹の薦かぶり」「ヲツト差合言はるな」「ム、こりや麁相。肴は鰒汁」「夫も差合、鰒はおれが同行中ぢや」と、横にふくれた腹鼓、咽をならして別れ行く。「もう人通りもなささうな、仕舞うて休も、サアお君」と、親子かたへの小屋の中、烏のふしどと隣同士、露を荷ひし乘物釣らせ、源家の妹八重幡姬、こなたの土手を眞直に、平傔杖直方、互に行き合ふ挑燈の、紋に見しりの一家中、「是は〳〵八重幡殿、夜中に何國へ」「ちと心願の事有つて」「ム、神詣か、步づから殊勝〳〵」と挨拶半、生駒之助は戀絹が、手を引き漸火かげを目宛、「狼藉者に出合ひ難儀致す、憚ながら此女を、暫しが間お預り」と、差出す挑燈、ハット悔り迯行くを、傔杖目早く、「コリヤ〳〵若者、わりや道に迷うたな、此處は京、きやうちうが闇いから、人の誠の本海道は行かずして、色々の道に迷うて居るな。ソレ火を借つてとつくりと、心の闇を見たり見せたり。身共は老人、猶以て何にも見えぬ。よし見えても、八重幡殿とは一家の中、急の用事、早參る」とはづす老巧粹親仁。婢下部さし心得、一人も殘らずばら〳〵と、氣を通されても濟

ぢやぞ、けんさいの傍にべら〳〵と、おけよ」「又六めはえらう引いてうせたな。あいつはえい得意を持ちをつて、濱脇の料理茶屋で、酒肴の喰飽しをる」「サヽ夫がけたいぢや、おりや業がわいてならんはい。けふも川作の屋敷振舞喰て來たが、惣體近年茶屋方の料理が粋過ぎて、おれが口に合はぬ、夫で腹が立つが無理か。そいで大道掃けの犬追へのと、下男か何ぞの樣につかひくさる。是ではもう乞食もやめにやならぬ。コリヤお君よ、をぢが風車買うてやろが、えらいか、おりやもうわれが可愛いて〳〵腹が立つはい」「ヲヽもうこちの娘が可愛いのが何の腹の立つ事で」「腹が立たいぢや、コレおめく、一體おりや、わがみの器量のえいのが腹が立つ、乞食だてら、そんな美しい顏がどこに有るものぢや、無理か、むりならどいつでも相手ぢや」と、くだまく聲も酒くさ原、踏分け來る瓜割四郎。「ソレ今のお侍樣、ハア」と二人が犬蹲ひ、「非人共が最前言つた生駒之助、傾城戀絹取迯したか、何と〳〵」「サア申し、晝ちよつと眼ばりましたれど、先もざぶなりや、めつさうにはかゝられず、ヤ幸爰にをる六といふやつは、酒くらふとあはう力、こいつに仕事さしませう。コリヤ六よ、爰へこい。又存在な臑投出して、辭義しをれやい」「いやぢや、おりや茶やの料理人より外に腰かゞめた事がない」「イヤサよう聞け、其二人のやつ、おいらが往て、ぐづりかけて爰へおこすは。われが爰に待伏して居て、男めをぶちのめ

成りて住むこそ是非なけれ。王城の地は物貰も、つゞれさつぱり月代天窓、「どうぢやめくのお袖、よい貰が有るさうなの」「ヲ、かさの次郎殿か、今夜は闇で、人通は少し、北風は吹付ける、手がはぢかんで、三味線も引かれるこつちやない」「何をぜいらしい、寒の中に涼むのが、わがみの渡世ぢやないかいの。がりまはいねむりやせんかよ、商賣におよそな奴では有る」「ヲ、イどいつぢや、ム、とんとこの九助今仕舞うたか、儲けるな〳〵」「イヤ〳〵、とんとこも初手は取つたもんぢやが、せんぐりに新物が出てとんと衰微、もう今は町中がお長めに喰付き切つた。まだどういうても角を絶さぬ奴は佐野の源左衛門、あいつは株ぢや」「したがわりやよい儲けが有るかして、見りや立派な御座をかぶつて、はでな形するなァ」「へ、いやもうこいつも冷たうて悪い物やい、ほんの見てくればつかりぢやはい」「色取るな〳〵」「ホ、、、、ほんに夫も一盛、此方は此子一人が樂しみ。去年までは相應に一重の物でも縫うて著せたが、此春から内障に成り、俄盲で娘に介抱受ける身の上、行先を思ひ廻せば夜の目も合はず。今日はお君が誕生日、こんな中でも大事の身祝ひ、こな樣方にも祝うて貰ほと、酒も小屋に買うて置いた。したがあの六殿にはさたなしぢやぞや」「ヲ、あいつに呑ましたら一升や二升はついころり」と、人事いはゞ筵まで、呑上げる非人の六、諸方のしたみに目はすわり、ふくれ返つた腹立上戸、「けたい

るべきぞ。只切腹を御容赦」と、おつ取る刀踏落し、「ヤアうろたへたるたはけ者、たとへ我兄、ナそれわれが兄の子、名は清童子といふにもせよ、定まる命は力及ばぬ。一人にても味方を招く今此時、犬死して忠義になるか」「スリャ死ぬるにも死なれぬ命」「ヲヽまさかの時まで汝に預くる。いざお役人御苦勞ながら」と、いさむ繩付しをるゝ善知鳥、妻は泣く〳〵野邊送り、何營もなきがらは、子で子にあらぬ郭公、泣く聲をはつて血を吐く鳥、親も傍にて血の涙、ふらせばお谷がすが簑や、死骸を覆ふ隱れ笠、隱れあらざる弓取の、其御種ともお主とも、いふにいはれぬ苦しさは、鴛鴦を殺せし科やらん。善知鳥は返つて生殘り、我は擒となつたるも、敵を欺く氣の大鳥、追付け天下に羽うつ鳥、數々鳥の報いを爰にみちのくの、外が濱なる善知鳥の宮、安方町と名も高き、古跡は今に殘りける。

第三

されば にや少將は、百夜通へとゆふ闇の、笠にふる雪つもる雪、戀の重荷の朱雀道、七條堤の假橋に、盲女の引語り、襤褸の中の祕藏娘、十ばかりなが手を出して、右や左の道通り、西は九州さつまがた、鬼界が島の果までも、わしや行く氣ぢやにさりとては、花の都に袖乞と、

く都へ引かれよ」と、思ひがけなき一言を、聞くより文治氣をいらち、「ヤアいはれぬ我をかばひ立、證據が有らうが有るまいが、科人は此文治」「イヤサ證據が有れば鶴殺しは此南兵衛」「イヤ某」と、あらそふ二人を制する捕手、慥なる證據有れば、科人は南兵衛に極る。此上は善知鳥がいましめ、はやとく〳〵」と南兵衛に、かけ替つたる縛り繩。「ヤアいつまでも此文治、家來の替りに御主人」と、いふを打ちけし。「コリヤ〳〵鶴殺しとなつて都へ引かれ、八幡太郎に見參せば、それこそ日頃の願成就。ナ合點か」と、目まぜにはつと心付き、「すりや御所存有つて」「ホヽ會稽は今此時」「イヤ〳〵それは無用の振舞、たとへ再會の期は有るとも、身うごきならぬ其いましめ」「何の是しき、たとへ鐵の鎖を以て繋ぐとも、我爲にはわらしべ同然、一念頭にとゞまつて、本意を遂げし眉間尺、口に劔はふくまずとも、一心のねた刃を合さば、何條事の有るべきぞ。ナ心得たるか安方」と、身を鐵石にかためたる、詞に善知鳥も詮方なく、たとへ縄目は助かつても、存命ならずと肌くつろげ、山刀抜き放せば、こはそもいかゞと止むる女房、南兵衛聲かけ、「ヤア何故の切腹、仔細ばし有つての事か」と、問ひかけられて涙を流し、「今は何をか包み申さん、只今死せし悴と申すは、我々夫婦が子にあらず、三代相恩の御主人より預りし大事の和子、御大病の介抱も、心に任せぬ身貧の某、此後主人にめぐり逢はゞ、何と言譯有

か淺ましや」と、妻が歎けば、夫は猶、涙にむせぶ聲を上げ、四百四病の煩ひより、貧程つらいものが有らうか。我子に呑ます人參の、價にせんと鶴を打ち、其鶴故に我命、取らるゝのみか子も死ぬる。思へば是まで多くの殺生、數多の鳥を殺す中にも、まだ巣離れもせぬ小鳥を、育てん爲に親鳥の、野山におりて餌を尋ぬる、夫とも知らず親鳥を殺せば、殘りし子鳥も死ぬる。まつ其如く我々も、子を助けんとて此親が、死ぬれば殘りし子も死ぬるは、歷然報う因果の道理、親故不便な死をさすか、こらへてくれ赦してくれ。父も追付け行く程に、六道の辻で必待つて居てくれよ」と、後や枕に取付いて、夫婦は前後正體も、取亂したるばかりなり。捕手は哀よそ目に見なし、「ヤア未練の歎に時移る」と、立寄つて引立つれば、是非もなはめに恥ぢしめられ、しを／＼として立上る。「コレなう暫しと、女房が、寄るを突退けすがるを拂ひ、前後嚴しく取りまく人數、「ヤアお役人まづ待つた、鶴殺しの科人は是に在り、人違ひばしせらるゝな」と、聲をかけて南兵衛が、一間を出づれば捕手の頭、「ヤア自分の白狀によつて繩かけし善知鳥安方、其外の科人とは紛はしき胡亂者、但し鶴を殺したる證據有つてか何と／＼」「ヲヽ、證據は則ちこれ爰に」と、投出したる金の札、「鶴が岡の神前において、八幡太郎是を放つと彫り付けし金の札、其の札を所持するからは、紛れもない鶴殺し、科ない者を縛らずとも繩といて某を、早

つていた訴狀にも」「ヲヽ自分の科を自分の白狀」「そんなら私が無筆故、夫でだましてやつたのぢやの。ハア」はつとばかりに伏轉び、途方なみだにくれけるが、「扨も〳〵世の中に、物書かぬ身の上程、つらい悲しいもの有らうか。連添ふ男の身の科を、書記した物とも知らず、悅びいさみ代官所へ、持つていたは何事ぞ。せめていろはを讀む程なりと、此目が明いて有るならば、何のいかうぞ。無筆と知つてかういふ使に、やつたはわしを世の人の、物かゝぬ身の見せしめに、なれといふのか文治殿、そりやあんまりどうよくな、むごい難面い心や」と、正體なみだに伏し沈む。夫も不便の淚を拂ひ、「ホヽ其恨も尤ながら、何事も定まる業と諦めて、淸童を隨分大事に、ナ彼人へ賴置く事是まで〳〵。サア繩かけて引かれよ」と、詞に猶豫も捕手の役人、「ヲヽ神妙なり」と立寄つて、かくる繩目に取り付いて、お谷が泣聲淸童が、屛風力に延び上り、「アレとゝ樣が縛られてぢや、詫言して下され」と、いふ聲倶に屛風もばつたり落入る我子。「ヤアこれ淸童が死ぬはいの、コレなう是」とうろつく女房、繩付ながら夫もうろうろ、「コリヤ淸童、必死んでくれなよ。われを助けうばつかりに、此とゝが命を捨つる。コリヤ氣を付けよ淸童、淸童やい」「淸童いの」と、呼べどさけべど息絶えて、其かひさらになきたふれ、「けふはいかなる日なるぞや、我子に離れ夫に別れ、一人殘つてそもやそも、あられうもの

兒貞任の行方まで、しら浪寄する浦々島々、はや義家が領地となれば、廣い世界に此體、置所さへなつ木立、木にも萱にも油斷せぬ、身と成り果つる其無念、腦を貫き腸を斷つといへども、時來らねば十三年、仇に戴く天の咎、磐石と成つて五體を碎く父の怨、追付け討つて尊靈へ、手向の追福仕らん」と、初めて明す南兵衞が、氏も系圖も陸奧に、竝ぶ方なき勇氣の大將。「ハア、適なる御心底、其御物語が直に追善。喜山大居士安樂國、南無阿彌陀佛」と回向の中、表へ誰か人音に、先暫くと間の襖、さし心得て待つ所へ、斯くとも知らず女房は、褒美の金に氣もいさみ、心も足もいそ〳〵と、「サア〳〵お金貰うて來た。代官樣のおつしやるには、追付け捕人を遣す程に、先へいんで取逃さぬ樣にせいとの云付、もう此處へ見えるであろ。南兵衞は逃げはせぬか、かういふ中も油斷がならぬ、早う來てちやつと縛つて下されいで」と、見やる表へ捕人の大勢、門口より大音上げ、「岩城山の麓において、鶴を殺せし大罪人は、此家の主善知鳥安方と、女房が訴人によつて召捕に向うたり。尋常に繩かゝれ」と、呼はる聲に文治安方、「顯れし上は隱すに詮なし、お尋の鶴殺し、繩かけて引かれよ」と、夫の覺悟にお谷が恟り、「コレそりやマア何をいふのぢやいの、鶴殺しは奧にゐる」「ヲヽ、南兵衞というたは僞、そちを訴人にやらうばかり。岩城山の麓にて鶴を殺し、金の札を取つたるは此安方」「エイ、すりや今私が持

かり、世を去り給ひし其月日は」「ヲヽ、卽今月今日が、父賴時の十三回忌、法名大了院殿喜山大居士、出離生死頓證菩提」と、唱ふる聲に立寄つて、障子ひらけば南兵衞が、姿は素袍立烏ぼし、一つの位牌を上座に直し、合掌したる有樣は、興さめてこそ見えにけれ。文治はふしぎの膝立直し、「賴時公を父上とは、心得ぬ今の詞、仔細いかゞ」と尋ぬれば、「ヲヽ、不審尤、合戰の砌までは、まだ部屋住の其方、我面體を見知らぬは理至極。鳥海の城郭にて人となりし、安倍の三郎宗任」と、聞くより安方ハヽヽはつと飛しさり、頭をたれて平伏す。宗任素袍の威儀繕ひ、「只今も申すごとく、今日父が忌日に當れば、平人の形で回向申すも云ひがひなく、暫く昔に立歸る我心は、是より直に都に上り、折を待つて父が仇、八幡太郎義家を討ちとらんず軍の門出」「ハァ御尤なる御思立。猶も御心勵す一條、御父安倍の賴時公、栗坂の合戰に、討死有りし其時は」「ホヽ、兄貞任と諸共に、衣川の城内にて」「軍の次第逐一に、申上げしは我父前司安秀。其身も深手老の身の、栗坂より引返し、軍難儀に見え候、早く此城落ち給へ、早とくと、進むる月日はいかなる惡日、天喜五年九月五日」「ホヽ其光陰も三つ羽の征矢、流矢來つて我父の、綿噛のはづれより、骨を碎いてむづと立つ、急所の痛手に勇氣もくじけ、つひに其手で果て給ふ。大將死すれば家の子郎等、親子兄弟ちりぐ〳〵に、妻に別れ子をふり捨て、

厄病の神で敵とやら」「ヲヽあいつなら少々こちから金出してなと、訴人のしたい惡者。そんならわしは一走いてくる程に、どこもかもようしめて、取にがさぬ様にして置かしやんせ」と、小づま引上げいそ〳〵と、代官所へと急ぎ行く。夫は奥に氣をくばり、そろ〳〵ひらく佛壇の、佛の箔の光さへ、薄き樒の花抹香、撞木取出したゝき鉦、「なまいだ〳〵」聲も幽に、「とゝ樣やかゝ樣はどこにぢや、こゝが術ない〳〵」と、苦しむ聲に鉦打止め、「ヲヽとゝは爰にゐる、嬶もおつ付け戻るが、藥でも呑みたいか」「イヤ〳〵藥はいやぢや。コレとゝ樣、必どこへもいて下さんなや。お前が留守ならおりや淋しい」「ヲヽ氣づかひすな、どつこへもいきやせぬいきやせぬ」と、口にはいへど心には、鶴を殺した科故に、今縛られて行くとも知らず、我を慕ふ志、可愛の者やいぢらしやと、思へば胸も張りさける、涙隱して、「コリヤ淸童、とゝはどこへもいきやせねどな、もし用が有つて代官所から呼びに來ると行かにやならぬ。其時必泣くなよ。どうぞ早うまめになつてな。とゝが今看經するは大事のお主、其主の名を覺えて、大きう成るまで忘れなよ」と、又佛壇に指向ひ、「なむ俗名　安倍の大夫賴時公、家臣鳥海の前司安秀が一子、同苗文治安方、今生にての回向の仕納め。南無阿彌陀佛〳〵。アヽ此殿未在世の時は、斯く申す我々まで、倶に榮花にほこりしが、いかなれば御武運拙く、八幡太郎義家が計略の矢先にか

早うようして下さんせ。頼む／＼」といふ内も、涙呑込むくもり聲。「ア、やくたいもない事いふ人、コレよう思うても見や、以前は鑓も持たせた身分、浪人したとて魂まで、女房賣るほど穢れもせぬ。氣づかひ仕やんな、人參代もとうから工面して置いた」と、ずつと立つて膳棚の、隅からおろす硯箱、縁はかけても放れても、昔しみ込む墨の折、ゆがまぬ武士の達筆に、さら／＼と書認め、「コレお谷、大儀ながら此一通、代官所まで持つていきや」「アノ此書た物を代官所へ持つていけとはへ」「サア夫を代官所へ持つて行くと、大分の金がくる」「ム、そりや又どうして」「サア今戻る道で聞けば、鶴を殺した者を訴人すると、褒美は黄金十枚との噂。其鶴を殺した者を、わしがよう知つてゐるによつて、夫でわがみを訴人にやるのぢや」「エイお前も日比の氣に似合はぬ、嗜ましやんせ。人の惡事を訴人して、褒美に貰うた其金で、どんな藥を呑ましたとて、何のきかうぞ本復せうぞ。恐しい事工まずとも、やつぱり私を勤奉公。親はなし兄弟持たず、お前さへ合點なりや、誰が點の打人はない。聞分けて下さんせ」と、縋り歎けば、「はて扨、役にも立たぬ事いはずと早ういきや。わしぢやとて人の命、何の訴人がしたからう。けれども是ばかりは訴人しても大事ない奴」「ム、大事ないとはそりやまあどこの」「イヤ外ではない、奥に居るあの南兵衛」「エイすりやあの南兵衛が」「シイ、聲が高い。ほんの是が

當座の質物」「ヲヽ金にさへなる物なら、受取つてやらうが、三兩ではまだたらぬ」「ホヽ其不足も、暮合ひまでには急度濟さう」「ムヽ暮までなら間もない事、えいは待てやらうというてもほんなしなりや、いんで居る内がない。暮れるまで爰の内で居催促。コレ五助、大儀ぢや有つた、休んで貰ふ」「ハイ／＼そんならもうよござりますか。ヤレ／＼親方の役もよつ程氣のはるもの、さらばお暇申さう」と、立出づればお谷は不審、「あの傾城屋といふは」「ヲヽ虚言ぢや。かうしてゆすらにや金にならぬ、何とようしたものか。奥へいて一寐入せう、ほんまくられて昨日からつがずほう。お方、飯が出來たら起して下はれ、雜作ついでに酒も一ぱい」のみ取眼のいがみ頬、襖押明け奥に入る。跡には思案有り顔の、夫の傍に差寄つて、「申しこちの人、今南兵衛にやらしやんしたは、ありやマア何でござんす」と、問ひかけられて、「イヤありや此間ひらうて來たが、何の役に立たぬ物と思ひの外結構な金の札、あす入る人參代にと思うたれど、ほんの寶は差合せ」「ヲヽそんな物ならあいつにやらずと置いたがよい。今さらいふに及ばねど、淸童の煩ひより、夫婦が着替はいふに及ばず、諸道具までも賣拂ひ、けふまで續けた人參代、もうあす入る人參の、代さへ人に渡して仕舞ひ、何の力であの子の本復。見殺しにせうよりは、南兵衛がいうたを幸、わしを勤に賣つてやり、其金で人參を、一分なりとたんと入れ、一日も

しやんも指さきで、おのれ一人が呑込仕事、「安い物ぢやぞえ、上方の相場なら、五十兩はぶらぶら、田舎だけで直打がない。コレおかた、大儀ながらいて貰ふかい」「ム、いて貰ふかとはどこへ何しに」「ハテ青森の町へ勤奉公に」「イヤコレ南兵衞殿、仇口はいつもの事と、聞流しにして居れば、付上つて出はうだい、あた穢らはしい勤とは。わしには善知鳥文治と云ふ、れつきとした男が有るぞや」「ハ、、、れつきとした男かして、借つた銀をれつきと戻さぬ。もう催促も仕草臥れた、ぢやによつて汝を賣るのは、高が借した銀取るのぢや。有りがたいと思うて、きり〳〵いきやいの。但しわしが引立てうか」と、無法無體をとくよりも、戻りかよつて立聞く文治、ずつとはいれば悦ぶ女房、「よう戻つて下さんした、女子一人とあなどつて、あの南兵衞が」「サアよいてや、何もかも聞いて居る、高が五兩か三兩のめくさり金に、女房賣らいでも濟む事」と、落付く安方せき立つ南兵衞、「イヤ厚いな〳〵、わりや身上が厚いか知らぬが、我等ずんど薄うなつて、家主にはぽんまくられ、身上有切り行李一くわん、宿なしとなつたれば、借した金とらにやならぬ。今というても銀は有るまい。サア親方、連立つていんで銀受取らう」と、お谷が腕引立つる、其手を取つてもぎ放し、「ソレ銀戻す受取れ」と、投出す金は金ながら、つひに見なれぬ金の札。「ソレ其札は金細工、今潰しでも三兩程の金目は有る。マアそれなりと

かた、其内來ませう」と、しやべり散して立歸る。お谷は藥漸と、煎じ仕舞うて枕元、屏風押明け、「コレ淸童、けさから飯の湯もいかず、其樣に喰はずに居ると、醫者殿が呵らしやる。此藥呑んでから、わがみの好の茶粥の中へ、あも入れて焚いた程に、梅干に添へて一口くやや」と母親の、詞に漸枕を上げ、「イヤ何にも喰ひたうない。コレ嚊樣、とゝ樣はまだ戻らずか。こゝが術ない〳〵」と、數ゆる胸より見る親の、胸を痛めて手を差入れ、「ヲヽ術ないは道理道理、せい出して藥呑んだりまゝくふと、此痛もつい直る」と、そろ〳〵胸を撫でさする、心づかひの外面より、外が濱の南兵衛とて、よつ程横へふとつた男、旅行李肩に引つかけ、くつわの亭主と思しき者、伴うてずつとはいり、「おかた來たぞや〳〵、南兵衛が來たぞや」と、たまからぐわらつく雷聲。「ヲヽこれ病人が有る、聲びくにいはんせ」と、枕屏風を押立つれば、「何ぢや病人とは、ムヽがりまか、なんの役に立たぬやつ、いつそてこねてしまやえいに」と、詞でたんなうさゝぬ氣と、知つてゐてもむつと顏、「ヲヽ南兵衛樣何ぢやいな、まだ生先有る大事の息子、お前方のお世話にはなるまいし、構うて下さんすな。エヽいま〳〵しい」と捻ぢむく姿。「何と親方見事でござんすか」「イヤモごんす所ぢやない、おれがさうなら結構な代物」「そんなら道々咄した通り、三年切つて金五兩」「ヲヽ出すとも〳〵」「合點なら打ちましよか」しやん

彼の思ひり〳〵べく候をやりかけをつて、おのづから悪性になるというて、親々が教へぬは、遠國の偏屈、其様に氣を付けても、見んごとはじける時分ははじけをつて、唄文はやりたし、書いたり讀んだりめんどくさい、いつそいもりの黒焼、お藥なんどをふりかけて、此庄右衛門様の思付。ハ、ヽ、ヽ、口叩かずとお觸狀、讀んで聞かそ」と押披き、「ム、何ぢや、一つ、とばかり跡は讀めぬ。高がかうぢや、此國の殿様八幡太郎様が、武運長久の為ぢやというて、鎌倉とやらで鶴を千羽、金の札付けてお放しなされたげな。其鶴が今は此國にも徘徊する程に、必金の札の付いた鶴を取るなと有る毎年のお觸、こりやいはひでも知つての事。聞かつしやれ、此四五日以前に、岩城山の麓で、彼金の札の付いた鶴を殺した奴が有るげな。法度をそむいた科人、夫で國中は嚴しいお尋ね、殊に此浦は殺生人が多いによつて、格別に詮議がつよい。若し殺した者が有るなら、早速訴へに出い。訴人の者には、たとへ親兄弟夫婦の中でも、其科を赦し、褒美として黄金十枚下されうと有る事。是の御亭も殺生好ぢやが、そんな覺はないかや」と、念を入るれば、「ヲ、つがもない、こちの人に限つて何のマアそんな事、必氣づかひなされますな」「ヲ、そんならよござる。兎角町には事なかれぢや。ひよつと此村に鶴殺しが有ると、縛り上げて京三界まで行かにやならぬ。夫がいやさに念入れるは、此庄右衛門様の思ひ付。お

飛乘るさそく、陸には衛もあら磯の、浪を押切り〳〵て、行方しらず　三重　行末は、陸奥の内にはあれど外が濱、國の果とてあら磯に、狩漁を業として、世を押渡る一村の、中にも善知鳥安方とて、野山を家と狩りあるく。内は女房のしほたらと、子の煩ひに打ちかゝり、外には何も煎じやう、常のごとくにかけ土瓶、折焼く柴のくすほりに、しんきをもやすかせ世帶。浦方の年行司、用有りさうに門口から、「文治、内にゐやるか」と、ずつとはひれば、「是は年行司の庄右衛門様、ようこそお出で。連合はたつた今、出られましてござります。まあお上り」と人愛も、器量に連れて愛くろし。「ムヽ御亭は留守か、さらば上つてそ様のお茶、其煮さつしやるを一ぷくたべうか」「イエ〳〵こりや茶ではござんせぬ、こちの息子が傷寒でさん〴〵。夫で薬煎じるのでござります」「何ぢや小癇ぢや、そりや薬より赤蛙喰はさつしやれ。こちの坊主めは大癇で、様々の薬呑ましても直らず、そこで此庄右衛門様の思ひ付、赤蛙十疋ばかり喰はしたればつい直つた。大かんでさへぢやに、小かんぐらゐなら、四五疋喰はしたらつい直る。イヤ夫はさうと、代官様からの廻り狀、御亭が留主ならこなた見て、奥にしつかり判さしやれ」と、投出す一通手に取つて、「御存じの通り私は明瞽、御苦勞ながら讀んで聞かして下さりませ」「ムヽほんにこなたは無筆ぢやの」「アイ、恥しながら」と赤らむ顏。「何の夫が恥しい、娘子供が物書くと、

がれ」と、引立て〱情用捨もあら磯の、浪間から又ぬつと、首ばつかりで窺ふ長太、斯くと見るよりかけ上り、さうはさせぬと南兵衛が、兩足かいてづでんどう。其間にお谷は引つぱづし、逃げて行方はなかりけり。はふ〱のめに起上り、「テモつよいげんさいめ、もう逃げをつたか、どつちへうせた」ときよろ付く眼、「ヤァ投をつたは汝ぢやな。銀の代りに捕へた奴、なぜ逃した」と飛びかゝつて、長太が弱腰中に提げふり廻し、「エヽ片手にもたらぬひばり骨、締殺さうよりコレかう」と、ぐつと指上げ三段ばかり、遙の沖へざんぶと打込む白浪の、中からによつこり、「ヤイ南兵衛のあはうよ、海士を浪へ投込んだは汝が手味噌、陸では汝に叶はねど、海の中では千人力、手並が見たくば此所へうせい」と、いはれて南兵衛呆れ顔。潮の中から吹出し、「へヽへヽ、ちつとこはかろがな、相手にはよう成るまい。そこで緩りと業さらせ」と、雜言惡口跡しら波、せんかたなぎさにぢだんだ踏み、「エヽどんな、川童めは川へ放す、銀は得とらず、あたぶの惡い」とふくれ頬、白砂けちらし立歸る。夕日浪をあらへば漁の火かと疑はる、まだ入相も遠淺の、洲さきにあさる鶴の聲、窺ひ近寄る簑と笠、邊を見廻し手元を堅め、切つて放せば拳に手ごたへ、さしつたりとかけ寄つて、脛根に付いたる金の札、ふつつと捻切り押戴き、かけ出す四方を五六人、「ソレ鶴殺しの曲者、遁すなくゝれ」と取卷く磯邊に、幸の、舟へひらりと

たなの棒に成る程いても、とかく内を外が濱、鑞師町で口利く、車錢の南兵衞をようけつぶしたなア」「是は又南兵衞殿とも覺えぬ、不仕合を呑込んで借して下さつた日切の銀、片時も早うと心はやたけ、ちつとも如在は」「ヤアいふな〳〵、銀戻さぬが如才でないか、戻すあてが無かなぜ借つた」と、いがみかゝれば女房分入り、「お前樣のが皆尤、今主のいはるゝ通り、下地のかわいた其上にちつさが煩ひ」「ヤアがつほしめが病を言立て、又古手な泣言か。豆板程な涙をこぼして、了簡していぬ者も有らうが、此南兵衞なんほでもいなぬ〳〵。サア今受けとろ、サア渡せ」と、立催促に猶手をすり、「イヤモ段々の間違、佛の樣な其元も、腹が立たいで何とせう。どうぞ長うとは申すまい、マア二三日。コリヤ〳〵女房共、あなたへおわびを〳〵」と、上手ごかしに脇道へ、文治は其場をはづし行く。南兵衞大きにむくりを煮やし、「ヤア人にばかり息精はらし、はづさうとは横著者、一寸もやらぬ、待ちあがれ、ヤイ待ちをれ」とかけ出す袂にお谷は取付き、「不躾ぢやと思召せばお腹の立つ筈、あの樣にせかれますも、ちつとなりと精出して、早うお銀が上げたさ。堪忍なされてどうぞ主の云はるゝ樣に」「エヽやかましい、べりべりとようべるけんさい。よいは、夫程にいふからは、違ふ事も有るまい待つてやろ。其代銀受取るまで、汝をおれが内へ連れていぬ」「エヽ夫は」「ハテ銀の代に質に取る。サアうせあ

てく〳〵およぎ行く。お谷は胸を撫でおろし、立上らんとする所へ、戻りかゝる善知鳥文治、山より山に獵りくらす、海部刀の刃をわたる、腰に半弓山衣裝、お谷はそれと、「ヲヽこちの人、今仕事から戻りかへ」「イヤ〳〵、けふは風が高うて獵もきかず、山は疾う仕舞うたれど、戻る道で代官殿から鶴のお觸、お宿老へ呼付けられ、それで漸たつた今。シテちつさが樣子はどうぢや。病人をほつて置いてどこへ往た、めつさうな」「イエ〳〵内には隣のおか樣を賴んで置いて、藥が切れた故醫者殿へ一走、戻る道で惡者の長太めがそれは〳〵」「フヽあいつがずだいほうには、誰も難儀するげな。イヤその難儀で思ひ出した、そなたに悅ばすことが有る。ちつさが大病、人參でなければ助からぬとお醫者の指圖、あつというても長々の煩ひ、そなたやおれが物、衣類まで賣代なした上なれば、人參買ふあだてはなし、と云うて大切なは人の命、どうぞま一度本復さしたいと、胸を痛めてゐた所、聞きや、ちつさを大事々々と思ふ、二人が念が屆いたやら、よい儲筋を聞出したれば、人參買ふ工面が出る、悅びや」と、夫の咄に共勇み、「夫は嬉しい。そしたら私は先へいんで神棚へ燈明上げて」「ヲヽそれ〳〵、おれは直に其銀の工面に行く」「そんなら早う戻つてや」と、いふ後から「文治々々、文治待て」「と云ふは誰ぢや」「イヤおれぢや。借錢こはるゝがいやさに、見ぬ顏せうとは横著者。跡月の日切の銀、けさから足

爰放して」「イヤ放したら迯げさんす。慈悲ぢや情ぢやコレ拜む」『サヽヽヽ、どうなりとせうけれど、晝中にそんな事」「イヤだんないく。爰でいやなら、海の底でついづぶく」「アヽめつさうな、鷲かなんぞの樣に、こちや水へはようはひらぬ」「そんなら幸ひあの舟で、結ぶの神は舟玉樣。サアく此方へお出でく」「エヽこりや何とする、放せ放せ。こちの人、文治殿」と、呼べど叫べどかひなみだ。「コリヤ泣かんすか、なくとは別して忝い。可愛男にや泣きよがちがふ、あしを屈めてゐのふで締めて、締めてしよがいのく。コレ此樣にしめておくれ」と、引立て引ずり舟の中、「なんぼ泣いてもわめいても、爰はモウ海の中、其樣にぴんくするといつそかうぢや」と舟張の、千尋の繩を帶にしつかり。「かうして置いて」と抱き付けば、「エヽ穢らはしい情ない」と、身をもむお谷が帶の繩、千尋の底へこたへてや、遙の沖へうつぼりと、浮上つたる長太がかゝ、遠目に夫と見るよりも、逆立つ浪を立およぎ、其儘舟へ飛上り、すつくと立つたる丸裸、鱗だらけのさばき髮、男を引きするくゝりし繩、とくより早くお谷は磯へ迯げ上る。やらじとあせる長太が腰蓑、引きずり廻しの結目に、くゝる千尋の繩ぐるく、夫に向つてつく息は、道成寺を見るごとく、七卷まとうて、「サア長太、こつちへおぢや」と飛込んで、およげば繩に刎込まれ、「コリヤどうしをる」も聞けばこそ、水には強き女房の元氣、引立

心を殘し、其儘海へづぶ〳〵。こなたは嬉しさ此場の難儀、遁れて醫者へと走行く。程なく出でくる所の代官、鵜の目鷹右衞門、跡から庄屋が短い羽織、長い鼻毛を砂にすり付け、「ハイ、かうならびましたが此濱の組の者共、此浦邊は漁獵師男海人潜の蜑、其外山を挊ぐ獵師も入込み外商賣はわづか故、總名を獵師町と申します」と、聞いて代官打點き、「ム、然らば、山獵師も有るとな。浦方はいふに及ばず、山獵師には別してきつと申付くる法度の趣、先達ても聞きつらん、鎌倉鶴が岡の神前にて、千羽の鶴をお放し有り、則氏神の御つかはしめと世に知らせん其爲に、金の札を付置かる。さすれば右の神鳥、何國の浦山におりたりとも、必麁略致さぬ樣との御上意なり」と、さも緩怠に云付け睨付け、濱手をさして打通る。跡打ながめて浦の者、「サア〳〵濟んだは。ア、お年寄御苦勞〳〵」「何の〳〵、御くらうはしくらうの上の事。皆も今のお觸合點か、金の札の付いた鶴打つ事はならぬぞや。鶴は愚、こんな時には鷺でも必打たぬ樣。皆念入れて觸れうぞや」と、打連れてこそ歸りけれ。お谷は醫者よりとつかはと心も足もいそ打つ浪の、中から出てくる以前の長太、かけ上つてほうど抱へ、「サアしてやつた。さつきにはうまい所を代官めが、うせたで怖さに巣入したれば、鯯と赤貝と口吸うてをつたを見て、イヤモどうもこたへられぬ」と、しがみ付かれてお谷はうるさく、「サア〳〵、まあコレ

殿へ藥を貰ひに。ホンニ此間の心づかひ、わしも癪が發りさうな」「ヲヽ夫はいかいこな樣の氣もせや」と、女房がいふを引取つて、「コレ内儀、其癪にはきつい妙藥が有つて、醫者殿に貰て置いた。待つて居やしやれ、一走つい取つて來てやろ。コリヤかゝ何をきよろり、今の日和は何時が知れぬ、そよ〳〵と良風が來る、此間に一精出してこい。若ししけが來さうなら、此繩でしらすぞ」と、約束の千尋の繩、腰にしつかり女房が、舟端より眞逆樣、物馴れしこそ身過なれ。繩くりこして、舟張のくわんにてつ取り早く、「サアかゝめは沖へやつて仕舞つた、モウ邊に人はなし」と、口なめずりして上つてくる、長太がそぶりに氣も付かず、「そんなら世話ながら、今云はしやんした癪の藥を、どうぞ早う」と立寄れば、「ヘヽ藥やろというたはうそぢや。待たして置いたはかうせう爲ぢや」と引だかへ、「テモうまい風では有る、此尻つきにふつとのぼつて、いんまにさがらぬ臍の動氣。お前の此藥で直しておくれ。たつた一服で本復する」と、抱付けばひつしよなく、「何さしやんす、夫の有るわしを捕まへ、ぢやら〳〵と何ぢややら、鹽だらけな體して、あたしたゝるい」と飛突ばせば、「夫はどうよく、たつた一度。どうもならぬたまらぬ」と、抱きしめ〳〵抱きしめられ、何とせんかたなぎさの方、浪間へひゞく鐵棒の、音に愕りふり返り、「ヤアなむ三、所の代官め。コリヤたまらぬ」とさしもの惡者、せう事なぎさに

拵、いかう延びたと浦邊の噂」「ヲヽあの茂三の內儀の云やる事はいの。銀は延びいで、こちのアノ性惡が、鼻毛の延びるに困り物。四郎のおかたの知つての通り、去々年の月見の夜さり、膃肭臍取りにいた時に、海の中でとれ合ひ初めた女夫中」「ヲヽそれ〳〵其夜さり、うらも岩の硲でこちの人に馴初め、今は子の親。こなたはなぜに子がない」「ヲヽ子どころかいの、眞實に思うてゐるわしを、袖にしくさりくさつて、又しても女さへ見りや帆立貝、ホンニ、うらが思ひは、鮑の貝の片思ひぢやと思へば、悲しうござる」「ヲヽこりやおかたのが皆道理、シタガ、そなたばかりぢやないぞいの、海商賣とてどこの男も磯ぜせり、こちとらも修羅はたえぬ」と、三人寄れば男の噂。「ヤイ〳〵、又男のわんざんか」と、いうて海からによつこりと、上つてくる海士の長太、「あんまりわいらが譏る故、海の中でくつさめばかり、獵がきかいでやう〳〵と四五はい、是では鹽も呑めるものぢやない」と、いへば皆々、「テモ我をれ、男の仕事には大きな物、是では女海士もはだし。ドレいんで取溜の鮑、內でむいたりむかしたり、サア皆おじや」と打連れて、住家々々へ立歸る。磯邊傳ひをくる女房、長太が見付けて、「ヲイ〳〵、文治の內儀どこへぢや」と、呼びかけられて立止り、「ヲヽ誰ぢやと思うたら長太樣、內儀樣御精が出ます。聞いて下さんせ、ちつさが長の煩ひ、弱みの上へ大熱、けふは取分樣子が悪い、夫で濱手の醫者

足代塀の上、ひらりと飛びたる折こそあれ、多勢をなぎ立て生駒之助、「女房出かした。維時が家來軍六を手にかけしは、忠義の門出手始めよし。サア戀絹」とつゝ立つ所へ、かけ來る瓜割大音上げ、「ヤア扶持離れの生駒之助、色事仕かと思ひの外、手にほうばつたる汝が働き。ソレ家來共討つてとれ」「承る」と近寄るやつばら、からり竹なしわり瓜割主從、叶はぬ赦せと迯失せたり。返す敵もなみ木の馬場、さはいへ名殘と見返る生駒、我も廓をけふ限り、其うきふしもよき武士の、つま引上げて引きしめて、是よりすぐに打立たん、其行先は不破の關、清見白川衣が關、忍の關は有りし身の、口舌の柵手管の關、鳥の鳴くさへ憎かりし、今の此身は鳥の音に、函谷關を越えたる例、頓て日出たき世にあふ坂の、關所々々をやす〳〵と、吾妻の空へと急ぎ行く。

第二

琴碁書畫を嗜む身とも生れず、旦暮物の命を取り、浮世を渡る綱手繩、浪打際にざは〳〵と、かづきの海士が晝休、「コリャ長太のおかた、今日はお代官樣が、此外が濱を通らしやると、浦中はや〳〵、すつきり仕事も手に付かぬ。聞きや此中は長太も潛に出やるげな、女夫しての

シテ兩人が成敗は」「ヲ、傾城狂ひの放埒者、勘當致してあはう拂ひ」「ム、是も尤。某も長居は恐れ、尤なる趣宜しく奏聞致さん」と、二つ胴を遁れた心地、足早にこそ歸りけれ。言譯なみだ生駒之助、刀逆手に取直す。「ヤア犬死せんとはうろたへ者、追放の身にいらざる武士立。最前一間より立聞けば、其女は貞任が、ナ、定めて遠い國の者、馴れなじみしこそ幸ひ、夫婦と成つて隨分添ひとげ、彼本國へ立退かば究竟の手がかり、心得たるか。環の宮の行方が知れねば、舅直方は大罪人、時宜に因つては敷妙が、緣の切目とならうも知れぬ。添ひとげるも義理、添はれぬも、浮世の義理と諦めよ」と、八重幡姫の事までも、思ひやり戸に忍び泣、緣の切目と嫂の情の襠顏と顏、餘所に見なして入り給ふ。かゝる所へ笠原が弟同名軍六、兄の敵遁さじと、大勢引具し追取りまく。それと生駒が、「コリヤ〳〵戀絹、是でふせげ」と一腰を、しやんと柳の腰車、石げさ肩げさまくり切、迯ぐるをやらじと女夫は白刃、奥庭ふかく追うて行く。すでに時刻も宵闇に、外面を窺ふ笠原軍六、生駒が手並にもてあまし、一拔ぬけたる拔けがけは、敷妙を奪取つて、我高名にと一人笑、あの亭こそと裏門の、塀に身をよせ耳を寄せ、窺ふ内には戀絹が、多勢を切りぬけそこかしこ、是を足場にあの塀と、差したる刀拔放し、つつこむ切先軍六が、胴腹思はず芋ざしに、のた打迴る鱠武士。内にはそれとも白かべに、柄の

赦はなるまい。首討つて渡されよ」「イヤさうは罷りならぬ。環の宮を奪はれしは、一應の越度ばかりでない。大切の詮議有る直方、かるぐしく首討たば、宮の詮議は何を以て仕らん。ちと御奄相に存ずる」と、やり込められて負けぬ顏、「左程拔目なき義家が、家來の不義はなぜ詮議せぬ。ソレ軍記」「承はる」と笠原が、引立て出づる戀絹生駒。「何と見られしか、主の屋敷へ傾城を引入れる放埒侍、我家の事さへ得知らぬ御邊、天下の武將心元ない。是でも見事大切の詮議をするか義家」と、何がな惡口嘲弄も、理の當然にさしもの大將、拔差ならぬ此場の時宜、二人をはつたと蹴落し給へば、身の誤りに詞なく、白洲に頭を埋み居る。「ヤアく敷妙、最前の切柄の刀持參せよ、早くく」と詞の下、夫の心はしら鞘の、「此刀は何の御用」「ヲ、不義者めを成敗する」「エ、」「不便ながら武將の役目」「ヲ、さうなうては濟むまい」と、嘲る軍記が眞向なし割、二つに成つてのたれふす。「ヤア笠原には何科有つて」「サレバこやつ大不義者、御覽なされ、有らう事か、女房敷妙にかやうの艷書、傾城狂ひは時の興、强不義とも申されず、主有る女に不義しかけるは、畜生と申さうか。成敗したが誤りか。科の吟味立すると、どこへとばしりがかゝらうやら、それともに御不審あらば、承らん」と和かに、肝のたばねを指通されし、「ム、尤、扨々軍記めは存の外なる不屆者、逆礫にもかくべきやつ、手討とはまだ御了簡。

此上は、父則國の本官を直に、桂中納言教氏卿、いざまづ是へ。誰そ御裝束參らせよ」ハット女中が取々に、木綿の島守引きかへて、冠裝束花やかに、忽ち雲の上人の、威も備はつて見え給ふ。「其裝束を召さるれば、貴公は高官、武官の某憚り有り」と、上座に進め給ふにぞ、「コハ痛み入る御禮儀。今までは天下の流人、今よりは朝家の近臣、百官百司に列る上は、所存を包むは君への不忠、天下の武將義家に、桂中納言教氏が、三ヶ條の不審有り、まづ第一には、三種の神器の其一つ十握の御劔、先年より紛失し御行方知れさせ給はず、禁門の外は武將の守る所、天照神より傳はりし御寳、草をわけ地を穿つてもなぜ詮議しめされぬ。第二には環の宮、御行方ましまさず、是なんどは朝廷の御大事、察する處、都間近く叛逆謀叛の族が所爲と、鏡にかけて顯れたり。さすれば奪はれし直方に、其疑なきにしもあらず。直方は御邊が舅と聞き及ぶ、緣に引かれてゆるかせに指置くなんど、世の人口はふさがれまじ。此三つの返答聞かまほし」と有りければ、「ハッア遉は文道に名を得給ひし桂中納言教氏卿、御尤の御不審、一々承知仕る。併し此御返答は義家存ずる旨有れば、參内の折を以て」「いかにも、然らば再會々々」「おさらば」と、見送る式臺別れの禮儀、袂も匂ふ初冠、大内さして歸らるゝ。大將維時、一間を立出で、「最前敷妙に渡し置く刀の返答、いはずと胸に覺が有らう。舅直方が誤り、一家とて容

コレかんにんして下さんせ。エ、なあ申しコレ申し」と、くどき嘆くぞいぢらしき。始終をとつくと義家公、一間をさつと押し明くる、音に二人は消え入る雪、とけぬ此場を迯げて入る。大將端近く出でさせ給ひ、「ヤアヽヽ誰か有る、召しかへせし流人ども殘らず是へ」の詞の內、ばらヽヽ出づる歸洛の流人、籠を出でたるいさみ足。瓜割四郎御前に向ひ、「常磐島はだか島竹の浦松が浦、いづれも奧州一國の流人、都合二十七人相揃ひ候。ヤアヽヽ汝等謹んで承れ。此度非常の大赦行はれ、國々の流人赦免有る。さるによつて、奧州一國の流人は、我君へ仰下り、召し返したる汝等、有りがたく存じ奉り、何國へなりとも立退くべし」と、上意にはつと流人共、悅ぶ聲は叫喚の、地獄で佛に逢ひたるごとく、拜みつ轉びつ出でて行く。跡へしをしを立出づる、是も流人としらすのさき、なりも形もしよげ鳥の、身すぼらしげにうづくまる。義家遙に見やり給ひ、「奧州の流人則氏とは御身よな、早速の入洛此上なし」と、仰に流人謹んで、「親にて候則國、勅勘を蒙り奉り、流人となりし其比は、我いまだ弱冠、成長するに隨ひ、父諸共昔をこふる憂き年月、海人の苫屋の煙と倶に、父は空しく相果てて、生きたるかひもあら磯の、島守にて朽ちなん身の、召し返さるゝは大君の御惠、偏に武將のお情」と、低頭平身なしければ、「なに父の卿には空しく成り給ひしとや。是非もなしさりながら、今日歸洛の

しやくの悪がうか。そも突出しの其日より、いひかはした互の誓紙、肌身離さず此守に、コレ見さんせ」と取出せば、「イヤ／＼まだ其守の中に何やら有る」「エヽ疑の深いお方、是はわしがとゝ様の筐、大事にかけねばならぬ物」「マア其大事がるが合點が行かぬ」と、引つたくつて、「隱し男樣のせいしの文言、ドレ拜まうか。何ぢや、奥州六郡の主安倍太夫賴時、法名大了院殿喜山大居士」と讀みもをはらず、「コレ戀絹、スリヤ此賴時といふは」「アイ私がとゝ樣でござんす」と、聞いて恟り、一間に立聞く義家公、猶も窺ひおはします。生駒之助つゝと立ち、「緣は是まで、戀絹」と、思ひがけなき夫の詞、縋り付くを振放し、「添はれぬ譯は其書いた物、賴時が娘と有れば、朝敵貞任宗任が兄弟。知らぬ昔は是非もなし、源氏に仕ふる生駒之助、朝敵の血筋につながつては、主君へ不忠武門の穢」と、いはれていらへも涙ぐみ、「けふまで包みし我身の系圖、とゝ樣はくり坂の合戰に、流矢にてあへなき御最期、兄樣達も皆ちり／＼。行方定めぬうき勤、不圖馴初めし二人が中、起請誓紙を忠義にかへ、緣を切るとのお詞を、無理とはさら／＼思はねど、お前に別れてそもやそも、此身は何となるぞいな。エヽ死なしやんしたとゝ樣も聞えぬ。兄樣達も兄樣達、よいかげんに朝敵もやめにしたがよい。お前の樣な男と敵味方になる樣な、鈍な軍が有るものか。私が緣の邪魔になる兄樣達、こつちから緣切る程に、

か」「イヽヤ大名でなし公家でなし、そもじの馴染の生駒之助」と、聞いて悔り差しあたる、恩と情にからめられ、今更何と思案さへ、壁に生駒が聞くぞとも、思ひ極めて傍に寄り、「二人が譯を御存じの上、私へのお頼は、よく〳〵せつないあなたの戀路、切るに切られぬ中なれど、いつそとんと思ひ切つて、私がお世話致しませう」と、いふをこちらに立聞いて、おれを思ひ切つたとは、うそか誠かとやかくと、氣はもめくさの袴に汗。姫はいそ〳〵嬉顏、「わりない無心此上は、只よい樣に」と袖口に、紅葉かざして入り給ふ。かげ見るや見ずつか〳〵〳〵、胸ぐら取つて、「コリャ戀絹、エヽ汝はなア、イヤモ見さげ果てた根性。さういふ心とは知らず、つもられたが殘念な」と、引いつ廻しつ打ちたゝく、手に取付いて、「ヲヽよういうて下んした、女房ぢやと思はしやんすりやこそ、打ちもさしやんす擲きもさんす。お前の樣な眞實な殿御が、又と世界にあろかいな。身請して貰うた義理にせまり、今の樣に姫君樣にいうたれど、お顏を見たれば退きともない、やつぱり元の夫婦ぢや」と、男の膝にすがり泣く、わりなき有樣立聞く八重幡、悋氣の中にも二人が心、思ひやる方あら氣の生駒、「エヽいやらしい退いてくれ。心底のくさつた女、顏を見るもけがらはしい。大方おれがやつた誓紙も、身仕舞部屋のすき紙、油くさい狐わな、よい加減につまんで貰を」と、ついと立つを、「待たしやんせ、又かん

て、「なむ三しくじつた」と、天窗抱へて逃げ入れば、「ヤア大騙の生駒之助、金の代に連れていんで、廓の法の桶伏」、と　かけ入らんとする一間より、「兩人扣へよ、先待て」と、立出で給ふは、義家の妹君、名も八重幡の九重に、花もおさるゝ品形、「コレそこなくつわとやら、其樣に詞をあらし、若も此事兄義家樣のお聞きに立たば、そち達が身の上、生駒之助とても同じ事、そこを思うて留に出たは　自が情。なんと其戀絹とやらが身の代を辨へなば、そち達に言分は有るまいがの」「何が扨お金さへ受取りますれば」「そんならば其傾城、自が身受けした。夫持つて早歸れ」と、寢耳へ水の山吹より、花も實も有る取捌、「コハ忝し有がたし」と、戴きいさみくつわやは、九條をさして立歸る。生駒はめんぼくなか敷居、出るも出られぬ此場の品、戀絹は一間より、姫の情の有りがたさ、出づるもおもて伏し沈む。八重幡はしとやかに、「姫ごぜは相身互、何の禮に及ぶ事。かうして世話をする身にも、心に任せぬ憂き思ひ、物馴れしそもじを便、力に成つて」と計にて、思ひ入りたる御風情。「アノお姫樣の改つた、大恩受けた此身の上、お心に叶はぬ事あらば何なりと、サアおつしやれ、どうぞいな」と、いはれていとゞ恥しさ、「思ひ初めたる戀人に、千束の數は重なれど」「モウおつしやるな、よめました。戀の手管は勤の道、私がかう申すからはお心づよう思召せ。シテ其惚れてござんす殿御といふは、お公家樣かお大名

身請極まり、手附まで請取りました處に、夜前廓を駈落ち、何が方々と尋ねますれども、とんと行方が知れませぬ。察する處纐纈が深間といふは、是の御家中生駒之助樣、身請を嫌うて廓を出たからは、外へは參らぬ此お屋敷に」「ア、コレ〳〵、こゝは殿樣のお白洲先、麁相な事など申上げたら」「ア、申しおつしやるな、お前方は素人、慮外ながら文字の友三といふて、ずんど黒い男」「ソレ〳〵、此惣助も身晴、何ぢや有らうと生駒樣に逢うてのおりのり、又逢はしやれぬがさいご、奥へ踏込み直々に」と、口を揃へるくつわがゆすり。一間の内に大音上げ、「ヤアヤア八幡太郎是にあり、汝等下々の分として、上を恐れぬ推參者、引つくゝつて牢へ打ち込む、覺悟しをれ」とかさ高に、襖ぐわつたり立てゐぼし、大紋くわつと目の中の、きよろ〳〵するも思ひなし。威に恐れてとんぼう返り、お赦し御免と後じさり。よわい所へ附込んで、「ヤア一寸も動きをるまい、返答が惡いと首が飛ぶも知れぬぞ。思へば〳〵につくいやつ、傾城も同じ女、かはいさうにいやな男に身請とは、汝等が身がつ手、すいた男に添してやるか」「ハア、ハア」「そんなら赦してこます、あのごくだうめが」と、强う見せたる足拍子、はずみにすつぽり立ゐぼし、結びめ解けて櫛拂の、頬髭落つれば傍邊、ハット生駒が取りのぼす、顏のゐのぐも汗たら〳〵、所斑の八幡大名、俄にしよげる顏を見て、「ヤアこなたは、生駒之助」といはれ

の太刀箱さし置けば、「是は〳〵何から何まで御深切の御詞、殊に夫が門出を御祝ひとは、義家にも嘸悦び」と、蓋押し明くればこはいかに、切柄したる荒身の刀、惘りさすがは武將の妻、さあらぬ體に取上げて、「武士の門出に打物とは、御心の付きし御音物、去ながら、是は正しく科人をためす不祥の刀」と、いふをおさへて、「コレサ敷妙、心を籠めし我音物、婦人が聞いて何を判斷、義家に見すれば胸に覺えの有る事さ。とつくりと思案をして、其刀の返答を相待つと、某が申すといはれよ奥方」と、割つて言はざる切柄は、いか樣子細あら身の刀、鞘にしつくり納めても、心のときつき納らぬ、氣を取り直し、「姫ごぜのちゑに及ばぬ事、義家に右の品、お出の樣子も申し聞けん。役目濟むまで暫の內は」「ヲ、サ〳〵、其刀の返答聞き切るまでは歸らぬ維時、案內召され」と權柄押柄敷妙に、打ちつれ一間へ入りにける。口の間より奏者の女中、「生駒樣々々」と呼びつぐ聲。「生駒之助是に在り、何用なるぞ」と立ちいづれば、「申し、あなたにお目にかゝらうと、九條の里のくつわとやらいふ者が」「ヤアくつわが來たか、コリヤたまらぬ。我等が逢つては事むづかし、こなた衆頼む、コレかう〳〵」と耳に口、こかげに有りあふくしげ鏡臺、抱かへて奥へはづし行く。程なく白洲へ小腰をかゞめ、「ハイ私は九條のけいせい屋文字屋の友三、是なは請人の惣助でござります。私抱の奉公人戀絹と申す女、去る方へ

八幡太郎義家、平の傔杖直方、きやつら兩人禁廷にへちまへば、何かと手延無念至極。何卒罪に落さんと肺肝を廻らし、なんなく直方は術の網に打込み、けふ中に仕舞ふ合點。此上は義家一人、彼が家來瓜割四郎、我味方に付けたれば、十が九つ大望成就。只儘ならぬは戀といふ曲者、義家が女房敷妙、いろ／＼と心を盡せど、今に色よき返事もせぬ。何でもけふは此艶書を、合點か」と、渡せば取つて懷中し、「今日中に御手に入れん」「必ぬかるな」「合點」と、欲と色との間の襖、出向ふ瓜割四郎維時が傍近く、「お頼の通り生駒之助しくじらす術上首尾、きやつがなじみの傾城を此館へ引入れ、それを越度に打殺せば、風の神で戀の敵、戀絹を我女房に」と、いふもぞく／＼。「でかした／＼、さい先よし。艶書の事を、軍記合點か。瓜割必仕損ずな」と、二人を立たする間もなく、さと打ちかをる絹の香は、義家の奥方敷妙御前、襠姿もしとやかに、「維時公には御苦勞の御出、夫義家早速お目にかゝる筈なれども、今日は非常の大赦、何かと取込み罷在る、無禮の段は眞平お赦し、御用の品も有らば私に」と、聞いて維時威儀繕ひ、「ヤ義家の御內證、此比は打ちたえ申した。其元の親父直方には、御預の環の宮行方なく、老人の心づかひ、そこにも親の事なれば嘸案じ召されう。それは格別、某けふ罷越す事別儀ならず、義家には近々東國へ進發、門出を祝はん爲、維時が寸志の音物、改めて受納有れ」と、件

は廓を」「アイ駈落してきたはいな」「ホイ」はつと許に生駒が當惑。「ハテ合點の行かぬ、というてゐる間も其方の此形、人が知つては一大事、どうぞ隱して置く所を」エ、どうせうぞかう障子、明ける物音出る楓、見付けられじと戀絹を、こかげへ押しやりそらさぬ顏。楓は其儘すがり付き、「エ、氣の惡い生駒さん、今のしだらはどうぞいな。あの子ばかりが眞實で、惚れぬいてゐる此わしは、うそにいとしと思ふかと、見捨てられたもあの子故。アノ傾城と譯有る事、今の樣子も書置きして、私やいつそ死ぬ覺悟」と、用意の剃刀、生駒は驚き、「マア待つた死ぬるとは、短氣千萬。そしてアノ傾城と身共が譯を、書置にしてよいものか」と、留める兩手をじつとしめ、「さういはんすは叶へて給はる心かえ」「でも夫は」「そんなら死ぬる。イヤ放した」と聲高に、こまつて詮方なんぎの手詰、「そんなら應ぢや」「エ、嬉しや」と抱付かれ、顏を背ける生駒が思ひ、生ぐさ坊主が精進の、馳走に禮いふ心地なり。折もこそ有れ、お客のお入とのゝめく聲、何がな幸ひ、「コレ〱〱、お客のお出」と引つぱづして逃行く生駒、「コレ志賀さん、夫婦のかためはわしが部屋、必待つて居るぞえ」と、尻ふりちらして走り行く。程もなくのつさ〱、入來る權威の鼻、大江大將維時、打紐したる白木の箱、雜掌笠原軍記に持たせ、傍見廻し聲をひそめ、「汝も兼て知る如く、年來の我大望、青公家原は大半味方になすといへども、只手ごはきは、

ばならぬ譯有つて。コレよいお人ぢや、誰やらおもてへ逢ひに來てゐると、ちよつとあの樣をここへ呼出して下さんせ。ホンニ又此生駒樣も、何して居さんす事ぢややら、早う逢ひたい、出て下んせぬ事かいの。エヽしんきや」と式臺に、身を投げ島田するせんの、流ははでに顯はれり。「ヤア情のこはい下司女、意地ばらば薪ざつぱ」とひしめく聲、何事やらんと立出づる、志賀崎生駒之助、一間をずつと顏見て悔り、やにはに庭へ飛石の、堅い顏付氣色をかへ、「ヤア下郎共、御座の間近く尾籠の高聲」「ハイヤ此女め、胡亂者故引捕へて」「ヤア生ぬるい、わいらで行かぬ身が詮議する。早く下れ、何馬鹿やつ」と、呵りちらして追立てやり、邊を見廻しつゝと寄り、「コレ戀絹嗜め。コリヤマア何事、物堅きお館の格知つて居ながら、はでな姿で晝日中、お上へ聞えたら、生駒之助は痛い腹。サア人の見ぬ内に早く〱」と、いふ間も若しやと胸どき〱、せく男よりせき入る戀絹、「コレ生駒樣、ひよんな事が出來てきた、夫でお前に逢ひたさに」「ヤアヤアなんぢや。ひよんな事とは氣がかり、其譯をサア早く」「サアイナ、其譯といふは、客は誰か知らねども、わしに合點もさせず身請の相談、親方買に手附まで受取つたと、聞くとはつたりコレ此つかへ。どうかかうかと案じる折から、駈落してこいとお前のしらせ」「ヤア〱ヤアヤアそりや誰が」「四郎樣が」「ヤア何あの瓜割四郎がさういうたを、誠と思うて、スリヤそち

に似合はぬで思ひ出した。茶の間の楓があの顔で、生駒樣を付けつ廻しつ。何と身の程知らずぢやないかいの」と、譏る後へによつと出た、頬はすもゝの花楓、櫛笥鏡臺携へて、「オヽ皆樣聞いておくれ。わしが此樣に思ふのに、生駒樣の聞入れのないはどうした事と思うたりや、あのお方は傾城ずきで、こちらが樣な大むくは嫌ひ。夫でわしも今から派出に身を持つて、生駒樣に思はれうと、コレおぐし上げの磯野を頼み、結うて貰うた此釣舟、似合うたか見ておくれ」と、いふ目付のしたゝるさ。こらへ兼ねて吹出す口の間より、御家人瓜割四郎糺、袴の角菱いがんだ頬付、「ヤア何ざは〱とめらう共、ヤうぬは楓め、エヽ惡ぐさいやつ。こりやお玄關近く、女の手道具見苦しい。ばか者め」と、蹴飛ばかされて散亂粉灰、皆々次へ迯げて入る。「ヤア面倒な此手道具、持つてうせぬか。誰ぞ取つて捨てよ」と、呼ばはり〱奥へ入る。御門の方さわがしく、「出をらう〱」と下部が聲、樣子は何かしら洲先、かいどり小づま八文字。「ヤア女め待て。御家中に見馴れぬ風俗胡亂やつ。サア名をぬかせ、聞かねばいつかな」「ホヽヽヽホヽ、合點が行かぬの聞かねばならぬのと、無理な客樣の色事をせかんす樣に」「ヤア扨は儕ばいたよな。此所をどこだと思ふ、忝くも八幡樣の御屋敷。サア出をらう」と引立つる。「オヽ無粋、人の心も知らずに、其樣に呵らんすものぢやない。其八幡樣の御家來、生駒之助樣に逢はね

を、こつちへ戻しや」「イヽヤ知らぬ」「イヤそなたが」と爭ふ半、傔杖直方御歸館遲しとかけ來る松かけ、樣子を斯くとかけ寄つて、鳥差が左の脇つぼ、丁ど入れたる霞の當身、「コレ〱コレ、宮樣はいづくにおはする、匣殿は、內侍は」と、問ふもいら立つ、こなたもうろ〱、「あの鳥差が狼藉故、宮樣伴ひ匣樣はあの道へ」と、いふ間もわくせくかけ行く女中。「扨こそ曲者吐かして聞かん」と又一當、むつくと起きる間稻妻の、懷劍咽につき立てたり。なむ三寶詮議の種、ヘツエしなしたり」と氣は夕陽、車輪のごとくかけ廻り、さも有れいかにと死骸の懷中、手を差入れて引き出す一通、さつと披いて讀下し、「何々、環の宮を盜出し給はるべしと、匣の內侍へ賴の狀。何者とも名を記さぬは、朝廷にはびこる佞人、大江の維時なんどがしわざか。何にもせよ、逆臣に出しぬかれしか。エヽ口惜しやさりながら、是こそは詮議の手がかり」究竟一通懷に、しつかと納むる忠臣の、心の闇の道筋を、いつさんにこそ三重歸りけれ。西洞院左女牛の殿造、八幡太郎義家朝臣、再鎭守府將軍に御拜任の御悅びとて、在京の大小名、思ひ思ひの御獻上、餝る口上使者袴、奏者の女中が受答、花をちらして持運ぶ、閙しい中ちらほらと、一つ小蔭に寄りつどひ、「葉櫻樣、何と御家中も多い中、よい男といふは生駒之助樣、かはいらしい殿御ぢやないか」と、いへばみはしが、「サイナウ、したが顏に似合はぬ物堅さ、其顏

立寄つて、餌竿をおろししやに構へ、「一つひよ烏ひえの山の、二つ梟二子の山に、三つ木兎都烏」そこよかしこと立まふふりにて、匣の袖へ投げ文を、「ひら〳〵ひらの檜木の枝」とそらさぬ風情。文取上げて匣の內侍、「ハテいぶかしき賤の振舞、御前に叶はぬあつちへやりや」と、文投げ捨つれば女中達、「下々の身分で內侍樣に付文とは、大それた慮外者、早立つて行け〳〵」と、せり立てられてもびくともせず、下々で有らうが何で有らうが、戀に上下の隔はない。但し又烏差が上つがたに、惚れる事はならぬといふお觸でも有つたか。何でも思ひ込んだ此男、返事聞かねばいつかな〳〵」と、人目遠慮もあらくれ男、「アレ狼藉者、誰ぞ參れ」と、呼べどをりあふ人もなく、隔つる女中をはり退けぶち退け、傍若無人の狼藉に、內侍は宮樣かひ〴〵しく、「なう〳〵こはや」と局達、神前さして迯げ行くを、「おのれ女め、一摑と」大手を廣げ逸散に、跡を慕うて追うて行く。內侍は宮をいざなひて、つまづき轉び出で給ふ。跡からいつさんかけくる烏差、「內侍樣、まんまと首尾よう參りました。樣子は今の文の通り。早う〳〵とせき立つれば、匣は宮を伴ひて、何いふ隙もあらしに連れ、何國ともなく落ちて行く。かくとは知らぬ女中達、おろ〳〵目にて走り出で、「コリャ〳〵烏差、宮樣どつちへ連れいた」と、すがり付くを踏飛し、「ヤア宮が見えねば身が知らうか。そこ退け通せ」「イヤ〳〵〳〵、そなたが連れいた宮樣

せに、いろ〳〵の事ぬかす故、あなた方への言ひわけなし」「イヤお前がわしに」と又取付き、兩手をぢつと引きしめて、かうした所が廓の口舌、まづあら方はこんなもの」と口から出次第言ひ次第、取付き引付く向ふより、歩み來る瓜割四郎、朱鞘の大小いかつけに、それと見るより强腹ながら、「ヤア生駒殿、主人義家大切なる急用有り、早う〳〵」の聲に恟り飛退いて、「急御用とは覺束なし、貴殿樣子を聞かずや」と、立寄る生駒を突飛ばし、「大切なる役目を受け、夫に何ぞや女を捕へ見苦しき振舞。何かは御用も我等は知らぬ、早おいきやれ」とねめ廻す。戀絹生駒は目を見合せ、道理に詮方なげ首し、心殘して立歸る。續いて立つ戀絹を、四郎が留て、「コレ戀主、エヽわれは〳〵、首だけ惚れてゐる四郎、ふつてふつてふり付け、生駒にばつかりきつい乘り樣、胴欲ぢやぞよ。エヽ爰な命取め」としがみ付く。ふり放して迯げ行くを、どつこいならぬと又取付く。「アヽこれ申し、どうぞ往なして、拜みます」「イヤ〳〵〳〵、拜むのはこつちから」と、詮方なんぎの最中へ、「鳥をさいた見さいな、さい鳥さいた見さいな」何にも得とらず餌差竿、物見だけい女中達、「ソレ〳〵宮のお慰、四郎とやら、其鳥差此所へよびや、四郎四郎」に、「ハアヽヽヽ、鳥差お召しぢや、うせをれ」と、いふ間をはづして戀絹が、迯げ行く跡に「なむ三寶、大事の鳥を飛ばしてのけた。鳥差め覺えてをれ」と、つぶやき跡を慕ひ行く。鳥差は

の花ちる比、早う〱」に雜色仕丁、殘らず打連れ立歸る。生駒は此場をくろめんと、眞顏になつて、「アレ〱〱女中樣御らうじませ、御所方には珍らしい遊君と申すもの、御覽じた事ござりますまい」と、いふに内侍が、「何遊君とや、江口の君のうかれめと、古今集では見たれども、直に見るは今が初め、サア〱早う」に生駒之助、してやつたりと一人笑、「彼太夫めが揚屋入りの道中を、今爰へ取寄せてお目の正月させません。それ〱そこへ、もう此處へ」と眴仕形を戀絹が、かい取小づま八文字、唄よるべ定めぬ流の身にも、すいた男の有ればこそ、すかいで是が勤まろか。アヽくだばかり、と生駒が傍、寄らんとするを目と仕形、寄るなとしらせど、「オヽしんき。けふお前と連立つて、此吉田で飲み明かすとさつきにから」と、膝に取付きあまえ泣。こたへ兼ねたる辛抱袋、破れかぶれと生駒がやくたい。二人がそぶりを女中達、「コレ生駒殿、あの傾城はそなたの相方とやらいふ物か」と、いはれて愕り心付き、「ハテ扨めつさうな仰、物堅き八幡が家來、廓遊びは夢にも存ぜぬ」「ムヽそんなら今のは」「ハテ客を捕まへて此樣にするが傾城の仕打、そこで客めがたはいになつて、可愛い色を引寄せて、コレ此樣に」と抱きしむれば、「コレ志賀さん、らつちもない事隙入れずと、サアござんせ」と手を取れば、「ソレソレ〱、どうでもそなたの馴染ぢや」と、睨め上げられて生駒之助、「エヽ近付きでもないく

助樣に逢ひに行くとおしやんして、來て見たりや吉田で有つた。コリヤ狐がつまみはせんか」と、いへばにつこと打笑ひ、「サイノ、久しう便も遠ざかり、案じもあらたな神の利生、大そうな願參り、近いと思へど餘程の道、定めてそなたもしんどかろ」と、いふ向より先拂ひ、遠目にそれと道は太夫、「アレ市彌、そなたが常住拜みたがる生きた雛樣、傍では無禮」と花のかげ、舍人がきしらす御車は、當今の御弟君環の宮、まだ振袖の莟から、役目も重き匣の內侍、附々賑ふ花の本、爭ふ女中の袖袂、御機嫌斜ならざりし。馬場先の方よりも、歩み來る若侍、武將八幡太郎義家の近習、志賀崎生駒之助英、夫と見るより遙に飛去り頭を下げ、「御忍びの行幸とは申しながら、大切なる君の御物詣、主人義家某に申し付け、餘所ながら御車の御供」と、言上すれば匣の內侍、「オウ道は天下の武將と呼るゝ程有つて、道を守る義家の心遣ひ、宮樣にも嘸叡感。殊更長閑な春の氣色、お氣慰のけふのお供。物堅き直方殿、是非御供と有つたれど、どうやらかうやら御所のお留守を」「いかにも〳〵、大切なる御所と申し、四角四面な直方殿、御遊興の御供には、花も紅葉もくすほりかへる。アヽ何がな宮樣のお慰を」と、見やる木蔭に鷺の首、覗いて見たり引つこんだり、招くをばなのはなの先、冷汗かくとも知らざる女中。匣はそれと見て取つて、「コリヤ供の者共、宮樣にも異ない御機嫌、今暫くお隙がいろ。お迎は入相

付け、相談の上殿様へ御獻上、宜しく御上の御取次賴上ぐる」と、いひ捨て御前を立歸る。義家甚御悅喜有り、「誠に鶴は仙家の靈鳥、我先祖六孫王東夷征伐の其折から、此所にて雌雄の鶴を得給ひ、源氏の武威千歲の後まで輝くべき印なりと、此小林の岡に放し、所を直に鶴が岡と名付け給ふ。時といひ所といひ旁めでたき家の吉瑞。六孫王の古例に任せ、八幡太郎義家是を放つと、金の札を付け、此所に放し置き、八幡宮の神鳥と、普く天下に觸れ流し、神慮を仰ぎ奉らん」と、惠も深き御上意に、皆々あつと感入る。景成遙の梢を見渡し、「アヽラ心得ず、歸雁行を亂る時は伏兵有りとの兵書の禁。シヤ曲者ござんなれ」と、立上れば御大將、「ホヽウよくも咎めし權頭、鎌倉の留守を預ける汝、其心がけを見よう爲のわが計。伏勢ならず」と扇をひらき、招かせ給へば茂みより、顯はれ出づるは此度の、御供に隨ふ勇士のめん〳〵、皆坂東に譽の弓取、秩父の十郎伴の助兼、縣の次郎、其外譜代恩顧の武士、早御立と白幡に、靡き隨ふ源氏の威勢、朽ちせぬ黃金の鶴が岡、都をさしてぞ 三重 行く空の、何事も春は吉田の神社、百さへづりの宮雀、八百や萬の鳥の音も、賑ふ神の誓かや。參り下向もおほき中、人目にそれと褂は、九條の里の戀絹とて、廓に名有る全盛の、松の位の太夫職、二世と兼ねたる戀中の、生駒之助に添ひたやと、歩を運ぶぞ殊勝なり。禿の市彌不審顏、「申し太夫さんえ、けふは生駒之

足る。御邊は是より直に上洛、十握の御劔も今において行方知れず。かほどの大事を餘所にないし悠々と在國し、鹿狩山狩に日を送るは君への不忠。但し所存有つての事か」と、何がな横を蟹公家の、爪を隱せし奸佞邪智。「コハ維時の仰とも覺えず、雲上には月花の御翫、武士の狩漁は軍のかけ引、軍慮忘れぬ武士共が、未熟の手ずさみ御意に入つて祝著」と、一句の答に返答も、何がなとへらず口、「いか樣音に聞えし貞任宗任、鬼神をも欺く曲者、敵に取つてはこは者く。隨分と稽古して、敵の首よりこつちの首の、用心が肝要ならん」と、權威をかさに嘲弄す。こらへかねて權頭、憚もなく進出で、「勅使と敬ひ差扣へ罷在れば餘りしき御一言、先年栗坂の其一戰、小勢を以て大敵の逆徒の張本、賴時を討取つたる其日の軍、勝に乘つて追打せざるは軍の法、彼六韜の誡御存知有つての御批判か。サア御返答承らん」と、詰かくれば瓜割四郎、「ヤア權頭、高官に對して不禮の過言、扣へ召され」と、維時に諂ふ奸曲、義家それと左右を制し、「維時公の御批判も、武勇を勵す御計。武の憤に其身を忘るゝ景成が過言、何條賢慮にかけらるべき」と、事を治むる明智の詞。かゝる所へ小林の鄕民共、折に籠めたる鶴十番、御前に差置き、中にも庄官とおぼしき男、假屋間近く頭を下げ、「此鶴日每に小林の宮居近くおり候故、所の者追ひ候へども少しも恐れず、飼鳥と存ずれども、下々の勝手に惡い大鳥。夫故村中が寄合

奥州安達原

第一

時は康平五つの年、後朱雀院の朝に當つて、東夷猥に逆威を振ひ、王命に背き奉るといへども、源氏の武功に切靡け、再び治る時津風、八幡太郎義家公、武威磨ぎ立つる鎌倉御所、暫く鋭氣を養はる。頃は如月半の空、都より勅使下向有りければ、早門出の日も近づき、取傳へたる梓弓、箭叫の音勢子の聲、さも嚴重に見えにける。宮居間近く假屋を構へ、八幡太郎義家朝臣、執權鎌倉の權頭景成、瓜割四郎糺、威儀を守つて扣ゆれば、上座には勅使大江大將維時、冠の紐の長き日も、早西山にかたむきぬ。維時義家に打向ひ、「此度某罷下る、勅使の趣餘の儀にあらず。中宮御産の御祈、此度の大赦に付き、奥州の流人、桂の中納言則國召しかへすべしとの勅諚。奥州は源氏の任國、義家宜しく沙汰すべしとの御事なり」と述べらるゝ。義家ハツト領掌有り、「中納言則國事は聊の科によつて、父頼義が任國の砌、奥州松が浦へ流され今に存命。此度赦免の下書、義家計ひ奉らん」と、勅答有れば、「コレサ義家、流人の事は下狀を以て事は

く矢はけて立ち向ふ。御堂の扉内より開き、ぬつと出でたる緣丸、刀持つ手もかひぐしく、狙固めし時澄が弦をはつしと切拂へば、「コハ何奴」と狼狽眼、弓取直す其隙に、飛びくる矢坪は時澄が、胸板朱に射通され、どうど轉ぶを起しも立てず、親子一度に立ちかゝり、「父の敵」「ぢい樣の敵」「覺えたか」と、とゞめをさしもに平太郎親子、天にも上る心地なり。引返して忠盛公、藏人諸共「出來たく」。此由院へ奏聞せば、彌御感ましまさん。いざ同道」と打連れて、院參急ぐ横曾根の、家の榮えや洛陽の、三十三間御堂の矢數、是を始めて今の世まで、通矢數當りの矢數、萬々歳の弦かけて、納る矢こそめでたけれ。

澄は謀叛人季仲に心を合せし事聞及ぶ。平太郎は先祖より忠功厚き其上に、佛智に叶ひし者なれば、とも角も心に任せよ。藏人よきに計らふべし」と仰の內、「時澄は某が手の者を遣はせば、追付け是へ來るべし。平太郎殿には御用意」と、勸むる嬉しさ親子共、法皇に暇を乞ひ、藏人が案內に、悅びいさみ入る跡へ、貝鐘太鼓亂調に、響くと等しく冠者爲義、甲賀山の凱陣とて、勝色見する鎧の袖、季仲を高手に縛め引立て出で、「君の威光を頭に戴き、一戰に切靡け、御見參に入れ奉る」と、言上あれば、季仲無念の眼ざし、「奇怪至極」と睨んだばかり。忠盛勇んで、「お手柄〳〵。繩付は此儘に、檢非違使の手に渡し、爲義の勳功は內裏の廳の御沙汰にあらん。先々休息然るべし」と、君も還御の御供と、忠盛が引添て、しづ〳〵還御成し給ふ。旣に用意も辰の刻、北面の武者所、矢數の願相叶ひ、矢拖に弓を脇挾み、的は五寸の角を立て、射前に直つて始むれば、通矢仇矢は藏人が、床几にかゝり采追取り、當り〳〵と知らせの聲、矢數も旣に納りける。時分を窺ひ平太郞、弓矢携へつゝと出で、「ヤア〳〵時澄、五年以前熊野において見遁し置いたる親の敵、橫曾根次官が一子同苗當吉、尋常に勝負々々」と聲かくれば、「ヤア、痩浪人が鏑矢を以て、敵討とは腹の皮。一筋殘つた乙矢を取つて、胴腹を射ぬいてくれん」と、弓に矢矧げて、つつ立つたり。こなたも元より弓矢の家、一矢にたゞ中射貫かんと、同じ

階の本に畏る。法皇御聲さわやかに、「只今眞睡む正夢の、所は熊野證誠殿、汝親子を召連れて、節分の夜の年籠、通夜を申すと見し中に、羨しきは汝等親子、權現直の禮拜は、佛意に叶ふ冥加の我達、取分けて、其子隨分大事に守り立て、成人の後菅く一向宗門を弘めんとの神勅。朕も病苦を遁れし悅び、彌佛心怠るな」と、勅諚有れば、平太郎、「コハふしぎなる御夢かな、某も暫が程、まどろむ中の夢の告、割符を合せし勅、此躮が成長まで、未然を察する御示現。是も偏に權現の、守らせ給ふ有りがたさよ。コリヤ〳〵緣よ、隨分早う大うなれ、平太郎といふ名を讓るぞよ」と、云聞かすれば打點き、「コレとゝ樣、わしも夢を見たはいなう。大きう成つたら、親羅聖人樣とやら、此おれを弟子にして、日本國へ門徒を弘め、念佛を勸むれば、惡人は皆佛に成るげな。南無あみだ佛〳〵」と、いたいけに手を合するもふしぎのふしぎ。法皇始め一座の諸卿、誠に希代の稚子やと、皆感淚を催せり。かゝる折から備前守平忠盛、進藏人引連れて、庭上に頭を下げ、「是なる平太郎當吉、先年親にて候ふ次官光當、北面の武士時澄が、手にかけ討つたる父が敵、何卒御免を蒙り、時澄を討つて父が遺恨を晴さん事、藏人を以て某への願ひ。元來時澄射藝の家に候へば、幸かな此御堂の緣において矢數を射させ、平太郎にも名乘合せ、本意を遂げさせ申し度御願に候ふ」と、奏聞有れば點かせ給ひ、「誠や時

濁惡愚癡の尼入道、凡俗男女を導きて、一向專修に入れん事、他力本願佛の威力、歸命無量なむ不可思議、稱名をだに悦ばゝ、忽九品蓮臺に、其身其儘坐せん事、何疑ひの有るべきぞ。誠や十劫正覺の、如來の誓願あらたなる、是ぞ佛の六神通、未來は本宮阿彌陀の本地、一子が出世を待つべし」と、のたまふ御聲と諸共に、僧形忽金色身、後光は四十八願の、光を放ち目前に、彌陀の印相お眞向の、尊容あり〳〵拜まれ給ふは、有りがたかりける像なり。法皇始め平太郎親子、佛意に叶ふ有りがた涙、扨こそ時代押移り、月の輪兼實公、六角堂に告子して、誕生まします阿彌陀の化身、一向門徒の御開山、親鸞聖人と崇め奉る。末世の衆生を救はせ給ふ、悲願の程ぞ有りがたし。猶も信心いやましに、法皇合掌渇仰有れば、平太郎親子は、同音に、「なむあみだ佛〳〵」六字十字の名號に、現世未來過去遠々、助け給へる報恩講、朝時日中お初夜の勤行、末世に榮える本願寺、あみだの血脈退轉なく、後五百年の末法有緣、草木國土皆成佛、音樂響き花ふりて、和光の神體あり〳〵と、夢か現かしら幣、神は上らせ給ふと見えし、眠の夢は覺めにけり。頭風山平愈寺蓮花王院、卅三間堂事故なく成就し、法事の舞樂と納りて、法皇褥に御安座有れば、院參の公卿達、列を正して伺候有る。法皇夢の心地もさめ、「平太郎はいづくに有る、參れ〳〵」と勅り、はつと答へて横曾根親子、衣紋繕ひ立出でて、御

には權現直に御示しあらん」と、のたまふ辭は神勅の、金剛童子の其姿、扉の内に入るよと見えし眠の夢、法皇御目を開き給ひ、正しく病も、いつしかに、御心涼しく見え給へば、平太郎もふしぎの思ひ、信心肝に銘じつゝ、猶神託を待つ所に、異香妙なる御帳の内、權現の御姿コハいかに、け高き僧形忽然と、階三段おり立ち給ひ、「いかに平太郎承はれ、汝孝心淺からず、年比爰に歩を運び、神を敬ふ正直心、渇する者には食をあたへ、田邊の濱の路頭にて、水に溺れ死したる者、其尸を葬り隱し、穢不淨を忌嫌はず、慈悲萬行の施は、則菩薩の行といふ、口に稱名怠らず、不斷念佛する事も、誠の心有る故なり。其恩德を報ぜん」と、忝くも御頭を低れ、三度禮拜なし給へば、平太郎親子は身を打伏し、忝なみだと感涙に、すさつて九拜なしにけり。御佛重ねて宣はく、「我は是本宮の神體、伊弉冊命の垂跡、本地あみだ如來なり。濁世の凡夫を救はん爲、一宇の堂の棟とせし、柳は楊柳觀世音、假に化現の像となし、汝が妻女と身を變じ、まうけたる緣丸、彼が成長の時を待ち、惟時人皇八十代、承安三年の比に至らば、月の輪の禪定兼實、六角堂救世菩薩に告子の祈誓を待ち、我其時親鸞丸と生出で、念佛の行者と成り、一向專修の眞宗を、普く此土に弘めん時、一子緣丸に名を讓り、平太郎と改名せよ。親鸞丸が弟子となし、法號は眞佛房と名を呼んで、國々行脚に召連れて、念佛門を弘めなば、

ば、「彌成佛得脫せん」と、勅諚有れば悅ぶ宗淸、君も還御の御催し、供奉は忠盛警蹕の、御先を拂ふ武將の役、彌平兵衞宗淸は、妹が亡骸淸水寺へ、送り營む鹿間塚、庭のてり葉もちりぢりに、ちるや紅葉の八重九重、錦をかざる產衣の、祇園女御の名もかへて、爰池殿の六波羅に、育つ水子の夜泣まで、納る歌の御威德、家督の若子を若君が、抱きかゝへて、ねんねんころろ、いとし殿よ花やろ、花の都の輦に、たゞもり立てよ末の代に、淸く盛ゆる因緣謂は、コレこのこのこのこの此若君と、仰がぬ人こそなかりけり。

第五

秦の徐福が口ずさみ、奇異の深山といひ初めて、紀伊と號けし國の中、牟婁の郡の御社、三所權現と崇め奉り、步を運ぶ靈地なり。白河法皇御參籠の御供には、横曾根平太郎當吉、一子綠丸諸共に、證城殿の階の本、通夜を申しの年籠り、信心深き夜もすがら、眠催す肱枕、夢の告をやまつの戶の、御帳開くと覺しくて、神童顯れ出で給ひ、いとも妙なる御聲を上げ、「いかにや法皇しろし召せ、御身頭風の惱により、三所に步を運ばれし奇特によつて、告げしらしめたる一字の堂、觀世音の靈地に准へ、卅三間堂落慶に及びしより、病平癒の悅び善哉。平太郎

取に、いぶりすかせど彌増すおびえ、法皇御衣に抱上げ、「夜泣すと、たゞもり立てよ綠子は、清く盛ふる事もこそ有れ」と、一首の御製の奇特にや、夜泣は忽靜まりけり。忠盛ハット恐れ入り、水子を抱へ立上り、「全く君の聖德に、夜泣も納る歌の德、立入り給ふ下の句の、清く盛の文字を取り、名を清盛と改めて、忠盛が家督となし、忠孝怠る事なかれ」と、育て上げたる平家の芽出し、大政大臣正一位平朝臣清盛とて、官職上なき繁昌は、此稚子の生立なり。法皇御感淺からず、「祇園女御が不例といふも、池殿御前が一筋の、道を守る心より、嫉妬の念も理なり。たとへ死すとも彼が名を女御に讓り、祇園女御を今よりは、池殿御前と呼ぶならば、兩人ともに添ふ心、恨を晴れよ池殿」と、いとも賢き勅、皆々アット平伏の、中に忠盛頭を下げ、「世に有りがたき院宣に、何か遺恨の殘るべき。兄弟が亡父は、三笠兵衞宗久とや、彌正平とてもつながる緣、彌平家に仕ふといふ、心を以て今日より、彌平兵衞宗清と改名し、清盛がめのとと成り、池殿と名を殘す女御が傅、心得たるか」「ハヽ〳〵重々厚き御惠、コレ〳〵妹聞いたるか」と、問へばにつこと打笑みて、物いひたげに手を合せ、夕の露と消え果てたり。法皇重ねて、「いかに宗清、唐土には楚の元王、雲夢の地に獵し給ひ、鹿の塚を築かせて、白鹿廟と號けし例、妹が亡骸は、鹿の油と諸共に、清水寺の邊りに葬り、鹿間塚と名に呼ば

も起る、鱗の痣は惡龍が、此世へ生れて妹と成り、人を殺すの呪咀ふのと、目の前鬼を兄弟に、持つたる兄も過去生の、報いか罰か淺ましや」と、人目も恥ぢぬ恩愛の、血筋の涙ぞ道理なる。漸涙の目を拂ひ、「ハツアさうぢや誤つたり。迚も斯くても助けぬ命、觀念せよ」とふり上ぐる、其手にすがる若倉が、「待つて〳〵」と留むるにぞ、「イヤ〳〵〳〵放されよ」と、爭ひ果しなき所へ、「暫ざふ」と聲をかけ、備前守平忠盛、法皇を供奉し參らせ、悠々然と入り給ひ、「いかに方々承はれ。三十三間堂御棟上の規式より、頭痛の御惱も全快にまします間、恐悅に存じ奉れ。忝くも法皇此館に遷幸なる事、女御の異例產子が夜泣に、叡慮を苦しめ給ふ餘り、我とてもいぶかしく、若倉を直宿にいひ付け、窃に歸つて見屆けたり。彌正平が忠節御臺が愚擬、誠や内心夜叉に譬へたる、佛の誡目前なり。迷ひを晴せよ池殿」と、忠盛の詞の内、しづしづと法皇は、寢所の方に入御成り給ひ、うつる障子のうちとけぬ、女御は衣を身に覆ひ、恥しぶりの御風情、「いかにや女御」と召されつゝ、邊輝く燈明に、立寄給ふ法皇の、影はあり〳〵小男鹿の、女御を始めお傍の女中、「こは〳〵ふしぎ」と立寄る忠盛、映る男鹿の影ぼうし、希代なりける妙術やと、在合ふ人々一同に、呆れて詞なかりしが、忠盛騷がず扇を開き、打消す光一時に、像は消えて誰々も、今ぞ不審は晴れにけり。折しもむづかる產子の夜泣、妼達が取

き覺えたる此出立。實物うしの時まうで、人を呪咀へば身に報う、此苦も覺悟の前。兄上赦して下され」と、有りし次第をつどく〳〵に、聞くより彌正平、「コリヤ〳〵妹、其鹿こそ親人が、預り給ふを能く知つて、父を討つたは法眼よな。思はず知らず毒藥で、敵を取つたは父兵衞が、手引なされたものでがな。忝い有りがたい。さりながら、藁の上から捨てられても、やつぱり產の親人に祟をなし、法眼に討たせたる、元は現在我妹。現在兄が手にかけて、妹を討つも因緣づく。毒蛇の鱗の痣有れば、嫉妬の災有るべしと、見付ける親も妹も、因果の因緣なりけり」と、不便さ增る目に淚。若倉も打しをれ、「いかに嫉妬なればとて、親御といひ其身まで、ひよんな最期の此有樣、懺悔に罪を滅すれば、未來は成佛し給へ」と、いへども御臺は、「いや〳〵いや、此身此儘死ぬからは、生きかはり死にかはり、女御親子を取殺し、安穩でおかうか」と、怨念凝つたる其かんばせ、椛をちらすごとくなり。彌正平猶も齒がみをなし、「因果の道理を聞かしても、いまだ發起の心はないか。コリヤ〳〵妹、祇園女御の胎內より、出生の緣子は、白河法皇の、御胤なりと世の風聞。かほどの事を辨へぬも、輪廻に心の暗む故、先立つた親々まで、地獄へ導く不孝者、エヽ見下げ果てたる其根性、最早此世の暇をくれん」と、突込む刀に手をかけて、互に見合す顏と顏、思へば不便と手もなまり、「一筋な心から、悋氣も出づる嫉妬

の妹御か。コレ申し御臺樣、お心はいかゞぞ」と、始の根今更に、涙もろきは女同士。池殿は苦しさも、血筋の兄の物語、「思ひ合はする事有り」と、若倉が介抱に、漸と起直り、「扨は誠の兄上かや、自が假の父、大炊三位有教卿、今はの時の遺言に、内裏に節會の有りし夜、御溝の池の邊にて、拾ひたる其方なれば、所を直に池殿と、付けたりとの物語。誠の父は奈良の里三笠兵衞樣で有つたか。ハアヽ悲しやコレ兄樣。誠親の敵といふは、此妹でござんすはいなう」「ヤアノ〳〵、父兵衞殿は何故に、其方が手にかけしぞ、仔細いかに」とせいたる顔色。「ヲヽ驚は尤でござんする。樣子語るも恥しながら、自といふ妻有る上、忠盛殿の武勇を感じ、白河法皇より、祇園女御を給はりて、一つ枕の閨の内、始の程は中々に、悋氣妬もなかりしに、二月立ち三月立ち、早五月のいはた帶、自が生得に、常々から物妬、生れつきとは氣も付いて、必ず女の嗜事、思ふまいと思ふ程、いや増しまさる胸のほむら、焚付ける多熊法眼、女御を殺すはよい術、三笠兵衞が預る鹿、千年過ぎた男鹿なれば、其油をしぼり取り、空青石の水を以て、彼が祕方と調合して掲げし燈明、清水の觀世音を祈ると僞り、夜晝産家に灯せしより、女御の影は忽に、鹿の頭に映りしぞや。まだ其上に産子まで、夜泣の魘も其業かと、悦ぶ此身は欲界の、魔王に等き今此形。源義親が祇園の社へ忍びの姿、遠目に鬼と見えたるよし、忠盛殿の噂にて、聞

はいへ親の不便さ餘り、とても生立つものならば、立身出世の相も有り、都の内に捨てんずと、此王城に來られしが、比は大内節會の夜、御溝水の其邊に、捨歸りしとの物語。此兄も其比は、辨へなければ不便とも、悲しいとも思はざりしが、成人するに從うて、弓馬の道を心がけ、武者修行に家を出で、當夏南都へ歸りしに、何者の所爲にや、父の兵衞を刺殺し、家に預り大事にせし、千年劫ふる白鹿、奪取られしと家來が噂。顏も知らず名も知らず、申譯も立たざれば、三笠の家は沒收に遭ひ、夫より所を立退いて、何卒敵も見出さん。又幼少で別れた妹、存命で居るならば、築地の邊へ捨てたとの、父が詞を思ひ出し、一文奴の鑓振りして、内裏上臈と見る度に、女草履の突付賣、願望の譯有りとて、拙者が手づから履かせしは、幾千人といふ中に、昨日六角堂の我門前、乘物へ草履を突付け、足の裏を見た時に、扨こそ尋ぬる妹ぢやと、思へど夫と名乘もならず、ア、儘よ、折もあらんと思ふ中、あの法眼に抱へられしは究竟一、此館へ來て顏見た時、父の最期も語らんと、折を窺ふ無道の法眼、嫉妬の相槌毒藥まで、工の臍をこつちから、味方したはコリヤ妹、とて變もせぬ嫉妬の恨、見遁しならぬ今夜の時宜、ぜひに及ばず此有樣。親には捨てられけふの今、廻り逢うたる兄妹、名乘らぬ先に殺すといふ、是もやつぱり因縁か」と、語る内にも目にたもつ涙ぞ、眞身の印なる。傍に樣子を若倉が、「扨は誠

な事もあらんかと、忠盛樣の仰を受け、直宿申す此若倉、微塵も爰は動かぬ〳〵」「ヲ、動かずばまつかう」と、又切付くるを受留むる、鞘は碎けて飛びちつたり。「申し〳〵、お主に手向ひせぬ印、今まで鞘であしらうた、私が心を推量し、本心に成つてたべ。頼み上げます御臺樣」「イヤ〳〵意見立聞かぬ〳〵」とゆふ暮暗き嫉妬の念、こなたは止める忠義の道、果しなければ聲を上げ、「彌正平はいづくに在る、出合へ〳〵」の聲の下、「まつかせ是に」と走り出で、支へる若倉かい摑み、二三間投退けたり。「サア〳〵邪魔は拂うた」と、いふより早く刀追取り、みだいの脇腹ぐつと一突。わつとばかりに玉ぎりながら、「取違へたか狼狽へたか、自を何故に」と、苦しみ給ふを耳にもかけず、ゐぐれば傍に若倉が、「思ひがけなき此有樣、彌正平とは何者で、みだいを手込になしけるぞ」と、いぶかるも又道理なる。「ホ若倉殿の御不審尤。我身の上を一々次第、語つて聞けんよく聞け」と、手負を突きやりどつかと坐し、「コリャ池殿、味方顏した此彌正平は、現在そちが兄ぢやはやい。ホ、悔りは、理、元來某は南部春日の社人、三笠兵衞宗久が躮。親にて候ふ宗久、妹が生立、器量も勝れて見えながら、一つの疵は右の足、裏にあり〳〵鱗の痣。元來父は神職なれば、未然を察する妹が生立、父母一所に育てては、必ず親に祟るといふ、詞の内に先立つ母。扨こそと驚きて、捨てねばならぬ品と成る。さ

り。漸にふり放し、廊下を目がけ駈出せば、「どつこいどこい」と引戻し、笠かなぐりて顔と顔、「ヤアみだい様か」「若倉か」「エヽお前様は〳〵大それた此お姿、今宵は私が直宿と知りつゝ恥ぢもせず、悋氣嫉妬の心から、女御様のあの様な、怪しい影も合點がいた。剰さへ親子御共お命を斷たんとは、夫程にまで憎いかえ。夜晝ともした燈明へ、油をつぐのにマア仰山な此出立、おどしの正體見付けたから、此水瓶の油さし、こつちへおこし」と取らんとする。「イヤイヤ〳〵渡さじ」と、隠す袂は蝶の羽か、取らんとすがる狩衣の、袖は牡丹の花競べ、互にせり合ふ其内に、ばつたり落ちたる水瓶の、油は殘らずなむ三寶。「モウ赦さぬ」と隠せし刃、「若倉やらぬ」と切付けたり。心得受けたも鞘ながら、打てば拂ひ、なぐれば受ける、後妻打、あしらひ兼ねたる刀の鞘、打つは鐵杖劍の笞、二ツの鍔音ちりりん〳〵、悋氣かうじて茜さす、顔の照葉や紅白粉、亂るゝかもじ髩の香の、梅花にあらぬ紅葉の庭、二疋連れたる獅子奮迅、花踏みちらす如くにて、疼まず去らず打ちあふ刃音、行くも止めるも媼ごぜどし、支へるこなたは弱弓の、おくれて跡へたぢ〳〵〳〵。「コレ〳〵〳〵御臺様、此装束は忠盛様のゐぼし狩衣、夫に敵たふ心ぢやな」「ヲヽ、夫忠盛殿、女御に我を見かへしつらさ。女御が無くばと思ふより、瞋恚の燃ゆる度々に、胸が裂ける腹が立つ。そこ退け若倉、退くまいか」「イヱ〳〵、かやう

の金打まつかう」と、刀するりと拔き持つて、長刀の刃にちやう〳〵。「ヲヽ忝い落付きました。かう成る上は何をか包まん、あの祇園女御の身の上、勅諚とはいひながら、妬しい其上に、男子まで出來たれば、彌瞋恚が燃え返る。心をせくは夫の留守、一刻も早う取殺す、思案はかう」と、咡く點く庭の草、露も洩さぬ密事と密事。「若し毒藥で仕損ぜば、彌正平が段平釼、肝先へ一思ひ」「成程〳〵、女御が寢所の廊下へは、其切戸より左の方、出合所は築山の、艷の庭」とゆふ暮方、土圭の六つもせはしなく、「必待つぞや」「合點」と、別れてこそは 三重 艷葉の、風に散りくる色見れば、物思ふ人の胸の火か、焦がれ出づるぞ恐ろしや。瞋恚のほむらいや增しに、消えもやらぬか池殿御前、執念き心穗に出づる、麥藁笠を眉深く、手に持つ油さしそへて、いとゞ思ひを焦せとや、おどす姿は我獨、外には人もしろ小袖、心の劒とぎ立てて、女御親子を目の前に、取殺さいで置くべきかと、夕闇照す燈籠の、火かげに映す我形、女とも見え又男とも、見えつ隱れつ御寢所の、廊下の庭にをりもよく、誰も木立の築山傳ひ、忍び入るこそ怪しけれ。直宿守る身は油斷なく、始終を窺ふ若倉が、ゑぼし狩衣引きまとひ、心も細太刀脛高く、したひ寄るともしら洲の庭、「曲者やらぬ」と引き留めたり。此方も念力強氣の姿、寢所をさして行かんとする、猶組み留める後抱、「放せ」「放さじ」蔦かづら、風にもまるゝ風情な

「かう成るからは此方から縁切つて、主でない家來でない、證據は爰に、コレきのふ仕た身が證文、當身の間に著服した。ほしくは冥途の土産にせい」と、ずん〳〵に引さき〳〵打付けられ、「重々僣」と立上る、足元ひよろ〳〵臑腰まで、忽ち廻る毒藥の、驗は目口に血を吐いて、七轉八倒のた打つ有樣、己が手盛の鴆毒に、報いの程ぞ醜しよ。池殿御前も醜しながら、心に點く安堵の思ひ。彌正平ずつと立寄つて、とゞめをぐつと足の先、落ちたる包を拾ひ上げ、みだいの傍に直し置き、「驚き入つたる毒の試、最早ちつとも氣遣なし。殘つた藥を煎じかけ、嫉妬のほむらは只一ぷく、女御の命、ナ」「ム丶スリヤ樣子は」「殘らず聞いた、お前の味方、合點か」「ヲ丶嬉しい〳〵。そんならやつぱり此金は、毒藥の價の金、彌正平そなたへ褒美にやる」「ハハ丶丶、法眼が大欲頬、人に洩すまじと思召さうが、此上に十增倍金の山をつみ、法眼を詮議せば、其金に目がくれ、白狀するは知れた事、そこへ心の付かぬが女性。最前より見屆けた、お前の性根に見所有り、今より彌味方して、本望の後楯、命を的に懸ける仕業、金貰うて何にせう。慮外ながら男でえす、金で頼れる樣な魂でごんせぬ。褒美もいらぬ金もいや、そつちへ取つて置かしやませ」と、口も心もさつぱりと、實一疋の男なり。みだいも力を得給ふ風情、「頼もしよ〳〵、彌頼み頼まるゝ、證據が見たい」と詞詰、「ヲ丶尤、互に心を合すといふ、印

事を知らせて助けうか」と、打ふる長刀かい摑み、「フヽヽハヽヽヽ、美しい器量をして、人を殺す毒薬とは、どうでも是は悋氣の沙汰、聞いた者はおればかり、人が知つたら免さうか」と、いはれて御臺もたまりかね、「モウ遁さぬ」と引たくり、切込む長刀たぐつて取り、石突丁ど急所の當身、御臺は跡へたぢ／＼／＼、「コハ狼藉」と法眼が、するりと拔いて切りつくる。「まつかせ」沈んで素股させ、同じく石突眞の當、ウンとのつけに反返る、手練の程ぞ心地よき。されども騒がぬ彌正平が、茶碗に茶をうつし入れ、庭に伸つたる法眼が、體へぐつと活を入れ、「コレ／＼親方氣が付いたか、息つぎに茶を一つ」と、渡せば取つて押戴き、「どなたか是は過分々々」と、呑込む毒茶息する内、こなたに轉ぶ御臺の傍、脈取つて見つ足の脈、つく／＼考へ打點き、抱起して死活のさそく、むつくと起きたる池殿御前、落ちたる長刀取直し、「彌正平やらぬ」と討つてくる、刃先を潜つてしつかと取り、「御臺所急くまい／＼。望の毒薬試　見せう」「ムンそりや誰を」「ハテ誰というたらソレ其處に」と、ひやうまづいたる詞の下、法眼が白黑眼。「よつく身どもを當てたよな、イデ毒薬を」と立寄る目先、鍋を突き付けさし付けて、「此中には雫もない」「ヤア無いとはいかに」と惘れる顔、打ながめて高笑ひ、「息次に茶というて、呑したを忘れたか」「ヤア／＼／＼、主に毒を呑したとは憎い奴」と、睨んで見てもびくともせず、

何にも聞きは致さねども、斯く手詰に成るからは、得心でたべませう」「ヲ、出かした、迚も免さぬ倂が命、有りやうは毒薬ぢやはやい」「ヱイ」「ヲ悔り仕やるは理、コレよう聞いてたも、殺さにやならぬ人が有る故、調へた此毒薬、試にどうぞ呑んでたも、コレ自が頼んだぞや。若しも親兄弟妻や子でも有るならば、死にやつた跡で自が、念比に屆けてやらう。彌正平、そなたの命百兩に買うたぞや。サア早う呑んでたもいの」「アこれ申し、大切な人の命、澤山さうに、雜魚鰯か何その様に、薬を呑むと忽ち死にます、死んだ骸に千萬兩の金貰うて、何の役に立ちまする。屆けてやらうとおつしやつても親はなし、女房がなければ子は元より。併し兄弟がたつた一人、夫も幼少で別れたれば、顔も知らず有所も知れず、心がかりは夫ばかり。此様に二本ざしに成つたも、漸ときのふから。すかんぴんな一文奴、面を晒すも命が惜しさでござります。哀不憫と思召し、毒薬を呑む事は、御赦されて下さりませ。見ますれば此様な、結構な御殿造のお長者様、申し〳〵」と手を合せ、「旦那様、法眼様」と手を擂つて、拜んで廻る男泣、目からこぼるゝあら涙、白洲は蜂の巢をなせり。法眼がむつと顔、「猶豫する程付上る胴張者め。御前には其長刀、生殺しにしてくらはす工面」「ヲ、隙取つては妨ぞ」と、かい込む長刀刃向になし、ひらりと薙ぐればきりりとかはし、「こりやどうでも呑ます所存でござりますな」「おんでもない事、叶はぬ〳〵。大

忽に力も落ち、燈心を持つ力もない、又力量なき者が呑めば大力と成るによつて、是なる池殿御前、劍術を好み給へども、高が女性のかよわき體、力量の增す樣にと勸むる藥、試なくては呑むまじと有るによつて、指詰汝へ身が無心、則褒美の金子百兩、汝が力をあなたへ讓る忠義の藥、早く〳〵」と法眼が、僞り飾る詞の端、彌正平も當惑し、「何ぼ左樣御意なされても、能く思うても御らうじませ、生れながらの中風はしらず、男と生れて力がなくては」「サア〳〵そこぢやて、力がなくても其金を、身に付けなば一生は安樂、此法眼藥を盛り、人を助くるが醫者の役、汝が爲に惡い事を勸めうか、ぜひに呑め、早く呑め」「アレまだおつしやる、神佛に手を合せ、息災延命家内安全と祈るは何の爲でござります。我人體を達者にして、子孫の榮を願ふ身が、何ぼ金がほしいとて、生れも付かぬ頑と成り、骨なしに成る事は、御免々々」と迯出づる。法眼先に飛んでおり、切戸の口に「どこへ〳〵、迯げるとて迯さうか。畏つたと呑めばよし、呑まぬと素頭押へて呑ます。サア〳〵夫でも」と立戻る。此方は御臺が長刀構へ、「呑まずば是に載せうか」と、左右を立切る錠鏁、跡へも先へも彌正平が、地獄落しに合ひたる如く、遁るゝ方もなかりしが、思案極めて、「さうぢや〳〵、成程藥呑みませう、が其藥は、力の落ちるばかりぢや有るまひ、命も落ちるでござりませう」「何と〳〵、扨は樣子を立聞いたな」「ア、いや〳〵、

減も法眼が、手づから仕かける火をおこす、扇の風も六天の、魔風を爰に吹立つる、毒薬とこそ知られたり。法眼が仕濟し顔、「大切な祕藥の料、金子百兩引かへの約束、お渡し有れ」といふ内に、池殿は手箱より包取出し傍に置き、「イヤなう法眼殿、疑ふではなけれども、假初ながら女御の命、生きる死ぬるの大事の場、慥な證據が有るかいの」「ヱイ何と」「サア忽ち命を取るといふ、慥な事が見たいはいの」「ハテ疑の深いお方、女御の姿をあのごとく、鹿の影に映したも我祕方、眼前慥な證據でないか。煎じかけた此藥、早う呑して」「サア其試が見たいといふ事」「ム、然らば婐どもか」「イヤ〱、夫では結句傍輩同士、女御に洩れては猶大事」「ハテどうがな」と法眼が、「ム、夫よ〱、新參の若黨め、さうぢや〱」と打點き、「彌正平參れ」「ナイナイ〱、御用いかゞ」と蹲る。「呼立すは別儀でない、無心が有る聞いてくれうか」「ハア、こは改つた御詞、無心とはいか樣な儀でごはります」「イヤ外でもない、爰にコレ煎じた藥が有る、汝是を呑んでくれ」「ヱイ、私めはどこも惡うはござりませぬ」「イヤサ主從と成るからは、主人が用に立てん爲さ」「左樣ではござれども、篤と樣子を聞かない內は、めつたに藥は」「ムン尤」と包みし黃金投げ出し、「夫で呑め」ヱヽと取上げ、「コリヤ金さうにござります、是で呑めとの仔細はどうでござります」「ヲヽサ〱此藥は家の祕方、汝が如き力量有る者に呑ますれば、

眼邊見廻して、「新參の若黨やい、藥箱是へ〳〵」「ナイ〳〵」內玄關の切戶の庭へ入來る奴の彌正平が、菖蒲革のぶつさき羽織、仕きせの大小藥研鍔、銀金具の藥箱、緣先にかつゝくばふ。夫とみだいも不審顏、「あの者は、きのふ慥に」「ア、成程〳〵、六角堂にゐた一文奴、中々力量の者なれば、召抱へて斯くの通り。ヤイもう用はない、玄關に扣へておれさ」「ナイ〳〵」切戶の口に彳めば、「イヤサ密に談ずる仔細有れば、御前にも人を除け召された。用有らばこちから呼ぶ、罷立て〳〵」「ナイ〳〵」切戶の外へ立出でしが立留り、「アノ御臺樣は、きのふ慥に草履を賣つて覺えた顏。ムヽ〳〵何にもせよ女中ばかりの此館、身が旦那も療治にかこ付け、女性と二人指向ひ、ハヽヽヽどうでもコリヤ色事に極つた」と、つぶやき〳〵出で行く。池殿御前小聲になり、「きのふ途中で申した通り、女御の姿の異形の體、血の上の悔りで、氣を取失ふか、目でも廻かと思ひの外、けふで六日になるけれど、何の驗も見えぬ故、心をせくは外でもない、三十三間堂棟上も早今日、忠盛が歸られて、此事を知らせては、折角仕込んだ心づくしも水の泡、けふの日中に殺す思案、賴んで置いた毒藥は」「シイ、成程〳〵調合して參つた、則是に」と取り出す包。「此祕藥の奇妙といふは、男に吞ませば目鼻口から血を吐く、女には幸究竟、彼月の不淨のおりる如く、人知れずに命を取る。幸ひ爰に藥の風呂」水の加

と見やつたの」「いやモウお道理でござります。したが、今宵のお伽は、此若倉が致しませう」「ムヽすりやまだ疑が晴れぬかや」「イヽエ左様ではござりませぬ」と、云ひつゝ立つてお次に向ひ、「若倉が供の者、其箱持て」と呼ぶ聲に、あいと出でくる婢が、一ッの箱を直し置く。「モウ用はない、歸れ／＼」と追歸し、ふた押明けて取出すは、ゑぼし狩衣。「是は是、忠盛樣守護の間召されたる裝束、夫藏人を以て仰せ越されし其仔細は、すべて産家に先例有り、男子ならば桑の弓に蓬の矢を矧げ、障碍を拂ふ事故實なり。忠盛樣にも、藏人も法皇樣の守護に參れば、汝かはつて其役を勤めよとの御仰、女ながらも忠盛樣の御名代、今宵の直宿は此裝束。ナア申し、是でもお伽は成るまいか」と、辯舌さつぱり申せしは、實藏人が女房なり。池殿も點き給ひ、「夫の仰と有るからは、何しに違背の有るべきぞ。寢所の次の廊下口、小座敷が直宿の座」「然らば左樣」と狩衣ゑぼし、小太刀も腰に指足の、お次をさして入る折節、「多熊法眼樣御出なり」と取りつがせ、醫術に眼光らす頭殘切髮、頤先へのつか／＼、進むる席に大あぐら、池殿御前慇懃に、「コレハ／＼御苦勞樣。ソレ煙草盆お茶上げい」と、饗し有れば多熊法眼、「シテ／＼女御の御容體、別條は御ざないか」と、眴の挨拶呑込む御臺、「ヤア婢ども、圍の爐に炭ついでおけ。衣江は襁褓の役ではないか。おらんはお乳に氣を付けよ」と、人を除けるは密談と、皆々立つて入りにけり。法

人が疑ひまするも、尤かと存じますはいな」「サイノ、其法眼は産前産後の名人、手負に譬へし産婦の療治、自が頼んでかけて置いた。夫程に疑はしくば、御寝所へ同道して、女御の姿を直に見せう。今いふ通り、人に逢ふを恥しがり、衣を被いでござるはいの。自も此襠、顔を隠して問ひ音信。そなたも襠をかづいておぢや」「アイ〳〵、然らば左様」と立ち上れば、池殿御前先に立ち、「ホンニ次手に和子の顔も見せませう。毎夜の夜泣で迷惑をするはいの」「ホンニ左様に承はりました、いかい御難儀でござりまする」「サア〳〵、お出。コレ〳〵、必ず顔を隠す事忘れまいぞ」と打連れて、寝所にこそは入り給ふ。跡を見送る腰元ども、「何とおいや聞きやつたか。御家老のおかもじは又格別、いかな奥様も理詰には是非がない」「ヲヽ、夫いの、いかな事覗かしもなされぬ御寝所、難病とは何ぞいの」「ハテ今いうてござつた怪しい影が映るといふは、女御様のお頭が鹿の首に映つて、股の有る角が両方へ、かうしやつきりと立つといの。まだ其上に産子の和子、逞しいよい子ぢやが、夜に成るとおぎやア〳〵と泣き続け、あの様に夜がな夜ぴと泣かしやるのは、犬にならしやる下地ぢや」と、いへばおいやが、「ソリャなぜに」「ハテ母御様はあの通り生きながら鹿に成つてござるぢやないか」「ホンニさうぢや」と口々に笑ふ、後へ立出づる、若倉が思案顔、池殿御前も續いて出で、「何と若倉、是まで傍へやらぬ譯、とつくり

に逢ふを恥ぢ給へば、お伽には自ばかり、娰まで遠ざけて、中々お傍へ寄せ給はねば、折角見舞に上りやつても、よもや逢ひはなされまい。上りやつた樣子は自が云ひませう。大儀にもこそ有れ」と、にべなき仰に猶すり寄り、「成程御難病の樣子も承はりました。私も數ならねど、お家の執權藏人が女房、何事もお心置なく、御用を勤むるが家老の役。大切な若君樣、御誕生の折から御前樣に成りかはり、產家のお伽何かの事も承はらいでは、夫が手前もいかゞ。ナ申し、左樣でござりますまいかな」「サア、いやる所は尤なれど、今いうたを何と聞きやる。常體の產家なれば、倶々伽をして貰へど、とかく人に逢ふ事を恥しう思召せば、心を明し合うた自、夫で餘人は一人もお傍へやらぬはいの」「サアそこでござります、お前樣は御本妻、女御樣はお妾、其お妾に御男子ができたれば、どうでも本妻樣が悋氣嫉妬の心が有つて、ひよつと毒藥、サ毒藥などといふ樣な、左樣な事ではござりますまいけれど、世間の口には戶が立てられぬと申せば、お前を惡樣に噂さすも氣の毒、何とぞ今宵は私が代つて」「ム、何といやる、自が悋氣で毒藥をもるとは」「サアお前樣に限つて左樣な事はなけれども、世間の噂には色々と、ない事まで申すがならひ。殊に忠盛樣には法皇樣諸共、三十三間堂御普請の其間は、精進潔齋故、お館へはお入もない筈。多態法眼といふお手醫者ばかり、是も忍んで參るとの事。さすれば

さらば行儀を直してやろ」と、一人々々に死活の手際、性根付けられむつく〴〵、起きて見合す顔と顔、砂打ちはらふ面目同士、彌正平が名對面、「今日よりも傍輩づから、以後は萬事を引廻し」「成程下拙は入口八兵衞」「身どもは六助」「又内吉平」「互に別懇々々と、挨拶取々乘物へ、多熊はしづ〳〵乘移れば、直ぐに舁出す四枚がた、お草履「任せ」と彌正平が、後に手をふる腰をふる、主をとり毛のふり仕廻、目見えの晴と藺草履、足を揃へて三重歸りける。六波羅は、都の巽鹿鳴草、紅葉かつ散る山館、忠盛卿の北の臺、池殿御前の介抱に、祇園女御の御安産、けふ髮垂の規式の中、婹達が取々に、産後の補藥煎じ樣、常にかはりし違例とて、看病等閑なかりけり。「進藏人家貞が女房若倉お見舞」と披露の聲、寢所にかくと傳へてや、池殿御前しとやかに立出で給ひ、「珍らしや若倉、近う〳〵」の御挨拶。ハット手をつき膝摺寄り、「此程はお次までお見舞は申せども、女御樣の御病架へは、あなたより外餘人はお除けなさると聞き、御容體の伺ひも人傳の噂のみ。御前樣にはいかいお氣もせ、御苦勞樣や」と會釋する。「ヲヽ夫は奇特やようこそ〳〵。したがナウ若倉、尊きも賤しきも、おなかにやゝを娠しては、媼ごぜの身の一大事、何とぞ御産も安かれと、淸水の觀音樣へ祈り申し、御寢所には燈明を揭げ立願せしに、其利生にや其曉、御産も安うなされし故、ヤレ嬉しやと思ひの外、例ならぬ御難病、人

切先反らして頤へ、突付け〳〵差付けられ、思はず跡へたぢ〳〵〳〵、「待て〳〵彌正平手際は見えた。刀を引け」「サア」「サア引け」ぢり〳〵すさつて眼を付け、「何意趣有つて此狼藉。身に覺ないからは、どなたでもどいつでも用捨はないぞ」「ホヽウ適々。其手練を見よう爲、いやはや〳〵驚入つたる今の働。彌正平、無心とは別儀でない、身どもが家來に抱へたい」「何が何と」「イヤサ身は多熊法眼というて、平家の大將忠盛公へ出入る者、此ごとく帶刀致せば、長袖ながら、武士といはんに頭振はふらじ。仔細有つて力量有る者を望む故、只今の狼藉、見所有る汝が手練、彌正平、奉公してくれまいか」「ムン抱へ樣が面白い。成程奉公仕りませう」「してくれうな」「いかにも家來に成りませう」「ホヽ早速の得心滿足々々。切米は追つての事、當分の拵料、金子十兩認め置いた、汝が手形印形せよ」と投げやれば、押開き讀下し、「其日暮しの一文奴、印形とては持合さず、印は斯く」と指つんざき、しつかと居ゑたる血判見て、「出かした〳〵適氣轉。此上は違變なく彌主從、悅ばしよ」「ハアヽ拙者も安堵仕る」と、金子の包を懷へ、「お納めなされ」と落ちたる刀、取つて渡して一同に、鯉口ちやんと納りける。羽繕ひして法眼が、「乘物參れ」と呼はれども、四人殘らず生兵法、彌正平くつ〳〵吹出し、「ハヽヽヽ、尻引からげた亡者達、六道の辻で草鞋錢、直切つて居らるゝ最中ぢや。エヽ主人の傍でぞんざい至極。

時の風雲有り、人にも不時の煩ひを、心に工夫の多熊法眼、歩より爰に立歸り、乘物先へ舁居ゑさせ、家來を近付け呼げば、畏つて小屋の内、とつくと窺ひ、「成程々々。彌正平が住家と相見え、能くふせつて居りまする」「ム、幸ひ〳〵。ソレ爰へ呼出せ」と、聲より早く立かゝり、「彌正平御用が有る、あれへ出ませい」「出をらう失せい」と引出され、あら立てんも仔細は知らず、只ハツ〳〵と引きずられ目通に蹲り、「御用が有る、罷出ませいとござる故、罷出ましたが、シテ召しまする各樣方は」「尋ねて汝が何にする。用が有る、つつと出をらうさ」「ナイ」「夫へ出ませい」「ナイ」「いやさ出をらぬか」「ナイ」「早う出ませい〳〵」「ヤイ〳〵、口々にわめいてうろたへさするな、彌正平そこへ出よさ」「ナイ」「呼出すは別儀でない、無心が有る聞いてくれうか」「ハア、見ますればお歷々樣、彌正平めに御用とは、先いか樣な儀でござりまする」「聞いてくれうか」「身に叶ひました儀でござらば」「聞いてくれうな、ソ、そこへすつと出よ」「ハイソレ」と這出づる。ソレと一聲相圖の詞、二人一度に「捕つた」とかゝる。「まつかせ」居ながら膝車、續いてかゝるを小手返し、どつさりころりと打付けたり。四人が互に先手後手、左右にかゝれば身を固め、はつし〳〵と急所の當身、ころ〳〵轉んで「ひい〳〵」隙かさず法眼腰刀、討つてくる身を拔合せ、受つ拂ひつ上段下段、いらつて掛る多熊が刀、はずみを打つて打落し、

履きなされて下さるが、代物纔八錢宛」「そんなら求めてやらうか」と、立寄れば、「申し〳〵、六角堂へ大願有る故に、我等が手づから履かして上げるがお觀音への御奉公。マアかう召させますればお女中方には、達者な男を持つが奇妙。たとへ色事でしくじり有つても、第一足の上らぬが佛方便、はくも後生、履かるゝも五障、三從の罪を滅する草履の威德でござりまする」と、いひ並ぶれば、「テモ扨も、耳寄な草履ぢやないか。サア〳〵はかして下されと、脛もあらはに履く足の、白い衣江が尋常さ。次は鍬平おいがや跟、黑う太いはおらん殿。水仕のお龜が足の甲、十文に餘るは中居のお杉、皆夫々に履きかへて、「扨てもしつくり心地よい、豆の痛が直つた」と、笑へばみだいも打笑みて、「是へも持て」と詞の中、「ナイ〳〵〳〵」と藺草履、「恐ながら」と召しかへさせ、後ずさりしてかつつくばふ。供の侍「夫々」と、價を渡せば、押戴き押戴き、「大勢の附々故、手間入らずに賣切つた。さらば是から一休。ちつとお寄りなされませ、我等が宿は此圍、鍋にも釜にもコレ此炮烙一つ、悉皆猫の子同然ぢや。そんだいなんぼ寐とぼけても、途に迷ふ氣遣なし。藁屋の雨は出にや知れぬ、果報は内で一寐入。さらば閉帳」小家の戸に、筵垂れつゝわぶといふ、住家にこそは入りにけれ。こなたもいざと夕日かげ、「男の卒都婆小町ぢや」と、どつと笑うて乘物釣らせ、池殿御前は御步路、打連れ館に歸らるゝ。天に不

しとゝん、ソレ〳〵、しだれ柳のしだれ黒じゆすの帶、きりゝとしやんと〳〵、結びしめたる。ヤレ扨ナ、花は九重、櫻しな〳〵、彼岸櫻や糸櫻、君は楊貴妃墟釜普賢ぞ虎の尾桐が谷、ふけんぞとらのを桐が谷、君は楊貴妃墟釜ふけんぞとらのを桐が谷、吉野初瀨の花の盛ヱ。アレ〳〵あのお供の擔げた御長なぎなたは誰が御長なぎなたぞ。あれこそ姫の御長なぎなた、草履取には可介可内出來助出來平、草履賣るのは此彌正平、彌正平〳〵、花見辨當丈夫なかどうぢや、そこに油斷は少しもござらぬ、行列崩すなとお先の女中、被衣姿でしやな〳〵や。お上臈が見ゆる。やは〳〵ござれ、呂白傾城、色の盛りは起請まで書いて、其處に如才は少しもござらぬ、粋なきまりは中居の手管、横に帶してしやな〳〵や、お上臈が見ゆる、やはやはござれ。賽の河原の地藏尊、櫓の上より駒引寄せ、どんぐわらり、ちやんぐわらりと乘つたるは、めざましかりける次第なり。閻魔大王三途の川を、笠かぶりかたむけて迯げらるゝ。お宿はどこぢや、山の手〳〵。ハツアはいや德利かんなべ地獄世界に著きにける」ヨイヤ〳〵と見物は、拍子に乘つて歸りけり。妼達は口々に、「みだい樣御らうじたか、テモ面白い見物事。ソレ侍衆、お足をたんとお引出に」と、いふに彌正平、「ア、申し〳〵、お足はきなかも取りませぬ、お足よりはお足にめす藺草履、御めい〳〵に一足宛、お買ひなされてやは〳〵と、お

「イヤ厚鬢より惣髪の法眼殿、此おいやは氣に入つた。苦味の走つたあの顏が、癪にはずんど妙藥やら、御臺樣の相醫者ぢや」と、樣子しら歯が追蹤口。池殿も打笑み給ひ、「いか樣、心を晴す爲にそろ〳〵歩をひろはん」と、のたまふ折から向ふより、雙紙の鑓に藺草履、ふりかたげたる一文奴、子供童に囃されて、「彌正平〳〵、京の町の彌正平。振つたる鑓は何々、羽熊鎌鑓大鳥毛、小鳥毛。花の國入しつかとせい。合點だ〳〵まつかせろ。文の取りやり、抜いたりさいたりせまいか。晩の泊は吞んだりはつたりしてこめさ。是も戀路の手管鑓。サア〳〵鑓はお望次第、持鑓だて鑓むしやくしや鑓、やりばなしは家の藝。臺笠立笠雁がさまで、振り分けて、御覧に入れる。鑓先達者女中の氏神、見てやりなされ」と出はうだい、口合交りの前口上、物見だけい媙婢、「アレ申し評判の彌正平奴、御臺樣へのお慰、所望々々」と立ちかゝれば、おつと心得たんほの底、口を叩いてうかれ歌、「振れ〳〵ふり込めさ、ふり込め〳〵さ、お先を拂うてあれはさ、アリヤンリヤリヤ、コリヤンリヤリヤ、いてさヨイ、行列揃へてほつ立てろ。行くもヤレサテ、通ふも忍ぶも亂れ、風が吹くやら、追風が、連れて〳〵サツサ、縫ふてふのサツサ、我里の花の詠めん、投げかけゆりかけ、しとゝんとん〳〵しとゝん〳〵、しだれ柳のソレしだれ黑じゆすの帶、ゐいやらさらさ〳〵。とゝんととん〳〵とう參ろ。投げかけゆりかけ、しとゝん〳〵とん

者も是より直ぐお館へと存ずる所。シテ彼方の樣子は」と、小聲になれば、「さればいの、先達ての療治によつて、右の姿に仕課せしが、マア聞いて下さんせ。腹が立たうか立つまいか、忠盛殿の種を孕み、五日跡に輕い產。しかも逞しい男の子、血の上の事なれば、日廻でも出ようか、恟りでも召されうかと思ひの外、常よりは結句氣合もよく、あの手ではいかぬ故、外に仕樣が」「ア丶成程。又其上は我等が祕方、家の祕藥を一ぷく呑まさばころり山椒、產後の上目まひも見せずついべた〳〵。法眼きつと請合〳〵。したが大切な藥料、謝禮には金子百兩、御合點か」と、弱身へ付込む欲頰は、疫病神より醜しよ。御臺は點き、「ソリヤ合點、夫に限つた事かいの。自が胸のほむら、イヤアノ癪さへ直る事ならば」と、邊の人目を憚りて、夫といはねど呑込む法眼、「然らば明日お見廻申す」「そんなら必待ちまする。幸ひ明日は御堂の棟上、忠盛樣の留守の內」「サア夫も合點。今日は六角堂の緣日、隨分匕の廻る樣、參詣致す。シテあなたにはお下向か」と、目と目でたくま法眼は、乘物釣らせ別れ行く。跡を見送る池殿の、心はしらぬ妯の、衣江は中にもべれんそう、「此間は祇園女御のお安い產のお禮參り、淸水から六角堂、御深切な御臺樣、夜晝お伽のお氣ばらし。ナウおらん殿、ちとおひろひもよかろぞや」「ヲ丶それそれ、片詰つた屋敷を出て、町々を步いたりや、厚鬢男をたんと見て、目の正月をしたはいの」

貴邊のお取成。是より普請の場に立越え、忠盛卿へも今日の首尾、申上げなば嘸御安堵。此上ながら一ッの願ひは、父が敵武者所時澄、年來の欝憤散ずる時節と存ずれば、此の儀も宜しう御斗ひ下されよ」と、頼めば藏人打點き、其儀も主人忠盛へ、達て願ひ候所、右三十三間堂御普請の其間は、法皇始め奉り、忠盛も、精進潔齋、其上に非常の大赦を行はれ、罪有る者の命まで御赦免有るも、彼の堂事故なく成就あらせんとの結構。何事も落去の後、此藏人が指圖して、御本望は受合ひ申す」と、事を分けたる家貞が、詞を聞いて「實尤。何かの事はともかくも、貴邊の心に任する」と、互の挨拶退屈して、「コレとゝ様、かゝ様の柳の木に逢はさうといはしやつた、こんな美しいべゝ著たのを、かゝ様に早う見せたい」と、悦ぶ顔を見る父は、胸までぐつとせく涙。心を計る藏人家貞、「ヲヽしほらしや健氣にも、出世の身を悦んで、見せたいとは自然の孝行。則柳の枝を以て、一千一體の佛像を刻まれ、彼堂に納め給ふ大願、枯れたる木にも花咲くとはかやうの道理。ヤア何かいふ間に時移る、いざ同道」と打連れて、急ぐ卅三間堂、普請場さして伴ひ行く。跡へしとく四枚肩、揃への看板醫者乘物、人まつ蔭に舁き居ゆれば、町とは見えぬ絹被、媵が付く鋲乘物、是も木蔭に立てさすれば、出迎ふ多熊法眼、こなたは忠盛の御臺所、池殿御前立出で給ひ、「是はく能い所で逢ひました」「ハッ成程、拙

させば、俱にすがりて緑丸、「かゝ樣戾つて下されなう。コレかゝ樣」と聲立てて、呼べど叫べど其かひも、なびく梢は吹き亂れ、物もいは根の苔むしろ、木の根を枕に親と子が、疲れ臥すこそ哀なれ。實恩愛に、ひかれくる、母が姿は幻に、「ヲヽ、道理なりさりながら、さほど心を亂されては、緑も何となるべきぞ。最早心を取直し、とく〳〵都へ入り給へ、道の案内」とゆふしでの、神隱れして失せにけり。親子はふつと目を覺し、ふしぎと見れど、俤は、草葉に殘る露ばかり、夢か現かいつの間に安部野の道も遠里や、小野の古跡も早過ぎて、難波の春邊あたたかに、野もせ堤にさいたづま、未央柳の緑丸、さきに立ちては打まねく。跡には父が呼ぶこ鳥、空には越に歸る鴈、今ぞ都の雲に入る。鳥羽の近道はゝきゞの、見えつ隱れつ數へ行く、人こそ知らね神垣の、大内山にぞ三重著きにけれ。人はいざ、苦は色かへぬ松原を、引きもちぎらぬ物詣、六角堂の御緣日、往來の人を拂はせて、進藏人家貞、跡に續くは横曾根平太郎當吉、緑丸諸共に、昔に返る花の袖、肩衣袴大小も、さすが内裏の北面に、仕へし父が本領に、今日安堵の參内遂げ、打連れ歸るぞゆゝしけれ。「ナウ藏人殿、法皇の御頭は先立て差上げ、卅三間堂の棟上も、早明日と承る。某も熊野にて別れたる老母が追福、昨日までに明け候へば、不淨を拂ひ服を改め參內し、横曾根の家を起すべきとの綸旨頂戴仕り、以前の武士に返る事、偏に

が、御頭を包みさし荷ふ、肩と肩とに置く霜の、白き髑髏を道連に、母の棟の後慕ひ、都の空へと思ひ立つ、心の内ぞ物憂けれ。比は如月末つかた、まだ山々に消え殘る、雪はあれども母と呼び、妻とも呼んで青柳の、枝葉も倶にちり〴〵の、今は筐の綠丸、思ひ出しては立ちどまる、住家を後に紀の路の海も、はてなし坂の松檜、杉の木立にむら烏、かはい〳〵と鳴く聲も、我が哀を友泣に、すゞめ伴ふ稚子が、石を拾うて石なご礫、打つや現かうつとりと、父は歎に氣も閉ぢて、そゞろ心のけら〳〵笑ひ。されども髑髏は大事ぞと、かたに引かけ先に立ち、「都へ還御の御幸道、御先を拂ふ警固の武士、横曾根次官が一子平太郎が御供申す。車は我が肩車。ハヽヽヽ、思ひ出でたり、漢王は李夫人の別を悲み、甘泉殿の夜の床、夫人の姿を、畫にうつし、九花帳の内にして、反魂香を焼き給ふ、其俤は有りながら、物を言はねば笑ひもせず。ましてや我も其の如く、妻は非情の柳の精、あゝ心なやつれなや」と、往來の袖にすがり付き、憂き事の數々を見給へや人々。春は梢の花とのみ、心を寄せて短夜の時鳥、雪見草淺澤の杜若、あやめ卯の葉も枯れ失せて、螢もうすく、かちこ顔なる我が涙、落葉時雨に濡れ初めて、我ながら恥かしや。百夜千夜のなじみかや、谷の柳の年ふりて、まして雪霜厭ひなく、一夜を待たで消え失せし、妻故に物狂ひ、あなたへ走りこなたへ走り、「アレ〳〵妻は爰に」と指

横曾根の家を引起し、父の敵咋澄、折を以て某が、宜しう手引仕らん。一刻も濱邊まで、イザ御用意」と勸むれば、「殘る方なき御懇情、忝し」と一禮のべ、「用意とても此儘」と、緣諸共立ちかゝり、木やり音頭は父が役、かざす扇もしをれ聲、「むざんなるかな稚き者は、母の柳を都へ送る、元は熊野の柳の露に、育て上げたる其綠子が、ヨイ〳〵ヨイ〳〵〳〵、アリヤ、コリヤ」「こりやおれがかゝ樣か」と、綱引捨ててわつと泣き、「最一度乳は吞まれぬか」と、縋り歎けばてゝ親は、淚に聲もかれ柳、枝に流るゝ血汐の淚。是や目前哀別離苦、動くも不思議はゝきゞの、草木心有ればこそ、引けばひかるゝ恩愛の、孫よ〳〵とゆうべまで、いとしがつたる老母さへ、今は子知らず親知らず、道の街に葬らんと、かき抱きたる孝の道、忠義に厚き藏人が、諫めて歸る都の土產、梛と柳と契りたる、連理返りや楊枝村、女夫坂とて今も猶、いひ傳へたる物語、憂きをみ山や三熊野の、柳の棟の由來は實、此因緣と知られたり。

第四　道行親子の友衛

爰に哀をとゞめしは、綠丸が父上なり。妻にも憂きをみ熊野の、谷の柳のいとし子を、後に殘して消え失せし、母の柳も今ははや、都の方へ引く牛の、棟となるも法皇の、詞も重き親と子

討つたるも、偏に神の加護なるか」と、懐中の守より、牛王取り出し能く見れば、數多の烏のかげもなく、「扨こそ大靈權現の、不思議を見せしめ給ふか」と、肝に銘ずる折もこそ、又も羽音は悦び烏、飛連れ〳〵、目下開きし紙は忽に、元の牛王と成りにける。かゝる奇瑞をみ熊野の、牛王の威德末の世に、門戸に押して盗人を、防ぐ守ぞ有りがたき。早東雲の街道筋、木遣はやして地車の、轟く音ぞ勇ましや。「和歌の浦には名所がござる、一に權現二に玉津島、三にさがり松四に鹽釜よ。ヨイ〳〵ヨイ〳〵〳〵、アリヤ、コリヤ、よいとな」揃のゆかた染頭巾、件の柳を引きおろし、修羅にかけ手木にかけ、漸爰に來りじが、俄に車地に据り、ゐいや聲して人步ども、入舟が木遣でも、後へはすさり一寸も、先へ行かぬぞ不思議なる。警固の武士進藏人、心に點き、「思ひ當る事こそ有れ、急くな〳〵」と制する所へ、身拵して平太郞、緣を連れて出で迎ひ、仔細は夜前の對面に、老母が身の上有增語り、「扨こそ此木の動かぬは、目前親子恩愛の、別れを惜しむと覺えたり。妻が靈をもいさめる爲、何とぞ綱を此悴に、引かさせて給はらば、有りがたからん」と願ふにぞ、「實尤の御賴、何か違背候はん。左樣ならば此柳、新宮の濱前まで、後は海手を流さん」と、錦の袋を手に渡し、「御頭を是に包まれて、平太郞殿は一子を連れ、後より上り給へかしと我は先立ち法皇へ、此趣を奏聞せば、御身の願ひ立所に、

力、山賊ふぜいの儕等に、刀を當てるは刃の穢、うぬに似合うた鍬の刃先、老母が敵觀念せい」と、打つてかゝるをはつしと受け、「ヤア身を山賊とは片腹いたし。源義親公に譜代の家臣、鹿島三郎義連、此程までは都に在りしが、季仲の謀反に組し、軍用金を集めん爲、山賊夜盗は假の渡世、和田四郎が手にかゝると思ふな、源氏の武士が鋒に、苦猿めらが命の宿がへ、一々そつ首竝べん」と、廣言たか〳〵付け入るさそく。こなたも弓矢は手練の若者、受けつ流しつ切結ぶ、鎬を削る吹雪の空、霙交りの雨の足、踏みすべれば踏み留り、組んづ轉んづ挑みける。平太郎は多年の誠、神や力を添へぬらん、切伏せ〳〵乘つかゝり、「緣が爲にも常座の敵」と、指添渡せば拔き持つて、こゝをちよつりかしこをはつり、松の木丸太の手斧打、大の男をへつり切。「よいは〳〵」とてゝ親が、とゞめをぐつと指通し、「嬉しや敵は討つたり」と、死骸を池へ踏落し、悅び勇む親と子が、暫しは息をつぎゐたる。既に更闌け靜まりて、影か有らぬか緣が母、「ナウ平太郎殿、今母上の御最期に、苦痛有りしは先生の、業苦を見せしめ給ふなり。御身多年の孝行と、信心の功德により、月日の兩眼明らかに、敵を討ち給ひしも、大權現の神勅なり。此事疑ひ有るならば、肌の守を見よ〳〵」と、いふ聲ばかり聞ゆるにぞ、「實々ふしぎは我兩眼、いまだ八聲の鷄よりも、烏の鳴く音を聞きしより、ふつと目の內涼しくて、眼前敵を

るゝ思ひ子が、命大事と手を合せ、「聊爾せまいぞコレ申し」「そんならぬかすか、いやなら突こか、剝ろか」「サア〳〵申し、どうぞ忰を」「イヤならぬ。助けてほしくば早ういへ」「サア申します」「サアぬかせ」「エヽ〳〵目が明きたい、目が明けてほしいなア。南無權現樣。お柳やい」「とゝ樣なう」と泣く緣。「おとぼね立てると串刺ぢや」と、鋒指付け「サア〳〵〳〵。どうぢや〳〵」とせちがうたり。叶はぬ所と平太郎、「申し〳〵、忰はどうぞ助けてたべ。何を隱さうあの御頭は、白河の法皇の髑髏にて、渡らせ給ふ」と皆までいはさず、「モウよいは、つい一口にいはるゝ事を、よつ程儕もしぶとい奴、ソリヤ餓鬼めをこます」と投げやれば、親子が嬉しさすがり寄り、溜息ほつとつく空に、烏の羽音二聲三聲、雲間をさして飛んで行く。其隙に和田四郎、髑髏を小脇にしたり顏、「白狀をひろいだ褒美、是を食へ」と切り付くる。かい沈んで身をかはし、利腕摑めば、「コリヤどうぢや、うぬが眼はいつの間に」「ヲヽ開いた段か、蟻の這ふまで見えるはやい」「そんなら生けては」「合點ぢや」と、はずみを打つて引かたげ、池の深みへ頭轉倒、直に刀を脇ばさみ、尻引からげつゝ立つたり。「とゝ樣强う成つたの」と、いき〳〵悅ぶ緣丸。「コリヤ〳〵坊よ、大切な此髑髏、大事にせよ」と、しつかと渡す後の方、されども我武者の和田四郎、這ひよつて又一打、「まつかせ」受けたる鍬のほろ。「かう目が明けば百人

さらば。孫よ〳〵、さらば」とばかり此世の名殘、其儘息は絶えにけり。「ハア御臨終か、南無あみだ〳〵。緣よ可愛や、モウばゝ樣も死なしやつた」と、大聲上げて取亂せば、緣もおろおろ立騷ぎ、「ばゝ樣いなう、ばゝ樣」と、空しき體に打ちもたれ、辨へなみだ、親と子が心ぞ、思ひやられたり。樣子をとつくと和田四郎、後に立つてせゝら笑ひ、「ハヽヽ、ばゝめはくたばる、爺めは眼がつぶれたな」と、聲を聞くより平太郎、「さういふは晝うせた衒よな。へゝ有りがたい忝い、母人が是討てと有る手引なるか。緣よとゝに引添うて、サア〳〵こい」と身繕ふ。「コリヤやい、あの晒頭は大事の物ぢや、われに出世さすとぬかした故、おれが出世をせうと思ひ、樣子をとへどぬかさぬから、あのざまにしてこました。うぬも小悴が不便なら、有りやうにサアぬかしあがれ」「何とぬかす。うぬ晝の金に味を得て、ようも〳〵母人まで、胴欲な目に逢はしたなア。緣よ刀を取つてくる、此手を引け」と行く先に、立ちはだかつて、「動くまい、其大小は引つさらへ、爰におれが持つてゐる。是が欲しいか、ほしくばサアぬかせ。ぬかさゞ是ぢや」と引拔く大だら、突付け〳〵閃めく刃先、目前は見えぬ眞の闇。「怖い〳〵」と緣丸、刀に恐れ逃廻るを、引掴んで小脇に抱へ、「此小びつちよからさいなもか、但しはぬかすか、サア何と」と、人質取つたる手詰と手詰。「とゝ樣怖い」と悲しむ聲、我身にこたへ肝先へ、突通さ

は氷と冷え切つたり。「こりや何とせう、どうせう」と、かけ出してはかけ戻り、立つたり居たり氣は半亂、虚空を摑むごとくにて、かけ出れば緣丸、「とゝ樣はまつて下さんな」と、すがり歎けば縋りよせ、「エヽ〳〵目が明きたい開きたい。とり目は何の因果ぞ」と、母に取付き身をもだえ、聲をはかりに歎きしが、漸〳〵心取直し、「ハツアさうぢや〳〵、水に溺れし體には、藁を燒いて溫むれば、再び息を返すと聞く。それよ〳〵」とてゝ親が、指圖に蓑をかき集め、蠟燭の火を指寄せて、心を焦す、烟さへ、「若しも返らせ給はずば、是が未來の燒香か」と、口に念佛片手には、我身を添へて溫め鳥、蠢めく體に立ちかゝり、含みし水を、「アヽいや〳〵、現在の親人に、足ではどうも。さはいへ水を出さずんば、忽ち苦痛を助ける爲、免させ給へ母人」と、戴きながら、ぐつと踏み出す濁水、手足をあがく其風情、嬉しとばかり耳に口、「母人、申し母者人、平太郎でござります」「ばゝ樣なう」と撫で廻し、肌身を添へて呼び生ける、心が心に通じけん、苦しき息をほつとつき、「平太郎か遲かつた。緣はどこに」と探る手に、「申し〳〵、お心が付きましたか。コリヤマア何奴が此所爲、名はお聞きなされぬか」「ヲヽ何者とは、晝來た奴が」「何とおつしやる、晝の奴とは。ムヽ扨は衒で有つたか。モウ〳〵よい〳〵、お氣を慥にナ申し、緣も傍にをりまする」「ヲヽ二人のまめなが嬉しい〳〵。孫が顏ももう見えぬ。平太郎

縄見付け出し、がんぢがらみにぐる〳〵巻、見上げる燈籠の釣縄ほどき、結び付けたる猿縛り。「サア〳〵ぬかせ〳〵、ぬかさぬか」と、いうては引つぱり釣縄に、しめ上げられてかよわき體、次第にしまる縛り縄、血筋赤らむ蔦 栬、命の蔓ぞ危けれ。「ハヽヽヽ、もがくは〳〵。情の剛い根 性から、痛い目を見をるはい。下は滑 の溜り池、氷の地獄ぢやサアぬかせ〳〵」と責せつちやう。老母は苦しき聲も出ず、降りくる雪に爭ふ白髪、かもじほどけてばら〳〵ばら、齢にしたふ血の涙、見やる向ふに挑燈は、「なむ三寶、人影ぞ」と、縄を放せば眞倒、水の溜りへおちこちの、むざんなりける次第なり。逌の四郎も狼狽 眼、表へ迯げんも一筋道、やり過して行かんずと、庵の庭に身を忍ぶ。斯とは知らぬ平太郎、案内はいつも我門に、常燈 明の光さへ、挑燈の火にみどり丸、「コレとゝ様、佛様へとぼした行燈が落ちて有る」「ヤアどれ〳〵」と探寄り、「ホンニこりや落ちて有る。ふしぎ〳〵」と門の口、「母人、申し、漸 今歸りました」「ばゝさん、坊も戻つた」と、いへど答もあら笑止や、門の溜りに水の音。「緣よ、明りで見てくれ」と、詞の内に透し見て、「ヤア、あれ〳〵ばゝ様が池へはめて有るはいの」「ヤア〳〵〳〵」と恟り敗亡、探り尋ぬる手先へ障る縄引寄せ、「誠に母のうめき聲、コリヤ何者が所爲ぞ」と、縄を力に親と子が、漸〳〵にかづき上げ、「コレ〳〵申し母者人」「ばゝ様なう」と撫でさすれど、體

「ハチ畫きた者ぢやが、見しらぬか」「ムウナニ、畫來たといやるからは、扨は畫のも」「ヲヽ畑主といふたは嘘ぢや」「アノ、夫は」と驚けば、「へヽヽヽ、山家のとろくに似合はぬ、黄金十枚はよい仕物、まだ臍くりが有るであろ、有りたけそこへ浚へ出せ。命は助けてくれうぞ」と、鯉口鳴らしおどしける。「エヽ口惜しい。夫と知つたら其時に、やみ〳〵とは遣るまいもの。平太郎は戻らぬか」と、表を詠めつ奥を見つ、心をいらち身をあせる。「エヽ直では出しをるまい、捜してくれん」とかけ行くを、そふはさせぬと取付く手先ふり放し、蹴飛し〳〵のつかのか、納戸を引出す古葛籠、あたふた明けて手にあたる、親子が著換に包んだ大小、鮫は鼠がまだ外に、御明上げた釣おまへ、備へし髑髏を見て恟り、どこやらぞゝ髪立退きしが、打點いて、「コリヤばゝよ、葛籠に刀が有るからは、浪人に極つた。あの晒頭は誰が首で、何の爲ぢや、夫ぬかせ」「イヤあれは大事の物〳〵」「ムン其大事がる譯聞かう」「ヲヽあれはの、息子が出世する大事の物じや」「ム、何じや出世する、其出世が猶耳寄。イヤ一應ではぬかすまい、どす開かざなるまい」と、段平引抜き、「サア是ぢやが」と突付ける。「アヽこれあぶないく〳〵」と、追廻されて踏みはづし、庭へどつさり。「落ちても迯げても問ひ貫く」と、追詰められてかぶり振り、「ヲヽずだずだに刻まれても、言はぬ〳〵」「ハテしぶといひばり骨、いはせいで置かうか」と、命もあら

引取つて介抱して、ハア、いや〳〵、お氣遣ひなされますな、ずんどよう見えまする」と、いひつゝ探るを見せまじと、思ふ心ぞ闇のやみ。「コレ〳〵とゝ樣こちらぢや」と、手を引く孫を見る母も、涙隱して跡に付く。「ア、申し〳〵、母樣何にもお構ひなさるゝな。したがおまへ樣も此坊めも、今夜から噂便りが」「ヲ、そなたは猶の事、おれもがつくり力がない。孝行にしてたもつたお柳、最一度逢ひたい禮も云ひたい。よしなき老の長生して、憂き事を見る悲しや」と、親子手に手を取りかはし、流涕こがれ歎きしは、理とこそ見えにけれ。外は二月の、雪空につれて寒さもいや增る、行燈の火を挑燈に、移し持つたる綠丸、蓑よ笠よと打著せて、「然らば參つてさんじましよ」「ヲ、怪我せぬ樣に、綠よ手を引け」「あい〳〵」あいろは見えぬ烏目の父、杖は我子を力草、柳が本へとたどり行く。母は佛間の看經に、家の忌日も嫁が日も、倶に回向の發願以、鉦も幽に六字詰、「南無あみだ佛〳〵」風も身にしむ黃昏過、心の鬼の和田四郎、晝の衒の兼てより、夜は山賊の大膽不敵、何でも掘り出ししこためんと、大だらさし足窺ひ足、ぎしつく疊の物音に、「誰ぢや〳〵」と聲すれば、「イヤ苦しうない、盜人ぢや」ヤアと悔りしながらも、立出る遉の母、「イヤモウ折角はひらしやつても、見込のない此內、了簡していんで下され」「イヤコリヤばゝ、おれぢや、顏見い」と、頭巾を脫げども、「見知らぬ〳〵」

法皇の前生の御頭なり。夫を手柄に御身の上、再び出世をなし給へ。必々縁が事、お頼み申し參らす」と、夫の顔を見ては泣き、若を引寄せ抱きしめ、離れがたなき輪廻の紲、「アレ〳〵風の音に連れ、柳の糸を切拂ふ、斧鉞がちやう〳〵、谺は爰に玉きはる、時こそ來れいざさらば、さらば〳〵の聲の下、姿は見えずなりにけり。不便や憂きをみどり丸、「かゝ樣は又いなしやつたか、コレかゝ樣」と呼びたけり。かけ出でては、「かゝ樣なう〳〵」と足摺し、辨へしらぬ稚子を、膝に抱きて平太郎、「ナウ母人、我よりは此若が、愛著に引かされて、嘸や名殘の惜しからん。たとへ姿は見えずとも、柳は妻が亡き俤、今一度此縁に見せもし、我も見もしたし。藏人とやらんにも對面せん。母人には此髑髏、佛間へ直し下さるべし」と手に渡し、「サア來よ緑」と手を取れば、「かゝ樣呼びにいくのかや。おりやモウ乳が呑みたいはいなう」「ヲヽ道理ぢや〳〵、可愛や」と、涙隱して二足三足、深山隱れの山寺に、入相告ぐる鐘の音、數へながらもそろ〳〵と、探る足元見付ける母、「コレ平太郎、そなたは何とぞ仕やつたか」「ハア、いや何とも」「夫でもいかううと〳〵仕やる」「コレばゝ樣、とゝ樣は目が見えぬはいなう」「ヤア〳〵そりやマア何時から」「ハイ、さればでござります、一月餘り、ふと鳥目が發りましたが、斯くと申さば嘸お案じ、お心に障らんかと、女房に云含め、是まではお隱し申したが、昨夜までは女房が

えて失せにけり。そこよ爰よと母と子が、尋ぬる音に緑丸、「かゝ様何處へいかしやつた」と、父が後に駈廻り、「かゝ様いなう、かゝ様なう。ばゝ様呼んで下され」と、庭におり立ち門に出で、尋ね迷ふを見るつらさ。父ち思はず聲を上げ、「緑が母よ、お柳やい」「かゝ様いなう」「嫁女」と、聲をはかりに慕はれて、又も引かるゝ執著心、形はしをるゝ青柳の、母の姿とみどり丸、「ヤアかゝ様」と嬉しくも、立寄りすがれば「嫁女か」「女房なるか」と立寄つて、「非情の草木と云ひながら、情有ればこそ是までに、睦じくも馴れなじみ、一人の若を設けし身が、何とて振り捨て歸りしぞ。せめては母人を見送るまで、供に介抱してくれよ」と、託ち歎けば漸に、しをるゝ顔をふり上げて、「傳へ聞く、安倍の童子が母上も、丁ど我身と同じ事、一人の子を殘し置き、信田の古巣に歸りしとや。夫は野干の年ふる身、我は元來草木の、歸る古巣の柳は今、伐崩されて枯柳、歸るといふは消ゆる身に、何とて形を殘すべき。白河の法皇の御惱頻とて、都の使來りつゝ、我身を切捨て申すなり。斯くて姿は見えながら、もはや朽木も時を得て、一宇の棟と成る事も、一つは妙なる法の緣、逢ふ事稀に優曇華の、花物いはぬ草も木も、王土に住めば是非もなし。今より佛果の身となるも、夫の先生柳の木の、佛果に連れし緣あれば、情の恩を報ぜん爲、一ツの筐を參らする」と、平太郎が手に渡し、「夫こそはかけまくも、白河の

我は柳の緑子が、顔を詠めつとつ置いつ、「ハアさうぢや待てしばし、互に顔を見て居ては、中中語るも面映ゆし。必ず夢とおぼさずと、白地に聞いてたべ。ナウ我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち、かやうに夫婦と成る事も、一方ならぬ因縁ぞや。今餘所事に云ひなした、咄は皆互の身の上、先の生にて誓ひたる、契りを結ばん其爲に、假に女の姿と變じ、柳が本に待受けて、夫婦と成りしも五とせの、春や昔の春の比、季仲が鷹狩に、鷹の足緒のかゝりし時、數多の武士に切崩され、既に枯れなん其時に、お前が一矢の手柄故、鷹を助けて葉柳の、枝に障りも、アレ〳〵〳〵、又もや爰に散りくる葉は、我を迎ひに來るか」と、思へばやる方詮方も、なく〳〵震ふ膝の節、押ししづめ〳〵、「其時の情の恩、送る月日も重りて、柳の花の緑丸、おとなしうなつたれば、乳がなくとも育つべし。成人の後々は、父の弓矢を受傳へ、潔い名を上げてたも。コレ、母は今を限りにて、元の柳に歸るぞや。必草木成佛と、回向を賴む夫よ子よ。離れがたなや悲しや」と、いふ聲さへも忍び泣、忍ぶに餘る身のつらさ。「名殘惜しやいとほしや」と、立つて見居て見聲を上げ、わつとばかりに伏轉ぶ。音に目覺す平太郎、「扨は夢とも現とも、聞きしは誠で有りけるか。何とて難面やるべきぞ」と、抱き留むれば一間より、老母も俱に轉出で「樣子は聞いたコレお柳、嫁女なう」と呼ぶ聲も、散りくる柳の葉隱れに、形は消

生ひ立ちし、梛の一木の其傍に、大木と成つた柳の木と、女夫に成つてゐるといな」「ムウ夫が何とぞしたかいの」「サアまあ譬へていふ時は、梛の木はお前柳は私、かう夫婦に成つて居れば、取りも直さず連理の中、お前に譬へた梛の木は早佛果を得て、今人界に生を受け、又女の柳は今に非情の果を離れず、假に人間に交りて、夫婦妹背のかたらひに、一人の子まで設けしが、國王の御爲に、母の柳は切崩され、消ゆる命は惜まねども、馴染重ねし夫や子に、別るゝ事が悲しうて、此胸を裂く樣な、夫が悲しい〳〵」と、語る聲さへかき曇る。平太郎何の氣も付かず、「夫は笑止な咄やが、そなたは何の構はぬ事、其樣に泣かずともよいはいの」「サア夫でもよう似たお前と私、あの子の寐顏を見るに付け、身につまされて悲しさに」「ハテわつけもない。モウ〳〵そんな咄は置いたがよい、どうやらおれも胸つぽらしい。サアわつさりと、も一つ呑まう、北の方つぎ給へ。酒は愁の玉箒、今の樣な哀な咄は、熊野の浦へさらり〳〵」さいつ押へつ汲みかはす、妻が思ひは露しらぬ、夫は肱を手枕の、うたゝに夢や結ぶらん。妻は傍を立退いて、奥を覗いつ立戻り、おづ〳〵傍へ立ちながら、「コレ〳〵申し我夫」と、いへど寐付の高鼾、風が持てくる斧の音、伐木とう〳〵ちやう〳〵と、木を伐る音やこたへけん、お柳は身節ぴつくぴく、苦しき胸を押へる涙、じつとこらへて立寄れど、得もいはしろの結び松、

「ナウ申し平太郎殿、お前が日比の孝行が、神佛へ通ぜし故、思はぬ金を貰ふといひ、災難を遁るゝも、皆信心と孝行の德。あの緣丸も成人して、お前に孝行仕やる樣、あやからせて下さんせ」と、盃を指置けば、「是は〳〵改つた事いやる。したがおればかりぢやない、そなたも隨分長生して、孝行にして貰やゝ」と、いへばほろりと涙ぐむ、顏をつく〴〵打守り、「是は扨、そなたは何が悲しうて、其目元の其涙は」「アヽいや申し、是見やしやんせ、緣の寐顏の愛らしさ、つい思はずに」「ホンニナウ、たわいもなう寐てるるは。したが緣ばかりぢやない、おれも山坂をあるいた上、色々と氣を揉んだりや、どうやら迎が來たさうな。ドレ一ツ吞もかい」と、丁ど受けてつつと干し、「コリヤ坊よ、母上のお賴ぢや、とゝが孝行にあやかれ」と、寐顏へちよつと戴かせ、「そなたも一ツ吞みやいなう」「あい」と取上げ押戴き、「ホンニ此樣な、めでたいはかない事が又有らうか」「ヤア〳〵、はかないとは、何がはかない事ぢやいの」「さればでござんす、お前の留守に變つた咄を聞きました」「フンそりやどんな咄ぢや、それ聞かう」「サアまあ、あのあの、ヱヽつんと、ハテ云ひ兼ねる咄ぢやが」「何ぞ指合な事ぢやないか、母者人は奧になり、何のおれに隱す事。サア早ういやいの」と、いへども夫と云ひ兼ぬる、胸の思ひは目にもるゝ、涙見せじと身を背け、漸々胸を撫でおろし、「アノナ、咄といふは外でもない。アノ谷陰に

ば樣のおつしやる樣に、コレお前には留守の內、都のお人に貰うて置いた心宛」「ハテやかましい。盜みかやきの分際で何の首代。口先でぬつぺりこつぺり。手短にお柳を渡せ」と立寄る足元老母は頓て、備へし包を投出せば、欲にぎろ付く黃金の包、取上げて、「コリヤ金ぢや、しかも黃金十枚とは」始めて驚く平太郎、お柳が聞く勅使の噂、片頰で金を見改め、「とうから出せばよいもの、首代とは不足なれど、是で了簡してこます」と、懷へしつかと納め、「エヽけたいな、えらう腹も減つたれど、次手に了簡してやる」と、邊を見廻しのつさのさ、心殘して立歸る。跡を詠めて三人が、ほつと溜息つく中に、平太郎身を悔み、「非義非道忽に、天道發し給はぬ道理、母人女房面目ない」と、後悔淚の男泣。「ヲヽ悔しいは道理々々。さりながら、武士の落目に切取強盜、耻に似て耻ならず、必無念におもやんな。またも神のひかへ綱、そなたの留守に都のお使者、佛に手向けて歸られしが、幸ひそなたの命の代り」「成程々々、只今お柳が物語、拙者も登山の道々、見馴れぬ京家の侍達、大勢の人歩を寄せ、柳の本に足場の拵へ。ヤア何や彼やで忘れてゐた、佛前へのお備は」「ヲヽどれ〳〵お飾りを」と、華足に飾る粟の餅、是も貧女が志、佛間にこそは入りにけり。お柳は添乳を漸と、軒端は雪の風寒く、餘寒を凌ぐゐろりの火、お神酒の餘り燗鍋に、溫め入れてこて〳〵と、盃のせる丸盆も、心有りげに携へ出で、

たる風情なり。「ハヽヽヽヽ、天道は正直、此畑主が見るとも知らず、小びつちよと二人連。昨夜ばかりぢや有るまい、年々の取溜、代官へ引ずつて、法に行ふ。サアうせい」と、引立つる手に取付く母、お柳も今さら見すぼらしき、夫婦が心ぞ切なけれ。母は中を押分けて、「マア〳〵待つて下さりませ。常はずんど正道な者、かやうな事仕出したも、露命を繫ぐ糧ではない。あのごとく權現樣を信心して、常燈明の油代にがなせう爲に、ふつとした出來心、暖になつたれば、順禮や道者衆の宿をする故、賄ひも出來まする、何かに不自由な山家住居、何事も年寄つたばゝに免じ、御了簡下されませ」と、手を合せ詫びければ、「サイヤイ、そんな事で有らうと思うた。そんなら了簡してやらうが、お柳を女房におこす氣か」「サアそこでござります、あの樣にまだ乳を放さぬ孫も有り、殊にちつと義理も有れば、どうも此儀は」「ム、夫もならぬか」「サアそこが御了簡。アノ世間には、首代の、イヤ過料のといふて、金を出して命を償ふ品も有れど、マアあなたには、そんなさもしい金を取つて、了簡のなんのといふ樣な、お心ではござりますまいけれど、年寄のくど〳〵と、いうて見る樣な物の樣に」と詞のはしぐ〳〵、耳峙てて、「何といふ、首代に金を出すか」「サア過料でどうぞ」と手を搨りて、詫びる傍から平太郎、「申し〳〵、其過料と申して一錢の貯が」「サアよいはいの、此母次第に。ノお柳」「アイ夫々、

は物好な人も有るものぢや。イヤもう其日暮しの平太郞、錢金入れては得仕ませぬ、本の足手ばかりの孝行かと存じます」「ハヽヽヽ讀めた、夫で今の樣に、足洗はして居たぢやまで。又おれが孝行いうて聞かそか。マア春は乘物で花見、綾や緞子に毛蒲團しかせ、二の膳かの膳かまほこ三つ、夫も骨の立たぬ樣、藥研でおろして進ぜる。何ときつい孝行か」「ハヽヽヽ、そりやモウ親に窮屈がらせ、困らすといふもの。とかく年寄には何事も、氣儘にさすが孝行。今足を洗をとおつしやる、ハテ勿體ないとは知りながら、そこを戻かはず、云狀に付くのが、孝行で有るまいか」「コリヤ尤。そんなら婆さまが言はれる事、逆樣な事でも、用ゐるが孝行ぢやまで」「ハテ知れた事」「ムヽよいく。コレ婆さま、あのお柳は五年跡から惚れて居る、貰うて下はれ。コレばさま」と、思ひがけなき難題に、三人顏を見合せて、惘れ果てたるばかりなり。「サアどうぢやい。コリヤお柳、物を言はぬかい。返事をせぬかいやい。アヽ笑止な、平太郞が首が飛ぶも知れまいぞ」と惡口存外出はうだい。聞き兼て平太郞、「ヤアいはせて置けば樣々の譫言。主有る女房に無體を云ひかけ、某が首が飛ぶとは何が何と」「ムヽヽハヽヽヽヽ、コリヤ證據を出して首にするぞよ」「ヲヽ夫見よう」「見せいでは」と、門に捨てたる畚提げ、「何と覺が有らうがな」と、放り付けたる畚の中、山葵よ獨活よ土大根、嫁菜が手前母の前、差俯いて平太郞、誤り入つ

ど寐付のすや〳〵鼾。母は聞付け立出でて、「オヽお柳よいはいの、よう溫めてやらしやれ」と、いひつゝ庭に、「ヤレ〳〵〳〵、けふは雪やら霙やら、嘸や足が草臥れう。幸ひ盥も爰に有る、ドレ足洗うておませう」と、湯を汲入るれば、「アヽ申し〳〵、わつけもない。私が洗ひます、お前はゐろりへ」「アヽいや〳〵、此母が達者なりや、折には代つて參るけれど、山坂があぶないとて、厭うてたもる孝行。殊に權現樣の誓には、一度參詣する者には、證誠殿の階を下り給ひ、三度禮をなさるげな。年月歩を運びやつたれば、權現樣のお足を洗ふも同じ事。ナウさうぢやないかいの」と、母の詞も理の常然、「是は〳〵、左樣おつしやれば、御意を背くも却て不孝、然らば御免下され」と、差出す足を洗ふ内、表に立つてつく〴〵と、樣子窺ふ和田四郎、鍬にかけたる畚投げ捨て、「平太郎内に居やるか」とずつと這入れど見知らぬ顏。「イヤ氣遣ひな者ぢやない。是の息子は名にうてた孝行者、佛平太郎といふ噂を聞き、おれも親が有る故、孝行の仕樣も見やうし、又女房のお柳は、こゝら一番のてんとれ、あんな美しいげん妻を、抱いて寐るのも孝行の德ぢや。おれも孝行を見習はうと、來て見れば有らう事か、母親に足洗はして、夫でも孝行といふ物かい。見ると聞くとは鵤の嘴、あんまりで臍がくねる。ハヽヽヽ」と高笑ひ、笑ふも構はず平太郎、母の手を取りゐろりの端、「たばこも是に」と押直し、「扨々世に

て、三十三間の堂を建て、一字の下に彼髑髏、納置くものならば、忽平癒有るべしとの夢の告。さるによつて次の宿なる柳を切り、堂の棟に寄附せらるべき院宣なり」と語るにぞ、「扨は左樣で候か」と、點く母に驚くお柳、「スリヤあの柳を切崩して」「サレバ〳〵、普天の下王土にあらぬ所もなし。今日中に切取らん其爲に、多くの人歩をかけ置きたり。平太郞殿には又重ねて」と、立上りしが以前の黃金、再び取るもいかゞぞと、見やる向ふの佛壇に、竝ぶ位牌に手向の露、いはぬ色なる捧物、「さらば〳〵」と禮儀をのべ、供人引具し急ぎ行く、「扨々やさしき武士や」と、老母が見送る門の口、とつかは戾る綠丸、「コレばゞ樣、とゞ樣もモウ爰ぢや。コレ花折つて來ました」と、渡せば取つて、「ドレ〳〵、祖父樣へ進ぜうぞ」と、悅ぶ母に勇まぬお柳、「オオそなたは何とぞしたかいの。俄に聲の色も惡う、目には淚が」「アヽいえ〳〵、どつこも惡うはござりませぬ」と、目を押拭び、「綠、戾りやつたか、つめたかろ〳〵。ドレ足洗うてやろぞや」と、圍爐裏の鑵子水いらず、母は佛間へ、親と子が、盥引寄せ取々に、榾折りくべしゐろりの傍、添乳ながらの肱枕、したしむ中ぞわりなけれ。扨も橫曾根平太郞當吉、弓矢の業も隱れ笠、蓑には孫晨が藁を結び、老いたる母に孝の道、憂きを深山の苔筵、雪を凌いで立かへる。お柳はそれと見るよりも、「アレとゝ樣が戾らんした。コレ綠丸、モウ乳を放しやいの」と、いへ

が、討つて立退き月も日も、けふが卽十七年の祥月命日。其時は平太郎も幼少にありし故、母が故鄕常陸の國へ身退き、五年以前願望の仔細に依て、此所へ引越して、是なるお柳を嫁に取り、緣丸と申して一人の孫を設けしが、ナウ申し、其時澄こそ忰が爲には親の敵、討つに心はおくれねども、若し返り討に討たれなば、年寄つた此母、路頭に立つが悲しいと、仇に暮すも孝行故。此年月の憂き艱難、御推量下され」と、涙ながらの物語、藏人横手を丁ど打ち、「ハツア扨々始より由有る人とは存ぜしが、いかにも聞及びし横會根次官光當殿の妻子にて候な。某とても此外に、法皇の院宣を蒙り、次の宿まで參つたり。所用終らば都に歸り、忠盛へも委しく語り、お爲惡しうは計らふまじ。必時節を待ち給へ」と、聞くより老母も打笑みて、「世に有りがたいお詞や。シテ院宣のお使に、次の宿までお出とは、いか樣な儀でござります」「サレバ〳〵、右申した白川の法皇、御不例と申すは頭痛の病、一天の主でさへ、かゝる御惱は遁れ給はず、諸山の祈和丹の典藥、いかな驗も見えざりしが、ある夜熊野大權現、三夜に續くふしぎの靈夢、法皇の前生を告げ給はく、先生は蓮花王坊と云ひし修驗者にて、三熊野に步を運び、つひに當山に入つて身まかりたる、修驗道の奇特によつて、今日白川の法皇と生れまします處、前生の其髑髏、柳の木の梢に留る、夫故頭痛の御惱頻なれば、其髑髏を尋ね求め、王城の東におい

お柳とやらん、女ながらもかひ〴〵しく、御危難を救はれし段、甚叡感、早速御褒美の使者參るべきに、法皇御不例によつて斯まで延引。それ〳〵」と詞の內、はつと家來が臺の物、二人が前に並べさせ、「輕少には候へども、忠盛よりの志、頂戴有つて然るべし」と、慇懃にこそ述べにける。お柳は會釋も年だけに、老母は膝を摺寄せて、見れば黃金の一包、「是は〳〵冥加もない、かゝる山家の埴生へ、お使者のお入り下さるとは、所の聞え、ナウ嫁女、是はそなたへ下され物、お受申す覺が有るか」「サレバイナ、とんと忘れてをりましたが、思へば五年跡の事、平太郎殿と夫婦に成つた其時しも、さのみ手柄といふ樣な、覺とてはなけれども、上々樣の危き所を、倶々にお見つぎ申したばかりに、御褒美とは冥加ない。殊に夫も留守といひ、イヤもうやつぱり此お金は」「チ、それ〳〵、受けましたも同然」と、母諸共に押戾す。藏人大きに感じ入り、「扨てかゝる山中は、無骨とばかり存じたが、都に恥ぢぬ爪はづれ、老母といひ御子息の心底まで、嘸有らんと奧床し。我等進藏人家貞とて、忠盛が家臣、萬事心おかるゝな」と、世に賴もしき詞の內、老母も扨はと手を打つて、「成程都で聞及んだ、忠盛卿の御家臣とや。絕えて久しき都の噂、思ひ出すも淚の種、わらはが夫は橫曾根次官光當とて、北面を勤めし武士にて候ひしが、同じ北面の武士武者所時澄といふ者と、弓矢の論の遺恨にて、夫の次官を時澄

夜は宵から出かけが惡い、是なと德にしてこませ」と、畚をかけたる鍬の柄を、臑に引かけ、「テモ扨も、鍬をかたげて手を放した、譬を見た」と打笑ひ、かたげてこそは三重歸りける。補陀洛の、岸を南にみ熊野の、九里八町の川端に、里離なる一つ家は、橫倉根平太郎當吉が侘住居、老母に仕へる暇には、日每に三所權現へ、步を運ぶ留主の宿、妻のお柳は獨子を、生し育てて五とせの、春の半も冴え返り、深山の雪に降る雨の、しよぼ〳〵髮に櫛入れて、撫でつさすりつ愛盛、「コレ綠丸、じつとして結はしやいの。そしてとゝ樣の迎ひに、坂口までいておぢや」と、いひ聞かすれば、「アイ〳〵」、あのばゝ樣のいはしやるには、けふは佛樣の日ぢや、山へいたら花を折つてこいというてで有つた」「ヲ、夫も怪我せぬ樣にいておぢや」と手を放すれば飛んでおり、「アレ又雪が降つて來た」蓑よ鎌よと取集め、笠もちよつぼり愛らしく、「雪やこんこん霰やこんこ、溜れや小雪」走りごくらに出でて行く。「コレ〳〵又とばついてこきやんなや」と、立つて見送くる門口へ、先走が聲として、「都のお使者御出なり」と呼はらせ、進藏人家貞、禮儀正しく入り來れば、老母も奥より立出でて、嫁のお柳も諸共に、手をつき敬ひ饗せば、威儀を繕ひ上座につき、「此度當所へ立越えしは、忝くも白川の法皇の勅命、謹しんで能く聞かれよ。過ぎつる年、法皇當山權現へ參籠の折から、反逆徒黨の族、還御の道を遮る所に、

御赦されませ〳〵、赦させ給へ」と伏拜み〳〵、日にもる涙を打拂ひ、「貧苦にせまり粮につき、纔の畔の作り物、農業の脂を盜む、天の冥罰立所に、稚子が詞を以て、天道より我を禁しめ給ふかと、今身に犇と思ひ知る。ハツアさうぢや、天に祿なき人は生ぜず、地に根なき草ははえぬといふは、天地自然の道理なり。周の代には虞芮の民、畔を讓ると聞くものを。あさましの身の成る果。昔は北面に仕へし武士、横曾根次官光當が躮、弓矢は誰におとらねども、時世につれて心まで、深山烏か苦猿の、餌に苦しむ世渡りは、是が次官が子や孫の、成行なるかと抱き寄せ、聲も忍びのむせび泣、子は辨へも「ナウとゝ樣、何悲しうて泣かしやるぞ。おれもどうやら悲しい」と、膝にもたれて歎きしは、物の哀の至極なり。漸〳〵心取直し、「ハア、誤つたり我ながら、盜み取つたる春の内、此儘に捨置かば、枯凋れんも無益なり。翌は幸ひ、佛の忌日、持つて歸つて備へんもの。願望だに成就致さば、十增倍にてお戾し申す。赦させ給へ」と押戴き、鍬をさぐりて指通し、水母に海老の道しるべ、「緣よ手を引け、歸らん」と、元來し道へさしかゝる、後へ戾る和田四郎、夫と窺ひ指足拔足、「畑盜人見付けた」と呼はる一聲恟りに、かたげし鍬を投捨てて、我子大事とかき抱き、こけつ轉びつ迯げ歸る。「ハヽヽヽよい氣味な。おどしてやつたりや恟りして、鍬を捨てて迯げをつた。ヱヽ、殘り多い、ひつ捕へて眞裸、剝ぎむくつてこまそもの。今

緑丸に手を引かれ、鳥目の闇路とぼ〳〵と、かたげし鍬に畚さげて、雪の深山の山畑、岨を傳ひてたどりくる。「コレ〳〵とゝ樣、そちらは谷で危いぞや、こちらがよい」と右左手をひかゆれば、「ヲ、よういうてくれたなア。誠や負うた子に敎へられ、淺瀨を渡るといふ譬。晝は毎日權現樣へ參る道、夜はかいもく盲目同然。モウ月は出やしやつたか」「イエ〳〵やつぱり暗いはいの」「ヲ、幸ひ」と、畚をおろして鍬取りのべ、畑の畦を爰やそこ、片手に探り手にさはる、蕪の畑土大根、取つては入れつ鍬入れて、盜みとりめの闇なれば、「緑よ、そこに居るかよ」と、いうては探る雪分ける、草の匂ひに夫ぞとて、畚に入れたる獨活山葵、夜は人目もあらく吹く、松の葉越に出る月は、廿日亥中の雲晴れて、山の端白く澄みのほる。「坊よ、誰も來やせぬか」と尋ねればかぶりふり、「イエ〳〵誰も來やしませぬ」「ヲ、よい〳〵、誰ぞ見るなら知らせよ」と、問うては探る畦々に、月はさせども知らぬは父、「緑よ〳〵、どこにゐる。人はこぬか、見やせぬか。見るならちやつと知らせいよ」「アイ、あれ〳〵見てぢやはいの」「ヤア〳〵誰が」「イヤ誰でもない、お月樣が見てぢやぞや」「ヤア〳〵何といふ、お月樣が、ドレ〳〵」と鍬を杖、ふりあふぬけど眞の闇。「ソレ上から見てぢや」と指をさす、我子が詞は正直の、頭の上に大磐石、大地にどうと平太郎、我身を打伏せ〳〵て、「ハア〳〵〳〵勿體なや恐ろしや。天道樣

角力は知らねど押す」と、ひやうまづいたる懐手、「ヲヽおれも前髪は有るけれど、白山新三を見事投げた。此寒いに裸に成つての一番勝負、賭どくの約束せう」「ヲヽわれが勝つたら其褌を褒美にやるは」「ヲヽ合點ぢや」としことん〳〵。「西は岩淵々々、東は入舟々々、名乗は濟んだ」と居合腰。やつとかゝれば岩淵が、ひよろ付く足元踏み留り、「まだぢや〳〵」「ヲヽ合點ぢや」と砂をもみ手に打拂ひ、ヤア〳〵と手合して、どつこい〳〵と聲かけ合ひ、はねつ飛しつ四ツ手に入り、むさう返し腰もぢり、相手はぬからぬそれ者の手取、四郎は無法の力足、透せば付入り得手に入り、押してくる身を肩すかし、コリヤ〳〵〳〵あしに廻つてはね付くれば、岩淵胴骨打付けられ、起きも上らぬ高うめき。「ハヽヽヽ、追剝でも山賊でも、角力取の一徳には、裸に成るとこつちの得物。この花は入舟に下さる」と、著物も帶も引抱へ、跡をも見ずして迯げ歸る。四郎ははふ〳〵起上り、腰をさすつて、「テモ扨も、むごたらしう投げをつた。コリヤ〳〵ばりめ待ちあがれ。今一番取り直せ」と、呼べど叫べど山道の、がつくりそつくりだくぼくの、脚引きずつて追うて行く、跡の山路ぞ物淋し。谷の水、松の風のみ音信れて、深山は猶も冴え返り、餘寒に雪もとけやらぬ、ましてや夜は猿の聲、おぼつかなくも呼子鳥、鳴く音しるべにくる人は、横倉根平太郎、お柳が情縁ふかく、母諸共に隱れ家も、早五とせと立つ月日、二人が中に設けたる、

らそぶ付いて、素手ばかり引いてゐる。まん直しに一ぷく〳〵と、火燧こつちり三服つぎ、きせるくはへて寐腹這ひ、人まつ蔭に小提燈、「くるぞ〳〵」と咽ずんばい、上足打つて待つ所へ、來かゝる男が頰かぶり、行き過ぐを、「コリヤ〳〵待て〳〵、其火を借らう」と聲かくれば、立戻り透し見て、「何ぢや火をかせ。コレたばこの火ならならぬ〳〵。くはへぎせるは堅い御法度、火を借す事はマアならぬ」「ハヽヽ、そりや町中の事ぢやはい。此山中で何用心。小言いはずとかさいでな。云ひかけた無心、此儘でもおかれぬ。火が成らざ脱ぎおれやい」「ム、脱げとは何を」「ハテ知れた事、とつとと脱げやい」「ハア扨は聞及んだ岩淵とやらいふ剝ぢやよな」「ヲヲよう知つて居るなア」「ヲ、知らいぢや、此邊で噂の有る追剝、仕舞うてやらうと思うたが、今夜は大事の公用で、柳を切る人歩にいく、こんど逢うたら覺悟をせい」と、いかんとするを、「コリヤ待て〳〵。われはよつ程骨が有るはい。われが樣な丈夫な者は、幾人でも手下に付けたいのぢや」と、云ひつゝ寄つて帶をぐる〳〵眞裸。「テモよい褌してゐるなア、夫もおこせ」と手を出せば、「アヽこれ〳〵、おれや入舟風之助というて、小角力も捻る者ぢや、此褌はおれがもとで、やる事はマア成るまい」「ムヽ何ぢや、見事捻るか、面白い。力の有る者は望む所、力だめしぢや、何と一番出かけぬかい」「ヲヽ角力なら好ぢや。何時でも相手に成るが、見事取るか」「ヲヽサ、

なされます其柳は、此先の谷間にござります。ナウ茂六」「いかにも〱、何かいとも知れぬ大きな柳、三十三間の棟には慥々。したがあの柳は何年ほだいか古い木にて、主が有るの化けるのと申す噂がござります」「ヲ、夫々、あの木をお伐りなさるゝには、よつ程しゆらいがかゝりませう。今明日には何としてく〱」「ヲ、成程、左程の大木輙くは切取りがたし。併し今いふ通り天子の御用、杣人歩日雇なんど、一山に觸をなし、手柄次第に人を寄せよ。いか程なりとも價に構ふな。夫とも農業挊の妨にならぬ様。勅願によつて一字の棟に成る大木、人歩に怪我過のなき様、随分いたはり心を付けよ。いざ我も見分せん、案内頼む」と和らかに役儀に誇らぬ藏人が、仁義を兼ねし詞なり。庄屋組中口々に、「ア、有りがたい御仰、かやうな事も所の賑ひ、随分と精出して、大勢人を掛けませう。まづ御案内申さん」と、庄屋を先に藏人は、柳が元へ急ぎ行く。跡には組中畑主、「サア〱何でも急な御用筋、かけ廻つて呼集めう。達者にさへ有らうなら、錢金の攫取」「ホンニ角力取の入舟へも知らしてやりや。杣へは茂六、人歩へは此才兵衛が觸れませう。ヤレせはしや」とゆふ暮過、立別れてぞ急ぎ行く。爰に出雲の流人源義親が郎等、鹿島二郎義連は、謀叛に合體してけるが、荷擔の人數をかたらうて、軍用金をしこだめる、此山奥に身を隱し、夜は山賊の山道を、のつか〱と歩み出で、「エ、今夜は何ぢやや

わぶる。「コリヤ〳〵娘、此親が切腹で、仇も恨も姫どし」「實も〳〵」と藏人が、早追ひ立てていづもの國、船場へ送る警固の役、馬上は勇む出陣に、駒を早める韆障泥、ほんぱかしつたん丁〳〵、蹴上ぐる鐙くり返す、冥土の門出と惟弘が見送り、見返る名將勇士、中に立ちたる嘴が、此世あの世へ別れ際、悦び有り、悲しみ有り、六つの巷や六條の、館に哀を殘しけり。

第三

熊野路は、海と山とを引受けて、漁夫は鯛釣る鰹つる、杣は樵りてたつぎとも、五穀なければ春秋の、花や菓の畑主、庄屋組中が誘合ひ、都の使者の御出と、ゆふ暮時の閙しさ、袴羽織のかた短、地に鼻付けて待つ所へ、早御入と披露させ、備前守忠盛の執權進藏人家貞、旅の用意の挾箱家來引連れ歩み寄り、「いかに方々承はれ。此度白川の法皇頭痛の惱頻によつて、豫々當山權現へ御祈り有る所に、或夜ふしぎの御靈夢、此谷陰に年ふる柳の大木有り、其柳を以て棟とし、三十三間の御堂、都に建立有るならば、病平癒有るべしとの告に任せ、其柳を求めん爲、遙遙と參著せり。方々に案內させ、今明日に穿ち取り、都に送らん其爲なり。急ぎ案內仕れ」と、事の次第を述べにけり。皆々はつと手をつかへ、「是は〳〵、何事かと存じました。成程お尋ね

來の土産に臨終せよ」と、諫め給へる骨柄は、適ゆゝしく見えにけり。皆々勇む其中に、手負の惟弘這寄つて、義親の誠、纒、疵の口にしつかと巻き、「ホ、ウ適、大將武者ぶりや。悦ばし悦し。御先祖太郎義家公、奥州へ進發に、父光任が見送りし、例を我も見覺えたり。イデ門出を祝はん」と、扇追取り押披き、「けふ出陣の御大將爲義公、抑十歳の初陣には、栗柄山に打向ひ、南都の衆徒の大勢を、終に攻伏せ追返し、花々しき御凱陣、君も御感の勸賞には、陸奥冠者を下されたり。扨季仲が要害は、甲賀山の嶮岨と聞く。前後の隊伍能く守り、弓矢持楯廻りをかこひ、山かげ谷かげ森の内、むらく鳥の立つ時は、伏勢有としろしめせ。扨陣取の第一は、風雲龍虎の習有り。春は霞夏は雲、旗と見まがふ山城の、麓の岡に屯して、深田を前に後は山、秋は田の面或時は、水鳥なんどのかけ引有り。軍は奇正を先として、敵の不意を打つ事は、只夜軍にしくはなし。六韜七書の敎には、萬卒を憐みて、下知に應ずる其時は、たとへ小勢の味方なりとも、勝利を得る事疑なし。委しく申すは恐有り、八幡殿の軍略を、胸に覺えの爲義公、頓てめでたく凱陣を、待つといふ惟弘は、かゝる痛手の今はの時、君の長生末遠き、門出を見るが見納めか」と、苦痛をこたへ氣は張弓、やたけ心の爲義も、鎧の袖にもる涙、あやしの輿に義親も、別れを惜しむ涙の袖。若倉は將監が、首をかゝへて泣くくも、有りし次第をつどくに、夫に見せて泣き

鳥を奪ひ、迯出づる折も折、夫とは思はず首かき切り、頭巾を取れば姫殿。廻文の連判まで、我手に入るも天道自然。身も此通り腹切れば、敵討は五分々々。藏人了簡しておくりやれ」「ハア、何が扨、年來諫言申しても、用ひない父が一徹。日頃を思へば惡事の報い、何か遺恨を殘すべき」と口は立派に云ひながら、色目に出さぬ武士の、心を計りて惟弘が、「チヽ愁傷は尤なり。分けて大事は此小鳥」と、袋に納め紐引しめ、「忠盛公の志、謎をといたる此切腹、疎ならぬ平家の重寶、戻し申す」と手に渡せば、藏人取つて「實尤。今日は先主人が名代」斯くては果てじと立寄りて、義親の繩ときほどき、「イザ〳〵輿へ」と勸むるにぞ、しをれながらも立上り、用意の輿に乘り移る時こそ有れ、館の外面に鬨、貝鐘の音かまびすく、殿中響くばかりなり。並居る人々大きに驚き、「思寄なや、コハいかに」と、見やる襖をさつと開き、陸奥冠者爲義公、緋縅のもえ立つ鎧、龍頭の金兜、虎の革の尻鞘太刀、釆配取つて立ち給へば、數多の軍兵家の旗、白月毛の駒引立て、御出陣と呼はり〳〵、廣庭に込入つたり。爲義辭まず馬引寄せ、ゆらりと跨り、「ヤア〳〵惟弘、汝が與へし一卷に、敵地の案内くはしく知る。季仲が立籠る、城は江州甲賀山。是より直に馳向ひ、一戰に切靡け、法皇の宸襟を休んぜんは、此爲義が一擧に在り。御邊が忠死に義親の、御身の上も安堵せり。八幡殿より二代の家督、陸奥冠者爲義が此出立、未

叛逆に一味の義親、白狀に及び及ばずとも、惟弘忠死を遂ぐる上は、義親の罪一等を宥め、出雲の國へ流罪との院宣なり」と、高らかに呼はる内、早昇き入るゝあやしの張輿緣先に扣ゆれば、惟弘は只嬉しげに、「死ぬる今はの際までも、心にかゝるは義親の、行方いかにと案ぜしに、よくも計らひ給はるものかな。それ〳〵早く用意を」と、いふに義親轉倒敗亡目を覺し、「何々、此義親を流罪とは、ハア、したり〳〵」と身を悔み、「何事も叶はぬよな。ハア、さうぢや〳〵。惟弘が腹切つたは、おれを助けう爲で有つたか。コリヤ今まで世話に成つた上、命を捨てて夫程に、思うてたもる夫婦の衆、嘸や腹が立つたで有らう、堪忍してたもこらへてたも。モウ流されて行くからは、又對面は未來で逢はう。さらば〳〵」としをるれば、「ナウ和子、こなたは心が直つたか、善心にならしやつたか。嬉しや〳〵。ナウ〳〵聟聞きやつたか」「アイ聞きました〳〵」「其善心を今一時、早う直して下さつたら、ナウ娘」「アイ、とゝ樣の切腹も、どちらぞ遲いか早いかで、長い別れに成りました」と母と娘は手を取合ひ、わつと一度に聲立てて、歎きは盡きぬ淚なり。倶に心も藏人が、袂をしぼり居たりしが、傍をきつと、見付ける生首、「ヤア親人將監殿、是はいかに」と驚く藏人、若倉が立寄つて、「夫には段々申譯」「ア、こりや〳〵娘、其云譯は此親に任せよ」と、藏人が傍近くにじり出でて息をつぎ、「ソレ其ごとく形をやつし、小

う」「其時給はる烏羽の、ヲ、夫よ、氷といふ字の謎も解け、鬼切丸の御太刀を、持參せよとの御内通、我が臆病の其元は、母人の御不便餘り、鷹の肝の祕符の業。其云譯に母人は、其座で自害のいたはしさ。夫より心も剛と成り、鬼切丸を携へて、又奧刕に馳向ひ、君の不例も忽に、安々敵を討ち隨へ、めでたく凱陣ましませし」と、語るも聞くもめざましゝ。「ナウ義親殿、其時の勳功に、藁の上から預りし此惟弘、麒麟も老いの手業にて、引かれぬ弓を腰に張り、矢よりも早く立つ月日、いつの間に其樣な惡人に育てたと、思へば此身の科ぞかし。我が臆病の其昔、今切る樣に其時に、腹切つて死んだらば、こなたの樣な胴欲な顏も見まい。さりながら、臣下は主を諫めて死す、御先祖へ申譯の此生害、又一つには忠盛の、三切の謎をといたりと、こなたを助くる此身がはり。娘よ必ず藏人へ、此由とくと云ひ傳へ、見捨てられぬ樣にせい。心にかゝるはそちが身と、義親殿の成行が、迷ひに成るは」とどうと伏し、痛手の齗喰ひしばる、血汐の涙ぞやるせなき。夫の歎に暑は、「自とても此上に、ながらへて何とせう、倶に冥土の供せん」と、刀取る手を若倉が、「ナウコレ夫は」とすがり付き、なだめるも又涙なる。「ヤアヽヽ聊爾めさるな」と、進藏人かけ入つて、漸く刀もぎ放し、「コハ舅殿、早生害召されしな。主君忠盛には、法皇頭痛の御惱によつて只今院參。申付けたる其趣、忠節あつき惟弘、忠盛が胸中は能く察すべし、

る内、諸肌ひん脱ぎ我と我が、指添腹に突込んだり。是はと妻子が右左、「情なや」「何故に」と、すがり嘆くを押退け突退け、一息ほつとつきあへず、「ソレ其肴は鶴の庖丁、まつかくせよと忠盛公の判じ物。けふ八條の館に招かれ酒宴の上、爲義公へ其小鳥、眞劍の身を指しかへて、身變といふ木太刀の謎、某へは其肴、三切は則身を切れと有る御賜、戴いて歸る道、日比信ずる救世菩薩、六角堂へ暇を申し、死ぬる覺悟の月も日も、けふを冥途の門出ぞや。ナウ義親公、若倉もまだ未生以前の事なれば、是までいはぬ物語、爲義公にも帳臺にて、此身の懺悔を聞いてたべ。某武士の家に生れながら、若年の比はたゞ、劍を見る事かへふつ叶はず、其比度々の軍中に、鬨を聞く時は、忽正氣を取失ふ大臆病。時しも後三年の戰ひは、武衡家衡兄弟が叛逆を鎭めん爲、八幡太郎義家公、鎭守府の節刀を給はり、奥州に向はせ給ふ。親光任が願ひにより、我も御供申せしが、何をいうても臆病故、手柄は扨置き、何とぞして古鄕へ歸らん我がそぶり。義家公御覽じ給ひ、「軍令に背く卑怯者、一矢を古鄕の土産にせよ」と、切つて放させ給ふ簳、命から〴〵持つて歸りし恥しさ」「チ、それ〴〵、思ひ出せば早昔、壺井の御所には剛臆の座を定められ、景政の高名、兼杖介兼秩父の妻女、剛の座並の羨しく、來る日も〴〵此曙は、臆病の座に付いて、袂で顏を押包み、父平太夫國妙殿と、泣かぬ日とてはなかつたはいな

ちざりしが、心をしづめ、「ナウ暦、爲義公へ渡せしは、謀叛徒黨の連叛狀、敵のありかも明白に現はして有る上は、白狀も同じ廻文。義親白狀有る時は、斷罪にも及ばぬ筈。夫に今此太刀を渡し、惟弘に任すとは、ハテ心得ず」と眉に皺、じろりとしたる義親の、顔をつくぐ暦が、「コレこなたに一味の將監國貞、惡の報いは目の前に、娘や夫が手にかけたも、天道樣が手引して、御成敗も同じ事。犁藏人も內證から、どうぞこなたを助けうと、若倉をおこされた志。ナウ娘」『アイ、成程さうでござんする。どうしてなりとお命が助けたさ、心を碎く我々より、とゝ樣もかゝ樣も、是程にまでとやかくと、心盡は何故ぞ。ちつとは心を改めて、善心に成つて下さりませ。申しく」と取りすがり、鬼に敎化をするごとく、恨みつ泣いつ親と子が、淚に誠を顯はせり。惟弘驗を數たゝき、「暦、娘、何にもいふな、悔むなく、此上ながらへ置くならば、まだどの樣な不覺を取り、家の滅亡計りがたし。爲義公の仰に任せ、斷罪は只今ぞ」と、太刀取直し拔放せば、眞劍ならぬ木刀なり。是はくと惟弘が、暫し詞もなかりしが、やゝ有つて打點き、「ハツア誠や忠盛公、心を籠めし此小鳥、義親白狀召されなば、助けよとの志忝し」と押戴き、押直つて袂より、包みし物を取出し、「女房、娘、此内をよくく見よ」と指寄すれば、あいと取上げあけぼのが、つくぐみつの引肴、是はあられもアラふしぎと、娘も俱にいぶか

「ム、何と、此義親が手引とは」「イヤあらがふまい。證據といふは其死骸、將監とは又何を印においやつた」「サア夫は」「夫はとは。ハヽヽヽ。あのごとく眞黒出立、現在の嫁でさへ見違へた將監、首もなく印もないあの骸、將監ぢやと見知つた此方、手引といふに相違は有るまい。サア〳〵何と」と、一句の理詰にさしもの義親、コリャたまらぬと迯げ行く首筋引戻し、老の手先も忠義に強き、用意の早繩ぐう〳〵と、しめ上げ〳〵どつかと引すゑ、「人に惡事をぬすり付け、身を遁れんとは卑怯者、科極つた大罪人。刑罰は僞義公、もはや猶豫に及ばず」と、太刀の袋を指出せば、僞義取つて封引き切り、鯉口抜きかけとつくと見、「いかに惟弘、季仲が在家の白狀、問落せしか何と〳〵」「さん候、斯くまで仕込んだ極惡人、問狀までも候はず。此一卷を御覽有れ」と、刀の笄抜持つて、口をこぢ明けこぢ放し、「連判狀に候」と、渡せば義親、「ヤア夫を」と、立寄る繩付惟弘が、「どつこい、どこい」と引居ゆる。其間に僞義押開き、一々とつくと讀下す廻文狀、「何々、叛逆の張本、太宰帥、季仲が在城甲賀山」と讀終り打點き、「ホヽ出かした〳〵。此廻文手に入るこそ、武運を開く瑞相ぞ」と、卷納め懐中し、「ヤア〳〵惟弘、勅諚の上預る小鳥、義親の刑伐は其方に任すぞ」と、太刀を投遣りつゝ立上り、勇み進んで入り給ふ。「コレ〳〵申し」と惟弘が、續いて入らんも仔細は知らず、親子三人顏見合せ、とかう思案に落

やれ」と押直り、「ナニなう爲義公、今日と申し胸中嘸ぞと察し申した。追つて御安堵させ申さん」と、挨拶のべて惟弘は、義親に打向ひ、「イヤハヤ盗人たけ〲しいと、出はうだいに云ひさがし、身の科を人にぬる盗賊の正體、お目にかけう」と蓋押開き、上に竝べる太刀袋、一卷を啣へたる甲頭巾の首諸共、見るよりぎつくり義親が、胸に覺えもさあらぬ顏。惟弘騷がず、「ヤイ娘、此首の實檢で、盗賊でない明を立てよ」と詞の下、頭巾を取つて見る顏は、「ホンニこりや將監樣ぢや」「ドレ誠に將監殿。どうしてこなたの手に入りし」と、惘れる曙若倉が、「將監樣と知らなんだは、忍び姿の黑裝束、お首はとゝ樣お前の手に」「ヲヽサ〱。西八條より歸る道、爲義公に引別れ、六角堂へ參詣し、裏門通りを歸る時、水門を出る其將監。スハ曲者ぞと見る内に、見しり有る太刀袋、一卷を口に啣へ、迯げ出づる時も時、内の騷動そちが聲、何の苦もなく首かき切り、立歸つて能く見れば、姫の將監國貞。なむ三寶、日頃の積惡、斯く有らんは合點ながら、若しも此太刀餘人の手に渡りなば、ノウ爲義公」「げにも〱、此爲義が難儀の難儀重なるべきに、能き折に歸り合ひ、再び手に入る嬉しさ」と、父義親を尻目にかけてのたまへば、善惡正しき惟弘が、「ヤコレ義親殿、こなたはモウ目が覺めましたか、眠たうはござらぬか。大きな目玉をぎろつかし、一はな立つてさゝいこさい、盗賊の手引したは、彌こなたに極つた」

鳥にもせよ其太刀を、僞義殿が預つてござつたを、いつ此方は見やしやつたぞ。サア何を證據に痛い腹とは、よう言はしやつたなう。こなたは〳〵。コレ、大惡人のこなたの首討てと有る勅諚、討たねば勅諚に背くといひ、討つて渡せば不義不孝。親のこなたを討ち兼ねて、此ばばや娘に太刀を預け、よい思案してくれと、頼んでござつたはいなう。まだ年がいかいでも、親子の道を辨へて、切り兼ねてござる僞義樣。夫に何ぢや腹切れとは、胴欲な、よういはれた事。其五音で盗人も、大方に知れて有るはいの」「ムン盗人が知れたとは、扨は若倉われぢやよな」「エ、イ、此若倉が盗んだとは」「ハテ盗人たけ〴〵しい。太刀を奪ひし盗賊を突留めた若倉、なぜ太刀は取返さぬ。サア其太刀、ドレ見よう。ハヽヽ。其死骸はわが舅將監國貞。嫁のわれと點き合ひ、盗んだに極つた」「エヽイ、そんなら此死骸は、舅御將監樣でござんすか」と、又悔りの若倉が、軀に立寄り見廻せども、「見知つたお首が無いからは」と、騒ぐ娘に驚く母、義親が獨笑、「コリヤどこへとばしりがかゝらうも知れぬ〳〵。若倉何と云譯有るか」「サア夫は」「サア何と」「すりやどうでも此死骸は」「ヲヽ將監に極つた。云譯立たぬと容赦はない。われから先へ」と立上る。「ヤア義親殿まづ待たれよ。盗賊爰に」と一間より、歩み出づるは大宅四郎惟弘、小脇に掬へし挾箱、眞中にどつかとおろし、「娘若倉に詮議はない。曙も控へて居

庭には將監しすまし顔、太刀を提げ一卷を、大事と見やる石垣の、水ぬき門の穴かしこ、人はしら洲に身拵。夫と見付ける若倉が、ひらりと飛びおり聲をかけ、「太刀を奪ふは何者ぞ。やらぬく〳〵」とむしやぶり付く。物をも言はず振りほどき、行かんとするを待て〳〵と、留めるをかはし當身を入れ、ばつたり轉ぶを見向もせず、うまし〳〵と四つ這に、はふ〳〵くゞる土龍、體はふとく出兼ぬる間に、むつくと起き立ち若倉が、長押の手鑓追取りのべ、「曲者待て」と突き留めたり。ウンと叫ぶは塀の外、戻りかゝつて大宅惟弘、目覺つよき太刀袋、一卷口に蠢つく竊。內には仕留むる聲高々、「小烏の御太刀を、奪取つたる盜賊を、若倉が突留めたり。出合ひ給へ」と呼はる隙、外には首をかき落し、袋も一つに引かゝへ、裏門口へと走り行く。何事かはと冠者爲義、曙諸共義親も、緣先に踊り出で、「盜賊はいづくにをる。太刀を奪うたは何者ぞ」と、仰天顏に驚けば、「則ち爰に」と引入るゝ、竊が死骸は、「コリヤどうして、太刀も首も」と驚く若倉、爲義は諸手を組み、ぐつともいはぬ心の工夫。曙親子は顏と顏、惘れ果てたる其中に、義親一人が打點き、「盜賊は突留めしが、奪はれた太刀、ドレどこに、小烏は忠盛が重寶、其太刀が無いからは、預つて來た爲義、言譯には痛い腹、切らねばなるまい。笑止や」と、何がなぬする口車、横に押すとは見て取る老女、「コレ義親殿、小

ひ、一卷取出し手に渡し、「夫こそ鹿島三郎より受取つた、諸國の廻文連判狀、甲賀山の陣所の案内も内に有り、季仲へ屆けてくれ。コリャ將監、汝が忰藏人を味方に付ける手筈は追つて、萬事首尾よく仕果せなば、國大名に取立てるぞ、悦べく」「コハ有りがたい御仰、甲賀山へ出立も今宵が内、萬事しめし合さん爲、とくより忍んで最前から、樣子は委しく。あの太刀掛にかけたる太刀、忠盛から爲義へ、お前を殺せといふ事迄、コレかうく」と㕝けば、恟りしながら立寄つて、袋を取上げ打點き、「中には彌小烏丸、勅諚と有るからは、何でも大事の預り物、是も次手に持つていけ。紛失の咎にして、爲義めに詰腹切らすはよい氣味く。我も跡より忍び出で、何事も重ねてく」「げに尤」と太刀受取り、「然らば隨分首尾よう」と、しめし合する非道の庭、心おくには聲々に、「義親樣はいづくにぞ」と、尋ねる聲に驚く二人、太刀を大事と緣の下、忍ぶ將監、義親は、狸寐入の空鼾。「コレく爰に」と婢ども、追々に走り出で、「ナウ藤枝殿、人をねさせぬ報いやら、こちらも滅多に眠たうて、居眠つてゐた内に、よう拔けてお出でたなう。サアくお目をお覺し」と、どらも太鼓も打交に、鳴せば耳に兩手を當て、「ヤレかしましやく、こりやく赦せ」と逃げ出せば、「又もや奧で寐ようでな」何國までもとどら太鼓、かやせくと晝狐、「だまされさんすな槇野殿」化されたとは白書院、襖の内へと追うて行く。

角堂へ參詣し、跡よりも歸るべし。今日忠盛へ招かれたる仔細外でもなし、義親彌白狀せずんば、コレ此太刀を以て首討つて見せよと有つて、平家の重寶小烏といふ名劒、コレ此如く封を付け、忠盛手づから下されたり。つく〴〵心を察するに、義親は現在の父、我は又子の身として、親を討つは不義不孝、討たねば違勅の科遁れず、忠盛もそこを察し、いはぬ心は此袋、口を緘ぢたる封印、拔さしならぬは院の勅命。ナア聟若倉、われ達もつながる緣、ほどけ兼ねたる爲義が胸中、親を討つて忠義になるか、不孝になるや、是を以て思案をせよ」と、刀かけに直し置き、しを〳〵として爲義は、帳臺深く入り給ふ。跡には親子顏見合せ、ハテどうがなと取つおいつ、詠める刀詮方も、「女の智慧に是がマア」「母樣さうでござんする、何分にとゝ樣が、お歸りあらば倶々に」「ヲヽ夫もさうなれど、思案をせいと言はしやつたが、どうがよかろ」と手を組んで、額によせる皺の上、又もや皺を寄せにけり。若倉も諸共に、打傾いて居たりしが、「申し母樣、とかくは無い、奥へいて、義親樣を責めまして、白狀さへなさるれば、一味でない申譯、立ちさうに存じます」「ヲヽそれ〳〵、夫がよかろ。其通りを爲義樣へ申すが、則思案の返事。サア〳〵おぢや」と打連れて、帳臺さして行く跡は、人のとだえを眞黑出立、かたへの非戶から忍びの頭巾、邊を見廻し相圖の笛、呼子のしらせも折義親、差足拔足、竊が耳に囁合

事、夫を知らせに來た私、根が乳兄弟の好だけ、サア／＼次手に白狀」と、詰めかけられて空とぼけ、「アヽ寐ぶたい／＼。近江蕪の風呂吹はどうぢややい。近江は蕪の名物、あんな蕪を矢に矧いで、神通の蕪矢を射たらよかろといふ事ぢや。アヽねぶたや」と伸欠、「是から奥でぐつたりと、ねさしてくれ」とふり切つて、羽がいじめなる繩取り／＼、小姓どもが「ならぬ／＼、ねさしはせぬ」とどら太鼓、打ち立て／＼追うて行く。跡を詠めて母娘、悄れる中に曙が、「ナウ若倉、誠に在家が知れたかや」「アヽ母樣の何のいな、今の樣に申したは夫が智略。どうしてなりとかゝ樣やとゝ樣のお心を休める樣、義親樣には取分けて、白狀ないに極れば、彌敵へ一味の印、首討つて出せと有る大内の御評定。織人殿も笑止がり、舅殿の養君、けふの日中が生死のさかひ、さつぱりと白狀させ、命助ける計略には、所も近江と聞いたれば、かう／＼せいと夫の指圖。今の樣に申しても、中々氣強い義親樣。母樣仕樣はない事か」と、いへば點く涙聲、「そんなら白狀ない時は、けふ限に首討てとや。ハア夫はひよんな御評定。さりながら、どうぞ助ける仕樣には、隨分いはせて見る思案。そなたも奥へ」と勸むる所へ、「ヤア／＼兩人暫く待て」と聲をかけ、西八條より立歸る陸奥冠者爲義は、手に持つ太刀の袋さへ、しん／＼の紐の解けやらぬ、胸の思ひを押包み、しづ／＼と座に直り、「ヤア曙、同道せし惟弘は、宿願の旨有りとて、六

だ忠盛樣と御內談の其間、藏人が申付け、內意に參りし其譯は、舅惟弘殿には、養君義親樣を預り、敵の在家を御詮議有れども、今に白狀ないとの事、そちも義親殿とは乳兄弟の事なれば、倶々に詮議して、お年寄の親々へ、心づかひを休むる樣にと夫の內證。夫故に參りましてござんす」と、聞いて點き、「サレバイノ、丁度けふで十日餘りの現責、今も今傍へいて、意見をしても夢中に成つてゐやつしやる。ソレ又俯いてぢや、起せ〳〵」と急付かれて、又打ち立てる太鼓の音、「エヽ鈍なめろさいども。目を明いてゐるもの、眼玉にはかゝらぬか」と、呵る詞も現やたわい。「サア〳〵早う白狀」と、口々傍からせがめども、ふらり〳〵は糠に釘、こたへは鼾ばかりなり。「あれを見や若倉、每日每夜あの通り。幸ひおぢやつたそなたと二人、責めて見よう」と立寄つて、「コレ〳〵〳〵爲義樣や、夫の歸りも追付でござろぞや、今の內に言はしやれ」と、背中を突けば目をほつちり。若倉も躙寄り、「アノ申し母樣、もう御詮議には及びませぬ。何ぼお隱しなされても、天命といふもので、連判狀の在所、季仲が隱家も知れました」と、聞くより義親立上り、「ヤア〳〵季仲が有家、近江に居る事知れたるな」「アイ其通りでござります。其近江路を聞かうばかり、夫程知つてござるもの、なぜにとうからおつしやらぬ。とてもの事に方角も所の名も、有りやうに言はしやんせ。彌〻お隱し召さるれば、今日中にお命がないとの

知らぬ」も白川夜舟、楫取り兼ぬる風情なり。源家の大老大宅四郎太夫惟弘が女房、夫の留主と氣を付けて、奥の襖をあけほのが、腰に梓の、弓取の、行儀は常の座敷に立出で、「是は扨養君、まだ白狀は召されぬの。其樣にうつら〳〵、いつ事が干まするぞ。お前の心が心なら、八幡太郎義家公の御惣領、家督をも繼がしやる筈。爲義樣はこなたのお子、まだ年はいかねども、武勇といひ、忠孝の道を守り、八幡殿によう似た大將。お前はマア誰に似て、其樣な惡者にならしやつた。季仲が謀叛に一味して、天下を騷がす無道人。養ひ育てた我々、御先祖へ恥しい。アレ〳〵人にばかり物いはせ、うつら〳〵と夢現。ソレ女ども起せやい」「アイ〳〵。いやもうどの樣に致しても、お目の覺める事ぢやござりませぬ」「サア夫でも言はせねば埒が明かぬ。ドレ〳〵ちつと手がはりして、白狀さゝう」と立ちかゝる折も折、「進藏人樣御出なり」と、書院に小姓が取次ぐ聲、「ヤア〳〵、聟藏人が見えたとは、ハテ心得ぬ。夫惟弘殿、爲義樣のお供して、聟の主人忠盛樣へいかしやつたに、歸りの遲いを案じる中、聟が見えるもいぶかし」と、出向ふ一間へ入り來るは、藏人ならで若倉が、襠姿のしとやかさ。「是は〳〵、聟殿かと思ひの外娘の若倉。シテ藏人は見えなんだか」「アイ、夫藏人は御用しげく、名代に參る樣にと申されました」「夫は大儀や、ようこそ」と、親子は膝を押しならべ、「今日は爲義樣とゝ樣諸共、いま

めよ」と、仰にハッと惟弘が、戴く盃つぐは聟、肴は忠盛臺引き寄せ、手づから給はる有りがたさ。「兩人さらば」と忠盛公、「藏人來れ」と打連れて、帳臺深く入り給ふ。跡に惟弘手に受けし、肴を詠めてハァはつと、心に點き立上り、「若殿ござれ」「供せい」と、持つて立ちたる太刀袋、情もこもる口ごもる、肴を包むかみならで、心の底をほり川の、館をさして 三重「サアサア申し義親樣、白狀をなされませ。敵の在家さへおつしやれば、存分に寐させます。アレまだいの。此樣な鳥の羽でこそぐつてはお目が覺めぬ、責道具のどら太鼓、耳のはたで打たうぢやないか、まきの殿」「ヲヽ夫がよかろ」と立騷ぎ、晝夜をわかぬ現責、詮議の底をほり川の、六條通りに一構、陸奥冠者爲義の館には、內匠頭義親を預りて、太宰帥季仲がたて籠る、在家を尋ぬる問狀の、役目もつとき婢ども、時かはりとは知られたり。「ヤイめろさいども、是程目を明いてゐるに、又しても耳の端でやかましい、置きあがれ」と、睨む目玉もとろ〳〵目元。「サアお目明てござるなら、所を早う御意なされ」「知らぬはい。同じ事を每日々々、どの樣に責めたとて、知らぬ事はいつまでも、知らぬぞ〳〵」「サア知らぬ〳〵とおつしやつても、お前より外知つた者がない故に、コレ申し〳〵」「サア聞いてゐるはいやい」「サア聞いてござるなら早うおつしやれ」「ソリヤ何を」「何であらうと敵の在家を」「おりや知らぬ。何にも知らぬ。知らぬ

只默然と詞なし。忠盛大きに打笑ひ、「爲義には若輩故、麁急とばし思はれん。叛逆一味の義親は、爲義、貴殿の父ならずや。源家の重寶鬼切丸の劍を以て、現在父を斷罪せられば、御身は忽不孝の名を世上に觸れ、鬼切の名劍にて、同じ源氏を切りたりと、劍も德を失ふ道理。そこを察して此小烏、爲義の手を借つて、忠盛が討つも同然。さすれば不孝の科もなく、勅諚も立所に、拔群の忠節。惟弘いかに」と忠盛の、仁義を兼ねたる引出物、ハツと感ずるばかりなり。「ハア遖名將聰明叡智。源平兩家と別るれども、直なる掟の忠盛公、志の御賜、頂戴有れ」と惟弘が、取つて渡せば爲義も、すさつて三拜押戴き、「忠義の道には父子兄弟、戰ひ挑むも武士のならひ、彌白狀なき時は、只一討」と跡云ひさし、恩愛親子のうき思ひ、さし俯いておはします、胸の思ひを汲み取る惟弘、「若しもや白狀召されなば」「ヲヽ、サく其時は、忠盛が身にかへて義親の命乞、禁庭宜しく奏聞せん」「ア、有りがたし」と悅ぶにぞ、爲義は封印の、袋をつくづく見るからに、此小烏も音を出さば、父かはいとや叫ぶらん。思へば武士の身の上程。「忠盛公おさらば」と、涙隱して立ち上る。陸奥の冠者が元服して、六條判官爲義とて、保元以後の戰ひに、子の義朝にあへなくも、討たるゝ謂を今爰に、思ひやられて哀なり。惟弘も打しをれ、「イザお暇」と立ち上るを、忠盛「暫し」と止め給ひ、「酒はつれば何とやら、藏人一獻すゝ

とぞ善心に飜へさせ、源家の汚名をすゝがんと、心を盡すかひもなく、愚老を始め爲義が胸中、御賢察下さるべし」と、詞も半涙ぐむ、心を察する忠盛主從、倶に心をいためしが、「ナウ爲義、今日改めての勅諚有り、季仲が城郭明白に相知れなば、討手には爲義たるべし。又義親が白狀なきにおいては、爲義が手に斷罪せしむる條院の勅命。急ぎ歸つて今一應問狀にかけられよ。扨々方々の胸中察し入る。幸薄酒到來せり、酒は愁を拂ふといへば、心ばかりの我饗應。藏人早く」と仰の内、急いで用意や有りつらん、長柄盃臺肴、お傍小姓が汲む酌に、忠盛受けてずつと乾し、「爲義一つ」とさし給へば、「コハ御懇志の御盃、頂戴申す」と取り上げて、てうど受けたる盃に、「肴を勸めん、それ〳〵」と詞の下、藏人立つて一間より、袋に入れたる太刀一振、忠盛に傳ふれば、取直し押戴き、「抑此太刀は、上平太貞盛將門を退治の時、朱雀帝より給はりし小烏丸の名劍、家に傳はる重寶なれども、義親白狀なきにおいては、是を以て刑罰せられよ爲義」と、紐を結んで祕封を付け、膝元に直さるれば、爲義心に急いたる面色、「ハツ義親が刑罰、志の賜、祝着には存ずれども、平家の家に小烏有れば、某が家にも鬼切と申す名劍、前九年後三年、數度の軍に勝利を得し源氏の重寶、何ぞや平氏の劍、源家に用ゐる謂なし。若輩者と思召しての御賜、申受けたる同前」と、押戻したる爲義の、心をはかつて惟弘は、

る。智仁勇を備へたる、其源の爲義とて、十八歳の角額、長上下を爽に、遉武將の其骨柄、付添ふ武士は大宅四郎太夫惟弘、六十に餘る腰刀、進藏人家貞が、舅の禮儀內證口、威儀を正して座に直る。爲義忠盛に打向ひ、「今日の御召、御用いかゞ」と有りければ、「ヲヽ、早速の御來駕祝着々々。先達て館へ預けし義親の儀、改め申すに及ばねども、五年以前、法皇熊野へ御幸の折から、岩淵和田四郎といふ者、鳳輦に向ひ狼藉せしは、季仲が所爲なる由。彼の和田四郎は、義親の郎等鹿島三郎と聞き及ぶ。此程都に徘徊し、民間に亂れ入る事日夜の注進。是によつて黨類を搦捕り拷問にかけし所、太宰黑帥又源義親叛逆に紛れなき條再三の白狀。さるによつて義親を召捕り貴殿に預け、逐電せし季仲が在家、白狀させられよと申渡し置きたるは、親子一所でないといふ爲義の面晴。先刻禁庭より師實公別勅の趣、今日中沙汰致すべき勅諚なり」と有りければ、爲義謹んで畏り、「大切なる詮議の役、殊更父子の間と申し、旁以てゆるかせならず、百度千度責具を以て拷問に及び候へども、いまだ白狀仕らず、是なる惟弘が計らひにて、晝夜寐さゝぬ現責、十日餘りに及ぶ所、更に色目も見えざれば、此上は勅諚に任すべき外候はず」と、言上有れば惟弘も手をつかへ、「爲義の詞のごとく、樣々におどしつすかし責めとへども、白狀致さぬしぶとき魂。某とても存じの通り、義親を守り育てたる由緣によつて、何

髑髏、風の吹く度々に、動くに連れて頭痛の惱、是を平癒あらんには、彼の柳を切り取り、王城に於いて三十三間の御堂建立あらんとの結構。則ち忠盛へ任すべしとの院宣なり」と述べ給ふ。忠盛すさつて頭をさげ、「物數ならぬ某、かゝる宣旨を蒙る事、武士の大慶是に過ぎず、畏り奉る。ヤア〳〵藏人、大切なる君命、熊野山へ立越え、柳の在所を尋ね求むる其使、其旨心得たるか」「ハ、はつ」とばかりに藏人が、お受申せば、「ヤア其役目は此時澄、假初ながら天子の御用、陪臣づれは遣られぬ」と、支ゆれば師實公、「麁忽なり時澄、此度の造營は、忠盛萬事承はれば、私には計らひがたし。武者所の役柄は、大内の非常を正し、警固の外は、さして諸用に構はれそ」と、仰せに時澄、「サア夫は夫で濟み申すが、濟まぬは謀反に合體した源義親、太宰帥が在家の詮議、爲義が預つても、サアいまだ有無の沙汰もなし。ナウ藏人、源氏の勇氣に氣を呑まれ、臆病風での延引か」と、俤が一味の空とぼけ、云ひほぐすれば師實公、「扨々いらざる作配立、平家の事は源氏が正し、源氏の惡事は平家より、源平兩家相互、君を補佐する武將の役。さりながら、義親が問狀今日中、忠盛きつと沙汰せられよ。まづ法皇へ領掌の旨奏聞せん。早退出」と立ち給へば、忠盛主從式禮に、見送る先へ武者所、肩肱はつて立歸る。引違へて出る奏者、「陸奥の冠者爲義、大宅四郎惟弘、召によつて參上」と、披露につれて入り來

ふ料紙と硯、筆追取りてさら〳〵と、書認めて差出すを、池殿御前手に取つて、「ヤア是は」「さう悔りなさるゝは、御得心でないさうな。忠盛様から大切に、お前ならでと思召し、行末長う添はるゝ様、かうするもお前のお爲。サア御得心でござるか」と、二人が工に云ひ廻され、「ハテ添ひたいが定ぢやもの、女御にあいそのつきろ様、必々頼むぞ」と、仰をハット呑込む法眼、「ちつとも氣づかひ召さるゝな。首尾した上では、一廉の御褒美ぢやが合點か」「ヲヽ首尾さへ成れば望に任す」「イヤ夫さへ聞いたら實を入れて、お受合申します。必隱密々々」と、點き囁く折も折、勅使のお入と呼はるにぞ、二人は表へ、池殿は、「奥へお知らせ申さん」と、立ち別れてぞ入り給ふ。程なく沓音けだかくも、右大臣師實公、北面の武者所時澄を相隨へ、儲の褥につき給へば、館の主忠盛卿、進藏人諸共に、禮儀正しく平伏有る。右大臣殿正笏し、「いかに忠盛、貴邊の勳功勸賞には内の昇殿を赦され、其上女御を賜はる事、家の繁昌身の譽、有りがたくも思はれよ。今日の院宣餘の儀にあらず、法皇頭痛御惱頻によつて、熊野權現へ御立願有りし所に、三夜に續くふしぎの靈夢、法皇の前生は蓮華王坊といふ修驗者、三山百度の歩の内、九十九度にて慢心發り、忽破旬の怒を受け、谷底へ投げ付けられ、支體は微塵に碎くといへども、頭は柳の梢に止り、夫より星霜遙に移り、谷の柳は六十餘丈に生ひ茂り、梢に殘る前生の

ら、勝負の知れぬが時の興お慰、夫を傍から何のかの、唐の倭の諺で、互にお氣の立つ樣に、お伽ではなうて喧嘩の行司、少とお嗜み遊ばしませ」と、やり込められて顏と顏、まじめに成るぞ心地よき。「サア〳〵申し女御樣、奥の間へお越し遊ばせ、お二人置いたら又何か、池殿樣にも倶々に、仕返しの勝負の雙六、所をかへて遊ばしませ。女御樣からマアお出で」と、進め申せば立ち給ひ、「池殿樣お先へ」と、姿繕ふ海棠の、花の袂を打覆ひ、紭引連れ若倉が、案内に付いて入り給ふ。跡を詠めて將監が、池殿の傍に寄り、「忠盛公とあの女御は、浮名の立つた深い中、法皇が呑込んで、勅諚のお妾、お前樣は俗にいふ奥樣の餅の形、日かげ者と同じ事、そこへ心の付かぬとは、身を知らぬと申すもの。かう申すもお馴染だけ、末の事まで思はれて、此將監さへくい〳〵思うてなります」と、實に見せたる空涙。聞くにましくる池殿の、胸の焔にそゝぐ水、「悋氣がましい事いへば、あいそのつきる事もやと、包むに餘る物思ひ、若しも女御に自が、見かへられたらどうせうぞ。恨めしや悲しや」と、身を震はしてかこち泣。二人は點きしすまし顏、膝と膝とをにじり寄り、「お道理〳〵、ナウ御臺樣、法眼が醫術で、あの女御を忠盛樣に飽かする仕樣、ナア申し、とつくりとお頼み有れ」と、吹込む毒氣を御臺は點き、「そんならどうぞ能い樣に、法眼殿頼むぞや」「成程々々呑込んだ。仕樣はかう」と傍に有り合

三朱四と呼びならはす。簺の二つは月日を表し、人で申さば本妻お妾。ナア申し、お前樣は御本妻、其本妻でも乞目ふりがナ、此白黑の石の數、夜も晝も筒を握り、五二五三に放さずば、本妻樣はむし〳〵で、明日ばかりふつてがな。必油斷なされな」と、お爲ごかしに云ひ廻せば、法眼引取り、「コレサ國貞、法界悋氣おかれい〳〵。戀に前後のわかちはない。殊に女御は法皇樣から勅諚のお妾、叶はぬ〳〵」と聞くより池殿せき立ち給ひ、「コレ〳〵法眼、自が女御樣に叶はぬといふのかや。媚容はおとるとも、夫を大事大切に、思ふ心は負けはせぬ。勅諚沙汰はいや〳〵」と、怒の詞に付け込む將監、「いか樣法眼が勅諚呼はり、又しても氣にくはぬ」と、眞顏の論を聞く女御、「是はマア〳〵將監の詞とも覺えぬ、何しに自其樣な、さもしい心を持つものぞ。いつまでも池殿を、頼まねばならぬ此身の上、心にかけて給はるな」と、氣の毒顏の御氣色。「イヤいつまでも末長うとおつしやるが、池殿樣の聞き所、此將監は呑込まぬ」「コレ〳〵何ほど貴殿が呑込まいでも、忠盛樣がお呑込、ナア〳〵申し女御樣」と、多熊と將監相槌の、拍子揃へて焚付くれば、悋氣に遊女氣の、穗に顯はるゝ盤の面、石も亂るゝばかりなり。間の襖を引き明けて、將監が嫁の若倉、しづ〳〵立出でしとやかに、「是は〳〵お二人樣、おはしたないお顏持、法眼殿も舅君にも有られもない、鴨川の水と簺の目は、帝樣さへお心にまかせぬとや

が助言ぐらゐで女御樣には勝てぬ〳〵。じたい忠盛樣、簺の目よりは人目を忍び、年月戀に乞目の君樣。ソレ〳〵今度は朱三が出ると、池殿樣は又むしぢや。しゆ三〳〵」と呼び立つれば、女御は却つて池殿の、勝になれかし我乞目、打たじ〳〵と直なる、心に連れて簺の目の、しゆ三とすわれば女御方、法眼始めいさみ立ち、「サア又勝ぢや將監殿、呑んだ〳〵」と盃を、突付けられて「池殿樣、コリヤまあどうでござります。女御樣は畢竟が勅諚のお妾故、お客樣同然、いかに亭主ぶりぢやとて、さうお負けなされては、此將監いきつきます」と、底意に針持つひいき口、「イヤコレ將監、其樣に負腹たちやるな。亭主ぶりでも客ぶりでも、負けるが下手ぢや。併し女御樣の勝ち續けで、此法眼酒がたらぬ、貴公は下手な池殿方で、酒が過ぎて面白かろ。あやかり者め」と嘲れば、女御は氣の毒、池殿は女心の一筋に、傍の手前もはぢ紅葉、思はず顏の色目立ち、「ほんに〳〵本意ない負け樣。したが忠盛樣の御祕藏の女御樣、ひよつと自が勝つたなら、忠盛樣が腹立てて、雙六ばかりか大事〳〵の、人の花まで乞目のお上手、今からあなたの弟子に成り、此筒よりは忠盛樣に、ふられぬ樣にせうかいなう。將監、さうぢやないかいの」「左樣とも〳〵、じたい此雙六の簺は恐ろしい性根な物、唐土の玄宗の官女、眞子君楊貴妃と乞目爭ひ、重三重四に朱をさいて、官職を給はる故、今の世までも重三重四といふ事を、朱

ぢや、エイヤンサ。工面が違うて、エイヤッサ」ふせう〳〵に押すや此、艪柄を取つて時の間に、早舟手舟に乗廻し、數千艘にて寄するとも、忠盛かくて有るからは、腕もさゝ舟あま茶舟、軍船漁船押し切つて、破軍の劍先鉾先に、片端舟は一摑、ころり〳〵の丸太舟、てんたう天魔の障碍もなく、公にすゝむる艤、敵は浪間にうつろ舟、守護する君が寶舟、千里一はね走舟、都の空へと還御ある。

第二

時を得て、威勢日に增す平家の館、備前守平忠盛、數度の武功の恩賞に、下し給はる閨の花、祇園女御と聞えしは、柳が枝に初櫻、梅の匂ひを含ませし、色香に勝りおとりなき、池殿御前と指向ひ、乞目爭ふ雙六の、左右に別れてお伽役、池殿方には進將監國貞、女御方にはお出入の、輕薄醫者の多熊法眼、勝負を二人が酒賭に、負方が呑む云合せ、おもひ〳〵の片贔屓、いと媚めける遊びなり。「申し〳〵池殿樣、どうぞお勝ち遊ばせ。三度のお負でこの將監、續けさまに三盃、イヤもうどうもたまりませぬ。今度は極めてお前のお勝、法眼呑ますぞ覺悟召され。オ、さうぢや〳〵、其石切つて、マア〳〵六地をお塞ぎなされ」「ア、これ將監助言ならぬ。した

す時しも、宙をかけつて平忠盛、「なむ三寶遅かりし。ヤアく天子に敵たふ人非人、其船戻せ」と呼はつたり。岩淵どつと打笑ひ、「陸でこそは負けてゐた、かうしたからは此方の物。アノ馬鹿つらを見よく」と、いふに忠盛身をあせり、行きつ戻りつ見付けるもやひ、纜しつかと手に搦巻き、天のあたへのもやひ綱、戻してくれんとえいく聲。岩淵あせつて、「ソレくソレ、縄を切れよ」と下知すれども、刀は殘らず打落され、さすが一本あら縄を、ほどかん折もあらしの潮、磯にはえいく引く力、戻すな行れよとゆふ浪の、とぢめん帆を巻き艪を押し立て、「ゐいやんざ」火水に成つて押す力、引き戻さんず金剛力、ゆらりゆらくもみ合ひしは、小島の動くに異ならず。されども忠義の忠盛に、龍神部類の擁護にや、なんなく干潟に引き付けく、ひらりと飛び乗る勢ひに、恐れをなして和田四郎、ざんぶと飛込み水底くゞり、行方知らず迯失せたり。這ひかゞんだる二人の殘黨、手玉に摑んで投込む所へ、おくればせなる武者所、拾ひ首の血刀さげていかめしく、「山賊に出合ひ切りちらし、漸只今參上」と、鼻も動かぬ廣言たらく。「ヲヽよい所へ武者所、君が御船の楫取して、長島まで守護せられよ。我は陸路に殘黨原、取つて返さば防ぐ爲、濱邊傳ひに御供せん」と、指圖に是非も時澄が、時の用には楫取役、君も女御も安堵の思ひ。忠盛勇んで下知をなし、時刻移るとゆふ浪に、「ヲヽサ合點

御といつまでも、母御に孝行盡すもよし。折もよし有る夫婦が中、ふしぎに寄るも三熊野の、神の惠のえにしぞと、悦びいさみて、三重走り行く。爰も岸打つ浪の音、新宮の濱先に、つなぎ捨てたる渡海づくり、季仲が殘したる、術と急ぐ武者所、鷲六猿平引連れて、岩淵諸共かけ來り、「忠盛めが勇力に、此時澄が家來まで、イヤハヤ案に相違な不首尾。何分我は知らぬ分、味方顏して裏切せん。岩淵はいかに〳〵」「サア某はあの森かげに身を隱し、法皇女御は足弱ども、此舟見付けて參るは治定、忠盛さへ討ち取れば、法皇は籠中の鳥、女御は安々都へ送り、黑帥殿の御簾中。ムヽうまい〳〵。此時澄はお公家樣、汝も大名合點か」合點々々としめし合ひ、身を潛めてぞ待ちゐたる。斯とはいざや、しら波の、砂を踏み立て平忠盛、見ゆる汀の大船に、人音なければ幸と、君二方の御手を取り、とく〳〵めさせ奉り、纜とかんとする所へ、待ちまうけたる惡黨原、それと聲かけ切り付くるを、ひらりとかはし楫追取り、はつし〳〵となぎ立つれば、爰の岩かげ森のかげ、我も〳〵と顯れ出で、茅の穗先白浪の、切先立浪どうどうどう、途を失うて逃げ行くを、餘さじやらじと追つて行く。しすましたりと和田四郎、「サアサア此間がよい首尾ぞ」と、ひらりと飛んで乘り移れば、「コハ何者ぞ」と驚く玉體、手ごめにし、「鷲六猿平合點か」「心得たり」と帆を引き上げ、艪櫂取りのべさつさ聲、半段斗り押し出

母も大事の其上に」「サア申し、お二方にも氣づかひ有るな。かういふ中も危いく。然らばそこまで立退かん」と、背指し向けておいの身に、「孝行道はまつかうく。跡から早う」と云ひ捨てて、谷道傳ひ急ぎ行く。韋駄天走に平忠盛、君はいかにといぶかる内、お柳が誘ふ法皇女御、「コレく忠盛、是なる者が介抱故」と、仰もあへぬに、「申しく、土も草木も君が代に、住むこそ深き御恩なれ。何のお禮をおつしやる間に、新宮の濱手には、舟の渡海も自由なり。一先かしこへ御開き」「實尤」と悦ぶ忠盛、「情の禮は追ての事。恐ながら」と負ひ奉り、女御の御手を取りくに、濱邊の方へと出で給ふ。又もや人音聞ゆれば、心に點き呑込んで、見ゆる柳に手をかけて、引けばしいわりしだれる枝、女力に押し撓め、腰打ちかけてたばこ盆、きせるに憂さをはらし居る。うろく眼の手下ども、「コリヤく女、法皇女御はどつちへ往た、早くぬかせ」「サア其お方はいッつの昔、あの坂口をまつ下り、一里も三里もさつきの事。マアくちつと休まんせ、茶も沸いて有りたばこも爰に」「ム、いか樣、夫程に違うては、天狗でもとゞくまい。ドリヤ一ぷく」と腰打ちかけ、てんでに煙草すつぱく。時分もよしとこなたは氣轉、「ドレ茶を汲んで」と立つ拍子、ぽんと刎ねたる柳の鞠、岩にぴつしやり打碎かれ、微塵に成つて死してけり。「扨も氣味よし心地よし。よしく爰を立退いて、楊枝村のよしみを便り、思ふ殿

巾に顔押包み、手の者引連れ追取卷き、「我々は深山に住み、順禮道者に合力受け、世を渡る山賊なり。路銀衣類を渡されよ。異議に及ばゞ此岨道、跡へも先へも通すまじ。何と〳〵」と呼はつたり。忠盛ふつと吹出し、「事も愚や、白川の法皇還御の道、備前守忠盛が御供なるぞ。昔天の下に住みながら、御恩を知らぬ蝿蟲めら。三拜九拜かつつくばひ、道を開け」と大音聲。「イヤ法皇でも烏でも、翅をもいで追拂ひ、女御ばかりを奪ひ取れ」と、下知にむらがる溢者、一度に寄るを寄せ付けず、蹴倒しはり退け嘲笑ひ、「祇園女御を奪へとは、よつ程實の有る山賊めら。忠盛が供奉の帶劒、切味見せん」と拔きかざし、一ふり振れば三人五人、岩淵始め逸足出し、迯ぐるをやらじと追うて行く。後には二方いかゞぞと、叡慮を苦しめ給ふ所へ、取つて返す惡黨原、「ソレ〳〵女御を奪ひ取れ」と、既に危き後の庵、一腰ぼつ込み平太郎、飛んで出でさまつかせと、弓手めでへ投げ退け〳〵、「コレ〳〵母人女房ども、御二方の介抱を」と、詞の内より「いざ〳〵」と、母とお柳が御供し、忍ばせ申せば平太郎、心安しと拔き持ちて、支へる族を大袈裟小けさ、眞向竪割車切、殘る奴原餘さじと、追かけ行くを、「ナウこれ〳〵、待つて〳〵」と聲かけて、お柳は母を伴ひ出て、「上々樣を預る上、お年寄られた母樣に、過有つては不孝なり。跡は私が受取つた、内で申した所まで、早う〳〵」と氣をせけば、「實も〳〵、

と、打連れてこそ入りにけれ。有漏よりも、無漏に入りぬる道なれば、是ぞ佛の御本なるらん。此御歌の告により、白川の法皇は、御病惱のいたはりとて、本宮の御社湯本にとゞまりおはせしが、賽の法施を捧げ、祇園女御諸共に、還御は車の本までと、山路の供奉は備前守平の忠盛、賤が床几を幸と、御腰を暫しかけまくも、敬ひ傅き奉らる。法皇龍顏うるはしく、「ヤヨ忠盛、朕が重病悉除の爲、三十三度の祈願を籠め、歩を運ぶ驗にや、惱も輕く覺ゆるは、偏に神の御利益、悅ばしや」と勅。女御も笑を含ませ給ひ、「誠や妙なる三ツの山、始めて御供申せしが、聞きしに增さる靈地といひ、君の御惱もいつ〳〵より御怠らせ給ふとは、殊更神の御守り、有りがたさよ」と宣へば、忠盛はつと領掌し、「往昔平城天皇を當山御幸の始とし、三十三所順禮の始と申すは、花山院瀧の流の元にして、三ケ年の其間、一千日の行より、修驗道の始とす。其後九穴の鮑の貝、瀧の本へ納めさせ、此度勅に隨ひて、忠盛海士に申付け、瀧壺へ入れしかば、何樣傘をひろげしごとく、れい〳〵と候へば、疑ふ所候はず。日本第一の名水、手の內に掬すれば、長生を得るとかや。御惱も全快たるべし」と、奏し申せば法皇も、叡感限りなき折から、吹きくる風の谺につれ、えい〳〵聲鯨波、山谷樹木動搖せり。コハ何事ぞと二方も、驚き給ふ御氣色、忠盛騷がずつつ立ち上り、心を配る其所へ、謀叛一味の和田四郎、ほくそ頭

もなけりや親もなし、兄弟もなし、何にもない一本立」「テモ嘘ばかり。見れば見る程爪はづれの美しさ、尋常な事はいの。よう人が只おこぞ」「ホヽヽ恥かしい事ばかり。山家生れのぶ骨な私、お前の樣なよい殿御に、そうて見たいと思ふから、花の盛も目につかず、夜を數へ日を數へ」「サア夫でもつんとどうやら誠と思はれぬ」「アレまだ深いお疑、眞實誓文で、ほんに誠でござんする」「そんなら合うたり叶うたり、談合せうか」と手を取れば、「ア、嬉しや」と抱きしめて、わりなき中の妻結び、深きえにしの始なる。「あひに相生の松こそめでたかりけり」、壽祝ふ母の聲、銚子盃携へて、二人が中に押直り、「ヤレ〳〵嬉しや、願ふ所の幸々。取りあへず祝儀の盃、嫁御さいて下され」と、母が手づから酌取つて、「めでたうござる」といふより外、三々くどき詞もなく、粹な老女の取結び、世界の母の手本なり。お柳は盃取納め、「此上ながらいつまでも、母樣と存じます」「是はしたり、年寄つたわらはが身の上、面倒を頼みます」「イヱイヱわたしが」「イヤわしが」と、中よき中の挨拶に、お柳も嬉しく、「イヤ申しおふたり共、どうぞいつまでも此所に」「ヲヽ成程々々、母人の生國故、是まで常陸に住みけるが、樣子有つて權現へ、年月歩を運ぶ我々、住所にとゞまる間もなし」「サア夫なれば猶幸、三つのお山へ程近き、此邊を住家と遊ばせ。マア〳〵旅路の御勞、何かの事は寐ながらも、庵の內でお咄し」

につと會釋して、「是はしたり、其樣にお禮に及ぶ事かいな。母御樣にもお勞やら、今すや〳〵と お鼾が」「ハア扨は寐入られましたかな、嬉しや〳〵忝い。是と申すも一樹の蔭、何ぞの御縁で ござりませう」「サィナ申し、其御縁に附きまして、問ひましたい事がござんする」「ハア、夫は 何でか」「サア申し、外の事でもござんせぬ。アノナお前樣には、アノ お内儀樣がござんすか え」「ハア是は改まつたお尋でござります、が、お內儀樣はまだ持ちませぬが、夫が何とぞ」「サ アまだならば、持たしやんしたらよかろかと、いふ事でござんする」「されば〳〵、今やなど持ち ましては、たつた一人の母人へ、おのづと麁末になる道理、不孝になれば」「イエ〳〵〳〵、夫 は惡い御合點、さつきお前がおつしやるには、若し返り討にあうたらば、お袋樣を育み申す者が ないと、おつしやつたではないかいな」「ハアいか樣左樣」「サア夫ぢやによつて女房を持ち、 やゝでも一人設けたら、其やゝと、お前樣や、マア、アノナ、私が女房に成つたらば、夫こそほ んにほん〳〵の母樣と、倶に孝行盡さうもの。しんきな事や」と寄りそへば、「イヤもう先程よ りの御深切、見ず知らずの我々、お禮の申し樣もござりませぬ」「アレまだいな、何とお聞きなさ れます、お前さへ御合點なら、あなたは私が母樣も同じ事、孝行が申したい」「サア夫は近比忝 い。嬉しいは嬉しけれど、よもや今まで」「エ」「どこぞに可愛男があろ」「オヽわつけもない、男

かる歎を、立聞きまし、お柳は心汲む端香、茶碗もつ手もおもはゆく、しづ〳〵傍に立寄つて、「ナウ申しお二人樣、殘らず樣子は聞きました。扨も〳〵おいとしや。取分け旅はつらいもの、私が臥所は此庵、まばらには有りながら、暫くあれにてお休みあれ。獨住の事なれば、必遠慮は御無用ぞ」と、奥底もなき饗に、母は悦び、「是はマア樣子を聞いたと有るからは、包隱さう樣もなし。お詞にあまへまし、然らばお世話に」「ア、何のいな、一河の流谷の水、茶を入れかへて馳走せん。サア〳〵こちへ」と手を引いて、いたはり庵へ伴ひ行く。後をつく〴〵平太郎、「テモ扨も、行先に鬼はないとの世上の譬、かゝるけはしき山中にも、やさしき人もあれば有る。まだ年若な身を以て、何故の獨住、ハテしをらしや」と獨言、思ひつくまの鍋ならで、茶杓のえにし深緑、柳が本の肘枕、夢にうさをやはらしけり。春風に、糸よりかけて白露の、玉にもぬける青柳の、二世の紲にひかれくる、お柳は邊見迴して、おづ〳〵傍へ寄りながら、何といは洩る露雫。「申し〳〵旅のお方、申し〳〵」と音すれば、恟して起直り、「是は〳〵御女中樣、母の介抱お世話の段々忝し」「オ、笑止、そりやマア何の事ぢやいな」「ア、いや〳〵、きつとお禮を申さにやならぬ。旅は道連、世は情と申せども、取分けあなたにはどうした御緣か迴り合ひ、心までがゆりたやら、寐るともなしにつひとろ〳〵。無禮は御免」と手をつけば、お柳も

かな憶れは致しませぬ。倶に天を戴かざる父の敵、夫ぞと名乘つた其時には、飛立つばかりの我が胸中。おめ〳〵此場をかへせしは、御覽のごとくアノ大勢、何程手しげく働くとも、叶はぬ時は返り討。死する命は惜しからねど、某が相果てなば、申し、誰か殘つて育みませう。とあつて討たねば父への不孝、二ッの道に迷ひしが、面體苗字知る上は、重て討つべき時節もと、御寶の山へ入りながら、是非なく敵を助けしぞや。まだ其上に勿體ない、母人を狂氣にせし、御怒をしづめられ、平太郎が心の無念させつなさを、御推量下され」と、宥めつ詫びつ手を合せ、誤るも又涙なる。母も始終を聞くに付け、「尤なりさりながら、そなたに限りよもやよも、卑怯未練の心はない筈、老の一途に跡先なく、打擲したは母が誤り、麁忽で有つた。堪忍してたもこらへてたも、どこも痛みはせなんだか」「コハ冥加なき御仰、只今の御杖の跡、骸に痛みを覺えぬは、次第につもる御齢、御手の力もおのづから、お年の上の加減かと、思へば悲しうござります」「ヤア〳〵、今打擲した其杖の、身にこたへぬが悲しいとや。親がひに無體の杖、世には我子を折檻し、異見の爲の打擲を、かへつて恨むる者も有る。母が力の弱りしを、惜み悲しむ孝行が、又と類もあろかいの。宿世いかなる界境で、貧害をさする、かはいや」と、親子手に手を取りかはし、互に詫びつ詫びらるゝ、涙の雨は時ならぬ、時雨に袖やぬらすらん。か

に正氣を失うた」「ソレ〳〵さうおつしやるが則氣違ひ」「アレまだいの」「サア〳〵其氣違ひを直さん爲、夫故に本宮の、ナ、ハテ湯治に參つた。一廻りでは直らぬ筈、何事も私次第に。サアサア〳〵必何もおつしやんな」と、刀を鞘に指寄つて、「とかく本性でないから、慮外の段は御宥免、お詫び申す」と手をつけば、「ム、いか樣、目の内のきよろ付くは、氣違ひに極つた。必刃物を持たするな」と、時濟が納得に季仲も立上り、「御邊は今のを合點か、岩淵とも云ひ合せ、忠盛、ナ、たゞ打殺した其跡で、戀を叶へて首尾よう」と、目と目で知らす横車、坂口までと時澄が、「追付け吉左右仕らん」「ヲヽサ待つぞ」と季仲は、都をさして別れ行く。跡を遙に打詠め、殘り多げに立上る、母が手先もふるひ聲、「コリヤ平太郎なぜとめた。廻り逢うた夫の敵、いで追かけて」と行く先に、「マア〳〵お待ち下され」と、止める腕をふり放し、有り合ふ杖を追取りのべ、背骨龖容赦なく、打ちすゑ〳〵息をつぎ、「ヤア妾な卑怯者、年來の親の敵、我と名乘つて顯はしたは、權現樣の御手引、有りがたしと思はゞな、母より先へ飛びかゝり、一かせなりとも討つべきに、まんそくな此母まで、氣違にしたは何の爲、ようのめ〳〵と迯したなア。臆病者大腰ぬけ。憎や〳〵腹立や」と、身をふるはして無念泣。平太郎も諸共に、むせぶ涙を押拭ひ、「段々の御腹立、御怒は御尤、あらぬ事を申上げ、おとゞめ申した平太郎、いつ

常弓矢を心がくれば、足繩はよも射かねまじ。仰付けられ下されよ」と、願へば時澄せゝら笑ひ、「ハヽヽヽ。射藝鍛錬の某さへ、いかゞと思うて扣へしに、順禮道者の分際、なまちよこざいとは思へども、望なら射させてやる」と、弓と矢渡せば平太郎、おめる色なく身繕ひ、梢遙にねらひをかため、きり〳〵と引きしぼり、切つて放せばあやまたず、足繩ふつりと射切つたり。鷹は悦ぶ其風情、羽だたき打つて飛歸り、拳に翅を休むる有樣、「扨も名人、射たりや」と、暫しは鳴も止まざりける。老女は嬉しさ飛立つ思ひ、「出かしやつた〳〵。ナウ申し御らうじたか。順禮道者の分際でも、見事射おほせましたぞや」と、母が自慢の先折る時澄、「ヤア犬の蚤の嚙みあて、時の拍子で射切つたは、辻放下のほでてんがう、誠武士の弓勢には、敵を遠矢に射て落すを肝要といふはいやい。禁庭の武者所、此時澄が弓勢にて、先年横曾根次官光當といふ者、賀茂の競馬の折から、射藝の論も未熟の光當、某が放つ矢に、胸板を射止めたり」と、語る中より驚く母、我子が一腰拔放し、「夫の敵」と切り付くるを、「コレ〳〵申し」と平太郎、其手にすがり止むれば、「イヤ〳〵、放せ〳〵」と親子が爭ひ。時澄眉に皺を寄せ、「何と〳〵。扨は身が手にかけた、次官光當が所緣の者で有りしよな」と、切刃廻せば平太郎、「イヤ〳〵申し、左樣な者ではさら〳〵なし。是なるは我らが母、ふと正氣を失へば」「ア丶これ〳〵、どこ

柳を切倒し、鷹を助けるより外はなし。近邊をかけ廻り、杣を呼寄せ切崩せ」と、季仲諸共下知すれば、畏つて列卒の者、皆我先と走り行く。爰に常陸の國の片邊に、横曾根の平太郎當吉といふ者有り、先年父を不慮に討たれ、敵の有家知れざれば、熊野權現に祈誓を籠め、背には母を老の坂、孝行深き谷道の、岨を傳ひに來りしが、斯くと見るより、傍に母をおろし置き、季仲が傍近く、「道すがら聞きしに違はず、見申せば梢と云ひ、鷹の命も危ければ、心せきは御尤、併しかほどの大木、切り崩さんとの御計ひ、憚ながら殺生かと存ずる」と、いはせも立てず季仲、「ヤア何やつなれば無用の止立。生ある鷹を助けん爲、非情の柳を切取る事、殺生とは何を以て、ちよこざい千萬、退れやつ」と睨付ける。平太郎猶進み寄り、「されば、草木心なしとは申せども、花實春秋の時を違へず、陽春の德を得て、南枝花始めて開くと申す。彼の釋尊の入滅には、叢林の諸木忽枯れし其例、其外飛梅老松いづれも心ある事は、人間にかはらねば、殺生と申したに僻言は候ふまじ。御家來の内射藝鍛錬の方に仰せ、弓矢を以て足緘を射切らせ給はゞ、鳥も助かり、柳も恙なく候はん」と、事も無げにぞ申しける。「ハヽヽヽ。夫を儕に習はうや。恐らく養由比衞が業は知らず、叶はぬ事及ばぬ事。すつ込め、退れ」と嘲る内、老母聞きかね進出で、「御家來の内射人がなくば、此盼御覽のごとく賤しき土民の手業ながら、常

満足々々。軍用金用意の爲、かやうに形を略した幸、忠盛を討放し、女御を奪うて手に入れん。ちつとも氣づかひ候ふな」と、しめし合はする岨傳ひ、山踏分ける小鳥狩、鷹匠犬引列卒の者、大勢引連れ出來る、大宰帥季仲、其生付黑ければ、黑帥と異名に呼ばれ、髭の塵取る武者所、岩淵を引合せ、手を拱いて蹲まる。季仲桓々と見廻し、「和田四郎聞及ぶ早速の合體珍重々々。此度法皇が迎に登山せしが、陸路を下向といふにより、某は早歸洛の次手、小鳥を狩らせ遊覽せん爲、斯のごとく出立つたり。ヤア和田四郎、迎の船は新宮の濱に殘し置く。女御を奪うてナ合點か」「ハア仰までも候はず、法皇下向に極れば、旁油斷なりがたし。手下の者に告知らせ、所々に待伏せん。心しづかに御歸京」と、追蹤たら〲岩淵は、住家をさして立歸る。跡には季仲四方に眼を付け、見上ぐる峯の木の間より、夫としら鷺羽をのして飛來る風情、「アレ時澄、大鷹にかけさせよ」はつと拳を放すやいな、鷺を追つかけ追ひ廻し、何の苦もなく引摑み、飛歸らんとしたりしが、梢遙に亂れたる、柳が枝に足繩かゝり、羽たゝきしたるその隙に、鷺は遁れて飛去つたり。季仲驚き、「あれを見よ、某が祕藏の薄雲、早々足繩切らずんば、暫時が間に狂死。ヤア〱者ども、梢に登つて助けよ」と、いへどあせれど遙の梢、あれよ〱といふばかり、誰登らんといふ者なし。時澄いらつて、「云がひなし。所詮

這ひ屈まし、お家様の奥様のと敬はす。コリヤ命取め」としなだれかゝれば、「オヽなめ、そんな事は嫌ひでござんす」「何ぢや嫌ひぢや。ハヽヽ。わしや好ぢやといふ女はない。エヽ娘ばかり大事にかけ、蝮に見入られ、えらい目にがな、笑止な事。互に女なし夫なし、いつぞとは思うてゐた。コレ手付はかうぢや」と抱付けば、うるさながらも上手者、「夫程思うて下さんすを、何のいなとはいな舟、の二世も三世もかはらぬと、固めの盃した上で」「ヤア〳〵夫は近比忝い。ぢやが酒や肴が」「有るとも〳〵。爰に待つて居やしやんせ、つい拵へてくるはいな」と、云捨て庵へつつと入り、「いかいおせゝ、をとゝひごんせ」と戸をひつしやり。「なむ三寳取りおつた。につくい奴ぢや、と睨んで見たがこつちが悪い。此山中にたつた獨暮して居る大膽女郎、あら立てゝはいかぬ筈、爰らが戀の辛抱ぢや」と、立ちすくばつた虫腹の、てつぺい押へる折も折、「岩淵それにお居やるか」と、間近く來るは武者所時濟、鼻と鼻とを突合せ、「何事も先達て申合せし通り、法皇を擒にし、祇園女御を奪ひ取り、太宰帥季仲卿の戀を叶へる手段といふも、第一は忠盛から仕舞うて取らでは何かの邪魔、隨分油斷なき様にと、コレ季仲より賴の印、五十兩受取れよ」と手に渡せば、押戴いて、「何が扨、某も鹿島三郎義連といふ名を包み、とくより都を逐電し、顔見知らぬが幸究竟。殊に身が主人義親、季仲殿に同心のよし、

義と咎むる事なかれ。又義親が帶劒も、武士たる者の身の守。是も野心と思はれず。只此上は先非を捨て、更に忠なる心を合せ、都の政務肝要ぞや。朕がかね〴〵三熊野の、大權現を信ずれば、車を運ばん其爲に、則當社へ御暇の、法救をさゝげ通夜をなし、是より熊野へ赴けば、道の警固は忠盛時澄、洛中守護は內匠頭。必怠る事なかれ」と、仰も柔軟もやすらかに、事を納むる勅、皆々渴仰嚴に、立上つたる太宰帥、時澄諸共義親も、麥藁笠に邪を、覆ひ隱して墨衣、すまぬ詮議も方寸の、胸にからむる智仁勇、平忠盛藏人も、禮儀亂さず立茂る、神の園生に善惡の、道明らけき攝政補佐、懷け治まる君が代の、例を爰にみ輦、引わかれてぞ、大

三重 行雲の、前の世の、契りを爰に三熊野の、谷の岸根に生ひ茂る、柳が本の休床、女主の作姿、赤前垂の色にめで、後生善所は此茶屋の、端香に足を留伽羅の、かをりも細き柳腰、お柳お柳と名も高し。爰へのか〳〵出でくるは、小山の如き大の男、名は岩淵の和田四郎、山賊夜盜の鵰眼、きよろ〳〵そこら見廻して、「ナント、お柳、けふは道者も多かつたで、えらう取れたで有らうの」と、腰打ちかくれば、「イヽエイナ、なんぼ通りが繁うても、お足の溜る事ではござんせぬ」「何ぢや、旅人の足を口合に、お足とはなまの事か。天窓數ばかりで、高の知れたつまみ錢、そんなとろい事せうより、此鼻と妹脊のかたらひする氣はないか。大勢の百姓どもに

る御聲にて、「今聞く所の詞爭ひ、互に越度は有りながら、さして咎むる譯ならず、或夜是なる女御が袖、引くは矢竹の武士と、見留め置きたる其樣子、女御委しく物語れ」と、仰の内に薄紅粉の、恥ぢてもみでる緋の袴、「コレ申し忠盛殿、其夜袖つま引き給ふは、よし有る人と見受けしかば、燈の油煙檜扇に、うつし取つたるかゞり地に、楊枝の先の石摺を、思ひ付きたる歌一首、御手にあらば其由を、あかして誠武士の、身の潔白を見せ給へ」と、事を分けたる女御の仰、忠盛具に領掌有り、「斯く顯はれし上からは、何をか包み申すべき。其折給はる歌の返し、有り合ふ扇に書き認め、奥に相圖の鈴の緒に、結び付けたる心の迷ひ、直に餘人の手に入りしは、是忠盛が身の誡。幸ひ君の檜扇は、折から懷中致せり」と、指出す扇師實公、取つて捧げる車の内、法皇つくゞゝ叡覽有り、「覺束な、誰が杣山の人ぞとよ、このくれに引く主を知らずや」と、吟じ給へば太宰帥、折こそよしと進出で、持ちたる扇取り直し、「雲間より、たゞもれきぬる月なれば、おぼろけにてはいはじとぞ思ふ。サア此上は不義明白、不所存者の平忠盛、きつと糺明遊ばせよ」と、扇さし上げ奏すれば、法皇肯んじ給はずして、「いやとよさにあらず、忠盛が手ずさみは、我敷嶋の道に入る、心やさしき扇の面、神祇釋敎戀無常、皆これ歌の種なれば、沙門の身にて思ふ戀、忍ぶ戀路を詠む習ひ。忠盛戀歌を詠んだりとて、不

つこんで、似合うた様に御車の、牛の番せよ藏人」と、いはせも果てず、「シャ奇怪、其腮切つて切りさげん」と、つゝ立上る家貞を、「ヤレ早まるな」と忠盛卿、制し止めてこなたに向ひ、「イヤナウ義親、とつくと聞かれよ。某帯する此太刀は、君を守護する誠の太刀、又貴殿の打物は、上を恐れぬ眞劒なれば、苧がら荊も同然」と、嘲弄あれば怒をまし、「ヤア得手勝手聞きにくい。此義親が一腰は、武士たる者の魂なるを、苧莖なんどとさみするは、聞捨てがたし」と詰寄れば、忠盛につこと打笑ひ、「成程刃物は武士の魂、然りといへども、一天の君を守護する魂は、まづ此通り」と拔放すは、眞劒ならぬ木刀一振、追取直して詞を重ね、「此木刀を帯せしは、過ぎし節會の折からより、忠義一途の刃金を鍊ひ、物其數にはあらがねの、刃を頼まぬ我魂、よく見られよ」と指し付くる、木刀一本さしもの義親、何と返答口ごもる。太宰帥はさし心得、「イヤサ忠盛、廣言置かれい。夫程立派な魂持ち、コレ此扇」と取出し、「是に書きたる戀歌の取やり、察する所官女の内、不義働いてお樂み、スリヤ徒も軍用に立ち申すか」と押開く、扇の面は覺えの手跡、木石ならぬ忠盛が、心の外の戀歌の手詰、はつとばかりに、さしうつむき、誤り入つたる風情なり。折しも車の御玉簾、さつとかゝげて白川の法皇、祇園女御と諸共に、玉座列なる綾錦、さも貴なる粧に、諸卿も式禮厚額、笏を正して尊敬有る。法皇振た

給ひ、「見れば怪しき沙門の出立、面を改め仔細を問へ、ハレ藏人」とのたまへば、はつと答へて立ちかゝり、麥藁笠を引たくれば、内匠頭源義親なり。ヤアこはそもいかなるはからひと、攝政始め竝居る人々、呆れ果てたるばかりなり。始終呑み込む武者所、太宰帥と顏見合せ、工の臍の合はぬ同士、手持無沙汰に義親の、繩ときほどけば師實公、御聲高く、「ヤアいかに義親、法皇當社に參籠有る事、京童も能く知つたり。然るに怪しき僧形にて、神殿ちかく窺ひ寄る、心底甚いぶかし」と、問はせ給へば嘲笑ひ、「コハをこがましき御察度、某かゝる出立は、君を守護するかげの奉公。尤忠盛進藏人、宿直致すと聞きつれども、夜の間の油斷覺束なく、皇居を守る我が忠節、夫ともしらぬ不覺の忠盛、わざと繩目にかゝつたを、手柄顏なる言上は片腹いたし」と嘲つて、よわみを見せぬ減らず口。「ヤア過言なり義親、誠我君を守護する身が、何故我に眞劍の、勝負有りしは心得ず」と、のつぴきならぬ詞の先、季仲引取り、「イヤこれ忠盛、君を守護する身の要害、刃物帶せで濟むべきか。何角とおいやる貴公でも、ソレ其通り腰刀、さすが武門に產れても、手前の見えぬ猪武者」と、罵る中に進藏人、たまりかねてつゝと出で、「コハ季仲の御意とも覺えず、主人の太刀と義親の刃物を一所に論ずるは、事愚なる眼力」と、詞の釘を折返せば、脇よりぬつと武者所、「ヤアちよこざいな指出口、こま言いはずす

三十三間堂
平太郎縁起　# 祇園女御九重錦

枝葉美なる物は根莖を害ひ、世に全き事兩なしと、云ひ傳へたる語のごとく、人は萬物の靈として、忠讒賢否交起り、草木非情の產として、統て德化の風に靡き、治る時津秋津國、鳥羽の院の御宇にあたつて、萬機の糸も白川の、法皇と申し奉るは、聖德いみじき仙洞なり。此君御願の旨有つて、祇園大社に參籠ある、賽の車道、警蹕正しく御車先、時の攝政右大臣師實公、殿には太宰帥藤原朝臣季仲、押しさがつて北面の守護武者所時澄、各衣冠岌然と、供奉の官人仕丁まで、位爭ふ下馬石も、おのれと踞む威勢なり。かゝる所へ鳥居前、「奏聞、奏聞」と呼はつて、立ち出で來たるは備前守平忠盛、跡に續いて譜代の執權、進藏人家貞、大の男を高手小手、いましめ嚴しく、引居ゆれば、攝政師實いぶかり給ひ、「コハ心得ざる振廻かな、樣子いかに」と有りければ、忠盛兩袖刷ひ、「さん候、其曲者昨夜社內に忍び入り、神殿近く狙ひ寄る形相尋常ならざれば、某生捕り候」と、事もなげなる演說に、師實大きに驚き

ば、ちつとも疑儀せず、
つて、六塵の境を去つて、
は、イヤハヤ過言
出づまじきか。イデ思ひしら
眞倒に落つる
樹地獄は目の前なり。是一念の慢
る一つの玉、悽愴として虚空に入れば、是も流轉に出生す。後
皇子、白川の法皇こそ、彼蓮花王坊が再來たり。代かはり既に星移りて、娑
婆往來の物語、昔々は斯くとなん。

きし其功力、此身は非情の果を逃れ、今人界に生を受くる。又一木の柳は是女身を受けし縁によつて、互の中をさかれし恨、長く非情の果を離れず、一念仇を報ふべし。よく〳〵慎しみ登山有れ。我人界に生ずるも、法味を受けし恩有れば、告げしらしむ」といふ聲ばかり、形は消えて心中の、魂と顯れ大空に飛去りしこそふしぎなれ。此魂則中有に留つて、常陸の國の片邊に、横曾根の平太郎と生るとかや。闇然として王坊は、奇異の思ひをなしゐたる。誠や女身を受けたりし、柳の見入強かりけん、今の奇特を見るからに、王坊忽慢心起つて、「扨々ふしぎや。正しくも非情の椰の木人と成り、斯まで詞をかはす事、法の力と云ひながら、多年の功力に寄らずんば、いかでかかゝる奇瑞を見ん。凡山修行の人幾萬人か有るべきが、九十九度まで恙なく、難行せしは我ばかり。適身に在つて譽や」と、獨笑して居たりける。時に山鳴り震動して、其さま異形の客僧、忽然と顯れ出で、「ヤア穢はしや王坊、非情の精を化度しつるを、我行徳と思ふ慢心、いまはしや勿體なや。さばかり垢穢たる悪念にて、此山上は叶ふまじ、急いで下山致すべし」と、はつたと睨む眼

發端

座本豐竹越前少掾

遙々爰に紀の路なる〱、牟婁の郡に著きにけり。抑〱是は熊野權現に、三山百度の大願を立てし、蓮花王坊と申す沙門にて候。我釋門に入りてより以來、多年三所の妙驗を仰いで、此度既に百度の大願、九十九度に相滿てり。誠に妙なる御山の修行、今一度にして願望を滿てん事、行者たる身の悅びと、樂しみ登る山竝に、かゝるや雲の峯つゞき、岨を傳へば跡よりも、よばふを聞けば谷川の、流につれて遠近に、音する方を眺むれば、ふしぎや川邊に立ちならびし、梛の一木の動くと見えしが、忽人體の形を顯はし、「いかにやいかにや蓮花王坊。我こそ此山谷に生出でし、梛と柳の精靈なり。非情の類なりといへども、天成夫婦婚姻の契を籠めて枝を交へ、自然と連理のかたらひをなす。然るに御身修行の始、此谷川を行場と定め、折から梛と柳の連理を見付け、是夫婦交合の有樣、行場の穢と枝を切る。夫より夫婦二木と成り、連理の契りは空しくなる。されども不斷有りがたき、御法を聞

苅萱桑門筑紫轢　終

けんとし給ふ後より、「ヤレ待ち給へ我君」と、聲を懸けて監物太郎、大内之助に大綱懸け、息をはかりに馳來り、「勅命請けて一戰に討勝ち、生捕つて參つたり。如何計らひ申さん」と、云ふより與次が踊出で、何かはなし急いで首を、既にかうよと見えける處へ、「暫しく」と新洞左衛門、飛鳥の如く飛來つて、「謀反人とは云ひながら、未だ旗を揚げたにあらず、一家中の歎きを思召し、一命助け給はれ」と、平伏すれば苅萱道心、「助けるとも殺すとも、私には計らひ難し。都へ行きて奏聞遂げ、命乞して得さすべし。夫を我子石童が、筑紫へ送る 贐」と、仰に依つて引立つる、大惡無道の强敵も、我神國の御注連繩、治る御代のためしとて、惡人亡び國安全、民も豐に萬々歲、千代を祝ひし筆の跡、長くも語り傳へたり。

可愛を引替へて、死骸にたゞかれば、なう悲しやと駈けよつて、彼方を追へば此方から、たかりかゝればせん方も、小石を拾ひ打つ礫、そこよこゝよと駈廻り、體も息も絶える程、父を呼び烏を追ひ、追廻れども小娘の、泣く音もつらき折柄に、石童丸は徒歩跣、かくと見るより走りつき、群る鴉を切拂ひ、あへなき死骸を搖起し、「ナウ情ない母樣、かくなり給ふ事ならば、何しにお側を離るべき。父上には得逢はず、お前に別れて私は、何とならうと思し召す。これ結構なお藥を、御出家樣に貰ひました。是を上つて健になり、たつた一言石童かと、物いうてたべ起きてたべ」と、藥取出し嚙みこなし、かひなき母に吹込んで、「ナウ母樣〳〵」と、起し立て抱擁へ、前後不覺に泣き給ふ。斯る哀を遠目から、見るより思はず苅萱道心、走寄りしが是までさへ、立てし誓を今更に、無下にはせじと目を押拭ひ、「コレ〳〵少人、悲しきは理ながら、いたく歎くは佛の迷ひ。いで〳〵廻向し參らせん」と、口に唱名心には、我を慕うて遙々と、海山越えて來りしに、妻子かとも得いはずに、餘所に扱ふ我心、草葉の蔭からさぞ怨まん、赦してくれよ我妻と、念誦に交る胸の中、止めかねさせ給ひけり。然るところへ與次夫婦駈戻り、「ヤア御臺樣は御最後か」と、驚き騷げば女房が、苅萱を一目見て、「なうお久しや繁氏樣」と、云ふに石童、「何、此お方が父樣か。懷しや戀しや」と、縋り給へば衣の袖、打拂ひ〳〵、辿

先を、思ひ廻して猶豫せしが、「いかさま女の手業に追手を防がせ、見捨てて置くも心もと無し、仰に任せ引返し申すべし。コリャ〳〵かどた、大事の〳〵御臺樣ぢやぞ、お傍を離れず御介抱申せ。お腰でも撫らしてござりませ、つい往て參ろ」と口輕く、飛ぶが如くに引返す。御臺は重る病の床、涙ながらに「ナウかどた、向ふの道より石童が、歸る姿は見えざるか。戀しの我子や、懐しの我夫や」と、彼方を見ては打倒れ、此方を見ては伏轉び、最期も近き御有樣。かどたは悲しく、「コレ御臺樣、父樣や母樣の歸らしやるまで、どうぞまあ、死なずに居て下さりませ」と、あどなき詞かいしよなき、娘の肩に介抱せられ、「自も石童が、便り聞くまで〳〵と、氣の張弓も弦切れて、死ぬる今はになりしぞや。與次夫婦が歸られなば、石童事をくれ〲も、賴んで死んだと云うてたべ。せめて最期に夫や子の、顔見る事が叶はずは、聲なと聞いて死にたい」と、御山の方を打眺め、「眺めても口說いても、逢はれぬ事か」としやくり上げ、泣く音もつらや息切の、露の命の果敢なくも、消えて跡無くなり給ふ。かどたは慌て「ナウこれ申し」申しと云へど其かひも、なくも泣かれず立つたり居たり、母樣呼びに走らうか。父樣はなぜ遲いと、坂を馳下り聲を上げ、「父樣なう、母樣なう、御臺樣が死なしやつた。コレなう戻つて下され」と、聲をはかりの叫び泣、ことわりせめて哀なり。頃は臘月雪空に、餌ばみ乏しき山鴉、可愛

と、衣の袖を打拂ひ〳〵、「ハレ小ざかしき少人かな。哀を共に見捨てねば、我を父よと縋る事、穢らはしや忌はしや。おことが尋ぬる繁氏入道、此山におはせしかども、諸國修行に出で給ひ、今は行方も知れざるぞ。急ぎ下山し母親の、病氣の介抱召されよ」と、つれなく云へど何處やらに、殘る詞のいやまさり、「なに父上は行方も知れず、此お山におはせぬとや。ナウ情なや淺ましや。我はともあれ母樣が、焦れ死をなされうかと、夫ばつかりが悲しうて、跡へ戻るも戻られず、似た人にても在るならば、逢はせてたべ」とかきくどく、心ぞ思ひ遣られたり。倶に張裂く思ひをば、押隱して懷より、包みし藥取出し、「コレ、是は師の坊一萬座の護摩を焚き、調合ありし妙藥、母御に用ひ看病あれ。來た道筋は難所にて、草臥足では叶ふまじ。此方へ行けば花坂とて、平地も同じ事、馬もあり駕籠もあり。いざ〳〵立つて行かれよ」と、心強くも引立てられ、石童丸は泣く〳〵も、藥とあるを力にて、押戴き〳〵、是非もなみだの泣別れ、迷ひ道をばそこゝと、敎へながらも苅萱は、心もとなさ思はずも、引かるゝ緣の友綱や、見えつ隱れつ三重慕ひ行く。息をはかりに玉屋の與次、御臺所を負ひ奉り、娘を引連れ、女人堂まで來りしが、跡先眺め片陰におろし參らせ、「お心持は如何ぞ」と、巾上ぐれば御臺所、苦き體を押隱し、「自ら事は思はずとも、お埒を救うてたもるのが、我爲の良藥」と、のたまふ詞に跡

尋ぬるは自が父上、二つの年別れし故、お顏も見知らず。元は筑紫松浦黨、加藤左衛門繁氏樣」と、いふより扨は我子かと、取縋らんとしたりしが、待て暫し、佛前にて誓を立たる恩愛妹脊、爰ぞと思ひ餘所〳〵しく、「ムウ年も行かぬに遙々と、慕ひ來る志、誠の父が聞かれなば、嘸嬉しくも懷しく、飛びつく程に覺されんさりながら、此山の掟にて、たとへ廻り逢うたりとて、名のり合ふ事かつふつ叶はず。早々國へ歸り、母御を大事にかしづくが、又一つの孝行」と、いひ敎ふれば、「イヤナウ我國は、大內といふ者攻惱し、母樣諸共此山の麓まで參りしが、悲しき事は母樣が、道の疲に煩うて、命の內に只一目、父に逢せてくれよとのお歎き。情と思うて御在所、御存じならば敎へて」と、目に持つ涙はら〳〵と、押へかねたる有樣に、我こそと名乘つて聞かそか、いや勿體ない師の御坊の戒め。と云うて遙々來たものを、知らず顏見ぬ顏が、どうなるものぞ不便やと、胸に堰きくる血の涙、こたへかねて忍はずも、わつとばかりに泣給ふ。石童丸は目賢く、「左程に歎き給ふのは、若し父上ではあらざるや、早く名乘つて給はれ」と、縋り歎かせ給ふにぞ、「亂れ心の折節に、後の方の岩蔭より、師の阿闍梨の聲として、「ヤア〳〵苅萱、棄恩入無爲〳〵の誓を忘れ給ふな」と、制せられて苅萱は、起上つて振返り、「ハア、さうぢや、迷ふたり誤つたり。今此三界悉是吾子、孰れを我子と思ふべき。師の手前も面目なし」

手に縦横微塵、火花を散して、三重戦ひけり。女なれども忠義の一念、飛鳥の如く駈廻り、なぐり立たる太刀先に、「コハ叶はじ」と雑人ども、はふ〳〵迯げて失せにけり。「ヤレ此隙が好い引時、長居は恐れ」と迯ぐるも追はず、御臺所と夫の跡、慕ひてこそは、三重行く空の、雲間に近き八葉の、峯に紫雲のたなびきし、高野山と聞えしは、三面に山連り、源一水にして萬水東に流れ、大師二犬に道を習ひ、開き始めし靈地とかや。いたはしや石童丸、斯る難所をたど〳〵と、心も空に浮草の、根ざしの父は顔知らず、名のみ知るべに尋行く、袖の涙ぞ哀なる。思ひ高野の谷川や、左手は岩間、右手はあまのの山颪、峯に煙の一結び、見上げて通る不動坂、踏みも及ばぬ丸木橋、名残なさけも横吹の、嵐に木の葉散りはてて、心細道つく杖は、おりつ上りつ行く先を、問へどいはねの松蔭に、暫し休らひ給ひける。百年の榮燿は風の前の燈火、悟れば吾も佛なり。煩悩菩提と諦めて、加藤左衛門の尉繁氏入道、苅萱道心と名を改め、佛法修行の山坂を、辿るも後世の便りかや。石童親子の機縁にや、思はず傍に走寄り、「申し御出家様、此御山に今道心のましまさば、教へてたべ」とありければ、「コハ興がる少人かな。九百九十の寺々、毎日入り來る初發心、昨日剃つたも今道心、一昨日剃つたも今道心。左様に尋ね給ひては知れ難し、俗の時の名をいうて尋ねられよ」と身の上の、事とも知らず仰ある。「さればとよ、

び給へば溜息つき、「不思議に命助かりしが御運の末、折角親子が心を碎きし、お身代りも贋者と、新洞左衛門にいひさがされ、いとほしや駒形一學殿、直に其場で御切腹。我々も危き所を、やう〱切拔け迯げたれども、追手の來るは知れた事、早う立退く御思案」と、いふに驚く與次が面色、「出來した〱。併し此の如く御大病、たやすく遁れ迯げ難し。若君ははや御山へ。我も娘を引連れて、御臺樣を肩に懸け、女人堂に預け置き、立歸つて防ぐべし。其間を汝踏止り、暫く追手を支へよ」と、さしたる一腰投出せば、「ヲヽそれ〱好い合點、爰は妾に御任せ。此所より一寸も、追來る敵を山へは登さぬ。氣遣ひあるな」と男勝り、脇差取つてわき挾めば、「よくせよ、ぬかるな女房」と、御臺所を負ひ參らせ、娘が手を引きいつさんに、山深くこそ急ぎける。「サア彼方がたさへ落したら、心に懸る事無し」と、獨言する折こそあれ、麓より來る大勢は、大内之助が雜人ばら、おつ取卷いて聲々に、「ヤア贋御臺の喰はせ者、迯ぐるとて迯がさうか。誠の御臺石童は何所へ落した、有樣にほざき出せ。僞ると肝先へ、太刀魚がお見舞」と、犇き騷げどちつとも臆せず、「ムヽ、親子御の行方が聞きたいか。夫は天竺の四日市、太儀ながら上つてござれ」「テモ咽のえらい女め。叩き殺せ」と拔連れ〱、切つて蒐ればまつかせと、同じく此方も拔放し、「どれ御自慢の太刀魚を、箔摺剝す繩だら料理、切味を賞翫」と、多勢を相

お供しや。殿様の顏見るならば、耆婆扁鵲が藥にも、百倍增したる藥となり、本復するに疑無し。お顏は知らずとお名を名乘り、加藤左衞門繁氏の、今道心は何所にと、出家に逢はゞ尋ねよや。湯水を取つての介抱より、是に勝したる孝行無し」と、息もたよわき御仰、稚心に聞分けて、「父樣のお顏を見て、御本復さへある事なら、成程私が先へ參り、お在所を尋ねましよ。後からそろ〳〵與次を伴ひ、女人堂までお出であれ」と、しを〳〵濡るゝ笠と杖、取上げて立給ふを、顏つく〴〵と打まもり、「そんなら其方はもう行きやるか。西も東も知らぬ身を、手放して遣る氣遣ひさ、跡で案じは如何ならん。父御に廻り逢うたなら、隨分早う便りをしや。暫しの別れと云ひながら、人の命は電光石火、打つ石の火より果敢なき喩。母が顏もよう見て置きや、其方の顏も眺めん」と、物が知らせし暇乞。傍で聞く身の胸苦しく、與次は詞もなく淚、目をしばたゝき彼方向く。若君何の頑是も無く、「然らば母樣後程」と、立出給ふ。「コレ山道を外見して躓くな、怪我ばしすな」と氣を付けて、見交し〳〵別れたる、是が此世の名殘とは、後にぞ思ひ知られたり。與次は御跡見送りて、淚を拭ひ、「サア是から御臺樣、坂の間を負ひ參らせん。いざさせ給へ」といふ所へ、女房お埒娘のかどた、息をはかりに馳來るを、見るより恟り、「ヤア女房か。ナウ娘のかどたか」と、御臺も倶に御驚き、浮木の龜の對面と、悦

はしや母君は、ならはぬ旅の疲にて、御心地例ならず、歩み難みて休らひ給ひ、「ナウ與次殿、誠や人のならひにて、榮え衰へ浮き沈み、ありとは豫て知りながら、餘所の事よと思ひしに、今身の上に思ひ知る。是につけてもいとほしきは、內寶お垺と娘のかどた、我々が身に代り、敵の中に憂き苦勞、定めて憂目に逢ふやらん」と、案じ過しの御涙、倶に悄るゝ詞を嗜み、「ハア、譯もなき御歎き、彼等が御身に代りしは、お主大事と一圖の忠義。さはいへ駒形一學は、情を知つたる侍、命には氣遣ひ無し。かやうな小事に御心を、痛め給ふが御病氣の障り、必ずお案じなさるゝな」と、口にはいへど心には、胸まで上す涙を押へ、「申し若君樣、親子御一緒にお供して尋迴り、殿樣に逢はせませんと存ぜしに、此御病氣では道捗も參らず、殊に女人禁制の御山、寺中へは行かれぬ御身、お前ばかり先へ駈拔け、繁氏卿を尋ね給へ。私はそろ〳〵と、御臺樣の御供し、女人堂にて待ち申さん。はや疾く〳〵」と勸むれば、今日ぞ戀しき父上に、尋逢ふよと嬉しくて、御心は急かるれど、「やう〳〵二歲の時別れ、夫から逢ひ見ぬ父樣なれば、お顏さへ知らぬもの、何を便りに尋ね逢はん。殊には母樣の御病氣、見捨てて一人私はいや、三人ながら一緒に」と、離れがたなき御風情。御臺所は目を開き、「ヲヽ道理〳〵、さりながら、其方が傍を離れぬとて、此病がなほるにあらず、片時も早く父御を尋ね、女人堂まで

と、表へ答へる慥の訴へ。與次は夢かと念に念、「其詞に相違無いか、跡で違變めされな」と、打つたる釘の詞を返し、「ヤアいらざる馬鹿念、駒形一學春秀が受取つたに相違無い。よく繩懸けて渡したよ、當座の褒美に一腰くれる」と、指添拔いて提燈の、明りへ出したは繁氏の、狐川にて情の一腰、「ヤこりや我夫のお差替」「扨は拙者と一時に、御恩を受けた侍か」と、云ふ聲高いを「シイしつ」と、押へて消して引立てる、昔忘れぬ武夫や、見送る夫も妻子をば、恩に替へたる涙の雫、身にふりかゝる御臺の歎き、餘處に見捨てるお埼は忠義、かどたは實の父にまで、後れの髮の男髷、今日は石童明日よりは、賽の川原の石の塔、十づつ十は百歳と、祝ひ飾りし命をば、捨てに行く身を捨てに遣る、思ひは同じ思ひぞと、泣いては送り送られて、屠所の歩と歩みかね、行きては戻り戻りては、泣く音もつらき明烏、かはい〳〵の聲名殘、引かれてこそは別れ行く。

第五

陰德あれば陽報あり、賢き教のあたり。御臺所石童丸、玉屋の與次が介抱にて、繁氏卿の御在所、尋求める高野山、小石交りの細道を、爪先上りたど〳〵と、辿り給ふぞ切なけれ。御痛

馬上に齒がみをなし、「所の代官駒形一學、あれ蹴散らせ」と下知すれば、「承る」と馳來る侍、早繩手繰つて大聲上げ、「ヤアヽヽ與次、いか程に働くとも、かく十重廿重に取巻いては叶はぬ叶はぬ。違議に及ぶと飛道具、如何にヽヽ」と罵つたり。流石の與次も飛道具に、心置かれし折からに、一間の内より、「コレナウ御亭主、迚も遁れぬ我々、急ぎ繩懸け身の難儀、遁れてたも」と障子を明け、出づるを見れば妻のお埒、娘かどたを石童に、仕立てて出づる主思ひ。夫と覺れど恩愛に、心おくれて手をつかへ、「ホヲ、其御覺悟はさる事なれども、一旦隱まひし某が、むざヽヽ渡す無念さを、御推量下されよ」と、夫婦別れの涙をば、目に浮ぶればお埒も悄れ、「自は覺悟の前、只いとほしきは此石童、あらぬ形の男髪、不便にござる」と共泣に、泣きしをれしが、與次は突立ち、「これヽヽ役人、御尋の兩人、繩懸けてお渡し申す、受取られよ」と云ふ聲に、駒形一學内に入り、透間あらせぬ氣配り目配り、是非なく繩を懸ける内、御臺は馳出で「ナウ悲しや、妾こそ」と、云ふ口押へて立身で隱し、親子を引立て引渡す。表に控へし大内は大聲、「コリャヽヽ一學、渡し置いたる繪圖あるべし、引合せて受取れ」と、遁れがたなき鶴の一聲、鷺を烏と爭うても、爭ひにくき姿繪を、明りへ出して引擴げ、見るも一生懸命、遁れぬ處と與次は身がまへ。つくヾヽ眺めて駒形一學、「繁氏が御臺忰、繪圖の通りに違ひ無し」

は、前の親を慕ふかと、思はれまいと思ふから、其氣な娘を呼出して、泣くも泣かれぬ苦をさそより、矢張小蔭で存分に、泣かしてやつて下され」と、子に擬へたる我涙、保ちかねて思はずも、わつとばかりに泣叫ぶ。御臺も倶に御涙、「惚れる身よりも惚れられる、此身の辛さ悲しさを、推量しや」としやくり上げ、歎かせ給ふ御聲が、冥途の形見、南無阿彌陀、「南無阿彌陀佛」と指添を、拔くが此世の暇乞、消えて果敢なくなりにける。ハットばかりに人々の、縋り泣入る折こそあれ、遙に聞ゆる人馬の聲。すは事こそと與次は突立ち、「コリャ〳〵女房、泣いて居る處で無し。察する所討手の輩と覺えたり。思ふ存分働いて、透間を見てお供せん。まづ夫までは一間へ入れ、聲すな音すな油斷すな。往け〳〵急げ」と追ひやり〳〵、七の圖まで尻引からげ、好む所のだんびらを、拔翳して待つ處へ、馬上に跨る大內義弘、松明提燈星の如く、手の者引具しどつと斷寄せ、「ヤア〳〵此家に繁氏が御臺悴石童、隱まひ置いたる條遠見の注進、急いで繩懸け渡せばよし、違議に及ぶとあばら屋を、乘潰してくれんず」と、くわつと睨めたる兩眼は、海に入日の射す如く、あたり眩く見えにけり。內には故と音もせず。「すは風くらつて迯げたるか、踏込めやつ」と呼はる聲、「捕つた〳〵」と捕手の役人、我劣らじと込み入るを、得たりと與次は眞向梨割車斬、さしもの大勢堪り得ず、一引さつと引いたりける。大內は

てて國を出で、心を心で嗜めども、情なや宵の夢、わりなくも御臺へ戀慕、聞入れ無きを手に懸けて、殺さうとまでしたりしが、慈尊院の時知らす、鐘の響に夢覺めて、いつにない御臺には、我姿を見て御恐れ。南無三寶、夢とはいへど通ぜしか、はや切腹とは思へども、我亡くなりては御兩所を、守奉る人無きと、さあらぬ體にて是まで來り、今與次殿の心底見込み、頼み置いて相果てる。申し若君樣、是なる與次殿を力となされ、父樣のお行方尋ね、目出たう御對面遊ばせや。何の因果で此樣に、不所存には生れしぞ」と、我と我身の悔泣、見る目もともに哀れなり。與次は故と涙を隱し、「夢は五臟の煩ひ、何故本心を改め御先途を見居けぬ。切腹とは腑甲斐なし」と、恥ぢしむれば、「イヤナウ、本心を改めても、夢となぐるになぐられぬ、仔細は腕に塗つたしるし、心の迷で守宮の血が、これ此如く消えたるは、罰か報か天命か。兄監物へ云譯の、種を失ひ是非なくも、かくは計ひ申せしぞや。よししるしが落ちぬとて、最早御臺は虎の子を、供に伴るゝと思し召し、片時も心安かるまじ。せめての冥加に御主人の、お心安めにする切腹、是まで盡せし忠節を、無にして死ぬる跡の儀を、頼む〳〵」と云ふ聲も、弱り果てたる息づかひ、與次は哀れの袂を絞り、「せめて最期の思ひ出に、娘かどたに逢はさん」と、呼びに立つを女房が、涙ながらに引留め、「定めて樣子を聞いても居ませう、駈出る筈が駈出ぬ

のお刀、コリヤどうして其方が、所持したる仔細は」と、不思議立つれば、「ヲ、御不審は尤、もと某は播州の浪人、尾羽打枯し都方へ、奉公かせぎに登る折柄、八幡山崎の間、狐川の渡しにて、さる浪人と口論仕出し、刺違へんと致せし處、其場へ繁氏卿通り合はされ、雙方一分立てよと、御差替一腰づつ下し置かれ、命助るのみか、外聞の腰を塞ぎ、夫より武士奉公の有付無く、此國の土民となつては候へども、御恩は忘れぬ昔形氣、命の親の繁氏卿、其御臺若君と聞き、何と手向ひ申すべき。お疑を晴され、御譜代同然に思し召し下されよ」と、餘儀なくいふに御臺は嬉しく、「實に其事はお物語ありし事。扨は其時お刀を貰うたは其方よの。遣つたる人は御遁世、御跡慕ふ我々が、力となつて今一度、繁氏樣に逢はせてたも。頼少き世の中や」と、喞ち給へば、「御氣遣ひ遊ばすな、天地の間に御座あるなら、尋ね逢はせ參らせん」と、奥底も無き心底を、見込んで猶も女之助、「ホヽヽ、お頼もしき御一言、迚もの事に御誓言で承りたし、其上頼む事あり」と、云ふに居直り金打し、「諸天善神はおろか、佛意を懸け二言無し」と、聞いて安堵の胸を据ゑ、何思ひけんどつかと坐し、指添抜いて我とわが、腹にぐつと突立てる。人人是は狂氣かと、驚き騒げば、「ア、騒ぎ給ふな方々。思ひ懸なき最期故、御驚きは御尤。何を隱さう某は、生れ付いて好色深く、兄監物太郎が疑を晴さん爲、守宮の血を腕に塗り、誓を立

二人はお尋者。則ち此國の領主、筑紫より大内義弘到著あつて、此繪圖に合ひし者當國へ來りし由、搦取つて渡せとの仰、證據は爰に」と懐より、出して見せたは紛も無き、御臺所と若君の、お姿書きし寫繪に、人々ハット胸痞へ、膽を冷するばかりなり。お埼は常から賴もしき、夫の心を能く見抜き、「コレ其繪のお二人、何國如何なる御方と、知つて此方は捕へるのか」「イヤそりや知らぬ。人違ひでも大事なし、捕へて來いとの仰、身にかゝらねば念押して、問ふ間もなく歸りがけ、慈尊院で出くはし、見遁しならぬ庄屋の一言、其意地持つて此場の出逢、構ふな、退けく」、そこ放せ」と刎退けるを、「イヽヤ放さぬ。かうなるからは何を隱さう、是なるお侍は自が前の夫桑原女之助、お供しられた二方は、其繪に違はず筑紫大名、加藤左衛門繁氏樣の御臺若君、私が以前の お主ぢや」と、聞くより與次はハット飛退き、「左樣と存ぜず無禮の段、眞平御免」ときをりの平伏、心ゆるさぬ女之助反うちかけ、「ヤア俄の三拜食はぬく」。我等もよ」と、勢ひかゝれば、「ヤレはやまり給ふな、其言譯見する物あり、暫らく」と押宥め、簞笥より刀一腰取出し、目通りに据ゑ、「孰もお見知りある刀、立寄つて見給へ」と、云ふに人々氣を付けて、見れば目貫は菊流し、牡丹に獅子の國鍔は、擬ひもなき夫の差替。「實にく繁氏卿

昔は家來筋などと、古手を以て油斷させ、大内が方へ注進する下心か卑怯者、立上つて勝負せ

報謝」と、何心なく圍爐裏の端、燃える明りで顏見合せ、「ヤア、わりや最前の侍か」と、俄に變る與次がきつさう。女之助も拔放し、「さういふ汝は件の盜賊、出合た所か百年め」と切かゝればぬき合せ、爰を最後と切合ふ有樣、お埘は夢か幻にも、樣子は知らず、「ヤレ待つて、暫し」といへど聞入れず、詮方盡きて茶の水を、引すくうて燃える火に、ざんぶと懸くればぱつたりと、消えて闇の夜二人はハツと、猶豫しながら聲懸けあひ、「汝盜賊そこ引くな」「侍迯げな」と鵜の目鷹の目、止めるお埘も暗がりで、すべき樣なき折柄に、又も圍爐裏がくわつと燃え、「其處に居るか」と互の切先、南無三寶と杓の水、ぱつと懸くればふつと消え、目先手先も知ればこそ。「盜賊め」「侍め」と、聲を力に滅多討、燃えると切合ひ消えると探り、千變萬化の戰に、暫し時をぞ　三重移しける。隙取る内に圍爐裡の明り、七轉八倒お埘は慌て、一間の障子引外し、切合ふ中へ打ちかぶせ、身を捨ておもりと乘懸れば、互の太刀先押へられ、思はずどつかと居すわつて、ほつと息つくばかりなり。音に驚き御臺石童、手燭携へ駈出で給へば、お埘はせきあげ、「これ待つてたべお二人、別けて我夫與次殿、此方の事は所でも、人も恐るゝ男一匹、盜賊よ追剝よと、名を立てられて切先勝負、若しもの事があつた時、妻子までの面汚し、何故さもしい名は取り給ふ。樣子を聞かねば爰放さぬ、サア仔細は」とせく詞を、「尤ぢや女ども、全く某盜みはせず、其侍が同道の、足弱

れあひ、泊めてくれとあつた故、泊めましたとはどの口で、どう云はれうぞ無遠慮人。まだ其元は昔の道樂なほらぬの。お二方は此お垮が、命に懸けて預つた、氣遣ひせずと宿無くば、軒の下へも一宿あれ。あたじだらくな」と引立てて、有無を云はせず門の戸を、明けて表へ突出し、理窟で締める鎹は、押すに押されぬ心の錠、稚なじみの合鍵も、工合ちがうて海老の腰、屈めながらに軒の下、暫しと宿るばかりなり。程なく歸る玉屋與次、道のどまぐれ夜を更し、闇を照する禿頭、門の柱でこつょりと、あいたしこょぢやと打叩く。お垮は待ちかね走寄り、明けるや否や、「テモけうとい、今まで何處に何して」と、お定りなる悋氣口、「措けく\、今夜はお上の御用筋、夜が更けてもけんぺい、しやつともいふな」と圍爐裏の火を、さし燻べるうち表より、女之助が聲として、「一旦の理に逼り、軒に一宿致せども、寒風烈しく身も冷渡る。御亭主も御歸りと見受けたり、一夜の宿」と乞ひにける。與次は聞耳、「ありや何ぢや、何云ふのぢや」「イヤあれは最前旅人が盜賊に出逢ひ、難儀に及ぶとありし故、引くに引かれず、足弱二人は泊めたれども、お前が留守ゆゑ男御は遠慮して、外に寐さして置きました」と、語れば、「ハアテそれは大事ない事。これ旅の人、外に寐てなら寒からう、此方這入られい。圍爐裏にあたつて寐られい」と、だうらく詞も情はうれしく、門の戸明けて小腰を屈め、「御免なれ。とてもの事、少し焚火の御

「其方と離別せし折柄、かどたといひし水兒を添へしが、見事育て上げたるか、無事で居るか」と尋の詞、歯に衣被せず、「コレいはれぬ昔をお尋ね、誤り無き身に暇の狀、是非なく故鄕へ歸り、年寄つた母樣乳呑子を抱へ、どうして暮す當も無く、途方に暮れし折から、此家の主も以前は武士、尾羽打ちからした互の落目、俱過にするならば、母樣ぐるめ養うてやろとあり、二度の夫と思へども、親の爲子の爲に、此家へ嫁つた其年に、母樣も見送り、娘も成人したけれど、何の此方に逢はさうぞ、いひ出しても下さるな」と、けんと云はれて女之助、むつとはすれど宿を借る、無心に詞も無かりける。若君は大人しく、「只何事も堪忍し、今夜は爰に泊めてたも」と、涙含んだる御仰、「こは勿體なきお詞、見苦しけれど一間もあり、いざあれへ往てお休み」と、申上ぐれば御臺所、「主が戻り給ふなら、好きに賴む」と打悄れ、石童君の御手を執り、しをしを立つて入り給ふ。女之助は著きほ無く、俱に奥へと立上るを、お埼はやがて押留め、「御兩所はお主筋、好んでもお宿を申す、其元には宿叶はず、何處へなりと お越しあれ」と、さし留められて重る强腹、「ヤ無禮過ぎた女め。御大切なる二方を預け、某何處へ行くべきぞ。お主ばかりの好みを思ひ、夫の好みは思はぬか」と、嵩にかゝれば、「サア其好みぢやに依つて猶ならぬ」「ソリヤなぜに」「さればいの、今自には玉屋の奥次とて夫あり、其留守の間へ以前のつ

て寢所しや、枕はおれが直すぞ」と、「二つ竝びや」を云ひかねて、娘賴まぬ心意氣、いらぬ遠慮と見えにける。此家を力に女之助、御臺若君うしろに圍ひ、息をはかりに駈來り、門の戸忙しく打敲く。お埒は驚き駈出でしが、待てよ、夫の足音ならずと、「何者なれば夜に入つて、けたゝましや」と咎むれば、「いや苦しからず。我々は旅の者、足弱二人召し連れ、盜賊に出逢ひ、やう／＼切拔け、是まで參りしなり。三人の命助けると思し召し、御隱まひ下されなば、世に有難く候はん」と、餘儀なく云ふにいやとも云はれず、「主の夫は留守なれども、さほどの難儀見捨てるもお笑止、暫し此方へ御入あれ」と、門の戸明くれば三人とも、「命の御恩」と追從し、内へ通れば女房が、心を付けて表を締め、「イザ先あれへ」と圍爐裏の影、互に見合す顏と顏、「ヤお前は、繁氏卿の御臺所、牧の御方樣ではないか」『さういふ其方はお埒ぢやないか」「なに以前の女房か」と、女之助も恟りの、「でも」と「さても」が一時に、手を打ち倶に呆れしが、「さるにても此お姿、何故是まで遙々と、お越ありや」と尋ねれば、御臺は涙を浮めながら、「つれあひ繁氏卿御遁世遊ばし、國は大内に惱され、命危く迯げのび、我夫高野にましますと、人の噂を力にて、此處まで來りし」と、語り給へば倶に目をすり、「いかい御苦勞遊ばすの。若君樣の御成人、何か思へば一昔、變る浮世の有樣」と、憂きを涙に語り合ふ。女之助あたりを見、

く、拔合せて支へたり。「扨はおのは盜賊の張本か、一人も餘さじ」と、女之助は根限り、火水になつて切結ぶ。死物狂ひにさしもの大勢、與次は元より構はぬ氣の、人が迯ぐれば共迯に、迯げて跡なくなりにけり。長追せば惡しかりなんと、刀を納めて二人を呼出し、「かく行先を盜賊に圍まれては叶ひ難し。此間に御供して、何處へなりとも立忍び、夜明けてお山へ登らん」と、いさめ申せば尤と、御臺若君甲斐〴〵しく、帶引きしめて草鞋の紐、結ぶ間遲しと三人は、跡をも見ずして　三重　雲隱れ、星の逢ふ夜と結合ふ、かぶろの宿の玉屋の與次、內には水が月影の、させども宿へ歸らぬは、心もとなの日暮過、妻のお埒は埒明の、夜なべを捨てて圍爐裏焚く、自由自在なわが世帶、鑵子に沸るひと煎じ、女夫の中のこつちりの、出花も妹脊の端香かや。娘かどたは門の戸を、閉すと居眠る宵惑ひ、「コリヤそこなお船頭、モウ船を漕出すか、ほんにやれ〳〵嗜めよ。つれあひ與次殿は、終にお代官の顏も見ぬ人、それに今日呼びに來て今に戻られず、おれよりマア其方が案じる筈。なぜといや、アノ與次殿とはなさぬ親子、今にでも戻られ、眠たさうな顏見せて、心の義理が立つものか、寐所でもして置け」と、呵るも親身聞くもおろ〳〵、「母樣こらへて下さんせ、昨夜の大師講の持越で、とろ〳〵が來ました。デエ寢所をして置こ」と、小廻りすれば、「オ、それ〳〵、もう初夜過、追付けであらう。寢間掃い

く玉屋の與次、朱鞘の大だら落し差、立ちはだかつて、「コレ爰な庄屋殿、拔作でも身内が慾ちやの。近年は代官に好い人がわせた故、所も騷がず物靜で好かつたに、何やら又いひ出して、代官所へ呼付け廻り、ちつと許りの褒美であろが、澤山さうに三人まで、縛つて來いとは旨い殿樣。欺されておぬく殿が、縛つたら褒美を取る、ハヽハヽ、何處へ褒美。わごりよの樣な旨い和郎に、縛られる人間があるものかいの。役に立たぬ口叩かずと、サア早く去にませう」と、先に立つを、「コリヤ待て玉屋。われが今の言分を、此智慧者が勘辨するに、褒美が少けりや、見付けても取逃す思案ぢやな。さつきのいひつけをどう聞いたぞ、庇ひ立は成らぬぞよ。お尋者を助けたら、助けた者の首ころりノヨ。是も斷つて置いたぞよ。サア〳〵いづれも去にがけに、慈尊院の境内を、探していのぢやあるまいか。若しもかどんで居よつたらノヨ、餘程な拾物」と、大勢引連れうそ〳〵と、二人の寐姿見付け出し、「コリヤ〳〵爰に何やら居るぞ。縛れ縛れ」と立懸るを、女之助飛んで出で、「何奴なれば旅人を脅かす、近寄つたら撫斬」と、きつぱ廻せど事ともせず、「爰に居る大金を、摑んで去ぬる」と取卷くを、「ヤ汝等は人賣か盜賊か、目に物見せん」と刀の電光、無二無三に切懸くれば、風に蜘蛛の子散らすが如く、迯散りながら口々に、「ヤイ〳〵玉屋、算用の合うた三人、見ぬ顏して助けるか」と、庄屋の一言聞捨て難

不義不屈、眞平御免下され」と、恐入つての三拜九拜。親子の人は正體なく、寐入りし額に汗たらく、魘はれ給ふに走寄り、「申しく」と搖り起せば、二人ながら起上り、顏を眺めて、「ヤア其方はまだ寐ずか」と、齒の根も合はず面色變り、若君を押圍ひ、立退き給へば南無三寶、夢とは云へど通ぜしよと、胸に磐石押しこむ如く、せつなき心を押鎭め、「お疲も出でしにや、魘はれ給ふに驚きて目を覺し候」と、云ひくろめても氣は濟まず、案じ煩ひ居る處へ、群り來たる人音に、何事やらんと女之助、立上つて眼を配り、「たとへ道行く旅人たりとも、見咎められてはお爲惡しゝ。御兩所は笠深々、田舍道者の臥したる體、拙者も暫し隱れん」と、兎角しつらひ片陰へ、忍びて樣子を窺ひ居る。程無く來る大勢は、かぶろの宿の百姓ども、中にも庄屋が智慧有り顏、「コレ皆の衆、此所の殿樣、大内之助義弘樣がノヨ、遙々の海山を越え直に登つて、繪圖をみんなに一枚づつ渡してノヨ、此繪圖に合うた者を、縛つて來いとのいひつけでござるよ。三十許りな好い女性とノヨ、十許りな美しいちつぺいとノヨ、又三十餘りな色どり男と、どうやら人の女房を、息子共に盜んでかけおちなどと見えるぞや。どうでも難かしい尋者、見付けたら金になりますらよ。共吟味に精出さしやれ。誰が縛つても庄屋だけ、褒美は俺と半分分けノヨ。斷つて置いたぞ」と、云ふを聞きかねしやばり出る、所でちつと理窟者、男を磨

てたも」と、のたまへば、「ならぬ〳〵。是まで欺すが皆其手、そんな甘ちやく〳〵には陷らぬ我等。ハテ厭なれば、息子殿から殺してのける。子が可愛くば合點して、夜の更けぬ内ほめいてしまを」『イヤ夫でも』『夫でもとは厭な氣か』『サア〳〵〳〵」と座敷の内を、彼方此方とつけ廻せば、御臺は足の踏みどもなく、若君をかき抱き、「コレ麁相しやんな、アヽ危い〳〵」と、慄ひ〳〵奥の間へ、引外して迯入り給ふを、「どうでも遁さじ、返事は」と、續いて一間に駈入りしが、ごんと一聲釣鐘の、音凄じく鳴響き、驚かされて見し夢は、跡無く覺めて三重旅姿、慈尊院の緣ばなに、主從三人笠傾け、前後も知らず臥し給ふ。猶も續いて寺々の、鐘鳴る音に女之助、むつくと起きて月影に、四邊を見廻し、「此處はどこぢや慈尊院、扨は今のは夢であつたか。ハツア難有や嬉しや〳〵、ほんに夢ぢや、忝し」と、天を拜し地を拜し、悅び傍に座を占めて、「エエ我ながら情なき根性かな。明暮御臺を見るたびに、さりとは惜しいお姿、お主ならずは詢きおとし、我妻にせんものと、思ひそむるは日に幾度、我身で我身に異見を加へ、勿體ない恐ろしいと、又思ひかへて心を改め、忠義を盡すと思へども、生れ付いての色好み、淫犯の病を顯し、夢の内とはいひながら、主君に對して不義を云ひかけ、剩へ討ち奉らんとしたりしは、よつく武運に盡きたか」と、暫し涙に暮れけるが、飛退さつて頭を下げ、「御臺樣若君樣、夢の間の

と存ずるに、ほんに私らがお前の樣な女房を持つたなら、戴いて居る合點、何と談合なされぬか」と、云ひしなづつと立寄つて、後より抱きしめ、「何と〳〵」と頬摺を、髱ですることそうたてけれ。御臺は呆れて詞無く、振放し飛びのきて、「コリヤ女之助、其方は氣ばし違ふたか、餘りで物が云はれぬ。石童丸も聞いて居るぞよ。國元を出づる時、監物太郎が念に念、誓を立てし守宮の血、臂にまで塗つたぢやないか。まだ廿日にもなるならず、夫程の大事を忘れ、人で無しめ畜生め」と、やり込め給へば思案して、コリヤ色とりでは行くまいと、きつさう變へてけら〳〵笑ひ、「いかにも國を出る時は、さう思うて出たれども、一月足らず夜も晝も、テモ好い器量、又あるまいと、見る度に思の種、勝りこそすれ忘られず。も云ほか〳〵と、こらへ〳〵ていひ出す今夜、命懸で惚れた戀、厭とあればお二人を、手に懸けて拙者も自害、ヲットとあらば何時までも、こつてりのちん〳〵。サア手短にお返事」と、指添を拔放し、大惡無道に一心が、据り切つたる眼付、天魔の魅入と知られたり。石童丸は稚氣に、何の頑是もなみだ聲、「死ないで叶はぬ事ならば、父樣に廻り逢ひ、其後死なう夫までは、母樣もお詫言。女之助も堪忍しや」と、あどなき詫も武士氣質。御臺は泣くにも泣かれぬ時宜、燃立つ胸を押ししづめ、「命に懸けて自を、夫程思ふが誠なら、兎も角もなるべきが、せめて殿樣に廻り逢ふまで、了簡して待つ

若い其方が心遣ひ、長の旅路を主なればこそ、忝いぞや嬉しいぞや。死んでも忘れはしませぬ」と、のたまふ顔の艶やかさ。旅疲でさへアノ御器量、さて美しやと思ふより、ふつと目の著く煩惱心、例の持病の好色が、ほに現れて、「是はしたり、改つたおつしやり樣、忠義といふは付けたり、長々の道中を、お前樣のお供して、何の苦勞に存じましよ。我君の御座ると風聞する、高野山へはもう四五里、明日はたしかにお逢ひなさるよ。さぞ明晩はしつぽりと、久々の溜水、人目堤の切れ口を、御用心あそばせ」と、仕懸けて見たる問藥、己が病に配劑の、加減は常の如くなり。「マアあの人のつがもない、たとへ夫に逢うたりとも、御出家の御身なれば、其樂みは斷れてある。只歎くのは國の騷動、大内を亡し、此若を世に立てる御相談、一先國へお供して、立歸りたい心の願」「若し其上の御得心、還俗でもなされたら」「ハテ其時は」とばかりにて、袂溢るゝ露には、いとゞ思や增るらん。媚く詞を付け込むしれ者、じりじりと傍に寄り、「成程仰しやればそんなもの。併し一旦浮世を捨て、御出家なされた御主人、何程におつしやるとも、よもや還俗はなされまいが、又殿樣にも無分別、是程綺麗な美しい、旨い盛りの御臺樣を捨置き、坊主になるとはどうした御思案、第一强い不心中。此間から道中で、つくづく

櫻のやうなる、殿がな女郎がなと、歌ふ聲さへ和歌の浦、こゝは寡婦のかたをなみ、お茶は摘まねど都にまがふ、所の名さへ宇治と呼ぶ、月を慕ふか雨を招くか、ろはんにあらでかけづくり、お宿〳〵と招かれて、「まで日は高い、先が急ぐ」といひ捨てて、迯げて、のがはの觀世音、歩みながらに遙拜し、齢を祈る松島や、千代に八千代に、さゞれいはでを跡になし、ふりかへり見る故里は、あれかあそこかあの邊りかと、空にしるしのかひも無く、みだれ、みだれみだるる白雲の、風に誘はれ鐘の聲、はや入相に、程は長田の里つゞき、誓を頼む粉川寺、惠もふかき法の友、胸に木札の順禮も、願ふは二世の道しるべ。我々とてもあの世まで、伴ふ主の御在所、尋ね三谷を過ぎゆけば、高野も近し我君に、やがておほづと聞くや嬉しさに、道を急いでしやな〳〵と、紀の川上にぞ三重つき影に、光を添ふる法の道、高野山の繁昌に、つれてはびこる麓の里、かぶろの宿の賑はしさ。都方より參詣に、鄙の道者もうち交り、泊競りあふ旅籠屋の、内騒がしき黄昏過、同じ浮世に人忍ぶ、身はならはしよ旅の空、筑前の三人も、宵よりこゝに假の宿、笠も草鞋もとく〳〵と、寐られぬまゝに御臺所、石童丸の御手を引き、障子を開いて次の間へ、立出で給へば女之助、跡に引添ひ歩みいで、「誠や人の盛衰は、定め難しと申せども、繁氏卿御在國ましまさば、錦の褥に御身をそへ、透間の風も防がんに、かく淺まし

第四　道行越後獅子

唄　踊り來て、是の大門眺むれば、エイソレ七里、大もん花でかゞやく。花を見捨てゝ憂き事に、憂きを重ぬる玉鉾や、繁氏の御臺所、石童丸の御手を引き、女之助が御供にて、君は高野にましますと、夫を力の忍草、笠にはあらぬ越後獅子、習はぬわざに太鼓笛、吹くや追風に帆を上げて、國を出船の日和も好く、はる〴〵きの路かだの浦、あがる朝日に摺れ違ひ、爰より歩行の草鞋がけ、沖の鷗におき別れ、誰かまつ江と聞くからに、辻占よしといそ〳〵傳ひ、跡に心は殘らねど、引戻さるゝ砂道は、歩めどはかの行き悩む。げにや世に在る身なりせば、名所古跡も訪ふべきに、今は耳にも目にも見ぬ、小家がちなる軒のつま、煙賑はふ峯々に、霧立ちのぼる絶間より、ほころび出づる山々は、野飼の牛の口を執る、草刈童の月代に、似たぢやないかと高笑ひ、似たは化けたか狐じま、睫毛ぬらせる袖の霧、松に殘りし嵐と共に、野邊の草葉もかれ〴〵に、いつも變らぬ冬景色、落葉も霜に埋れて、木の下蔭の寂しきは、在所離れて北島の、渡り急ぎし舟呼ばひ、川の流れに水鳥の、羽を伸す音に驚きて、人目防ぎと舞ひ奏で、櫻木踊の拍子とり、唄　櫻木を、枝にふきわけ門に立て、門の光で庭も輝く。さくらぎ、北山の

れよと懸ける情をば、袖に隱して立歸る。折よしと御臺若君、駈出で給へば女之助、「新洞が詞の端、御兩所の身の上氣遣ひ。幸ひ我君高野に御座あるとの風聞、夫を力にお供せん。いざさせ給へ」と勸立て、伴ひ出づれば監物太郎、「ヤア待て弟、汝生れついて好色者、未だお若き御臺所、預けやる事覺束無し」と、いふよりやがて守宮を引裂き、滴る血を腕へ塗付け、「是見給へ兄者人、守宮は不義を勸むれども、其血は却つて不義顯す。唐土秦の始皇、三千人の宮女に不義あらんかと疑ひ深く、殘らず臂に是を塗る、不義ある者は忽ちに、落ちて跡無くなる例、さるに依つて守宮といふ字を、宮女を守るといふ心で、宮守りと書傳ふ、我朝にては萬葉集、脫ぐ沓の重る事のかさならば、守宮のしるしかひやなからん。沓重りてさへしるしは落つると詠みし歌、まして三代相恩の、お主に對して不忠不義、天命いかで」と云はせも立てず、「ヲヽ出來した、行け」と一言が、兄の情の餞や、御臺若君立別れ、高野の山の峯にある、我夫諸共歸りこんと、つらね給ひし言の葉も、それはまつとしまつまでは、「お名殘惜しや」と橋立が、駈寄るを押隔て、互に「さらば」「おさらば」の、聲を力に忘れ草、伴ひ館を出で給ふ、くにに思や殘るらん。

地な心から、一生夫は持たさぬと、云うたを誠と思詰め、あへない最期を遂げけるよ。未來で夫婦と悦べども、悲しむ親が此世から、夫が見えるかたはけ者。思出す事ばつかりを、いうて死なずと便無き、此身を早く迎うてくれ。六十越して子に離れ、何を頼みの娑婆世界、情なの我身や、不愍な娘の最期や」と、しやくり上げたる一徹涙、堤も切れて大川に、泥の淵なす如くなり。共に哀と人々の、歎きの内に監物太郎、彼寶塔を目通りに据ゑ、女之助を引直し、「汝このごとく光を失ひし不義の相手、討つて渡す覺悟せよ。サア新洞受取られよ」と云ふ聲に、涙拂うてすつくと立ち、「ヤア人そばへすな其手は食はぬ。義理立てせば助けうと思ふか、いつかな〱。眼前娘の敵人手は頼まず、我手に懸けて眞二つ、恨を霽す。其處退け」と、飛びかかつて拔討に、はつしと切つたは件の名玉。是はとばかり人々は、呆れて詞も無かりしが、女之助聲を懸け、「手が廻りしか新洞左衛門、急かれずともサア首」と、差付くれども目に懸けず、切割りし玉引摑み、「己陰陽和合を嫌ひ、よう光失うて、娘に自害させたなア。我子の敵思知つたか、加藤の家の名玉は、目利の目からは悉皆藍玉、持つて歸り主君に見せ、恥あはして腹癒てくれん。必ず跡で其玉は、贋物などと爭ふな。眞の贋があるならば、石童や御臺に持たせ、早く此家を捨てさせよ」と、いひ教へたる詞の裏、表は怒り心には、せめて娘が手向とも、な

ためして胸を晴さん」と、三寸魚板見拔きし兩眼、睨付けてぞ詰寄する。ちつとも臆せず女之助、「其不義の相手は某、御存分」と押直る。「ヲヽ好き覺悟、觀念」と、振り上ぐる劍のかげ、「ナウこれ待つて」とゆふしでが、苦しむ體に氣も弱り、心も折れてせん方も、なくより外の事ぞ無き。苦しき中にも親の顏、じろ〳〵と見て、「おいとしや、親一人子一人の、私に別るゝお前の心、悲しい上にお腹も立たう。さりながら、假令守宮のわざならずと、一寸見るから思初め、心が先へ穢れたもの、帶紐解かずと御實の、光失せいで何とせう。假の契も二世の緣、枕交はせばわが殿御、聟は子といふ世のならはし。私が死んだ跡にても、形見と思ひ懇に、おいとしがつて下さんせ。お主樣も父上を、親と思うて折節の、訪ひ音づれを頼みます。親に先だつ我心、推量して可愛やと、思うて一言未來まで、夫婦と云うて下され」と、しやくり上げたる哀さを、見るに身に沁む橋立が、せめての事と介抱し、「萬事を胸で諦めて、詞に出ねど心には、嘸みづからが憎からう。言譯するにもしられぬしな、皆是前世の約束と、思ひ諦め給はれ」と、歎けば倶に女之助、「是まで盡せし惡性の、とゞめとなつた今の悲み、未來は扨おき後々萬劫、契は變らじ夫婦ぞ」と、云ふ聲耳に經陀羅尼、物も得いはず嬉しげに、合す兩手が暇乞、あへなく息は絕えにけり。わつと泣出す新洞左衛門、地鞴踏んで、「へヱヽしなしたり情なや。我堅意

や何故に自害する。言譯無くば無いやうの、思案も有らうに情ない。大事の娘を殺すか」と、さしもに猛き武士の、子故の闇に目も暗み、だうと坐りて泣居たり。今を限りのゆふしでが、涙片手に、「ナウ恥かしや。自は此お館へ來るよりも、さるお人をば思初め、情の道に迷へども、大事の役目と心の駒、繋ぎ留めしを情なや、御內寶のもてなし酒、あれなる神酒を飲むよりも、不思議や五臟に浸渡り、大事を忘れ何のその、まゝよの上にはり持たされ、つい下紐を解きそめて、是非なく身をば穢せしぞや。言譯ならぬいたづらを、詮議に逢うて恥かいて、かく成りゆくは神の罰、神明怒りの鏑矢に、射殺さるゝと覺悟して、死ぬる心の悲しさを、推量して」と泣く涙、袖に餘れば血に染みて、見る目もいとゞ哀なり。樣子を聞いて新洞左衞門、すつくと立つて走寄り、娘がいひし神酒徳利、兩手に摑んで、「ヤアラ心得ず。もつとも若氣といひながら、左程亂るゝ娘にあらず。仔細は此中、顯はさん」と、緣のかまちに打付け〳〵、打割る中より守宮のつがひ、顯れ出づればしつかと捕へ、「扨こそ〳〵。唐土張華が博物志に、交合の守宮を引きわけ、酒に浸して其氣を呑ませば、忽ち女の心亂すと書きあらはす。其理を知つて娘に呑ませ、性根を亂しいたづらさせ、身が穢れた故光失せしと、科をこつちへ塗りつけて、贋物渡す下ごしらへ。扨たくんだり拵へたり。憎さも憎し不義の相手、是へ出せ、ずだ〳〵に、

こと日輪よりも明かなる故、夜光の珠とはなづけたり。斯程貴き御寶を、輕々しく受取られし、ゆふしで殿は仕合」と、挨拶すれば、「皆是お前のお世話ゆゑ」と、表向なる互の辭義。新洞左衞門笑壺に入り、「ホヲ、娘、寶を異議なく受取つたか。出來したく。併し某見分の役、改めるため拜禮せん。孰れも倶に拜まれよ」と、云ふに隨ひ女之助、橋立倶に頭を下げて、ハツトばかりに敬ひ居る。ゆふしで心に信を取り、「何方も珠の御威德、拜み給へ」と寶塔を、開き見すればこはいかに、まつ黒々と黒玉の、墨をつくねし如くにて、是はとばかりゆふしで親子、女之助も橋立も、倶に呆れし顏付にて、暫し詞も無かりしが、新洞怒つて、「ヤア大盜人の監物太郞、改めずんば贋物を、持たして歸すたくみよな。イデ寶藏へ踏込み、摑んで來ん」と、駈行く向ふをさつと明け、內より飛出る監物太郞、贋をくろめの白々しく、「コリヤく新洞、先達ていふ如く、不淨の女が受取らば、玉の光を失ふと云ひしは爰ぞ。其女に詮議が懸つた。其處退け」と、打つて變りし詮議のうら釘。いがみ懸つて橋立が、「コレゆふしで殿、身に覺あるならば、有りやうに白狀あれ。一間の內で不義がましい、淫な事は無かりしか」と、まざくしげに問ひかけられ、何と言譯ゆふしでが、すべき樣無く髮に插す、白羽の矢をば拔くとはや、矢の根を咽に突立つる。是はと驚く人々より、半狂亂の新洞左衞門、抱擁へて、「コリヤ娘、わり

行かうか」と、立上れば、「ア丶これ申し、今が祭の最中」「ナニ祭とは」「イエイナ、かの夜光の玉のお祭」と紛らかし、隙取る手段に傍へ寄り、「お家の祭は、先最初が鼻高、其鼻の長さが三間半、男にしたら廢り者。次が御輿と提灯、其提灯が餅搗いて、事の埒が明かぬかと、いかう私は案じます」「ア丶これ、神事の咄聞きには參らぬ、御玉ばかりを受取るに、かやうの隙入合點行かず」と、睨み廻せば、「オ丶けうと、輕はずみに何ぞいな。玉といふに愚は無く、唐土には卞和が璧、我朝にては驪龍の玉、伊勢の國にはお杉とお玉、飛んだは人魂怖いは日の玉、下女の玉でも輕々しう、受取らるゝものかいな。マァお前はお幾つで、お名は何と申します」「ハテ面倒な事を尋ねる、名は新洞左衛門年は六十」「シタリ」「何ぢや」「テモ扨も〲〲、さつても若いお顏の」「ア若うござる」「お耳も聞えお目も好いかへ」「耳も目も好ござるてや」「お齒はへ」「夫も好いてや」「サァ其好い内から人は養生、折々疝氣も出ようがな」「ハテ出ようと儘さ」「イエイエ、さう氣を苛つがいかいお毒。それ〲頭にようほど白髮、デエ、拔いて上げましよ」と、立寄れば突飛し、「ヱ七面倒な女め」と、傍に立つて大聲上げ、「ヤア〲娘、夜光の珠を受取りしか、何して居るぞ」とつかうどに、呼はる聲の響きてや、心靜に寶塔を、携へ出づるゆふしでが、跡に續いて女之助、出づるや否や尊敬し、「忝くも寶塔の、内に籠たる御玉は、闇を照す

是迄の、不義徒のかへり花、仇花ならば御無用」と、そやし懸ればゆふしでは、「テモ粋な兄嫁御、「悪性男を私が手で、こなして見せうがくだんすか」「仰に及ばず互の縁づく。したが口先ばかりにて、どうのかうのは皆浮氣、誠をいはゞあの一間、其氣が無くば措かんせ」と、はりかけられて、「イヤ申し、戀は親にもお主にも、見かへてするが女の意地、跡へは寄らぬコレごんせ」と、女之助を引立てる。是ぞ工の臍落と、思へどどうやら恥かしく、尻込するを橋立が、「鬼も頼めば人喰はぬ、入らざるお辭義」と無理遣りに、手早く跡より押しやつて、一間をぴつしやり閉すとはや、内陣ひつそとしづまれば、繻子の帶鳴るばかりにて、物靜になりにける。橋立四邊見迴して、女之助の放埓も、禍三年時の用、仕果せたりと思ふ所へ、多々羅新洞左衞門、生付いたる氣は苛ち、待久しくて次の間より歩出で、「コレ女中、娘は寶珠を受取つたか、まだかどうぢやぞ聞いておくりやれ。べら〳〵何して居る事ぞ」と、膨れ返つた髭面を、引延ばさんと橋立が、やがて床几を參らせて、「誰ぞ莨盆お茶持て來い」と馳走振。「イヤ茶は喫べぬ煙草は嫌ひ、滅多に馳走召されても、受取る物に遠慮は無いぞ。床几は役目、恩には被ぬ」と、腰打掛くる其内にも、橋立は一間の首尾、如何と思ひ立ちつ居つ、狼狽へ迴るを、「コレサ女中、きよろ〳〵と何しめさる。待ちかねて烏帽子首、強ばり申す、と云うてくれめせ。但しは直に

應な役目を受け、案じ〳〵參りしなり、事なうお渡し下され」と、詞の中より、「何が扨、お渡し申さいで何とせう。夫も只今罷歸り、お藏の掃除、暫くお隙が入りませう。ヤ幸ひ今日はお玉の祭、神前へ供へしお神酒頂戴遊ばし、不淨を淸めお受取り。それ〳〵神酒」といふに任せ、對の德利を三寶に、下女が携へ差出す。女之助近く差寄り、「敵を招いて毒酒を盛り、約を變ぜし例もあれば、毒味致して進ぜう」と、神酒を兩方つぎあはせ、土器に十分と受け、つゝと乾してゆふしでに、「頂戴あれ」と獻しければ、「是は御念の入りし事、緣につれたる神の酒、何お疑ひ申さん」と、一つ受けて飮む酒の、忽ち五臟に浸渡り、亂れ懸りし顏の色、行儀も崩れ土器を、女之助へ差戻す。サアしてやつたと橋立が、態と咄も打解けて、「近頃卒爾な事ながら、頭髮にさゝれし白羽の矢は、如何なる故ぞ」と尋ぬれば、「是こそ私が殿御を持たぬ申譯、幼き時此白羽、家の棟に立ちしより、神のお伽のお座子となりしは幸ひ、よい男好いた殿御のあるまでは、人目の關の此白羽、片時も放し候はず。あはれ此矢を貰ふ氣な、お人があらばやりたし」と、女之助が傍近く、にじり寄りたる亂れ咲、花ならば折れ、折る人は、主樣ならでと縋り寄る。爰ぞと倶に摺寄りて、抱著く程に思へども、傍に見て居る兄嫁の、手前を恥ぢて薄紅葉。高を締めたる橋立が、傍から焦つて、「それ其處を、じつと引寄せ引緊めて、二世の堅めが

も、智慧の袋の棚捜し、暗がりさがす如くにて、暫し途方に暮れけるが、「イヤ申し、かやうな時は膝とも談合と申します。幸ひ弟御女之助様、勘當の詫にお出で、機嫌直され倶々に、御相談は」と、いふに暫く工夫を運らし、「ム何、弟の放埒者、奥へ參つて居るとな。ホヽウ好き相談對手、思付あり女ども、汝も來れ」と立上る、心知らねど橋立も、夫の詞を力草、伴ひ一間に入りにける。暫くあつて「大内よりお使者」と呼はる聲につれ、月と雪との眞中に、花と眺める後帶、男選みのゆふしでが、かた笄の濡髪に、さいた白羽の鏑矢は、伊達か僭上か風俗も、しとやかに立休らひ、「誰そ頼まん」といひ入るゝ。かゝる對手に相應の、女房選みの女之助、「いざお通り」と云ふ内も、思ひ含ます目遣に、可愛らしさが身にこたへ、互に顔を見交して、上座へ通れば橋立が、やがて出迎ひ頭から、しつほりむきの挨拶にて、「是は〳〵女中の、御苦勞にようこそお出で。自らは監物太郎が女房、橋立と申す者、又是なるは主の弟御、女之助と申して、武道は勿論歌の道戀の道、並ぶ方無き優男、則ち今日の御馳走役、御用あらばあの人へ」と、猫に鰹の引合せ、如何な釋迦でも精進を、落ちても見たき心なり。女同士こそ此方もにこやか、「テモいかいお心遣ひ、私はゆふしでと申して、まだ人數にも入らぬ女、かやうな役に參る筈は無けれども、人好あるお寶物、親新洞左衞門はお次に控へ、マア其方が受取つて來いと、不相

石童君を御供し、奥を指してぞ入りにける。程無く歸る監物太郎、大内が難題胸に釘、打つて變りし思案も無く、廣間へ通れば妻の橋立、「義弘よりの呼寄、如何なる事ぞ心もとなし、及ばずながらお聞かせ」と、尋ぬれば、「さればの事、大内義弘は都の勅と僞り、近國他國の寶を集むる、是正しく謀反の下拵へと見拔きし故、我國には寶無し、仁義禮智信の五字を以て寶とすと、伍子胥が辯をかつてまんまと云伏せしに、多々羅新洞左衞門と云ふ奴、夜光の珠の來由を知つて、汝が家に玉女神と崇むるは、齊國より渡りし夜明珠、寶無しとは云はせじと、明白の一言、爭ふにも爭はれず、成程其寶あり、併し尋常の者たづさはる事叶はず、二十と限つて交合せざる女あらば、受取りに越されよ、男女の別知つたる者が手に觸るれば、忽ち珠の光失ふと、言傳へを難題に、當惑させんと思の外、かの新洞めが娘當年二十、まだ是まで不犯にて、此役目を乞ひ請け、親子連にて受取りに來る筈。代々加藤の家の重寶、渡さば家滅亡、厭といはゞ大軍を以て攻來らん。さすれば御臺若君のお命も危し。兎やせん角やと胸はどうづき、思案も有らば云うて見やれ」と、語るを聞いて女房は、ほつと溜息吐きながら、「只此上は贋物を、急に拵へ渡さうより、外の事は」と云ふを打消し、「イヤ〳〵其儀も思付けども、うつかりと受取る新洞左衞門にあらず、ハテどうがな」と大ずるの、骨も碎くる一思案、及ばずながら橋立

女之助、此程若も尋ねしが、何故登城召されぬ」と、仰にハット頭を下げ、「私儀不行跡故、兄監物太郎が勘當受け、それなる橋立殿を賴み、樣々詫びれど聞入れ無く、是非に及ばず今日は、若君樣や御前樣の、お詞をかる所存、恐れながら然るべう、賴上げ奉る」と願ひを聞いて御驚き、「テモ扨も、堅い其方が何越度、軍法祕密の論議でも、しやつた上のいさかひか」と、尋ね給ふを傍に聞く、橋立は吹出し、「御臺樣の、彼の人を堅いとはお目違ひ、其柔かさ自墮落さ、軍法論議はさて措き、女中論議で家中は大もめ。お上にも御存じの、前の內儀お埒殿は、夫監物太郎都より貰ひ歸り、夫婦に致され、退引ならぬ女房を、子持になると乳臭いとて離別して、お物師のお縫殿とちん〳〵。夫も續かず、弓頭の娘おつるを娶り、持つと往なして、お婇の長門殿。夫から仲居お茶の間の、白髮交りも色めいて、其處では悋氣此處では喧嘩、何から起れば女之助、私が夫ぢや殿御ぢやと、云募つて大騷動。堅い夫が面汚しと、勘當せしも無理ならず」と、語れば御臺も興醒顏、若君何の差別なく、「女之助はいかい苦勞、それから其喧嘩の仕舞、どうなつたぞ」と、根問にほつと行詰り、「其ソノ跡の儀は、面目もなき仕合」と、誤り入りし風情なり。御臺もをかしく、「若氣の至も餘り興がる、以後は嗜む心なら、倶に詫して得さすべし。幸ひ今日は御玉の祭、玉女神の御前にて、金打させん此方へ」と、立入り給へば「有難し」と、

けられよ」と、彼方此方でせこめられ、當惑したる大内之助、何思ひけん振返り、後に懸けたる弓押取り、件の鏑矢引番ひ、「命に替へて某が、思込んだる戀なれども、大望成就の妨げなれば、此戀ふつ〱思斷る、證據の鏑矢受取れ」と、切つて放せば松の木に、はつしと立つたる有様を、ゆふしで悦び走寄り、矢を抜取つて押戴き、「此お使を爲果せなば、枕一つで二十まで、ねよした事を世上へ言譯、君の心も晴々と、曇らぬ女の鏡にせん」と、帶引緊める親子の勇み、監物太郎を先に立て、白羽の鏑矢髻に、插しかざしてこそ 三重 定め無き、世を憂き事に見限りて、遁世ありし繁氏卿、歸國と僞り石童を、跡目に立てて監物太郎、國家を治むる智仁勇、三國名譽の夜光の珠、玉女神と勸請し、秋の最中の祭日に、館賑ふばかりなり。御臺牧の御方、石童君を伴ひ、廣書院に出で給へば、執權監物が女房橋立、神事の祝儀申上げ、「夫監物太郎、大内義弘の招きに依つて參られ、御寶の御神事に外れし段お赦し」と、斷り申せば御臺所、「心善からぬ大内の呼寄、我夫の行方は知れず、石童は幼少なり、何云越さんも計られず。只懷しいは繁氏卿」と、喞ち給へば石童君、「母樣氣遣ひ遊ばすな、追付父樣の有所を尋ね、私が迎に參ります」と、大人しやかな諫には、涙も止る折からに、國一番の濡男、其名自然と女之助、兄監物が勘當受け、詫を賴みの奧書院、うぢ〱として入り來る。御臺は何のお心無く、「珍しや

夜明珠と御存じなれば力なし。成程寶珠を渡し申さんさりながら、年を數へて二十と限り、終に男と肌觸れず、交合の道を知らぬ女あらば、玉を迎ひに越さるべし。若しも年に過不足あるか、一度でも男に肌觸れ、身の穢れたる女の手に携へ持てば、忽ち玉の光を失ひ、石瓦の如くとなる。其割符の合ふ女があらば何時でも、玉を渡すに相違なし。某は先お暇」と、立歸るを、「待つた〳〵、使の女是にあり」と、走出でたるゆふしでが、御前に向ひ頭を下げ、「不義の男があるゆゑ、晴心に隨はぬとのお腹立、其お疑晴らすため、終に妹脊の道知らず、身を穢さぬといふ申譯、此お使を私に、仰付けられ下され」と、思入つてぞ願ひけり。監物太郎もぎよつとせしが、「コリヤ女、身の穢れぬが定ならば、いかにも玉は渡さうが、見事寶の見分するか」と、何がないうて困らす思案、「ヲ、氣遣ひすな、其見分は此新洞左衛門、娘に連立ち行くからは、贋物は掴まぬ〳〵。シタガやいゆふしで、其方には惚れた人がある、此方の體は淸淨でも、他から穢を添ふるといふもの。ソレ其和郎が思斷るとお云やらねば、使には行かれまい」と、戀慕の絆を斷らせんため、大内が耳に打て響けを、聞流して不興顏、返答も無く座を立つて、駈込む向ふへ御臺所、立塞がつて、「申し殿樣、女一人に繋がれて、大切なる夜光の珠、此度受取り給はずば、禁裏表の首尾も如何、ゆふしでをさつぱりと、思斷つたる證據を見せ、使を仰付

見分の役人は新洞左衛門、腹は立てども其日の役目、ふしやう〳〵に見改め、「孰も寶に相違無し。誰かある此品々、御藏の内へ納めよ」と、呼はれば伺候の武士、てんでに捧げ入る體に、先は首尾好く納まりしと、諸國の城主も安堵の胸、皆々旅宿に立歸る。遙に下つて筑前の城主繁氏の執權、物に騒がぬ監物太郎、寶も持たで悠々と、白洲の庭に入來るを、義弘つく〳〵打まもり、「九州の大名より、殘らず寶を差上げしに、加藤の家より何として寶は送らぬ。宣旨を背くか但しは氣儘か、返答せい」ときめ付ければ、ちつとも動ぜず、「御尤の御不審、勅諚とある上、いかで違背の候ふべき。併し筑前は小國故、差上ぐる寶は無し」と、いひも切らせず、「さうは云はせぬ。大名の家に寶無くて、家督の繼目は何を以て規模とする」「イヤ我國は仁義禮智、五常を寶として國家を治むる。但し此お國には、器財を以て寶とし、君子の敎を寶とはなされぬか」と、理窟を詰めて云ひ込むれば、元より不才の大内之助、返す詞も無き所を、耐へかねて新洞左衛門、目玉を剝出し、「コリヤ〳〵監物、夫は唐土臨潼の會に、善を以て寶とすと、伍子胥がいひし口眞似、喰はぬ〳〵。加藤の家には齊國より渡りたる、夜明珠といふ名玉ある筈、今玉女神と神に仰ぎ、尊敬する事紛れ無し。是非玉を渡さずば、大軍を以て押寄せ、家國共に奪取る」と、退引させぬ手詰の難題、此場を遁れて分別と、無事を繕ふ當座の請合、「玉女神を

御臺走出で、「重々のお腹立、御尤とは云ひながら、戀ばつかりは嵩押に、云ふ程埒の明かぬもの、自にお任せあらば、何とぞ勸めて今日の内、お前の心に靡きやる樣、私が世話を致しませう」と、すかし宥める物ごしに、貞女のしるし顯せり。戀は曲者鬼にも涙、「情強きどちめらう、打殺してしまはんとは思へども、成れば又拾物、少しの間お身に預ける、返事が遲いと赦さぬ」と、詞の弛みに御臺は心得、「たつた今好いお返事を、お氣遣ひ遊ばすな」と、ゆふしでを引立てて、尾を踏む心地虎の間へ、伴ひ入らせ給ひけり。跡には主從物をも云はず、彼方は澁面此方は工面、睨合うて居る處へ、「國々の諸侯より、寶を持參」と呼はる聲、俄に繕ふ大將の、衣紋美々しく座を占めて、待つ間程無く入來る、靑貝の卓恭しく、目八分に差上げて、二つ竝べし珊瑚の枕、「是は菊池の陶全姜が、寐た間も放さぬ重寶なれども、勅諚とあれば力無く、持參致し候」と、廣庇に押直す。次は豐後の友方大學、水晶簾を臺に据ゑ、「此簾はその昔、晉の國より渡りし寶、庭に懸くれば風を生じ、自然と雨を降らしつゝ、暑氣の時分は冷やりと、西瓜もどき夕立もどき」と差上ぐる。扨其次は肥前の國、海月式部が重寶に、白龍石といふ硯、「墨磨る度に硯より、己と水を涌出す、不性者には第一の寶なり」とぞいひ上ぐる。其外松浦五島の一族、筑紫表の國主城主、皆家々に傳はりし、名物寶を臺に据ゑ、廣緣狹しと竝ぶれば、

を淩へてよう聞かしやれ。此お家大内の御先祖、伊勢兩宮を當國へ御勸請なされ、その社より一人づつお座子を取り給ふ、印には家の棟へ、不思議に白羽の鏑矢立つ、其役を勤めた我娘、一旦神に仕へし女、一生男を持たすまいと、誓の爲に神明の鏑矢を、頭にさゝせて不淨を拂はす、それを無體に拔取つて、妾にするの足懸のと、罰をかぶる御合點か。其上是まで頤の、かいだるい程諫めても、聞入の無い謀叛の企、今となつて異見せぬは、所詮いうても得心は召さるまい、ハテ毒喰はゞ皿舐れと、諦めてする奉公。ろくだまに望も達せず、榮耀らしい妾狂ひ、まだ早い、措き召され」と、病犬の咬付く如く、唯一口にわんとばかり、膠もしやりも無かりけり。性急なる大内之助、耐へかねてすつくと立ち、ゆふしでを宙に提げ、元の處へどうど投げすゑ、「扨はいよ〱推量の通り、親め倶に呑込んで、內證に男があるな。我心に隨はぬ腹癒、眞二つに打放し、其男めに鼻明かせん」と、大太刀するりと拔放せば、わるびれもせず押直り、「父まで深きお疑ひ、曇無き身は天道が正直、お手に懸るが申譯」と合掌したる健氣さを、見やりもせぬ片意地親爺。「サア今こそ」と義弘は、父が顏を差覗けど、びつくともせぬいがみ面、「サア〱〱」と二度三度、嚇しの刃を振上げ〱、閃かしてもきよろりがみそ、「テモ扨もしぶとい奴等、エ、是非もなし是まで」と、既に危き太刀の下、「ナウ待つてたべ暫く」と、大内の

ぬ」と膝立直し、睨みつめたる理窟詰、云込められてしかなの隼人、手持無沙汰に尻ごみす。義弘居丈高になり、「小ざかしき女め」と、肩先摑んで引摺り寄せ、「女ろの餓鬼は十二三から、男を見ればびろ〳〵と、前後を見る當代。察するところ内證に隱し男を拵へ置き、其男への心中立、外の矢先は通さぬと云ふ心で、起請の代に此鏑矢、さして居るに違はせまい」と、矢を搔抛つて引起し、「サア不義者めが、名を吐かせ」と、責問はれてもゆふしでは、元とり覺えなみだ聲、「コハ無體なる御尋、私も木竹の身では無し、惚れてくれる殿御があれば、欲しう無うて何とせう。持つに持たれぬ譯あつて、脊丈延びた此年まで、人の數にも入らぬ身を、不便なともおつしやれず、酷いお主の心やな。さら〳〵不義の男は無し、疑ひ晴れて給はれ」と、身を悔みたる恨泣、涙片手に詫びければ、「ヤアまだ男めを庇ひ居る。よし〳〵云はせ樣あり」と、口にはいへどさすがは戀、目顏で嚇し立つたり居たり、身悶えすればお次より、「ヤレ待ち給へ」と聲懸けて、立出づるは新洞左衛門、顰み返りし天のじやき、隼人はお座にたまりかね、「老人の御苦勞に、惡い所へ好うお出で、それに緩りとお遊び」と、云捨てこそ〳〵逃げて入る。娘を引退けどつかと坐し、「不義の相手が聞きたくば、某が申上げん。娘が隱し男は、辱くも我朝の神の司、天照皇太神宮、何と膽が潰れますか。したが、憖うばかりでは合點行くまい。コレ殿、耳

伽致せよとは、有難い事なれども、御臺樣の思召、一家中へ聞えても、女旱は行くまいし、家來の娘をわつけもないと、我君を笑はせますも如何、此儀は御免なされませ。ほんに誓文、殿樣を、微塵も嫌ひは致しませぬ。慮外も厭はずつべこべと、お詞背くも君が爲」と、辭義する詞の控綱、斷れもやせんと案じ居る。「ホウ、此義弘がいひ出す事、二言と詞を返す者、恐らくは覺えず。女に稀なる大膽者、出來したりさりながら、一天下の主となる某、十二人までは女房持つても苦しからず、否でも應でも妾にする」と、深くみいれし鰐の口、遁れる丈と手をつかへ、「冥加に餘る御意なれども、私はちと譯あつて、一生男に肌觸れて、身を穢す事ならぬといふ、申譯は頭にさしたる白羽の鏑矢、細な樣子は父上に、お尋ねあれば知れる事」と、いふに差出る關口隼人、「ハアゆふしで殿惡い合點。殿樣に惚れらるるは此方の爲に福德の三年目、忝いとお受け申すが上分別、親御も浮み上る事。其頭に插いて居る白羽の矢が邪魔になり、仰向に寐る勝手が惡くば、デヱ拔いて進ぜん」と、立寄るをむつとせき上げ、「こりや何爲やる」と突飛ばし、「親新洞左衛門が御前に居ねば、高なしの我儘。男持たぬはどういふ譯やら仔細も知らず、親までが浮み上る、いや果報ぢやの福德のと、慾に穢れた土根性。そんなむさい女子ぢやと思やつたら當が違ふ。マヽ慮外ながら、サア手は愚、其方の延びた鼻毛の先でもさへて見や、赦しはせ

寶見分の役は、多々羅新洞左衛門と承る。夫につき彼が娘、お國に稀なる美人なれども、如何なる事か終に男の肌觸れず、生れのまゝなる生娘と、諸家中の風聞故、御手廻りの召仕にと存じ、上意と申してお次まで、呼寄せ置き候ひしが、御慰みに御覽もや」と、何がな御意にいらざる追從、お髭の塵を取りかける。義弘寛々と打頷き、「勅諚と僞り、諸國の寶を集むるは、某が謀叛一味の證、連判狀も古めかしく、氣をかへて人質の代にする家々の寶、まだ受取るには時刻も早し、其間に彼娘、ちよと顏を見ん。それ〳〵」と、仰にかくと云次げば、頓て御前に立出づる。世にすねて男選みに年長けし、新洞左衛門が娘ゆふしでは、終に殿御の肌知らぬ、おぼこと見えぬ洒落姿、髮の結目にさしたるは、梅花にあらぬ白羽の鏑矢、笄ならで簪か。「なんの御用でお召ぞ」と、案じる內も面はゆく、お書院近く坐しにけり。橫雲將軍遙に見やり、「ゆふしでとはおことよな。ハレ見事、好い器量の。汝が親の新洞左衛門、忠と義とに固りし心より、かたくなに育てられ、麻につるゝ蓬とて、其方までが身持も堅く、一度も男に肌觸れぬと聞及ぶ。器量といひ風俗まで、あつたらしき日蔭の花、殊更男選みとあれば、疑もなき手入らずの大無垢、水上は此義弘、今宵から抱いて寐る」と、ほやりと笑ふしほの目は、仁王の戀する如くなり。ハツと思へどゆふしでは、態と額を疊に付け、「私風情の賤しき女、お寐間のお

出で給ひ、「我こそ假の加藤繁氏、千鳥の前が誠を感じ、二世も三世も變らぬ契」と、のたまへば手を合せ、「嬉しき今のお詞は、我君のお詞より、忝さは百倍」と、につと笑ふが置土産、此世の緣は斷れにけり。「いとしやなう」と御臺の歎き、泣いて歸らぬ愛別離苦。「いざさせ給へ」と引立てて、「頃は薄暮、好き時分」と、せけばせかるる牧の方、力なく〳〵立ち給ふ。形見は跡に心を殘す、著せし人は變れども、變らぬ烏帽子狩衣、假の浮世に迷はじと、悟り〳〵て出でたる主は、直に金色菩薩の位、歎き給ふな歎かじと、悟れば果敢なき花の宴、散りにし姿を殘し置き、本國にこそ立歸る。

第　三

富んで奢らず貧しうして貪らぬは未可なり、富貴にして禮を知り、貧しうして樂めとは、弟子に示せし孔子の詞。大内之助義弘威勢九州にはびこり、自ら武運を朝日にたくらべ、横雲將軍と尊號し、人もゆるさぬ高胡床、浮べる雲の上見ぬ鷲、明日は我身もしらぬひの、筑紫の御殿と時めきける。伺候の諸武士も自ら、伸し上つたる大名形氣、中にも近習の關口隼人、御前に進出で、「豫て仰渡されし通り、近國の大名より、家々に傳はりし重寶、今日獻上致す筈、則ち

ば身構し、物をも云はず驅出すを、「コレ待つた藏人殿、監物太郎が一言に、思合はして思案をすれば、どうでも樣子があるわいの」「ヲヽ云うて聞さう某は、大内之助義弘殿に賴まれ、加藤左衞門繁氏が首を取り、出世の種にするわいやい。」「爰を放せ」と振切るを、驅塞つて、「待つた待つた。夫で何にも樣子が知れた。夫ならやつぱり縛つて置こもの。此方の樣な惡人と、一緒で無いといふ證據、御臺樣や監物殿への言譯」と、走り寄つて藏人が指添拔取り、手早く眞向切下ぐれば、「南無三寶」と拔合せ、爰を最期と戰ふ太刀音、監物太郎は小陰に隱れ、夫と見ながら詞も懸けず。庭には兄弟修羅の巷、火花を散して、三重切結ぶ。鬼藏人は油斷にて、初太刀に受けし眉間の深傷、眼もくらみ滅多切、此方も手弱き女の手業、數ヶ所の傷によろぼひながら、難無く押伏せ乘つかゝり、念力通すとゞめの刀。監物太郎庭に飛降り、「オヽ健氣なり千鳥樣、御心の操顯れ、疑は晴れたれども、此深手ではもう叶はぬ。心は如何に」といたはれば、苦しげに起き直り、「自とても殿樣の、お情受けし者なるに、樣子に依つてお國へは、叶はぬとありし時、酷い仕方と恨みしが、此しだらでは疑の、懸るは道理、私が因果と、諦めて居ますれども、兄弟の惡心故、自づと殿樣に御緣が斷れる、是ばかりが黃泉の障り」と、血汐に染みし五體を投げ、泣く聲奧へ聞えてや、一間の障子押開き、御臺は烏帽子狩衣を召され、悠々と立

殊更隣國には、大内之助義弘といふ佞人あれば、君御遁世なされし事を押秘み、幸ひ歸國を許されし砌、いつもの如く繁氏卿御歸國と世上へ見せ懸け、御臺樣に我君の裝束を召させ、一刻も早く國元へ御供して下るべし。跡目の願はお國から。急いで御用意遊ばせ」と、せきたつ詞に歎きを止め、「兎角可きに」と、烏帽子狩衣取上げて立給へば、千鳥の前袖を控へ、「私もお國まで、お供は致す身なれども、お前は石動丸樣といふ若君あれば、是に越したる形見はなし、せめて朝夕御身に添ひし、此烏帽子狩衣を、妾に下し給はれ」と、取付くを監物太郎、「御尤には存ずれども、たつた今お聞の通り、御跡目相續の力と致す烏帽子狩衣、此方には進ぜにくし。ハテ何をがな。オヽそれよく、究竟一の形見有り」と、社の鑰を取出し、「是はあれなる祠の鑰、社の内には其元の、大切になさるゝ形見あり、扉を開いて取給へ。併し爰をよく得心あれ其形見のなりゆきにて、お國へお供は叶はず」と、鍵投出し謎を懸け、御臺所を誘ひて、奥深くこそ入りにけれ。千鳥は一句の判じ物、「御形見のなりゆきにて、お國へ行く事ならぬとは、どうやら物のあるいひかた、譯こそあらん」と庭に降り、社の傍へ立寄りて、何かは知らず開いて見んと、錠前明くれば待かねしと、飛んで出でたる鬼藏人、「ヤレ怖や」と逊退きしが、顔を眺めて、「ヤア兄樣か、何故爰に、縛られたはどうした科」と、驚きながら親は泣寄、縛め解け

「ヤレ待給へ」と押留め、「疾くより某左様には存ずれども、如何程お留め申すとも、最早留り給ふまじ。先は殘し置かれたる、御書置を見給へ」と、一通を差出せば、是非もなく〳〵取上ぐる、涙に聲も顫はれて、しどろもどろの讀癖を、千鳥も倶に差覗けば、「涙ながらに書殘す一通、一、我弓箭の家に生れ、何暗からぬ身なれども、家國を捨て妻子を捨て、世も捨人の沙門となるは、前世未生の佛縁ならん。思計らず降つて湧いたる遁世を、胸狭き女心に、浅ましき姿を見せける故と、嘸かし歎きの餘り、倶に姿も變へたく思ふらん。さにあらず、妻子珍寶不隨者とあれば、死出の旅路は別れ〳〵、伴ふ人もなく、隨ふ者も無く候。とはいひながら、只忘れ難きは石動丸、やう〳〵二歳の時國に殘し、夫より又七年餘り、顔も見ず候へば、嘸成人も致し、大人しくもなりつらんと、思へばいとゞ懐かしく、忘るゝ事は之なく候。石動丸を傅立て、加藤の跡目を繼がせてたべ。父が此身になり候へば、若しや流浪も致さんかと、是のみいかう案じ候。必ず〳〵歎きに暮れ、悴が事を忘れぬ樣、返す〳〵も賴入候。千鳥へも一通を殘さんと思ひしかど、心急かれて候まゝ、此文を一緒に眺め、牧の方に力を付けてくれよかし。云ひたき事は山々なれども、涙に筆も廻りかねり〳〵」讀みもをはらず三人は、わつとばかりに泣沈む。監物太郎涙を押へ、「殿の事は歎きても詮なき事、一大事はお家の跡目、若君の御身の上、

ろと、倶にうろたへおはします。監物やう〳〵心を鎮め、「ヲ、驚き給ふは理。先程禁裏より御歸館の節、いつに勝れし御機嫌、あれなる櫻の本にて御酒宴の折柄、御盃へ花の蕾散つたるとて、無明の悟を開き給ひ、さも心細く御意なされしを、打消しては置いたれども、御兩人の髮逆立ち、蛇の如くになつて咬合ひしを、御覽あつての發心か」と、歎くに御臺千鳥の前、亂れし髮に心付き、現ともなく夢ともなく、咬つつ咬はれつ爭ひし、互の覺一時は、どうど轉びて泣沈み、前後不覺に見えけるが、「ア、恥かしきは人の心、此度都見物がてら、お迎に登りしが、千鳥殿と殿樣との睦じさ、見るよりも妬ましく、胸も搔裂く腹立を、じつと耐へてうはべには、美しうつきあへども、寐た間に本心顯はして、淺ましき有樣を、お目に懸けしか、悲しやな。切ては國に殘りたる、石動が大人しく生立つまで、思止りて給はれかし。呼止めてくれぬか」と、歎き給へば千鳥も涙、「けはひ化粧紅鐵漿より、髮形ぞと艶付けて、かた笄よふきあげよと、結揃へしは殿樣に、見限られまい爲ばかり。其髮が蛇とならば、體は鬼にもなりかねまい。見捨て給ふも理ぞや。御出家も皆私が業」「イヤ遁世をさせませし、科人は自よ」「イヽエ私が」「ハテ私が」と、涙張る繰言に、思案なかばの監物も、袴の襠に淵をなす。御臺所は涙を押へ、「イヤイヤ泣いては濟まぬ事、まだ程遠くはござるまい。追駈けて留めん」と、千鳥諸共立上るを、

忌はしや穢はしや。妻子は地獄の家土産と、説示されしに疑無し。花の蕾の散つたるに、思ひ較べて観ずれば、是ぞ好き菩提の種、家國榮華も望無し。迷ふが故に三界の、火宅に心を苦しめり、悟れは十方空ならずや」と、今まで心のめいりし上、いや増りたる發起心、烏帽子狩衣脱捨て給ひ、指添拔いて髻を、ふつつと切つたる輪廻の絆、硯引きよせ書置を、認め給ふ其内に、奥座敷には檢校が、琴の音色もしをらしく、歌の唱歌は聞えねど、彈く爪音は薄雪か。薄き契も過去の因縁、必ず心残すなと、こまぐ筆に書盡し、御髻に烏帽子裝束、書置添へて彼所に置き、裏門より悄々と、立出では出でながら、さすが恩愛捨て難く、ふり返つて涙に暮れ、「二人が夢覺めかくと知らば、嘸嘆くらん不便や」と、見遣り給へば蛇形の黒髪、猶も盛んに挑合ふ、執著心に愛想も盡き、身ぶるひ立てて足早に、行方知れずになり給ふ。かくとは知らず監物太郎、立出づれば一間の騷動、見れば件の怪しき姿、驚きながら走寄り、用捨も無く咬合ふ黒髪、指添拔いて切放せば、二人も悄り起上り、顔を見合せ一時に、吐息をほつと吐き給ふ。監物太郎あたりを見廻し、「我君はましまさず、御烏帽子狩衣の、脱捨てあるこそ心得ね」と、立寄り見れば御髻に、一通添へて殘されしは、「はや御遁世か情なや」と、驚き騷ぐに二人も立寄り、「ヤア殿樣は遁世とや、何故の御出家ぞ」と餘りの事に興醒めて、泣くも泣かれずうろう

も、故と詞に勵みを付け、「こは言ひがひ無き御迷ひ、釋迦といふ賣僧頭、樣々の僞りを書きちらし、一文不知の嫗嚊を、たらさん爲の一切經、喩へて申さば盜賊を捕へ、殺生なりとて助け歸さば、國家の憂となる道理。アタ忌はしき後生の道」と、心に思はぬ雜言に、佛法誹るも諫の忠言、心を感じて打頷き、「誠に汝がいふ通り、弓馬の家に生れながら、假にも無常に引かされては、武の道は立難し。此後ふつつと思ふまじ。さりながら、よしなき事に心もめいり、何とやら物淋し。次の間にて檢校に琴を彈かせよ、御臺や千鳥に目を覺させ、我は是にて慰まん。早疾く〱」とのたまへば、只當然の御戲れ、強ひて諫に及ばずと、御前を立つて入りにけり。「ホヽいつに無き我が佛法歸依、武邊に弛もつかんかと、案ずるは尤々。イデわつさりと酒宴を催し、結ぼれし氣を晴らさん」と、立寄給ふ障子の內、不思議や俄に物騷がしく、あたりに響き、庭の木草もさわ〱と、風も身に沁むばかりなり。こは心得ずと一間の障子、さつと開いて見給へば、餘念無く臥し給ふ二人の黑髮、眞逆樣に蛇の如く、鎌首ぼつ立て咬合ふ有樣、さしもの繁氏怖氣立ち、呆れて詞も無かりしが、「ハッア恐るべし〱。外面似菩薩內心如夜叉と說かれたる、佛の戒め目のあたり。顏に白粉丹花の脣、粧ひ飾りて菩薩の如く、互に妬む顏もせず、打見には中好き體、心の底に邪鬼執念、絕えせぬ證據をおのれと顯し、かく淺ましき體たらく。

どもは囁き合ひ、「中の好い同士打解けて、テモ快う御寐なつた。お日の明くまでこちらものんき」と、座敷の障子そつとさし、皆々一間に入りにける。程無く左衛門繁氏卿、歸館を告ける奥使、跡よりしづ〳〵入り給へば、監物太郎出迎ひ、「是はしたり、殿樣のお歸を、奥方には御存じ無いか」と、一間にかゝれば、「さなせそ〳〵、餘念無く寐入りし體、互に嫉む色も無く、睦じきこそ滿足なれ」と、悦び給へば頭を下げ、「何樣御意の如く、嫉妬のあるは婦人の常、其氣遣無き御二方、かくまで御中宜しき事、我々までの大慶」と、申上ぐれは繁氏卿、傍なる盃取上げ給ひ、「禁庭表の首尾も好く、歸國の暇を賜はりし悦び、我もかれらが花見の相伴、二人が風情を肴にて、花の本の一獻、酌せよ」とのたまへば、ハ、ハツト銚子を押取り、つぎ懸けたりし不老不死、藥の水の滴りと、一つ受けさせ給ふ折節、雲心なく吹く風の、盛りを散すひと嵐、受け持ち給ふ盃へ、蕾一ふさ落ちにける。繁氏つく〴〵打眺め、「散ればこそ、いとゞ櫻はめでたけれ、とは詠みたれども、雨にしぼみ風に揉まれ、盛りの散るはとがならず、未だ時にも逢はぬ此蕾、盃の中へ散つたる事、是こそは人界の、果敢なき數の老少不定、老いたるが先だつとも、若きが跡に殘るとも、定め難きは人の命、忘るまじきは後生の道」と、文武に猛き繁氏の、無常を觀ずる悟道の一言、打悄れたる御有樣、監物太郎も尤と、倶に悟りは開けど

緩々登りし今度の御迎ひ、今日は歸國のお願に、禁裏樣へお上りなれば、お暇が出るや否や、此方樣を國へ伴ひ、たアんとお禮を申さにやならぬ」と、奥底も無き御挨拶、「是はまあ有難いお詞、今更申せば何とやら、言譯がましく惡けれども、數ならぬ身の、殿樣に添臥、御臺樣のお目に懸らば、お叱りもあらんかと、思ひの外な御憐み、さう結構におつしやつては、お返事もなり惡し、千鳥よどうせいかうせいと、妼衆同然に御意なされて下さりませ」「ハアテわつけもない、大事の殿御を半分づつ、いとしぼがつて貰ふもの、如在にしてよいものか。其代りに此上外で殿樣の、惡性があるならば、二人して云はうぞへ」「そりやお氣遣ひ遊ばすな、お前にお世話は懸けませぬ、御名代と二人前、私が番を致しませう」「ヲヽそれ〱」と頷き合ふ、中好き魚と水入らず、妼どもは手をざをに、お氣慰みと持運ぶ、雙六盤や歌がるた、野風爐提重茶辨當、取散せしはお座敷を、野山にうつす花見酒、數々廻る盃に、御臺所興じ給ひ、「追付け殿樣お歸あらん、お目に懸けるも二人が御馳走、アノ櫻を題にして、腰折なりと一首づつ、短册を付けまいか」「コリヤようお氣が著きました、及ばずながら私も」と、雙六盤を眞中へ、脇息に押直させ、二人が臂を掛けまくも、かしこき國の和歌の道、案じ入つたる御酒機嫌、心隔てぬ中々は、何に遠慮もなぎさ漕ぐ、蜑の小舟やとろ〱目、すや〱寐入り給ひければ、妼

心得ぬ賣人め。荷箱の内より大小を取出し、奥を目懸けるきつさう、いかさま仔細ぞあらん。眞直に白狀せよ、骨を斷つても云はさにや措かぬ」と、捻ぎ付くれば吠面ながら、「ヤア下郎とは舌長し。儕等があがまへかしづく、千鳥の前が兄黑塚の鬼藏人、繁氏が爲には小舅、主同然の某を、土足に懸けたる罰當りめ」と、云ふに驚く色目を隱し、「シテ其兄が何故に、切込んで誰に敵對、目指す相手の名は何と」「チヽ其目當は加藤左衞門、繁氏が首取つて、知行にする」と撥反すを、起しも立てず「扨こそ」と、刀の提緒手ばしかく、後手に縛上げ、「定めて一味の輩もあるべし、密に詮議」と引立つれば、奥より來る女中の足音、見付けられては詮議の妨、如何はせんと取つ措いつ、思案の扉開いて、幸ひ暫しの獄屋、神は見通し「赦させ給へ」と、社の内へ無體に押込み、鰕錠しつかと卸し置き、さあらぬ體にて入りにけり。妹脊の中にかたまりし、石動丸の御母君、牧の方とは申せども、子持と見えぬ御形、花見座敷へ出で給へば、跡に續いて千鳥の前、大内山の木隱れより、移し植ゑたる花なれど、さすが妾と本妻の、禮義は戀の品定め、「ノウ千鳥樣、つれあひ繁氏樣、七とせ餘り禁裏の勤番、首尾好う勤めておしまひなれば、是からお國で御休息、永々の在京に、夜の御殿の伽も無く、お寂しからんと案ぜしに、自になり代り、殿の心を慰むる、そもじ樣があるとの噂、國元で聞く其嬉しさ、とんと心が落著いて、

ら、勸請したら可からう」と、苦もしどもなき高咄。折から塀の外面には、萬よしなを取交ぜて、賣る商人の聲高く、ほの聞ゆれば婢ども、「そりやこそ例の百物賣、小面の憎い商人め、裏門から呼込んで、嬲つて遊ぼぢやあるまいか」「こりや可からう」と騷ぎ立ち、何がな見たがる聞きたがる、浮氣盛りの女の童、門の戸明けて呼込めば、「ハイ粉類なら何なりと、蕃椒でも胡椒でも」「イヤそんなもな入りませぬ、例の樣に賣立てて聞かさつしやれ。夫が厭なら何にも買はぬ。早う〳〵」と口々に、せがみ立てられ、「まつかせ」と、頰杖ついて聲張上げ、歌「のこのこや豆の粉や、まめな手くせに尻こぶた、ぶつょりひょりと山椒の粉、奴樣には蕃椒、坊主の好な胡椒の粉、若い嫁御のはなはじく、姑御には辛子の粉、おてきに盃さしもぐさ、身柱九十一、すゑて心もちや吉野葛、召しませい」とぞ賣りにける。婢ども目を引き袖引き、「マア當分何にも入らぬ。太儀に能う喋りやつた。のこ〳〵去にや」と打笑ひ、一度に奥へ走入る。商人は荷を卸し、商「エヽ今日も又取りくさつた、テモなめ過ぎた女ろさいども」と、呟きうそうそ差覗き、彷徨く内に監物太郎、ひよつと來懸り小蔭にて、窺ひ居るとも知らぬが天命、荷箱の内より大小取出し、身拵へしてのつさ〳〵忍び入るを、「曲者待て」と呼懸けられ、南無三寶と振返る、透を有らせず庭に飛降り、摑んで大地へぎやつとのめらせ、足下に踏まへ、「ヤアラ

御情、申すは恐多けれども、とても此場のしぎ、御家來も沙汰無き樣、仰付けられ下され」と、願へば繁氏返答無く、最前笑ひし若黨の、横口戸平を呼出し、「汝に別して用事あり、是へ來れ」と仰に任せ、何心無く來る所を、飛びかゝつて首打落し、「手前の政道はかくの通り、外に他言は致すまい。お別れ申す」と細道を、分けて情の御捌、有難しとも兩人は、御後影伏拜みくゝ、爰は所も男山、正八幡の化身かと、思ふ迷も狐川、渡しを急ぐ旅人と、陸を早める浪人の、心は一つ、行く道は、二つに隔つ淀堤、左右へこそは、三重別れ行く。梅を諸木の兄とせば、櫻は花の振袖や、姉が小路に美を盡し、華麗を飾る殿造り、加藤左衞門繁氏の館には、庭を野山と櫻狩、上下ざゝめき賑へり。奥方近き坪の內、下部の出入叶はねば、媵衆が掃除役、中にも小りうが竹箒、塵取さらへと搔交ぜて、問はず語りに、「なんと皆の衆、此廣庭へ出臍の樣に、あの社は何といふ神樣ぞ、あた邪魔な、掃除が成らぬ、箒ついで掃出そぢやあるまいか」「コレあの人とした事が、あれはお國から勸請なされた殿樣の氏神樣、麁末になどしやつたら、逆罰が當ろぞや」「ム、お國から取寄せるのをば勸請といふかや、そんなら今度お國から、勸請なされた御臺樣、千鳥樣と殿樣のしつぽりを御覽じたら、ふんすんで堪るまいと、案じたはあての搥、お妾女郎と奥樣の、中の好いのはどうした事、あんまりで拍子が無い、序に悋氣もお國か

「イザ此所で」「尤」と、雙方最期の身拵へ。繁氏外の家來を招き、何か耳き給ふにぞ、相心得て乘物より、御指替の大小を、頓て取出し差上ぐる。其間に兩人座を占めて、既にかうよと見えければ、「やれ暫く」と立寄給ひ、「最前より御兩所の心底、尤さこそ有るべき儀、併し大功は細瑾を顧みずと申す、僅の恥に命を捨て、何國の誰と知らざれば犬死も同然、又お腰の空いたるは、指銹びたれども某が、指替にて塞ぎたし、異議無く貰ひ給はらば、喜悦ならん」と一腰づつ、差出し給へば兩人とも、ハットばかりに平伏し、「有難き御裁配、違背申すは憚ながら、いづくいかなる御方とも存ぜず、まして御恩受ける筋無し、此儀は御免」と辭退の詞。「ホヽ一理あり至極せり。某儀は筑前の國、加藤左衞門繁氏と申す者、則ち當所は禁廷より、馬の飼領に下し置かれし拙者が領分、其場にて兩人とも橫死あつては跡の難儀、其難儀を遁れん爲、進上申す此兩腰、快く受け給はゞ、如何許り大慶」と、退引ならぬ仁者の詞。「ハヽ、ハヽ」はつと押戴き〳〵、「冥加に餘る御情、何時の世にかは忘るべき。元我々は」何某といはんとするを、「アヽコレ〳〵、お名承つては恩に懸けると申すもの、志が無足致す、顏も知らず名も知らず、重ねてお目に懸つても、お近附でござらぬぞ、急ぎの道お出であれ、お立ちあれ」と、慈悲に慈悲増す御詞、兩人餘りの難有さに、返す詞も無き中に、猶も手をつき頭を下げ、「かくまで深き

無い。ハレ其元にもいかい艱難なされたの、由なき儀を申懸けお刀を折らし、お腰が空いて氣の毒」「イヤ拙者めが麁相で其元のお腰が」「ハテ夫は此方も麁相」「是は〳〵夜中故確とお顔も見えず、御縁あらば重ねてお近附に罷成らう」「左樣致さう、はれやれお隙を取りました」と、互の禮儀砂打拂ひ、立別るゝを横口戸平、大口開いて高笑ひ、「やれ〳〵、いかに浪人すればとて、折れる物を腰に挾み、奉公拵とは野太い和郎達、イデ武士の見せしめに、面見て置こ」と立上るを、繁氏はつたと睨付け給ひ、御帶刀に手を懸けて、怒を含む御顔ばせ、惡者作りも主の威に、恐れてかしこに蹲まる。行過ぎたる二人の侍、立止つて一思案、心ならずも雙方が、引返して暫くは、互に詞も無りしが、脇指折られし侍小腰を屈め、「誠に其元には刀を折り、我心を宥め下されたれども、今お聞きの通り彼處なる御家來、何彼と惡口せられ、何とも此場が濟み難し、御思案極め下され」と、横口戸平を尻目に懸け、怒を含む物ごしに、「いかさまあの通りに沙汰あつては、お互に身上仕官の妨げ、一旦濟んだる事なるに、由なき匹夫の口先故、討果す事近頃殘念、と云うてあれしきを對手にも大人氣なし、又其主人へ兎や角いはゞ、浪人の糧に盡き、物取などゝ蔑せられん。エヽ是非もなき次第、此上は潔う刺違へ、最期を倶に致すまいか」「成程拙者も其覺悟、ハテ命冥加な下郎め」と、繰返し〳〵、殘多げに戸平を睨付け、

げても退がれねば、せん方煙草燻らして、打詠めてぞ在します。件の侍折れたる脇指拾ひ持ち、相手に向つて詞も荒さず、「誠に恥を申さねば理が聞えず。拙者めは遠州者、永々の浪人故尾羽打枯し、餓死せんよりはと存じ、武士の有るまじき一腰を賣代なし、奉公かせぎに西國へ罷下る。時の過とは申しながら、此方と擂合ひに此如く、指添をこぢ折り、あれに歴々も見てござれば、面目の雪ぎ様なく難儀に及ぶ、何卒了簡の付くべき義ならば、了簡付けて御通り下され。それとも御思案に及ばずは、御不肖ながら相手になり、討果して下されうや。お返事次第」と相述ぶる。相手の侍ちつとも臆せず、「御尤至極〳〵、手前麁相者ゆゑ思はずも無調法、ガ討果す儀を御詫は申さぬ。併し指添が竹光故、面目無いとは、胸中が小い〳〵」「ア、これ〳〵、指添でも武士の魂、竹光でも苦う無いとはな」「ホヽ一筋なお心故、是しきを恥辱と思召す、イデ某が大恥かいてお目に懸けん」と、刀抜出し両手に握り、遠慮會釋も鞘ぐちに、ほつきと折つて目先へ突付け、「是御覽候へ、手前も此通り。拙者めは播州浪人、都方へ奉公拵の、路銀何かに詰り、まだ其元は指添、拙者は刀、恥辱は倍増す武士の魂、折つて見せたは外聞を、倶に現すお腹癒せ、夫とも討果す儀に違背は致さぬ、お相手にならうか、と申して好みも致さず、又逃げも仕らぬ、如何様とも御勝手次第、サアお返事は」と膝立直せば、「ヤレお急なされな、言分

勸請ありし正八幡宮、御鎭座もことわり、紀氏きやらさんとも云つゝべき御山、入日に輝く風景、いやはやどうも〳〵。斯樣に方々の詠に心浮れ、思はずも日が長け、はや暮に及ぶ、提灯の用意はよいか。見れば渡船も向ふへ漕行き、戻るを待つも退屈、堤傳ひに行くべきぞ。案内せよ」とありければ、御供の若黨横口戸平、家老顏する緩怠者、つゝと出て、「ハレヤレ殿には御存無いか、此道は登船の引場、道のだく〳〵、中々歩まるゝ所ならず。旦那は乘物にもお召しなされうが、家來は何になるもの、渡しをお待ちなされよ」と、出過た慮外も仁者の優美、「いかさま、三里迴つて本海道といへば、惡所を行くは不行作、所の名さへ狐川、ばかされてはなるまい」と、御戲も時の興、挾箱に腰打掛け、暫し休らひ給ひける。日暮を急ぐ旅人の、五人七人一連に、乘り後れじと岸陰に、立集れば向ふより、漕來る船も人の酢、著くと乘手は乘ろとする、上ろとすると兩方が、揉合ふ中に浪人と、覺しき武士が上りがけ、又此方より乘る人も、同じ風なる侍が、せり合ふ中を揩合うて、何とかしけん互の大小、もぢり合ひしを急ぎ業、解く拍子に一方の、脇指ほつきと折れにける。ハツとばかりに折られし侍、面目無さに笠傾け、たゝずむ内に相手の浪人、行過ぎるをこたへかね、「待て暫し」と呼かける。急ぐ身なれど是非なくも、立留りし互のきつ相、「スハ事こそ」と船は迯げ、繁氏卿も乘り後れ、さながら迯

此義にあぐむ」と云はせも立てず、「ヤレそれは一途、高雄山の異行人、追拂へとは最初の勅、生捕れとは異議に及ぶ時の事」と、云ふに頷き、「それよく、いざ乘物を表立ち渡してくれう、安堵せよ」と、家來に云付け昇上げさせ、「こりや／＼新洞慥に聞け、洛中洛外追放の行人、網きせて渡すぞ」と、いふに悦び、「尤々」また幾千代の友白髮、祝ふ嫁御の色直し、雲井の薰蘭麝の乘物、雙方一度に取かへし、損得無しの山道を、分けて信俊秀貫が、肩も揃うてヱイサッサ、誘ふ嵐の入相は、かねて思ひの羽を伸し、濡るゝ鴛鴦妹脊鳥、是は遁れぬ網鳥や、網代のうきに大内之助、伴ひ歸る忠臣義士、例は少き君が代に、揚ぐる譽は高雄山、勇みいさむる夕間暮、別れ／＼になりにけり。

第二

唄 九十九折には次手馬、川瀬は船の自由する、八幡山崎二山の、間を棹さす船渡し、黄昏よりも火を點し、夜もすがら渡すゆゑ、狐川とはいふやらん。筑前の國の城主加藤左衛門繁氏卿、勤番の隙詣、八幡を懸けて山崎や、渡場近くなりければ、暫く此方に立休らひ、「ヤ家來ども、都は洛中洛外とも、孰を孰といはれぬ風景、別けて男山の昔を尋ぬるに、豐前國宇佐の郡より、

迯れん」と、乗物引寄せ飛移れば、仕濟したりと鐵の大綱、雙方より打きすれば、監物太郎駈來り、大聲上げ、「ヤア〳〵大内、武士の山籠り、不審をはらせの勅命にて、加藤左衞門繁氏が家來、監物太郎向ふたり。言譯あらば天奏にて申し開かれよ」と、いふ聲を聞くよりも、大内之助五躰を搖る唸聲、「ヤア〳〵黒塚はをり會はぬか、藏人は出會はぬか」と、乗物兩手にめりめりぐわた〳〵、一人前の大地震、うめく谺に鬼藏人、尻引褰げ飛來り、有無を云はずに無二無三、切つてかゝれば大佛新藏、丁ど受けて受流し、眞向微塵と切りかくれば、こは叶はじと鬼藏人、はふ〳〵迯げて失せにけり。かゝる折しも岩蔭より、新洞左衞門秀貫が、追立て來る鋲乗物、「コリヤ〳〵監物、推量が其乗物、某が主君大内殿よな、さこそと知つて此方もぬからぬ。此奪取りし乗物は、汝が主人繁氏へ、禁中より下されし千鳥の前、奪取つたは汝へ面當、主君大内を戻せばよし、さも無くば恨の刃、此乗物へ突通す、如何に〳〵」と聲懸けたり。「南無三寶」と監物太郎、「コリヤ新洞、勅命下りし千鳥の前、殺さば汝朝敵同然」新「ヤア主を擒になすからは破れかぶれ、サア返答は」と刃の影、監「やれ待て、急くな〳〵。左程忠義を立つる根性、無下にするも本意ならず。殊に主君の寵愛、殺さるゝも殘念、理を非に曲げて乗物ぐるめ打換へて得させん。さりながら、勅命受けて生捕つたる曲者、私に助けては、朝家の聞えも恐有り、

ば跳上る、馬の蹴上げに新洞左衞門、はね倒されて伸る所を、障泥と鞭を打重ね〳〵、馬を飛して一散に、奥山指して駈けり行く。新洞怒の齒を嚙みしめ、忠義に固まる老の兩足、踏固め踏みしめて、追駈行く一筋道、通り懸りし鋲乘物、向ふ見ずの新洞左衞門、供先押割り駈行くを、つき〴〵の侍立塞り、「不作法なる老耄、此乘物に召したるは、忝くも禁中より、繁氏卿へ御入ある千鳥の前、片寄れ下れ」と罵つたり。新洞左衞門心づき、是こそは監物めに、ほで合させる質物と、乘物の棒しつかと執へ、「ハレよい所へ千鳥の前、乘物を踏碎き駈通るは易けれども、こつちに少し入用な。元の所へ舁戻せ、宰領は此親仁」と、力に任せ「コリヤ〳〵〳〵、エイ〳〵〳〵」と突戻せば、色眞青に𦘕ども、足もよろ〳〵六尺も、降つて湧いたる災難も、すべき樣なく理不盡に、深山を指して押登す。暫くあつて山の巓、義弘が籠りたる洞のあたりをうそ〳〵と、尋迴りし若侍、頰冠りにて顏隱し、明乘物を此方に吊らせ、巖の前に禮義正しく、「イカニ我君義弘卿、今日禁庭の風聞、當山に於て隱住の族、急ぎ誅せよとの勅諚にて、則ち討手向ふの評定、此義密に達せよと、主人新洞左衞門が注進によつて、則ち家來岩淵平馬、御迎ひに參上」と、似つこらしげに呼ばはれば、洞の扉を押開き、義弘は寛々と、さあらぬ體にて歩出で、「何新洞が家來迎ひに來りしとな、大義を起す某、小事の害を待たんより、一先此場を

さば兎も角も、サア其様子は、仔細は」と、問詰められて、「イヤ其義は、其事は」と、差詰つたる返答に、「ヤア狼狽へたる一言、家來として主の心推察せずに仕へるか、善ならば善、悪ならば、なぜ諫言を加へぬぞ、不覺者」と云捨てに、引直す轡面、追取つて引留め、「オヽ尤なり監物太郎、汝が主の繁氏殿とは事かはり、主君大内は古今の猛將、思ひ込んだる初一念、中々家來の諫も聞かず、存じ付いたる大願有りと、仔細いはずの山籠り、禁廷へは所勞の云立、萬一此事顯れては、上を掠むる大罪、大内の家の滅亡、さるによつて某が、無體に討手の役目を願ふ、主持つた身は相互、一生覺えぬ此親仁が、手を下げる、聞分けよ」と、いへども聞かず、「いや／＼、洞穴に壇を築き不及の望なす者多し、假初ならぬ勅命を受け、善とも悪とも仔細を聞かず、私に了簡する事ならぬ／＼。コリヤ大佛、無益に時刻も押移る、構はずとも皆引連れ、山の手を追取巻き、大内之助を逃すな」と、下知に隨ひ供廻り、一度に勇み入りにける。元より短慮の新洞左衛門、無念とや思ひけん、「ヤア奇怪なり監物太郎、六十に餘る某に、様々の口たゝかせ、其上主君と名を明かさせ、無得心なる人畜生、いつまでも動かせじ」と、乗つたる馬の尾本を追取り引戻せば、又馬上には障泥を打ち、ハイ／＼／＼と乗出す、互の忠義に精氣を揉み、心は逸れど老の腕、次第に緩む疲を見込み、爰ぞと監物はずみにあふり、丁ど當つれ

年天下を望み、日夜朝暮大玄谷神の呪を唱へ、又は諸國の安否を窺ひ、國家を握る企なれども、合點の行かぬは繁氏一人、助置いては大望の妨げ」と、語る半へ轡の音、程近く聞ゆれば、奇異の思を大内之助眼を配り、「ヤアラ心元なし、暫しが内我は窟に身を隱さん、汝も暫し忍べよ」と、云含めつゝ引別れ、茂りの内へ入りにける。夕日に背いて向ふ高雄山、勇の鈴もはなやかに、馬上ゆゝしく乘りたるは、監物太郎信俊、身は腹巻に小手臑當、暫時に駈ける沛艾馬、鞍に引添ふ譜代の郎等、大佛新藏諸侍、息をはかりに駈來る所へ、遙にさがつて「オヽイ、オイ」と呼かける。心急けども監物太郎、何事やらんと手綱かい繰り、駒をかへせば新洞左衞門、頭に星霜降積れど、體は忠義の韋駄天走り、徒士だちになつて駈付け、「ヤア曲もなや監物太郎、朝廷にても爭ひし今日の討手、是非某にふり替り、其方密に歸つてくれ、頼む／＼」と云ふ間を待ちかね、監「ヤア心得ぬ御邊が胸中、さまでの討手にもあらざるに、息筋張つての所望、但し其曲者に由緣あるや、心底明さば品により、了簡もあるべきが、無體の望いぶかし／＼」「ホヽそれも尤、何を隱さう閑居して、異相に見ゆる行人は、我主君大内之助義弘殿。オヽ驚きはさこそ／＼。かく打明くる上からは、爰が互の了簡づく」と、云ふを打消し聲荒らげ、「ソウ聞いては猶赦されぬ。禁裏表は所勞と僞り、此山に隱れ住んで、何の爲の難行苦行、それを明

と留むる行相、香の衣を身に纏ひ、亂髪逆に生茂り、一丈餘りのかつらの杖、高足駄踏鳴し、悠々と立出づる。さしもの藏人肝を消し、暫し詞も無かりけり。「ホヽ目馴れぬ姿不審顔は尤々。我此程より大願の仔細あつて、當山に分入り身を凝らせど、胎金兩部の峯も慕はず、赤木の數珠を押揉んでは、四海を胸に疊む妙術。汝妹が緣を頼みに、繁氏に仕へんとは、迴遠き分別、某が幕下につかば、高祿を得せしめ、先途を見屆け取らすべし」と、さも横柄なる詞つき。何がなかきつく猿智慧の、押直つて頭を下げ、「何が扨〳〵、落著く島も無い某、いか樣ともお目がねに預りたし」と手をつけば、行「ヲヽ賴母しく〳〵、いで〳〵汝が高祿出世の手がかりとなる判じ物、よく判じよ」と歩寄り、松に絡みし藤葛、若葉は爰ぞと杖取延べ、丁々と二枝三枝、薙落して、「是見よや、元來加藤は藤原氏、其藤をまつ此如く切放す、早く此心を察せよ」と、いふに角ぐむ鬼藏人、額の皺に智慧かき寄せ、「ムヽムヽ、近年の謎したり〳〵。其藤原の藤の枝を切捨て給ふは、此藏人に繁氏が首」「アヽ聲高し、密に〳〵。すりや判じたる心底は」「成程討つ氣でござれども、未だ君の御名をも明されねば、あつとは得こそ申すまじ。まづ姓名を御聞かせ」と、云ふに頷き、行「ホヽ、うい奴、でかいた〳〵。かく胸中を見据ゑし上は、何か包まん、元某當山に住む者ならず、九州に隱なき、大內之助義弘といふ者。そも此山に艱苦する事、我多

明けて、千「珍しや藏人殿、まだ息災で此世に御座るか。へヱ、此方はの、いふに及ばぬ事なれども、父上黒塚群寮樣は、代々續く禁裏の博士、君の覺も目出たき家柄、男の子とては其元お一人、跡目も相續する身を持つて、十年以前凊涼殿のお能の時、醉狂の上人を過ち、直に夫よりお前は駈落、其お咎にて父上は、浪人し給ひ貧しき世渡り、忰故に家を冠し、先祖へ對して言譯無し、必何國で出逢うても、兄と思はゞ共に勘當と御遺言にて、貧家の死をばなされたぞや。夫に今更妹よ千鳥よとは、どの顔さげて對面ぞ」と、恥ぢしめられてさしもの惡者、押俯向いて詞無く、砂にのの字を書き居たり。千鳥の前は涙を押へ、「ア、怨むまじ、返らぬ事、皆の衆の手前も思はず、よしなき昔の長咄、日もたけて嘸やさぞ、縈氏樣にもお待ちかね、心急かれ」との給へば、「そりやお急ぎよ」と六尺ども、腰を振出す五枚肩、行く乘物の棒しつかととらへ、「イヤ妹、そう旨うは拔けさせぬ。何國までも同道」と、ねれけ懸れば家來の者ども、目をむき出し、「聞いた樣子が大泥坊、兄貴めでも大事ない、性根の直る異見の爲、目に物見せん」と立ちかゝり、遠慮會釋も生木の息杖、足腰かけて用捨無く、からさを投に打ちのめし、「厄介な繩くらひ、棒をくらうてよい氣味か」と、どつと笑うて行過ぎる。藏人漸々起上り、脊骨をさすり齒がみをなし、「へヱ、罸當りの妹め、此分で濟まさうか」と、駈出す後の方、「暫し〳〵」

れて居るわいの。お國には石動君とて、若殿までである御臺樣、れつきとして御座るとは知りながら、思ひ初めては忘られず、焚付けて見る衛士の篝火、姿をくろむ濡衣、つい門院樣に見付けられ、ハツト心に思ひの外、お氣の通つた粋な勅諚。是と云ふも自が年月念ずる心の誠、偏に觀音樣の御利生と思ふから、道よりしてのお禮參り。オヽ恥かし」とばかりにて、御乗物に召し給へば、與「夫なれば御尤、愈大悲のお力で、いぢむぢのない樣に、晩からはねびのだん、段々によい戀枕、うんうん雲雷くうせいでん、雷に臍取られぬ内、急ぎやく」と我一に、行掛りたる向ふより、惡者作りの深編笠、供先押割りのつさく、「ちと乗物へ御訴訟」と、のさばりながら立寄れば、家來の者ども聲々に、「願訴訟の事ならば、なぜ記録所へ往て吐かさぬ。ハレ狼狽へた素浪人」と、嘲笑へどちつとも怯まず、「おのらが知つた事で無し」と、押退けて乗物の傍近く、「コリヤ妹、見ぬ顔するは手が惡い。兄黒塚の鬼藏人、見忘れはしよまいがな。最前から樣子を聞けば、そちは今日繁氏殿へ嫁入をするとの話、それなれば無心がある、某をお館へ連行き、私が兄でござる、お取立賴みますと、たつた一口詞を添へなば、義理にでも繁氏殿、世話しやらねばならぬ事、さすれば兄が身上に有付く。とかういへば思案がある」と、妹に向ひ居合腰、刀捻くり嚇せしは、大人氣無くも面憎し。當惑ながら千鳥の前、乗物の戸を押

て、勇しき有様かな。勇む心に迎ひを待たず、嫁入急ぎし千鳥の前、さぞ館にて待ちかねん。宿の塒を暖めて、友鳴にせよ繁氏」と、御褥を立ち給ふ、御戯は常陸帯、結ぶ契は千代八千代、變らぬ國の三重春風も、匂を含む一霞、都は辰巳高雄山、峯は斜の白雲に、巖聳えて茫茫たる、雪も解け行く谷川の、苔滑かに松の聲、げに物凄き景色なり。被衣に靡く若草の、素足で歩ふ御所女中、男交りにざゝめくは、千鳥御前のお乗物、繁氏卿のお館へ、押付けて行く嫁入分、道を廻つて觀音詣、結ぶ誓のかねの緒に、緣も長き山坂を、息休めにとお乗物、松の木陰に立てければ、今日ぞ雲井の眉解けて、立出で給ふ千鳥の前、花を隈どる御姿、褄吹返す戀風も、憂きとや人は羨まじ。腰元どもはざわ／＼と、籠を放れし里雀、中にも梢が囀りて、「なんと皆の衆、小面の憎い此松に、抱付いた藤わいの。丁度あの樣に千鳥樣も、繁氏樣にしがみ附いて御座らうの。彼樣器量の好い殿御、御果報なあやかり物」と、なぶり懸れば砧が差出で、「そりや知れた事、云やるがくだ。したが、どうも呑込まぬは彼方のお心、今までは御所住居、やもめ烏の千鳥樣、飛立つ程に思召し、一寸でも早うお屋敷へござる筈、それに氣疎い廻りして、觀音參りが心得ぬ。お持たせ振の道草か」と、尋ぬれば打笑み給ひ、千「樣子知らねばさう思ふも理、いひ出すも恥かしい事ながら、繁氏樣に惚れたのは、今更の事ならず、とうから惚

の注進、如何計らひ申さんや」と申上ぐれば、關白良基公笏執直し、「出家ならば佛意を慕ひ、難行苦行に身をこらし、道をためす教もあり。有髪の行者は心得ず。殊に往來を悩す由、何にもせよ聞捨てになり難し。帝都の騒ぎにならざる様、汝密に行き向ひ、都の内を逐拂ふか、異議に及ばゞ召捕つて糺明せよ」と仰の内に、「承る」と立つ所を、新洞左衛門「暫し」と呼留め御前に向ひ、「夜前までは彼が主繁氏の勤番、今朝よりは手前の主人、大内義弘が役目、此討手某めに仰付られ下され」と、願へばやがて監物太郎、「イヤ是新洞殿、高雄山は北嵯峨に相續き、主君繁氏が預り場所、其上拙者が承つた役目、横間より手前へとは我儘至極」と云はせも立てず、「ヤア武の道から武を望むを、我儘とは舌長し。是非此討手を某に」と、云捨て立つを、「どこへ〳〵、人の役目を好い年して、かち落さうとは大人氣無し。似合うた様に圓座の上、髭を數へて居召され」と、詞荒して駈行くを、走りかゝつてしつかと執へ、「年は寄つても此親仁、まだ腕先には覺がある。行かれうならば行て見よ」と、引留めたる力瘤、「エヽ面倒なる老耄め」と、もぎ放せば摑付く。「待てよ〳〵」と關白の、仰も聞かず繁氏の、詞も餘處に監物太郎、一ふり振つて振放し、飛ぶが如くに駈出すを、奈落までもと新洞左衛門、辭儀も作法も白砂を、踏散らしてぞ追うて行く。通陽門院叡感あり、「大内には歌爭、武士は武を爭ふ、其家々の習と

も思染めたりし、色をばいかでさますべき。コレ〳〵繁氏、國に妻子を殘し置き、枕の伽も七年餘、懈怠無き勤番の、褒美に千鳥を取らずべし、寂しき閨の友とせよ。其いにしへ、近衞の院、源三位賴政に下されしは、池の眞菰に水增して、引きぞ煩ふ菖蒲の前、夫には引替へ戀風に、吹立てられし浪の上、啼騷いだる千鳥ぞや。長く比翼の友羽がひ、打交せよ」と宣旨あれば、「コハ有難し」と繁氏卿、千鳥は猶も悅びの、胸落著けど心は急き、「又もや御意の變らぬ内、私はお屋敷へ、お先へ參つて待ちませう、お前は跡から御歸館」と、早しこなせし妻形氣、いそ〳〵立つて入りにけり。折からしらす朝嵐、人の面も白々と、明渡りたる四方の空、「御番の代り」と聲かけて、豐前の大領大内之助義弘が舊臣、多々羅新洞左衞門秀貫、白髮交りの曲者、階下間近く額を下げ、「今日守護の勤番は、主人大内義弘が役目の所、此間より所勞に依つて、某が名代、御赦免仰ぎ奉る」と奏すれば、繁氏立寄り、「病氣とあれば餘儀無き仕合、天子にも勅許有るべし。イザ役目を讓り代らん」と立出でんとし給ふ所へ、執權監物太郎信俊、「奏聞の事あり」と、訴出て庭上に畏り、「抑も高雄の御山は、觀音薩埵の靈驗あつく、諸人の信心日々に彌增し、步を運ぶ靈地なるに、十日ばかり以前より、身に香染の袈裟を懸け、おどろの髮振亂し、高足駄にて異形の行人、夜は洞穴に取籠り、晝は山を徘徊して、往來を惱す由、昨日夜更に及びて

鳥御前、風流なお姿、扨は今宵の篝火は、其元がお勤か、はてしやれた衛士、焚いて貰ふ篝めは果報な奴」と挨拶の、中にちつくり色持たす、じやれは物師の印なり。千鳥の前は先取られ、何といらへも恥かしく、顔を赤めて居たりしが、てんぽの皮と御手を取り、「七年餘りの御在京、御參内の度毎に、御簾の透より垣間見て、ひよつと燃えつゝ戀の篝火、思ひの煙絶えぬ故、露程なりと此心を、申上げたき願にて、形をやつす衛士の役、胸の焚く火に焦がれ死ぬ、命を助け給はれ」と、御弱腰に抱著く。元より好む色男、否にはあらぬいな船の、漂ふ心を押沈め、「志は過分ながら、禁中在番の某、御所の女中に不義ありなどと、風聞あつては後日の難儀。折もあらん」と云捨てて、振り切り給ふを「そりや成らぬ、はもじい事の有たけを、云はして置いて胴慾な、お上の事は公なれば、こんな詮議はござんせぬ。よしお咎があるならば、罪を私が一人して受けませう。其段には氣遣無く、どうなとせうとつい一くち、嬉しいお詞聞かせてたべ。さう無ければ何ぼでも、放しやせぬ」と取付くを、「イヤ／＼夫は勝手了簡、高呑込で受合はれぬ、許し給へ」と振放し、彼方此方へ外しても、猶も離れず附纏ふ、折もこそあれ御簾を巻上げ、御母通陽門院、關白良基公を始とし、公卿を伴ひ出で給へば、二人は庭に敗亡の、迯げもやられず平伏は、誤り入りし風情なり。國母御聲麗しく、「苦しからず、遠慮なせそ。深く

苅萱桑門筑紫𨏍

作者　並木宗輔

大道廢れて仁義起り、國家亂れて忠臣を顯す。此語を以て鑑みれば、道にも又誠の本あり、其誠の源をたづぬれば、戀慕愛執にしくは無しと。豐葦原の陰神陽神、探り給ひし天の逆鉾、種ひろがりし世々の祚、後小松の院の御治世、隨ひ靡く君子國、時めく春の榮なり。當今いまだ御幼稚なれば、御母通陽門院殿、暫く寶祚を預り給ひ、踏歌の節會を御行事、禁廷守護の武士は、筑前の國の住人、加藤左衞門尉繁氏、宵より詰めて宿直守、假に授る官職に、在京の其間、右大將の烏帽子狩衣、花やかなりし出立も、衞士が焚く火に光添へ、威あつて猛く見えにけり。夜半も次第に更け過ぎて、明方近き星の影、衞士は篝を焚きさして、郁芳門に立出づれば、代る時刻と入代り、出來る衞士は奥女中、御國母の召遣ひ、千鳥といへる品者が、すつきりとした下髮に、似合はぬ烏帽子裝束も、派手な風俗柳腰、男欲しがる曲者とは、目元の愛に知られたり。繁氏卿の後に立ち、どうやら何ぞ云ひたげに、うぢ〳〵すれば振返り、繁「是はしたり千

お染久松 新版歌祭文　三七九―四三八

御陣九州地理八道 彥山權現誓助劒　四三九―五五六

増補 生寫朝顏話　五五七―六五六

浄瑠璃名作集 上 目録

るを潤色せしものにして、竹本座にて妹脊山以來の當り作なり。

一 増補生寫朝顏話（嘉永三年） 翠松園主人校補

文政年間、山田案山子といふ人、竹本重太夫の爲に創作し、完結せずして歿したるを、彼の翠松園主人の舊章に據りて删補潤色したるもの、もと「生寫朝顏日記」といへりしが、六字の外題は佛號に通へりとて、其の通の忌む事なれば、今の名の七字に改めたる由奥書に見えたり。

大正三年十一月

校訂者 松山米太郎

竹本三郎兵衛作

當時竹本座の衰運を回復せんが爲、東西兩座の太夫を交換するなど、苦心慘憺の計畫も其効なかりしを、此作一たび出でて大當りを占め、四段目に引割御殿のせり上げなどを工夫して見物を喜ばせたりといふ、竹本座掉尾の傑作なり。

一お染久松新版歌祭文（安永九年）　近松半二作

延寶七年九月廿九日大阪東堀なる油屋の丁稚久松といふ者、主人の娘お染といへる二歳の小兒を負ひて守するうち、過つて川に落し死に至らしめたるを悔い、折檻の爲に罩められし土藏の裡にて縊死せる事實を仕組めるなり。此事實を仕組めるもの、正德元年に紀海音作「油屋お染袂の白絞」、明和四年に菅專助作「染模樣妹脊門松」あり、共に此作と靑藍の關係あるもの也。

一御陣九州地理八道彥山權現誓助劒（天明六年）　梅下風、近松保藏作

鎭西御軍記といへる寫本に、毛谷村六助吉岡の娘に助太刀して京極内匠を討たする事あ

宗輔通稱は松屋宗助、初め田中千柳といふ、西澤一鳳門人也。延享年中出雲松洛等と共に竹本座に筆を執り、享保以降は豐竹座に專屬し、海音出雲文耕堂と共に當時の四天王と稱せらる、寛延二年五十七歳にて歿す。

一三十三間堂平太郎緣起祇園女御九重錦（寶曆十年）若竹笛躬、中邑阿契作

竹本座座本竹田近江驕奢の咎にて入牢せし後、一頓挫を來し、同座の人氣を、一時此作にて挽回せりと傳ふる當り作なり。

笛躬はもと若竹藤九郎といひし人形遣、阿契は初め中村閏助といへり。

一奥州安達原（寶曆十二年）近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衞作

半二は大阪の儒醫穗積以貫の子、出雲の門人、竹本座振興の功勞者なり。巢林子に私淑し、翁の愛硯を藏するに因りて近松氏を稱すといふ。晚年山科に閑居し、天明三年五十九歳にて歿す。

一武田信玄長尾謙信本朝廿四孝（明和三年）近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平七、

底本は何れも流布の丸本に據り、努めて原形を存するに注意したれども、假名がちに讀みにくき所々は、適宜に漢字を當て、句讀を施し、用字・送假名・假名遣等も、特色あるものの外は總て正しきに從ひて改めつ。詞には一々鈎符を附し、稀には發言者の頭字を註し置ける所もあり。由來淨瑠璃の文を讀むに難儀とする所は、多く會話相互の關係と詞章の區別分明ならざる點に在り。或は甲語中に乙言を藏し、一人にして數人に言ひかけ、數人にして一口に發し、自他尊卑の言語縱横徂徠する事電光石火の如く、或は地の中に詞を孕み、詞直ぐに地に匂ひて圓融無碍の妙を極むるさま、唯水月鏡花の別ち難きに異ならず。之れ校訂者の最も苦心を要したる所なり。

毎篇の解題を一々詳述せんも煩はしければ、左に其の年代と作者とを列記し、必要の事項のみを其條下に附言するに止むる事とはなしつ。

一苅萱桑門筑紫轢（享保二十年）　並木宗輔、同丈輔作

字治加賀掾の正本に「刈萱道心物語」あり、關係あるべし。

緒言

享保八年竹田出雲松田和吉兩名にて、「大塔宮曦鎧」を出しゝを淨瑠璃合作の初めとして、後後は五人三人、多きは六七人の手に成れるさへ珍しからず、各一場々々を受け持ち、趣向文作に奇を凝らし新を盡して相競ひしかば、場ごとに目を驚かし耳を聳つる事多く、言はば汁も膾も鯛づくめ、椀にも皿にも五種七種の馳走の數々盛り附けたる如くなれば、おのづから箸つけらるゝは仕出し勝れし一二種に止るべきわざなり。是れ拔本と稱して今も床にて語らるゝ一段物の流行を促したる主因にして、蓋し連歌の一句より發句の發達せると同日の談なるべし。

拔本即ち一段淨瑠璃は、斯く一部ながらに全體の趣向を縮めたるが如き、充實せる内容を有するものなれども、全鼎を試みざれば猶飽かざるの憾なしとせず。本書收むる所は即ち其の全本にして、從來世に行はるゝ語物のうち、最も著名なるもの二十一種を選擇し、之を三卷に別ちて各七篇を收めたり。

浄瑠璃名作集

上